昭和十年一月十五日印刷
昭和十年一月二十日發行
昭和十二年十月五日再版

國譯一切經 般若部 六

【改正定價壹圓廿五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所 東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所 兩角製本所

影の疏、吉藏の大品遊意並びに疏、惟白の綱目等に就くべし。然れども經文を通讀翫味して無所得に達し、實生活に無礙自在を得るの至要なるを遺るべからず。寺塔舍利の供養も般若の一句を安置するに如かず。百千萬偈の典籍を莊嚴恭敬せんも一句の受持書寫讀誦に如かず。萬部の書寫讀誦も一句の解說分別に如かず。縱横の分別領解し易からしむるも、人の自ら思惟し說の如く正憶念せんには如かず。若し能く正念せば相似の所得なく、自ら行じ他をして行ぜしめ、般若の世界成就し、擧足下足方便慈心を行じて、慈悲に著せず態度所度に著せず、救ひて救へりとせず、救ふとせずして救はざるを得ず是れ佛道なり、菩薩なり、無上菩提なり眞實般若なり。經典の供養讚歎に捕へられ文字施說に縛せらるるなく、觀照遍空の實證に執し、退嬰無作の妄見に著するなく、實慧の妙力を發揮するは本經の眼目なり。

・猶仁王般若等二三を此の一冊に輯める豫定であつたが量と期日の都合でそれが出來なかつた。後日機會を見て補遺として出す事にする。

昭和十年一月十五日

譯者　椎尾辨匡　識

に正覺を求むること又復た甚だ難し。（七二）菩薩行品（道行品）何等の行を行じて菩提の行と爲すか、色空を行じ受等の空を行ずるなり。（七三）種善根品（三善品、三菩提品）佛を供養し、諸の善根を種ゑ眞の善知識を得べし。（七四）遍學品、智慧成就し、是の甚深の法を行して色性の中に動ぜざるが故に、受等の性空にして動ぜざるが故に。

卷二十三（七五）三次第行品（次第學品、三次品、次第品）漸次の學を修し、漸次の業を作し、漸次の行を行じ、忍を得道を得證を得。（七六）一念品（一心具萬行品、所具足品）種種の惱亂あるも般若を學する人は一念の瞋心を生ぜず。（七七）六喩品（夢幻品）六度の中六種の行相廣く有情を利す、喩の及ばざる所なり。何を以ての故に、皆空と等しければなり。

卷二十四（七八）四攝品（奇特品）布施之を攝取し、愛語利行同事を以て攝化す（七九）善達品。諸の法相に達し、化人の如く色等の有爲無爲等を行ぜず、分別を生せざるなり。

卷二十五（八〇）實際品（建立品）般若の際衆生の際菩薩の際畢竟じて異無きが故に。（八一）具足品（照明品、成就辨生品）方便を以ての故に布施等の諸法を行ず、是を菩薩の道を行ずと爲す。

卷二十六（八二）淨佛國品（淨佛國土品、淨土品）布施等を行ずれば是れ大莊嚴なるを以て佛土を淨む。（八三）畢定品　畢定と、非不畢定と、亦畢定亦不畢定と、聲聞辟支の畢定佛の畢定となり。（八四）四諦品（差別品、佛法差別品）菩薩と佛と亦差別無し。何を以ての故に、空相の中に差別の異無ければなり。（八五）七喩品（七譬品、譬喩品、性空品）辟支佛に非ず羅漢に非ず、阿含等に非ず、向道の人に非ず、得果の人に非ず、菩薩等に非ず、所作皆夢幻の如し。（八六）平等品（無垢無淨品）所有無き中に垢無く淨無く、有所有の中にも亦垢無く淨無し。（八七）如化品（化品、涅槃如化品）若し化人化人を作さば、是の化實ありや否や。諸法平等なるが故に化の如し。

卷二十七（八八）薩陀波崙品（常啼品）般若を求むる當に薩陀波崙の如くなるべし。（八九）曇無竭品（法尚品）般若を說かんが爲に、佛所來無く所去無く所住無し（九〇）囑累品　佛阿難に勅して廣く爲に般若を流布して斷絕せしむること無からしむ。

以上綱目に依り各品の概要を示すのみ本經縱橫に論じ、般若の體義功德魔障機根等三周重說せるを以て截然たらしむること難し、毘曇の定相を說くに異り無定相不可得を要とするが爲に、達して達する無く、通じて通ずる無し。解題も註解も相似般若に墮せしむるなくんば幸なり。若し審にせんと欲せば、大智度論及び慧

や受持するをや。(四六)魔事品　佛道を求むるに留難を生ずれば、說聽師資各和合せず。

卷十四(四七)兩過品(兩不和合過品)　說者勤樂し聽者懈怠にして、二心和せざれば多く魔事となす。(四八)佛母品　母の子を生むが如く般若は我を生育す。(四九)問相品　般若何の相なりや、空相是れ相なり。

卷十五(五〇)成辦品　般若は能く世間出世間の法を成辦するが故に。(五一)譬喩品(船喩品)　海中船ありて能く渡ることを得るが如し。(五二)知識品　(善知識品、新學品)新學の菩薩如何が般若を學せん、當に空處に於て學すべし。(五三)趣智品(趣一切智品、壞證品、高度品)深般若を辨して當に一切種智一切智智に趣くべし。

卷十六(五四)大如品(如相品)色如、智如、相如、一切二なく別なし。(五五)阿鞞跋致品(不退品、後阿鞞跋地品)般若を修行すれば諸法に於て行なく相なく願なきを不退となす。

卷十七(五六)轉不退轉品　(堅固品、轉不轉品)魔說法をなせども其心動ぜず故に堅固と云ふ。(五七)深奧品(燈炷品・功德品)般若の深奧なる處は空、是れ其の義なり。(五八)夢行品(夢中入三昧品、淨土品)夢に空等を行ずれば晝と異なるなく別なし。

卷十八(五九)河天品　(河伽提婆品、恒伽天品、提婆女人品、)天女花を散じ受記作佛す。(六〇)學空不證品　(不證品、夢證品)般若を學する時は色空を觀じ、受想行識の空を觀ず。(六一)夢誓品(夢中不證品、燒城品)夢中にも亦聲聞緣覺等の法を習はず。

卷十九(六二)魔愁品:(魔愁毒品、同學品)若し般若を持すれば魔復大に愁て、猶毒箭忍に入るが如し。(六三)等學品　菩薩等の法內空等是れ等法なり。(六四)願樂隨喜品　(淨願品、帝觀隨喜品、願樂品)般若等の法を學びて已に有情の上に出づ、何に況んや正等覺を得るをや。(六五)度空品(稱揚品)　眞實なきは不可得なり。何に況んや眞實の法をや。

卷二十(六六)囑累品(累敎品)　汝が所說の如く實に皆隨順等なり。(六七)不可盡品(無盡品、無盡方便品)虛空盡すべからず、般若盡すべからず、色も亦盡すべからず。(六八)六度相攝品　(六度品、攝五品、相攝品)般若は能く布施淨戒安忍等の五行を攝す、故に成就を得るなり。

卷二十一(六九)大方便品(方便品)　能く成就する者は意を發してより已來無量劫を經て般若經を聞く。(七〇)三慧品(三德品)云何が生、云何が修、又云何が般若等を行ずる、不堅實の故に行ずべし。

卷二十一(七一)道樹品(種樹品)　空中に樹を種ゆる甚だ難しと爲す、衆生の爲

施等の法を行ずる皆大莊嚴なり。(一八)問乘品　大乘に趣く、是の乘何處に發し、何處に至り、何處に在りて、誰か此の大乘に乘ずる。

卷六(一九)廣乘品　摩訶衍は內身の中に身に循て觀ずるも亦身覺無し、不可得なるを以て等。(二〇)發願品　大乘は一地を發趣して一切地に至る。(二一)出到品是の乘三界の中より薩婆若の中に至りて住す。

卷七(二二)勝出品　一切天人業の法に超勝し、虛空等の如く含容包徧す。(二三)等空品　摩訶衍と虛空と等しくして邊量涯際あることなし。(二四)會宗品　摩訶衍皆般若布施等の行に隨ふ。(二五)十無品　一切の諸法は畢竟じて無なるが故に色の如く色性なく、前際なく前際なく後際なく中際なし。法なく佛なき等の義。(二六)無生品　何等か是れ般若、是の如きの觀を作す、畢竟無生なりと。(二七)天王品(問住品)諸の天人般若を問ふ、畢竟じて當に何處に於てか住すべき、所住なきなり。

卷八(二八)幻聽品　諸の天子の曰く、幻化の如く般若を說くを聽く、說なく聽なし。(二九)散花品　諸天疑を除き悟を得て華を散じ供養す。(三〇)三歎品　諸天の曰く、快い哉、快い哉、快く是の法を說く。(三一)滅諍品　般若を學ぶが故に、諸の諍法を滅して一切の善法を成就するが故のみ。

卷九(三二)寶塔大明品　般若を受持せば能く一切の刀箭を除く、是れ大明咒なり。(三三)述成品　一切の智智一切の善法は皆般若の中より生ず。(三四)勸持品　天帝諸天を勸めて般若を受持せしめ、天衆を增益し修羅を損減す。(三五)遣異品　外道會に至りて佛の過失を求む。諸天般若を誦念するに外道自ら歸依して去る。(三六)阿難稱譽品(尊導品)諸法を稱せず唯般若を讃じて尊となし導となし妙となし上となす。

卷十(三七)舍利品(法稱品)舍利を供養するの福聚も般若に如かず。(三八)十善品(法施品)贍部洲に敎て十善道に住せしむるも般若に如かず。

卷十一(三九)隨喜品　般若を隨喜するの福をば一切衆生と共に菩提に廻向し有情を利樂す。(四〇)照明品　般若一切の世間の光明となりて諸法を照了す。(四一)信毀品　般若を信受せば何處に沒して此の間に來生するや等。

卷十二(四二)歎淨品　此の淨甚深なり佛言はく畢竟して淨きが故に、不可得の故に。(四三)無作品　般若は無邊無等にして無作なり、空の故に、離の故に。

卷十三(四四)百波羅蜜徧歎品(歎度品)無邊平等の九十波羅蜜を說く。(四五)聞持品(歎信行品)名字耳に過る者も、曾て佛の所を經て大功德を爲す。何に況ん

			四〇、囑累	同 一八三 右一四行	同	同 一六一 右四行
同	同	同 一八二 左一九行	同	同 一八三 右一六行	同	同 一六一 右六行

備考。 本表の用は寫本に依る。(1)須菩提以下八品とす。同——は前行の次より續くを示す。乙以下は支那譯四本なり、梵本の量に比して互に若干の出入廣略あるも大體同じ。甲に附註せる所と乙の附註と照合すべし。品目の上の一二等は品次、(1)(2)は卷次、その下に割註するは縮刷の所在なり。

本表示す所にてミトラ氏云ふが如く梵本も異るものにあらず、又光讃は後部缺くるも共存する所他と大同なるを知るに足る。

三、大品各品の大要。般若各品の記事は道宣智昇に始まるも充分ならず、宋佛國禪師の大藏經綱目指要錄は略なりと雖も體を成せり。元王古の法寶標目も大品をば別說せず、智旭の知津も大品に於て多く加ふるなし。譯者は各品にその大要を註したれば、此には指要錄卷二の所載につき、卷次品目は今の所譯に改め、彼に缺くる所の散華漏歎二品を補ひ各品の大要とす。

卷一(一)序品　如來光を放ちて十方界を照し給ふ。(二)奉鉢品　天王鉢を奉る佛卽ち之を受け給ふ。(三)習應品　一切の諸法は但名あり字あるのみ。

卷二(四)往生品　何處より沒して此の間に來生する。肉眼天眼等の五眼あり。(五)歎度品　六度等を行じて有情の衆を度す。(六)舌相品　舌より光を放ち一切の世界を照す。(七)三假品　諸法の名字悉く假りに施與す。

卷三(八)勸學品　諸法を成就し、當に般若を學すべし、乃ち圓滿を得ん。(九)集散品　色の集散を得ず、受想等の法の集散を得ず。(一〇)行相品　若し色等の行相を行ぜば方便善巧無し、但行相を作さゞるのみ。

卷四(一一)幻學品　幻人能く般若等の法を學ぶ、其の義如何。(一二)句義品　句義無き是を菩薩の句義となす。(一三)金剛品　大心を發し、金剛の如く壞す可からず有情の上首となす。(一四)斷諸見品(樂說品)其の所以を說く、便ち知者見者を說く。(一五)富樓那品(辯才品)我も亦樂說す、大乘に乘じて有情を利せんが爲に。(一六)乘大乘品(乘來品)大乘に乘ずる時に般若に乘じ、布施に乘じ、諸法に乘ずる等なり。

卷五(一七)莊嚴品　大莊嚴とは般若布

同—三四三下七	七五、無雑	同—四六八	同—二五左九行	七七、六喩（夢化六度）	同	五八有—	七七、無有相	同	四三右—

(8) 學法身相品

三四三下八—三五一	七六、衆徳相	同—四七一	同	—四八右一二行	七八、四攝	(24)同	六二右—	七八、住二空(18)	同	四五左—
同—三五七	七七、善達	同—四七三	同	—五六左二行	七九、善達	同	六四左—	七九、超越法相	同	四七右—
同—三六二上一二	七八、實際	同—四七四	同	—六三左一行	八〇、實際	(25)同	六七左—	八〇、信本際	同	四九右—
同—三六六	七九、無闕	同—四七五	同	—六九右三行	八一、具足	同	七〇右—	八一、無形(19)	同	五一右—
同—三七〇上一	八〇、道士	四七六	同	—七三右一七行	八二、淨土（淨佛國）	(26)同	七一左—	八二、建立	同	五二左—
同—三七三	八一、正定	四七七	同	—七六右一六行	八三、畢定	同	七三右—	八三、畢竟	同	五三左—
同—三七四下	八二、佛法	同	同	—七七左一八行	八四、差別（四諦）	同	七四右—	八四、分別	同	五四左—
同—三七九上五	八三、無事	四七八	同	—七九左三行	八五、七譬	同	七五右—	八五、有無	同	五五右—
同—三八三上八	八四、實説	同	同	—八二右一六	八六、平等	同	七六左—	八六、諸法等(20)	同	五六右—
同—三八四上五	八五、空性	同	同	—八二左一八行	八七、如化	同	七七右—	八七、如化	同	五六左—
同—三八四上七					八八、帝啼	(27)同	八一右—	八八、薩陀波倫	同	五九左—
					八九、法尚（曇無竭）	同	—八三右一行	八九、法上	同	六〇左—
					同	同	—八三右七行	九〇、嘱累	同	—六〇左一九行

同—二九三下三 月四 一—一右 一四行
同—二九四下一 同 五行—一左
同—三〇八上二 三〇八下五 同 一—二左 一四行　同　四六一 日四 一—四右 一五行　同　同 四—二左　同 一—三右 一六行
同—三一〇上一〇 三一六上八　同　同—四六五 同 八行—一〇左　七〇、三慧　同 四五左　同　同 三四左
同—三一九下二　究 樹喩　四六三 同 一—一三左 一五行　七一、道樹（種樹）(22)　同 四七右　七一、種樹　同 三五左
同—三二〇上二 同 一—一四左 六行
同—三二一下六 同 一—一五右 一九行　七〇 菩薩行　四六四 同 一—一五右 一一行　七二、道行　同 四八右　七二 菩薩行　同 三六右
同—三二三下五 同 一—一七右 一二行　七一、親近　同 同 一—一六左 一二行　七三、三善（種善根）　同 四八左　七三 當得眞知識　同 同
同—三二九　七二、遍學　同—四六五 同 一—二二右 一四行　七四、遍學　同 五一右　七四 敎化衆生 (17)　同 三八左
同—三二三下八　七三、漸次　四六五 同 一—二三右 一五行　七五、三次（次第行）(23)　同 一—同左 一六行　七五、無堅要　同 右—一三九 一行

(6) 次第觀學品

三三〇下 三三三下　同　四六六 同 二三左— 二六左 二二行　同　同 五三右　同　同 右—四〇 五行
三三四下二　七四、無相　同 同 右—二七 七行　七六、一念（無論行六度）　同 左—五三 一四行　七六、無倚相　同 右—四〇 一四行

(7) 學一念觀相品

三三四下一二— 三三九下四　同　同 四六七 同 一—一三右 一二行　同　同 五六右　同　同 四一左

同—二七〇下二	五九、習近 四三二 同 —五二左九行	六〇、不證(不學證空) 同 二五五—	六一、願問相行 (14) 同 一八左—
(5) 親相學淨品			
二七〇下三—二七七下五	六〇、增上慢 同—四三四 同 —六一右五行	六一、夢誓(夢中不證) 同 二九右—	六二、阿惟越致相 同 二一右—
同—二八〇下四 同 —一六四左一五行	六一、同學 同—四三五 同 —六五右五行	六二、魔愁(同學) (19) 同 三〇右—	六三、釋提桓因 同 二二右—
同—六二上三 同 六五左六行			
同—二八三下七	六二、同性 同—四三六 同 —六八右二行	六三、等學 同 三一右—	六四、問等學 同 二三右—
二八五上八—二八八上三 同 —一六九左一四行			
同—二八八下六 同 —一七〇右二行			
同—六八下一 同 —一六〇右一三二行			
二八三下七—二八五上八	六三、無分別 四三六 同 —七〇左一四行	六四、淨願(隨喜) 同 三二左—	六五、親近 (15) 同 二四左—
二九四下一—二九五下七 同 —一七五左二行	六四、堅非堅 同—四三七 同 —七五右四行	六五、度空(稱揚) 同 三四右—	六六、牢固 同 二五左—
同—二九八下七	六五、實語 同—四三八 同 —七九右二行	六六、累教(囑累) (20) 同 三五左—	六七、囑累 同 二七右—
同—三〇〇下	六六、無盡 四三八 同 —八〇左二行	六七、無品 同 三六左—	六八、無盡 同 二七左—
同—三〇八上二	六七、相攝 四四 同 —八五右一行	六八、攝五(六度相攝) 同 三九右—	六九、六度相攝 同 二九左—
二八八下一二—二八九上八 同 —一八五右一八行			
同—二九四下一 同 —一八九左一行	六八、巧便 四四〇 同 —八九左一行	六九、方便 (21) 同 四一右一九行	七〇、漚和 (16) 同 三一右一六行

同―二三二 上九	四六、佛母	同―四四二 日三 四右―八左一〇行	四八、佛母	同 ―四左	四九、大明	同 ―三右
同―二三四 下九	四七、示相	同―四四三 同 ―一四左二行	四九、問相	同 ―六左	五〇、問相	同 ―四左
同―二三七 下二	四八、成辨	四四四 同 ―一七右二〇行	五〇、成辨（大事起）(15)	同 七右―八右	五一、大事興	同 ―五左
同―二三一 上二	四九、般等喩	同―四四五 同 ―二〇右八行	五一、譬喩	同 九左―	五二、譬喩	同 ―六左
同―二三五 下二	五〇、初業	同―四四六 同 ―二四左二〇行	五二、知識	同 ―二左二行	五三、隨眞知識(12)	同 ―七左一七行
同―二三六 上二	五一、調伏貪等	四四六 同 二五右二行―同八行	同	同 ―二左一四行	同	同 ―七左二〇行
同―二一三 九上	同	同 同 ―二六左九行	五三、趣智	同 ―二右一	五四、解深	同 ―八右
同―二四八 上三	五二、眞如	同―四四八 同 ―三三左一五行	五四、大如（如相）(16)	同 同左―一五左	五五、歎深(12)	同 同左―一〇左
同―二五二 下八	五三、不退轉	四四八 同 ―三六左一二行	五五、不退（阿鞞跋致）	同 ―七左三行	五六、阿惟越致	同 ―二左一八行
同―二五三 上三	五四、轉不轉	四四九 同 ―三七右一四行	同	同 七左―	同	同 ―一二右二行
同―二五六 下五 同―四〇左一〇行	同	同 同 ―四〇左五行	五六、堅固（轉不轉）(17)	同 ―一九左	五七、堅固(13)	同 ―一三左
同―二六一 左一〇	五五、甚深義	同―四五〇 同 ―四五右八行	五七、深奥（燈炷）	同 ―二二右	五八、甚深	同 ―一五右
同―二六二 下一〇	五六、夢行	四五一 同 ―四五右一八行	五八、夢行（夢入三昧）	同 同左―二行	五九、夢中行	同 同左―一六行
同―三一六 六上	五七、願行	同 同 ―四八左一六行	同	同 ―二三左	同	同 ―一七右
同―二六七 上九	五八、殑伽天	同 同 ―四九左一行	五九、河天（恒河提婆）(18)	同 二四右―同左一行	六〇、恒伽調	同 同

同｜一七三 上九 同二〇行 ｜五一右	三六、經文	四三一 四三二 同 ｜五一左 一五行	三八、法施（十善）	同 六六右｜	三九、功德	(8) 同 四八左｜
同｜一七三 上一〇 同一行 ｜五二右						
同｜一八一 下一	三七、隨喜廻向	同｜四三三 同 ｜五八右 八行	三九、隨喜（隨喜廻向）	(11) 同 六九左｜	四〇、勸助	同 五一左｜
同｜一八四 上四	三八、大師	四三四 同 ｜六二右 一行	四〇、照明（大度）	同 七一右｜	四一、照明	(9) 同 五三右｜
同｜一八八 下六	三九、地獄	同｜四三五 同 ｜六六左 二〇行	四一、信毀（泥梨）	同 七三右｜	四二、泥梨	同 五四左｜
同｜一九〇 下一	四〇、清淨	四三六 同 ｜六九右 三行	四二、歡淨	(12) 同 ｜七四右 四行	四三、明淨	同 ｜五五右 六行

(3) 一切智相行品

一九〇下二｜一九二 上二	同	同 同 ｜七〇右 一四行	同	同 七四左｜	同	同 五五左｜
同｜一九七 下一〇	四一、無標幟	同｜四三七 同 ｜七四左 九行	四三、無作（面各千佛）	同 七七右｜	四四、無作	同 五七左｜

(4) 一切種智相如品

一九七下一〇｜二〇〇 上一	四二、不可得	四三七 同 ｜七六右 一二行	四四、遍類（百波羅蜜）	同 七八右｜	四五、等心	同 五八左｜
同｜二〇九 下二	四三、東北方	四三六 四四〇 同 ｜八六右 一行	四五、聞持（耳）	(13) 同 八二左｜	四六、眞知識	同 六一左｜
同｜二二三 上四	四四、魔事	四四〇 同 ｜八八右 一〇行	四六、魔事	同 八四左｜	四七、覺魔	同 六二左｜
同｜二二七 上四日三九行｜三右	四五、不和合	同｜四四一 同｜日三 四右二行	四七、兩過（兩不和合）	(14) 月四 一｜三右	四八、不和合	(11) 月二 一｜二右
同｜二二八 上九 同七行｜四左						

同─一二六下九

一二六下九─一三一下五

(2) 雨邊淨品

同─一三二上四　日　─二三右　三一七行

同─一三四下四　同　─二四左　一行

同─一三九上五

同─一四一下二

同─一四六下三

同─一五二上四　同　─三五右　一六行

同─一五二上一〇

同─一五四上

同─一五五下二

同─一五九下五

同─一六四下一〇　同　─四四左　一四行

同─一六五上二　同　─四五右　二〇行

二四、遠離　同─四二四　日二　─一八右　一二行

二五、帝釋　四二五　四二六　同　─二三右　五行

二六、信受　四二六　同　─二四右　八行

二七、散花　同─四二七　同　─二八右　三行

二八、授記　四二七　同　─二九左　一行

二九、攝受　同─四二八　同　─三二右　一七行

三〇、窣堵波　四二八　同　─三五左　一六行

三一、福生　四二九　同　─三六右　一七行

三二、功德　同　同　─三七右　三行

三三、外道　同　同　─三八右　一五行

三四、天來　同─四三〇　同　─四一左　一行

三五、設利羅　四三〇　同　─四五右　七行

二六、無生　同　─四六左　一〇行

二七、問住(天主)　同　四八左─

二八、幻聽(幻人聽法)(8)　同　四九右─四九左─

二九、散花　同　五一左─

三〇、三歎(顧視)　同　五二左─

三一、滅諍(現功德)　同　五四左─

三二、大明(寶塔)(9)　同　五六左─

三三、述成　同　五七右─

三四、勸持　同　五七左─

三五、遣異(梵志)　同　四八左─

三六、尊道(阿難稱譽)　同　六〇右─

三七、法稱(舍利)(10)　同　六三右─

二七、問觀　同　三二左─

二八、無住(6)　同　三四左─

二九、如幻　同　三五右─

三〇、雨法雨　同　三六左─

三一、歎　同　三七左─

三二、降衆生　同　三九右─

三三、守行(7)　同　四〇左─

三四、供養　同　四一右─

三五、持　同　四一左─

三六、遣異道士　同　四二右─

三七、無二　同　四二左─

三八、舍利　同　四六右─

二四、觀行　同　五三右─

二五、問(10)　同　五五右─

二六、如幻　同　五六右─

二七、雨法寶　同　五八右─

(終)

同 七三下 八	一〇、幻喩	四〇 同 四七左 一行	一一、幻學（1-幻）(4)	同 二二左 七行	一三、間幻	同 一六右	一〇、幻	同 二六左
同	一一、譬喩	四一 同 四九左 一三行	一二、句義	同 二三左 二〇行	一四、了本	同 二六左 二〇行	一一、摩訶薩 (5)	同 二八左 一三行
七七上 八	同	同 同 五〇左 六行	一三、金剛	同 二三左 四行	同	同 一七右	同	同 二九左
同 七八上 七	一二、斷諸見	同 同 五一右 一八行	一四、樂說（斷諸見）	同 二四右 五行	一五、摩訶薩	同 一七左	一二、等無等	同 三〇右
同 八〇下 五	一三、六到彼岸	同 四二 同 五五左 一八行	一五、辯才（富樓那）	同 二五左 一八行	一六、問僧那	同 一八右	一三、大乘	同 三二右
同 八二上 一三	一四、乘大乘	四二 同 五六左 五行	一六、乘乘（乘大乘）	同 二六右 一五行	一七、摩訶衍	同 一八左	一四、乘大乘 (6)	同 三二左
同 八六下 八	一五、無縛解	四三 同 六〇右 五行	一七、莊嚴 (5)	同 二六右 一二行	一八、僧那僧涅	同 一九左	一五、無縛	同 三五左
同 九二上 三	一六、三摩地	同 四四 同 六四右 一四行	一八、問乘（摩訶衍）	同 三一右 一一行	一九、問摩訶衍 (4)	同 二一左	一六、三昧	同 三九右
同 九六下 一	一七、念住等	同 四五 同 六八右 一二行	一九、廣乘（念處）	同 三三右 二〇行	二〇、陀隣尼	同 二三左	一七、觀 (7)	同 四一左
同 一〇二下 一	一八、修地	同 四六 同 七三左 六行	二〇、發趣 (6)	同 三三左 三三 六右 二行	二一、治地	同 二五左	一八、十住	同 四三左
同 一〇五上 八	一九、出住	同 四七 同 七七左 一五行	二一、出到	同 三七右 四行	二二、間出衍	同 二六左	一九、所因出衍 (8)	同 四五右
同 一〇八上 三	二〇、超勝	同 四八 同 八〇左 一七行	二二、勝出	同 三八右 一二行	二三、歎衍 (5)	同 二七右	二〇、去來	同 四六左
同 一二二上 二 同 九一右 二一行	二一、無所有	同 四〇 同 九一右 九行	二三、等空（含受）	同 四〇左 一二行	二四、衍與空等	同 二八左	二一、衍與空等	同 四八右
同 一二三上 八	二二、隨順	四〇 同 同左 一五行	二四、會宗 (7)	同 四一左 一五行	二五、合聚	同 二九右	二二、分曼陀尼弗 (9)	同 四八左
同 一三〇上 五	二三、無邊際	同 四三 同 日二三右 三三行	二五、十無	同 四四右 二〇行	二六、不可得三際	同 三〇左	二三、等三世	同 五一右

同|三下一二 同 八左五行 二、歡喜 四〇二 同 六右|九 右一〇行 同 同 一五右一〇行 同 同 |四右四行 同 同 |五右

同|二四上七 同 同 同 同|左六行 二、奉鉢 同 |五左三行 二、無見 同 |同一六行 二、順空 同 |五左二行

同| 三、觀照 同 同 同左八行 |同一五行 同 同 |同八行 同 同 |五右一行 同 同 同|八行

三二下五 同 四〇三 同 同|一四左一七行 三、習應 同 |八右一五行 三、假號 同 |六左 三、行空 同 |八左

同|三八上八 同 四〇四 同 一五右|一八左一八行 四、往生 (2)同 八左|一〇左一九行 四、學五眼 (2)同 八左| 同 (2)同 |二左四行

同 四〇四四〇五 日一 同一九行|三右二行 同 同 |二左一二行 五、通度五神 同 九右| 同 同 |三左三行

同 四〇五 同 |二二右一八行 同 同 |三右一行 六、授決 同 |同左六行 同 同 |同一三行

四、無等等 同 同 |二三右一五行 五、歎度 同 |同一八行 七、妙度 同 |同二〇行 四、歎等 同 |一三右一二行

同|四二上二 同 一二四左一一行 五、舌根相 同 同 |同一八行 六、舌相 同 |一三左一〇行 八、舌相光 同 一〇右| 五、授決 同 同左|

同|五一下七 同 |三五右一七行 六、善現 四〇六四〇八 同 二四右|三五左二行 七、三假 同 |一四左一行 九、行 同 一一左| 六、分別空 同 一六右|

同|五三上七 同 |三六左一行

同|五四下一三 七、入離生 四〇八 同 |三七左四行 八、勸學 (3)同 |一五左八行 一〇、學 同 一二右| 七、了空 (3)同 一七左|

同|六二下一 八、勝聞 同|四〇九 同 |四一右一三行 九、集散 同 |一七左一六行 一一、本無 同 一四右| 八、假號 同 二一右|

同|六六下八 同 |四四右一一行 九、行相 同|四一〇 同 |四四右九行 一〇、行相 同 |一九左一一行 一二、空行 (3)同 一五右| 九、行 (4)同 二三左|

同|六七下二 同 |四四右一三行

念するが故に得る所の功德を明し、格量して勝を顯はし修を勸む。三歎品の格量は前の第一周に擬し、滅諍大明述成の三品の格量は第二周に擬し、勸持以下五品の格量は第三周に擬す。

（疏七）（三十九）隨喜品。般若に依り嘿念隨喜し身口を動かさゞるも福を得る無邊なるを明し、般若の妙を讃じて信行せしむ。

第三段　五品半（照明—聞持前半）人法を歎美す。

（四十）照明品—（四十四）遍歎品。主として法を歎ず。般若實相圓明にして盡さゞるなく滿たさるなきを歎じ、信無邊の福、毀莫大の罪を得るを明し、般若の甚深を示し、說法引導を歎稱す。

（疏八）（四十五）聞持品前半。主として人を稱し、信人の德不信の失を明す。

第二、四十三品半、（聞持後半、魔事—度空、無盡—如化）。第一の略明に對し廣說す。分ちて二段とす。

第一段　二十品半（聞持—度空）。實慧を明す、或は上の行不行相應不相應の義を廣め、又は體を明すものとす。

（疏九）初品總、後十九品次第來生す。內外三周の留難魔事を明し、三根人の信般若を說く。

第二段　二十三品（無盡—法尙）。方便慧を明す。或は上の功の周能不能の義を廣め、又は用を明すとす。

（疏九、十）前廿一品（疏には廿三）は正しく方便因果の大用を明し、後の度啼法尙兩品は修行を結勸す。吉藏の說粗此の如くならん。以て本經の分科大綱を知るを得べし。

（二）大品諸本比較。先に略表を以て示せる如く支那譯本大品に屬するもの四本あり。放光を小品に屬する說ありと雖も內容比較に於て大品たること明かなり。今四本と梵本との出入を概表すること次の如し。

甲、二萬五千頌般若	乙、般若第二會	丙、摩訶般若（什譯）	丁、放光般若	戊、光讃般若
(1) 須菩提品	（品目）（卷次）	（品目）（卷次）	（品目）（卷次）	（品目）（卷次）
一——六右 一五下九日一七行	一、緣起　四〇一日一 一右—五左二〇行	一、序　(1)月三 二—三右 一七行	一、放光　(1)月一 二左—三右四行	一、光讃　(1)月五 一右—三右二行

なり。他は第九十囑累品にして方便般若の付屬流通なり。正說八十八品分ちて二とす。

第一、四十四品半（序品―遍歎聞持前半）般若の妙義を明す、分ちて三とす、出體と般若の德を歎ずると人法を歎ずるとなり。

第一段　三十品（序品―三歎）、三週三根人の爲に般若の體を明す。初二品開宗、第三以下辨宗。

一　第一周上根人の爲に佛自宗を示す。

（疏二）（一）序品。通別兩序を明し佛略して宗を開く。

（二）奉鉢品。般若の往相を述べ略開終る。

（疏三）（三）習應品。以下別して宗義を論じ、略開せる言意を顯す。菩薩方便を以て般若と相應することを習ひ、第一義門に依り智慧行を修す。

（四）往生品。世諦に依り功德行を修す。

（疏四）（五）歎度品。衆聖佛說を聞き歎喜領解稱歎して佛命を證成す。

二　第二周中根人の爲に須菩提をして說かしむ。轉敎二十一品あり。或は舌相品を前段の結證とし、或は結前生後とす。

（六）舌相品。第二段の起說にして、放光・衆集・現瑞・衆悟授記を明す。

（七）三假品。以下二十品須菩提正しく般若を說く、大悲心を離れず。本品は正しく命じて說くべき所を明かにす。

（八）勸學品。命を奉じて般若を說く。六度根本、所知境、所斷、通學行、三昧陀羅尼、慈悲化他菩薩所離を擧げて勸む。

（疏五）（九）集散品―（二十六）無生品。十八品。菩薩の爲に說く。集散無相行幻は三脫門、次の十三は稱歎門、十無々生の二は無生門なり。本品は空門無生滅無去來、諸法畢竟因果不失の故に集散なきを明す。次は無相無作に就て明す。無生品の末段は後事を命ず。讚成現瑞得道是なり。

三　第三周下根人の爲に般若の體を出す、下根三聞して一悟を得、問者天主なり。

（疏七）（二十七）問住品（三十）三歎品。四品あり衆生の爲にす。三歎の後半（二七七頁）爾の時、佛四衆和合以下の文は後段に屬す。

第二段　九品半（三歎後半―隨喜）般若所生の功德を明す。

（三十）三歎後半―（三十八）法施品。八品半は般若を受持し乃至正憶

その譯經に伴ふ解題に譲りて此に述べず。

（四）本邦に於ける弘通。我邦に在りても支那の學風に動かさるゝ多きを以て三論と倶に大品の研究講説行はれしが、法相の興るに及び、大般若の書寫讀誦受持供養盛にして、大品の講讀衰へたり。且つ法相が鎭護攘災の法門として受讀するも、宗の所依は華嚴深密楞伽等に在るを以て、大本の講説も多く行はれず。平安以後支那にも大品大本盛ならざれば、我國にも研究を促さるゝことなく、獨り古今を通じて鎭護攘災功德のため仁王理趣の修會盛行し、大般若の書寫弘通轉讀今に絕えず、若干の金剛實相等の講疏を傳ふるも、主として人口親しきは心經の一篇なりとす。

八、大品の要領

（一）大要分科。般若經典中に於ける大品の地位と傳譯とは先にこれを叙したり。大般若の第二會が末尾に於て省略せられたるを除かば、文辭豐富譯語妥當なるも、獨り羅什の譯本早く行はれ、龍樹の釋論と相待ちて南北に弘まり、講論註疏專ら什譯大本に力を注ぐ。本經の要旨は般若の妙義を宣暢するに在り。釋論には大科二道を説くとし、前六十六品は般若道、後二十四品は方便道なりとす。これを實智權智に配するに至りて觀照を重んじ、方便を輕んずる端を啓くと雖も、二智永く別ならず、般若即方便なるを以て、二道等しく佛敎の般若を明かすに外ならず唯前は菩薩の般若の習學相應受持解行の功德相貌を説き、後は見佛聞法淨佛國土成就衆生を審かにするを以て二となすのみ。大品義略序には大分して三とす。一は初より第六舌相品に至る、佛自ら宗を開き舍利弗に對す、上根人の爲に説かしむ。二は第七三假品より四十四嘆度品に至る、佛須菩提に命じて中根人の爲に説かしむ。三は聞持品より終まで更に宗に歸す、重ねて下根諸天人の爲に説くと。梁武帝注解大品序には部黨論に云へる如く五段とせり。一に勸説不住を以て其の始を標し、二に命説無敎を以て其の道を通じ、三に願説無得を以て其の行を顯し、四に信説甚深を以て其の法を歎じ、五に廣説不盡を以て其の終を要す。中品（第六十六）累敎ある所以、末章（第九十品）三屬ある所以なり。嘉祥の大品義疏は第二卷を缺き、本文錯誤甚しきを以て分科定め難きも、略下の如くなるべし。經文分ちて三とす。序分正説流通なり。序分は序品前半にして通序（本文一—四頁）別序（四—一一頁）なり。正説八十七品半（序品後半なるを以て半とするも、經疏には全數とし八十八とす）次に分説する所の如し。流通二品あり、一は第六十六囑累（累敎）品にして實相般若の付囑流通

説寥々たるに般若の學は頗る盛なり。その論要に關して宋の曇濟七宗論を作る、中論疏これを抄錄す、道安本無義、深法師本無義、關內卽色義、支道林卽色義、溫法師心無義、于法開識含義卽ち三界大夢説、壹法師世諦幻化説于道邃世有眞無説なり。中に道安の本無支遁の卽色は倶に義正しと評せらる。此の時に當り羅什は印度の般若學統を承け、龍樹提婆の論釋を譯し、盛に空門大乘を唱ふ。道安の遺弟を始め天下の學人長安に集る。廬山慧遠も亦問學敬を致す。什門僧肇道融僧叡道生を始め般若を尊ばざるなし殊に僧肇の寶藏論肇論は般若教義を論じて醇正なるものとせらる。これより後南北朝に於て涅槃華嚴等の新學興隆に壓せらるゝ所ありと雖も般若を講學せざるものなしと云ふも可なり。註疏論議出づるもの尠からず。學者は大論中論十二門論百論成實論等を併せ用ゆ。但し成實は訶梨跋摩の作れる小乘論なるも、毘曇有門を破するが爲に、什門譯講の端を發きてより遂に大乘として般若を壓するに至れり。特に般若を宗とする者、齊の周顒三宗論を著はし、不空假名の鼠嘍栗義、空假名の案苽義を斥け、假名空義を般若の正意とせり。梁武帝は注解大品を造らしめ、講説を盛にす、道朗僧詮法朗吉藏相次ぎ、南地三論を起す。北地僧叡等の後般若四論の研究相續せるも學統明かならず、地論宗行はるゝに當り、道場慧影等智論を宗とし淨土教と伴ふ。又南岳天台は大論中論を以て法華法門に結び、禪觀の行人も亦般若を得意とす。然れども宗派別立に急なるに際し各宗通依の經論は漸く輕んぜられんとす。六朝以來大品の疏釋、今存するもの吉藏の遊意一卷並に義疏十卷(內第二欠)唐元曉の大慧度經宗要一卷に過ぎず。玄奘渾身の努力を以て六百の大經を譯出して、再び般若の雄大莊重を感ぜしめ、以て鎭國の典人天の寶とす。智昇これを大藏經の首に配し十六會の大綱を示し、綱目指要錄稍詳かにし、智旭は大本を讀むもの少きを惜み知津に詳叙せり。會大本の學ばれざるを示すのみ。宋の雪月大隱通闘法を創め四明演忠重ねて編定す、淸葛䵣（しんかってい）は般若綱要十卷を作り、第二會乃至第五會の初會と具略の異なるを説く。此等三五の解説も大品の不振を補ふに足らず、本經の講説弘通始めに盛にして終に振はざる此の如くなるは、般若の行はれざるが爲にあらず。六百の大本も經要金剛般若若くは心經に外ならずとし、簡を求め易に就き、講疏專ら兩經を事とし、經意面目の異なるものに在りては仁王と理趣分實相とを重んずるによる、是等の註釋存するもの百千に及ぶを以ても、般若を重んずるは今尙舊の如きも通依として簡要に走れるものと云ふべきなり。心經金剛仁王理趣等に關しては、

彼は此を以て龍樹の本旨とせるに過ぎず。世親(Vasubandhu)に至りては一層龍樹佛敎に近けるものあり。爾餘の大乘論師龍樹般若を通じて大乘を觀るものと云ふべし。滅後千年を過ぎて乖異大を加へ、耽波羅に佛護論師(Buddhapālita)あり、龍樹提婆の說に基き容有(Prasaṅga)を立つ、西藏中觀の學多くこれに從ふ。久しからずして淸辨南方マルヤラに出でてこれに反し自性空派(Svatautrika)を立つと。玄奘が謂ゆる護法淸辨の爭の如きも、佛護を以て護法と同視し難きは燈論に擧ぐる所の佛護の說を以ても察すべきなり。時に須利耶崛多(Sūryagupta)は龍樹無著の似同を論ぜり。南方沙曼多の月稱(Candrakīrti)佛護の說を紹ぎ、那爛陀(Nalanda)に敎へしが、月居士(Candragomin)と七年の論爭ありて月稱南に去る。その後護法(Dharmapāla)那爛陀に上首たりとは西藏の史傳等を參照して知る所なり。但淸辨が一方に佛護と爭ひ他方に瑜伽の依他起論(Paratantrika)と爭ふとするも、後世傳ふる如く相容れざるにあらず。月稱が佛護の釋論淸辨の燈論を抄釋せることは其著(Prasannapadā, Madhyamakāvatara)に明かにして、淸辨妙月の敵手とするも稍過ぎたり。戒賢智光空有の爭を傳ふるも、玄奘これを同學の先後とし、日照二派の代表とするも融會の餘地あるを云ふの類なり。要するに南北異說するも、互に般若中觀の宣揚脈々絕えざりしなり。

(三)支那の弘通。後漢に道行譯せられたるも、講經は魏の朱士行に始まる。彼の求法は大品の傳來となり、弗如檀、無叉羅、竺叔蘭、祇多蜜、竺法護等傳譯に關係せり。支孝龍小品を以て心要とし、放光譯せらるゝや盛儀を具してこれを迎へ中山に講ず、西紀三百三年なり。康僧淵は常に放光道行二般若を讀誦し、道潛は大品を講じ晋朝に重んぜられ門侶群をなす、法蘊は放光に善く、支遁は道行に通じ、道行指歸卽色遊玄論、卽色本無義等を作る。同時に于法開あり放光に善く、道林と卽色空義を爭ふ。同學于道邃弟子法威等も亦名あり。然れども多くは大旨を捕へ機鋒縱橫の辨を事とするのみ。道安襄陽に在る時より二十餘年每歲放光を講ずる二度、註解集異頗る勉む。光讚折中解、光讚抄解、折疑、起盡解、道行品集異注各一卷、折疑略二卷等の作ありしも早く逸せり。存するもの道行序、合放光々讚隨略解序摩訶鉢羅若波羅蜜經鈔序あり。同學竺法汰は道恒の心無義を破し、簡文帝の爲に放光を講ず、竺僧敷、道安の弟子道立曇戒、法汰の弟子曇一道一等般若を以て知らる。皆本經を講じて入空離繫を事とす、談理精粗あるも文を逐ふと然らざるとのみ、論藏一も存せざれば緣起實相の論あることなし。但他經の講

に出し盡くす。翌年四月二十三日校了せるも、釋論譯出の後更に對校して經本定まると云ふ。卽ち羅什の心力は智度論(本書に釋論又は大論と云ひ、註解も多くこれに從ふ)の譯出に注がれたるも、尙經の序品を釋する論初三十四卷を具譯せるのみ、第二品以下は抄譯たり、全譯せば或は十倍すと云ひ或は三倍すと云ふ。龍樹の大著たる本論は量に於て大なるのみならず、大乘教理の發達に與ふる所頗る大なり。龍樹は本經を釋するに大小諸經は勿論、毘曇諸家の說をも比較網羅せり。故に宛然たる佛教全書たると倶に、般若の無所得空義を明かにし、諸法實相を詳かにし、本經無上菩提菩薩願行を重んずるも通三乘に墮する嫌あるをば、法華一乘を以て經意を闡く、卽ち法華を以て般若を解せるものと云ふも可なり。論首歸敬序は所歸の佛法を標するものなるも、論主の見地を示すに足る。曰く、智度の大道は佛從つて來り、智度の大海は佛窮盡し、智度の相と義とは佛無礙なり、智度無等の佛に稽首し奉る。有無の二見滅して餘なく、諸法實相は佛の說き給へる所、常住不壞にして煩惱を淨む、佛の尊重し給へる所の法に稽首し奉ると。龍樹は大論の外著述尠からず、十住曇婆沙菩提資糧等佛道莊嚴の行位を明かにし、殊に無畏論に般若を主張す、有名なる中論はその一部に屬す。中觀(Madhyamika)法門此に興る。其門下提婆(Aryadeva)、龍叫(Nāgāhvaya 元と如來賢 Tathāgat=abahadra)と云ふ、龍智(Nāgabodhi)、大釋迦友(Mahāśakyamitra)、舍婆離(Śā=vari)、尸迦婆(Śingkhapa)、等名あり。提婆は四百論百論等に師說を展開し法を羅睺羅(Rāhulabhadra)に傳ふ。これ皆滅後八百年に至る弘通と云ふべし。羅の後青目(賓伽羅或は賓頭盧伽とす)、堅慧(Sthiramati)あり。青目の說莎車王子須利耶蘇摩(Sūryasoma)、須利耶跋陀(S=uryabhadra)に傳はりて羅什に至る。什は弘始十一年、青目の註せる中論四卷を出せり。佛滅を去る殆ど九百年、當時印度に中觀を釋するもの數十家ありたりと云へば、般若の學盛なりしを察せしむ。中觀は後に無著の釋せる順中論二卷、東魏武定元年(543)瞿曇般若流支これを譯し、分別照明の釋せる般若燈論釋十五卷、唐貞觀四年波羅頗迦羅密多羅これを譯し、安慧の造れる大乘中觀釋論九卷宋惟淨等これを譯せり。無著安慧は瑜伽般若觀に屬し、中論燈論は中觀般若系なり。分別照明は掌珍論の作者たる清辨(Bha=vya, Bhāvaviveka)なり。無著(Argāsa=ṅga)は瑜伽論に於て大乘の新主張の唱首たるも、本論若しくは金剛般若に於て復般若の學人たるを知るのみならず、ワシリエフ氏の注意せる如く、彼は龍樹を非難せず。中觀般若の解釋變化せりとも、

士、知恩の菩薩の功徳偉なりと云ふべし。假令鐵圍の結集あり龍宮に護持せられたりとするも、現在の經典は弘法者の恩德たるを失はず。本經說く所の法涌常啼菩薩の名に於て、此等弘法の大士に感謝すべきなり。滅後南天西印に行はれ、後五百歲に當に廣く北方に流布すべしと云ふもの、十喩空法方廣道人等南西に空觀を說けるを承けて、滅後五百歲斯經北方弘通の事蹟を語るものと云ふべし。五百歲流通を基とし道行（月六四四）に滅後の造像壁畫等を譬說せるも當時流行の事實に適合すと云ふべく、東行して揵陀越に般若を得たりとするも、流布の地域に合すと云ふべし。然るに須菩提のみに般若を專らにせしむるは經衆の滿足せざる所、智慧第一の舍利弗を對告たらしめ、聞持第一の阿難を讃衆たらしめ、西方開敎者にして說法第一たる富樓那をして會中の一たらしむるも、目連迦葉僅かに名を連ぬるのみ、五百比丘三十比丘尼六十優婆塞三十優婆夷等預流受決にすぎず。釋迦會中の實際四衆の輕きに反し、因陀羅梵天伊賒等欲色諸天重きを占め、帝釋は讃歎供養護法證明を約し、文殊彌勒諸大薩埵雲集し、後佛たる彌勒は須菩提に對し重要なる地位を占むるが如き、經中の法數記事と相待ち五百年頃初期般若の內容として當れり。當時この類の小品諸本弘通せるものなるべし。然るに大品には此等の內容增廣せられたるのみならず、舍利弗品獨立して重要となり、須菩提とその地位を競ふが如き、文殊般若は文殊迦葉の重んぜらるゝに同じく、持經者の心理を表すと云ふべし。卽ち須菩提の地位不明となると、增語により句義を增加せると、陀羅尼三昧字門諸法の廣說せらるゝとの如き大品の後るゝを示す。第四會妙行第五會善現が第二會の二十四品となれるに照らして察すべきなり。此等大品諸本の流通せるは多くは六百年に近からん。爾來幾許もなく諸本品類部黨の成立あると倶に、滅後六百五十餘年佛朔支識の手に依りて、小品先づ支那に入り、百餘年を經て、西紀二百八十二年には大品に屬する放光來れり。小大二品を魁とし、諸部輸入せられたるは、前に表示せるが如し。

（二）印度の般若解釋。他方に龍樹（Nāgārjuna）菩薩は滅後七百年に出でて、小乘を以て滿足せず、北遊して雪山中に諸大乘經を得て南に歸りて論釋を出すこと多し。傳ふる所の大乘經典多數なるも、般若法華十地無量壽等の經は殊に重んずる所たり、中にも大品に關して十萬頌の優婆提舍を作れり。羅什長安に至り、弘始四年夏より七年十二月に至るまで四年を閱して、譯出せる智度論百卷是れなり。今譯する大品般若はその中間、弘始五年四月二十三日に始り、同年十二月十五日

以なり。緣起明かなるとき因果滅盡して諸法如如の實相に達す、是無生法忍たり解脫正慧たるなり。(四)觀照方便の別、外道の般若は觀照ありて方便なし。眞我大有たるも眞如法性たるも、單に冷靜に觀察し知見するのみならば多く異なる所なし。然るに佛教の般若は卽ち方便たり、觀照は直ちに善巧方便となる。是れ菩薩大悲の願力によりて長く觀照の靜座に住せず、度生の動用となると云はるゝ所なるも、此の言未だ義を盡くさず。願力も亦法如の相のみ、不如の願に依りて强ひて靜動に轉ずるが如きは有願なり空に合せず、三解脫門俱に背く、何ぞ菩薩の眞門たらんや。般若卽方便たるは諸法緣起の故に無我無性なり、一法として自因自力に依りて存せず、他緣他力の加持ならざるなし、故に法界は恩處なり、怨親等しく恩として荷負すべきのみ。自己解脫せるが故に在纏の迷妄を救濟するにあらず、自己の自己なきを知るとき、渾身法界の恩處に捧ぐ、是れ無所得無緣の眞實の慈悲なり。般若卽方便なるが故に、空を觀じて空を證せず、實際に住せず、度生を事として有に著せず、福善を作せりとせず。卽ち施者受者施物なくして、施を行じて施とせず、戒と持戒と犯戒となくして、戒を行じて戒とせず、乃至智慧と智者と愚者となくして、智を成じて智とせず。是れ菩薩の般若波羅蜜なりと云ふ所以なり。般若の言似たるも、釋尊に在りては樹下の觀照に止まらず、直ちに鹿苑の法輪となり、一化四十餘年不斷の度生となれるなり。他の梵我合一を夢み、觀照眞實を誇りつゝ徒らに理智に捉へらるゝものと同じからざる所以なり。異點四五に局らざるも、粗佛教の般若の何たるかは明かなるべく、又般若が佛陀と等しく、佛教この般若を外にして存すべからず、これを一派の私有とし、滅後の新案とすべからざるも更に明白を加へたるべきなり。

七、般若經の弘道

(一)印度に於ける般若經典の弘通。般若は無上菩提を成就せしめ、佛陀の三輪般若相應ならざるなしとせば、この法門を目して佛說とせずば佛說なきに同じ。佛法此に存せば滅後の道人この法を尊重受持すべきは必なり。然れども我見斷ち難く法執起り易し正慧沈淪し正觀隱覆さるゝを免がれず、法藏を護持し般若を尊重すと云ふ者、徒らに有見に流れ定相を求め因果に縛せらるゝに至る。佛陀の色法二身を供養し、無畏無礙の大用を欣慕し、無緣の大慈大悲に倣學せんとする者も亦作業善事に縛せられ、法施代受苦に愛著して般若の正意に遠ざかる。勢の窮まる所佛法滅盡を免がれざらんとす。此の時に際し般若經の弘通は危機を轉じて大乘復興の恩澤を潤せり。結集弘通の大

には無漏無爲不可見無對、六には有無四句を離る、七には前の六併に是なりとし、八には六の中第六のみ是なりとす。龍樹は是非を辨ぜざるも、吉藏は前五の偏執は般若の正義に非ず、第七の合取せるは偏せず、第六家正しく般若の體を示すと評せり。支那南北の異說と在りて、南土には空解能く惑を斷ずるを以て般若とす。空解に眞似あり、通法師宋の照令法師明慶禪師等は發心より六地までを似とし七地以上を眞とす。梁三大法師以下は小乘に五方便を似、苦忍以上を眞とし、大乘に三十心を似、地上を眞とす。本經所說の通の十地には性地似、八忍斷を眞とすと般若の解概ね此の類なり。

釋尊成道の頃印度の深刻なる思索は般若を主とし、彼の般若と佛敎の般若と多く類似せること前述せるが如くなるが、今その差別の要點を略說して佛敎の般若の何たるを明さん。(一)有我と無我、外道も人天世相差別せる我を以て假妄とし、獨立常住自在を認めざるも、假我を去れる唯一の最上我を眞實とし、眞我に沒入するを解脫般若なりとす。佛敎これに反し眞我も存せず、眞如法性の實法として別存せざるは顚倒の妄我の非有なるが如く、眞妄倶に無我とするは第一の異點なり。(二)有性無性の別、眞我ありとするを以て自性の大有實在を論ず、若し然らば諸法各々別存するに同じ。佛敎これに反して自性の自性とすべきものなきを性とするのみ。如性實際諸法差別皆是れ無性の性とす。(三)因果緣起の別、外道の所談を因果撥無と云ひ邪因邪果と云ふことあるも、進みて因果を論ずるものに在りても、竟に因の常有に果法の生起を求むるに過ぎざるは最上我有性によりて明かなり。佛敎は因果撥無と邪因邪果とに對しては正因正果を說くも色心を因として果法ありとするは、遂に三界の流轉を免かれず。因果は善道を得るも解脫の正道を得ず、解脫は正慧正觀に依る。正慧とは因果を絕し、有無四句を離れ、萬法皆衆緣の生ずる所にして、一因二因多因の生ずる所に非ずと知るなり。多因と衆緣と何の別あるか。因は果に親しく緣は果に疎なりとするは、只因と緣と對比して說をなすのみ、多因は因も緣も各別法の自他を爲して存とす、衆緣は實に緣の外に因たるものなく、緣に親疎なく、暫く有力無力を別つも、法の生ずべき緣たるに於て、相應と不相應障礙と不障、與力と不與力その別あることなし、衆緣平等にして、因性の差別するが如くならずとす。因は現實の存在たるも緣は然らず、緣を表するに現實の諸法を以てするは、法を表するに名言を以てするの假設なるが如し。衆緣和合して諸法あり、法は各衆緣の焦點中心の如くなるのみ、これ緣生の故に空なり非有なりと論ずる所

ず。般若觀の行者は釋尊の佛陀たるを觀ることその色身法身に於てせず、身はこれ摩尼を盛れる篋笥のみ、佛陀は般若に於て求むべし、般若は根本の母なり。無相の故に一切無礙なり、無作の故に度生無窮なり、般若の佛陀なるが故に釋尊に成佛ある如く、吾人にも成就すべく、十方法界に成就すべし。故に復正法出現し世善成就す般若ならずば假中の假、善も善たらず、正も正たらず、世道尙立たす、況んや出世の大道をや。苟も釋迦の成佛般若に在りとせば、世出世の法佛陀の三輪般若に照らされざるなし。佛口自ら某處に說くと說かざるとに關せず、法性等流は皆佛力にしてこれを佛說と云ふべしとは、本經に屢〻須菩提釋提桓因等の宣說せる所なり。又釋尊の成佛を信じ、度生の大用を歡び、法悅の事實を認むる時、釋尊の教說此に在りとすべし。佛說とは蓍音譜の謂にあらず、了義を分別する者これを佛說とするに妨なし。佛陀の觀行は信者の觀行なるを以て、觀照修行弘通の所作舉て佛說なりとす。又佛陀の說法神通皆憶念三昧に發す、衆生の正念正定相應する所、發して說法文書となるもの佛說に異ならず、諸大乘經三昧を重んずる意此に在り。本經問乘品百八三昧を說くのみならず、無量三昧攝して般若三昧に在り、故に三昧等流の般若法門是れ佛說なり。此の如き史實文證道理信念實感は本經の佛說なるを證す、如是乃至奉行この意に於て悉く佛說なり。若し單に文字を執し佛陀の命令印可の故に佛說なりとするが如きは形相に捉へらる、般若に合せず又佛說たるを確證せざるなり。此に佛說論を云々せるは大乘經中夙に廣く行はれたる本經は古來佛說非佛說の論場たりし爲のみならず、佛說たる所以を明して經意を示さんと欲するが爲なり。

六、佛教の般若

經論に多く般若を說き、小乘に決定相を求め大乘に無定相を明す。吉藏の大品遊意並びに義疏卷一にも種種の義解を出せり。般若の譯、清淨・遠離・明度・慧・智・智慧、到彼岸等とし、或は飜すべからずとするあり。般若二あり深重と輕淺、或は三あり、慧持は實相方便文字の三とす。初品より六十六品の般若道これ實相般若、六十七品より九十品に至る方便道これ方便般若、文字般若は兩者に通ずと、吉藏はこれを非とし、實相觀照文字の三般若とし、經中智及び智處を說く、智處は實相にして境、智はこれ觀照これを說くものは文字般若なりとせり。釋論般若の體を論ずる八家、一に無漏を般若と爲す、成論主の用ゆる所なり。二に有漏を般若と爲す數家の用ゆる所。三に有漏無漏を合して般若とし四には因中の智慧、五

於て般若思想成熟せり。李俱吠陀第十に多くの現象を否定し非有を說き、アイタンーヤ第三章に深般若を述べ、カウシータキ第三第四章の觀察も類するあり。チヤンドーグヤ第八章眞我論は般若の次第觀とも云ふべく、ケーナ第一分に梵の屬性を論ずるも般若を明かならしむる所ありと云ふべく、黑耶柔のタイチリーヤ第二に食氣意識の四弗沙を經て歡喜道に進めるは、佛教の四食を超えて般若を依止とするが如し。此の如く古典の般若思想圓熟せるものあるに、新しきものにはこれを摸倣せるか、或は自在天等と觀るに至る。滅後五百年頃流通せる般若が當時の所說に關せずして、古文學に一致せるは、當時かゝる新古の研究なく、所學を秘密にし、現流を古道とするを以て、偶然にも故意にも佛徒の取捨し得べき所にあらざれば、釋尊の用ゆる所を觀ざるべからず。又佛世の文學なりとせらるゝ薄伽梵歌第二章等にも般若思想鮮からず。般若に通ずるは最高なりとする思想釋尊時代に圓熟せるが故に、佛陀を般若成就者と見るは後世大乘敎徒の新案ならざるなり

佛典中に成佛を三學五分成就とし般若堅固を重んずるの古きは明かなり、只その般若たる三藏毘曇に至りて、諸法を分析し定相を求むるを常とせるは、般若經の空無定相を說くと相反するも、これ外典印度思想より云ふも、大乘の復古醇正思想よりするも、樹下禪思が若干諸法の分析差別にあらざるべきと、三學成就して正慧に到達し如如に通曉し解脫解脫智見成就す、謂ゆる正慧は三昧正受にあらはるゝ觀照にして認識差別の議論にあらざると、五分は如來超世の勝德、佛陀の本質にして、これを成就するものは正法なり、この最勝法に契合する般若も亦論理思辨にあらず、分別法智にあらざるべきは本經舍利品等に說くが如くなるべきとによりて、空無定相の般若を本義とすべきを知る。

是の如く佛陀在世に於ける外道の思想と、成佛の妙觀とより云ふも滅後佛徒が通じて般若を尊重せるよりするも、傳承せる諸文書に照すも、般若の佛說たるは必せり。これを大小俱行の事實ありと云はんよりは、般若一流の中滅後年を經て遺法の分別世間の施設に沒了して小乘敎成立せるに至る。此を以て大士古道を復興し諸大乘經の弘通受持に專注して此經を成す、成るは三藏の後なりと雖も所詮は佛化に基くと云ふべし。大乘般若は一貫の本流にして小乘三藏は支流末解に過ぎず。更に理を以てこれを論ずれば、法性相應これ佛陀たり、佛は法の子として法と一體となる。佛と法と不二一體なるは無相にして成不成あるべからず、成不成なきが故に能く成就す。これを成就するも亦無相般若の明導ならざるべから

(七)義文に異るが故にと。堅慧は入大乘論に、(一)聲聞解する所に非ざるが故に、(二)阿難受けざる所あるが故に、(三)大乘廣大なるが故にとせり。勝軍は諸大乘經皆佛說なりと立量するに至る。

支那には大小の辨明かならず、佛法雜然として輸入せられ、道行先づ行はれ、小品大品諸般若相次ぎ、道教虛無と類するありて、學人學び易きを以て、佛教を奉ぜんとする者、特に大乘非佛說を唱ふるに及ばざりしも、漢に支讖、三國に支謙朱子行、西晉に法護等諸大乘經を弘むると倶に、般若の譯講を事とせるを以て、夙に大乘有緣の地となりぬ。然れども東晉に小乘輸入盛なりしかば、羅什龍樹の法門を傳へたる後も、劉宋に小乘學人少からず、慧導大品を排し、曇樂法華を無し、僧淵涅槃を謗り、法度大乘を信ぜず大經を讀ましめず、法弘普明等從ふ者あり。此に大乘佛說を明かにするを要す、有空二門を分ち、大乘空義を說き、常住佛性の實義を談じ、一乘眞實を論じて、敎相論の發達せるは、元と大乘佛說を明かにするに基く。幾許もなく偏狹の學徒擯斥せられ、毘曇專學續かず、儒道に對し佛徒大同に急なれば非佛說論盛ならず。眞諦部執疏の說は、此の部(大衆部を云ふ)華嚴般若等大乘經を將ちて、三藏中に雜へてこれを說く、時人信ずる者あり、信ぜざる者あり、故に二部となる。(一)信ぜざる者唯言ふ、阿難等三師の誦せる所の三藏のみ、此れ則ち信ずべし、自の三藏外の諸大乘經皆信ずべからずと。(二)復大乘を信ずる者あり、三の因緣あり、一には爾の時猶親く佛の大乘法を說き給ふを聞ける者あり、是の故に信ずべし。二には自ら道理を思量するに大乘あるべし、是の故に信ずべし、三には其の師を信ずるが故に、是の故に信ずべしと。凡そこの類の理由を以て、大乘久く行はれ道理極成せり、佛說なるべしと云ふに過ぎず。

佛說を信ずるもの、(一)經に佛說とするが故にとせるは最單なるもの、妄不妄の別つ能はず、(二)智度論滅後初年彌勒文殊阿難を伴ひ鐵圍山外に結集すと云ふが故に信ずべしとは、龍樹を信じて信ずとするも、傳說保すべからず。(三)大小久く倶行するが故にと云ふは、史實の論證備はらずば充分ならず。(五)道理極成せるが故にとは理の標準如何に決す。畢竟史實文證道理信念實感により、敎義能く成佛の可能を證するとき佛說たるを決すべきのみ。

三、般若佛說論　前述の大乘佛說論は般若經の佛說たるを含むこと勿論なるが、今特に般若の佛說たるを示す。史實より云はゞ、現代の印度研究が明らかにせる吠陀奥義書等の古きもの、釋尊もこの思想に習昵し給へるを信ずべきものに

若波羅蜜を說くを聽く時、毀呰して信ぜず、是の言を作す、是の法を學すべからず、是法に非ず、善に非ず、佛敎に非ず、諸佛是の語を說き給はず」と。魔事品も亦これを述べて誡とす。龍樹は智度論第六十三卷にこれを解して、滅後五百年に諸部決定相を求め、般若の諸法畢竟空と說くを聞き刀心を傷くる如しと云ひ、又般若を破するに佛國の所說、弟子誦習書作せる經卷を、愚人謗りて言ふ、是れ佛說に非ず、是れ魔若くは魔民の所作、亦是れ斷滅邪見人の手筆、莊嚴口力者の說なりと、或は言ふ、是れ佛說なりと雖も其の中處處餘人增益すと、此の如き破人は大地獄に墮すべき狂夫なりと辨ぜり。又六十八卷には六足阿毘曇論議分別を以て眞般若なりとするを聲聞邪見とせり。經者聲聞所觀に異るを感ずるに由りて、非佛說論を豫防せりと解すべき點あるも、大品法華泥洹皆これを力說するは、諸經流布の日新出經典に對する非佛說論激烈なるに因るべし。般若非佛說論は各地小乘敎徒の唱和せること、朱士行の大品將來の日、于闐小乘學徒は漢地沙門婆羅門書を以て正典を惑亂せんとするが故に禁斷せんことを請願せりと云ひ、羅什龜茲に般若を得るや魔その讀誦を妨ぐと云ふが如きに徵して知るべく、印度に論爭絕えざるは續出せる經典聲聞彈呵の聲を大にし、無著堅意世親無性等大乘の佛說たるを論辨せるに照して明かなり。支那多く般若を尊ぶも慧導は大品を排斥し、法度は通じて大乘を遮遣するが如きものなきにあらず。

二、佛說論　非佛說論に對し經は魔事とし、龍樹は狂愚小乘の邪說とし、大乘を了義眞實大法とするに過ぎざるも、無著は莊嚴論第一に(一)不記、(二)同行、(三)不行、(四)成就、(五)體、(六)非體、(七)能治、(八)文異、八因成ずとし、顯揚聖敎論第二十には十因を擧げ、(一)先に記別せざるが故に、(二)今知るべからざるが故に、(三)多く所作あるが故に、(四)極重障の故に、(五)尋伺の境界にあらざるが故に、(六)大覺を證するが故に、(七)第三乘なきの過失の故に、(八)此若し有ることなくば一切智者なき過失を成ずるが故に(九)此を緣じて境となし理の如く思惟し一切の諸煩惱を對治するが故に、(一〇)言の如く彼の意を取るべからざるが故にとし、攝大乘論には十殊勝を陳ねて大乘佛說を成立す。十殊勝とは、(一)所知依(二)所知相(三)入所知相(四)彼入因果(五)彼因果修差別(六)增上戒(七)增上心(八)增上慧(九)彼果斷(一〇)彼果智なり。釋論これを辨ぜり。成唯識論第三には七因を述ぶ。(一)先に記せざるが故に、(二)本より俱行せるが故に、(三)餘境に非ざるが故に、(四)極成すべきが故に、(五)有無有るが故に、(六)能對治の故に、

七、七百頌	二	五七四―五七五	曼殊室利分	日九(五九……)	七、文殊(曼陀譯月九
八、蕃缺	一	五七六	那伽室利分	日九(六八……)	六、濡首　月九
九、三百頌	一	五七七	能斷金剛分	日九(七二……)	四、金剛(六本)月九
十、百五十頌	一	五七八	般若理趣分	日九(七七……)	一〇、實相(四本)成三間八
一一、以下五品十四巻一千八百頌	五	五七九―五八三	布施波羅蜜多分	日九(八一……)	
一二、	五	五八四―五八八	戒波羅蜜多分	日一〇(一四……)	
一三、	一	五八九	忍波羅蜜多分	日一〇(三四……)	
一四、	一	五九〇	勸波羅蜜多分	日一〇(三九……)	
一五、	二	五九一―五九二	靜慮波羅蜜多分	日一〇(四四……)	
一六、二千一百頌	八	五九三―六〇〇	般若波羅蜜多分	日一〇(五三……八九)	

備考　般若心經は直ちに十六會中に攝せざるも、大品第三習應品中に攝することを得。仁王般若は教限他の般若と著しく異りて大般若中に攝せず。表中十萬頌等は西蕃本十六萬四千五十頌を配す、同本異譯は前の列表を示す。

五、般若の佛説

諸部般若の内容は區々たり、説者も佛陀の開示あり、弟子羅漢菩薩諸天あるも、五種説人等く法印に契ひ、佛陀の印可を受くるが故に佛説なりとするを常とす。然れども此に説くが如き幾許を以て教主釋尊に屬すべきか、若くは全然滅後の思索に出づるべきか、これを佛説とせばその意義如何に解すべきかを略說せん。

一、非佛説論　遺法護持を重んずるや、自己傳承に異るものを排して佛説に非ずとするは頗る古し。蓋し佛説の見解一ならず、持阿含、持毘尼、作論議、行禪の分裂せるも、道因聲起の眞妄を論諍せるも、二藏三四五藏等の差異あるも、島史に傳承法律をば異派に別說し、尼涕婆波致参毘陀六分論等を認めざるものありとするも、非佛説論の淩轢久しきを示す、啻に大乘菩薩藏の否認のみならざるなり。殊に大乘非佛説論として見るも、既に大乘經流通の初期に發す。正法難信は奕世の事實にして初正覺時の歎聲なり。大經に至りて此の感更に切なるは、傳道を思ふ深くして不信の強きに驚き、義理を解く微にして俚耳入り難ければなり。即ち信毀品には「人あり是の甚深般

に至る四本は相互類似す、先出の道行を基礎とし、明度は修文に止る。鈔經稱して別本の特色を譯出すと云ふも、道行の抄出更正に外ならず。羅什譯は道行に倣似する所あるも、亦原本の差異を傳ふ。故に六存本中支讖羅什玄奘施護の所依各別なりと云ふべし。先出のもの原始に近きを豫想するも、後譯も亦捨つべきにあらず、先人の抄略後人これを修補することなしとせざるなり。若し玄奘譯を補ふに常啼以下の諸品を以てせば完全なる小品を得べし。然れども粗道行を以て要を盡し古を傳ふるものとして妨げなし。斯の如く小品を第一とし、大品これに次ぎ、第六會以下の諸本更にこれに次ぐ、獨り金剛般若は道行に近似せる古品たるも、道行ありて成立すべく、大品同時とせば大差なからん。第一會は十萬頌大經尊重の思想と共に、大方廣の先出たるべし。十六會中最も新しきは第十會たるべく、これを基として實相般若となり、密教般若續出し、一系の脈絡絶えず。小品流行して他の四會心經等この後に出づ、而も龍樹は大品の流行を見てこれを釋述せると、支那に早く放光光讃の傳譯を見たるとによりて此等聖典が世間に出づる最下限を知ることを得べし。略して諸部般若の關係前後を叙したれば、此に上表十部に關し、第一に諸部互攝表を以て十部互に攝すると不とを表し、第二に互會互攝を示すに止む。

一、諸部互攝表

大般若十六會	卷數	卷次	品數	縮刷藏經	同本異譯
一、十萬頌	四〇〇	一―四〇〇	七九	洪荒二帙	
二、二萬五千頌	七八	四〇一―四七八	八五	日一（一……）	二、大品（放光月一、二／光讃月五／大品月三、四）
三、一萬八千頌	五九	四七九―五三七	三一	日四（八三……）	
四、八千頌	一八	五三八―五五五	二九	日七（八〇……）	一、小品（道行月六／小品月六／大明月八／鈔月八）
五、八千ノ分（四品缺）	一〇	五五六―五六五	二四	日八（七二……）	
六、勝天王	八	五六六―五七三	一七	日九（二三……）	八、勝天王 月八

所現の般若と相距ること遠し。これ論藏が經藏と分離し、思辨が靜慮と隔絶せる結果なり。此に至て誠實に三昧を修し、果佛の內證を般若に求めたるものゝ滿足する能はざる所となる。彼等は般若の名に依て阿毘曇三藏以外別に原始般若を闡明し、枯渇着有の佛敎に蘇生の妙劑を投ぜんとし、大乘般若經の成立を見るに至り。般若を解する者曰く、是れ大乘の阿毘曇と。諸法不可得を示し、小乘法相の決定相を打破し諸法の如實性相住位に通ぜしむるものとしてこの解正し、若し單に法相を分別するを阿毘曇の任とし、この經を以て大乘法相を示すものとせば、當らざるなり。眞實阿毘曇たる般若經典を成すに際し、結集者は原始佛教と滅後連綿たる度生の事實とを忘るゝものにあらさるも、切要を求めて須菩提の無諍三昧に結歸し、一切法相空無相無作不可得の鐵槌を揮ひ、釋尊會上解空須菩提をして甚深般若を廣說せしむ。過去の佛敎に脫胎せるは、本經の法相條目に徵するも、亦須菩提を上首とせるに觀るも明かなり。本經の法相條目とは蘊處界三科、無明等十二緣起、六界四緣六波羅蜜十八空眞如不思議界、念處等三十七道品、四聖諦四靜慮四無量四無色定、八解脫八勝處九次第定十一切處、三三昧一切三昧門一切陀羅尼門、十地四果五眼六通十力四無所畏四無礙十八不共法、四攝三十二相八十隨好不錯謬法恒常捨行、一切智道種智一切種智、辟支佛道一切菩薩摩訶薩行無上正等菩提これなり。本經主として反覆せる法相が如何に滅後佛敎に成就せるかを學ぶとき前出阿毘曇に荷負する所を知るを得べし。又無諍三昧は中阿含これを須菩提族姓子に屬し、彼の解空超逸なるは諸古偈に發して增一阿含等の經說となる。無諍法門として不可見不可聞不可得非樂非我寂靜遠離空無相無願、善無罪無漏無染淸淨、平等無二出世間無爲として廣說するも、緣起無相の所觀に外ならず、此等の點を明かにせば諸會中獨り小品の基礎たるは瞭然なり。今一々諸會比較を表示し難きを以てこの槪言に止む。

若し小品に關し梵漢多數の異本を比較するときは、梵本は首尾に附加せる所を除き、本文多少の出入ありと雖も、大體施護譯本に酷似せり。梵本の稿本中年次の知らるゝ最も古きものは西紀千六十一年なりと云へば、施護譯本が西紀九百八十年に傳來せると、年代近邇し、此等原本が西紀第十世紀、今より一千年前に存したるを明かにするも、古本とは同一ならず、玄奘譯第四會は隨順品以下は除き、他は八千頌梵本に近し。隨順品には隨順般若を細說し、前品に出でたる十二緣起遠離二邊觀を敷衍せるもの、緣起觀と般若實相觀と接合せる、注意すべき一品なるが、前代諸經に顯はれず。遡りて羅什

如く部黨の說久しくして倘明かならざるに際し八部般若說成る、菩提流支の傳へたる金剛仙論に列ぬる所なり。第一部十萬偈(大品)第二部二萬五千偈(放光)、第三部一萬八千偈(光讃)、第四部八千偈(道行)、第五部四千偈(小品)、第六部二千五百偈(天王問)、第七部六百偈(文殊)、第八部三百偈(金剛般若)なりと。これ諸本を統合するに便なるを以て後人依用するもの多し。然れども諸部般若の傳說に强て既譯諸本を配當せる嫌なしとせず。降りて玄奘六百大般若を譯出するに及び、四處十六會具備し、人をして般若大本の圓具せるに驚かしむ。但これ根本般若と枝末般若との大集に外ならず。而も學者これを明かにせず大般若を本經とし、他本はその一會の別出なりと解すること、開元錄以下皆然り。支那に行はれたる部黨論三本四部五部八部十六會等、經典の譯出に伴ひ明白を加へたるが如くなるも大本必ずしも初出經ならず、小會直ちに別出と云ふ能はざるを以て大本別出とするは牽强の誹を免がれず。

今諸般若比較の結果を概括するに、大般若初五會の比較に於ては、玄奘譯二十萬頌によらば、初會十二萬五千頌を基本とするの適當なるを認め、更に玄奘譯第一會よりも、梵本十萬頌に原始的性質を認む。然れども別に新舊諸譯諸會の差異を明かにせる結果は、四會五會の小品は三會以前の大品に比し基礎たることを示せり。卽ち大品は小品を注解敷衍增語せるものなり。般若が三學の一たるは原始佛敎これを認め、慧眼を尊重するに怠らざるも、倘是れ一乘佛法の所詮に外ならず。假令ひ所化定に長ずると慧に敏なるとあり、佛化律儀を主とすると定慧を本とするとあるも、尸羅淸淨ならざれば三昧現前せず、大寂靜に住せずば慧炬明朗ならず、三學相資は一乘法門の第一義たりしなり。然るに二藏の分裂は敎に化制を分ち、業に表無を辨じ法藏の所詮は三昧般若を主とするものとなれり。而も分化此に止まらず、定慧旣に二面たり、法藏永く一樣なる能はず、二藏成りて慧學は論藏の詮顯する所となる。阿毘曇成立の日に於て般若は所詮たり。かの分別說部が波致參毘陀(Patisambhidā)を重んじ、般若品に摩訶般若を廣說し、毘崩伽(vibhanga)に諸智品ありて般若を列擧するが如き、舍利弗阿毘曇非問分に諸智を辨じ、品類識身の諸論には前數者に及ばざるも十智七十七智等の說定まれるものあり。獨り慧智に於て然るのみならず、蘊處界根諦緣人法の分別を事とし、三界受想結縛を論じ、禪無量無色念處正勤神足根力覺道を談じ、超界聖果を明かにするが如きも、聖慧般若の了了を期するものならざるなし。論藏の所詮は般若なりと雖も、阿毘曇は法相を逐て枝末に馳せ三昧

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、大般若經第十會第五百七十八般若理趣分		唐、龍朔三(六六三)	玄奘	一		日九(七七—八一)
二、實相般若波羅蜜經		唐、長壽二(六九三)	流支	一		成三(四六—四八)
三、金剛頂瑜伽理趣般若經		唐、開元七—二(七一九—七三〇)	金剛智	一		閏八(一四—一七)
四、大樂金剛不空眞實三摩耶經般若波羅蜜多理趣品		唐開元八太歷九(七二〇—七七四)	不空	一		閏八(一—四)
五、遍照般若波羅蜜		宋(九八〇—一〇〇〇)	施護	一		成三(四九—五〇)

以上小品より理趣に至る十種相次で傳譯せられたる外、宋施護譯の了義、五十頌聖若、帝釋般若波羅蜜多心經各一卷、惟淨の開覺自性般若四卷あり、何れも月帙第九卷に收む。

四、般若經の部黨

前項表示せる小品乃至理趣の十種傳譯せられたる中に於て、第九大般若に十六會を具備し、第三仁王を除かば、他は皆その十會以前の別出に外ならず。然るに大經の傳來せざるに際し部黨の論一ならず。その古說、これを支遁に見る。即ち大小品對比要抄序に依るに小品を以て滅後大品より抄出せるものと云ひ、二本を以て文の殷約に過ぎずとし、又小二品倶に本品に出づ、本品の文六十萬言あり、印度に行はるとす。その他聽くべきの言少からず。次に道安は般若研究に篤かりしも、諸本本別の比較頗る明かならず。彼が比較せるもの三種を降らず。道行序に三十萬言と云へるは一萬頌たるべく、鈔經序に二十千失盧番かには十七千二百六十首盧殘二十七字と云へるは一萬八千頌に比すべく、六十萬餘言とせる大品は二萬五千頌般若と云ふべきなり。若八千頌を加ふれば四種となる。然るに彼は區分を主とせず歸一を事とせるが爲に、鈔經も殆ど小品と別なからしめ、放光光讚も道行の全備せるものに外ならずとするに至れり。部黨の論更に明白なるは羅什の所傳たり。その資僧叡の小品序に四種あるをいふ。即ち十萬偈大本、六十餘萬言大品、三十萬言小品、六百偈經これなり。道安の鈔經原本たる一萬七千餘の般若は別種とせざりしが如し。深武帝は注解大品序に當時般若部黨論少からざるを擧ぐ、中に仁王には前摩訶般若、金剛、天王問、光讃四部を列ぬるも、仁王は疑經なりとしてこれを捨て、自ら大品の五段、勸說、命說、願說、信說、廣說を五時に擬するは部黨論としては當らず。此の

經名	譯時	譯人	卷	存缺
六、般若波羅蜜多心經	唐、貞元六(七九〇)	般若利言	一	月九(五七)
七、般若波羅蜜多心經	唐、大中(八四七―八五九)	智慧輪	一	續八七套四
八、聖佛母般若波羅蜜多經	宋(九八〇―一〇〇〇)	施護	一	月九(五八)

備考。三藏記には失譯有本として摩訶般若波羅蜜神呪一卷異本とし、未見に般若波羅蜜偈一卷を錄す。大周錄には蜜呪を呉支謙譯とせり。この他寫傳せる義淨譯の心經あり。

六、濡首般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、濡首菩薩無上淸淨分衞經	決了諸法如幻化三昧	宋(四二〇―四七八)	翔公	二		月九(一二―一九)
二、大般若經第八會		唐、龍朔三(六六三)	玄奘	一	那伽利分	日九(六八―七二)

備考。三寶紀には漢靈帝中平五(一八八)年嚴佛調の第一譯あることを云ふ。後人これに基き翔公譯を第二出とす。

七、文殊般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經		梁、天監中(五〇六―五一一)	曼陀羅仙	二		月九(一―六)
二、同		梁天監普通(五一二―五二〇)	僧伽婆羅	一		月九(六―一一)
三、大般若經第七會		唐、龍朔三(六六三)	玄奘	二	曼殊室利分	日九(五九―六八)

八、勝天王般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、勝天王般若波羅蜜經		陳、天嘉六(五六五)	月婆首那	七	十六	月八(五八―九一)
二、大般若經第六會		唐、龍朔三(六六三)	玄奘	八	十七	日九(三三―五九)

九、大般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、大般若波羅蜜多經	大般若	唐、顯慶五―龍朔三(六六〇―六六三)	玄奘	六百	二百七十五	洪荒日三帙

十、理趣般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、仁王護國般若波羅蜜經	仁王般若	姚秦	鳩摩羅什	二	八	月九(四六―五三)
二、大唐新翻護國仁王般若經		唐、永泰元(七六五)	不空	二	八	閏七(二―九)

備考。今表第一を羅什に屬するも恐く什以後梁以前に成れるものなるべし。天台仁王經疏には今經前後三本あり。一晋永嘉年（三〇七―三一二）法護出二卷仁王般若、二秦弘始三（四〇一）鳩摩羅什出二卷佛說仁王護國般若波羅蜜三梁眞諦大同年（五三五―五四五）出一卷仁王般若といふも三譯俱に譯記的確ならず。圓測の疏も亦粗ぼこの類なり。

四、金剛般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、金剛般若波羅蜜經	金剛般若	姚秦、弘始四(四〇二)	鳩摩羅什	一		月九(一九―二二)
二、金剛般若波羅蜜經		北魏、永平二(五〇九)	菩提流支	一		月九(二三―二六)
三、金剛般若波羅蜜經		陳、天嘉三(五六二)	眞諦	一		月九(三〇―三四)
四、金剛能斷般若波羅蜜經	金剛斷割般若波羅蜜	隋、大業(六〇五―六一六)	達磨笈多	一		月九(三四―三八)
五、能斷金剛般若波羅蜜多經		唐、貞觀廿二(六四八)	玄奘	一		月九(四一―四六)
六、大般若經第九會		唐、龍朔三(六六三)	玄奘	一		月九(七二―七七)
七、能斷金剛般若波羅蜜多經		唐、長安三(七〇三)	義淨	一		月九(三八―四一)

備考。本經全本なるや否やにつき、嘉祥の疏に大悲比丘本願經の末記を引き、經本と八卷、今は唯格量功德一品あるのみとするも依用しがたしと論ぜり。

五、般若心經

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、摩訶般若波羅蜜大明呪經		秦、弘始四―一五(四〇二―四一三)	鳩摩羅什	一		閏八(六七)
二、般若波羅蜜多心經		唐、貞觀二三(六四九)	玄奘	一		月九(五六)
三、般若波羅蜜多那經		唐、長壽二(六九三)	菩提流支	一		缺
四、摩訶般若隨心經		唐、中宗(六九五―七一〇)	實叉難陀	一		缺
五、普遍智藏般若波羅蜜多心經		唐、開元廿六(七三八)	法月	一		月九(五七)

一、小品般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、道行經		漢靈、嘉平元(一七二)	竺佛朔	一	一?	缺
二、般若道行品經	摩訶般若波羅蜜	漢靈、光和二(一七九)	支婁迦識	十(或八)	三十	月六(二—四五)
三、大明度無極經	明度	吳權、黃武(二二三—二二八)	支謙	六(或四)	三十	月八(九—三四)
四、吳品經		吳權、太元元(二五一)	康僧會	五	十	缺
五、小品經	(更出經)	晉武、泰始八(二七二)	竺法護	七		缺
六、摩訶般若波羅蜜道行經(略出)		晉惠帝(二九〇—三〇六)	衞士度	二		缺
七、大智度經	大智度無極	東晉(三一七—四二〇)	祇多密	四		缺
八、摩訶般若波羅蜜鈔經	長安品又云須菩提品	符秦建元十八(三八二)	曇摩蜱佛護	五(或四)	十三	月入(三五—五八)
九、小品般若波羅蜜經		姚秦弘始十(四〇八)	鳩摩羅什	十	廿九	月六(四六—八七)
十、大明度經		北涼(三九七—四一八)	道襲	四		缺
十一、大般若經第四會		唐顯慶五—龍朔三(六六〇—六六三)	玄奘	十八、廿九		日七(一—) 日八(—七一)
十二、佛母出生三法藏般若波羅蜜多經		宋大宗(九八〇—一〇〇〇)	施護	二十五、三十二		月七(一—七四)

備考。十の大明度經は大周刊定錄に四卷百六紙とせるも經錄の誤ならんか。

二、大品般若

(經名)	(別名)	(譯時)	(譯人)	(卷)	(品)	(存缺)
一、放光般若波羅蜜經	放光般若	西晉、元康元(二九一)	無叉羅	廿(或三十)	九十	月一、二
二、光讚般若波羅蜜經	光讚	西晉、泰康元(二八六)	法護	十(或十五)	廿一(或廿七)	月五
三、摩訶般若波羅蜜經	大品	姚秦、弘始五(四〇三)	羅什	廿七(或三十)	九十	月三、四
四、大般若經第二會		唐顯慶五龍朔三(六六〇—六六三)	玄奘	七十八	八十五	日一—四(八二)

備考。第一表の八、鈔經は異を出すと云ふ。具譯せば或は大品に屬すべき疑あり。本表の第一は譯第二に後くるゝも傳來は泰康三年に在り。第三は今國譯する所なり。三寶紀等度無極譬經第三卷(或四卷)大品に出づとせるも開元錄これを刪る。

三、仁王般若

照するに出入長短ありて一致すと云ひ難きものあり、只第一會經の類にして印度的色彩强し、通三乘を主とし十地よりも多く四果を云ふ等耳目を惹く。

二、二萬五千頌般若（Pañcavimśati sāhasrika prajna pāramita）ミトラ氏は現に二萬四十五首盧あり、八品として大綱を說き十萬頌と異るとす。固より長短具略の別あるも、氏が單に品目より論ずる如く別異なるにあらず。支那諸譯に徵するも古新兩經新舊兩譯分品互に同じからず、僧叡大品序に「胡本品目ありしもの唯序品阿鞞跋致品魔事品のみ、餘は直ちに事數を陳ぶ」とせるに依るも、分品に重きを置くべからざるや明かなり。本經は大般若第二會、大品般若即ち今國譯する所と比較さるべきものにして大綱一致せりと云ふを妨げず。

三、八千頌般若（Aṣṭasāhasrikā prajna pāramita）千八百八十八年ミトラ氏尼波爾の梵本に依りて甲谷（かるかった）に出版せる所、梵本般若として廣く流布せるものとす。尼波爾佛敎に在りても九法中に編して重んぜらる。分ちて三十二品とす、各品の要旨等ミトラ氏の解說に詳なり。これ支那譯小品般若に比すべきもの、訶梨跋陀羅の釋（Haribhadras Aṣṭasāhasrikāga Prajñāpāramitāyā vyākya）ありて行はる。

四、金剛般若（Vajracchedikā prajñā pāramitā）本書は金剛能斷般若の梵本にして、前三本と異り我國にも弘法大師將來と稱するもの傳はりて世に行はる。アネクドータ、オキソニエンシヤ第一卷（Anecdota Oxoniensia, Aryou series Vol 1 Part 1）として出版せられたるものこれなり。

五、般若心經（Prajñā pāramitā hrdaya sūtra）これ又大小二種の梵本我國に行はれ、前叢書第一卷第三編として出版せらる。簡短にして般若の要旨を盡くす。

以上五本現存梵本として研究せらるゝものなるが、尼波爾傳說に依らば大般若拔抄として、頌十萬、二萬五千、一萬、八千の四種ありと云ふ。而してこの四本の存在確かなるのみならず、更に拔抄數種あるものゝ如し。若し西藏所傳に依らば甘珠（Kandjour）の第二に位し、ワシリエフ氏（Wassitjew）は蕃藏般若の中に十萬、二萬五千、一萬八千、一萬、八千及び七百頌の諸波羅蜜有り。尙金剛と心經とあり、而して十萬頌經も尙三大波羅蜜の最少なるものなりと云はるとせり。若し勝天王般若の如きは雜論部に編して正法中に算せざるのみ、存せざるにあらず。

三、支那譯の般若經

後漢の末葉に竺佛朔支婁迦讖等小品般若と傳へてより、漸出漸增、その十種中に於て小品大品心經等譯次各々十指を屈するに近し。第五卷一五一三頁表示せり）

大般若波羅蜜多經解題

一、般若の經要

大般若六百卷の經要は之を縮むれば一卷の般若心經最もその要を得たり。悲智雙運せる菩薩の妙法たるを示して觀自在菩薩深般若を行じ諸法皆空を觀じて一切の苦厄を度し、智もなく亦得もなく所得なきを以ての故に心罣礙なく恐怖あることなく一切の顚倒妄想を遠離すと云ふものはその敎益を示し、能く阿耨多羅三藐三菩提大涅槃を成就する佛敎を顯はす。色卽是空空卽是色に諸法の實相眞如を示し、五蘊なく六處なく十八界なく十二緣起なく緣起盡滅なく四諦なく無智亦無得なりとする所に廣く一切法を攝取せり。故にこの般若波羅蜜多は大神咒大明咒無上咒無等等咒なりとして般若偈を揭ぐる所に密敎理趣をも包括せり、卽ち六百の廣經この一紙に攝盡せりとし、古來これを愛誦し依用することその當を得たり。

若しそれ卷次を逐ひて經要を示すは之を智旭の閱藏知津に求むべし。一切經の指南としては惟白の大藏綱目指要鈔の方知津よりも正確なれども般若の敍述だけは知津著者特に重きを置けるが故に參照して可なり。我が國には佛敎傳來以後幾くもなく大小品仁王等般若弘通を見、般若寺の創建は般若供養を明證せるもの奈良平安に仁王理趣等尊尙され攘災のためには屢々大般若の轉讀供養せらるゝことゝなり、禪の興隆するや金剛般若と心經とが特に尊ばるゝと俱に大般若の轉讀法要は定次の行事となるに至れり。永福の瑞方面山特にこの經を尊重し國訓し竟に晚年逐卷贊を造り寶曆六年二卷とせり。

般若諸部經を解說するには別に拙著佛敎經典槪說あり、就て見られなく、その一班は先きに國譯大藏に際し大品經解題に述べたり、今回は大品を略脫せるを以て坊間通用の大品內容を知らしむるため全部を茲に再揭することゝす。二三の表目第五卷に出す所と重出するも參照の便によりてその儘とせり。

二、般若の梵本

梵本として流通するもの五本あり。

一、十萬頌般若（Śatasāhasrikā prajñā-parmitā）プラターパチャンドラ、ゴーシャ氏（Pratāpacandra Ghoṣa）に依りて千九百二年より甲谷（かるかつた）（Culcutta）に於て續刊せらる。ラージエーンドラーラーラミトラ氏（Rājendralāla Mitra）は本經を以て十一萬三千六百七十七首盧四分七十二品より成るとす。既刊本を以て玄奘所譯と對

識を出離せしむるを說く。

第十二分戒波羅蜜多分には舍利子復た佛力によりて淨戒を說く、淨戒を持つは件々の戒條を持つにあらず、二乘心を發すを犯戒とし無上正等菩提に趣くを持戒とす。施相に著し諸法を分別し、一切智を離るゝを以て犯戒とす。

第十三分安忍波羅蜜多分には滿慈子舍利子の間に無上菩提に安忍することを明す。慚愧し空觀すれば鬪心息み安穩なり。

第十四分勤波羅蜜多分は又滿慈子を主として般若に住して六情息み三學精勤して菩薩行を完うするを明す。

第十五分靜慮波羅蜜多分は諸法一如に住し靈山會中舍利子滿慈子をも四禪八解脫九次第定一切定を明して空般若三昧を說かしむるに在り。

第十六分般若波羅蜜多分は王舍竹林會中に於て善勇猛菩薩をして般若無所得解脫を縱橫に論盡せしむるものとす。

椎尾辨匡記

ふべからず。龍樹の十住毘婆沙は十住經を廣釋するも第二住の半を以て盡くるが故に、僅かに施戒二行に就て說くに止まる、福蓋正行所集經も亦施戒二法に限る。世親の十地經論は全地に涉るも行相を細叙するを目的とせず、却りて瑜伽の菩薩地には具さに六度に就て各九種相等を說き特色ある說明を發見すべし。此等は孰れも六度に關する重要なる文獻なるが、般若所說の六度は自から此等と類を異にす、卽ち相を行じ法を分つを以て主題とせず、行相分別を離れて六度を滿足することを所詮とするものなり。慳貪布施を離れ、三輪清淨にして方めて財施法施を全現し、持戒犯戒を離れて戒清淨なるを得、忿恚安忍を離れて忍波羅蜜成就し、懈怠精進を離れて勤波羅蜜成就し、散亂靜慮を離れて禪波羅蜜成就し、惡慧般若を離れて般若波羅蜜成就するを說くにあり。空にして無相、相の執るべきなくして施設し假立するのみ。此の如く何等の行相なく分別なくして而も六度現前し無上正等菩提現前するを說くものたり。その說意は前分諸般若に說く所に異らず、殊に第一分大本並に第五分小品等に說ける般若によりて布施持戒安忍精進靜慮諸波羅蜜を成就すと云へるものと全く同一なり。然れども細かにその說相を見れば賴耶執藏に諸法の現前を說き緣成と圓成實とを辨じ、緣生の諸法が圓成實なく本性なきを論ずるが如きは八識三性思想に相並ぶを想はしむ。識を陳ねては恒に眼識乃至意識たり蘊處界諸法を列ぬるに於て全く爾前入諸會と同一なるを以て本經をば八識三性の楞伽瑜伽の新法門なりと云ふこと能はざるも、亦既に三性思想に伴へる瑜伽同期の聖典と云ふべく、玄奘所傳の大般若に於て始めて傳來せるにも一致を見ると云ふべし。

此の六分所說の大要を列ぬれば、

第十一分布施波羅蜜多分には舍利弗をして布施を讃說せしむるに應じて一切智智大悲による布施の最勝大德なるを說く。施は利物の基、捨著の漸、二乘の上に出で、三輪の淨を致し、物皆假名にして唯識に歸し、自我なければ隨喜も二乘の自作に優る。絡ぬるに迴向を以てし控ゆるに菩提を以てす。方便善巧して少多融通し取を忘れ眞寂を完うし財施は群生を充たし法施は含

後六分解說（第十一分乃至第十六分）

大般若第十一分以下終まで六分は本書第一卷凡例七に掲げたる如く本經四處の中三處に渉る。乃ち舍衞城給孤獨園に於けるは一一——一四の四分、王舍城鷲峰山は第一五分、王舍城竹林精舍なるもの第一六分とす。卷次等は、

第十一分——五卷——五七九……五八三	布施波羅蜜多分——日	九、八一……二二〇	第七、	九九一……
第十二分——五卷——五八四……五八八	戒波羅蜜多分——日	一〇、一四……	同	一〇一九……
第十三分——一卷——五八九	忍波羅蜜多分——同	三四……	同	一〇四四……
第十四分——一卷——五九〇	勤波羅蜜多分——同	三九……	同	一〇五〇……
第十五分——二卷——五九一……五九二	靜慮波羅蜜多分——同	四四……	同	一〇五五……
第十六分——八卷——五九三……六〇〇	般若波羅蜜多分——同	五三……	同	一〇六五……

此に表示する如く六度別會に論述するもの、孰れも玄則の序あるが、第十一會施波羅蜜多分の序に云ふ、蓋し萬德相照す、之を統ぶる者は三身、萬行相資く、之を都ふる者は六度、冲虛の六翮、伺塵の六情の若し、故に每因別會して各々其分を彰はすと。誠に慳貪、犯戒、忿恚、懈怠、散亂、惡慧六蔽に應じて布施持戒安忍精進靜慮般若を以てするものなり。抑も菩薩が施戒忍進等の淨行によりて彼岸に超度し佛果を成就すべきは本生（闍多迦）之を詳にす。その中事例最も豐かなるは施戒二事たり。六度を總集するもの、吳康僧會譯六度集經なり。本生と同じく具體事相に就て六度を叙述せるものとす。その他六度を廣說するもの多きも特に華嚴經は菩薩の願行を叙說するが故に、六度に關しても論及する所多く、就中十住經は菩薩不共の十地、初歡喜乃至法雲地に就て十度行を說き三昧陀羅尼門を配するものにして、十度の行相を要目とす。但叙說法義整然具足せりと云

用する所と爲るが故に現前する也。如如の帝釋天衆と與に往いて遊戲せんと思ふ處、嚴飾の時、是の如く是の如く彼の龍現じて是の如き相狀を作して來りて其の前に現ぜん。天帝等の受用する所と爲るが故なり。是の如く若し善士人帝有りて乃ち能く此の深法門を受用せば、謂ゆる能く聽聞し受持し讀誦して有情類の爲に宣示分別せば、彼れは此の法に於て大莊嚴を爲し、能く大流通し、大法照と作り、大法喜を成じ、大法樂を受けん。[二五]善勇猛、若し般若波羅蜜多甚深の法門に於て一句を受持するすら尙ほ無量無邊の功德を獲ん、況んや此の大般若經に於て能く具さに受持し轉讀し書寫し供養流布して廣く他の爲に說くこと有らんをや。彼の獲る所の福は思議す可からず。善勇猛、唯だ性調柔にして極めて聰慧なる者のみ乃ち能く是の如き法門を攝受せん。若し調柔にして極めて聰慧ならざる者には此の甚深の法は其の境界に非ざるなり。善勇猛、我れ有情の諸の疑惑を斷ぜんが爲の故に是の如き大般若經を說けり。此の法を說ける時無量無數の菩薩摩訶薩、無生法忍を得、復た無邊の諸の有情類有りて皆無上正等覺の心を發しき。[二六]爾の時如來、彼れに決定して當に無上正等菩提を證すべしと記したまひき。[二七]時に薄伽梵是の經を說き已つて善勇猛等の諸大菩薩及び餘の四衆、天龍藥叉健達縛阿素洛掲路茶緊捺洛莫呼洛伽人非人等の一切の大衆、佛の說かせたまふ所を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

大般若波羅蜜多經終

【二五】大般若經受持演說の大功德を明す。

【二六】佛受持般若者に記莂を與へたまふ。

【二七】最後に諸大菩薩を始め一切の大衆の歡喜信行を述べ大團圓と爲す。

捺洛莫呼洛伽及び餘の神衆、皆種種天の妙華香を持て世尊に散じ奉り供養を爲し、復た廣大の讃詠の聲を發して言はく、甚だ奇なり、如來の大威神力、法藏及び修行者を護持し、惡魔軍をして壞滅すること能はざらしめ、諸の魔羂を斷じて大自在を得、修する所の行に於て速に究竟に至らしめたまふ。若し淨信の諸の善男子善女人等有りて此の法門に於て受持讀誦し他の爲に廣說せば復た諸の惡魔軍を怖畏せざらん。若し諸の菩薩此の法門に於て受持讀誦し他の爲に廣說せば、便ち能く諸の惡魔軍を降伏し、一切の惡魔も留難すること能はざらんと。爾の時佛、善勇猛に告げて言はく、是の如し是の如し。天等の說けるが如し、善勇猛、如來は此の無上の法門に於て、諸の惡魔の爲に已に[三]壇界を結び、惡魔衆の所有る羂網をして此の法門に於て礙と爲ること能はざらしむ。善勇猛、如來は今者此の法門に依りて諸の惡魔の所有る勢力を摧けり。善勇猛、如來は今者此の法門を護り諸の惡魔を制して侵損せざらしむ。善勇猛、若し淨信の諸の善男子善女人等有りて、此の法門に於て受持し讀誦し廣く他の爲に說かば一切の惡魔擾亂すること能はずして而も能く諸の惡魔の怨を降伏せん。若し諸の菩薩此の法門に於て受持し讀誦し廣く他の爲に說かば普ねく一切の魔軍を降伏して諸の有情に利益安樂を施さん。善勇猛、是の如き法門は諸の雜染に弊るゝ有情類の手に能く得る所に非ず。善勇猛、是の如き法門は魔の羂網に拘繫せらるゝ者の所行の地に非ず。善勇猛、是の如き法門は是れ性調善にして極めて聰慧なる者の所行の地なり。善勇猛、極めて調柔聰慧なる象馬は小王等の乘御する所に非ず、亦た弊惡の時に出現するに非ず、唯だ輪王の受用する所と爲すのみ、斯れに由りて彼の世に時に出現するが如く、是の如く調柔にして極めて聰慧なる者は方に能く此の深法門を受用するが故に、此の法門乃ち其の手に墮つるなり。善勇猛、譬へば齋戒龍王、善住龍王、哀羅筏拏龍王の如し、彼れは人の受用する所のため及び見んが爲の故ならずして而かも現在前す、亦復た諸の餘の天衆の受用する所と爲るが故ならずして而かも現在前す。唯だ調善聰慧なる天衆の受

【三】壇界を結ぶ。結界してその界內の安定を計るを云ふ。

【四】般若を受持し得る者の機根を喩を以て說く。

白して言さく、世尊、我れ等當に是の如き如來の無量無數百千俱胝那庾多劫に會て修集したまひし所の甚深般若波羅蜜多を學して上首と爲るべし。甚深般若波羅蜜多の流出する所、甚深般若波羅蜜多の建立する所の無上の法藏、我れ等當に是の如き法藏を持て、佛涅槃の後、後時後分の後の五百歳に、無上の正法の將に壞滅せんと欲する時、分轉の時に、廣く有情の爲に宣說開示して、彼れをして聞き已つて大利樂を獲せしむべし。[二]世尊、當に彼の時に於て大恐怖有り、大險難有り、大暴惡有るべし、當に彼の時に於て諸の有情類多分に成就し、匱法業を感じて心貪欲多く、不平等貪及び非法貪に染汚せられ、慳悋嫉妬、其の心を纏縛し、多忿凶勃麁惡語を好み、諂曲矯誑にして樂うて非法を行じ、多く輕蔑を懷いて鬪訟相違し、不律儀に住して耽嗜に蔽はれ、懈怠增上し精進下劣、正念を忘失して不正の知に住し、口强く喙長く偃蹇憍慠にして憙んで惡業を行じて內心を隱覆し、貪恚癡增し善根薄少にして無明の翳の闇蔽する所と爲り、諸の所行有るは皆魔黨に順ひ、深法律の與に恒に怨害と作り、法の寶藏に於ては常に大賊と爲り、禀性弊惡にして親附す可きこと難し。世尊、我れ等今者決定して能く是の如き如來の無量無數百千俱胝那庾多劫の善根もて集めたまひし所の無上の法藏を持て、彼の有情の與に大饒益を作さん。世尊、彼の時に當に少分の有情有りて斯の法藏に於て勤求樂學すべし。彼の性、質直にして諂無く誑無く、寧ろ身命を捨つるも法怨と作らず、法に於て亦た誹謗厭背すること無けん。我れ彼の類の與に當に饒益を作し、此の深法に於て示現勸導讚勵慶喜して勤め修學せしむべしと。[三]爾の時世尊卽ち神力を以て、般若波羅蜜多微妙甚深無上の法藏を護持して、惡魔衆をして壞滅すること能はざらしめ、復た威力を以て能く此の法藏を受持し精進して修行する者を護り、魔羂を斷じて蕭然として解脫し、修する所の行に於て速に究竟に至らしめたまへり。佛、時に微笑して大光明を放ち普ねく三千大千世界を照したまへり。人中天上兩處の有情、佛の光明に因りて互に相見ることを得たり。時に此の衆會の天龍藥叉健達縛阿素洛揭路茶緊

【二】流通に際し魔障競ひ起らん種種相を說き中に纔に死身求法の者あらんを明す。

【三】如來の威力、般若を受持する男女菩薩に加被して大乘究竟の涅槃に入らしむるを明し、衆會の大衆その威力を讚歎し佛之を證明したまふを說く。

無きが故に無著と名づく。此の中に於て能著所著此れに由り、此れが爲に、此れに因り、此れに屬する皆得可からざるを以ての故に無著と名づく。善勇猛、無縛と言ふは謂ゆる此の中に於ては縛得可からざるなり。縛に縛性無く縛に實性無きが故に無縛と名づく。此の中に於て能縛所縛此れに由り、此れが爲に、此れに因り、此れに屬する皆得可からざるを以ての故に無縛と名づく。善勇猛、若し諸法に於て著無く縛無くんば云何が法に於て解脱すと說く可けん。善勇猛、著無く縛無く亦た解脱も無く離繋清凉なるを眞解脱と名づく。善勇猛、若し諸法に於て執著無くんば則ち繋縛無し。若し諸法に於て繋著無くんば則ち解脱無し。三事を遠離して離繋清凉なるを眞解脱と名づく。善勇猛、是の如く菩薩は諸法に悟入して著無く縛無く亦た解脱も無く眞智見を得ば般若波羅蜜多を修行せるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば無上正等菩提に隣近して速に能く一切智智を證得せん。善勇猛、我れ是の如き甚深般若波羅蜜多微妙の法印を以て、諸の菩薩摩訶薩衆に印して疑網を斷ぜしめ、精勤して甚深般若波羅蜜多を修學して速に究竟に至らしめん。善勇猛、我れ今自ら是の如き法印を持て久しく世に住して有情を利樂せしめん。所以は何ん、我が聲聞衆は勝神力無きも能く般若波羅蜜多微妙の法印を持て、我が滅後の後時後分の後の五百歲に至るまで有情を饒益すればなり。

二〇 爾の時世尊、賢守菩薩導師菩薩等五百の上首菩薩及び善勇猛菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子、汝等應に是の如き如來の無量無數百千倶胝那庾多劫に曾て修集したまひし所の甚深般若波羅蜜多を學して上首と爲るべし。甚深般若波羅蜜多の流出する所、甚深般若波羅蜜多の建立する所の無上の法藏、汝等應に是の如き法藏を持て、我が涅槃の後、後時後分の後の五百歲に無上の正法の將に壞滅せんと欲する時、分轉の時、廣く有情の爲に宣說開示して、彼れをして聞き已つて大利樂を獲せしむべしと。時に諸の菩薩、佛の語を聞き已つて皆座より起ち、佛の足を頂禮し合掌恭敬して倶に佛に

【二〇】善勇猛賢守導師等五百の菩薩に般若を附屬し末法流通を勸勵す。

著無く亦た解脫も無し。眼は著無く縛無く亦た解脫も無く、耳鼻舌身意も著無く縛無く亦た解脫も無し。色は著無く縛無く亦た解脫も無く、聲香味觸法も著無く縛無く亦た解脫も無し。眼識は著無く縛無く亦た解脫も無く、耳鼻舌身意識も著無く縛無く亦た解脫も無し。名色は著無く縛無く亦た解脫も無し。顚倒見趣諸蓋愛行は著無く縛無く亦た解脫も無し。貪瞋癡は著無く縛無く亦た解脫も無し。欲色無色界は著無く縛無く亦た解脫も無し。有情界法界は著無く縛無く亦た解脫も無し。我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者及び彼の諸想は著無く縛無く亦た解脫も無し。地水火風空識界は著無く縛無く亦た解脫も無し。緣起染淨は著無く縛無く亦た解脫も無し。布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧は著無く縛無く亦た解脫も無し。苦集滅道は著無く縛無く亦た解脫も無し。念住正斷神足根力覺支道支は著無く縛無く亦た解脫も無し。顚倒等斷は著無く縛無く亦た解脫も無し。靜慮解脫等持等至は著無く縛無く亦た解脫も無し。無量神通は著無く縛無く亦た解脫も無し。盡智無生智無造作智及び無著智は著無く縛無く亦た解脫も無し。明及び解脫解脫智見は著無く縛無く亦た解脫も無し。異生聲聞獨覺菩薩佛地は著無く縛無く亦た解脫も無し。異生聲聞獨覺菩薩佛の法は著無く縛無く亦た解脫も無し。生死涅槃は著無く縛無く亦た解脫も無し。佛の智力無畏等は著無く縛無く亦た解脫も無し。過去未來現在の智見は著無く縛無く亦た解脫も無し。何を以ての故に、善勇猛、一切法の著得可からず、縛得可からざるを以てなり。著縛既に無ければ、彼れ從り解脫するも亦た得可からざるなり。善勇猛、[一九]著縛と言ふは謂ゆる法性に於て執著し繫縛するなり。法性既に無きが故に著有り縛有りと說く可からず。解脫すと言ふは謂ゆる著縛より脫するなり。彼の二既に無きが故に解脫無し。善勇猛、解脫無しとは謂ゆる諸法に於て都て能く解脫性を得る有ることなきなり。若し諸法に於て能く是の如く見ば卽ち說いて名づけて無著智見と爲す。善勇猛、無著と言ふは謂ゆる此の中に於ては著得可からざるなり。著に著性無く著に實性

ば著縛より解脫するの要なくその義成立せず一切法是れ不可得なれば著縛すら成立せず況んや解脫をや。

【一九】相對的言語分別を離るゝ所眞解脫の大道開かるゝ理を明す。

りて、世俗の諸法擾動すること能はざらん。善勇猛、日輪擧りて諸の光明を蔽ふが如く、是の如く菩薩の學する所の般若波羅蜜多世間に出現せば、一切の外道悉く皆隱沒せん。善勇猛、若し諸の菩薩の學する所の般若波羅蜜多世間に出現せば有情類の與に法の明照と作らん。善勇猛、若し諸の菩薩世間に出現して諸の有情の善根の明照と作り、有情類の與に淨福田と作らば一切の有情は皆應に供養すべく、一切の有情は皆應に歸趣すべく、一切の有情は皆應に稱讚すべし。

一五 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多を學せば諸學の中に於て是れ最勝の學なり。是の如く學するものは普ねく有情の爲めに涅槃の路を淨めん。何を以ての故に、善勇猛、若し般若波羅蜜多を學せば諸學の中に於て最勝第一にして妙爲り微妙爲り、上爲り無上爲り無等無等爲ればなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多を學せば一切の學をして皆究竟に至らしめ、普ねく能く一切の學する所を受持し、一切の學に於て皆能く開示して一切の他論邪學を摧伏せん。善勇猛、若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多を學せば則ち能く三世諸佛の諸の菩薩行を修行するなり。善勇猛、諸佛世尊は此の學する所の甚深般若波羅蜜多に於て、一六 已正當に學して極めて善く安住し、諸の有情の爲に已正當に是の如き無上清淨の學法を說き給へり。善勇猛、是の如く學する所の甚深般若波羅蜜多は一切世間の學する所に超過して最尊最勝なり。善勇猛、是の如く學する所の甚深般若波羅蜜多は是れ自然學にして一切世間に能く及ぶ者無し。善勇猛、若し般若波羅蜜多を學せば諸法の中に於て都て學する所無けん。謂ゆる若しは世間若しは出世間、若しは有爲若しは無爲、若しは有漏若しは無漏、若しは有罪若しは無罪、是の如き等の一切の法門に於て執著を生ぜず、一切法に於て無著にして住し、諸の有情の爲に無倒に無上清淨の學する所の法を開示す。何を以ての故に、善勇猛、一切法は著無く縛無く少法も著と爲り縛と爲るあることなくして而かも現在前するを以てなり。

一八 此れに由りて亦た解脫を得るの義無し。善勇猛、色は著無く縛無く亦た解脫も無く、受想行識も

【一五】般若の修學は尊無過上の學たり。

【一六】三世の諸佛皆深般若を學住するを說く。

【一七】天地自然相應の學。

【一八】自性旣に無著無縛なれ

守護して非法不平等貪の染汚する所と爲らず、其の心長夜に天主と爲らんことを願ひ、修する所の善に於て其の心堅固なるが如し當に知るべし彼の類は久しからずして定んで三十三天に生じて天帝釋と作らんと。是の如く菩薩若し般若波羅蜜多相應の法要を以て有情類に施して顧悋無き者は當に知るべし久しからずして定んで法王と作り、一切法に於て大自在を得んと。善勇猛、譬へば人有りて四梵住を得るが如し。當に知るべし久しからずして梵天に生ずべしと。是の如く菩薩若し般若波羅蜜多相應の法要を以て有情類に施して顧悋無き者は當に知るべし久しからずして妙法輪を轉じて諸の有情に利益安樂を施さんと。[一]善勇猛、譬へば大地の雨際に至る時、上の空中を見るに密雲潤ひを含み、天の將に昏闇して漸く大雨を降らすや陂湖池沼處々に充溢し大地原隰して上下倶に潤ひ、密雲垂覆して甘雨普ねく洽ひ、諸の藥物卉木叢林枝葉花果悉く皆茂盛し、水陸山川香氣芬馥として處々に皆花果泉池有り、大地時に甚だ愛樂す可く、人非人の類見已つて歡娛し、花果を採摘して香を嗅ぎ味を嘗むるが如く、是の如く菩薩現に般若波羅蜜多を得て精勤修學せば是の諸の菩薩は當に知るべし久しからずして一切智智に潤沃せられ、善能く一切智智に趣入して當に能く一切智智を開顯すべく、斯れに由りて一切有情を潤洽して無上の法寶を分別開示せんと。善勇猛、譬へば[二]無熱龍王宮の內の有情生じ已つて四大河より出で、各一方に趣いて大海に充滿するが如く、是の如く菩薩手中に此の甚深般若波羅蜜多を得、復た能く中に於て精勤修學せば彼れ皆能く大法の流注を出し、大法施を以て有情に充足せん。[三]善勇猛、衆鳥等の妙高山に依れるは形類殊なりと雖も而も同一色なるが如く、是の如く菩薩手中に此の甚深般若波羅蜜多を得て信受し修行せば皆同一趣ならん、謂ゆる如來の一切智趣に趣かん。[四]善勇猛、譬へば大海は諸水の依持にして常に衆流の歸趣する所と爲るが如く、是の如く菩薩手中に此の甚深般若波羅蜜多を得て精勤修學し極めて通利せしめば久しからずして當に一切法海に作るべく、速に疾く當に一切法器を成ずべく常に諸法の歸趣する所と爲

【一】　般若を修學するは佛智を得て有情を利樂し眞の法寶の確立する所以を明す。

【二】　無熱龍王宮は無熱池に同じ梵名はAnavadattaヒマラヤ山の北、香山の南に在り周圍八百里南贍部洲の中心なりと云ふ此に住む龍王を無熱龍王と云ふ。

【三】　般若の信行は如來と同一趣たり。

【四】　深般若を得たる菩薩は一切の所歸體、明照、應供者たるを明す。

た久しからずして當に諸佛の現前の受記を蒙るべしと。善勇猛、譬へば人有り精勤して十善業道を受學し已つて究竟に至るが如し、當に知るべし彼の人は善根成熟し已つて[八]北俱盧生に隣近することを得んと。是の如く菩薩若し手に此の甚深般若波羅蜜多を執らば當に知るべし所求の無上正等菩提に隣近して定んで疑惑無けんと。善勇猛、譬へば人有りて樂うて惠捨を行じ、諸の財寶に於て顧悋する所無く、諸の有情に於て常に布施愛語利行同事を以て攝受し、戒を持ち忍を修し憍慢を摧伏し、是の如き行を修して究竟に至る時は速に大財を獲て高族に生ずるが如く、是の如く菩薩若し手に此の甚深般若波羅蜜多を得ば當に知るべし不退轉位に隣近すと。善勇猛、譬へば人有り樂うて施戒尸羅安忍を修して具足せざる無く、有情を慈愍して淨戒を持つことを勸め、復た能く增上を感ずる業を造作せば當に知るべし速に轉輪王の位を獲んとするが如く、是の如く菩薩若し手に此の甚深般若波羅蜜多を得ば當に知るべし速に妙菩提の座に坐せんと。善勇猛、轉輪王の將に大位に登らんとして、[九]白半月の十五日の晨に於て沐浴して齋を受け大殿上に至りて師子座に昇り東に面して坐するに大輪寶有りて空より來るが如し當に知るべし彼の王は轉輪位を受け、久しからずして當に七寶を具足することを得べしと。是の如く菩薩手中に此の甚深般若波羅蜜多を得ば當に知るべし速に一切智智を獲んと。[一〇]善勇猛、有情類有りて勝善根を成じ、常に樂うて淸白の行を修行し、信解廣大にして人身を厭患し、淨尸羅を具して樂うて衆事を營み、其の心長夜に天に生じて四洲の人のために常に覆護を爲さんと思願するが如し當に知るべし彼の類は久しからずして四大天王と爲りて四洲界を護ることを得んと。是の如く菩薩若し般若波羅蜜多相應の法敎を以て有情類に施して心に悋惜すること無くんば當に知るべし久しからずして法王と爲ることを得て一切法に於て皆自在を得んと。善勇猛、如し有情類勝善根を成じ、淸淨なること前に成就せし所の者に過ぎ、獲る所の財寶は先に他に惠施して後に自ら受用し、營む所の事務は先に有情の爲にして後に方に已が爲にし、常に自ら

【八】北俱盧Uttarakuru古代印度に於ける世界觀に須彌山說あり大海の中央に須彌山立ちその四方を四洲に分ち北方に位する大洲を北俱盧と云ふ。他の三洲に比して最勝の處とす「慧苑音義」に「北云レ上也。勝也。句嚧所作也。謂彼洲人。於二所作事一皆無二我所一勝二餘三洲一故也」。

【九】白半月黑半月は印度の曆法なり一ヶ月を月の盈昃を以て二分し月の全缺より滿に至る間は白半月。十六日よりは黑半月にして之を黑半月一日乃至十五日とす。

【一〇】般若相應の法要を說く者之を法王と爲す。

し、一切有情をして豊に清淨の尸羅を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に安忍柔和を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に勇猛精進を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に淸白の靜慮を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に微妙の般若を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に究竟の解脫を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に解脫智見を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に諸の善趣に生ずるを足らしめんと欲し、一切有情をして豊に明及び解脫を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に畢竟涅槃を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に諸佛の妙法を足らしめんと欲し、一切有情をして豊に衆德を圓滿するを足らしめんと欲し、無上微妙の法輪の、一切世間の沙門梵志天魔外道の皆能く法の如く轉ずる者有ること無きを轉ぜんと欲し、世間に於て妙法を宣說せんと欲し、能く實の如く諸佛地を記せんと欲し、能く實の如く菩薩地を記せんと欲し、能く實の如く獨覺地を記せんと欲し、能く實の如く聲聞地を記せんと欲し、能く諸の有情類の本願の善根を覺發せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。勇猛に正勤して常に間斷無く應に是の如き甚深般若波羅蜜多に依て精勤修學して顧戀する所無かるべし。善勇猛、我れ都て諸の餘法の能く菩薩をして速に疾く所求の無上諸佛の妙法を圓滿せしむることこの所說の甚深般若波羅蜜多の如くなるあるを見ず。若し諸の菩薩是の如き甚深般若波羅蜜多に安住して精勤修學して時に暫くも捨つる無くんば速に能く一切智の法を圓滿せん。善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行して能く究竟に至らば是の諸の菩薩は無上正等菩提に隣近して定んで疑惑無けん。善勇猛、若し善男子善女人等、此の般若波羅蜜多を聞き歡喜し信受して實の想ひを生ぜば我れ彼の類は能く無上正等菩提を引き殊勝の善根もて速に究竟に至ると說く。是の善男子善女人等は善根を攝受して定んで能く大慧の資糧を積集せん。[七]善勇猛、若し諸の菩薩手に是の如き甚深般若波羅蜜多方便善巧相應の法敎を執らば、是の諸の菩薩は設ひ現前に佛の受記を蒙らずとも當に知るべし已に佛の受記を蒙るに近く、或は復

【七】深般若を得るは佛に授記せらるると等しく無上菩提を得不退轉の聖位に入り一切智智を獲るを喩を以て說く。

く此の法は常住なりと示現す可く、如來も亦た應に諸法に安住して、諸法の此れは執藏す可からず、此れは積集す可しと示現したまふべし。善勇猛、一切法は安住す可からざるを以て執藏す可からず、積集す可からず。是の故に法の是れ常住なる者無し。此れに由りて如來は法に安住したまはず亦た此れは執藏す可く、此れは積集す可しと示現したまはざるなり。善勇猛、少法も是れ實に生ず可き有ること無し。少法も實に生ず可き無きを以ての故に都て住する所無し。故に諸法は住す可き義無しと說く。善勇猛、住する所無く及び住せざる無きを以て方便と爲すが故に一切法は都て住する所無しと說く。善勇猛、少法も住すと說く可きもの有ること無きは、四大河の無熱池より出でて未だ大海に入らざるには終に住する義無きが如し。是の如く諸法も乃至無造まで、諸行未だ盡きざるには終に住する義無し。善勇猛、無造の行とは謂ゆる此の中に於て住不住無く、留難者無く、一切皆俗數に依て說くのみ。實に住すること有ること無く、留難者無く、究竟者無く亦た住せざるも無し。善勇猛、無造の行とは俗數に依て說くのみ。諸の有情の世俗の所見の如く實に住し、或は留難者、或は究竟者あるに非ず、亦た住せざるも無し。無造の行は實に住する者有るに非ず。是の故に俗數に依て說くと言ふ可し。故に一切法は皆住する義無し。善勇猛、是の如く菩薩摩訶薩衆は一切法の無住方便に依て般若波羅蜜多を修行す。[五] 善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば速に能く一切智の法を圓滿し、無上正等菩提に隣近して疾く能く妙菩提の座に安坐し、疾く能く一切智智を證得し、疾く能く三世の智見を圓滿し、疾く能く一切有情の心行の差別を圓滿せん。遍ねく妙智を知るが故に。

[六] 善勇猛、若し諸の菩薩摩訶薩衆、普ねく一切有情を饒益せんと欲し、財を以て一切有情に施して皆充足せしめんと欲し、法を以て一切有情に施して皆願をして滿たしめんと欲し、能く一切有情の無明の卵㲉を破壞せんと欲し、普ねく一切有情に大智佛智を授與せんと欲し、普ねく一切有情を哀愍せんと欲し、普ねく一切有情を利樂せんと欲し、一切有情をして豐に財施法施を足らしめんと欲

【五】不斷覺醒相續妙智たり。

【六】一切有情の所願乃至所求の無上菩提を滿足せしむるは深般若の修學の上に過ぐるもの無きを說く。

に執著せず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば速に能く一切智の法を圓滿せん。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ずれば則ち爲れ如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法に隣近するなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ずれば則ち爲れ三十二大士相八十隨好に隣近し、身眞金色にして無邊の光明ありて龍象の視あるも能く頂を見る無きが如くならん。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ずれば則ち爲れ過去未來現在の無著無礙の智見に隣近し、亦た爲れ如來の教授教誡示導に隣近し、亦た爲れ過去未來現在の無著無礙の智見に隣近し決定して記を受くるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ずれば速に一切の佛法清淨を證し、速に能く佛土清淨を證得し、速に能く聲聞衆圓滿を攝受し、速に能く菩薩衆圓滿を攝受せん。[三]善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば色に住せず、受想行識に住せず。眼に住せず、耳鼻舌身意に住せず。色に住せず、聲香味觸法に住せず。眼識に住せず、耳鼻舌身意識に住せず。名色に住せず。顚倒見蓋愛行に住せず。欲色無色界に住せず。有情界法界に住せず。地水火風空識界に住せず。我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者及び彼の諸想に住せず。斷常に住せず。染淨に住せず。緣起に住せず。布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂妙慧惡慧に住せず。念住正斷神足根力覺支道支に住せず。顚倒等の斷に住せず。靜慮解脱等持等至に住せず。明及び解脱解脱智見に住せず。盡智無生智無造作智及び無著智に住せず。止觀に住せず。無量神通に住せず。苦集滅道に住せず。異生聲聞獨覺菩薩佛地に住せず。異生聲聞獨覺菩薩佛の法に住せず。生死涅槃に住せず。佛の智力無畏等に住せず。過去未來現在の智見に住せず。佛土圓滿に住せず。聲聞衆圓滿に住せず。菩薩衆圓滿に住せざらん。[四]何を以ての故に、善勇猛、一切の法は住す可からざるを以ての故なり。善勇猛、一切の法は住す可き義有るに非ず。所以は何ん、一切の法は皆無執藏なるを以てなり。執藏無きが故に住す可き者無し。善勇猛、若し一切法に住す可き者有らば應に此れは執藏す可

【三】菩薩の無住方便即般若なる所以を說く。

【四】一切法無常無生なるが故に住すべからざる理を明す。

過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず。耳鼻舌身意の過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず。色の過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず、聲香味觸法の過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず。眼識の過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず、耳鼻舌身意識の過去未來現在の本性の淸淨不淸淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば速に能く一切智の法を圓滿せん。[二]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色に恃執せず、受想行識に恃執せず。眼に恃執せず、耳鼻舌身意に恃執せず。色に恃執せず、聲香味觸法に恃執せず。眼識に恃執せず、耳鼻舌身意識に恃執せず。色の淸淨に恃執せず、受想行識の淸淨に恃執せず。眼の淸淨に恃執せず、耳鼻舌身意の淸淨に恃執せず。色の淸淨に恃執せず、聲香味觸法の淸淨に恃執せず。眼識の淸淨に恃執せず、耳鼻舌身意識の淸淨に恃執せず。色の所緣淸淨に恃執せず、受想行識の所緣淸淨に恃執せず。眼の所緣淸淨に恃執せず、耳鼻舌身意の所緣淸淨に恃執せず。色の所緣淸淨に恃執せず、聲香味觸法の所緣淸淨に恃執せず。眼識の所緣淸淨に恃執せず、耳鼻舌身意識の所緣淸淨に恃執せず。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色に執著せず、受想行識に執著せず。眼に執著せず、耳鼻舌身意に執著せず。色に執著せず、聲香味觸法に執著せず。眼識に執著せず、耳鼻舌身意識に執著せず。色の淸淨に執著せず、受想行識の淸淨に執著せず。眼の淸淨に執著せず、耳鼻舌身意の淸淨に執著せず。色の淸淨に執著せず、聲香味觸法の淸淨に執著せず。眼識の淸淨に執著せず、耳鼻舌身意識の淸淨に執著せず。色の所緣淸淨に執著せず、受想行識の所緣淸淨に執著せず。眼の所緣淸淨に執著せず、耳鼻舌身意の所緣淸淨に執著せず。色の所緣淸淨に執著せず、聲香味觸法の所緣淸淨に執著せず。眼識の所緣淸淨に執著せず、耳鼻舌身意識の所緣淸淨

【二】菩薩の所行及びその果報として佛德・佛の相好・智見に隣近するを說く。

復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色の開顯不開顯を行ぜず、受想行識の開顯不開顯を行ぜず。眼の開顯不開顯を行ぜず、耳鼻舌身意の開顯不開顯を行ぜず。色の開顯不開顯を行ぜず、聲香味觸法の開顯不開顯を行ぜず。眼識の開顯不開顯を行ぜず、耳鼻舌身意識の開顯不開顯を行ぜず、色の寂靜不寂靜を行ぜず、受想行識の寂靜不寂靜を行ぜず、眼の寂靜不寂靜を行ぜず、耳鼻舌身意の寂靜不寂靜を行ぜず。色の寂靜不寂靜を行ぜず、聲香味觸法の寂靜不寂靜を行ぜず。眼識の寂靜不寂靜を行ぜず、耳鼻舌身意識の寂靜不寂靜を行ぜず。色の本性の清淨不清淨を行ぜず、受想行識の本性の清淨不清淨を行ぜず。眼の本性の清淨不清淨を行ぜず、耳鼻舌身意の本性の清淨不清淨を行ぜず。色の本性の清淨不清淨を行ぜず、聲香味觸法の本性の清淨不清淨を行ぜず。眼識の本性の清淨不清淨を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性清淨不清淨を行ぜず。色の本性の開顯不開顯を行ぜず、受想行識の本性の開顯不開顯を行ぜず。眼の本性の開顯不開顯を行ぜず、耳鼻舌身意の本性の開顯不開顯を行ぜず。色の本性の開顯不開顯を行ぜず、聲香味觸法の本性の開顯不開顯を行ぜず。眼識の本性の開顯不開顯を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性の開顯不開顯を行ぜず。色の本性の寂靜不寂靜を行ぜず、受想行識の本性の寂靜不寂靜を行ぜず、眼の本性の寂靜不寂靜を行ぜず、耳鼻舌身意の本性の寂靜不寂靜を行ぜず。色の本性の寂靜不寂靜を行ぜず、聲香味觸法の本性の寂靜不寂靜を行ぜず。眼識の本性の寂靜不寂靜を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性の寂靜不寂靜を行ぜず。色の本性の遠離不遠離を行ぜず、受想行識の本性の遠行不遠離を行ぜず。色の本性の遠離不遠離を行ぜず、耳鼻舌身意の本性の遠離不遠離を行ぜず。色の本性の遠離不遠離を行ぜず、聲香味觸法の本性の遠離不遠離を行ぜず、眼識の本性の遠離不遠離を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性の遠離不遠離を行ぜず。色の過去未來現在の本性の清淨不清淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず、受想行識の過去未來現在の本性の清淨不清淨開顯不開顯寂靜不寂靜遠離不遠離を行ぜず。眼の

【一】菩薩の所行を説き並に一切智を圓滿するを明す。

り。菩薩は遍ねく是の如き一切を知り復た中に於て若しは行じ若しは觀ぜざるなり。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色の過去未來現在の著無著を行ぜず、受想行識の過去未來現在の著無著を行ぜず。眼の過去未來現在の著無著を行ぜず耳鼻舌身意の過去未來現在の著無著を行ぜず。色の過去未來現在の著無著を行ぜず、聲香味觸法の過去未來現在の著無著を行ぜず。眼識の過去未來現在の 著無著を行ぜず、 耳鼻 舌身意識の過去未來現在の著無著を行ぜず。色の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず、受想行識の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず。眼の過去未來現在の清淨不清淨を行せず、耳鼻舌身意の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず。色の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず、聲香味觸法の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず。眼識の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず、耳鼻舌身意識の過去未來現在の清淨不清淨を行ぜず。色の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず、受想行識の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行せず、眼の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず、耳鼻舌身意の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず。色の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず、聲香味觸法の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず。眼識の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜず、耳鼻舌身意識の過去未來現在の著無著の所緣清淨不清淨を行ぜざるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修行するに都て行及び不行の法を見ざればなり。善勇猛、是の諸の菩薩は都て行ずる所無くして善能く悟入し遍ねく諸行を知りて般若波羅蜜多を修行す。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば速に能く一切智の法を圓滿す。

卷の第六百

第十六般若波羅蜜多分の八

作有り或は修學すること有らず。善勇猛、是の諸の菩薩は遍ねく合離を知りて般若波羅蜜多を修行す。善勇猛、是の如き菩薩は般若波羅蜜多に安住して速に能く一切智の法を圓滿す。

一〇 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色の著無著を行ぜず、受想行識の著無著を行ぜず。眼の著無著を行ぜず、耳鼻舌身意の著無著を行ぜず。色の著無著を行ぜず、聲香味觸法の著無著を行ぜず。眼識の著無著を行ぜず、耳鼻舌身意識の著無著を行ぜず。色の著無著の淸淨を行ぜず、受想行識の著無著の淸淨を行ぜず。眼の著無著の淸淨を行ぜず耳鼻舌身意の著無著の淸淨を行ぜず。色の著無著の淸淨を行ぜず。聲香味觸法の著無著の淸淨を行ぜず。眼識の著無著の淸淨を行ぜず、耳鼻舌身意識の著無著の淸淨を行ぜず。色の著無著の所緣を行ぜず、受想行識の著無著の所緣を行ぜず。眼の著無著の所緣を行ぜず、耳鼻舌身意の著無著の所緣を行ぜず。色の著無著の所緣を行ぜず、聲香味觸法の著無著の所緣を行ぜず。眼識の著無著の所緣を行ぜず、耳鼻舌身意識の著無著の所緣を行ぜず。色の著無著の合離を行ぜず、受想行識の著無著の合離を行ぜず。眼の著無著の合著を行ぜず、耳鼻舌身意の著無著の合離を行ぜず、色の著無著の合離を行ぜず、聲香味觸法の著無著の合離を行ぜず。眼識の著無著の合離を行ぜず、耳鼻舌身意識の著無著の合離を行ぜず。色の著無著淸淨の合離を行ぜず、受想行識の著無著淸淨の合離を行ぜず。眼の著無著淸淨の合離を行ぜず、耳鼻舌身意の著無著淸淨の合離を行ぜず。色の著無著淸淨の合離を行ぜず、聲香味觸法の著無著淸淨の合離を行ぜず。眼識の著無著淸淨の合離を行ぜず、耳鼻舌身意識の著無著淸淨の合離を行ぜず。色の所緣淸淨の合離を行ぜず、受想行識の所緣淸淨の合離を行ぜず。眼の所緣淸淨の合離を行ぜず、耳鼻舌身意の所緣淸淨の合離を行ぜず。色の所緣淸淨の合離を行ぜず、聲香味觸法の所緣淸淨の合離を行ぜず。眼識の所緣淸淨の合離を行ぜず、耳鼻舌身意識の所緣淸淨の合離を行ぜず。何を以ての故に、善勇猛、是の如き一切は皆移轉恃執動搖有りて若しは行じ若しは觀ずればな

【一〇】菩薩は無所行にして能く悟入し、遍ねく諸行を知りて般若を修行し、速に一切智法を圓滿することを明す。

一切法は合離を爲すに非ざるが故に而かも現在前す。善勇猛、合とは謂ゆる常、離とは謂ゆる斷なり。[一九]善勇猛、一切の法性は覺察するに由りて合する有り離るる有らず。善勇猛、一切の法性は合するが爲の故に離るるが故に現前せず。善勇猛、若し諸の法性合するが爲に離るるが爲に現在前せば則ち應に諸法の作者使作者起者等起者受者使受者知者使知者見者使見者合者使合者、離者使離者を得可し。如來も亦た應に諸法を施設すべし、此れは是れ作者使作者乃至離者使離者なりと。善勇猛、諸の法性は合離を爲さずして現在前するを以ての故に、諸法は作者使作者乃至離者使離者の少分も得可く得可からざる有ること無きが故に佛は施設せざるなり。善勇猛、諸法は皆顚倒に由りて起る所なり。諸の顚倒は合する有り離るる有るに非ず。何を以ての故に、善勇猛、諸の顚倒の事は少しくも得可き無ければなり。亦た實の生起性も得可からず。何を以ての故に、善勇猛、顚倒は非實虛妄誑詐空にして所有無ければなり。此の中に於ては少實法も顚倒と名づく可き有るに非ず。善勇猛、夫れ顚倒とは有情を惑亂し有情を施誑し諸の有情類の虛妄の分別の顯現する所にして諸の有情をして妄りに恃執動轉戲論を生ぜしむ。善勇猛、空拳を以て童豎を誑惑するに彼れ無知なるが故に實物有りと謂ふが如く、愚夫異生も亦復た是の如し。虛妄顚倒に誑惑せられ一切法に於て合離性に非ざるを妄りに合離を見て僞れ實有なりと謂ふ。愚癡顚倒は無實の中に於て有實の想を起し解脫す可きこと難し。是の故に一切の愚夫異生は妄りに合離を見て顚倒し繫縛し生死に馳流す。合の得、合の住、合の見、合の執、合に有りと謂ふが故に便ち有に執す。離とは謂ゆる合を除遣して離るることを得るが故なり。善勇猛、若し處として合有らば是の處に離有り。若し合の中に於て得る無く恃む無く執著を起さずんば亦た離を見ず。善勇猛、若し離の中に於て得る有り恃む有り執著を起さば彼れは便ち合有りて生死の苦と未だ別離す可からず。善勇猛、是の諸の菩薩は此の義を觀ずるが故に諸の法性と合するに非ず離るるに非ず、亦た法の若しは合し若しは離れんが爲に而かも所

【一九】一切法に合離無きことを明す。菩薩は能くこの合離を知りて般若を修するも、愚夫異生は妄りに合離を見て顚倒し繫縛し生死に馳流するなり。

縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼識を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を縁ぜず、耳鼻舌身意識を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色と若しは合し若しは離れず亦た受想行識と若しは合し若しは離れず。眼と若しは合し若しは離れず亦た耳鼻舌身意と若しは合し若しは離れず。色と若しは合し若しは離れず亦た聲香味觸法と若しは合し若しは離れず。眼識と若しは合し若しは離れず亦た耳鼻舌身意識と若しは合し若しは離れず。名色と若しは合し若しは離れず。顚倒見趣諸蓋及び諸の愛行と若しは合し若しは離れず。欲色無色界と若しは合し若しは離れず。貪瞋癡と若しは合し若しは離れず。我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者の有無有想と若しは合し若しは離れず。斷常と若しは合し若しは離れず。界處と若しは合し若しは離れず。有情界法界と若しは合し若しは離れず。地水火風空識界と若しは合し若しは離れず。縁起と若しは合し若しは離れず。五妙欲と若しは合し若しは離れず。雜染清淨と若しは合し若しは離れず。布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂妙慧惡慧と若しは合し若しは離れず。念住正斷神足根力覺支道支と若しは合し若しは離れず。斷顚倒等と若しは合し若しは離れず。靜慮解脫等持等至と若しは合し若しは離れず。苦集滅道と若しは合し若しは離れず。止觀と若しは合し若しは離れず。明及び解脫と若しは合し若しは離れず。解脫智見と若しは合し若しは離れず。無量神通と若しは合し若しは離れず。異生聲聞獨覺菩薩佛地と若しは合し若しは離れず。異生聲聞獨覺菩薩佛の法と若しは合し若しは離れず。盡智無生智無造作智無著智と若しは合し若しは離れず。生死涅槃と若しは合し若しは離れず。佛の智力無畏等と若しは合し若しは離れず。相好圓滿と若しは合し若しは離れず。莊嚴佛土と若しは合し若しは離れず。聲聞圓滿と若しは合し若しは離れず。獨覺圓滿と若しは合し若しは離れず。菩薩圓滿と若しは合し若しは離れず。何を以ての故に、善勇猛、一切法は合離無きを以ての故なり。善勇猛、

ず、受想行識の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、聲香味觸法の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼識の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の自性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず、受想行識の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず、聲香味觸法の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼識の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性の清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、受想行識の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、聲香味觸法の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼識の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の本性を縁ずる清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、受想行識の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。色の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、聲香味觸法の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼識の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。色を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、受想行識を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。眼を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず。色を縁ずる過去未來現在の清淨不清淨の合離相を行ぜず、聲香味觸法を

を伺求するも亦た得ること能はず、衆の魔の事業を皆能く覺知し、一切の惡魔も引奪すること能はず、魔力に隨はずして自在に而かも行ぜん。善勇猛、此の因緣に由りて是の諸の菩薩は惡魔の眷屬も擾亂すること能はさるなり。

一八 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色の合相を行ぜず色の離相を行ぜず、受想行識の合相を行ぜず受想行識の離相を行ぜず。眼の合相を行ぜず眼の離相を行ぜず、耳鼻舌身意の合相を行ぜず耳鼻舌身意の離相を行ぜず、色の合相を行ぜず色の離相を行ぜず。聲香味觸法の合相を行ぜず聲香味觸法の離相を行ぜず。眼識の合相を行ぜず眼識の離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の合相を行ぜず耳鼻舌身意識の離相を行ぜず。色相の合離相を行ぜず、受想行識相の合離相を行ぜず。眼相の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意相の合離相を行ぜず。色相の合離相を行ぜず、聲香味觸法相の合離相を行ぜず。眼識相の合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識相の合離相を行ぜず。色の清淨不清淨相を行ぜず、受想行識の清淨不清淨相を行ぜず。眼の清淨不清淨相を行ぜず、耳鼻舌身意の清淨不清淨相を行ぜず。色の清淨不清淨相を行ぜず、聲香味觸法の清淨不清淨相を行ぜず。眼識の清淨不清淨相を行ぜず、耳鼻舌身意識の清淨不清淨相を行ぜず。色を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず、受想行識を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず。眼を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず、耳鼻舌身意を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず。色を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず。聲香味觸法を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず。眼識を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず、耳鼻舌身意識を緣ずる清淨不清淨相を行ぜず。色の清淨不清淨を起す合離相を行せず、受想行識の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず。眼の淸淨不清淨を起す合離相を行ぜず、耳鼻舌身意の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず。色の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず、聲香味觸法の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず。眼識の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず、耳鼻舌身意識の清淨不清淨を起す合離相を行ぜず。色の自性を緣ずる清淨不清淨の合離相を行ぜ

【一八】般若修行の菩薩は諸法の合離相を行ぜざることを明す。一切法合離無ければなり。離合相とは斷常二見の相なり。

爲らず、諸の依止に於ても亦た滯礙無く一切の依止の淨法を證得せん。善勇猛、此の諸の菩薩は一切法に依り清淨微妙の智見に依止して般若波羅蜜多を修行す。此れに由りて惡魔便りを得ること能はず、惡魔の軍衆降伏すること能はず而かも能く一切の魔軍を降伏す。

[一六] 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩未だ無上正等覺の心を發さずんば先に應に無量無數の善根の資糧を積集すべし。多く佛を供養し多く善友に事へ、多くの佛所に於て法要を請問し、[一七] 弘誓願を發して意樂具足し、諸の有情に於て樂うて布施を行じ、清淨戒に於て尊重護持し、忍辱柔和悉く皆具足し、勇猛精進して諸の懈怠を離れ、鮮白の靜慮を尊重修行し、清淨の慧に於て恭敬して修學せん。是の諸の菩薩の既に無上正等覺の心を發せるは復た應に精勤して般若波羅蜜多を修學し、智慧力を以て諸の魔衆を伏して恒に是の念を作すべし、惡魔に我が短を伺求せられて擾亂の事を作すこと勿らんと。斯の力に由るが故に諸の惡魔をして便りを得て修學する所を障ふこと能はざらしめ亦た魔衆をして是の心をも起らざらしめよ、我れ當に此の菩薩を伺求して便ち擾亂の事を爲して修する所を障礙すべしと。設ひ是の心を起すも卽ち、我れ斯の事を作さば必ず大苦に遭はんと自覺せしめよ。斯れに由りて大恐怖心を發起せん、我れ今時に身命を喪失する勿からんが故に應に此の擾亂の心を息むべしと。是に於て魔軍の惡心隱沒せん。善勇猛、此の因緣に由りて惡魔の軍衆、菩薩の學する所の甚深般若波羅蜜多を障礙すること能はず。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を說くを聞きて純淨の欲增上の意樂を起し、深心に功德を尊重稱讃して大師の想を起し、六種波羅蜜多相應の法教を說くを聞きて亦た猶豫疑惑を發起せず、甚深の法を聞きて心迷謬せず亦復た猶豫疑惑を起さず、終に感匱の法業を造作せず亦た感匱の法心を發起せず、無量無邊の有情に甚深般若波羅蜜多を信受し修學するを勸導し無量無邊の有情を讃勵して亦た六種波羅蜜多を信受し修學せしめば是の諸の菩薩は先の意樂、一切の意樂を淨めて皆雜染無く、諸の惡魔の軍も障礙すること能はず其の便り

【一六】 惡魔菩薩所行の般若波羅蜜多を障礙する能はざることを續說す。
【一七】 弘誓願。無邊の度斷知證を滿足せんとするなり。

子并びに餘の一切の無色に依止し所依に繋屬し所依の處に依る諸仙外道の如くならん。善勇猛、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ、深般若波羅蜜多を修し、深般若波羅蜜多を會せば是の諸の菩薩は一切處に於て依止する所無く諸の所作有るも亦た依る所無けん。善勇猛、若し諸の菩薩勇猛精進して般若波羅蜜多を修行し隨順し安住せば爾の時菩薩は色に依止せず亦た受想行識にも依止せず、眼に依止せず亦た耳鼻舌身意にも依止せず、色に依止せず亦た聲香味觸法にも依止せず、眼識に依止せず亦た耳鼻舌身意識にも依止せず、名色に依止せず、顚倒見趣諸蓋及び諸の愛行に依止せず、緣起に依止せず、欲色無色界に依止せず、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者及び彼の諸想に依止せず、地水火風空識界に依止せず、有情界法界に依止せず、初靜慮乃至非想非非想處に依止せず、有愛に依止せず、無有愛に依止せず、斷常に依止せず、有性に依止せず、無性に依止せず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧に依止せず、念住正斷神足根力覺支道支に依止せず、斷顚倒等に依止せず、靜慮解脫等持等至に依止せず、苦集滅道に依止せず、盡智無生智無造作智に依止せず、無著智見に依止せず、明及び解脫に依止せず、解脫智見に依止せず、異生聲聞獨覺菩薩佛地に依止せず、異生聲聞獨覺菩薩佛の法に依止せず、涅槃に依止せず、過去未來現在の智見に依止せず、三世平等性に依止せず、佛の智力無畏等に依止せず、一切智智に依止せず、相好圓滿に依止せず、佛土圓滿に依止せず、聲聞衆圓滿に依止せず、菩薩衆圓滿に依止せず、一切法に依止せず、移轉に依止せず、動搖に依止せず、戲論に依止せざらん、依止すること無きに由りて一切を除遣し亦た無依止の道に執著せず、無依止に於て亦た恃執せず、亦復た此れは是れ依止なるを得ず、亦復た此の依止に在るを得ず、亦復た此の依止に屬するを得ず、亦復た此の依止に依るを得ず、依止する所に於ても亦た恃執無けん。是の如く菩薩は諸の依止に於て恃む無く得る無く執する無く取る無く說く無く欣ぶ無く著する無くして而かも住し、一切の依止の染する所と

是の如く菩薩般若波羅蜜多を修行して是の如き功德智慧大威神力を成就せば、假使ひ三千大千世界の諸の有情類皆變じて魔と爲り一一皆爾所の魔衆を將ひ擾亂せんが爲の故に菩薩の所に往きて其の神力を盡くすも亦た修する所の般若波羅蜜多を障ふること能はざらん。何を以ての故に、善勇猛、爾の時菩薩は是の如き甚深般若の刀劍の力を成就するが故に、亦復た思議す可からざる測量す可からざる及び無等等の般若力を成就するが故に一切の暴惡の魔軍の降伏する所と爲らざればなり。善勇猛、夫の大刀とは謂ゆる般若刀なり、夫の大劍とは謂ゆる般若劍なり、夫の大力とは謂ゆる般若力なり。是の故に般若波羅蜜多は諸の惡魔の所行の境地に非ず。復た次に善勇猛、諸[一三]の外仙有りて四靜慮四無色定を得、欲の魔境を超えて諸の梵天の四無色地に生ぜんに彼れは菩薩の常に成就する所の世間の妙慧に於てすら尙ほ行境に非ず、況んや實の般若波羅蜜多をや。何に況んや惡魔能く此の境を行ぜんをや。彼れは色無色定を獲得する外仙の妙慧に於てすら尙ほ行境に非ず、況んや般若波羅蜜多に於てをや。善勇猛、若し時に菩薩般若波羅蜜多を成就せば爾の時菩薩を名づけて大威力を成就する者と爲す。若し般若の威力を成就する有らば卽ち利慧の刀を成就せる者と名づく。若し般若の利刀を成就する有らば卽ち利慧の劍を成就せる者と名づく。諸の惡魔の軍も降伏すること能はず而かも能く一切の魔軍を降伏せん。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多の利慧の刀劍を成就して大勢力を具せば是の諸の菩薩は一切處に於て依止する所無く、諸の所作有るも亦た依る所無けん。何を以ての故に、善勇猛、若し所依有らば則ち移轉有り、若し移轉有らば則ち動搖有り、若し動搖有らば則ち戲論有ればなり。善勇猛、若し諸の有情依る有り移轉動搖戲論有らば是の諸の有情は魔力に隨て行じ未だ魔境を脫せざるなり。善勇猛、若し諸の有情復た乃至上有頂に生ずと雖も依止する所有らば所依に繫屬し所依の處に依りて彼れ必ず還つて魔の境界の中に墮し未だ惡魔の所有る羂網を脫せざらん、惡魔の索䌙に常に隨逐せらるゝこと[一四]猛憙子及び[一五]阿邏茶迦邏摩

【一三】外仙。外道なり。佛教外に道を立つるもの。

【一四】猛憙(Udra rāmaputra)。は非想非非想處定成就し、之を釋尊に授けし仙人なり。

【一五】阿邏等（Āraḍakālāma putra)。所有處定成就し之を釋尊に授けし仙人なり。

を出でしむべし、今此の菩薩は當に有情をして我れ等の界を脫せしむべし、今此の菩薩は當に有情をして我が境に住せざらしむべし、今此の菩薩は當に有情をして我が界を斷滅せしむべし、今此の菩薩は當に有情をして我が羂網を毀らしむべし、今此の菩薩は當に有情を拔いて其れをして永く諸欲の游泥より出でしむべし、今此の菩薩は當に有情をして諸の[二三]見網を脫せしむべし、今此の菩薩は當に有情をして盡の邪路より出でしむべし、今此の菩薩は有情を安立して正道に住せしめ、今此の菩薩は諸の有情を引いて其れをして諸見の稠林より出でしむと。善勇猛、彼の諸の惡魔は此の菩薩の是の如き等の法の勝義利有るを見て愁憂苦惱すること箭の心に入れるが如くならん。譬へば人有りて大寶藏を失ふに廣大の愁憂苦惱を成就するが如く、是の如く惡魔は深心して悔恨して毒箭に中れるが如く、愁憂苦惱して晝夜に驚惶し本座を樂まざらん。復た次に善勇猛、若し時に菩薩深般若波羅蜜多を行じ、深般若波羅蜜多を修し、深般若波羅蜜多を會せば時に諸の惡魔共に一處に集り方便を思惟して菩薩を壞せんと欲し互に相謂て言はん、我れ等今當に何の計を設け何の事業を作して此の菩薩の修する所の正行を壞すべきと。時に惡魔衆心に疑惑を懷き愁憂して樂まざること毒箭に中れるが如く、共に相勸勵して菩薩の所に往き其の短を伺求するに怖畏の事を現ず。此の菩薩般若波羅蜜多を修行する威神の力に由るが故に諸の惡魔衆其の神力を盡くすも尙ほ菩薩の毛端をすら動かすこと能はず、況んや菩薩の身心をして變異せしめんや。時に諸の惡魔、菩薩の驚恐毛竪等の事を遠離せるを覺知し更らに方便を設けて種種に魅惑するに心神倶に劣にして怖畏を懷くが故に諸の魅惑の事皆成ずること能はず時に惡魔王便ち是の念を作す、我れすら尙ほ此の菩薩を壞すること能はず、況んや我が眷屬或は餘の能く壞せんやと。念じ已て驚怖し力盡き計窮まり還て自宮に歸り愁憂して住せん。是の如く菩薩般若波羅蜜多を修行せば大威力を具し、惡魔の眷屬すら尙ほ彈指の頃の如きも心に迷惑有らしむること能はず、何に況んや能く餘の障礙の事を爲さんや。善勇猛、

【二三】見網。種々の邪見身を纏縛して免脫せしめざるを羅網に喩へていふ。

妙法を施すに祕悋する所無く、平等の道を以て諸の道路を淨め、誓つて邪道を離れて修すべき所を修し、淸淨の法を以て熏ずべき所に熏じ、淸淨の慧を以て淨むべき所を淨め、器度深廣なること猶ほ大海の如く、湛然として動ぜず測量す可きこと難く、法海の無邊なること諸の數量に過ぎん。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば此れ及び餘の無邊の功德を成ぜん。是の如き功德は其の岸を測ること難し。佛世尊の能く知る者無きをば除く。

一〇 復た次に善勇猛、菩薩是の如く般若波羅蜜多を修行せば妙色減ずる無く財位減ずる無く、眷屬減ずる無く種類減ずる無く、家族滅ずる無く國土滅ずる無く、邊地に生ぜず無暇に遇はず、穢惡の有情と共居せず亦た不淨の事業に隣近せず、自心退する無く智慧減ずる無く、他より聽受せる種種の法門は皆能く平等の法性に會入し、佛種の一切智智を紹隆して常に興盛せしめて斷絕有ること無く、諸の佛法に於て已に光明を得て已に一切智智に隣近することを得ん。若し惡魔其の所に來至して爲に惱亂せんと欲する有らば則ち彼の魔及び諸の眷屬をして皆灰燼と成り辯才頓に喪ひ羂網倶に絕えしめん。假使ひ一一 倶胝の魔及び軍衆倶に來りて嬈惱するも心動搖せさらん。是に於て惡魔及び諸の軍衆驚怖し退散して是の念言を作さん、今此の菩薩は已に我が境を超ゆ、彼れは我が境に於て復た當に行ずべからず、復た當に住すべからず、復た耽著せず、餘の有情をして我が境界に於て皆出離することを得せしめ肅然として解脫せりと。時に諸の惡魔是の念を作し已て愁憂悲歎して共に相謂て言はく、今此の菩薩は我れ等が輩眷屬朋黨を損して勢力無からしむと。言ひ已て各憂苦悔恨を生ず。復た次に善勇猛、若し時に菩薩深般若波羅蜜多を行じ、深般若波羅蜜多を修し、深般若波羅蜜多を會せば時に魔の宮殿皆威光を失ひ處處に漸く煙焰の相を生じ、惡魔の驚怖し愁憂苦惱すること心を刀傷せるが如く毒箭に中れるが如く、咸共に傷歎して是の如き言を作さん、今此の菩薩は當に有情をして我れ等の徵發する所を受けざらしむべし、今此の菩薩は當に有情をして我れ等の境

【一〇】菩薩は一切法に依り、淨妙の知見に依止して般若を修行すれば、惡魔等其の便りを得ずして降伏さるゝを明す。

【一一】倶胝（Koti）。數の名。千萬或は百億をいふ。

中に於て都て斷ずる所無きを謂ふ。何を以ての故に、善勇猛、所有る虚妄の分別異分別力顚倒を發起すること無きに由りて、彼れ寂靜なるが故に、顚倒も亦た無し。顚倒無きが故に都て斷ずる所無し。[八]善勇猛、斷ずる所無しとは當に知るべし苦の斷ずるを顯示する增語なりと。謂ゆる此の中に於て少苦も斷ずる無きが故に苦斷ずと名づくるなり。若し苦の自性少しくも眞實有らば斷ずる所有る可し。然かも苦の自性は少しくも眞實無きが故に斷ずる所無し。但だ苦無きを見て說いて苦斷ずと名づくるのみ、謂ゆる遍ねく苦の都て自性の少分も得可き無しと知るが故に苦斷ずと名づくるなり。諸の苦に於て都て分別無く異分別無き有らば苦寂靜と名づく、卽ち是れ苦をして生起せさらしむる義なり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く見ば則ち諸法に於て分別を起さず異分別無けん。善勇猛、是れを菩薩遍ねく分別異分別の性を知りて般若波羅蜜多を修行すと名づく。[九]善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行じ能く是の如く住し般若波羅蜜多を修行して速に圓滿することを得ば一切の惡魔障礙すること能はず、諸の魔の軍衆の起す所の事業皆能く覺知し、諸の爲す所有るも魔事に隨はず自在に而かも轉じ、諸の惡魔をして自然に退散せしめ、彼の軍衆を摧き其れをして漸少せしめ、身意泰然として諸の怖畏を離れ、惡魔の軍衆も擾惱すること能はざらん、一切の惡趣に往く因を止息し世間の衆の邪逕路を斷塞し、諸の黑闇を離れて瀑流を越渡し、一切法に於て清淨眼を得、有情類の與に大光明と作り、佛種を紹隆して斷絕せざらしめ、眞道の平等性を證得し、有情を哀愍して淨法眼を起し、精進を具足して諸の懈怠を離れ、安忍を獲得して忿恚の心を遠ざけ、勝靜慮に入りて依止する所無く、眞般若を得て通達慧を成じ、惡作を遣除して蓋纒を遠離し、惡魔の羂を出でて諸の愛網を斷じ、正念に安住して忘失する所無く、淨尸羅を得て淨彼岸に至り、功德に安住して諸の過患を離れ、定慧力を得て動搖す可からず、一切の他論摧伏すること能はず、諸法淨を得て永く退失すること無く、諸法を宣說して畏るる所無きを得、諸の大衆に入るに心怯弱無く、諸の

【八】無所斷の義。

【九】前說の菩薩は諸魔の障礙する所と爲らず、能く一切法に於て清淨眼を得て有情のために大光明となる。

諦實虚妄に於て分別を起さず異分別無く、地水火風空識界に於て分別を起さず異分別無く、有繫離繫に於て分別を起さず異分別無く、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者及び彼の諸想に於て分別を起さず異分別無く、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧に於て分別を起さず異分別無く、念住正斷神足根力覺支道支に於て分別を起さず異分別無く、顚倒等の斷に於て分別を起さず異分別無く、靜慮解脫等持等至に於て分別を起さず異分別無く、苦集滅道に於て分別を起さず異分別無く、慈悲喜捨に於て分別を起さず異分別無く、盡智無生智無造作智に於て分別を起さず異分別無く、諸の異生聲聞獨覺菩薩佛地に於て分別を起さず異分別無く、諸の異生聲聞獨覺菩薩佛の法に於て分別を起さず異分別無く、神通智見に於て分別を起さず異分別無く、過去未來現在の智見に於て分別を起さず異分別無く、無著智見に於て分別を起さず異分別無く、明解脫に於て分別を起さず異分別無く、解脫及び解脫智見に於て分別を起さず異分別無く、諸佛の智力無畏等に於て分別を起さず異分別無く、相好清淨に於て分別を起さず異分別無く、佛土淸淨に於て分別を起さず異分別無く、聲聞圓滿に於て分別を起さず異分別無く、菩薩圓滿に於て分別を起さず異分別無けん。何を以ての故に、善勇猛、若し分別有らば則ち異分別あり、若し是の處に於て分別有ること無くんば則ち是の處に於て異分別無ければなり。愚夫異生は一切皆是れ分別の所起なり。彼の想も皆異分別より起る。是の故に菩薩は分別を起さず異分別無し。[六]善勇猛、分別と言ふは是れ[七]第一邊、異分別とは是れ第二邊なり。若し是の處に於て分別を起さず異分別無くんば則ち是の處に於て二邊を遠離し亦た中有ること無けん。善勇猛、若し中有りと謂はば亦た是れ分別なり。分別の中とする者も亦た邊有るを謂ふ。若し是の處に於て分別有らば則ち是の處に於て異分別有らん。此の因緣に由りて分別異分別を斷ずるの義無し。若し是の處に於て分別無くんば則ち是の處に於て異分別無けん。此の因緣に由りて分別異分別を斷ずるの義有り。善勇猛、分別を斷ずとは此の

【六】分別異分別の義。
【七】初轉法輪には二邊を苦行と樂行とし二邊を離れて中に處すとす。その邊中に就て增上部にも諸義を擧げ尼沸娑雜阿含にも各六義を列ぬ。後の中邊分別論等となる。般若は一切の二論分別を遮し、不二なれば中も亦空なりとするに在り。

即ち魔羂有り及び魔縛有らん。若し所緣有らば卽ち苦の逼る及び安樂を求むる有らん。善勇猛、菩薩は是の如き等の種種の過患有るを觀見して諸法を緣ぜず。所緣無きが故に一切法に於て則ち取る所無し。取る所無きが故に一切法に於て執して而かも住する無し。是の如く菩薩は所緣無しと雖も而かも境界に於て定めて自在を得。境界に於て定めて自在を得と雖も而かも恃執無く亦た住する所無し。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば一切法に於て能く[三]攀緣せず、執著する所無く諍論する所無く一切法に於て染して而かも住する無し。善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく一切の所緣の境法に於て皆繫を離るることを得て般若波羅蜜多を修行す。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行じ能く是の如く住して般若波羅蜜多を修行して速に圓滿することを得ば一切の惡魔障礙すること能はず、魔軍の眷屬攝持すること能はず、其の短を求めんと欲するも終に得ること能はず、亦復た方便して擾亂すること能はず而かも能く魔及び魔軍を降伏して普ねく能く一切の魔事を覺知して魔事に隨はず自在に而かも行ぜん。諸の魔の宮殿を震動焚燒し亦た能く一切の外道をも降伏して外道の降伏する所と爲らず、亦た能く一切の他論をも摧滅して他論の摧滅する所と爲らざらん。

[四]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色に於て[五]分別に住せず異分別無く受想行識に於ても亦た分別に住せず異分別無し。眼に於て分別に住せず異分別無く耳鼻舌身意に於ても亦た分別に住せず異分別無し、色に於て分別に住せず異分別無く聲香味觸法に於ても亦た分別に住せず異分別無し。眼識に於て分別に住せず異分別無く耳鼻舌身意識に於ても亦た分別に住せず異分別無し。此の因緣に由りて是の諸の菩薩は諸の名色に於て分別を起さず異分別無く、諸の染淨に於て分別を起さず異分別無く、諸の緣起に於て分別を起さず異分別無く、諸の顚倒見蓋愛行に於て分別を起さず異分別無く、諸の斷常に於て分別を起さず異分別無く、欲色無色界に於て分別を起さず異分別無く、有情界法界に於て分別を起さず異分別無く、貪瞋癡に於て分別を起さず異分別無く、

【三】攀緣。心が外境のために轉ぜられて、平靜を得る能はざることを、猿が木の枝を飛び廻りて休止すること無きに諭ふ。

【四】上說の菩薩は遍ねく分別異分別の性を知りて般若波羅蜜多を修行することを明す。

【五】分別は假立するもこれに住せずこれを執して異分別することなし。

法に安住すと雖も而かも是の如く現在を行ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行じ能く是の如く住して般若波羅蜜多を修行せば速に圓滿することを得ん。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば一切の惡魔便りを得ること能はず。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば普ねく能く一切の魔事を覺知して諸の魔事に能く引奪せらるるに非ず。[二]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色を緣ぜず亦た受想行識をも緣ぜず、眼を緣ぜず亦た耳鼻舌身意をも緣ぜず、色を緣ぜず亦た聲香味觸法をも緣ぜず、眼識を緣ぜず亦た耳鼻舌身意識をも緣ぜず、名色を緣ぜず、染淨を緣ぜず、顚倒見蓋愛行を緣ぜず、貪瞋癡を緣ぜず、我有情等を緣ぜず、斷常を緣ぜず、邊無邊を緣ぜず、欲色無色界を緣ぜず、緣起を緣ぜず、地水火風空識界を緣ぜず、有情界法界を緣ぜず、諦實虛妄を緣ぜず、有繫離繫を緣ぜず、貪瞋癡斷を緣ぜず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧を緣ぜず、念住正斷神足根力覺支道支を緣ぜず、顚倒等の斷を緣ぜず、靜慮解脫等持等至を緣ぜず、慈悲喜捨を緣ぜず、苦集滅道を緣ぜず、盡智無生智無造作智を緣ぜず、無著智を緣ぜず、異生聲聞獨覺菩薩佛地を緣ぜず、異生聲聞獨覺菩薩佛の法を緣ぜず、神通智見を緣ぜず、解脫を緣ぜず、解脫智見を緣ぜず、涅槃を緣ぜず、過去未來現在の智見を緣ぜず、佛の智力無畏等を緣ぜず、佛土の淸淨を緣ぜず、相好の淸淨を緣ぜず、聲聞の圓滿を緣ぜず、獨覺の圓滿を緣ぜず、菩薩の圓滿を緣ぜず。何を以ての故に、善勇猛、一切法は所緣に非ざるを以ての故に、一切法は能緣に非ざるを以ての故に、一切法は所取有るに非ざるが故に、而かも彼れに於て所緣有りと說く可けんや。善勇猛、若し所緣有らば卽ち動作計著執取有り。若し執取有らば卽ち憂苦有りて猛利の愁箭悲惱の歎生ぜん。善勇猛、若し所緣有らば卽ち繫縛有りて出離の道無けん。斯れに由りて一切の憂苦增長せん。善勇猛、若し所緣有らば卽ち恃執動轉戲論有らん。若し所緣有らば卽ち種種の鬪諍違諍有らん。若し所緣有らば卽ち種種の無明癡闇有らん。若し所緣有らば卽ち恐怖有らん。若し所緣有らば

【二】菩薩は能く一切所緣の境法に於て、繫を離るゝことを得て般若を修行することを明す。

學せず亦た耳鼻舌身意に於ても若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色に於て若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず亦た聲香味觸法に於ても若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼識に於て若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず亦た耳鼻舌身意識に於ても若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色の若しは過去行若しは未來行若しは現在行を緣ぜず亦た受想行識の若しは過去行若しは未來行若しは現在行をも緣ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼の若しは過去行若しは未來行若しは現在行を緣ぜず亦た耳鼻舌身意の若しは過去行若しは未來行若しは現在行をも緣ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色の若しは過去行若しは未來行若しは現在行を緣ぜず亦た聲香味觸法の若しは過去行若しは未來行若しは現在行をも緣ぜず、善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼識の若しは過去行若しは未來行若しは現在行を緣ぜず亦た耳鼻舌身意識の若しは過去行若しは未來行若しは現在行をも緣ぜず。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば空寂靜無我の行相を以て過去を觀察すと雖も而かも空寂靜無我を以て過去を行ぜず、空寂靜無我の行相を以て未來を觀察すと雖も而かも空寂靜無我を以て未來を行ぜず、空寂靜無我の行相を以て現在を觀察すと雖も而かも空寂靜無我を以て現在を行ぜず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば過去の空にして我無く我所無く常無く恒無く久無きを觀じて不變易の法に安住すと雖も而かも是の如く過去を行ぜず、未來の空にして我無く我所無く常無く恒無く久無きを觀じて不變易の法に安住すと雖も而かも是の如く未來を行ぜず、現在の空にして我無く我所無く常無く恒無く久無きを觀じて不變易の

の故に學せず耳鼻舌身意に趣入安住せんが爲の故に學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色に於て學せず色を超越せんが爲の故に學せず、聲香味觸法に於て學せず聲香味觸法を超越せんが爲の故に學せず、色生に於て學せず色滅に於て學せず、聲香味觸法生に於て學せず聲香味觸法滅に於て學せず、色を調伏せんが爲の故に學せず色を調伏せざらんが爲の故に學ぜず、聲香味觸法を調伏せんが爲の故に學せず聲香味觸法を調伏せざらんが爲の故に學せず、色を攝伏移轉せんが爲の故に學せず色に趣入安住せんが爲の故に學せず、聲香味觸法を攝伏移轉せんが爲の故に學せず聲香味觸法に趣入安住せんが爲の故に學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼識に於て學せず眼識を超越せんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意識に於て學せず耳鼻舌身意識を超越せんが爲の故に學せず、眼識生に於て學せず眼識滅に於て學せず、耳鼻舌身意識生に於て學せず耳鼻舌身意識滅に於て學せず、眼識を調伏せんが爲の故に學せず眼識を調伏せざらんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意識を調伏せんが爲の故に學せず耳鼻舌身意識を調伏せざらんが爲の故に學せず、眼識を攝伏移轉せんが爲の故に學せず眼識に趣入安住せんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意識を攝伏移轉せんが爲の故に學せず耳鼻舌身意識に趣入安住せんが爲の故に學せず。

卷の第五百九十九

第十六般若波羅蜜多分の七

[一]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色に於て若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず亦た受想行識に於ても若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼に於て若しは常若しは無常若しは樂若しは苦若しは空若しは不空若しは我若しは無我を

【一】前說の續き。

無きを以ての故に、一切法は皆聚沫の如く撮摩す可からざるを以ての故に、一切法は皆浮泡の如く起り已て速に滅するを以ての故に、一切法は皆陽焰の如く顚倒の起す所なるを以ての故に、一切法は皆芭蕉の中の如く堅實無きを以ての故に、一切法は皆水月の如く執取す可からざるを以ての故に、一切法は皆虹蜺の如く虛妄の分別なるを以ての故に、一切法は皆作用無く發起すること能はざるを以ての故に、一切法は皆空拳の如く實の性相無きを以ての故なり。善勇猛、諸の菩薩は是の如く一切法を觀察し已て一切法に於て取る無く執する無く住する無く著する無し。善勇猛、諸の菩薩は一切法に於て深く深信せず取著を起さず固執を生ぜず貪愛する所無くして而かも般若波羅蜜多を行ず。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行じ能く是の如く住して般若波羅蜜多を修行せば速に圓滿することを得ん。

一九 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は色に於て學せず色を超越せんが爲の故に學せず、受想行識に於て學せず受想行識を超越せんが爲の故に學せず、色生に於て學せず色滅に於て學せず、受想行識生に於て學せず受想行識滅に於て學せず、色を調伏せんが爲の故に學せず色を調伏せざらんが爲の故に學せず、受想行識を調伏せんが爲の故に學せず受想行識を調伏せざらんが爲の故に學せず、色を攝伏移轉せんが爲の故に學せず色に趣入安住せんが爲の故に學せず、受想行識を攝伏移轉せんが爲の故に學せず受想行識に趣入安住せんが爲の故に學せず。善勇猛、若し諸の菩薩是の如く學する時は眼に於て學せず眼を超越せんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意に於て學せず耳鼻舌身意を超越せんが爲の故に學せず、眼生に於て學せず眼滅に於て學せず、耳鼻舌身意生に於て學せず耳鼻舌身意滅に於て學せず、眼を調伏せんが爲の故に學せず眼を調伏せざらんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意を調伏せんが爲の故に學せず耳鼻舌身意を調伏せざらんが爲の故に學せず、眼を攝伏移轉せんが爲の故に學せず眼に趣入安住せんが爲の故に學せず、耳鼻舌身意を攝伏移轉せんが爲

【一九】上述の菩薩は能く行住して般若を修行し、速に圓滿することを續說す。

諸色に於て取る無く執する無く受想行識に於ても亦た取る無く執する無く、眼に於て取る無く執する無く耳鼻舌身意に於ても亦た取る無く執する無く、色に於て取る無く執する無く聲香味觸法に於ても亦た取る無く執する無く、眼識に於て取る無く執する無く耳鼻舌身意識に於ても亦た取る無く執する無く、名色に於て取る無く執する無く、染淨に於て取る無く執する無く、緣起に於て取る無く執する無く、顚倒の見趣諸蓋愛行に於て取る無く執する無く、貪瞋癡に於て取る無く執する無く、欲色無色界に於て取る無く執する無く、地水火風空識界に於て取る無く執する無く、有情界法界に於て取る無く執する無く、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に於て取る無く執する無く、斷常の見に於て取る無く執する無く、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧に於て取る無く執する無く、念住正斷神足根力覺支道支に於て取る無く執する無く、靜慮解脫等持等至に於て取る無く、執する無く、苦集滅道に於て取る無く執する無く、無量神通に於て取る無く執する無く、盡智無生智無造作智に於て取る無く執する無く、異生聲聞獨覺菩薩佛地に於て取る無く執する無く、異生聲聞獨覺菩薩佛の法に於て取る無く執する無く、[八]奢摩他毘鉢舍那に於て取る無く執する無く、涅槃界に於て取る無く執する無く、過去未來現在の智見に於て取る無く執する無く、無著地に於し取る無く執する無く、佛の智力無畏等無邊の佛法に於て取る無く執する無く、斷顚倒見趣蓋等に於て取る無く執する無し。何を以ての故に、善勇猛、一切法は隨取す可からず執受す可からざるを以て能く隨取する無く能く執受する無ければなり。何を以ての故に、善勇猛、少法も應に執受す可き有ること無く亦た少法も能く執受有ること無ければなり。所以は何ん、若しは能執受若しは所執受俱に得可からざればなり。何を以ての故に、善勇猛、一切法は皆堅實ならざること幻事の如くなるを以ての故に、一切法は皆自在ならず堅實の性得可からざるを以ての故に、一切法は皆光影の如く取る可からざるを以ての故に、一切法は皆悉く虛僞にして自性

【八】奢摩他（Śamatha）。止息、寂靜、能滅など譯す。毘鉢舍那（Vipaśyanā）觀、觀案と譯す。

ず亦た遣す可からず。顚倒の起す所は實有に非ざるが故に既に修す可からず亦た遣す可からざるなり。何を以ての故に、善勇猛、一切法は無性を性と爲すを以て自性を遠離せば則ち實物に非ず。實物に非ざるが故に修する無く遣する無し。善勇猛、若し時に菩薩摩訶薩衆諸法の中に於て如實の見に住して般若波羅蜜多を修行し一切法に於て修する無く遣する無くんば般若波羅蜜多を修すと名づく。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行じ能く是の如く住して般若波羅蜜多を修行せば速に圓滿することを得ん。

[一六]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩摩訶薩衆般若波羅蜜多を修行せば色相應相の心を起さず亦た受想行識相應相の心をも起さず、眼相應相の心を起さず亦た耳鼻舌身意相應相の心をも起さず、眼識相應相の心を起さず亦た耳鼻舌身意識相應相の心をも起さず、色相應相の心を起さず亦た聲香味觸法相應相の心をも起さず、栽蘖倶行の心を起さず、瞋恚倶行の心を起さず、慳貪倶行の心を起さず、煩惱倶行の心を起さず、忿恚倶行の心を起さず、懈怠倶行の心を起さず、散亂倶行の心を起さず、惡慧倶行の心を起さず、欲結倶行の心を起さず、緣色執倶行の心を起さず、無色執倶行の心を起さず、貪欲倶行の心を起さず、離間倶行の心を起さず、邪見倶行の心を起さず、執著財位倶行の心を起さず、執著富貴倶行の心を起さず、執著大財勝族倶行の心を起さず、執著生天倶行の心を起さず、執著欲界倶行の心を起さず、執著色無色界倶行の心を起さず、聲聞地の心を起さず、獨覺地の心を起さず、執著諸菩薩行倶行の心を起さず、乃至執涅槃見倶行の心を起さず、是の諸の菩薩摩訶薩衆は是の如き清淨の心を成就するが故に諸の有情に於て遍滿せる慈悲喜捨を起すと雖も而かも能く諸の有情想を遣除し、有情想に於て執して而かも住する無く四梵住に於ても亦た執著無く妙慧方便善巧を成就す。彼れ是の如き法を成就するに由るが故に能く執著無く般若波羅蜜多を修行して速に圓滿することを得。[一七]是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修行して速に圓滿することを得るが故に便ち

【一六】菩薩能く淸淨心を成就するを以て執著無く速に般若を圓滿す。

【一七】上說の菩薩は一切法に於て無取、無執、無住、無著にして而も能く般若を修行して速かに圓滿することを得。

て修遣す可からず耳鼻舌身意識も亦た無自性にして修遣す可からず、名色は無自性にして修遣す可からず、染淨も無自性にして修遣す可からず、緣起は無自性にして修遣す可からず、顚倒の見趣諸蓋愛行は無自性にして修遣す可からず、貪瞋癡は無自性にして修遣す可からず、欲色無色界は無自性にして修遣す可からず、地水火風空識界は無自性にして修遣す可からず、有情界法界は無自性にして修遣す可からず、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者は無自性にして修遣す可からず、斷常の見は無自性にして修遣す可からず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧は無自性にして修遣す可からず、念住正斷神足根力覺支道支は無自性にして修遣す可からず、靜慮解脫等持等至は無自性にして修遣す可からず、斷顚倒は無自性にして修遣す可からず、苦集滅道は無自性にして修遣す可からず、無量神通は無自性にして修遣す可からず、盡智無生智無造作智は無自性にして修遣す可からず、異生聲聞獨覺菩薩佛智は無自性にして修遣す可からず、異生聲聞獨覺菩薩佛の法は無自性にして修遣す可からず、止觀は無自性にして修遣す可からず、涅槃は無自性にして修遣す可からず、過去未來現在の智見は無自性にして修遣す可からず、無著智は無自性にして修遣す可からず、佛智は無自性にして修遣す可からず、無畏等の諸佛の功德は無自性にして修遣す可からざればなり。何を以ての故に、善勇猛、少しくも法性の是れ圓成實なること無ければなり。一切皆是れ世俗の假立にして此の中少しくも自性有るに非ず。自性無きが故に皆實有に非ず、諸法は皆無性を以て性と爲す。是の故に諸法は實無く生ずる無し。何を以ての故に、善勇猛、諸の顚倒の法は皆實有に非ざればなり。諸法は皆顚倒に從て起る。諸の顚倒皆實性無し。何を以ての故に、善勇猛、一切法は皆自性を離るるを以て自性を尋求するも都て得可からざればなり。是の故に皆無性を以て性と爲す。善勇猛、無性とは實無く生ずる無きが故に無性と名づく。此れ則ち性の實有に非ざるを顯示するが故に無性と名づく。若し性有るに非ずんば則ち修す可から

して四無畏等の諸佛の功德を攝受せしむ。是の故に菩薩四無礙解を證得せんと欲求し、四無畏等の功德善根を攝受せんと欲求せば應に般若波羅蜜多を學すべく、應に般若波羅蜜多を行じて執著を生ずること勿るべし。[一四]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行して諸法の若しは因若しは集若しは沒若しは滅に通達せば少法も般若波羅蜜多に合せざること有ること無し。是の諸の菩薩は如實に諸法の因集滅道の相を了知す。法の因集滅道の相を知り已て色に於て修せず遣せず受想行識に於ても亦た修せず遣せず、眼に於て修せず遣せず耳鼻舌身意に於ても亦た修せず遣せず、色に於て修せず遣せず聲香味觸法に於ても亦た修せず遣せず、眼識に於て修せず遣せず耳鼻舌身意識に於ても亦た修せず遣せず、名色に於て修せず遣せず、染淨に於て修せず遣せず、緣起に於て修せず遣せず、顚倒の見趣諸蓋愛行に於て修せず遣せず、貪瞋癡に於て修せず遣せず、欲色無色界に於て修せず遣せず、地水火風空識界に於て修せず遣せず、有情界法界に於て修せず遣せず、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に於て修せず遣せず、斷常の見に於て修せず遣せず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧に於て修せず遣せず、念住正斷神足根力覺支道支に於て修せず遣せず、靜慮解脫等持等至に於て修せず遣せず、斷顚倒に於て修せず遣せず、苦集滅道に於て修せず遣せず、無量神通に於て修せず遣せず、盡智無生智無造作智に於て修せず遣せず、異生聲聞獨覺菩薩佛地に於て修せず遣せず、異生聲聞獨覺菩薩佛の法に於て修せず遣せず、止觀に於て修せず遣せず、涅槃に於て修せず遣せず、過去未來現在の智見に於て修せず遣せず、無著智に於て修せず遣せず、佛智に於て修せず遣せず、無畏等の諸佛の功德に於て修せず遣せざるなり。何を以ての故に、[一五]善勇猛、色は無自性にして修遣す可からず受想行識も亦た無自性にして修遣す可からず、眼は無自性にして修遣す可からず耳鼻舌身意も亦た無自性にして修遣す可からず、色は無自性にして修遣す可からず聲香味觸法も亦た無自性にして修遣す可からず、眼識は無自性にし

【一四】般若行の菩薩は如實に諸法の因集滅道の相を了知し、一切法に於て修遣せず。諸法無性の故に。

【一五】諸法無自性を明す。

の故に菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば諸の世間を超えて能く及ぶ者無く最尊最勝なりと。[一三]爾の時世尊、善勇猛に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、是の如く菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば諸の世間を超えて能く及ぶ者無く最尊最勝にして一切の惡魔若しは魔天子眷屬軍衆皆伏すること能はず、乃至涅槃の相性に執著せる所有る諸見も亦た伏すること能はず、一切の愚夫異生等の行も此の菩薩所行の行に於ては皆伏すること能はず。善勇猛、此の菩薩行は愚夫異生に皆有るに非ざる所有學無學獨覺聲聞にも亦た有るに非ざる所なり。善勇猛、聲聞獨覺に若し此の行有らば應に說いて聲聞獨覺と名づけざるべく應に菩薩と名づくべく、當に如來の四無畏等の無邊の功德を得べし。善勇猛、聲聞獨覺は此の行無きが故に菩薩と名づけず、如來の四無畏等の無邊の功德を得ざるなり。善勇猛、菩薩の行ずる所の甚深般若波羅蜜多は是れ諸の如來應正等覺の四無畏等の功德の地なり。諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ぜば能く四無畏等を證得するを以て所作の業と爲す。若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば疾く能く四無畏等の如來の功德を證得せん。善勇猛、若し諸の菩薩未だ無上正等菩提を證せざるも大願力或は諸の如來の護持の力に由りて深般若波羅蜜多を行ぜば速に能く四無畏等の無邊の功德を攝受せん。善勇猛、聲聞獨覺は四無畏等の諸佛の功德を願求すること能はず、諸佛世尊も亦た護念して彼れをして四無畏等を證得せしめず。善勇猛、諸の菩薩衆は大願力及び諸の如來の護持の力に由りて當に能く四無畏等を證得すべし。何を以ての故に、善勇猛、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ぜば定めて能く四無礙解を獲得すればなり。何等をか名づけて四無礙解と爲す、義無礙解、法無礙解、詞無礙解、辯無礙解なり。是の如きを名づけて四無礙解と爲す。諸の菩薩衆是の如き四無礙解を成就せば未だ所求の無上正等菩提を證得せずと雖も大願力に由りて即ち能く四無畏等の諸佛の功德を攝受す。諸佛世尊は彼れ四無礙解の勝善根を成就せりと知るが故に、彼れ已に甚深般若波羅蜜多の功德地を得たりと知るが故に神通力を以て勤加護念し彼れを

【一三】 菩薩の般若行は惡魔等の伏する能はざる所で、此行により菩薩は能く四無畏等の無邊の功德を攝受することを明す。

りと觀察するも愚夫は顚倒して妄りに雜染を生ず。復た是の念を作す、所緣の境に由りて心心所生ず。所緣所有無しと了知するが故に心心所法皆生ずることを得ず、既に生ずることを得ずんば亦た住滅も無し。心心所法は本性明淨にして諸の雜染を離れ淸白にして樂ふ可し。心性は不生にして亦た住滅も無く、亦た法をして生住等も有らしめず。但だ諸の愚夫妄りに斯の事に執するのみ。是の如く菩薩は心心所の本性は生ぜず亦た住滅せずと知りて般若波羅蜜多を修行す。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。是の如く行ずる時是の念を作さず、我れ般若波羅蜜多を行ず、我れ今此れに依りて般若波羅蜜多を行ず、我れ今此れに由りて般若波羅蜜多を行ず、我れ今此れに從りて般若波羅蜜多を行ずと。若し諸の菩薩是の如き念を作さん、此れは是れ般若波羅蜜多、此れは般若波羅蜜多に由る、此れは般若波羅蜜多に依る、此れは般若波羅蜜多に屬すと。彼れは此の念に由りて般若波羅蜜多に由るに非ざるなり。若し諸の菩薩諸の般若波羅蜜多に於て見る無く得る無くして而かも般若波羅蜜多を行ぜば是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。[一]爾の時善勇猛、佛に白して言さく、世尊、菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ無上行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ淸淨行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ明白行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ無生行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ無滅行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ超出行なり。菩薩の是の如く深般若波羅蜜多を行ずるは是れ[二]難伏行なり。謂ゆる諸の惡魔若しは魔の眷屬、若しは餘の有相有所得行、若しは我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者の所有る諸見、若しは斷常の見、若しは諸蘊の見、若しは諸處の見、若しは諸界の見、若しは諸佛の見、若しは諸法の見、若しは諸僧の見、若しは涅槃の見、證得に著せる想、若しは增上慢若しは貪瞋癡の行、若しは顚倒蓋の行、若しは道路を越えて發趣する者は皆伏すること能はざるなり。是

【一】前說の菩薩の般若行は是れ超世間、最尊最勝なりと讃す。

【二】難伏行。他の征伏し難き所、破れざるもの、即ち次の諸敵の敵せざる所なり。

當に知るべし、此の中心開示す可く、顚倒に由りて起るも亦た開示す可しと。善勇猛、愚夫異生は心の開示す可きを覺了すること能はず及び顚倒に從りて起るも亦た開示す可きを覺了せず。開示す可きを覺了せざるに由るが故に心遠離に於て正知すること能はず亦た所緣の遠離をも正知せず。斯れに由りて心は卽ち是れ我、心は是れ我所、心は我に依る、心は我に從りて生ずと執著す。彼れ心に執し已て復た爲れ善なりと執し、或は非善なりと執し、或は爲れ樂なりと執し、或は爲れ苦なりと執し、或は爲れ斷なりと執し、或は爲れ常なりと執し、或は見趣に執し、或は諸蓋に執し、或は顚倒に執し、或は布施慳貪に執し、或は持戒犯戒に執し、或は安忍忿恚に執し、或は精進懈怠に執し、或は靜慮散亂に執し、或は般若惡慧に執し、或は三界に執し、或は緣起に執し、或は名色に執し、或は貪瞋癡に執し、或は嫉慳等に執し、或は我慢等に執し、或は苦集滅道に執し、或は四大空識に執し、或は有情法界に執し、或は念住正斷神足根力覺支道支に執し、或は靜慮解脫等持等至に執し、或は無量神通に執し、或は明及び解脫に執し、或は盡無生智に執し、或は無造作智に執し、或は佛法僧寶に執し、或は聲聞獨覺菩薩佛地に執し、或は聲聞獨覺菩薩佛の法に執し、或は無著智に執し、或は般涅槃に執し、或は佛智に執し、或は相好に執し、或は佛土に執し、或は聲聞圓滿に執し、或は菩薩圓滿に執し、或は諸餘の雜染淸淨に執するなり。善勇猛、諸の菩薩衆は是の如き等の種種の法門に於て執著を生ぜず、有情所起の顚倒の心心所法を知見して一切處に於て終に顚倒の心を發起せず、亦た心に依りて諸の顚倒をも起さず。何を以ての故に、善勇猛、諸の菩薩衆は般若波羅蜜多を修行し顚倒の心心所法を遠離して心の本性淸淨明白なりと證し、中に於て都て心心法の起る無ければなり。善勇猛、愚夫異生は所緣の境に依りて心心所を起して所緣有りと執し、一切の心及び心所有りと執するも諸の菩薩衆は彼の所緣及び彼の起す所の心心所法都て所有無しと知る。是の故に心心所法を生ぜざるなり。菩薩は是の如く一切の心心所法の本性淸淨、本性明白な

修行するも亦た思議す可からず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、貪瞋癡思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、念住正斷神足根力覺支道支思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、無量神通思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、靜慮解脫等持等至思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、苦集滅道思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、明及び解脫思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、盡智無生智無造作智思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、聲聞獨覺菩薩佛地思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、聲聞獨覺菩薩佛法思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、過去未來現在智思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、無著智思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、涅槃思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、佛法僧寶思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず。何を以ての故に、善勇猛、菩薩の修行する甚深般若波羅蜜多は心の所生に非ざるが故に不可思議と名づけ亦た心をも生ぜざるが故に不可思議と名づくればなり。

〇復た次に善勇猛、若し心生ずと謂はば是れは爲れ顚倒なり、心生ぜずと謂ふも亦た是れ顚倒なり。若し能く心及び心所倶に所有無しと通達せば則ち顚倒に非ず。善勇猛、心の本性は生有り起有り盡有り滅有るに非ず。善勇猛、顚倒相應して心心所生有り起有り盡有り滅有りと謂ふなり。善勇猛、

【一〇】前說の續き。菩薩は能く一切の心心所法の本性清淨、本性明白なりと觀察するも、愚夫は顚倒して妄りに執著を生ず。

乃至意識に於ても亦た常無常を行ぜず、樂無樂を行ぜず、我無我を行ぜず、淨不淨を行ぜず、空不空を行ぜず、幻の如きを行ぜず、夢の如きを行ぜず、光影の如きを行ぜず、谷の響の如きを行ぜず、何を以ての故に、善勇猛、是の如き諸法は有尋有伺有行有觀なればなり。此の中菩薩は一切の有尋有伺有行有觀の一切行を害するを了知すれば、遍ねく諸行を知りて般若波羅蜜多を修行す。是れを諸の菩薩行を宣說すと爲すと。

[九]爾の時善勇猛菩薩摩訶薩便ち佛に白して言さく、世尊、菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するは思議す可からずと。是に於て佛、善勇猛に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、善勇猛、色乃至識思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、眼乃至意思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず。色乃至法思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、眼識乃至意識思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、名色思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、緣起思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、雜染思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、業果思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、顚倒見趣諸蓋思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、欲色無色界思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者使作者起者等起者受者使受者知者使知者見者使見者思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、地水火風空識界思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た思議す可からず、有情界法界思議す可からざるが故に菩薩の甚深般若波羅蜜多を

【九】菩薩の般若修行の不可思議を明す。

諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色乃至識に於て[六]集を行ぜず滅を行ぜず、深を行ぜず、淺を行ぜず空を行ぜず不空を行ぜず、有相を行ぜず無相を行ぜず、有願を行ぜず無願を行ぜず、有造作を行ぜず無造作を行ぜず、眼乃至意に於ても亦た集を行ぜず滅を行ぜず、深を行ぜず淺を行ぜず、空を行ぜず不空を行ぜず、有相を行ぜず無相を行ぜず、有願を行ぜず無願を行ぜず、有造作を行ぜず無造作を行ぜず、色乃至法に於ても亦た集を行ぜず滅を行ぜず、深を行ぜず淺を行ぜず、空を行ぜず不空を行ぜず、有相を行ぜず無相を行ぜず、有願を行ぜず無願を行ぜず、有造作を行ぜず無造作を行ぜず、眼識乃至意識に於ても亦た集を行ぜず滅を行ぜず、深を行ぜず淺を行ぜず、空を行ぜず不空を行ぜず、有相を行ぜず無相を行ぜず、有願を行ぜず無願を行ぜず、有造作を行ぜず無造作を行ぜず。何を以ての故に、善勇猛、[七]是の如き諸法は一切皆恃執動轉戲論愛趣有ればなり。謂ゆる我れ能く是の如き動轉を行じ、我れ此れに於て是の如き戲論を行じ、我れ此れに由りて是の如き愛趣を行じ、我れ此れに依りて是の如き恃執を行ずと。此の中菩薩は一切の恃執動轉戲論愛趣の諸の無知を害するを了知すれば恃執する所無し。恃執無きが故に都て行ずる所無く亦た執藏も無し。執藏無きが故に繫縛する所無く亦た離繫も無く、發起する所無く亦た等起も無し。是の如き菩薩は諸の恃執を害して般若波羅蜜多を修行す。[八]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せば色乃至識に於て常無常を行ぜず、樂無樂を行ぜず、我無我を行ぜず、淨不淨を行ぜず、空不空を行ぜず、幻の如きを行ぜず、夢の如きを行ぜず、光影の如きを行ぜず、谷の響の如きを行ぜず。眼乃至意に於ても亦た常無常を行ぜず、樂無樂を行ぜず、我無我を行ぜず、淨不淨を行ぜず、空不空を行ぜず、幻の如きを行ぜず、夢の如きを行ぜず、光影の如きを行ぜず、谷の響の如きを行ぜず、色乃至法に於ても亦た常無常を行ぜず、樂無樂を行ぜず、我無我を行ぜず、淨不淨を行ぜず、空不空を行ぜず、幻の如きを行ぜず、夢の如きを行ぜず、光影の如きを行ぜず、谷の響の如きを行ぜず、眼識

【六】不行集。集起を見ず滅盡を見ず等二邊を離るゝなり。

【七】二邊の諸法を云ふ。

【八】菩薩遍ねく諸行を知りて般若を修行す。

の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色是れ過去未來現在なりと行ぜず亦た受想行識も是れ過去未來現在なりと行ぜず、則ち眼是れ過去未來現在なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意も是れ過去未來現在なりと行ぜず、則ち色是れ過去未來現在なりと行ぜず亦た聲香味觸法も是れ過去未來現在なりと行ぜず、則ち眼識是れ過去未來現在なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意識も是れ過去未來現在なりと行ぜず。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色是れ我我所なりと行ぜず亦た受想行識も是れ我我所なりと行ぜず、則ち眼是れ我我所なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意も是れ我我所なりと行ぜず、則ち色是れ我我所なりと行ぜず亦た聲香味觸法も是れ我我所なりと行ぜず、則ち眼識是れ我我所なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意識も是れ我我所なりと行ぜず。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色是れ樂是れ苦等なりと行ぜず亦た受想行識も是れ樂是れ苦等なりと行ぜず、則ち眼是れ樂是れ苦等なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意も是れ樂是れ苦等なりと行ぜず、則ち色是れ樂是れ苦等なりと行ぜず亦た聲香味觸法も是れ樂是れ苦等なりと行ぜず、則ち眼識是れ樂是れ苦等なりと行ぜず亦た耳鼻舌身意識も是れ樂是れ苦等なりと行ぜず。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。

[五] 復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色は我れに屬し餘に非ずと行ぜず亦た受想行識も我れに屬し餘に非ずと行ぜず、則ち眼は我れに屬し餘に非ずと行ぜず亦た耳鼻舌身意も我れに屬し餘に非ずと行ぜず、則ち色は我れに屬し餘に非ずと行ぜず亦た聲香味觸法も我れに屬し餘に非ずと行ぜず、則ち眼識は我れに屬し餘に非ずと行ぜず亦た耳鼻舌身意識も我れに屬し餘に非ずと行ぜず。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。復た次に善勇猛、若し

【五】前說の續き。菩薩は能く諸の特執を害して般若を修行す。

ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく一切有情の諸法の所緣淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち一切淸淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は一切の所緣本性淸淨なりと通達するが故なり。若し諸の菩薩一切の所緣本性淸淨なりと通達せば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。

[二]復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち[三]此れは是れ色乃至識、此れは色乃至識に由り、此れは色乃至識に屬し、此れは色乃至識に從ふと見ず。是の諸の菩薩は是の如く色等の法を見ざるが故に便ち色等に於て[四]擧ならず下ならず、生ぜず滅せず、行ぜず觀ぜず、色等の所緣に於ても亦た行ぜず觀ぜざるなり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち此れは是れ眼乃至意、此れは眼乃至意に由り、此れは眼乃至意に屬し、此れは眼乃至意に從ふと見ず。是の諸の菩薩は是の如く眼等の法を見ざるが故に便ち眼等に於て擧ならず下ならず、生ぜず滅せず、行ぜず觀ぜず。眼等の所緣に於ても亦た行ぜず觀ぜざるなり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち此れは是れ色乃至法、此れは色乃至法に由り、此れは色乃至法に屬し、此れは色乃至法に從ふと見ず。是の諸の菩薩は是の如く色等の法を見ざるが故に便ち色等に於て擧ならず下ならず、生ぜず滅せず、行ぜず觀ぜず、色等の所緣に於ても亦た行ぜず若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち此れは是れ眼識乃至意識、此れは眼識乃至意識に由り、此れは眼識乃至意識に屬し、此れは眼識乃至意識に從ふと見ず、是の諸の菩薩は是の如く眼識等の法を見ざるが故に便ち眼識等に於て擧ならず下ならず、生ぜず滅せず、行ぜず觀ぜず、眼識等の所緣に於ても亦た行ぜず觀ぜず。若し諸

【二】更に般若波羅蜜多の行に就て說く。
【三】此是色。このもの是れ色なりと體を定め指示するを云ふ。
【四】不擧不下。高しとも低しともせず。

じ亦た水火風空識界清淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく地界乃至識界の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち過去未來現在清淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく過去未來現在の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち無著清淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく無著の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち念住清淨を緣ぜずして行じ亦た正斷神足根力覺支道支無量神通清淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく念住乃至神通の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち靜慮解脫等持等至清淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく靜慮解脫等持等至の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち明及び解脫清淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく明及び解脫の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち盡智無生智一切智清淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく盡智無生智一切智の所緣本性清淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち一切有情の諸法清淨を緣ぜずして行

意識の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち名色淸淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく名色の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち我淸淨を緣ぜずして行じ亦た有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者使作者起者等起者受者使受者知者使知者見者使見者淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく我乃至使見者の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち顚倒淸淨を緣ぜずして行じ亦た見趣諸蓋淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく顚倒見趣諸蓋の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち緣起淸淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく緣起の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち欲色無色界淸淨を緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく欲色無色界の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち布施慳貪淸淨を緣ぜずして行じ亦た持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく布施慳貪乃至般若惡慧の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち地界淸淨を緣ぜずして行

説く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩、菩薩の圓滿功德を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く菩薩の圓滿功德の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く菩薩の圓滿功德の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多を行ぜば遍ねく一切の所緣を知りて行じ、一切の所緣を除遣して行ずるなり。

卷の第五百九十八

第十六般若波羅蜜多分の六

【一】復た次に善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色淸淨を緣ぜずして行じ、亦た受想行識淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく色乃至識の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち眼淸淨を緣ぜずして行じ、亦た耳鼻舌身意淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく眼乃至意の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色淸淨を緣ぜずして行じ亦た聲香味觸法淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく色乃至法の所緣本性淸淨なりと知るが故なり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば爲れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善勇猛、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち眼識淸淨を緣ぜずして行じ亦た耳鼻舌身意識淸淨をも緣ぜずして行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は已に能く遍ねく眼識乃至

【一】前說の續き。菩薩若し一切の所緣本性淸淨なりと通達せば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。

ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く地水火風空識界の所緣を除遣すればなり。若し能く此の諸の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩、聲聞獨覺菩薩佛地を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く聲聞獨覺菩薩佛地の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く聲聞獨覺菩薩佛地の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩、聲聞獨覺菩薩佛の法を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く聲聞獨覺菩薩佛の法の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く聲聞獨覺菩薩佛の法の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩涅槃を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は遍ねく涅槃の所緣を知ればなり。若の諸の菩薩遍ねく涅槃の所緣を知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩相好淸淨を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く相好淸淨の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く相好淸淨の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩佛土淸淨を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く佛土淸淨の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く佛土淸淨の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩、聲聞の圓滿功德を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く聲聞の圓滿功德の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く聲聞の圓滿功德の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと

に、善勇猛、是の諸の菩薩は遍ねく緣起及び彼の所緣を知ればなり。若し諸の菩薩遍ねく緣起及び彼の所緣を知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩欲色無色界を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く三界の所緣を除遣すればなり。若し諸の菩薩普ねく能く三界の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は遍ねく布施慳貪乃至般若惡慧の所緣を知ればなり。若し諸の菩薩遍ねく是の如き一切の所緣を知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩無倒の念住正斷神足根力覺支道支靜慮解脫等持等至無量神通等を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣に於て自在に覺了し亦た能く除遣すればなり。若し諸の菩薩諸の所緣に於て自在に覺了し亦た能く除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩苦集滅道諦を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は苦集滅道の所緣を除遣すればなり。若し能く四諦の所緣を除遣せば則ち遣する所無く亦た行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩明脫を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く明脫の所緣を除遣すればなり。若し能く明脫の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩盡無生無造作を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は普ねく能く盡無生無造の所緣を除遣すればなり。若し能く此の所緣を除遣せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若の菩薩摩訶薩地水火風空識界を緣じて行

ば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり、聲香味觸法を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣の顚倒の起す所なるを知ればなり。若し顚倒起らば則ち眞實に非ず。若し所緣は顚倒の起す所にして性眞實に非ずと知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩眼識を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり、耳鼻舌身意識を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣は皆是れ虛妄なりと知ればなり。若し所緣皆是れ虛妄なりと知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩名色を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣は所緣の性無しと覺すればなり。若し所緣は所緣の性無しと覺せば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩我有情等を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は如實に我有情等の想性は眞實に非ずと知ればなり。若し能く我有情等の想性は眞實に非ずと知らば則ち諸行に於て都て行ずる所無し。若し諸行に於て都て行ずる所無くんば則ち諸行を離る。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩我想有情想乃至知者想見者想を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は一切想を遣すればなり。若し能く一切想を遣除せば則ち諸想に於て都て行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩顚倒見趣諸蓋を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。顚倒見趣蓋を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の顚倒見蓋の所緣は都て實有に非ずと知ればなり。若し顚倒見蓋の所行都て實有に非ずと知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩緣起を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故

せず、及び不實の法も復た等起せざるなり。[五二]又た善勇猛、諸の顚倒は能く顚倒を起すに非ず。夫の顚倒とは實に起る所無し。此の中に於て實に起ること有るに非ざるが故に。若し此の中に於て實に起る所有らば顚倒と名づけず。實に起る無きを以ての故に顚倒と名づく。又た善勇猛、諸の菩薩衆は諸法を覺するに隨て諸の顚倒を離る。所以は何ん、諸の菩薩衆は顚倒の皆實有に非ざるを了知すればなり、謂ゆる顚倒の中には顚倒性無きなり。顚倒の實に有る所無く顚倒の中顚倒性有るに非ずと知るに由るが故に、菩薩は諸法を覺するに隨て諸の顚倒を離ると說く。諸法を覺し諸の顚倒を離るるに由りて復た法に於て更に顚倒を生ぜざるなり。若し此の中に於て復た顚倒無くんば則ち此の法に於ても亦た行ずる所無し。何を以ての故に、善勇猛、一切の顚倒は皆行ずる所有ればなり。行ずる所有るに由りて則ち等起有り。所行等起は皆顚倒に由りて虛妄に分別するなり。諸の菩薩衆は所行の法に於て皆分別無く亦た等起無し。是の故に說いて顚倒を遠離すと名づく。顚倒無きに由りて則ち行ずる所無し。行ずる所無きに由りて則ち起る所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。無所行とは謂ゆる諸法に於て都て行ずる所無く亦た觀察せず亦た所行有る相を示現せざるなり。故に菩薩は無所行を行ずと說く。若し能く是の如く無所行を行ぜば般若波羅蜜多を行ずと爲す。

[五三]復た次に善勇猛、若し菩薩摩訶薩色を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多行ずるなり、受想行識を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣の性遠離するを知るが故なり。若し所緣の其の性遠離するを知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩眼を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり、耳鼻舌身意を緣じて行ぜずんば是れ般若波羅密多を行ずるなり。何を以ての故に、善勇猛、是の諸の菩薩は諸の所緣の性實に非ざるを知るが故なり。若し所緣の其の性實に非ずと知らば則ち行ずる所無し。故に菩薩は無所行を行ずと說く。善勇猛、若し菩薩摩訶薩色を緣じて行ぜずん

【五二】顚倒の意。

【五三】無所行の行卽ち般若波羅蜜多行を續說す。菩薩は能く一切の所緣を知りて行じ一切の所緣を除遣して行ず。

行ぜず亦た此れは是れ佛法、此の佛法に由り、此の佛法に在り、此の佛法に屬すと執著せず。是の如き菩薩は亦復た一切の分別異分別行を行ぜず。謂ゆる諸の菩薩は分別及び異分別を行ぜざるなり。一切の分別異分別斷ずるを菩薩行と名づく。[四五]善勇猛、分別とは諸法に於て自性を分別するを謂ひ、異分別とは諸法に於て差別を分別するを謂ふ。一切法は分別し及び異分別し得可きに非ず、一切法は分別し異分別す可からざるを以ての故に。若し法を分別せば則ち諸法に於て異分別を作すなり。然るに一切法は分別及び異分別を遠離す。又た善勇猛、分別と言ふは是れ一邊を謂ひ、異分別とは是れ第二邊なり。諸の菩薩は邊無邊を行ずるに非ず。若し諸の菩薩邊無邊に於て倶に行ずる所無くんば是の諸の菩薩は亦た中をも見ず。若し中を見ば則ち中に於て行ずるなり。若し中を行ずる者は則ち邊に於て行ずるなり。中は行ずる有り顯す有り示す有るに非ず、行相を離るるが故に。又た善勇猛、言ふ所の中とは當に知るべし即ち是れ[四六]八支聖道なりと。是の如き聖道は一切法に於て都て所得無くして而かも現在前す。是の如き聖道は一切法に於て都て見る所無くして而かも現在前す。又た善勇猛、若し時に法に於て修する無く[四七]遣する無くんば爾の時名づけて止息の道と爲す。[四八]此の止息の道は一切法に於て修する無く遣する無く修遣を超過して一切法の平等實性を證す。諸法の平等實性を證するに由りて道想すら尚ほ無し、況んや道有るを見んや。又た善勇猛、止息の道とは阿羅漢漏盡の苾芻を謂ふ。何を以ての故に、善勇猛、[四九]彼れは道を遣するが故に、修する所遣するに非ざるが故に名づけて遣と爲す。[五〇]彼の遣も亦た無きが故に名づけて遣と爲す。修を遣するを以ての故に說いて名づけて遣と爲す。[五一]又た善勇猛、若し遣を修する有らば應に所得有るべく名づけて遣と爲さず。此の中遣とは修性を遣するを謂ふ。此の中修する無きが故に名づけて遣と爲す。修無きを以ての故に遣も亦た有るに非ず。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。何を以ての故に、善勇猛、遣は說く可からず。遣性を離るるが故なり。復た何をか離るる所なる。謂ゆる顚倒の法は復た等起

【四五】分別、異分別の義を明す。自性分別は內包を示し差別分別は外延を明し區別を詳にす。

【四六】八支聖道。八正道支又は八正道分ともいふ。中正にして理に契ひ涅槃に至る聖道の八分。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の稱。

【四七】遣す。奢摩他し、捨遣するなり。修遣は具現と抽象となり。般若の遣義は下に詳說す。

【四八】止息の道を明す。

【四九】漏盡羅漢は修道を究竟するを遣道と云ふ。所修は遣せざるが故に有所得の遣なり。

【五〇】今は小乘羅漢の遣も空じ修も遣するなり。

【五一】今の遣の義を明かにす。

か僞ならずして而かも現在前す。又た舍利子、法は法の合散せんが爲なること有ること無くして而かも現在前するが如く、我れ云何が是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說せん。然かも舍利子、我れ此の義を觀じて是の如き說を作す、甚深般若波羅蜜多は說示す可からずと。又た舍利子、我れ都て是の如き法の能說と名づく可く、所說と名づく可く、此れに由り此れが爲に此れに因り此れに屬し此れに依りて所說有りと名づく可き有るを見ず。[四〇]云何が我れをして諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多を宣說せしむるやと。

[四一]爾の時世尊、善勇猛菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子、諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行するに一切法に於て都て行ずる所無し。何を以ての故に、善勇猛、[四二]一切法は皆是れ顚倒の等起する所なるを以て實に非ず有に非ず、邪僞虛妄なればなり。又た善勇猛、譬へば法に於て行ずる所有らば皆顚倒を行じ皆不實を行ずるが如く是の如く菩薩若し行ずる所有らば應に顚倒を行ずべく應に不實を行ずるなるべし。諸の菩薩は是れ顚倒行及び不實行の顯了する所に非ず、亦た菩薩は顚倒行及び不實行を行じて能く般若波羅蜜多を行ずるに非ず。又た善勇猛、顚倒不實は則ち行ずる所に非ず。是の故に菩薩は中に於て行ぜざるなり。又た善勇猛、顚倒と言ふは卽ち是れ虛妄にして愚夫異生の執著する所なり。是の如き諸法は是の如き有ならず。是の如く執する所は其の相の如くならず。是の故に說いて顚倒不實と名づく。故に諸の菩薩は顚倒を行ぜず不實を行ぜざるなり。此れに由りて菩薩を實語者と名づけ、亦た說いて無倒行者と名づくることを得。若し實に無倒なれば則ち行ずる所無きが故に。菩薩の無所行を行じて一切行斷ずるを說いて菩薩行と名づく。[四三]此の菩薩行は是れは此れ、此れに由り、此に在り、此れに從ふと顯示す可からず。諸の菩薩行は顯了する所に非ず。何を以ての故に、善勇猛、諸の菩薩は[四四]一切行を息むるを以て菩薩行を行ずればなり、謂ゆる異生聲聞獨覺の有取著行を息めて菩薩行を行ずるなり。又た善勇猛、是の如き菩薩は諸の佛法に於ても亦復た

【四〇】善現般若の宣說すべからざるを廣說す。畢竟大般若もかくして不說一字に導かる。

【四一】般若行は卽ち無所行の行なることを詳說す。

【四二】一切法はこれ顚倒の等起する所。

【四三】菩薩行に就て明す。

【四四】一切行は異生聲聞獨覺の有執着行と佛法菩薩行なりと由屬し執着するものとなり。

が故ならずして而も現在前し、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧を顯示するに由るが故ならずして而も現在前し、念住正斷神足根力覺支道支靜慮解脫等持等至無覺神通を顯示するに由るが故ならずして而も現在前し、諸諦の道果を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、聲聞獨覺菩薩佛地を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、所有る法智及び非智を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、盡無生智及び滅智を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、涅槃の法を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前す。又た舍利子、法の法を顯示するに由ること有ること無くして而かも現在前するが如く、我れ當に云何が是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說すべけん。然かも舍利子、若し能く是の如き所說の、甚深般若波羅蜜多の所有る法を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前するを了知せば即ち能く甚深般若波羅蜜多を了知し亦た能く甚深般若波羅蜜多を宣說するなり。[39] 又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は諸法の合する有り散ずること有るが爲ならずして而かも現在前す。何を以ての故に、舍利子、甚深般若波羅蜜多は諸蘊諸處諸界の合する有り散ずること有るが爲ならず、諸行の合する有り散ずること有るが爲ならず、緣起の合する有り散ずること有るが爲ならず、顚倒の合する有り散ずること有るが爲ならず、欲色無色界の合する有り散ずること有るが爲ならず、地水火風空識界の合する有り散ずること有るが爲ならず、我有情界等の合する有り散ずること有るが爲ならず、法界の合する有り散ずること有るが爲ならず、布施慳貪持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂般若惡慧の合する有り散ずること有るが爲ならず、念住正斷神足根力覺支道支靜慮解脫等持等至無覺神通の合する有り散ずること有るが爲ならず、諸の諦道及び道果の合する有り散ずること有るが爲ならず、聲聞獨覺菩薩佛地及び法の合する有り散ずること有るが爲ならず、過去未來現在三世平等の合する有り散ずること有るが爲ならず、無著盡無生智の合する有り散ずること有るが爲ならざればなり。涅槃は合する有り散ずること有る

【三九】般若の現前は諸法の合散すること有るが爲ならざることを明す。

樂の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、安立非安立の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、生滅の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、染淨の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、本性非本性の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、世俗勝義の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、諦實虛妄の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、移轉趣入の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、何を以ての故に、舍利子、甚深般若波羅蜜多は衆相を離るるが故に此れは是れ般若波羅蜜多、此の般若波羅蜜多に在り、此の般若波羅蜜多に由り、此の般若波羅蜜多の爲に、此の般若波羅蜜多に因り、此の般若波羅蜜多に屬し、此の般若波羅蜜多に依ると顯示す可からず。又た舍利子、我れ法の此の法に由るが故に般若波羅蜜多を說示するを見ず。又た舍利子、少法も甚深般若波羅蜜多を能く顯し能く取ること有ること無し。又た舍利子、深般若波羅蜜多は諸の蘊處界緣起明脫を能く顯はし能く取るに非ず。又た舍利子、諸の出世間妙慧通達も亦復た般若波羅蜜多を顯取すること能はず。又た舍利子、法の諸法を顯取すること能はざるが如く、如何が甚深般若波羅蜜多を顯說せん。然かも舍利子、若し能く是の如き諸法の眞實理趣を了知せば卽ち能く般若波羅蜜多を了知し宣說するなり。

〔三八〕復た次に舍利子、甚深般若波羅蜜多は所有る法を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前す。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は蘊處界を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、名及び色を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、染淨の法を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、諸の緣起を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、諸の顚倒を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、我有情界等を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、地水火風空識界を顯示するに由るが故ならずして而かも現在前し、欲色無色界を顯示するに由る

【三八】般若の現前は又所有る法を顯示するに由らざることを明す。

ず亦た諸の菩薩衆有るを見ず、能說を見ず、所說を見ず、亦復た[三六]此れに由り、此の爲に、此れに因り、此れに屬し、此れに依りて說くを見ず。我れ此の中に於て旣に見る所無し。云何か我れをして諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多を宣說せしむる。設ひ我れ說かんと欲するも誰れか是れ能說、誰れか是れ所說なる亦復た何に由り、何の爲に、何に因り、何に屬し、何に依りて說くかを知らず。我れ當に云何が是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說すべけん。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は宣說す可からず、顯示す可からず、戲論す可からず。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は能く宣說する無く、能く顯示する無く、能く戲論する無し。若し能く是の如く方便して表示せば卽ち般若波羅蜜多を顯すなり。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は過去に非ず未來に非ず現在に非ず。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は過去の相を以て說く可からず、未來の相を以て說く可からず、現在の相を以て說く可からず。又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は相無く說く無し。又た舍利子、我れ都て甚深般若波羅蜜多の是の如き相有り此の相を以て般若波羅蜜多を宣說す可きを見ず。又た舍利子、蘊處界等の三世の相は深般若波羅蜜多に非ず、蘊處界等の三世の相の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如し、是れ深般若波羅蜜多なり。又た舍利子、蘊處界等の三世の相の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如く施設す可からず顯示す可からず戲論す可からず、語業等の能く詮表する所に非ず。[三七]又た舍利子、甚深般若波羅蜜多は諸の法相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、蘊處界の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、行非行の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、緣起の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、名色の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、我有情等の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、法界の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、有繫離繫相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、因緣の相を說示するに由るが故ならずして而かも現在前し、苦

【三六】所由（緣）所爲（對機）所因（因）所屬（關係）所依（佛法）等の分別を超ゆるを明す。

【三七】般若の現前は諸法相を說示する等に由らざることを明す。

應に所聞の義に於て方便善巧して[二七]無倒解を起して正行に安住すべし。若し法義に於て顚倒解を起して正しく修行せずんば當に知るべし彼の類は佛の正法に於て定めて[二八]順忍無しと。又た舍利子、我が正法[二九]毘奈耶の中に於て說の如く行ずる者は乃ち順忍を得ん。順忍と言ふは謂ゆる正法に於て無倒に簡擇して正行を發起するなり。[三〇]又た舍利子、順忍具足の補特伽羅、正行に安住せば當に知るべし決定して地獄[三一]傍生餓鬼の諸の惡趣の中に墮ちずして疾く能く正法の勝果を證得せんと。又た舍利子、諸の有情類は微少の善根を深信すべからず、謂ゆる彼れは卽ち能く諸の惡趣を脫し勤行精進するも亦た保つ可からず。乃至法に於て未だ正見を具せずんば諸の惡趣に於て猶ほ墮落有らん。又た舍利子、若し正法に於て圓滿に修學して順忍を得已らば能く復た惡趣を感ずる業を造らず、復た懈怠して退分に順ふを起さず、下劣位に於て[三二]恐れて退墮せず、修行する所の心に於て慢緩ならざらん。何を以ての故に、舍利子、彼れは雜染淸淨分の中に於て能く正しく遍知し、如實に一切法を見達することを得、顚倒の起す所の虛妄心現ずるも執著を生ぜず。彼れは正法の甚深の義趣に於て已に正見を得て順忍を具足すればなり。聰敏調柔にして淸淨戒に住し、律儀の正行軌則の所行、順忍を得るに由りて具足せざる無く、天龍藥叉阿素洛等すら尙ほ彼れを恭敬す。何に況んや。諸人をや。天龍藥叉阿素洛等の一切すら彼れに於て尙ほ應に愛念し歸趣供養し守護圍遶して惡緣をして身命及び修する所の行を損壞せしめざるべし、何に況んや諸人をや。故に應に正法順忍を勤修すべし。若し順忍を得ば天龍藥叉阿素洛等常に隨て守護し恭敬供養して曾て暫くも捨つる無けんと。[三三]時に舍利子、善現に告げて言はく、云何が[三四]具壽默然として說く無きや。云何が甚深般若波羅蜜多を說いて今如來應正等覺に現前に證せられざる。今此の大衆は深般若波羅蜜多に於て是れ眞の法器なり。音樂淸淨にして深法を聞かんことを願へりと。[三五]善現答へて言はく、唯舍利子、我れ諸法に於て都て見る所無し。是の故に我れ今默して說く所無し。又た舍利子、我れ都て甚深般若波羅蜜多を見

【二七】無倒解。一切の顚倒(迷ひ)を離れたる正しき見解。
【二八】順忍。四地、五地、六地の菩薩が菩提道に順じて無生果に趣向する位。
【二九】毘奈耶(Vinaya)。離行、調伏、滅など〻譯す。三藏中では律なるが、今は般若を云ふ。
【三〇】正法順忍を勸修すべきを說く。
【三一】傍生。底栗車(Tiryagyoni 巴 Tiracchāno)の譯、傍行の生類の義。畜生のこと。
【三二】原文は於下劣位不恐退墮とす。恐字不安なり。
【三三】舍利子、善現に般若の深法の宣說を勸む。
【三四】久く說かざる須菩提を表はし來る。
【三五】善現、舍利子の勸請に答へて、般若深法を宣說す。

に廣說することを得んや。彼れ能く是の如くするは是の處有ること無し。若し諸の有情善根已に熟せば宿願力の故に此の經に遇ふことを得て聽聞受持し書寫讀誦し恭敬供養して他の爲に廣說せん。又た舍利子、若し諸の有情善根增盛にして意樂調善せば是の如き般若波羅蜜多相應の法敎乃ち其の手に墮ちん。[二二]我れ記說す、彼の諸の善男子善女人等或は菩薩乘或は聲聞乘此の法を得て深心に愛樂するに由りて先に懈怠にして多く睡眠を樂ひ、不正の知を起して正念に住せず、或は心散亂し、或は飲食に耽り、或は珍財を愛し、或は麁語を好み、或は暴惡を喜び、或は憍慢を懷き、或は根闇鈍にして了知する所無しと雖も、彼れは是の如き善根力に由るが故に前の所說の過一切皆轉すと。是の如き甚深の法要を得るに由り設ひ是れ聲聞なるも轉じて菩薩を成じ、甚深の法に於て倍す愛樂を生じ諸の境界に於て能く放逸ならず、諸の善法に於て愛樂して修行し勇猛に正勤して諸の懈怠を離れ、一心に攝念して諸根を守護し、麁言を出さず暴惡を行ぜず恒に恭敬を修し樂うて多聞を習ひ精進熾然にして貪染する所無く、善能く甚深の法義を簡擇せん。若し是の如き功德を圓滿せんと欲せば當に勤めて甚深の法要を修學すべし。

[二三]復た次に舍利子、若し諸の菩薩或は聲聞乘、斯の法要を聞かば殊勝の果を獲ん。謂ゆる是の如き甚深の法要を聞かば決定して復た諸の放逸を行ぜず、諸の惡法に於て深信を生ぜず、[二四]善欲精進俱に退減無く、修行する所に於て[二五]慢緩を生ぜず、外の邪法に於て樂うて思求せず、貪恚癡に於て多く現起せず。是の如き等の果無量無邊なるは皆此の深法要を聞くことを得るに由る。[二六]又た舍利子、甚深の法要は但だ耳に聞くを卽ち名づけて果と爲すのみに非ず、要らず放逸ならず精進して修行し如實に衆惡を遠離するを了知して自他俱に利するを乃ち名づけて果と爲す。又た法を聞くとは謂ゆる法に於て要らず如實に精勤して修學するを了知するなり。正法に於て異の解行を起すに非ず、若し正法に於て異の解行を起さば當に知るべし彼の類は法を聞くと名づけずと。又た舍利子、汝等皆

【二二】般若信解によりて獲る功德。
【二三】菩薩等般若の法要を聞きて獲る殊勝の果を明す。
【二四】善欲は惡貪に對す、無相般若に相應する欣慕なり、
【二五】慢緩。輕賤し懈怠するなり。
【二六】聞法益に就て聞は思修に通ずべきを說く。

を行ずと爲す。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。若し能く是の如く諸法の都て著する所無きを遍知せば無著相と名づく。斯の理趣に由るが故に般若波羅蜜多は無著を相と爲すと說く。

[一四] 復た次に舍利子、是の如き所說は如來智境の甚深の法要なり。若し宣說し分別開示せんと欲するも助伴甚だ少し。此の中助伴とは唯だ見諦して大菩提に趣く諸の聲聞等及び已に退轉せざる菩薩摩訶薩幷びに見具足せる[一五]補特伽羅の[一六]無生乘に於て復た退せざる者有るのみ。[一七]彼の見具足せる補特伽羅も亦た是の如き甚深の法要に於て能く正しく修行せば疑惑を遠離して身に菩薩を證し已に[一八]淨忍を得斯の法要に於て定めて疑惑無からん。又た舍利子、愚夫異生には是の如き妙法は彼の行地に非ず。又た舍利子、是の如き所說の甚深般若波羅蜜多相應の法敎は甚だ爲れ得難く、終に下劣信解の諸の有情の手に墮ちず。若し諸の有情曾て多佛に事へ最勝清淨の善根を成就して信解廣大ならば是の如き所說の甚深般若波羅蜜多相應の法敎乃ち其の手に墮ちん。當に知るべし是の如き諸の有情類は已に無量廣大の善根を植え、調柔清淨の意樂を成就し、已に過去無量の佛所に於て菩提の種を植え弘誓願を發し、菩薩行を行じて佛の所乘にじ、如來應正等覺に親近し、甚深の法に於て理の如く請問するが故に此の般若波羅蜜多相應の法敎其の手請に墮在すと。當に知るべし是の如き諸の有情類は或は已に[一九]無生法忍を證得し、或は近く當に無生法忍を證すべきが故に此の般若波羅蜜多相應の法敎其の手に墮在すと。當に知るべし、是の如き諸の有情類は疾く無上正等菩提を證せんと。[二〇]悲願力もて速に證を求めざるをば除く。當に知るべし、是の如き諸の有情類は諸の佛所に於て已に[二一]記を授けらるゝことを得、或は復た久しからずして當に記を授けらるゝことを得べしと。當に知るべし是の如き諸の有情類は設ひ未だ佛現前に記を授けたまふことを得ざるも已に佛現前に記したまふを得たる者の如しと。又た舍利子、若し諸の有情善根未だ熟せずば薄福德の故に尙ほ是の如き般若波羅蜜多の經典の名字すら聞くことを得ず、況んや手に執りて讀誦受持し書寫供養し他の爲

【一四】般若甚深の法要を說き、有情の信解廣大なればこの深法其の手に墮在することを明す。

【一五】補特伽羅(Pudgala)。數取趣又は人と譯す。有情の稱。見具足は入見得聖なり。

【一六】無生乘。阿羅漢(Arhan)乘の譯。聲聞の究竟位なり。

【一七】見具足の小乘聖人も般若無相を正修せば向大果疑ひなしとなり。

【一八】淨忍。淸淨安忍。

【一九】無生法忍。不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位。七地、八地、九地の菩薩をいふ。

【二〇】受生の爲に佛果に登らず菩薩として大衆に盡さんとするものなり。

【二一】記を授けらる。佛より發心の衆生に對して當來必當作佛の記別を授けらるること。

に。所以は何ん、無著の相は有る所無きを以ての故に、性遠離の故に、得可からざるが故に。又た舍利子、法として無著の相は示現す可からず能く顯了する無し。然かも有情の爲に方便して示現するも此れ無著の相なるが故に執すべからず。又た舍利子、諸の雜染相は卽ち是れ無相なり。雜染法は相を起さんが爲の故に非ずして而かも現在前す。又た舍利子、諸の雜染法は顚倒して現前す。諸の顚倒とは皆是れ無相なり。諸の無相は皆說く可からず、故に有相法は卽ち是れ無相なり。又た舍利子、諸の淸淨法も亦た相有ること無し。所以は何ん、諸の雜染法すら尙ほ相有ること無し、況んや淸淨法にして而かも相有る可けんや。又た舍利子、若し能く諸の雜染法の如實性を遍知せば彼の諸の雜染は皆得可からず、然かるに諸の有情は顚倒に由るが故に諸の雜染を起す。諸の顚倒とは皆眞實に非ず。若し眞實に非ずんば則ち實體無く亦た實相無し。若し能く是の如く如實に遍知せば卽ち淸淨と名づく。諸の雜染相すら尙ほ得可からず、況んや淸淨相にして而かも得可き有らんや。是の故に雜染淸淨の二法は俱に相有るに非ず圓成實に非ず。又た舍利子、諸法の無相にして圓成實に非ざるを說いて無著と名づく。故に諸法は無著を相と爲すと說く。一切法は相に著する無きを以ての故に說いて無著と名づくるも愚夫異生は無著の相に著す。又た舍利子、是の如きを名づけて、一切法は無著を相と爲すと說くと爲す。此の無著の相は當に知るべし卽ち是れ智所行の處にして亦た[三]是れ般若波羅蜜多所行の處なりと。此の無著相智所行の處も亦た般若波羅蜜多と名づく。故に般若波羅蜜多は無邊境に諸の無著性を行ずと說く。當に知るべし說いて無邊境を行ずと名づくと。又た舍利子、所行の處とは當に知るべし此れ所行の處に非ざるを顯すと。甚深般若波羅蜜多は行處相もて能く顯示す可きに非ざればなり。又た舍利子、所行の境とは當に知るべし所行の境に非ざるを顯示すと。一切法の如實の性は所有性の如く皆得可からざるを以ての故なり。一切法は所行の境に非ず。一切法は境性無きを以ての故なり。若し能く是の如く諸法を遍知せば是れ則ち名づけて一切境

【三】一切法無相無著の故に境無邊、我相無量にして諸法性畢竟無性なり無著なり。

少法も是れ圓成實にして而かも示現す可き有ること無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は少法も是れ圓成實にして示現す可き有ること無しと。

[九] 時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は何を以て相と爲すやと。是に於て佛、舍利子に告げて言はく、是の如き般若波羅蜜多は相有ること無し。又た舍利子、虚空の如く及び風界の少法も是れ圓成實にして其の相を示す可き有ること無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は少法も是れ圓成實にして其の相を示す可き有ること無し。何を以ての故に、舍利子、是の如き般若波羅蜜多は衆相を遠離して少相も得可き者有ること無ければなり。又た舍利子、虚空界の礙著する處無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は礙著する處無し。斯れに由るが故に甚深般若波羅蜜多は無著を相と爲すと說く。又た舍利子、無著の法は相の得可き有るに非らず。然かも世間の名言理趣に隨て是の如き說を作す、甚深般若波羅蜜多は無著を相と爲すと。又た舍利子、般若波羅蜜多は無著を相と爲すと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は相の得可き無きが故に無著を相と爲すと說く可からず。無著の法は相狀無きを以ての故に。[一〇] 又た舍利子、無著と言ふは謂ゆる遍知に著し不可得に著し如實性に著するを遍ねく一切顚倒の執著なりと知るが故に無著と名づく。[一一] 諸の著の中に著の得可き有るに非ず、斯れに由るが故に著の如實性は著不可得なりと說く。又た舍利子、無著と言ふは卽ち是れ般若波羅蜜多なり。此れを卽ち說いて無著相智と爲す。又た舍利子、諸法は皆無著を相と爲すを以て、諸の法相得可からざるを以ての故に無著の相と名づく。少法も相を起さんが爲の故に有ること無くして而かも現在前す。[一二] 此の中に於ては相の得可き無きを以ての故に無相と名づけ。無相を以ての故に說いて無著と名づく。若し一切法に少しくも相有らば應に此の中に於て著の得可き有るべし。一切法は衆相都て無きを以て、是の故に此の中に著の得可き無きが故に諸法は無著を相と爲すと說く。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。無著の相は說く可からざるを以ての故

【九】 般若波羅蜜多の相に就て說く。無著を以て相となす。

【一〇】 無著の名義。

【一一】 執著を捨つるも實に著の得べきなければ無著の無著とすべきもなし。

【一二】 此の中。實相現前する中。

く大道を行くに險無く正直に、稠林を遠離し其の相平等にして諸の荊棘瓦礫坑坎無く清淨無穢にして邪しまならず曲らず、世間を利益し、世間を安樂にし、世間を哀愍し、諸の天人の與に廣大の義の利益安樂を作し、諸の有情の與に大明照堅固の梯蹬と作り、大慈悲を具して一切を哀愍し、諸の有情に於て利益を作さんと欲し、安樂を與へんと欲し、安隱ならしめんと欲して普ねく有情に諸の安樂具を施さん。是の如き有情は卽ち是れ菩薩なり。是の摩訶薩は善能く大法の財寶を受用す。是の摩訶薩は善能く大法の財寶を尋求す。最勝の財寶は彼れに屬して餘に非ず。所以は何ん、若し有情類善友に近づかず未だ善根を植えず薄福德の故に下劣に信解せば彼れは是の如き廣大甚深無染の正法に於て信受すること能はざればなり。我れ是の如き諸の有情類差別有るに依るが故に密意に說いて言ふ、諸の有情界は種種に差別し、類の勝劣に隨て各相愛樂す、下劣信解の諸の有情類は還て下劣信解の有情を樂ひ、廣大信解の諸の有情類は還て廣大信解の有情を樂ふと。

[八]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、是の如き般若波羅蜜多は何等の法を以て所行の境と爲すやと。是に於て佛、舍利子に告げて言はく、是の如き般若波羅蜜多は無邊の法を以て所行の境と爲す。譬へば風界の無邊の境を行くが如く是の如く般若波羅蜜多は無邊の法を以て所行の境と爲す。虛空界の無邊の境を行くが如く是の如く般若波羅蜜多は無邊の法を以て所行の境と爲す。又た風界の太虛空を以て所行の境と爲すが如く、是の如く般若波羅蜜多は諸法空を以て所行の境と爲す。又た舍利子、虛空界の如く及び風界の倶に處所として見る可き者無く亦復た法相を生起せんが爲ならずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多は法に於て都て顯示す可き者無く、亦復た法相を生起せんが爲ならずして而かも現在前す。又た舍利子、虛空界の如く及び風界の倶に執す可からず圓成實に非ず亦た色相の而かも算數す可き無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は都て執す可からず圓成實に非ず色等の相算數の知る可きに非ず。又た舍利子、虛空界の如く及び風界の

【八】般若波羅蜜多の所行の境を明す。無邊の法なり。

所の如き法要を宣說することを爲ん。又た舍利子、我れ終に薄少善根の諸有情類能く此の法に於て深く信解を生ずと說かず、薄少善根の諸有情類は此の法に於て容受する所有るに非ず、是の如き法財は彼れの能く用ふるに非ざるなり。又た舍利子、薄少善根の諸有情類は是の如き法に於て尙ほ名すら聞かず、況や能く受持し思惟し修習せんをや。[六]若し是の如き法を聞くことを得る有らん者は、我れ定んで彼れ當に佛法を得べきを記す。彼れ當來世に諸佛法に於て能く師子吼せんこと、我れ今は大衆中に於て師子吼無所畏吼大丈夫吼自然智吼を作すが如くならんと。又た舍利子、若し是の如き所說の甚深法要を聞くことを得る有りて、下能く一信樂心を起して誹謗を生ぜざるに至るまで、我れ亦た記して彼れ當に無上正等菩提を得べしとせん。何を以ての故に、舍利子、若し諸の有情甚深の法を聞きて歡喜し信受するは極めて得難きが故なり。又た舍利子、若し諸の有情甚深の法を聞きて深く信樂を生じ能く無上正等覺心を發すは、是の諸の有情復た甚だ得難し。我は說かん、廣大善根を成就し大資糧を具し大甲冑を著け疾く無上正等菩提を證せんと。若し諸の有情是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて歡喜し信樂し數數聽受せば、彼れの獲る所の福無量無邊ならん、況や能く受持し他の爲に說かんをや。設ひ未だなるも已に正性離性に入るも、若し二乘に於て決定せざる者ならば我れは皆な記せん、彼れ當さに無上正等菩提を得て有情を利樂せんこと未來際を窮めて常に斷盡無かるべしと。

[七]復た次に舍利子、若し諸の有情下劣の法を成ぜば我れ、彼れが廣大の法に於て容受の義有るを見ず。廣大の法とは謂ゆる佛菩提なり。又た舍利子、諸の有情類の多く下劣の法を成就すること有る者は所有る信解も亦た皆下劣にして廣大の善根を種植すること能はず。彼れは是く如き甚深廣大無染の正法に於て信受すること能はざるなり。又た舍利子、若し諸の有情廣大の法を成ぜば所有る信解も亦た皆廣大にして大乘を發趣し善く事業を辦じ、善く甲冑を著、善能く甚深の義理を思擇し、善

【六】少德のものは聞信するを得ず、故に聞くものは多德受記者なり、況や信ずるをや何に況や行じて他を化するをや。

【七】有情の成法下劣なれば、廣大の法に於て容受すること能はざることを明す。

も亦た無邊際なりと。

卷の第五百九十七

第十六般若波羅蜜多分の五

[一]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩衆は是の如き法に依りて諸の境相を行ずるやと。是に於て佛、舍利子に告げて言はく、是の諸の菩薩摩訶薩衆は尙ほ法をすら得ず、何に況んや非法をや。尙ほ道をすら得ず何に況んや非道をや。淨尸羅に於てすら尙ほ得る所無く、亦た執する所無し、何に況んや犯戒をや。是の諸の菩薩は三界に墮せず亦復た諸趣の死生に墮せず身命に著せず、何に況んや外境をや。生死の流れに於て已に邊際を作し、已に大海を度りて已に大難を超ゆ。又た舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩衆は是の如き法に依りて諸の境相を行じ一切境皆[二]境性無しと知る。此の因緣に由りて是の諸の善士は一切境に於て皆住著すること無し。師子王の衆境に著せざるが如く是の諸の善士は諸の境界に於て染無く雜無く一切の境を超ゆ。[三]大商主の能障礙無きが如く、是の諸の善士は是の如き法に依り諸の境相を行ずるも執著する所無し。[四]又た舍利子、我れ都て此の大衆の中に一菩薩も是の如き法に於て深信解せず、是の如き法に於て疑惑猶豫すること有るを見ず。又た舍利子、今此の衆の中の一切の菩薩は是の如き法に於て疑惑猶豫皆已に永く斷ぜり。此の諸の善士は是の如き法に於て自ら猶豫無ければ亦た能く永く一切有情の所有る疑惑をも斷ぜん。是の諸の善士は此の因緣に由りて一切法に於て皆猶豫せず能く有情の爲に決定して一切の法性都て無所有なりと宣說せん。

[五]復た次に舍利子、當來世に於て若し是の如き法を聞くことを得る有らん者は、一切法に於ても亦た疑惑猶豫を斷除することを得、亦た能く永く一切有情の有ゆる疑惑を斷ぜん。謂ゆる我今は說く

【一】菩薩等の云何にして般若に依りて諸境相を行ずるやに就て說く。
【二】境性。所緣の自性。客觀的實在性。
【三】大商は如何なる機會にも利益し、障へられず損する所なきを云ふ。
【四】會中菩薩の確信を促し化他に導く。
【五】未來の信受を懸記し勸奬す。

と。佛言はく、是の如し、諸の法相得可からざるを以ての故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は照了する所無しと。佛言はく、是の如し、能所の照了得可からざるが故にと。[五二]舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は卽ち是れ無邊なりと。佛言はく、是の如し。何を以ての故に、舍利子、諸の蘊處界無邊なるが故に般若波羅蜜多亦た無邊なり。緣起顚倒見趣愛行貪瞋癡等無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。斷常前際後際中際無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。布施淨戒安忍精進靜慮般若無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。念住正斷神足根力覺支道支無顚倒無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。靜慮解脫等至所緣解脫解脫智見無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦無邊なり。聲聞地獨覺地佛地佛法僧寶聲聞乘の法獨覺乘の法菩薩乘の法無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。我有情等欲色無色界無量神通諸蓋過去未來現在智見無著智見地水火風空識界有情界法界等無邊なるが故に般若波羅蜜多も亦た無邊なり。舍利子、甚深般若波羅蜜多は初中後邊皆得可からず。一切法に於ても亦た得る所無し。舍利子、甚深般若波羅蜜多は無邊無際なり。舍利子、太虛空の邊際得可からざるが如く、是の如く般若波羅蜜多の無際も亦た得可からず。舍利子、地水火風空識界の邊際得可からざるが如く、是の如く般若波羅蜜多の邊際も亦た得可からず。舍利子、當に知るべし、般若波羅蜜多は初中後位皆邊際無く亦た方域無しと。舍利子、諸の蘊處界緣起顚倒諸の蓋見趣愛行貪瞋癡我有情等布施淨戒安忍精進靜慮般若菩提分の法靜慮解脫解脫智見諸の異生法聲聞獨覺菩薩佛法及び餘の法門無邊際なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊際なりと。舍利子、甚深般若波羅蜜多の邊は得可からざるが故に無邊と名づけ、得可からざるが故に無際と名づく。舍利子、甚深般若波羅蜜多は無邊なるを以ての故に說いて無際と名づけ、無際なるを以ての故に說いて無邊と名づく。舍利子、甚深般若波羅蜜多の[五三]我性取性得可からざるが故に當に知るべし說いて無邊無際と名づくと。舍利子、一切法は無邊際なるを以ての故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊際なりと。太虛空無邊際なるを以ての故に當に知るべし諸法

【五二】般若の無邊際を明す。

【五三】我性取性なれば固定するが故に分別するが故に邊際あり。

深般若波羅蜜多は法の清淨なる可き有るを見ざるが故にと。

[五〇]時に舍利子復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は本性清淨なりと。佛言はく、是の如し。何を以ての故に、舍利子、諸の蘊處界の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。緣起顚倒見趣愛行貪恚癡等の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。我及び有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者使作者起者等起者受者使受者知者見者の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。斷常邊無邊の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。布施淨戒安忍精進靜慮般若の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。念住正斷神足根力覺支道支靜慮解脫等持等至慈悲喜捨の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。諸の無顚倒苦集滅道神通聖道聲聞地獨覺地佛地佛法僧寶聲聞乘の法獨覺乘の法菩薩乘の法解脫解脫智見涅槃の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。過去未來現在法無著智見十八佛不共法等の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なり。欲色無色界地水火風空識界有情界法界の本性清淨なるが故に是の如き般若波羅蜜多の本性清淨なりと。[五一]舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は色無く見無く對礙する所無しと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は少法も色有り見有り對礙する所有るを見ずと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は造作する所無しと。佛言はく、是の如し、能く造作する者得可からざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は趣向する所無しと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の趣向す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は施設す可からずと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の施設す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は卽ち是れ共ならずと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の與共(とも)にす可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は卽ち是れ無相なり

【五〇】甚深般若の本性清淨を明す。

【五一】以下更に般若波羅蜜多の義に就き、舍利子と佛の問答を擧ぐ。

かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の攝受す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て依止する所有らんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の依止爲る可き有るを見ざるなりと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て[四九]執藏する所有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の執藏す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は執する所有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の執を生ず可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て所著有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の著を生ず可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て住する所有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の共住す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て續有り斷有らんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の續斷す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て貪瞋癡を起し貪瞋癡を離れんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の貪瞋癡を起し貪瞋癡を離るゝ有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て能知者及び使知者を起さんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の能知者使知者を起す有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て本性非本性を了知せんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の本性非本性を知る可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て清淨有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚

【四九】執藏。所執藏の義にて、第八識が間斷なく常恒に相續して常一主宰の實我に似たる點あるより、第七識のために緣ぜられて我と愛執せらるゝを云ふ。

深なり。諸の緣起支甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。顚倒五蓋見趣愛行甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。我有情等甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。戲論不戲論甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。布施慳悋持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂妙慧惡慧甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。念住正斷神足根力覺支道支甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。苦集滅道解脫解脫智見甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。過去未來現在の三世平等甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。諸力無畏十八佛不共法等甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。無量神通甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。三世無著智一切佛法盡智無生智滅智無作智離染智甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。棄諸蓋智甚深なるが故に是の如き甚深般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり。[四七]復た次に舍利子、譬へば大海の深廣無量なるが如く、是の如く般若波羅蜜多は深廣無量なり。深廣と言ふは無邊の功德の所證なるが故なり。復た次に舍利子、譬へば大海の無量無邊の大寶衆寶の積集する所なるが如く、是の如く般若波羅蜜多は無量無邊の大法衆法の珍寶積集すと。[四八]舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は一切法を顯示せんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は少法も顯示す可きを見ざるが故に而かも現在前するなりと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て智有り智無からんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は少法も智有り及び智無しと名づく可きを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て護藏すること有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の護藏す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て攝受する所有らんが爲ならずして而

【四七】喩示。

【四八】更に般若の現在前を說く。

起し生起せざる可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て少しく相應し相應せざること有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の與に相應し相應せざる可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て少しく共住し共住せざること有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の與に共住し共住せざる可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て生起し生起せざる所有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の生起し生起せざらしむ可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て流轉し流轉せざる所有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の流轉し流轉せざらしむ可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は少法も作用し作具せんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は少法も彼れの作用し作具せんが爲なる可きを見ずして現在前するが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て平等性不平等性を證せんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は少法も平等不平等を證す可きを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て取捨有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の取捨す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て所作有らんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の而かも彼れに於て所作有る可き有るを見ざるが故にと。

四六 時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なりと。佛言はく、是の如し、何を以ての故に、舍利子、諸の蘊處界甚深なるが故に是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚

【四六】般若波羅蜜多甚深を明す。

が故に、菩提分法聖諦止觀無量神通靜慮解脫等持等至明脫の無性を以て自性と爲すが故に、無生智滅智涅槃の無性を以て自性と爲すが故に、聲聞地獨覺地佛地世俗智見勝義智見及び無著地一切智智等の法の無性を以て自性と爲すが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法を成辦し滅壞せんが爲の故に現在前するに非ずと。[四五]佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は生起の法を成辦せんが爲の故ならず、無我の法を滅壞せんが爲の故ならずして而かも現在前するなり。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法を緣ずるが爲ならず、方便の爲の故に現在前すると。佛言はく、是の如し、一切法は所緣に非ざるを以ての故に是の如き法、所緣の爲に般若波羅蜜多を發起す可き無しと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は一切法に於て增減を爲さずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如き甚深般若波羅蜜多は法の增減す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は一切法を超越せんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の超越す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は一切法を損益せんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の損益す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は一切法を合離せんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の合離す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て持去調伏せんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の持去し調伏するを得可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て恩怨を作さんが爲の故ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の而かも彼れに於て恩怨を作す可き有るを見ざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は法に於て起不起有らんが爲ならずして而かも現在前すと。佛言はく、是の如し、甚深般若波羅蜜多は法の而かも生

【四五】般若の現在前せざる所以を明す。

ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、成熟有情嚴淨佛土相好圓滿諸力無畏十八佛不共法等は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、涅槃乃至一切法の若しは善若しは非善等は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、太虛空は無色無見無對無性にして圓成實に非ざるが如く是の如く般若波羅蜜多は無色無見無對無性にして圓成實に非ず。舍利子、譬へば虹蜺の種種の妙色有りて顯現すと雖も而かも一實無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の言相もて顯示すと雖も而かも顯示する所、性の得可き無し。舍利子、譬へば虛空種種の寸尺を以て量度すと雖も而かも未だ曾て五指許りも是れ圓成實なる有るを見ざるが如く、是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の言相もて顯示すと雖も而かも未だ曾て少自體の是れ圓成實なる有るを見ずと。

[四一] 時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は甚だ爲れ見難しと。佛言はく、是の如し、[四二]能く見る者得可からざるを以ての故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は甚だ爲れ覺り難しと。佛言はく、是の如し、能く覺る者得可からざるを以ての故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は顯示す可からずと。佛言はく、是の如し、能く顯示する法得可からざるが故にと。舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は顯示する所無しと。佛言はく、是の如し、[四三]法を顯さんが爲に現在前するに非ざるが故にと。[四四]舍利子言はく、是の如き般若波羅蜜多は無性を性と爲すと。佛言はく、是の如し。甚深般若波羅蜜多は蘊處界緣起の無性を以て自性と爲すが故に、諸の顚倒諸の蓋見趣愛行の無性を以て自性と爲すが故に、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者使作者起者等起者受者使受者知者使知者見者使見者の無性を以て自性と爲すが故に、地水火風空識界の無性を以て自性と爲すが故に。有情界法界の無性を以て自性と爲すが故に、欲色無色界の無性を以て自性と爲すが故に、布施慳悋持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂妙慧惡慧の無性を以て自性と爲す

【四一】舍利子、般若の難見、難覺、不可顯示、無所顯示に就て佛と問答す。
【四二】能見者不可得なれば所見も量果も亦不可得なり、分別有量の見るが如くならず。されどこれ同じく難見と云ふも舍利弗の意と佛の答と異る。
【四三】前段に詳說するが如く現在前するも何法を顯示する所なきをいふ。
【四四】般若は無性を以て自性となすことを明す。

說く。何を以ての故に、舍利子、五蘊は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說き、十二處十八界も亦た圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、無明は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說き、行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱も亦た圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、常無常我無我淨不淨寂靜不寂靜顚倒非顚倒諸蓋見行增益損減生滅住異集起隱沒は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者使作者起者等起者受者使受者知者使知者見者使見者は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、諦實虛妄往去還來有見無見內外等の法は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、地水火風空識界欲色無界色界有情界法界は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、業異熟果因緣斷常三世三際は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、布施慳悋持戒犯戒安忍忿恚精進懈怠靜慮散亂妙慧惡慧心意識無間死生雜染清淨は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、念住正斷神足根力覺支道支苦集滅道靜慮解脫等持等至無量神通空無相無願は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、善非善有漏無漏世間出世間有罪無罪有爲無爲有記無記黑白黑白相違所攝劣中の妙貪瞋癡は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、見聞覺知恃執安住尋伺の所緣誑諂嫉慳、和合の二相無生無作止觀妙解盡離染滅棄捨、諸の世俗に依る勝義は圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、聲聞地法獨覺地法一切智智無著智自然智無等等智菩薩の大願聲聞圓滿獨覺圓滿、無量無邊無等等の一切法智一切法を如實に見る無きと一切法智見とは圓成實に非ざるが故に我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと說く。舍利子、淸涼眞實寂靜極寂靜最極寂靜は圓成實に非

善勇猛、所説の浮泡すら尚ほ實に有るに非ず、況んや自性の而かも宣説す可き有らんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと説くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣説するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、泡の、諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、人の拔きて芭蕉の莖を求むるに實に得可からずと雖も而かも葉の用有るが如く、是の如く般若波羅蜜多は眞の實無しと雖も而かも説の用有り復た次に善勇猛、譬へば人有りて太虚空を顯示せんと欲するが爲の故に所説有りと雖も而かも太虚空顯示す可からざるが如く、是の如く般若波羅蜜多を顯示せんと欲するが爲に所説有りと雖も而かも此の般若波羅蜜多は顯示す可からず。復た次に善勇猛、太虚空、種種の言説を以て顯示すと雖も而かも太虚空は眞實法の顯示し得可きこと無きが如く、是の如く種種の言説を以て般若波羅蜜多を顯示すと雖も而かも此の般若波羅蜜多は眞實法の顯示し得可き無し。復た次に善勇猛、譬へば影光の顯説す可しと雖も而かも實法の執取せしむ可き無く、執取す可き無しと雖も而かも顯照する所有るが如く、是の如く般若波羅蜜多は假りの文句もて種種顯説すと雖も而かも實法の執取せしむ可き無く、執取す可き無しと雖も而かも諸法を顯照す。復た次に善勇猛、末尼寶の大光明有りと雖も而かも此の光明内外得可き無きが如く、是の如く般若波羅蜜多は能く一切の法性を照燭すと雖も而かも此の内外都て得可からず。復た次に善勇猛、譬へば燈光の暫くも住せずと雖も而かも能く照了して目有る者をして衆色を覩見せしむるが如く是の如く般若波羅蜜多は諸法に於て都て住する所無しと雖も而かも能く照了して諸の聖者をして法の實性を見せしむと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、甚だ奇なり、如來應正等覺は般若波羅蜜多を説きたまふと雖も而かも般若波羅蜜多は圓成實に非ずと説きたまふと。[四〇]爾の時佛、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所説の如し、我れ般若波羅蜜多は圓成實に非ずと

【四〇】般若は圓成實に非ずと說く所以を明す。圓成實とは圓滿成就眞實の義にて眞如、實相などに名く。圓滿はその體周遍して何處にも遍通すること、成就はその體常住にして生滅せざること、眞實はその體虛妄に非ざるの意なり。

況んや光影の自性の說く可き有らんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣說するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、影の諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、陽焰人の陽焰の種種の自性を宣說するが如し、是の如き所說の陽焰の自性都て有る所無し。何を以ての故に、善勇猛、焰すら尙ほ有るに非ず、況んや陽焰の自性の說く可き有らんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣說するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、焰の、諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、人の住みて山谷等の中に在らんに谷の響の聲を聞くも都て見る所無きが如し。若し時に自ら語れば復た其の聲を聞く、是の如く般若波羅蜜多は聞く所の種種の文句有りと雖も而かも聞く所の法都て自性無し。唯だ說く時聞解有る可きをば除く。復た次に善勇猛、響の、諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、譬へば人有り諸の聚沫を見て便ち種種聚沫の自性を說くが如し是の如き所說の聚沫の自性若しは內若しは外都て得可からず。何を以ての故に、善勇猛、所說の聚沫すら尙ほ實有に非ず、況んや自性の而かも宣說す可き有らんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣說するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、沫の、諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、譬へば人有り浮泡の起るを見て便ち種種浮泡の自性を說くが如し、是の如き所說の浮泡の自性都て有る所無し。何を以ての故に、

ず無願に非ず、造作するに非ず造作せざるに非ず隱沒するに非ず隱沒せざるに非ず、無明に非ず解脫に非ず寂靜に非ず不寂靜に非ず、涅槃するに非ず涅槃せざるに非ず、理の如くなるに非ず理の如くならざるに非ず、遍ねく知るにに非ず遍ねく知らざるに非ず、出離するに非ず出離せざるに非ず、調伏するに非ず調伏せざる非ず戒を持つに非ず戒を犯すに非ず、散亂するに非ず散亂せざるに非ず、妙慧に非ず惡慧に非ず、識るに非ず識らざるに非ず、住するに非ず住せざるに非ず同分に非ず異分に非ず、有に非ず無有に非ず得るに非ず得ざるに非ず、現觀するに非ず現觀せざるに非ず、作證するに非ず作證せざるに非ず通達するに非ず通達せざるに非ず。甚深般若波羅蜜多は一切法に於て此れ等種種の事の爲の故ならずして而かも[三七]現在前するなり。

[三八]復た次に善勇猛、人の夢中に夢に見る所の種種の自性を說くが如し、是の如き所說の夢境の自性都て有る所無し。何を以ての故に、善勇猛、夢すら尙ほ有るに非ず、況んや夢境の自性の說く可き有らんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣說するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、夢の[三九]諸法を顯示することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を顯示することを爲さずして、而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、譬へば幻士の、幻に見る所の種種の自性を說くが如し是の如き所說の幻境の自性都て有る所無し。何を以ての故に、善勇猛、幻すら尙ほ有るに非ず、況んや幻境の自性の說く得可きものらんや。是の如く般若波羅蜜多は假りに種種の自性有りと說くと雖も而かも此の般若波羅蜜多は實に自性の宣說するを得可きもの無し。復た次に善勇猛、幻は諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するが如く、是の如く般若波羅蜜多も亦復た諸法を生起することを爲さずして而かも現在前するなり。復た次に善勇猛、光影人の、光影の種種の自性を宣說するが如し、是の如き所說の光影の自性都て有る所無し。何を以ての故に、善勇猛、影すら尙ほ有るに非ず、

【三七】於一切法不爲此等種々事故而現在前は上文の如くすれば前々種々事に非ずとせるに合し、現在前は般若の作用を示すことゝなる。若し「一切法に於て此れ等種種の事の爲め故に而かも現在前せず」と訓ずれば般若は此等のために作用するも永く存せずとなる。

【三八】般若はその自性の宣說し得可き無く、又諸法を生起の爲ならざるも而かも現在前することを喩說す。

【三九】夢見は眞に法を示さず、夢空なれば夢境更に空なり然れども現に夢は夢として在るを云ふ。

に非ず亦た出世間も攝するに非ず、有漏の攝に非ず亦た無漏の攝にも非ず、善法の攝に非ず亦た非善法の攝にも非ず、有情界の攝に非ず亦た非有情界の攝にも非ず、亦た是の如き等の法を遠離して別に般若波羅蜜多有るにも非ざるなり。復た次に善勇猛、甚深般若波羅蜜多は是の如き等の諸法の攝する所に非ず亦た攝せざるに非ず。是の如き攝する所攝せざる所の法の所有る眞如不虛妄性不變異性は所性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[三四]善勇猛、眞如とは是れ何の增語なる。善勇猛、眞如とは謂ゆる諸の法性にして愚夫異生の得る所の如くなるに非ず亦た彼れに異るに非ず。然かも諸の法性は諸の如來及び佛弟子菩薩の見る所の如し。是の如き法性の[三五]理趣は眞實にして常に變易無きが故に眞如と名づく。即ち此の眞如を說いて菩薩の甚深般若波羅蜜多と爲す。

[三六]復た次に善勇猛、是の如き般若波羅蜜多は一切法に於て增す無く減ずる無く合するに非ず離るるに非ず缺くるに非ず滿つるに非ず益するに非ず損するに非ず、移轉するに非ず趣入するに非ず、生ずるに非ず滅するに非ず染に非ず淨に非ず、流轉するに非ず還滅するに非ず集起するに非ず隱沒するに非ず有相に非ず無相に非ず平等に非ず不平等に非ず、世俗に非ず勝義に非ず樂に非ず苦に非ず、常に非ず無常に非ず淨に非ず不淨に非ず、我に非ず無我に非ず諦實に非ず虛妄に非ず、作者に非ず作具に非ず容受するに非ず容受せざるに非ず、信解するに非ず信解せざるに非ず、自性に非ず自性ならざるに非ず死するに非ず生ずるに非ず生ずるに非ず死するに非ず、出づるに非ず沒するに非ず續くに非ず斷ずるに非ず、和合するに非ず和合せざるに非ず、貪有るに非ず貪を離るゝに非ず瞋有るに非ず瞋を離るゝに非ず癡有るに非ず癡を離るゝに非ず、顚倒するに非ず顚倒せざるに非ず所緣有るに非ず所緣無きに非ず、有盡に非ず無盡に非ず有智に非ず無智に非ず、下性に非ず高性に非ず恩有るに非ず恩無きに非ず、往去するに非ず還來するに非ず有性に非ず無性に非ず、愛に非ず恚に非ず明に非ず闇に非ず懈怠に非ず精進に非ず、空に非ず不空に非ず有相に非ず無相に非ず有願に非

【三四】眞如の義を說き、これ即ち菩薩の甚深般若波羅蜜多となすことを明す。

【三五】理趣をば眞實にして常無變易とするのみ、この點にて眞如と云ふ。眞如を實在とすべきに非ず。

【三六】甚深般若は一切法に於て諸事の爲ならずして現在前することを明す。

攝の世間一切の善根等の法の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、有爲所攝の世間一切の善根等の法の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二七]復た次に善勇猛、所說の念住正斷神足根力覺支道支の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、念住正斷神足根力覺支道支の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二八]復た次に善勇猛、所說の、苦集滅道聖諦を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、苦集滅道聖諦の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二九]復た次に善勇猛、所說の、戒定慧解脫解脫智見淸淨なるを般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、戒定慧解脫解脫智見淸淨の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[三〇]復た次に善勇猛、所說の無爲所攝の出世間無依無漏法を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の無爲所攝の出世間無依無漏法の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[三一]復た次に善勇猛、所說の、空無相無願無生無作の法を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、空無相無願無生無作の法の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[三二]復た次に善勇猛、所說の、明解脫離滅涅槃を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、明解脫離滅涅槃の所有る眞如不虛妄性不變異は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

[三三]何を以ての故に、善勇猛、是の如き般若波羅蜜多は色蘊の攝に非ず亦た受想行識蘊の攝にも非ず眼處の攝に非ず亦た耳鼻舌身意處の攝にも非ず、色處の攝に非ず亦た聲香味觸法處の攝にも非ず、眼界の攝に非ず亦た耳鼻舌身意界の攝にも非ず、色界の攝に非ず亦た聲香味觸法界の攝にも非ず、眼識界の攝に非ず亦た耳鼻舌身意識界の攝にも非ず、地界の攝に非ず亦た水火風空識界の攝にも非ず、欲界の攝に非ず亦た色無色界の攝にも非ず、有爲の攝に非ず亦た無爲の攝にも非ず、世間攝する

蘊の所見なり。併せて六十句なり。これに身神一異の二句を加へて六十二見とす。

【二四】靜慮解脫等持等至。等持は三摩地。等至は三摩鉢底なり四靜慮八解脫等の法數を說くにあらず、その無性とするを般若とするなり。

【二五】四無量五神通。

【二六】有爲所攝の世間一切の善根等の法。

【二七】念住正斷神足根力覺支道支。

【二八】苦集滅道聖諦。

【二九】戒定慧解脫解脫智見。

【三〇】無爲所攝の出世間無依無漏法。

【三一】空無相無願無生無作の法。

【三二】明解脫離滅涅槃。

【三三】般若波羅蜜多は諸法の攝する所に非ず、また諸法を遠離して別に有るに非ざることを明す。

非ず涅槃せざるに非ず、十二處十八界等も亦た涅槃するに非ず涅槃せざるに非ず。是の如く蘊處界等は涅槃するに非ず涅槃せざるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一七]復た次に善勇猛、[一八]所說の五蘊の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の五蘊の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。所說の、十二處十八界等の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、十二處十八界等の生起して攝する所の所有眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一九]復た次に善勇猛、所說の緣起の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の緣起の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二〇]復た次に善勇猛、所說の、顚倒の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、顚倒の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二一]復た次に善勇猛、所說の諸蓋の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、諸蓋の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二二]復た次に善勇猛、所說の三十六愛行の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、三十六愛行の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二三]復た次に善勇猛、所說の、六十二見趣の生起して攝する所を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、六十二見趣の生起して攝する所の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする、是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二四]復た次に善勇趣、所說の、靜慮解脫等持至を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の、靜慮解脫等持至の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二五]復た次に善勇猛、所說の、四無量五神通を般若波羅蜜多と謂ふに非ず、所說の四無量五神通の所有る眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二六]復た次に善勇猛、所說の、有爲所

【一七】次に諸法の生起して攝する、所有る眞如不虛妄性不變異性の所有る性の如きものを般若波羅蜜多となすことを說く。先づ蘊界處等に就て明す。

【一八】五蘊如何に出起し何程攝するかを說くを般若とせず、その眞如等とするものも所有性の如く不可得なりとするを云ふ。

【一九】緣起に就て明す。

【二〇】顚倒。

【二一】諸蓋。蓋は覆障する煩惱なり。

【二二】三十六愛行。愛行は見行に對し云ふ。三十六に異說あるも六受所生の六愛に內外三世を以てするもの或は六六身を云ふ等。

【二三】六十二見趣。小乘には長阿梵動經等に云ふ本劫本見十八見、末劫末見四十四見なり。般若には十四難を開きて六十二とす。一は五蘊に就て常、無常、亦常亦無常、非常非無常とする廿句、過去を計す。次が五蘊邊無邊等の廿句現在に執す。次は如去不如去等による廿句、これ未來五

と多謂ふ。復た次に善勇猛、五蘊は明無く解脫無く、十二處十八界等も亦た明無く解脫無し。是の如く蘊處界等は明無く解脫無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[八]復た次に善勇猛、五蘊は靜慮解脫等持等至無く、十二處十八界等も亦た靜慮解脫等持等至無し。是の如く蘊處界等は靜慮解脫等持等至無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[九]復た次に善勇猛、五蘊は有量無く無量無く神通無く非神通無く、十二處十八界等も亦た有量無く無量無く神通無く非神通無し。是の如く蘊處界は有量無く無量無く神通無く非神通無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一〇]復た次に善勇猛、五蘊は空無く不空無く有相無く無想無く有願無く無願無く、十二處十八界等も亦た空無く不空無く有相無く無相無く有願無く無願無し。是の如く蘊處界等は空無く不空無く有相無く無相無く有願無く無願無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一一]復た次に善勇猛、五蘊は有爲に非ず無爲に非ず有漏に非ず無漏に非ず世間に非ず出世間に非ず有繫に非ず離繫に非ず、十二處十八界等も亦た有爲に非ず無爲に非ず有漏に非ず無漏に非ず世間に非ず出世間に非ず有繫に非ず離繫に非ず。是の如く蘊處界等は有爲に非ず無爲に非ず有漏に非ず無漏に非ず世間に非ず出世間に非ず有繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一二]復た次に善勇猛、五蘊は有著に非ず無著に非ず有智に非ず無智に非ず、十二處十八界等も亦た有著に非ず無著に非ず有智に非ず無智に非ず。是の如く蘊處界等は有著に非ず無著に非ず有智に非ず無智に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一三]復た次に善勇猛、五蘊は執持無く動搖無く戲論無く、十二處十八界等も亦た執持無く動搖無く戲論無し。是の如く蘊處界等は執持無く動搖無く戲論無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一四]復た次に善勇猛、五蘊は有想に非ず無想に非ず、十二處十八界等も亦た有想に非ず無想に非ず。是の如く蘊處界等は有想に非ず無想に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一五]復た次に善勇猛、五蘊は寂靜に非ず不寂靜に非ず、十二處十八界等も亦た寂靜に非ず不寂靜に非ず。是の如く蘊處界等は寂靜に非ず不寂靜に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一六]復た次に善勇猛、五蘊は涅槃するに

【七】無明、無解脫。

【八】無靜慮、無解脫、無等持、無等至。

【九】無有量、無無量、無神通、無非神通。

【一〇】無空、無不空、無有相、無無相、無有願、無無願。

【一一】非有爲、非無爲、非有漏、非無漏、非世間、非出世間、非有繫、非離繫。

【一二】非有著、非無著、非有智、非無智。

【一三】無執持、無動搖、無戲論。

【一四】非有想、非無想。

【一五】非寂靜、非不寂靜。

【一六】非涅槃、非不涅槃。

ず非善に非ず、是の如く六識界は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は善に非ず非善に非ず是の如く一切法は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

卷の第五百九十六

第十六般若波羅蜜多分の四

[一]復た次に善勇猛、五蘊は去る有り來り有り住する有り住せざる有りと施設す可からず、十二處十八界等も亦た去る有り來る有り住する有り住せざる有りと施設す可からず。是の如く蘊處界等は去る無く來る無く住する無く住せざる無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二]復た次に善勇猛、五蘊は遠有り彼岸有りと施設す可からず、十二處十八界等も亦た遠有り彼岸有りと施設す可からず。是の如く蘊處界等は遠無く彼岸無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[三]復た次に善勇猛、五蘊は愛有り恚有り怖有り癡有りと施設す可からず、十二處十八界等も亦た愛有り恚有り怖有り癡有りと施設す可からず。是の如く蘊處界等は愛無く恚無く怖無く癡無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[四]復た次に善勇猛、五蘊は與ふる無く取る無く戒を持つ無く戒を犯す無く忍無く不忍無く精進無く懈怠無く等持無く心亂るる無く妙慧無く惡慧無く、十二處十八界等も亦た與ふる無く取る無く戒を持つ無く戒を犯す無く忍無く不忍無く精進無く懈怠無く等持無く心亂るる無く妙慧無く惡慧無し。是の如く蘊處界等は與ふる無く取る無く戒を持つ無く戒を犯す無く忍無く不忍無く精進無く懈怠無く等持無く心亂るる無く妙慧無く惡慧無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[五]復た次に善勇猛、五蘊は顚倒無く顚倒ならざる無く、十二處十八界等も亦た顚倒無く顚倒ならざる無し。是の如く蘊處界等は顚倒無く顚倒ならざる無き是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[六]復た次に善勇猛、五蘊は念住正斷神足根力覺支道支無く、十二處十八界等も亦た念住正斷神足根力覺支道支無し。是の如く蘊處界等は念住正斷神足根力覺支道支無き、是れを般若波羅蜜

【一】以下更に般若波羅蜜多の意義を續說す。先づ諸法の無去、無來、無住、無非住を般若波羅蜜多と謂ふを明す。
【二】諸法の無遠、無彼岸。
【三】諸法の無愛、無恚、無怖、無癡。
【四】無與、無取、無持戒、無犯戒、無忍、無不忍、無精進、無懈怠、無等持、無心亂、無妙慧、無惡慧。
【五】無顚倒、無不顚倒。
【六】無念住、無正斷、無神足、無根、無力、無覺支、無道支。

ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、聲香味觸法處も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く外六處は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、耳鼻舌身意界も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く內六界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、聲香味觸法界も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く外六界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く六識界は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く一切法は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二六]復た次に善勇猛、色蘊は善に非ず非善に非ず、受想行識蘊も亦た善に非ず非善に非ず。是の如く五蘊は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は善に非ず非善に非ず、耳鼻舌身意處も亦た善に非ず非善に非ず。是の如く內六處は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は善に非ず非善に非ず、聲香味觸法處も亦た善に非ず非善に非ず。是の如く外六處は善に非ず非善に非ざる、是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は善に非ず非善に非ず、耳鼻舌身意界も亦た善に非ず非善に非ず。是の如く內六界は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は善に非ず非善に非ず、聲香味觸法界も亦た善に非ず非善に非ず。是の如く外六界は善に非ず非善に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は善に非ず非善に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た善に非

【二六】諸法の非善、非非善なること、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

波羅蜜多と謂ふ。[二二]復た次に善勇猛、色蘊は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、受想行識蘊も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く五蘊は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、耳鼻舌身意處も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く內六處は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、聲香味觸法處も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、是の如く外六處は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、耳鼻舌身意界も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く內六界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、聲香味觸法界も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く外六界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず、耳鼻舌身意界も亦た斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く六識界は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は斷に非ず常に非ず有邊に非ず無邊に非ず。是の如く一切法は斷に非ず常に非ず有邊非にず無邊に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二三]復た次に善勇猛、色蘊は[二四]見趣に非ず[二五]見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、受想行識蘊も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く五蘊は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず、耳鼻舌身意處も亦た見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ず。是の如く內六處は見趣に非ず見趣斷ずるに非ず愛に非ず愛斷ずるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は見趣に非

【二二】諸法の非斷、非常、非有邊、非無邊なる、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

【二三】諸法の非見趣、非見趣斷、非愛、非愛斷なる、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

【二四】見趣。知的繫縛に趣向するを云ふ。

【二五】見趣斷。見惑による趣道斷盡する、入、道見性、正性離生を云ふものなり。

使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、聲香味觸法處も亦た作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず。知見者に非ず。是の如く外六處は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、耳鼻舌身意界も亦た作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く内六界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、聲香味觸法界も亦た作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く外六界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く六識界は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く一切法は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若

癡の法を離るるに非ず、聲香味觸法處も亦た貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法をる離るに非ず。是の如く外六處は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず、耳鼻舌身意界も亦た貪瞋癡の法有るに非ず、貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く內六界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず、聲香味觸法界も亦た貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く外六界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く六識界は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く一切法は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一八]復た善勇猛、色蘊は[一九]作者に非ず使作者に非ず[二〇]起者に非ず等起者に非ず[二一]了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、受想行識蘊も亦た作者に非ず、使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く五蘊は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる、是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず、耳鼻舌身意處も亦た作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ず。是の如く內六處は作者に非ず使作者に非ず起者に非ず等起者に非ず了者に非ず使了者に非ず受者に非ず使受者に非ず知見者に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は作者に非ず使

【一八】諸法の非作者、非使作者、非起者、非等起者、非了者、非使了者、非受者、非使受者、非知見者なる、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

【一九】作者。行爲者、造作者なり。使作者は能使、能造者なり。

【二〇】起者。生起せしむるもの、等起は同時同類に起るを云ふ。

【二一】了者。了別者。使了者は能知者なり。

淨に非ず、聲香味觸法處も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く外六處は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず、耳鼻舌身意界も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く內六界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多を謂ふ。善勇猛、色界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず、聲香味觸法界も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く外六界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く六識界は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く一切法は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一七]復た次に善勇猛、色蘊は貪瞋癡の法有るに非ず、貪瞋癡の法を離るるに非ず、受想行識蘊も亦た貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く五蘊は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず、耳鼻舌身意處も亦た貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ず。是の如く內六處は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋癡の法を離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は貪瞋癡の法有るに非ず貪瞋

【一七】一切法の非有貪瞋癡法、非離貪瞋癡法なる、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

る是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、耳鼻舌身意處も亦た變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く內六處は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、聲香味觸法處も亦た變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く外六處は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、耳鼻舌身意界も亦た變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く內六界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、聲香味觸法界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く外六界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く六識界は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く一切法は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一六]復た次に善勇猛、色蘊は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず、受想行識蘊も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く五蘊は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず、耳鼻舌身意處も亦た常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ず。是の如く內六處は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず我に非ず無我に非ず淨に非ず不

【一六】一切法の非常、非無常、非樂、非苦、非我、非無我、非淨、非不淨なる、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

ふ。善勇猛、色界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、聲香味觸法界も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く外六界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く六識界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く一切法は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一四]復た次に善勇猛、色蘊は起法有るに非ず盡法有るに非ず、受想行識蘊も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く五蘊は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は起法有るに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意處も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く內六處は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は起法有るに非ず盡法有るに非ず、聲香味觸法處も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く外六處は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は起法有るに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意界も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く內六界は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は起法有るに非ず盡法有るに非ず、聲香味觸法界も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず是の如く外六界は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は起法有るに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く六識界は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は起法有るに非ず盡法有るに非ず。是の如く一切法は起法有るに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一五]復た次に善勇猛、色蘊は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず、受想行識蘊も亦た變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ず。是の如く五蘊は變壞の法有るに非ず變壞の法無きに非ざ

【一四】一切法の非有起法、非有盡法、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

【一五】一切法の非有變壞法、非無變壞法なる、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

法有るに非ず。是の如く五蘊は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は盡くるに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意處も亦た盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く內六處は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は盡くるに非ず盡法有るに非ず、聲香味觸法處も亦た盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く外六處は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は盡くるに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意界も亦た盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く內六界は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は盡くるに非ず盡法有るに非ず、聲香味觸法界も亦た盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く外六界は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は盡くるに非ず盡法有るに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く六識は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は盡くるに非ず盡法有るに非ず。是の如く一切法は盡くるに非ず盡法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

【一三】復た次に善勇猛、色蘊は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、受想行識蘊も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く五蘊は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、耳鼻舌身意處も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く內六處は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、聲香味觸法處も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く外六處は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ず、耳鼻舌身意界も亦た集の法有るに非ず滅の法有るに非ず。是の如く內六界は集の法有るに非ず滅の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂

【一三】一切法の非有集法、非有滅法、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は生に非ず死に非ず、耳鼻舌身意界も亦た生に非ず死に非ず。是の如く內六界は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は生に非ず死に非ず、聲香味觸法界も亦た生に非ず死に非ず。是の如く外六界は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は生に非ず死に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た生に非ず死に非ず。是の如く六識界は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は生に非ず死に非ず。是の如く一切法は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一]復た次に善勇猛、色蘊は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、受想行識蘊も亦た流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く五蘊は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、耳鼻舌身意處も亦た流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く內六處は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、聲香味觸法處は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く外六處は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、耳鼻舌身意界も亦た流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く內六界は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、聲香味觸法界も亦た流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く外六界は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く六識は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は流轉するに非ず流轉の法有るに非ず。是の如く一切法は流轉するに非ず流轉の法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二]復た次に善勇猛、色蘊は盡くるに非ず盡法有るに非ず、受想行識蘊も亦た盡くるに非ず盡

【一】一切法の非流轉、非有流轉法、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

【二】一切法の非盡非有盡法、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。一切法は如實相たれば、實相に盡なく、盡法別在するに非ざるなり。

多と謂ふ。善勇猛、眼界は繫に非ず離繫に非ず、耳鼻舌身意界も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く內六界は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は繫に非ず離繫に非ず、聲香味觸法界も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く外六界は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は繫に非ず離繫に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く六識界は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は繫に非ず離繫に非ず。是の如く一切法は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[九]復た次に善勇猛、色蘊は死に非ず生に非ず受想行識蘊も亦た死に非ず生に非ず。是の如く五蘊は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は死に非ず生に非ず、耳鼻舌身意處も亦た死に非ず生に非ず、是の如く內六處は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は死に非ず生に非ず、聲香味觸法處も亦た死に非ず生に非ず、是の如く外六處は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は死に非ず生に非ず、耳鼻舌身意界も亦た死に非ず生に非ず。是の如く內六界は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は死に非ず生に非ず、聲香味觸法界も亦た死に非ず生に非ず。是の如く外六界は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は死に非ず生に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た死に非ず生に非ず。是の如く六識界は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は死に非ず生に非ず。是の如く一切法は死に非ず生に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[一〇]復た次に善勇猛、色蘊は生に非ず死に非ず、受想行識蘊も亦た生に非ず死に非ず。是の如く五蘊は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は生に非ず死に非ず、耳鼻舌身意處も亦た生に非ず死に非ず。是の如く內六處は生に非ず死に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は生に非ず死に非ず、聲香味觸法處も亦た生に非ず死に非ざる是れを般若波羅

【九】一切法の非死非生、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

【一〇】一切法の非生非死、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

ず、耳鼻舌身意識界も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く六識界は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く一切法は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[七]復た次に善勇猛、色蘊は移轉するに非ず趣入するに非ず、受想行識蘊も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く五蘊は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は移轉するに非ず趣入するに非ず、耳鼻舌身意處も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く內六處は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は移轉するに非ず趣入するに非ず、聲香味觸法處も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く外六處は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は移轉するに非ず趣入するに非ず、耳鼻舌身意界も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く內六界は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は移轉するに非ず趣入するに非ず、聲香味觸法界も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く外六界は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は移轉するに非ず趣入するに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く六識界は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は移轉するに非ず趣入するに非ず。是の如く一切法は移轉するに非ず趣入するに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[八]復た次に善勇猛、色蘊は繫に非ず離繫に非ず、受想行識蘊も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く五蘊は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は繫に非ず離繫に非ず、耳鼻舌身意處も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く內六處は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は繫に非ず離繫に非ず、聲香味觸法處も亦た繫に非ず離繫に非ず。是の如く外六處は繫に非ず離繫に非ざる是れを般若波羅蜜

【七】一切法の非移轉、非趣入、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

【八】一切法の非繫非離繫、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

は染に非ず淨に非ず、聲香味觸法處も亦た染に非ず淨に非ず、是の如く色處は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法處も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は染に非ず淨に非ず、耳鼻舌身意界も亦た染に非ず淨に非ず。是の如く眼界は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意界も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は染に非ず淨に非ず、聲香味觸法界も亦た染に非ず淨に非ず。是の如く色界は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法界も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は染に非ず淨に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た染に非ず淨に非ず。是の如く眼識界は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意識界も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は染に非ず淨に非ず。是の如く一切法は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[六]復た次に善勇猛、色蘊は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず、受想行識蘊も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く五蘊は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず、耳鼻舌身意處も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く內六處は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず、聲香味觸法處も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く外六處は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず、耳鼻舌身意界も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く內六界は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は淨法有るに非ず不淨法有るに非ず、聲香味觸法界も亦た淨法有るに非ず不淨法有るに非ず。是の如く外六界は淨法有るに非ず不淨法有るに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は淨法有るに非ず不淨法有るに非

【六】一切法の非有淨法、非有不淨法、即ち淨不淨の分別を遮するもの、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

是の如く色蘊は減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く受想行識蘊も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は減ずるに非ず増すに非ず、耳鼻舌身意處も亦た減ずるに非ず増すに非ず。是の如く眼處は減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意處も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は減ずるに非ず増すに非ず、聲香味觸法處も亦た減ずるに非ず増すに非ず。是の如く色處は減ずるに非ず増すに非ざる、是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法處も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は減ずるに非ず増すに非ず、耳鼻舌身意界も亦た減ずるに 非ず増すに非ず。 是の如く眼界は 減ずるに非ず増すに非ざる 是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意界も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は減ずるに非ず増すに非ず、聲香味觸法界も亦た減ずるに非ず増すに非ず。是の如く色界は減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法界も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は減ずるに非ず増すに非ず、耳鼻舌身意識界も亦た減ずるに非ず増すに非ず。是の如く眼識界は減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意識界も亦た減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は減ずるに非ず増すに非ず。是の如く一切法は減ずるに非ず増すに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[五]復た次に善勇猛、色蘊は染に非ず淨に非ず、受想行識蘊も亦た染に非ず淨に非ず。是の如く色蘊は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く受想行識蘊も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は染に非ず淨に非ず、耳鼻舌身意處も亦た染に非ず淨に非ず。是の如く眼處は染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意處も亦た染に非ず淨に非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處

【五】一切法の非染非淨、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

ふ。[三]復た次に善勇猛、色蘊と色蘊とは合するに非ず離るるに非ず。受想行識蘊と受想行識蘊とも亦た合するに非ず離るるに非ず。是の如く色蘊は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く受想行識蘊も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處と眼處とは合するに非ず離るるに非ず、耳鼻舌身意處と耳鼻舌身意處とも亦た合するに非ず離るるに非ず。是の如く眼處は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意處も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處と色處とは合するに非ず離るるに非ず、聲香味觸法處と聲香味觸法處とは合するに非ず離るるに非ず。是の如く色處は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法處も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界と眼界とは合するに非ず離るるに非ず、耳鼻舌身意界と耳鼻舌身意界とも亦た合するに非ず離るるに非ず。是の如く眼界は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意界も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界と色界とは合するに非ず離るるに非ず、聲香味觸法界と聲香味觸法界とも亦た合するに非ず離るるに非ず。是の如く色界は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く聲香味觸法界も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界と眼識界とは合するに非ず離るるに非ず、耳鼻舌身意識界と耳鼻舌身意識界とも亦た合するに非ず離るるに非ず。是の如く眼識界は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如く耳鼻舌身意識界も亦た合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法と一切法とは合するに非ず離るるに非ず。是の如く一切法は合するに非ず離るるに非ざる是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

[四]復た次に善勇猛、色蘊は減ずるに非ず増すに非ず、受想行識蘊も亦た減ずるに非ず増すに非ず。

【三】一切法の非合非離、是れ般若波羅蜜多なることを明す。

【四】一切法の非減非增、是れを般若波羅蜜多となすことを明す。

ふ。善勇猛、色界は色界の所行に非ず、聲香味觸法界も亦た聲香味觸法界の所行に非ず。善勇猛、色界は色界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し色界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、聲香味觸法界も亦た聲香味觸法界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し聲香味觸法界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界の所行に非ず、耳鼻舌身意識界も亦た耳鼻舌身意識界の所行に非ず。善勇猛、眼識界の眼識界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し眼識界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、耳鼻舌身意識界も亦た耳鼻舌身意識界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し耳鼻舌身意識界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は一切法の所行に非ず。善勇猛、一切法は一切法の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し一切法に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[二]復た次に善勇猛、色蘊は色蘊の自性を捨てず、受想行識蘊も亦た受想行識蘊の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は眼處の自性を捨てず、耳鼻舌身意處も亦た耳鼻舌身意處の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は色處の自性を捨てず、聲香味觸法處も亦た聲香味觸法處の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は眼界の自性を捨てず、耳鼻舌身意界も亦た耳鼻舌身意界の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色界は色界の自性を捨てず、聲香味觸法界も亦た聲香味觸法界の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼識界は眼識界の自性を捨せず、耳鼻舌身意識界は耳鼻舌身意識界の自性を捨てず。若し自性に於て是の如く遍知すば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、一切法は一切法の自性を捨てず、若し自性に於て是の如く遍知せば是れを般若波羅蜜多と謂

【二】般若波羅蜜多は先に云へる如く一切法に於て離自性なるが故に又一切法の自性に於て遍知することを明す。

眼識界は眼識界の自性無く耳鼻舌身意識界は耳鼻舌身意識界の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。一切法は一切法の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

卷の第五百九十五

第十六般若波羅蜜多分の三

[一]復た次に善勇猛、色蘊は色蘊の所行に非ず受想行識蘊も亦た受想行識蘊の所行に非ず。善勇猛、色蘊は色蘊の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し色蘊に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、受想行識蘊も亦た受想行識蘊の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し受想行識蘊に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼處は眼處の所行に非ず、耳鼻舌身意處も亦た耳鼻舌身意處の所行に非ず。善勇猛、眼處は眼處の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し眼處に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、耳鼻舌身意處も亦た耳鼻舌身意處の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し耳鼻舌身意處に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、色處は色處の所行に非ず、聲香味觸法處も亦た聲香味觸法の所行に非ず。善勇猛、色處は色處の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し色處に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、聲香味觸法處も亦た聲香味觸法處の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し聲香味觸法處に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、眼界は眼界の所行に非ず、耳鼻舌身意界も亦た耳鼻舌身意界の所行に非ず。善勇猛、眼界は眼界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し眼界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、耳鼻舌身意界も亦た耳鼻舌身意界の所行に非ざるが故に知る無く見る無し。若し耳鼻舌身意界に於て知る無く見る無くんば是れを般若波羅蜜多と謂

【一】般若波羅蜜多は一切法に於て無知無見なることを明す。

觸法界の性を離る。所以は何ん、聲香味觸法界の中に聲香味觸法界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼識界とは眼識界の性を離る。所以は何ん、眼識界の中に眼識界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意識界とは耳鼻舌身意識界の性を離る。所以は何ん、耳鼻舌身意識界の中に耳鼻舌身意識界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。一切法とは一切法の性を離る。所以は何ん、一切法の中に一切法の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[四四]復た次に善勇猛、色蘊の自性は色蘊を離れ受想行識蘊の自性は受想行識蘊を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼處の自性は眼處を離れ耳鼻舌身意處の自性は耳鼻舌身意處を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色處の自性は色處を離れ聲香味觸法處の自性は聲香味觸法處の自性を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼界の自性は眼界を離れ耳鼻舌身意界の自性は耳鼻舌身意界を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色界の自性は色界を離れ聲香味觸法界の自性は聲香味觸法界を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼識界の自性は眼識界を離れ耳鼻舌身意識界の自性は耳鼻舌身意識界を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。一切法の自性は一切法を離る。此の離自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[四五]復た次に善勇猛、色蘊は色蘊の自性無く受想行識蘊は受想行識蘊の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼處は眼處の自性無く、耳鼻舌身意處は耳鼻舌身意處の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色處は色處の自性無く聲香味觸法處は聲香味觸法處の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼界は眼界の自性無く耳鼻舌身意界は耳鼻舌身意界の自性無し。此の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色界は色界の自性無く聲香味觸法界は聲香味觸法界の自性無し。是の無自性とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。

【四四】離自性是れ般若波羅蜜多なることを明す。

【四五】無自性是れ般若波羅蜜多なることを明す。

する是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。聲香味觸法界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼識界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意識界の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。一切法の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。[四三]復た次に善勇猛、色蘊とは色蘊の性を離る。所以は何ん、色蘊の中に色蘊の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。受想行識蘊とは受想行識蘊の性を離る。所以は何ん、受想行識蘊の中に受想行識蘊の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼處とは眼處の性を離る。所以は何ん、眼處の中に眼處の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意處とは耳鼻舌身意處の性を離る。所以は何ん、耳鼻舌身意處の中に耳鼻舌身意處の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色處とは色處の性を離る。所以は何ん、色處の中に色處の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。聲香味觸法處とは聲香味觸法處の性を離る。所以は何ん、聲香味觸法處の中に聲香味觸法處の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼界とは眼界の性を離る。所以は何ん、眼界の中に眼界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意界とは耳鼻舌身意界の性を離る。所以は何ん、耳鼻舌身意界の中に耳鼻舌身意界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色界とは色界の性を離る。所以は何ん、色界の中に色界の性有るに非ざればなり。此の無所有とする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。聲香味觸法界とは聲香味

【四三】無所有是れ般若波羅蜜多なることを明す。

亦た耳鼻舌身意界の內に在らず、耳鼻舌身意界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は色界の內に在らず、色界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。亦た聲香味觸法界の內に在らず、聲香味觸法界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は眼識界の內に在らず、眼識界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。亦た耳鼻舌身意識界の內に在らず、耳鼻舌身意識界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は一切法の內に在らず、一切法の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。[四〇]復た次に善勇猛、是の如き般若波羅蜜多は色蘊と相應するに非ず相應せざるに非ず、受想行識蘊とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は眼處と相應するに非ず相應せざるに非ず、耳鼻舌身意處とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は色處と相應するに非ず相應せざるに非ず聲香味觸法處とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は眼界と相應するに非ず相應せざるに非ず。耳鼻舌身意界とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は色界と相應するに非ず相應せざるに非ず、聲香味觸法界とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は眼識界と相應するに非ず相應せざるに非ず、耳鼻舌身意識界とも亦た相應するに非ず相應せざるに非ず。是の如き般若波羅蜜多は一切法と相應するに非ず相應せざるに非ず。

[四一]復た次に善勇猛、[四二]色蘊の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。受想行識蘊の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。眼處の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。耳鼻舌身意處の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。色處の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しとする是れを般若波羅蜜多と謂ふ。聲香味觸法處の眞如不虛妄性不變異性は所有性の如しと

【四〇】般若は諸法と非相應、非不相應たることを明す。

【四一】般若は所有性の如きを明す。

【四二】色蘊眞如なるが故に實在すとせば過てり、所有性の假設なるが如く眞如と云ふも亦假なり。

の如く本性得可からずと說くなり。眼識界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。耳鼻舌身意識界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三七]善勇猛、一切法に卽するは般若波羅蜜多に非ず、一切法を離るるも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、一切法の彼岸は一切法に卽するに非ざればなり。一切法の彼岸の如く一切法も亦た爾なり。善勇猛、此の中一切法の彼岸は一切法に卽するに非ずとは一切法の繫を離るるを說くなり。一切法の彼岸の如く一切法も亦た爾なりとは一切法の自性是の如しと說くなり、卽ち一切法は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。一切法の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三八]復た次に善勇猛、是の如き般若波羅蜜多は色蘊に依らず亦た受想行識蘊に依らず。是の如き般若波羅蜜多は眼處に依らず亦た耳鼻舌身意處に依らず。是の如き般若波羅蜜多は色處に依らず亦た聲香味觸法處に依らず。是の如き般若波羅蜜多は眼界に依らず亦た耳鼻舌身意界に依らず。是の如き般若波羅蜜多は色界に依らず亦た聲香味觸法界に依らず。是の如き般若波羅蜜多は眼識界に依らず亦た耳鼻舌身意識界に依らず。是の如き般若波羅蜜多は一切法に於て都て依る所無し。[三九]復た次に善勇猛、是の如き般若波羅蜜多は色蘊の內に在らず、色蘊の外に在らず兩間に在らず遠離して住するなり。亦た受想行識蘊の內に在らず、受想行識蘊の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は眼處の內に在らず、眼處の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。亦た耳鼻舌身意處の內に在らず、耳鼻舌身意處の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は色處の內に在らず、色處の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。亦た聲香味觸法處の內に在らず、聲香味觸法處の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。是の如き般若波羅蜜多は眼界の內に在らず、眼界の外に在らず、兩間に在らず遠離して住するなり。

【三七】　七に一切法に就て說く。

【三八】　般若無所依を明す。

【三九】　般若の諸法を遠離して住することを明す。內、外、中にあらず、內に在りて內を離るゝなり。

するも亦た般若波羅蜜多に非ず。色界を離るるは般若波羅蜜多に非ず、聲香味觸法界を離るるも亦た般若波羅蜜多に非ず。聲香味觸法界を離るるも亦た般若波羅蜜多に非ず、何を以ての故に、善勇猛、色界の彼岸は色界に卽するに非ず、聲香味觸法界の彼岸も亦た聲香味觸に卽するに非ざればなり。色界の彼岸の如く色界も亦た爾なり。聲香味觸法界の彼岸の如く聲香味觸法界も亦た爾なり。善勇猛、此の中色界の彼岸は色界に卽するに非ずとは色界の繫を離るるを說くなり。聲香味觸法界の彼岸は聲香味觸法界に卽するに非ずとは聲香味觸法界の繫を離るるを說くなり。色界の彼岸の如く色界も亦た爾なりとは色界の自性是の如しと說くなり、卽ち色界は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。聲香味觸法界の彼岸の如く聲香味觸法界も亦た爾なりとは聲香味觸法界の自性是の如しと說くなり、卽ち聲香味觸法界は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。色界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。聲香味觸法界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三六]善勇猛、眼識界に卽するは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意識界に卽するも亦た般若波羅蜜多に非ず。眼識界を離るるは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意識界を離るるも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、眼識界の彼岸は眼識界に卽するに非ず、耳鼻舌身意識界の彼岸は耳舌身鼻意識界に卽するに非ざればなり。眼識界は彼岸の如く眼識界も亦た爾なり。耳鼻舌身意識界の彼岸の如く耳鼻舌身意識界も亦た爾なり。善勇猛、眼識界の彼岸は眼識界に卽するに非ずとは眼識界の繫を離るるを說くなり。耳鼻舌身意識界の彼岸は耳鼻舌身意識界に卽するに非ずとは耳鼻舌身意識界の繫を離るるを說くなり。眼識界の彼岸の如く眼識界も亦た爾なりとは眼識界の自性是の如しと說くなり卽ち眼識界は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。耳鼻舌身意識界の彼岸の如く耳鼻舌身意識界も亦た爾なりとは耳鼻舌身意識界の自性是の如しと說くなり、卽ち耳鼻舌身意識界は所有る性

【三六】六に眼耳鼻舌身意識界に就て說く。

の彼岸も亦た聲香味觸法處に卽するに非ず。色處の彼岸の如く色處も亦た爾なり、聲香味觸法處の彼岸の如く聲香味觸法處も亦た爾なり。善勇猛、此の中色處の彼岸は色處に卽するに非ずとは色處の繫を離るゝを說くなり。聲香味觸法處の彼岸も亦た聲香味觸法處に卽するに非ずとは聲香味觸法處の繫を離るゝを說くなり。色處の彼岸の如く色處も亦た爾なりとは色處の自性是の如しと說くなり。卽ち色處は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。聲香味觸法處の彼岸の如く聲香味觸法處も亦た爾なりとは聲香味觸法處の自性是の如しと說くなり、卽ち聲香味觸法處は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。色處の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。聲香味觸法處の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三四]善勇猛、眼界に卽するは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意界に卽するも亦た般若波羅蜜多に非ず。眼界を離るるは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意界を離るるも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、眼界の彼岸は眼界に卽するに非ず、耳鼻舌身意界の彼岸も亦た耳鼻舌身意界に卽するに非ず。眼界の彼岸の如く眼界も亦た爾なり、耳鼻舌身意界の彼岸の如く耳鼻舌身意界も亦た爾なり。善勇猛、此の中眼界の彼岸は眼界に卽するに非ずとは眼界の繫を離るるを說くなり。耳鼻舌身意界の彼岸は耳鼻舌身意界に卽するに非ずとは耳鼻舌身意界の繫を離るるを說くなり。眼界の彼岸の如く眼界も亦た爾なりとは眼界の自性是の如しと說くなり、卽ち眼界は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。耳鼻舌身意界の彼岸の如く耳鼻舌身意界も亦た爾なりとは耳鼻舌身意界の自性是の如しと說くなり、卽ち耳鼻舌身意界は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。眼界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。耳鼻舌身意界の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三五]善勇猛、色界に卽するは般若波羅蜜多に非ず、聲香味觸法界に卽

【三四】四に眼耳鼻舌身意界に就て說く。

【三五】五に色聲香味觸法界に就て說く。

とは色蘊の繫を離るゝを說くなり。受想行識蘊の彼岸も亦た受想行識蘊に卽するに非ずとは受想行識蘊の繫を離るゝを說くなり。色蘊の彼岸の如く色蘊も亦た爾なりとは色蘊の自性是の如しと說くなり、卽ち色蘊は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。受想行識の彼岸の如く受想行識蘊も亦た爾なりとは受想行識蘊の自性是の如しと說くなり、卽ち受想行識蘊は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。色蘊は所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。受想行識蘊は所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三二]善勇猛、眼處に卽するは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意處に卽するも亦た般若波羅蜜多に非ず。眼處を離るゝは般若波羅蜜多に非ず、耳鼻舌身意處を離るゝも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、眼處の彼岸は眼處に卽するに非ず、耳鼻舌身意處の彼岸も亦た耳鼻舌身意處に卽するに非ざればなり。眼處の彼岸の如く眼處も亦た爾なり、耳鼻舌身意處の彼岸の如く耳鼻舌身意處も亦た爾なり。善勇猛、此の中眼處の彼岸は眼處に卽するに非ずとは眼處の繫を離るゝを說くなり。耳鼻舌身意處の彼岸も亦た耳鼻舌身意處に卽するに非ずとは耳鼻舌身意處の繫を離るゝを說くなり。眼處の彼岸の如く眼處も亦た爾なりとは眼處の自性是の如しと說くなり。卽ち眼處は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。耳鼻舌身意處の彼岸の如く耳鼻舌身意處も亦た爾なりとは耳鼻舌身意處の自性是の如しと說くなり。卽ち耳鼻舌身意處は所有る性の如く本性得可からずと說くなり。眼處の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。耳鼻舌身意處の所有る性の如く本性得可からざるが如く當に知るべし般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。[三三]善勇猛、色處に卽するは般若波羅蜜多に非ず、聲香味觸法處に卽するも亦般若波羅蜜多に非ず。色處を離るゝは般若波羅蜜多に非ず、聲香味觸法處を離るゝも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、色處の彼岸は色處に卽するに非ず、聲香味觸法處

[三二] 二に眼耳鼻舌身意處に就て說く。

[三三] 三に色聲香味觸法處に就て說く。

すること妙高山の如くにして讃むるも盡くすこと能はざればなりと。是に於て佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、今此の衆會は無邊清淨希有殊勝の功德を成就し、諸佛世尊稱揚讃歎するも尙ほ盡くすこと能はず、況んや餘の有情をや。又た舍利子、今此の衆會は佛世尊の力の集めしむる所に非ず亦た如來此の衆會に於て欲樂する所有りて其れをして集めしむるにも非ず、但だ此の衆の自らの善根力に由りて我が名を聞くことを得て而かも會に來集せるのみ。又た此の大衆は佛の爲に來れるに非ず亦た如來の神通召命せるにも非ず、但だ此の衆の自らの善根力の覺する所に由りて發して而かも此に來至せるのみ。又た法も應に爾るべし、若し佛世尊、斯の如き甚深の妙法を說かんと欲せば定めて是の如き大菩薩有りて諸の佛國より而かも會に來集せん。又た舍利子、諸佛世尊若しは去來今に若しは十方界に將に一切の疑を斷ずる微妙甚深の菩薩藏の法を開示せんと欲せば必ず是の如き無量無邊最勝清淨の功德衆有りて集らん。若し是の如き無量無邊最勝清淨の功德衆有りて集らば必ず是の如く一切の疑を斷ずる微妙甚深の菩薩藏の法を說かんと。

[二八]爾の時世尊、善勇猛菩薩摩訶薩に告げて言はく、我れ處處に於て諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣說して勸め修學せしむ。云何が菩薩摩訶薩衆の學する所の般若波羅蜜多なる。若し能く遠く諸法の實性に達せば是れを般若波羅蜜多と謂ふ。是の如き般若波羅蜜多は微妙甚深にして實に說く可からず。今汝等が所知の境界の世俗の文句に隨ひて方便して甚深般若波羅蜜多を演說し諸の菩薩摩訶薩衆をして聞き已て方便して精勤し修學せしめん。[二九]善勇猛、[三〇]色蘊に即するは般若波羅蜜多に非ず受想行識蘊に即するも亦た般若波羅蜜多に非ず、色蘊を離るゝは般若波羅蜜多に非ず受想行識蘊を離るゝも亦た般若波羅蜜多に非ず。何を以ての故に、善勇猛、[三一]色蘊の彼岸は色蘊に即するに非ず受想行識蘊の彼岸も亦た受想行識蘊に即するに非ず。色蘊の彼岸の如く色蘊、亦た爾なり、受想行識蘊の彼岸の如く受想行識蘊も亦た爾なり。善勇猛、此の中色蘊の彼岸は色蘊に即するに非ず

【二八】佛、方便して般若波羅蜜多を宣說す。

【二九】一切法の本性不可得を說き、般若波羅蜜多も亦是の如しとなす。

【三〇】一に色受想行識蘊に就て說く。

【三一】この句義直ぐ下の解說を見よ。

有情に於て輕んじて衒賣し或は心に厭賤して之を棄捨せんと。復た次に慶喜、若しは旃茶羅、若しは補羯娑、若しは諸の工匠、若しは餘の貧賤惡活命者は終に多價の珍寶を求むること能はず、設ひ遇ま獲得するも自ら受用せず少價を得るに隨て卽ち賣りて他に與へ、或は復た之を厭ひて便ち棄捨せん。慶喜當に知るべし、[二三]旃茶羅等とは卽ち是れ一切の外道の增語にして亦た是れ外道の諸の弟子衆なり。諸の餘の貧賤惡活命者とは卽ち諸の愚夫異生の增語なり。彼れは常に惡見の淤泥に陷沒し一切時に於て有所得を行じ、相の縛著を樂ひ、有相行を行じ、諸の趣く所有るは路を越えて行き、聖法の財寶を欣求すること能はず、設ひ遇ま獲得するも受用すること能はず、或は深く厭ひて棄て或は賤みて他に與えんと。慶喜當に知るべし、若し諸の佛子、佛の行處を以て、如來の十力四無畏等の無邊の佛法を住持して斷盡せざらしめんと欲するが爲に、是の如き深法の寶藏を得んと求めんに彼れは是の如き深法の寶藏に於て眞實の想を起し深心に愛重して善能く受用し精勤して守護して壞失せざらしむと。慶喜當に知るべし、[二四]師子吼は[二五]野干能く學するに非ず、要らず師子王所生の子能く斯の吼ゆることを學すと。慶喜當に知るべし、野干とは諸の邪見愚夫異生に喩へて言ふ。彼れは定めて精勤し方便して正等覺の大師子吼を學すること能はず、要らず諸の佛子、正等覺に從ひて自然智生じて乃ち能く精勤して正等覺の大師子吼を學するなり。是の如く佛子は正等覺の無上法財に於て善能く受用すと。

[二六]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、甚だ奇なり、如來應正等覺は能く是の如き淸淨の衆會を集めたまへり。希有なり、如來應正等覺は能く是の如き最勝の衆會、自然の集會、[二七]伏し難き衆會、猶ほ金剛の若く動ずる無く轉ずる無く擾るゝ無き衆會を集めて爲に般若波羅蜜多を說きたまへりと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、汝善能く衆會の功德を讚ずと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、衆會の功德は我れ能く讚むるに非ず。所以は何ん、今此の衆會は無量無邊の功德を成就

【二三】此には諸外道を指して旃茶羅、補羯娑（屠肴等の賤種）と云ふ、種姓を賤むにあらず。

【二四】師子吼等。狐爲獸王開獅子吼死話（五分律、法苑珠林五十四）の傳說を引く。

【二五】野干。狐のこと。

【二六】この淸淨の衆會の功德を讚ず。

【二七】伏し難き、常勝する。

念を作すが如し、我れ等今審かに父王と我れと同利なりと知れりと、是の如く如來應正等覺は是れ大法主にして大法王爲り、自然に諸佛の眞子を召集し大法藏を以て分布して之を與ふるに其の心都て詭惑偏黨無し。時に諸の佛子既に妙法を獲て倍ゝ如來に於て深く敬愛を生じ各是の念を作す、我れ等今審かに如來と我れと同利なりと知れり、我れ等今應に熾然として精進し佛種を紹隆して斷絶せざらしむべしと。

[一九]復た次に慶喜、是の如き法寶は微妙甚深にして餘の有情の能く信受する所に非ず、劣信解の者、增上慢の者、惡見を行ずる者、有相を行ずる者、有所得を行ずる者、我慢に壞せらるゝ者、貪瞋癡の摧伏する所と爲れる者、[二〇]路を越へて行ずる者、諸の是の如き等[二一]の名の餘の有情は此の法門に於て信受すること能はず。慶喜當に知るべし、下劣信解の諸の有情類は輪王の財寶を敬愛すること能はず、要らず輪王の子にして方めて敬愛を生ずと。慶喜當に知るべし、貧窮下劣の諸の有情類は豈に輪王所有の[二二]輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏臣寶、主兵將寶、及び餘の種種上妙の衣服、末尼、眞珠、金銀、珊瑚、吠琉璃等の多價の財寶を貪らんや。彼の貧窮人は設ひ遇ま獲得するも自ら慚恥を懷きて受用すること能はず、設ひ復た轉賣するも價直を知らず、索むる所至て微にして酬ゆるに隨て便ち與へ、或は寶に於て鑒別無きに由るが故に心便ち厭賤して之を棄捨せんと。慶喜當に知るべし、彼の貧窮の者は唯だ寶の價直を了せざるのみに非ず亦復た寶の名字をも知らずと。是の如く慶喜、唯だ如來應正等覺の法身の子、或は已に見諦して大菩提を求むる諸の聲聞等或は諸の菩薩の眞淨の善友に攝受せらるゝ有りて乃ち能く此の法の寶藏を信受す。彼れは深く不可得空相應の法寶を敬愛し、亦た能く眞淨佛法相應の理教を受用し、亦た能く一切法に於て執無く著無き諸の菩薩行を修行す。慶喜當に知るべし、貧窺下劣の諸の有情類は謂ゆる正聞を闕き正聞を壞する者愚癡にして眼無し、豈に能く正法の寶藏を希求せんや。設ひ遇ま獲得するも敬重するを知らず、他の

【一九】般若は微妙甚深にして信解し難きを明す。
【二〇】越路行者、脫線違法の邊行人なり。
【二一】言詞整はざるも上記の類と云ふこと。
【二二】轉輪王の七寶なり。

[一五]瓦礫鹹鹵の如き者無く、已に曾て多く百千の佛を供養し諸佛の法に於て堅固に安住せりと。慶喜當に知るべし、瓦礫の如き者とは卽ち是れ愚夫異生の增語にして甚深の法に於て容細の義無きなり。鹹鹵等とは當に知るべし、諸の增上慢の有情を顯示する增語なり。甚深の行を生長すること能はざるが故に。慶喜當に知るべし、今此の衆會は增上慢を離れ廣大の善根の集起する所にして是れ深法の器なりと。

[一六]復た次に慶喜、譬へば無熱大池の龍王因緣有るが故に大歡喜を生じ自宮の中に於て五欲の樂を受け、歡喜するを以ての故に復た自宮より大雨の[一七]八功德を具せるを降澍す。時に彼の諸子各自宮に往きて亦復た觀娛して五欲の樂を受け和合して遊戲し大甘雨を降らすが如く、是の如く如來應正等覺諸の衆會の爲に大法雨を降らす、時に無量の長子の菩薩摩訶薩衆有り、聞き已て結集し、或は卽ち此の[一八]堪忍界の中に於て自らの如來應正等覺に對し諸の衆會の爲に大法雨を雨らし、或は彼れ彼れの自らの佛土の中に往いて諸の如來應正等覺に對し各自衆に於て大法雨を雨らさん。復た次に慶喜、海龍王時有りて觀悅し自宮の內より大雨を降澍するに宮中の所有る舊住の諸龍は降澍する所に隨て皆歡喜して受け此の大雨に於て善く分齊を知り、彼の諸の龍子も亦た各歡悅して父王の降らす所の大雨を堪受するが如し。所以は何ん、餘の龍等有りて降らす所の雨に於ては分齊を知らず亦復た歡喜して忍受すること能はざればなり。是の如く如來應正等覺大衆會に處して深法の寶を雨らすに佛の長子大菩薩衆の、久しく無量殊勝の善根を植え甚深の法門に生長せられ種種廣大の意樂を成就せる有りて如來の大法門の雨を堪受し聞き已て歡喜して善く分齊を知る。此の義の爲の故に今如來は清淨衆の中にて大師子吼し大法雨を雨らして大饒益を作す。復た次に慶喜、轉輪王多く諸子有り母族清淨にして形貌端嚴なり、其の王時有りて多く寶藏を集め總べて諸子に命じ分布して之を與ふに其の心都て誑惑偏黨無し。時に諸の王子旣に衆珍を獲て倍々父王に於て深く敬愛を生じ各是の

【一五】化を受けぬつまらぬもの。
【一六】般若の深法を信受する機を喩說す。
【一七】八功德。稱讚淨土經には澄淨、淸冷、甘美、輕輭、潤澤、安和、除飢渴等過、長養諸根の八とす。倶舍十一には甘、冷、輭、輕、淸淨、不臭、不損喉、不傷腸とす。中阿には海有八德經あり。
【一八】堪忍界。娑婆世界のこと。

深法は彼れの所行に非ず。諸の菩薩乘に趣向する者有りて若し有相を行じて善友を遠離し惡友に攝せらるれば彼れは是の如き染著無き法に於ては亦た行ずること能はず、彼の境に非ざるが故に。慶喜當に知るべし、唯だ見諦して大菩提を求むる聲聞乘等及び菩薩乘の善友に攝せられて此の深法に於て能く信解を生じ、此の深法に於て能く隨順行し、此の深法に於て能く深く證會するを除くのみと。復た次に慶喜、若し諸の菩薩衆相を遠離して無相行無差別に安住せば甚深の法に於て畢竟種種の疑網分別執著より出離し、其の欲する所に隨て皆能く成辦し、心菩提に於て倶に所得無く、諸の法性に於て差別解無く亦復た差別の行を起さず、趣く所有るに隨て皆能く悟入せん。彼れは是の如き甚深の法門に於て皆能く受持して心に疑惑無し。所以は何ん、彼れは諸法に於て皆隨順して住し違逆する所無ければなり。若し法に於て彼れ彼れの問ひを起すこと有らば皆能く隨順して彼れ彼れの答へを作し、此彼を和會して相違せざらしむ。佛は彼れの爲の故に此の深法を説きたまへりと。

[一三]爾の時佛、具壽慶喜に告げたまはく、汝應に舍利子の説を受持すべし。彼れの是の如き説と我れと異ること無し。慶喜當に知るべし、増上慢の者は此の法敎に於て悟入すること能はずと。彼の境に非ず彼の地に非ざるを以ての故に。慶喜當に知るべし、是の如き法敎は諸の法性に順ひ、佛菩提に順ひ、佛菩提に於て能く助伴と爲り、下劣の信解の諸の有情類は此の甚深廣大の佛法に於て心悟入せず受け行ずること能はずと。慶喜當に知るべし、下劣信解の増上慢の者は佛菩提及び甚深の法に於て違逆して住し、諸の爲す所有るは増上慢に隨ひて此の甚深の法を信受すること能はずと。[一四]慶喜當に知るべし、今此の衆會は最勝清淨にして雜染を遠離し曾て多佛の所にて弘誓願を發し、無量殊勝の善根を種植し、無邊の過去の諸佛に奉事し、甚深の法に於て久しく信解を生じ、甚深の行に於て已に熟く修行せりと。故に今如來應正等覺は此の衆を委信して猜疑する所無く、所説の法門皆悉く明了にして護惜する所無く爲に法要を説く。慶喜當に知るべし、今此の衆會は堅固清淨にして

【一三】増上慢の者、般若の甚深法を信受し得ざることを明す。

【一四】この衆會の最勝清淨たることを説く。

[二]爾の時慶喜便ち佛に白して言さく、諸の増上慢にして有相を行ずる者は佛の所說に於て恐怖を懷くこと勿らんかと。時に舍利子、慶喜に語て言はく、増上慢にして有相を行ずる者の所行の境に非ざるに彼れ何すれぞ恐怖せん。所以は何ん、恐怖を懷く者は増上慢を離るればなり。惡友に攝せらるれば甚深の法を聞くも測量すること能はずして求むる所を失はんを恐れて便ち恐怖を生ずるなり。復た次に慶喜、諸の増上慢を斷ぜんと欲するが爲に正行を行ずる者有らば怖畏有るを容る。諸の増上慢を斷ぜんと欲するが爲に勤め精進する者も亦た怖畏有り。所以は何ん、彼れは既に能く増上慢の失を了して慢無き性を求め及び慢を斷ぜんと求むればなり。甚深の法を聞くも測量すること能はずして求むる所を失はんを恐れて便ち怖畏を生ずるなり。復た次に慶喜、若し慢に於て得ず見ず恃む無く執する無き有らば彼れは諸法に於て恐れ無く怖き無し。復た次に慶喜、如來は増上慢の者の爲に是の如き法を說きたまはず、故に彼れは此れに於て恐怖を容るゝ無し。諸の増上慢を斷ぜんと欲するが爲に勤め修行する者有りて是の如き法を聞きて能く正しく了知せば亦た恐怖無し。復た次に慶喜、増上慢の名は當に知るべし勝法を増益するを顯示すと。若し現に増上慢を行ずる者有らば彼れは必ず現に勝法を増益せんと行ずるなり。増益を行ずるを以て平等行に非ず、彼れは設ひ平等行を行ぜんと樂ふ者なるも此の深法に於て心に猶豫を懷きて恐怖を生ぜず亦た信受もせざるなり。復た次に慶喜、若しは平等不平等の中に於て倶に所得無く、若し平等不平等の中に於て倶に恃む所無く、若しは平等不平等の中に於て倶に執する所無くんば彼れは諸法に於て驚かず恐れず怖かず畏れざるなり。復た次に慶喜、此の甚深の法は諸の愚夫異生の行處に非ず、此の甚深の法は諸の愚夫異生の境界に非ず、此の甚深の法は諸の愚夫異生の了する所に非ず。一切の愚夫異生の行ずる所攝する所覺する所の事を超過するが故に。諸の聲聞乘に趣向する者有りて深法を行ずと雖も、而かも此の深法は彼れの所行に非ず。諸の獨覺乘に趣向する者有りて深法を行ずと雖も、而かも此の

【二】増上慢の者は佛說に於て恐怖を懷かざる所以を明す。

と雖も、而かも能く大菩提心を發起す。若し能く是の如く菩提心を發さば乃ち名づけて眞實の菩薩と爲す可し。彼れは是の如く菩提心を發すと雖も、而かも菩提に於て引發する所無し。何を以ての故に、善勇猛、彼れは已に大菩提に安住せるが故なり。若し能く是の如く執著する所無くんば都て心及び菩提の生滅差別有るを見ず、亦た發心して大菩提に趣向する者有るを見ず。見る無く執する無く執著する所無くんば當に知るべし已に無上菩提に住せるなりと。若し能く是の如く執著する所無くして勝解及び解脫心を發さば當に知るべし名づけて眞實の菩薩と爲すと。〔一〇〕又た善勇猛、若し諸の菩薩、心想及び菩薩想を離れずして菩提心を發さば彼れは菩提に遠ざかり菩提に近づくに非ず。又た善勇猛、若し諸の菩薩菩提に遠有り近有るを見ずんば當に知るべし彼れは無上菩提に近づき亦た眞に菩提心を發せる者と名づくと。我れ此の義に依りて密意に說いて言ふ、若し能く自ら二相無しと知らば彼れは如實に一切の佛法を知らんと。所以は何ん、彼れは能く我及び有情倶に自性無きを證會して即ち能く諸法の無二なるを遍知すればなり。能く諸法の無二なるを遍知するに由りて定めて能く我及び有情と一切法とは皆無性を以て自性と爲して理に差別無しと了達す。若し能く諸法の無二なるを了知せば即ち能く一切の佛法を了知し、若し能く諸法の無二なるを遍知せば即ち能く一切の佛法を遍知し、若し能く我を遍知せば即ち〔一一〕三界を遍知す。又た善勇猛、若し我を遍知せば彼れは便ち能く諸法の彼岸に到らん。云何が名づけて諸法の彼岸と爲す。謂ゆる一切法の平等實性なり。若しは此れを得ず亦た此れをも執せず、若しは彼岸を得ず亦た彼岸をも執せずんば彼れを遍く彼岸に到るを知る者と名づく。是の說を作すと雖も、而かも說くが如くならず。又た善勇猛、諸の菩薩衆は應に是の如く諸の菩薩地に趣くべく、應に是の如く諸の菩薩地を證すべし。當に知るべし即ち是れ菩薩の般若波羅蜜多なりと。謂ゆる此の中に於ては少法も趣く可く證す可き有ること無し。此の中に於ては往來有りと施設す可からざるを以ての故にと。

【一〇】菩薩の般若波羅蜜多を明す。

【一一】三界を遍知するは即ち三界に在りて三界を超出するなり。

ずと覺るに由るが故に菩薩と名づけ亦た摩訶薩及び如實の有情とも名づく。所以は何ん、如實に實有の性に非ざるを知るを以てなり。如實に誰れか實有の性に非ずと知る。謂ゆる諸の世間は皆實有に非ず、實の攝する所に非ず、實に生有るに非ず。但だ假りに安立せるのみ。云何が世間は實に生有るに非ずして但だ假りに安立せるのみなる。實有に非ずとは實に生ずる無きが故なり。實に生ずる無く及び實有に非ざるを以ての故に諸法は實無く性無しと說く。是の如く實有の性に非ざるを知るに由るが故に亦た如實の有情と說く可し。實有の中に於ても亦た實有に執せざるが故に復た隨て如實の有情と說く可し。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。所以は何ん、如實の理には少有情或は[六]摩訶薩も有るに非ざればなり。何を以ての故に、善勇猛、[七]大乘に證入するを以て摩訶薩と名づくるが故なり。

[八]復た次に善勇猛、何をか大乘と謂ふ。謂ゆる一切智を說いて大乘と名づくるなり。云何が一切智なる。謂ゆる諸の所有る智、若しは有爲智、若しは無爲智、若しは世間智、若しは出世智、若しは能證入の是の如き等の智を摩訶薩と名づく。所以は何ん、能く[九]大有情想を遠離するを以て摩訶薩と名づけ、又た能く大無明蘊を遠離するを摩訶薩と名づけ、又た能く大諸行蘊を遠離するを摩訶薩と名づけ、又た能く大無知蘊を遠離するを摩訶薩と名づけ、又た能く大衆苦蘊を遠離するを摩訶薩と名づくればなり。又た善勇猛、若し能く大有情想を遠離せば摩訶薩と名づくるは、彼れは一切の心及び心所法に於て所得無しと雖も、而かも能く心の本性を了知す。彼れは菩提及び菩提分の法に於て所得無しと雖も、而かも能く菩提の本性を了知す。彼れは此の智に由りて心內に於て菩提有りと見るに非ず亦た心を離れて菩提有りと見るに非ず。菩提の內に於て實心有りと見るに非ず亦た菩提を離れて實心有りと見るに非ず。是の如く除遣して修習する所無し除遣する所無く、修習する所及び除遣する所に於て倶に得る所無く、恃怙する所無く、執著する所無し。菩提の心性有るを見ず

【六】摩訶薩。摩訶薩埵(Mahāsattva)。大有情と譯す。菩薩の行を行じて一切衆生を濟度する人。
【七】大乘に證入。般若無相平等に住して一切を攝するなり。
【八】眞實の菩薩の續き。
【九】大有情想あらば分限あり大有情に非ず、その想を遠離するが故に大なり。

所無く得る所無きが故なり。又た善勇猛、諸の如來應正等覺は菩提の性に於て少しくとも得る所有るに非ず、一切法は得可からざるを以ての故に、法に於て得る無きを說いて菩提と名づく。諸佛菩提は應に是の如く說くべし。而かも說くが如くならず、諸相を離るるが故に。又た善勇猛、若し諸の菩薩菩提心を發して是の如き念を作さん、我れ今に於て菩提心を發す、此れは是れ菩提なり。我れ今此の菩提に趣かんが爲の故に修行心を發すと。是の諸の菩薩は所得有るが故に菩薩と名づけず。但だ名づけて[三]狂亂の薩埵と爲す可きのみ。何を以ての故に、善勇猛、彼の菩薩は決定して發起性有りと執するに由るが故に、決定して發す所の心有りと執するが故に、決定して菩提性有りと執するが故なり。若し諸の菩薩菩提心を發して執著する所有らば但だ名づけて菩提心に於て執すること有る薩埵と爲す可きのみ。眞淨發心の菩薩と名づけず。彼れは造作するに由りて菩提心を發す、是の故に復た造作の薩埵と名づけ菩薩と名づけず。彼れは[四]加行に由りて菩提心を發す、是の故に復た加行の薩埵と名づけ菩薩と名づけず。何を以ての故に、善勇猛、彼の諸の菩薩は取る所有るに由りて菩薩心を發せば但だ名づけて發心の薩埵と爲す可きのみにして菩薩と名づけざればなり。又た善勇猛、實に能く菩提心を發す者無し。菩提心は發す可からざるを以ての故に、菩提は生ずる無く亦た心無きが故に。彼の諸の菩薩は唯だ發心にのみ執して菩提生ずる無き心の義を了せざるなり。又た善勇猛、若し[五]生平等性ならば卽ち實平等性なり。若し實平等性ならば卽ち心平等性なり。若し心平等性ならば卽ち是れ菩提なり。若し此の中に於て如實性有らば卽ち此の中に於て分別する所無し。若し分別心及び菩提ならば彼れ便ち心及び菩提に執著す。此の二種に由りて菩提心を發さば當に知るべし眞に發心せる者と名づけずと。又た善勇猛、菩提と心とは各異り有るに非ず。心の內に於て實の菩提有るに非ず、菩提の內に實心有るを得るに非ず。菩提と心とは如實に理の如く、倶に、是れ覺なり、是れ心なりと說く可からず。如實に菩提と心とは倶に得可からず生ずる無く生ぜ

【三】狂亂の薩埵。狂者。

【四】加行。修行の功を增加する義にて、正修行の功を增加せしむる傍修行をいふ。

【五】生平等性は分別の差別生を排するをいふ。

と名づけず。彼の法無きを以て而かも諸の有情の執して我と爲し執して我所と爲し、我我所の執、執する所、恃む所は皆實有に非ざるなり。皆是れ虛妄なるが故に是の說を作す、一切有情は實の有情に非ず、一切有情は皆是れ無明緣行の有情なりと。又た善勇猛、有情は少實法も執して我と爲し或は我所と爲し或は[四五]二執と爲す可き有るに非ず、執する所、恃む所實法無きを以て是の故に一切有情は實の有情に非ずと說く可し。非有情とは當に知るべし、卽ち是れ非實の增語なりと。非實とは當に知るべし卽ち非有情の增語を言ふ。又た非實の有情想の中にて一切有情は妄執して實と爲すが故に是の說を作すが如く、一切有情は實の有情に非ず。又た善勇猛、非實とは謂ゆる此の中に於て實無く起る無きを言ふ。一切法は皆眞實無く亦た起る無きを以ての故に。此の中にて有情は虛妄に執著して自ら纒繫す。是の故に一切有情は皆是れ虛妄所緣の有情なりと說く可し。彼れは自行に於て了知すること能はず。是の故に非實の有情と說く可し。卽ち是れ中に於て遍覺の義無きなり。若し諸行に於て遍覺する者有らば當に知るべし彼の類は菩薩と名づく可しと。

卷の第五百九十四

第十六般若波羅蜜多分の二

[一]復た次に善勇猛、菩薩摩訶薩若し能く法に於て是の如く覺知せば乃ち名づけて眞實の菩薩と爲すべし。菩薩とは謂ゆる能く有情の實無く生ずる無きを隨覺する增語を言ふ。又た菩薩とは一切法に於ても亦た能く如實に佛の如く而かも知れるなり。云何が菩薩は佛の如く而かも知る。謂ゆる如實に一切の法性の實無く生ずる無く亦た虛妄も無きを知るなり。又た諸の菩薩は諸の法性に於て愚夫[二]異生の執する所の如くなるに非ず、愚夫異生の得る所の如くなるに非ず。如實に而かも知るが故に菩薩と名づく。何を以ての故に、善勇猛、夫れ菩提とは執著する所無く分別する所無く積集する

【四五】二執。二種の妄計にて、人執、法執の稱。

【一】眞實の菩薩に就いて明す。

【二】異生。凡夫のこと。

倒に由るが故に自行、自境、自所行の處を覺了すること能はず。若し自行に於て如實に了知せば則ち復た有分別を行ぜざるなり。分別行に由りて一切の愚文は虚妄の境を緣じて顚倒行を起し亦た菩提を緣じて慢執を起す。彼れ妄境を緣じて倒慢行、分別行を起すが故に尙ほ諸の菩薩法すら得ること能はず、況んや菩提を得んをや。若し能く是の如き法を了知せば則ち復た虚妄を緣ずる行を起さず亦た諸法を緣じて慢を起さざるなり。是れを菩薩の無行を行ずと名づく。菩薩は分別に由るが故に分別行を起すべからず。若し是の處に於て分別する所無くんば此の處に於て所行有るに非ず、若し是の處に於て分別を起さずんば此の處に於て復た所行有るに非ず。諸佛菩薩は一切行に於て分別する所無くして而かも修行するが故に一切の憍慢畢竟起らさるなり。菩薩は是の如く一切法を知り、一切法に於て復た[三九]攀緣せず、復た分別せず遊ばず履まず、是の如きを名づけて眞の菩薩行と爲す。無所行を以て方便と爲すが故に。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば是れを則ち名づけて眞の菩薩行と爲す。何を以ての故に、善勇猛、能く是の如く諸法を隨覺し諸法に通達するを以て菩薩と名づくるが故なり。

[三〇]復た次に善勇猛、無有情とは當に知るべし卽ち是れ菩薩の增語なりと。能く一切想を遣除するを以ての故に。所以は何ん、能く一切有情の實の有情に非ざるを了達するを以て一切有情皆有情に非ざればなり。一切有情は皆是れ顚倒執著の有情、一切有情は皆是れ[四一]遍計所執の有情、一切有情は皆是れ[四二]虚妄所緣の有情、一切有情は皆是れ[四三]敗壞自行の有情、一切有情は皆是れ[四四]無明緣行の有情なり。何を以ての故に、善勇猛、若しは法、一切有情は有るに非ざればなり。諸の有情類彼の法を造作せば是れを無明緣行の有情と名づく。何の法か有るに非ざる。謂ゆる執する所の我、執する所の我所、我我所の執、執する所、恃む所、彼の法有るに非ざるなり、若し彼の法有らば一切有情は皆執して我と爲し、執して我所と爲し、我我所の執、執する所、恃む所皆應に實に有るべく、虚妄

【三九】攀緣。猿が木の枝を飛び廻りて休むことなきが如く、心、外境の爲に轉ぜられて靜平を得ざるをいふ。

【四〇】一切有情は非有情なることを說く。

【四一】遍計所執。遍計とは凡夫の妄情は遍く一切法を計度するをいひ、所遍計の法が所遍計の心によつて妄執せられることを遍計所執とす。喩へば木杭を人と誤りたる時、木杭は所遍計、人なりと謂ふ分別の心は能遍計なり。

【四二】虚妄所緣。實人ならざるに實人相を浮べて對境とする云ふ。

【四三】敗壞自行。利他なく自我に對せられたる敗種なり。

【四四】この緣起の動きを實を見ざる無明が我なりとなるなり。

語なり。諸佛の法は物の能く或は減じ或は滿ぜしむる有るに非ず。所以は何ん、卽ち一切法を隨覺するを以ての故なり。若し能く一切の法性を隨覺せば此の中法の或は減じ或は滿ずる無し。一切法とは當に知るべし卽ち是れ法界の增語なりと。彼の法界は減ずる有り滿ずること有るに非ず。所以は何ん、彼の法界は邊際無きを以ての故なり。有情界及び彼の法界は差別得可きに非ず。有情界及び彼の法界は或は減じ或は滿じ或は得或は有るに非ず。是の如く隨覺せば卽ち菩提と名づく。此れに由るが故に諸佛の法は減ずる有り滿ずる有りと施設し得可きに非ずと言ふ。又た善勇猛、減滿の性無く若し能く如實に分別無き者たらば當に知るべし名づけて如實見者と爲すと。此の中に於ては能く取捨有るに非ず。是の如く隨覺せば說いて菩提と名づくるなり。[三六]善勇猛、菩提とは卽ち是れ佛相なり。云何が佛相なる。謂ゆる一切相畢竟無相なれば卽ち是れ佛相なり。何を以ての故に、善勇猛、畢竟無相と菩提相とは自性離なるが故なり。是の如く隨覺するを說いて菩提と名づく。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。何を以ての故に、善勇猛、要らず能く是の如き法を隨覺するが故に說いて菩薩と名づくればなり。[三七]若し菩薩有りて實に是の如き法性を了知せずして而かも我れ能く如實に隨覺せりと謂ひ自ら菩薩なりと稱せば當に知るべし、彼の類は菩薩地に遠ざかり、菩薩法に遠ざかり、菩薩の名を以て天人阿素洛等を誑惑するなりと。又た善勇猛、若し但だ虛しく自ら菩薩と稱し、菩薩を成ぜる者なりと言ふのみならば則ち一切有情は皆應に是れ菩薩なるべし。又た善勇猛、但だ虛しく言ふのみにて菩薩地に入り、菩薩法を得るに非ず、語に由るが故に能く無上正等菩提を證するに非ず。語業に由りて自ら名を稱するが故に便ち菩提を得るに非ず。亦た語に由りて自ら名を稱するが故に菩薩地に入り菩薩法を得るにも非ず。又た善勇猛、一切の有情、菩提行を行ずるも諸法の實性を知らず覺らずんば菩薩と名づけず。所以は何ん、有情非有情を知らざるが故なり。若し有情非有情の性を知りて菩提行を行ぜば應に菩薩を成ずべし。然るに諸の有情は[三八]顚

【三六】菩提相を明す。

【三七】眞淨の菩薩行を明す。

【三八】顚倒。眞理に違ふこと。まよひ。

提薩埵得可き有らば卽ち應に此れは是れ菩提にして此れは菩提に屬し、此れは是れ薩埵にして此れは薩埵に屬すといふを得可し。然かも此れは是れ菩提にして此れは菩提に屬すと說く可からず。亦た此れは是れ薩埵にして此れは薩埵に屬すと說く可からず。能く隨覺するを以て實に薩埵無し。薩埵の性無く薩埵の性を離るるが故に菩薩と名づけ、薩埵無く薩埵の想を除くに由るが故に菩薩と名づく。何を以ての故に、善勇猛、有情界とは卽ち是れ實に有情無き增語なり。有情の中に有情性有るに非ず、有情無きが故に有情界と名づく。若し有情の中に有情性有らば則ち說いて有情界と爲すべからず。有情界とは卽ち無界を顯す。有情界は界性無きを以ての故に。若し有情界界性に卽して有ならば則ち應に實に命者の身に卽する有るべく、若し有情界、界性を離れて有ならば則ち應に實に命者の身に異る有るべし。然るに有情界は實の界性無し。但だ世俗に由りて假說して界と爲すのみ。有情界の中に界性有る可きに非ず亦た界性の中に有情界有るに非ず、界性に卽せる是れ有情界なるに非ず、界性を離れて有情界有るに非ず。一切法は界性無きを以ての故に。

[三五]復た次に善勇猛、我れ此の義に依りて密意に說いて言ふ、諸の有情界は減ずる有り滿ずる有りと施設す可からずと。所以は何ん、有情界は有性に非ざるを以ての故に、諸の有情界は有性を離るるが故なり。有情界の減ずる有り滿ずる有りと施設す可からざるが如く諸法も亦た爾なり、減ずる有り滿ずる有りと施設す可からず。一切法皆實性無きを以ての故に減ずる有り滿ずる有りと言ふ可からず。若し能く是の如く諸法を隨覺せば是れ則ち名づけて佛法を隨覺すと爲す。我れ此の義に依りて密意に說いて言ふ、有情界の減ずる有り滿ずる有りと施設す可からざるが如く諸法も亦た爾なく減ずる有り滿ずる有りと施設す可からずと。若し一切法減ずる無く滿ずる無く無眞實を以て方便と爲さば卽ち是れ佛法減ずる無く滿ずる無きなり。是の如く一切法を隨覺するが故に卽ち佛法減ずるく滿ずる無しと名づく。一切法減滿無きを以て說いて佛法と名づく。佛法は卽ち佛法に非ざる增

【三五】一切法減滿無きことを明す。

非ざるが故に、通達するに非ざるが故に說いて覺悟と名づくと。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。一切法は隨覺す可からざるを以て通達す可からず。又た法非法俱に自性無し。此の理を覺るに由るが故に菩提と名づく。何を以ての故に、善勇猛、諸の如來應正等覺は能く菩提を得るに非ず、諸の如來應正等覺は能く菩提を了するに非ず。如實に菩提は了す可からざるが故に、表す可からざるが故に、諸の如來應正等覺は菩提を生起するに非ず、菩提は無生無起の性なるが故なり。又た善勇猛、菩提とは繫屬する所無しと言ふは菩提の內に少有情も有情施設有るに非ず。菩提の內に於て既に有情、有情施設無くして云何が此れは是れ菩提所有の薩埵、此れは是れ菩提薩埵の般若波羅蜜多なりと說く可けん。又た善勇猛、菩提の中に菩提得可きに非ず、菩提の中に薩埵得可きに非ず。何を以ての故に、善勇猛、菩提は超越し、菩提は生ずる無く、菩提は起る無く、菩提は相無ければなり。[三四]菩提の中に薩埵の性有るに非ず、菩提の中に薩埵得可きに非ず、薩埵に由りて菩提を施設するに非ず、菩提に由りて薩埵を施設するに非ず。薩埵の自性無きを隨覺するが故に說いて菩提と名づけ、菩提の中に實に薩埵無きを知る。是の故に說いて菩提薩埵と名づく。何を以ての故に、善勇猛、菩提薩埵は薩埵想の顯示する所に非ず、薩埵想を除くが故に菩薩と名づくればなり。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。所以は何ん、菩提薩埵は名言を離るるが故なり。菩提薩埵は薩埵性を離れ、菩提薩埵は薩埵想を離れて菩提を知るが故に說いて菩薩と名づく。云何が菩薩は能く菩提を知る。謂ゆる菩提を知るとは一切を超越するなり、菩提は作す無く、菩提は生ずる無く、菩提は滅する無く、菩提性は能く菩提を了するに非ず、亦た菩提は是れ顯了せらるるに非ず。顯了す可からず施設す可からず引轉す可からざるが故に菩提と名づく。若し能く無倒に隨覺し通達し分別する所無く分別永く斷ず。是の故に說いて菩提薩埵と名づく。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。何を以ての故に、善勇猛、菩提薩埵は得可からざるが故なり。若し菩

【三四】菩提薩埵に就て說く。

て無盡の際に至らん。此の無盡の際は卽ち是れ無際にして亦た涅槃の際なり。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず一切法は皆是れ無際にして亦た涅槃の際なるを以てなり。諸際の永く斷ずるを涅槃の際と名づく。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず涅槃の際は永く名言を離るるを以て一切の名言は中に於て永く滅すればなり。又た善勇猛、如來は涅槃界有りと說くと雖も而かも說くが如くならず。涅槃界は都て說く可からず一切の說を超ゆるを以て涅槃界の中には諸說永く斷ずればなり。若し是の如く涅槃界の相を說かば卽ち名づけて出世通達般若の相を說くと爲す。又た善勇猛、涅槃界は方處の此こに在り彼こに在りと說く可きに非ず。是の故に涅槃は實に說く可からざるなり。復た次に善勇猛、此の中何をか甚深般若波羅蜜多と謂ふ。善勇猛、此の般若波羅蜜多は遠き彼岸に少分も得可き有るに非ず。善勇猛、若し此の般若波羅蜜多遠き彼岸に少分も得可き有らば如來は應に甚深般若波羅蜜多は遠き彼岸有りと說くべし。善勇猛、此の般若波羅蜜多は遠く得可きこと有るに非ず。是の故に此れは彼岸に有りと說かざるなり。[三二]又た善勇猛、此の般若波羅蜜多と名づくる者は謂ゆる妙智の作業、一切法の究竟彼岸に到るが故に般若波羅蜜多と名づくるなり。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。所以は何ん、語に非ず業に非ずして能く般若波羅蜜多に至ればなり。何を以ての故に、善勇猛、甚深般若波羅蜜多は說く可からざるが故なり。又た善勇猛、甚深般若波羅蜜多の諸法を隨覺するに若し能く隨覺せば卽ち覺悟に違ふ。所以は何ん、此の中物の隨覺と名づく可き無ければなり。隨覺無きが故に覺悟も亦た無し。卽ち諸法に於て通達の義無し。平等の法性を隨覺する是れ菩提なるが故に。[三三]諸法を隨覺するが故に菩提と名づく。云何が此れは能く諸法を隨覺する。此の中物の菩提と名づく可き無し。故に此の中に於ても亦た隨覺無し。何を以ての故に、善勇猛、若し菩提の少分にても得可き有らば卽ち菩提の內に應に菩提を得べし。然かも菩提の中に菩提有るに非ず。應に是の如く菩提を現證することを作すべし。隨覺するに

【三二】般若波羅蜜多の名義を明す。

【三三】菩提の名義を明す。

[三〇]復た次に善勇猛、通達とは謂ゆる能く遍ねく所有る緣起を知るを言ふ。諸緣に由るが故に諸法起ることを得。故に緣起と名づく。是の如き緣起は都て所有無し。是の如きを名づけて緣起に通達すと爲す。卽ち此れを名づけて遍ねく緣起を知ると爲す。謂ゆる能く如實に起る無きを顯示し、起る無きを以ての故に說いて緣起と名づくるなり。平等にして起る無きが故に緣起と名づく。謂ゆる是の處に於て起るすら尙ほ有るに非ず、況んや當に滅有るべけんや。緣起を隨覺するに若しは順若しは違皆得可からず。等起無きが故に說いて緣起と名づく。若し等起無くんば則ち生有ること無し。若し生有ること無くんば則ち過去無く亦た已生も無し。若し過去無く亦た已生も無くんば則ち滅有ること無し。若し滅有ること無くんば則ち生智無し。生智無きに由りて更らに復た生ぜず亦た滅を證せず。生無きに由るが故に卽ち亦た滅無し。生有るに由るが故に滅有りと施設す。旣に生有ること無く是の故に滅無し。一切法に於て是の如く知見し通達し作證するを說いて盡智と名づく。[三一]善勇猛、盡智とは謂ゆる無知を盡くすが故に盡智と名づくるなり。何に由りてか盡と名づくる。謂ゆる無盡に由るが故に名づけて盡と爲すなり。法の名づけて盡と爲す可き有るを見ず、然かも無知を離るるを說いて盡智と名づく。卽ち無知を盡くすを說いて盡智と名づけ、遍ねく一切の無知の法を知るが故に無知を盡くすと名づけ。無知を盡くすに由り說いて盡智と名づく。無智の法は盡不盡有るに非ず、然かも無智を離るるが故に盡智と名づく。如實に遍ねく此の無知の法の都て所有無きを知るが故に名づけて離と爲す。是の如き智に由りて、無知の法の別に得可き無しと知るを無知を離ると名づく。然かも無知の法は實に得可からず。智すら尙ほ有るに非ず、況んや無知有らんや。若し能く盡に於て解脫を得ば名づけて盡智と爲す。是の說を作すと雖も而かも說くが如くならず。所有る盡智都て說く可からず。但だ假名に說いて無知を盡くすと名づけ亦た盡智とも名づくるのみ。若し是の如き無盡の盡智を以て諸法を觀察せば盡智も亦た無なり。若し是の如く知らば便ち盡智を離れ

【三〇】通達緣起の義を說く。

【三一】盡智の名義を明す。

と有らば能く世間を出でて正しく衆苦を盡くさん。衆苦の盡くるに趣くも染著する所無けん。此の通達慧は亦た[二八]三明と名づく。善勇猛、明とは謂ゆる永く無明を息滅せし増語を言ふ。即ち此れを亦た無明遍知と説き亦た能く苦蘊を息めし増語に名づく。譬へば良醫の聰明博達にして所作有るに隨ひて皆善く觀察し、觀察の微妙慧を成就するが故に善く諸の藥を識り、善く病因に達し、善く病相を知り、能く衆苦を救ひ、所療の疾に隨ひて除愈せざる無し。所以は何ん、彼れは善く藥病因相和合等の方に通達すればなり。是の故に能く一切の病苦を除くが如く、是の如く若し第三明を成じて能く諸の無明を滅し、能く一切の苦を息め、能く一切の生老病死及び諸の愁歎苦憂惱を除く法有らば是れを出世通達般若と名づく。

[二九]復た次に善勇猛、我れ此の義に依りて密意に説いて言ふ。一切世間に慧爲れ最勝なり。謂ゆる能く諸法の實性に通達し、此れに由りて正しく知らば生盡くること有らしむと。生盡くること有りとは是れ何の増語ぞや。謂ゆる善く出沒に通達する増語なり。云何が名づけて出沒に通達すと爲す。謂ゆる善く諸の集有る法は皆滅有る法なりと通達するなり。是の如きを名づけて出沒に通達すと爲す。善勇猛、出とは謂ゆる生の増語、沒とは謂ゆる滅の増語なり。是の説を作すと雖も而かも出有り沒有りと説くが如くならず。又た善勇猛、諸の所有る集は實の出の法に非ず。何を以ての故に、善勇猛、集は等しく出と謂ふも等しく出有るに非ず亦た沒有るにも非ず。等隨起の故に説いて名づけて集と爲せばなり。等隨起とは此の中に於て出有り沒有るに非ず。是の如く自體自然に破壞せば即ち名づけて滅と爲すも此の中物の説いて名づけて滅と爲す無し。謂ゆる無間滅にして此に於て生じ即ち此に於て滅するに非ざるを説いて名づけて滅と爲す。即ち生ずる無きが故に説いて名づけて滅と爲す。是の如く若しは出若しは沒に通達せば生無く滅無きが故に若しは出若しは沒に通達すと名づく。

【二八】三明。三達ともいふ。阿羅漢果の聖者の有する三種の智明なり。宿住智證明。死生智證明、漏盡智證明の稱にて、六通の中宿命通、天眼通漏盡通に同じ。

【二九】出沒に通達するの義を明す。

に通達又は通達慧と名づく。通達と名づくるは此れ通達慧にして都て所有無く上無く下無く遲無く速無く進無く退無く往無く來無きが故に通達と名づく。又た善勇猛、通達慧とは何をか通達する所なる。謂ゆる見る所有るは皆悉く通達するなり。何に由りて通達する。謂ゆる般若に由るなり。是の如き般若は云何が通達する謂ゆる相を假立して通達すること有るなり。諸の假立相は一切非相なり。是の如き非相を假立相と名づく。又た善勇猛、諸の是の如き般若を成就すること有るは卽ち能く如實に三界に通達す。云何が如實に三界に通達する。謂ゆる三界に非ざるを說いて三界と名づくるなり。所以は何ん、此の中、界の而かも通達す可き無し。三界に通達せば卽ち界に非ずと爲す。能く是の如く三界に通達するに由るが故に通達般若を成就すと名づく。云何が通達般若を成就する。謂ゆる少事も善く通達せざる無く、一切事に於て皆善く通達す。是の故に名づけて通達般若と爲す。是の如き般若は一切事に於て皆悉く超越す。若し是の如き般若を成就すること有らば諸の見聞嗅嘗覺了する所皆悉く通達す。云何が通達する。謂ゆる無常の故に、苦の故に、癰の故に、病の故に、箭の故に、空の故に、礙の故に、害の故に、他の故に、壞の故に、壞法の故に、動の故に、速滅の故に、無我の故に、無生の故に、無滅の故に、無相の故なり。是の如き等を、善勇猛、若し能く通達せば是れ則ち名づけて清涼離箭と爲す。良藥有り名づけて離箭と曰ふ。所著の處に隨ひて衆箭皆除き毒藥の中に於て住すること得ること無きは此の藥の威力に逼遣せらるゝが故なるが如く、是の如く若し諸の苾芻等有りて此の法を成就せば清涼離箭なり。所謂通達般若を成就せば[二七]六を具して恒に住するなり。通達般若は一切の三界の染著を遠離し一切の惡魔の羂網を超越す。又た善勇猛、譬へば金剛は爲れ物を鑽るが故に所鑽の處に隨ひて通達せざること無きが如く、是の如く若し諸の苾芻等、金剛喩定有らば通達慧に攝受せらるゝに由り所觀の法に隨ひて通達せざる無し。此の通達慧は金剛喩定の攝受する所にして所觀の法に隨ひて通達せざる無し。若し此の通達慧を成就するこ

【二七】六を具するは三界の染著を遠離すると三明を具足するとなり。

ら尙ほ無し況んや智者有らんをや。若し能く是の如く如實に了知せば如實に隨覺す。是れを般若と名づく。

[二四]復た次に善勇猛、若し能く是の如く現觀して作證せば是れ則ち名づけて出世般若と爲す。是の如き所說の出世般若も亦た說く可からず。所以は何ん、世すら尙ほ有るに非ず、況んや出世有らんや。所出すら尙ほ無し、況んや能出有らんや。斯れに由りて出世般若も亦た無し。所以は何ん、都て世及び出世能出所出を得ざるを以ての故に說いて出世般若と名づくることを得ればなり。若し所得有れば則ち名づけて出世般若と爲さず、此の般若の性も亦た得可からず、有無等の得可き性を離るるが故に。又た善勇猛、世は假立と名づく。假立の世より實に出づ可き有るに非ず。然かも諸の假より出づるが故に出世と名づく。又た出世とは實に世に於て出不出有るに非ず。所以は何ん、此の中都て所出、能出の少法も得可き無きが故に出世と名づくればなり。又た出世とは世無く出世無く出づる無く出でざる無きが故に出世と名づく。若し能く是の如く如實に了知せば是れ則ち名づけて出世般若と爲す。是の如き般若は所說の如きに非ず。所以は何ん、出世般若は一切の名言の道を超過するが故なり。出世と名づくと雖も而かも出づる所無く、般若と名づくと雖も而かも知る所無く、所出所知得可からざるが故に能出能知も亦た得可からず。是の如く如實に知るを出世般若と名づく。此の般若に由らば出でざる所無し。是の故に出世般若と名づく。

[二五]復た次に善勇猛、此れを亦た名づけて通達般若とも爲す。是の如き般若は何をか通達する所なる。謂ゆる此の般若は通達する所無し。若し此の般若通達する所有らば卽ち是れ假立なり。若し是れ假立なれば則ち名づけて通達般若と爲さず。謂ゆる此の中に於ては都て所有無く、此れ無く彼れ無く亦た中間無く、[二六]能通達無く所通達無く、通達處無く通達時無く通達者無きが故に通達と名づく、又た此の中に於ては都て所有無く能行者無く所行の處無く此れ無く彼れ無く亦た中間無きが故

【二四】出世般若に就て明す。

【二五】通達般若を說く。

【二六】能、所、處、時、者の五もなし。

も亦た異る、然るに一切法は名言を離れず。若しは諸法を解し若しは諸法を知るは倶に說く可からず、然るに有情の知る所に順ひて而かも說く、故に般若と名づく。善勇猛、[三二]般若とは謂ゆる假施設なり。假施設に由りて說いて般若と爲す。然かも一切法は施設す可からず動轉す可からず宣說す可からず示現す可からず。是の如く知らば如實知と名づく。善勇猛、般若とは知るに非ず知らざるに非ず、此に非ず餘處に非ず。故に般若と名づく。

[三三]復た次に善勇猛、般若とは謂ゆる智の所行にして智の所行に非ず、非智の境に非ず亦た智の境にも非ず。智は一切の境を遠離するを以ての故に。若し智是れ境なれば卽ち應に智に非ざるべし。非智より而かも智有ることを得ず亦た智より而かも非智有らず。非智より而かも非智有らず亦た智より而かも智有ることを得ず。非智に由るを說いて名づけて智と爲さず亦た智に由るを說いて非智と名づけず。非智に由るを說いて非智と名づけず亦た智に由るを說いて名づけて智と爲さず。然かも卽ち非智を說いて名づけて智と爲し、斯れに由りて卽ち智を說いて非智と名づく。此の中智とは示現す可からず、此れを名づけて智と爲す。此の智の所屬を示現す可からず、此の智の由る所を示現す可からず、此の智の從る所を示現す可からず。是の故に智の中には實の智性無く亦た實智は智性の中に住する無し、智と智性とは倶に得可からず、非智と性とも亦復た是の如し。決定して非智に由るを智と名づけず、若し非智に由るを說いて智と名づけなば一切の愚夫は皆應に智有るべし。若し如實に智非智に於て倶に無所得なる有らば智非智に於て如實に遍ねく知るなり、是れを名づけて智と爲す。然かも智の實性は所說の如きに非ず。所以は何ん、智の實性は名言を離るゝを以ての故なり。智は智の境に非ず非智の境に非ず、智は一切の境を超過するを以ての故に、是れ智非智の境なりと說く可からず。善勇猛、是れを如實に智相を宣說すと名づく。是の如き智相は實に說く可からず示現す可からず。然かも有情の所知に順ひて說示す。其の能知者も亦た說く可からず。智境す

〔三二〕般若と說く名言解知は假設なり、實に法の說くべく定むべきものなし。

〔三三〕般若の智に就て說く。

まつる。若し我が疑網煩惱の纒結自ら永く斷ぜば乃ち能く如實に諸の有情の爲に疑網煩惱の纒結を斷ずる種種の法要を說かん。所以は何ん、一切の有情は皆安樂を欣ひ並びに危苦を厭ひて一切の有情皆方便を設けて安樂を追求すればなり。我れ都て餘の少分も安樂の求む可き有るを見ず、唯だ般若波羅蜜多のみを除く。我れ都て餘の少分も安樂の求む可き有るを見ず、唯菩薩摩訶薩乘のみを除く。我れ都て餘の少分も安樂の求む可き有るを見ず、唯だ大乘のみを除く。我れ今是の如き義利を觀見し有情に微妙の安樂を施さんと欲して如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。我れ今、一切の菩薩摩訶薩衆の是の如き義利を觀見して、如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。唯だ願くは世尊、哀愍して爲に答へたまへと。

爾の時世尊、善勇猛菩薩摩訶薩に告げて言はく、善哉善哉、善男子、汝能く大生等の衆を哀愍して如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問せり。汝此の緣に由りて功德無量なり。汝應に諦かに聽き極めて善く思惟すべし。吾當に分別し解說すべし。善勇猛言はく、善哉世尊、唯だ願はくは爲に說きたまへ。我れ等樂聞したてまつらんと。[二〇]佛、善勇猛菩薩摩訶薩に告げたまはく、汝先に問ひし所の、世尊は處處に諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣說したまふ。何をか般若波羅蜜多と謂ふや、とは汝等當に知るべし、實に少法も般若波羅蜜多と名づく可き無しと。甚深般若波羅蜜多は一切の名言の道を超過せるが故に。何を以ての故に、善勇猛、甚深般若波羅蜜多は實に此れは是れ般若波羅蜜多なりと說く可からず、亦た彼の般若波羅蜜多に屬すと說く可からず、亦た彼の般若波羅蜜多に由ると說く可からず、亦た彼の般若波羅蜜多に從ふと說く可からざればなり。何を以ての故に、善勇猛、[二一]慧能く遠く諸法の實性に達するが故に般若波羅蜜多と名づくればなり。如來の智慧すら尙ほ得可からず、況んや般若波羅蜜多を得んをや。善勇猛、般若とは謂ゆる諸法を解し及び諸法を知るなり、故に般若と名づく。善勇猛、云何が般若は諸法を解知する。謂ゆる諸法異れば名言

【二〇】般若波羅蜜多の名義を明す。

【二一】簡擇研究して眞に生活する本義に通達す。

に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩慈悲心を以て一切有情の利樂を引發せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩諸の有情に於て能く引導、勝導、遍導を爲さば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩一切法に於て依住する所無くんば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩諸の生處に於て希求する所無くんば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩一切の惡魔の羂網を解脱せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩大樂欲有り大精進を具して常に放逸無くんば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩諸法の究竟彼岸に到らんと欲せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩善く一切の疑網を斷滅せんと欲せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩佛智を證するに於てすら尙ほ憍慢無く執無く著無し、況んや餘の智に於てをや、我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩一切の憍慢執著を超越して能く正道に住し能く正道を行じ能く正道を說かば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩恒に一切有情を饒益せんが爲に、能く利益を爲し能く安樂を爲し能く安隱ならしめば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。[一八]復た次に世尊、我れ普ねく一切有情に無染の安樂、無上の安樂、無勝の安樂、涅槃の安樂、諸佛の安樂、無爲の安樂を施さんが爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。我れ永く一切有情の種種の疑網煩惱の[一九]纒結を斷ぜんが爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。我れ自ら種種の疑網煩惱の纒結を斷ぜんが爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したて

【一八】以上は所被の機につき、以下は所益の義につき能請を明す。

【一九】纒結。纒は纒縛の義、結は結縛の義。共に煩惱の異名なり。

てまつらず。亦復た[三〇]利を以て利を規る諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。世尊、我れ今此れ等種種穢惡の諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。

[一]復た次に世尊、若し諸の有情深心に[二]一切智智、[三]無著智、[四]自然智、[五]無等等智、[六]無上智を欣樂せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情自らの所有に於てすら尙ほ所有無し況んや自ら稱譽せんをや。我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情他の所有に於てすら尙ほ所有無し況んや他を譏毀せんをや、我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情、憍慢を摧伏すること角を折れる獸の如くならば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情種種煩惱の毒箭を拔かんことを求めば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情其の心謙下なること[七]旃茶羅の子の如くならば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し諸の有情其の心平等なること四大虛空の如くならば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩一切の法に於てすら尙ほ所得無く亦た執著も無し、況んや非法に於てをや、我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩意樂清淨にして諂無く誑無く其の性質直なれば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩其の心平等にして一切の有情を哀愍利樂せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩常に善法に於て一切有情を示現勸導讚勵慶喜せば我れ今彼れの爲に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつる。若し菩薩摩訶薩能く大擔を荷ひ能く大乘に乘りて能く大事を建てなば我れ今彼れの爲に如來應正等覺

三〇、以利規利。（以上）三十非機を列ねてこれが爲に般若請問せずと云ふ。

【一】正機を列擧す。

【二】一切智智。空平等の一切智による智にて如來の自證をいふ。

【三】無着智。取相、執着なき眞實智なり。

【四】自然智。功用を借りずして自然に生ずる佛の一切種智をいふ。

【五】無等等智。佛智のこと。佛智は一切法中無等にして而かも諸佛所證の法身は彼此等しきが故に名づく。

【六】無上智。無限に向上する大智なり。不思議智等、又は成所作智等の五智の如く今も五智を列ね、如來有相を示す。

【七】旃茶羅(Caṇḍāla)。屠者、殺者などと譯す。印度種姓の名。最下卑にて四姓の下に位す。守獄、屠殺等を業となす。日蓮自ら稱して吾れは旃陀羅の子なりと云ふが如し。

心常に迷亂せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一二]欲の游泥に没せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た多く[一三]諂曲を行ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一四]多く誑惑を行ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一五]報恩を知らざる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一六]惡欲を成就せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一七]樂うて惡行を行ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一八]尸羅を毀壞せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一九]戒清淨ならざる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二〇]正見を毀壞せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二一]樂うて魔境を行ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず、亦復た[二二]好んで自ら稱譽する諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二三]好んで他を譏毀する諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二四]利養を愛重する諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二五]衣鉢に貪著せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二六]潛かに矯詐を行ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二七]綺謬語を好む諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二八]詐りて異相を現ずる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二九]激磨して求索する諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問した

一一、心常迷亂。
一二、没欲淤泥。
一三、多行諂曲。
一四、多行誑惑。
一五、不知報恩。
一六、成就惡欲。
一七、樂行惡行。
一八、毀壞尸羅—尸羅(Sila)は戒なり。
一九、戒不清淨。
二〇、毀壞正見。
二一、樂行魔境。
二二、好自稱譽。
二三、好譏毀他。
二四、愛重利養。
二五、貪著衣鉢。
二六、潛行矯詐。
二七、好綺謬語—綺謬語。いつはりかざれる言葉。
二八、詐現異相。
二九、激發求索。

はく、善男子、汝何の義を觀じて如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問せるやと。[七]善勇猛菩薩摩訶薩言はく、我れ今一切有情を哀愍して利益安樂事を作さんが爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問せり。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は通じて聲聞獨覺菩薩及び正等覺の一切法を攝するが故なり。唯だ願くは世尊、我れ等を哀愍して爲に具さに[八]如來の境智を宣說したまへ。若し有情類の[九]聲聞乘性に於て決定せる者此の法を聞き已らば速に能く自無漏地を證得せん。若し有情類の獨覺乘性に於て決定せる者此の法を聞き已らば速に自乘に依りて而かも出離することを得ん。若し有情類の無上乘性に於て決定せる者此の法を聞き已らば速に無上正等菩提を證せん。若し有情類未已に正性離生に入ると雖も而かも三乘の性に於て不定なる者此の法を聞き已らば皆無上正等覺の心を發さん。唯だ願くは如來應正等覺、所問の甚深般若波羅蜜多に答へて諸の有情の善根をして生長せしめられよ。[一〇]復た次に世尊、我れ今[一]下劣信解の諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[二]貧窮の心の諸の有情を守らんが爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[三]貧窮乘の諸の有情を成ぜんが爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[四]懈怠嬾墮なる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[五]怠墮に蔽はれし諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[六]惡見の泥に陷れる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[七]魔羂(けん)に繫(とら)へられし諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[八]無慚無愧の諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[九]性麁儉ならざる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た[一〇]正念を忘失せる諸の有情の爲の故に如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問したてまつらず。亦復た

【七】善勇猛菩薩卽ち甚深般若請問の義を說き、重ねて佛の敎說を乞ふ。

【八】如來の境智。如來は法界一切生類を境とし、すべてを成熟せしむる無上覺を智とす。

【九】聲聞等。決定聲聞は自無漏地を證すると云ふもの、文に決定三乘と不定性とを定め、二乘は各々自乘地と云ふ、自境界限せられ、決定無上乘性と三乘性不定のものは般若によりて無上覺に至るとする大乘敎義を判然列記せるものなり。

【一〇】非機を簡別す。

一、下劣信解。
二、貧窮心。
三、貧窮乘。
四、懈怠嬾墮(懶惰?)。
五、怠墮所蔽。
六、陷惡見泥。
七、魔羂所繫。
八、無慚無愧。
九、性不廉儉。
一〇、忘失正念。

第十六般若波羅蜜多分の一[一]

[二]是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵、王舍城の[三]竹林園の中の白鷺池の側りに住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。菩薩摩訶薩無量無數にして種種の佛土より倶に會に來集せり。皆是れ[四]一生所繫の菩薩なり。爾の時世尊多百千衆に恭敬圍遶せられて爲に法を説きたまへり。[五]時に大衆の中に菩薩摩訶薩有り、善勇猛と名づく。座より而かも起ちて佛足を頂禮し、偏へに右肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、如來應正等覺に少分の深義を問ひたてまつらんと欲す。唯だ願くは世尊、我れ等を哀愍して問ひを許して答へを垂れたまへと。是に於て佛、善勇猛に告げて言はく、如來今汝の所問を恣まゝにす。問ひに隨て答へ汝が心をして喜ばしめんと。爾の時善勇猛菩薩摩訶薩便ち佛に白して言さく、世尊、處處に諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣說したまふ。何をか般若波羅蜜多と謂ひ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行し、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して速に圓滿せしめ、云何が菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行せば一切の惡魔便りを得ること能はず、所有る魔事皆能く覺知し、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多に安住して速に能く一切智の法を圓滿するやと。

[六]爾の時世尊、善勇猛菩薩摩訶薩を讃めて言はく、善哉善哉、善男子、汝今乃ち能く如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問せり。汝は菩薩摩訶薩衆の義利を得んが爲の故に、衆生をして利益を得せしめんと欲するが故に、亦た衆生の安樂を得んが爲の故に、世間大衆生を哀愍せんが故に、諸の天人を利益安樂せんが故に、現在未來の菩薩摩訶薩等の爲に照明と作らんと欲するが故に、如來應正等覺に甚深般若波羅蜜多を請問せりと。世尊時に知りて而かも復た善勇猛菩薩摩訶薩に問うて言

【一】大般若第十六會。六度分第六、般若波羅蜜多分なり、當卷より第六百に至る八卷とす。
【二】如是我聞。證信序等常の如し。
【三】竹林園。迦蘭陀竹林のこと。王舍城と上茅城との間に在り。迦蘭陀長者の所有に係りしを佛に奉りて僧園となす。
【四】一生所繫。一生補處に同じ、
【五】善勇猛 (Suvikrāntavikrami)。菩薩佛に般若波羅蜜多の深義を問ふ。
【六】佛、善勇猛菩薩の所問を讃し、かく請問せし所以を問ふ。

じ、無量の菩提の資糧を修集し圓滿するに至り已て三界を超過して無上正等菩提を證得す。譬へば人有りて是の如きの念を作すが如し、設ひ何の方便もて王宮に入ることを得て王の后妃と竊かに戲樂を爲し、王をして覺らざらしめて身命存することを得んと。是の念を作し已て諸の妙藥を求めて服するに男形をして或は隱れ或は顯れしむ。斯の藥を得已て方便して王に事へ、王既に識知せば便ち隱藥を服して遂に王に白して曰さく、我れ今形無し、請ふ大王の爲に禁宮の室を守らんと。王檢せしめ已て中宮を委任す。其の人爾の時王の宮内に入り諸の妃后と意を恣まにして交通し、[四五]荏苒時一二三月を經、王の知覺して身命を喪失せんことを恐れ便ち顯藥を服して王に白して言さく、我れ今男形欻然として復た現はる。請ふ今より去りて中宮に入らずと。時に王讃めて言はく、此れ眞の善士なり。自ら能く進退して我が法に違はずと。厚く爵祿を賜ひ外事を委任す。當に知るべし是の人は方便善巧して能く己れの願を滿じ身命存することを得、復た彼の王の厚く財位を賜ることを蒙ると。是の如く菩薩は方便善巧して四靜慮及び四無色に入り次第に超越して善巧を得已て復た下心を起し還て欲界に生じ諸佛世尊に親近し供養して無邊の菩提分の法を引發し乃至未だ滿ぜずんば實際を證せず。何を以ての故に、舍利子、是の諸の菩薩は方便善巧して有情の一切智を捨てざるが故なり。是の如く菩薩は方便善巧して靜慮波羅蜜多を修行し實際の中に於て能く證を作さず亦た現に滅受想定に入らず、乃至未だ菩薩の資糧を滿ぜずんば欲界の身を受けて菩薩行を修すと。

[四六]爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に諸の菩薩衆の學する所の靜慮波羅蜜多を受持して忘失せしむること勿るべしと。阿難陀曰はく、唯然世尊、我れ已に諸の菩薩衆の學する所の靜慮波羅蜜多を受持せり。必ず忘失すること無しと。[四七]時に薄伽梵是の經を說き已て具壽舍利子、具壽滿慈子、具壽阿難陀及び餘の聲聞諸の菩薩衆、并びに餘の一切の天龍藥叉健達縛阿素洛揭路茶緊捺洛莫呼洛伽人非人等の一切の大衆、佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

【四五】荏苒。歲月の長びくこと、物事漸進の意。

【四六】佛、阿難陀に付囑す。

【四七】來會の諸衆歡喜す。第十五會を終る。

す。謂ゆる力有りて[三九]漏盡智を引くと雖も而かも有情の爲に漏盡を證せず。所以は何ん、諸の菩薩は有情の所に於て長夜に利益安樂せんと思惟するを以て增上の意樂もて恒に現在前すればなりと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、是の諸の菩薩は有情の所に於て長夜に利益安樂せんと思惟し增長の意樂もて恒に現在前す。又た滿慈子、是の諸の菩薩は此の義利を觀じて能く具さに九次第定に入ると雖も而かも具さに入らず。所以は何ん、是の諸の菩薩は方便善巧して一切の定に於て自在を得と雖も而かも能く入らざればなり。又た滿慈子、一切の菩薩の若しは初發心なる若しは已に不退なる皆應に是の如き靜慮波羅蜜多に安住すべし。若し諸の菩薩常に能く是の如き靜慮波羅蜜多に安住せば諸の有情に於て能く饒益を作して速に能く一切智智を引發せんと。時に滿慈子便ち佛に白して言さく、當に知るべし、菩薩摩訶薩は大勢力を具して能く有情の爲に饒益事を作し亦た能く一切智智を引發して疾く無上正等菩提を證すと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如しと。

[四〇]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住し、云何が方便して還て定より起つやと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は[四一]欲惡不善法を離れ有尋有伺、離に喜樂を生じ初靜慮乃至非想非非想處に入り具足して住し、色無色靜慮[四二]等至に於て順逆次第に串習を超越し、極めて善く純熟し遊戲自在にして復た欲界の[四三]等引に非ざる心に入る。所以は何ん、定力に由りて色無色の長壽天に生ずること勿きが故なり。色無色靜慮等至もて彼の地に續生するの心を引起すること勿く、[四四]彼の心を護らんが爲に現起せざらしめ、還て欲界の等引に非ざる心に入る。此の心を起すに由りて還て欲界に生じ諸佛世尊に親近し供養して無邊の菩提分の法を引發す。色無色に生ぜば是の如く能くすること無し。上二界の生は身心鈍なるが故に。斯れに由りて菩薩は方便善巧して先に上定を習ひて善く純熟せしめ、後下心を起して還て欲界に生

【三九】漏盡智。一切の煩惱を斷盡して涅槃を緣ずる佛智。

【四〇】菩薩の能く方便善巧して靜慮波羅蜜多に安住し、欲界の身を受けて菩薩行を修することを明す。

【四一】欲惡乃至初靜慮は初禪を略說せるなり。

【四二】等至。三摩鉢底(Samāpatti)の譯。定七名の一にて、定を修むれば正しく現前に光明を發し、輕快にして善惡の境に於て平靜に至住し、退轉せざるが故に名づく。

【四三】等引。三摩呬多(Samāhita)の譯。定七名の一にて、定を修すれば、惛沈と掉擧とを離れて心を平等平均ならしむれば等といひ、功德を發生するが故に引といふ。

【四四】等引に非ざる、散亂心なり。

以は何ん、如來は諸の菩薩衆に現に此の定に入るを許さず。現に入るに由りて聲聞或は獨覺地に退墮すること勿れとなり。又た滿慈子、吾れ當に汝が爲に更らに譬喩を說くべし。諸の智有らん者は譬喩に由るが故に甚深の義に於て解了すること得易し。轉輪王邊地の諸の小國邑に於て皆自在を得と雖も而かも自ら彼の國邑の中に往かざるが如し。豈に轉輪王彼の處に往かざれば彼の處に於て自在を得ずと說かんや。是の如く菩薩摩訶薩衆は現に滅受想定に入らずと雖も而かも此の定に於て已に自在を得たり。自在なるに由るが故に亦た名づけて得と爲す。又た滿慈子、諸の菩薩は常に現に滅受想定に入らざるに非ず、乃至未だ妙菩提の座に坐せざるまでは、諸佛世尊現に入るを許さざるのみ。若し時に妙菩提の座に坐するを得ば諸佛世尊も亦た現に入るを許したまふ。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩、此の定に入るに由りて便ち聲聞或は獨覺地に墮し或は諸佛と二乘と等しと謂ふこと勿らんが故に佛世尊は現に入るを許さざるのみ。又た滿慈子、刹帝利灌頂大王、市中に入りて凡人の酒を飮まんと欲するに時に智臣有り大王を諫めて曰はく、今此の時處にて王は飮むべからず、若し飮むことを須ゐんとせば宮中に至るを待ちたまへと。意に於て云何、王市の酒に於て豈に飮むこと能はざらんや、而かも彼の智臣慇懃に諫諍し王をして飮ましめざるなり。然かも刹帝利灌頂大王は非處非時に法として飮むべからざるなり。飮むべからずと雖も而かも市中の酒等の諸物に於て皆自在を得るが如し。所以は何ん、王は一切の國土城邑の所有る人物に於て皆自在なるが故なり。是の如く菩薩は殊勝の智有り、此の智に由るが故に能く數ば現に滅受想定に入るも但だ佛許さざるが故に現に入らざるのみ。所以は何ん、菩薩若し滅受想定に入るとせば便ち時處に非ざればなり。若し時に菩薩菩提の座に坐して永く一切の虛妄の相想を害して[三八]甘露界を證せば爾の時方に滅受想定に入り後に無上正等菩提を證し妙法輪を轉じて三十二相を具し無量の有情を利益安樂せん。爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は甚だ爲れ希有として能く作し難きを作

【三八】甘露界。涅槃界を喩へて云ふ。

の作意を遠離す。佛德無きに由りて說いて聲聞と名づくるなり。爾からずんば如何が彼れを佛と名づけざらん。[三三]又た滿慈子、諸の聲聞人の住する所の靜慮は勝德無きが故に其の性下劣にして諸の菩薩の住する所の靜慮よりも百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の靜慮波羅蜜多は常に一切智智を遠離せず、佛土を嚴淨し有情を成熟して無邊殊勝の功德を引發すればなり。斯れに由りて菩薩の住する所の勝定は聲聞獨覺皆知ること能はずと。時に滿慈子便ち佛に白して言さく、何等をか名づけて菩薩の勝定と爲し、是の如き勝定は復た何の名有るやと。[三四]爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、菩薩の勝定は不思議と名づく。何を以ての故に、滿慈子、是の如き勝定は威力思ひ難くして速に能く一切智を證得するが故なり。是の如き勝定は亦た一切世間の諸の有情類を利樂すと名づく。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は無量の有情を利樂せんと欲するが爲に方便善巧して此の定に入るが故なり。是の如き勝定若し現在前せば能く無邊微妙の勝定を引きて疾く無上正等菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作さん。是の如き勝定若し現在前せば無邊の方便善巧を引發し無量の有情を教誡教授して皆無漏の靜慮を引發し眞の法性を證して諸の煩惱を斷じ、無餘依般涅槃界に入り或は無上正等菩提を證せしめん。此の因緣に由りて菩薩の勝定は亦た一切世間の諸の有情類を利樂すと名づく。是の故に菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に靜慮波羅蜜多を學すべし。若し靜慮波羅蜜多を學せば速に能く一切智智を引發せんと。

[三五]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、我れ聲聞の得る所の諸定は菩薩の定に勝ると謂へり。所以は何ん、聲聞は具さに[三六]九次第定を得るも菩薩は中に於て唯だ前八を得るのみなればなり。菩薩は[三七]滅受想定を得ざるが故に聲聞の定は諸の菩薩に勝れりと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、菩薩も亦た滅受想定を得。謂ゆる此の定に於て已に自在を得たり、但だ現に入らざるのみ。所

【三三】菩薩所住の靜慮は聲聞のそれに勝ることを明す。

【三四】菩薩の勝定の名に就て說く。

【三五】菩薩は方便善巧して一切の定に於て自在を得と雖も而かも能く入らざる所以を明す。

【三六】九次第定。禪定を修して智慧深きもの次第に九定に入り間雜なく相續する故に名く。初禪次第定、二禪次第定、三禪次第定、四禪次第定、虛空處次第定、識處次第定、無所有處次第定、非想非非想次第定、滅受想次第定の稱。

【三七】滅受想定。一切の心想すべて滅盡して寂靜となる定にて、無色界の第四非想非非想處天に屬し、第九次第定なり。

り。若し諸の菩薩摩訶薩衆常に一切智智の勝作意を遠離せずんば應に知るべし名づけて靜慮波羅蜜多に安住すと爲すと。是の如く菩薩摩訶薩衆靜慮波羅蜜多に安住せば無邊殊勝の功徳を引發して疾く無上正等菩提を證せん。應に知るべし如來應正等覺は第四靜慮に安住して動ぜず[三一]諸の壽行を捨てて現に無餘般涅槃界に入りたまへりと。是の故に靜慮波羅蜜多は諸の菩薩摩訶薩衆の求むる所の無上正等菩提に於て大恩徳有り、是の故に菩薩摩訶薩衆の住する所の靜慮波羅蜜多は如來の定を除き諸の餘の定に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の靜慮波羅蜜多は常に一切智智相應の作意を遠離せず、二乘の靜慮は決定して一切智智相應の作意を遠離するが故に、菩薩の靜慮よりも劣ると爲し、菩薩の靜慮は彼れよりも勝ると爲せばなりと。[三二]時に滿慈子便ち佛に白して言さく、若し諸の聲聞此の靜慮に住して法性を證得し聲聞果を成ぜば卽ち諸の菩薩も此の靜慮に住して法性を證得し諸の執著を離れて如來應正等覺を成ずることを得ん、云何が聲聞の靜慮は決定して一切智智相應の作意を遠離し、菩薩の靜慮は常に一切智智相應の作意を遠離せずと說く可けんと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、我れ今汝に問はん、汝が意に隨て答へよ。意に於て云何、諸の聲聞の人は此の靜慮に住して法性を證得して聲聞果を成じ、卽ち諸の菩薩も此の靜慮に住して法性を證得し諸の執著を離れて如來應正等覺を成ぜば彼の聲聞人は如來と名くるや不やと。滿慈子曰はく、不なり世尊と。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、吾れ當に汝が爲に更に譬喩を說くべし。諸の智有らん者は斯の譬喩に因りて甚深の義に於て解了すること得易し。譬へば凡人の輒ち王座に昇らんが如し。其の人卽ち名づけて王と爲すことを得るや不やと。滿慈子曰はく、不なり世尊、所以は何ん、彼の人は福無く王相無きが故なりと。佛言はく、是の如く諸の聲聞の人能く現に四靜慮四無色定に入りて法性を證得して聲聞果を成ずと雖も而かも如來の力無畏等の殊勝の功德及び諸の相好無く如來と名づけず。斯れに由りて一切智智相應

【三一】攝心して住壽することを得るを云ふ。

【三二】靜慮に住する聲聞及び菩薩の名義を明す。

薩衆方便して諸の善男子善女人等に無忘失法恒住捨性を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に一切智道相智一切相智を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に預流果若しは一來果若しは不還果若しは阿羅漢果若しは獨覺菩提を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩方便して諸の善男子善女人等に一切の菩薩摩訶薩行を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に諸佛の無上正等菩提を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に佛土を嚴淨し有情を成熟せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆他の修する所の布施等に於て善く深心に隨喜し廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。[三〇]若し諸の菩薩摩訶薩衆一切處に於て心、定を得已らば應に知るべし名づけて靜慮波羅蜜多に安住すと爲すと。何を以ての故に、滿慈子、是の諸の菩薩摩訶薩は常に一切智智の勝作意を遠離せざるが故な

【三〇】菩薩能く靜慮波羅蜜多に安住せば疾く無上菩提を證得し、菩薩の住する靜慮波羅蜜多は如來の定を除き最勝たることを明す。

方便して諸の善男子善女人等に空無相無願解脫門を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に一切の陀羅尼門三摩地門を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に淨觀地種姓地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に五眼及び六神通を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に如來の十力四無所畏四無礙解を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て即ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶

薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に安忍波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等安忍波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に精進波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等精進波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に靜慮波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等靜慮波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に般若波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等般若波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に四靜慮四無量四無色定を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に八解脫八勝處九次第定十遍處を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等此れに安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆

の有情三歸に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば、此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に五戒を受持せんことを勸め、彼の諸の有情五戒に住し已て卽ち是の如き集むる所の功德を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に八戒を受持せんことを勸め、彼の諸の有情八戒に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に十戒を受持せんことを勸め、彼の諸の有情十戒に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に[二九]十善業道を受持せんことを勸め、彼の諸の有情十善業道に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に具戒を受持せんことを勸め、彼の諸の有情具戒に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆有情類に菩薩戒を受持せんことを勸め、彼の諸の有情菩薩戒に住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に布施波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等布施波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆方便して諸の善男子善女人等に淨戒波羅蜜多を修行せんことを勸導し、彼の善男子善女人等淨戒波羅蜜多に安住し已て卽ち是の如き集むる所の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求せば此れを齊りて應に菩

【二九】　十善業道。十善とは十善戒ともいひ、十惡の對なり。十善の業行は以て善處に生ずる道なれば十善業道と名く。

羅蜜多に住し、若しは安忍波羅蜜多に住し、若しは精進波羅蜜多に住し、若しは靜慮波羅蜜多に住し、若しは般若波羅蜜多に住し、若しは諸の餘の菩提分の法に住せば當に知るべし爾の時心常に定に在りと。我れ是の如く佛の所說の義を解せりと。[二二]爾の時佛、滿慈子を讃めて言はく、善哉善哉、是の如し是の如し。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆、[二三]欲惡不善法を離れ有尋有伺離に喜樂を生じ初靜慮具足して住し、是の如き初靜慮に安住し已て若し聲聞或は獨覺地を樂まば當に知るべし名づけて亂心の菩薩と爲すと。當に知るべし彼れは定地に非ざる心に住せるなりと。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆、尋伺寂靜、[二四]內等靜心一趣性にして無尋無伺、定に喜樂を生じ第二靜慮具足して住す。是の如く第二靜慮に安住し已て若し聲聞或は獨覺地を樂まば當に知るべし名づけて亂心の菩薩と爲すと。當に知るべし彼れは定地に非ざる心に住せるなりと。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆、[二五]喜を離れ捨に住し念を具し正知し身を受け樂を受く、唯だ諸の聖者のみ能く說き能く捨し、念を具し樂に住して第三靜慮具足して住す。是の如き第三靜慮に安住し已て若し聲聞或は獨覺地を樂まば當に知るべし名づて亂心の菩薩と爲すと當に知るべし彼れは定地に非ざる心に住せるなりと。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆、[二六]樂を斷じ苦を斷じ先の喜憂沒して苦ならず樂ならず捨念清淨にして第四靜慮具足して住す。是の如き第四靜慮に安住し已て若し聲聞或は獨覺地を樂まば當に知るべし名づけて亂心の菩薩と爲すと。當に知るべし彼れは定地に非ざる心に住するなりと。

[二七]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、何を齊りてか應に菩薩心の定なりと知るべけんと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆彼れ彼れの諸の有情を見る時に隨て便ち是の念を作さん、我れ當に精勤して菩薩行を修し無上正等覺を證得せん時決定して當に彼の有情類をして無餘依般涅槃界に入り或は無上正等菩提を證せしむべしと。此れを齊りて應に菩薩心の定なりと知るべし。又た滿慈子、若し諸の菩薩摩訶薩衆、有情類に[二八]三歸を受持せんことを勸め、彼の諸

【二二】亂心の菩薩に就て說く。

【二三】初禪を說明す。欲界惡不善を離れ、尋伺(覺觀)あるも欲貪を離れて喜樂一心なるを云ふ。

【二四】二禪は初禪の尋伺を呵棄して信根增上し內淨支により(內心淨信なるを云ふ)平等寂靜にして一境に定まり喜支輕安樂支によりて二禪具足す。

【二五】第三禪の喜受を呵棄して行捨(捨受にあらず)にして念支を具す第三禪樂極勝なるが故に染著せざる爲に正念を要す。正知は慧支を表し、身を受くるは一心支、定に住するなり、樂を受くるは意識の樂なり。

【二六】第四禪を明す苦樂喜憂斷滅して不苦不樂と捨と念と清淨一心なるとの四支に立つなり。

【二七】菩薩心の定に就て明す。

【二八】三歸。三歸依の略にて、歸依佛、歸依法、歸依僧の稱なり。これ翻邪の三歸、受戒の三歸などあり。

惱の惡業を離れて無餘依般涅槃界に入り或は無上正等菩提を證せしむるも聲聞乘の人は唯だ能く自身の所有る煩惱惡業のみを[一七]調伏して無量の有情を饒益すること能はざるが故に聲聞の人は菩薩の所有る事業の如く皆悉く殊勝なるに非ず。又た滿慈子、善く射る夫の所學の法に於て已に[一八]加行を作し、身手弓仗皆善く調習し諸の武伎を學して已に究竟に至り、已に百千歲、王の封祿を食めるに王と怨敵と戰諍せんと欲する時象馬等の軍及び諸の兵仗皆悉く委任し其れをして指揮せしめば凶徒を殄して損失する所無きを冀ふが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は已に無上正等覺の心を發し、已に菩薩摩訶薩行を修し、能く諸の有情類の貪瞋癡の行を調伏するに於て已に善巧を得たり。是の故に如來應正等覺は偏へに菩薩摩訶薩衆を讃め教誡教授して勤め修習して能く正しく菩提の資糧を引發せしめ、速に發す所の大願を圓滿して疾く無上正等菩提を證し、諸の有情の爲に能く永く貪瞋癡等を斷ずる清淨の法要を說かしむ。是の故に菩薩摩訶薩衆の甲冑を被戴して作す所の事業は聲聞獨覺倶に爲すこと能はず。此れに由りて如來應正等覺は菩薩を讃勵するも諸の聲聞には非ずと。

[一九]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、我れ佛の所說の義を解する如くんば應に知るべし菩薩摩訶薩衆の諸の所作有るは定心ならざること無しと。謂ゆる諸の菩薩摩訶薩衆若し布施波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し淨戒波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し安忍波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し精進波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し靜慮波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し般若波羅蜜多に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。若し諸の餘の菩提分の法に住せば當に知るべし爾の時心も亦た定に在りと。[二〇]吠琉璃の所在の處に隨ひ自寶の色に於て終に棄捨せず、謂ゆる彼れ若し金器銀器[二一]頗胝迦器銅鐵瓦等に在らんも常に吠琉璃の色を棄捨せざるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆若しは布施波羅蜜多に住し、若しは淨戒波

【一七】調伏。衆生の身口意の三業を調和して諸の惡行を制伏すること。
【一八】加行。修行の功を增加する義にて、正修行の功を增加せしむる傍修行をいふ。
【一九】滿慈子、佛說の義を領解して、菩薩の心常に定に在ることを說く。
【二〇】吠琉璃(Vaidūrya)。青玉のこと。
【二一】頗胝迦(Sphaṭika)。水精のこと。

はずんば現在前すと雖も而かも菩薩摩訶薩衆の修する所の靜慮波羅蜜多に於て應に知るべし、極めて違逆する法と名づけず、永く菩薩の定地を退失するに非ずと。

[一五]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、一切の如來應正等覺は何の義を觀ずるが故に諸の菩薩摩訶薩衆の所有る功德を讃めて聲聞を讃めたまはざるやと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、我れ今汝に問はん、汝が意に隨て答へよ。意に於て云何、日輪の此の贍部洲の人の與に光明の事を作すを[一六]螢能く作すや不やと。滿慈子曰はく、不なり世尊、不なり善逝と。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、一切の菩薩摩訶羅衆の能く作す所の事も亦復た是の如し。諸の聲聞の能く成辦する所に非ずと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、云何が應に唯だ諸の菩薩摩訶薩衆のみ能く是の念を作すと知るべけん、我れ當に無量無數無邊の有情を度脫して無餘般涅槃界に入らしむべし、我れ當に佛の清淨の法眼をして無間無斷に一切有情を利益安樂せしむべしと。云何が應に唯だ諸の菩薩摩訶薩衆のみ能く是の如き殊勝の事業を作し諸の聲聞には非ずと知るべけんと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、汝今此の聲聞衆の中に一苾芻有りて能く菩薩摩訶薩衆の如く是の如き念を作して斯の事を辦ずるを觀るや不やと。滿慈子曰はく、不なり世尊、不なり善逝、我れ今此の聲聞衆の中を觀ずるに一苾芻も能く菩薩摩訶薩衆の如く是の如き念を作す無く亦た能く此の事業を辦する者も無しと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、是の故に如來應正等覺は唯だ菩薩のみを讃めて聲聞を讃めざるなり。此の衆の中の諸の阿羅漢を觀ずるに是の如き念無く亦た是の如き事業をも成ずること能はず。當に知るべし、一切の聲聞乘の人には菩薩摩訶薩衆の作す所の如き事業無しと。是の故に我れ說く譬へば日輪の贍部洲の與に光明の事を作すも螢は辦ずること能はざるが如しと。所謂日輪は無量の光を放ちて普ねく贍部の諸の有情類を照らすも螢光は唯だ自身のみを照らして餘には非ず。是の如く菩薩摩訶薩衆は自身の煩惱惡業を調伏し亦た能く無量の有情を度脫して一切の煩

【一五】如來應正等覺の菩薩を讃勵して聲聞を讃めざる所以を喩說す。

【一六】螢火小にして自らを照らす聲聞の小にして自調自利なるを示す。

し。是の如き菩薩摩訶薩衆は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す。應に知るべし、是の如き諸の菩薩衆は無量無邊の有情を度せんが爲に堅牢なる大願の甲冑を被戴して恒に是の念を作す、我れ當に無量無數無邊の有情を度脱して[九]無餘般涅槃界に入らしむべし。我れ當に佛の[一〇]清淨の法眼をして常に間斷無く一切有情を利益安樂せしむべしと。是の事を作すと雖も而かも執著無し、謂ゆる有情の涅槃を[一一]得る者或は無上正等菩提を得る無し。所以は何ん、諸法は無我にして亦た我所無ければなり。衆苦の生ずる時唯だ苦の生ずること有るのみにして能生者無く、衆苦滅する時唯だ苦の滅すること有るのみにして能滅者無し。當に知るべし亦た清淨の法を能く證し能く得る者無しと。此の因緣に由りて應に知るべし菩薩摩訶薩衆は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲すと。[一二]時に滿慈子便ち佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝、當に知るべし、菩薩摩訶薩衆は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲すと。所以は何ん、實に法の生ずる有り滅する有り或は般涅槃し或は無上正等菩提を證すること無しと雖も而かも諸の菩薩摩訶薩衆は無量無邊の有情を度せんが爲に精進して諸の菩薩行を修行して無上正等菩提を求證し、有情の爲に永く貪瞋癡を斷ずる法を宣說せんと欲して勤めて修學して般涅槃を得せしめ、或は有情の爲に菩薩摩訶薩道を宣說し勸めて修學し疾く無上正等菩提を證せしむればなりと。[一三]爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、心に散亂無く相續して一切智智相應の作意に安住せば是の菩薩摩訶薩は應に知るべし名づけて靜慮波羅蜜多に安住すと爲すと。若し菩薩摩訶薩、聲聞地相應の作意或は獨覺地相應の作意に安住せば是の菩薩摩訶薩は應に知るべし名づけて[一四]心常に散亂すと爲すと。何を以ての故に、滿慈子、若し菩薩摩訶薩二乘相應の作意を修學して無上正等菩提を障礙せば菩提心をして恒に散亂せしむるが故なり。又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は色聲香味觸の境を緣じて種種非理の作意を發起し菩薩の布施等の心を擾亂すと雖も而かも菩薩の所求の一切智智を障礙せざるなり。若し法、菩薩の一切智智を障礙すること能

【九】無餘般涅槃界。煩惱障を斷じ依身を捨てたり涅槃の世界。

【一〇】清淨の法眼。分別を離れ實相の活機を見る。能く有情を生かす、これ眞の利益安樂なり。

【一一】得る者もなく得らるる菩提もなし。

【一二】滿慈子、佛說を聞きて更にこれを復說す。

【一三】菩薩の心の散亂を明す。

【一四】心常に散亂す。普通は煩惱貪瞋散起亂動するを云ふ、今は二乘心相應の作意を散亂と云ふ。

樂に趣入し還て復た棄捨して欲界の身を受け精進して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の菩提分の法を修行せば是の如き菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して精進波羅蜜多を攝受すと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して[五]安忍波羅蜜多を攝受するやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆修學して大慈大悲を成就し諸の有情に於て饒益を作さんと欲し靜慮波羅蜜多に安住して諸の違緣に遇ふも心に雜穢無くんば是の如き菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して安忍波羅蜜多を攝受すと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して[六]淨戒波羅蜜多を攝受するやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆靜慮波羅蜜多に安住し諸の聲聞及び獨覺地に於て取著を生ぜずんば是の如き菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して淨戒波羅蜜多を攝受すと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して[七]布施波羅蜜多を攝受するやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆靜慮波羅蜜多に安住し諸の有情に於て大悲の念を起し誓て一切有情を棄捨せず生死の苦より解脫せしめんと欲するが故に無上正等菩提を求證して是の念を作さん、我れ當に決定して大法施を以て有情を攝受し常に有情の爲に永く一切の煩惱を斷ずる眞淨の法要を宣說すべしと。是の如き菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して布施波羅蜜多を攝受すと。[八]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩摩訶薩是の如き方便善巧を成就せば是の菩薩摩訶薩は應に名づけて何等の菩薩と爲すと知るべきと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、是の菩薩摩訶薩は應に知るべし、名づけて不退の菩薩と爲すと。時に滿慈子便ち佛に白して言さく、是の如き菩薩摩訶薩衆は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す。已に是の如き諸の勝定の中の寂靜安樂に住し、復た能く棄捨して還て欲界相應の劣法を受け方便善巧して有情を饒益すと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如

【五】安忍波羅蜜多攝受。

【六】淨戒波羅蜜多攝受。

【七】布施波羅蜜多攝受。

【八】不退の菩薩の義を明し、更に菩薩の希有にして能く難事を爲すことを說く。

る所を捨てて聲聞或は獨覺地に退住すること勿れとなり。又た滿慈子、若し時に菩薩摩訶薩衆菩提座に坐して衆行圓滿せば爾の時菩薩摩訶薩衆方に乃ち究竟して三界の法を捨て斯れに由りて一切智智を證得す。是の故に我れ說く、一切智智は三界を超過し三界の攝に非ずと。又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩生起する所の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の菩提分の法に隨ひ、觀察する所の內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空及び眞如等の甚深の理趣に隨ひて一一皆染著無き心を發して廻向して一切智智を趣求せば是の菩薩摩訶薩は此の因緣に由りて三界の法に於て漸く捨て漸く遠ざかり展轉して一切智智に鄰近せんと。

卷の第五百九十二

第十五靜慮波羅蜜多分の二

[一]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して般若波羅蜜多を攝受し、諸の靜慮及び靜慮支に於て味著を生ぜず亦た退轉も無く、諸の靜慮及び靜慮支に於て我想分別執著を起さず、復た是の如き相應の善根を持ちて廻向して一切智智を趣求するやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆靜慮波羅蜜多に安住し諸の靜慮及び靜慮支に於て無著無常想等を發起し、復た是の如き相應を善根を持て廻向して一切智智を趣求せば是の如き菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して[二]般若波羅蜜多を攝受し、諸の靜慮及び靜慮支に於て味著を生ぜず亦た退轉も無しと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、云何が菩薩摩訶薩衆は靜慮波羅蜜多に安住して[三]精進波羅蜜多を攝受するやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆靜慮波羅蜜多に安住し欲界の諸の[四]雜染法を超過し方便して四種靜慮四無色定の寂靜安

【一】菩薩の能く靜慮波羅蜜多に安住して他の五波羅蜜多を攝受することを明す。
【二】般若波羅蜜多攝受。
【三】精進波羅蜜多攝受。
【四】雜染法。一切有漏法の總名なり。

語者、是れ法語者、能く正しく法を宣說する隨法者なるを顯さざらんやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、汝今我れに對して是の如き說を作すは如來の是れ實語者、是れ法語者、能く正しく法を宣說する隨法者なるを顯すに非ず。何を以ての故に、滿慈子、若し諸の菩薩、長壽天に生ぜば是の如き功德を修行すること能はず、疾く一切智智を得ること能はざればなり。又た滿慈子、若し諸の菩薩四靜慮四無色定の寂靜安樂に入らば是の諸の菩薩は是の念を作さず、我れ此の定に由りて色無色に生ぜんと。亦た我れ靜慮及び無色定に由りて色無色を超えんとも思惟せず。是の諸の菩薩は四靜慮四無色定の寂靜安樂に入りては但だ自在神通を引發して諸の有情の與に大饒益を作さんと欲するのみ、亦た麁重の身心を調伏して能く諸の功德を修するに堪ゆること有らしめんと欲するのみ。是の諸の菩薩摩訶薩衆は諸の勝定の寂靜安樂に入り方便善巧して欲界身を受け諸の勝定に於ても亦た退失すること無し。是の故に菩薩摩訶薩衆は三界を超えず亦た染著せず方便善巧して欲界身を受け有情を饒益し諸佛に親近して疾く能く一切智智を證得すと。時に滿慈子復た佛に白して言さく、豈に如來應正等覺の一切智智は三界を超過せざらんやと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、如來の得たまへる所の一切智智は三界を超過し三界の攝するに非ず。一切の如來應正等覺は菩薩摩訶薩衆の靜慮波羅蜜多に安住して三界の法に於て出離を究竟するを許さずと。[三〇]時に滿慈子便ち佛に白して言さく、一切の如來應正等覺は何の義を觀ずるが故に、諸の菩薩摩訶薩の無上正等菩提を求證して靜慮波羅蜜多に安住するを許し、菩薩摩訶薩衆の三界法に於て出離を究竟するを許したまはざるやと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を求證して靜慮波羅蜜多に安住するに如來若し三界を超過するを許さば彼れ便ち菩薩の誓願を退失して聲聞或は獨覺地に安住せん。一切の如來應正等覺は是の如き義を觀じて諸の菩薩摩訶薩衆の無上正等菩提を求證し靜慮波羅蜜多に安住するを許すも菩薩摩訶薩衆の三界法に於て出離を究竟するを許さず。菩薩の本誓願す

【三〇】如來應正等覺は菩薩の三界法に於て出離を究竟することを許さざる所以を明す。

た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の願無願性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せずと。

[二六]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、何に緣りて如來應正等覺は諸の菩薩摩訶薩衆に四靜慮四無色定に入るを許して菩薩摩訶薩衆の久しく其の中に住して心に染著を生ずるを許したまはざるやと。舍利子言はく、諸の菩薩摩訶薩衆は四靜慮四無色定に於て心に染著を生じて[二七]長壽天に生ず、是の故に如來應正等覺は菩薩摩訶薩衆の四靜慮四無色定に於て心に[二八]染著を生じ久しく其の中に住することを許したまはずと謂ふこと勿れ。何を以ての故に、滿慈子、若し欲界に生ぜば速に能く一切智智を圓滿するも色無色に生ぜば斯の用無きが故なりと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に白つて言はく、諸の菩薩衆は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す、謂ゆる諸の菩薩は勝定に住し已て還て之を棄捨して下劣の法を受く。譬へば人有り遇ま伏藏を見て手に珍寶を執るも還て之を棄捨し、彼れ後時に於て貝珠等を見て手を伸ばして執取し持ちて舍中に入るが如く是の如く菩薩摩訶薩衆は四靜慮四無色定の寂靜安樂に入りて意に隨ひて遊止するも復之を棄捨し還て欲界に生じて種種下劣の身心を攝受し之に依りて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の菩提分の法を修行す。佛は[二九]此の義を觀じて應に菩薩摩訶薩衆に長壽天に生じて長時布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の菩提分の法を修行するを許し斯れに由りて疾く一切智智を得せしめたまふべしと。時に滿慈子便ち佛に白して言さく、我れ世尊に對し是の如き說を作さん、豈に佛の是れ實

【二六】如來應正等覺は菩薩の四靜慮、四無色定に入るを許すも、久しく其中に住して心に染著を生ずるを許さゞる所以を明す。

【二七】長壽天。色界第四禪天の無想天はその壽五百大劫と云ふ、これ色界天の最長壽なるが故に此名あり。無色界の第四處非想非非想天は八萬劫なり是れ三界の最長壽なり。

【二八】染着して長壽天に止まるを禁ずるにあらず、一切智を徒ならしむる嫌ふなり。

【二九】若し六度を行じ一切智智を得しむべくば長壽天に生ずるを妨げず、捨勝得劣よりは捨劣生勝然るべしと。

識界の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の我無我性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の空不空性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の相無相性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界を願無願性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の常無常性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の我無我性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の空不空性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。因緣の相無相性都て得可からざるを觀じ及び等無間緣所緣緣增上緣幷びに緣より生ずる所の法の相無相性も亦

可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の常無常性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の我無我性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の空不空性都て得可からさるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の相無相性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の願無願性都て得可からさるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の遠離不遠離性都て得可からさるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の常無常性都て得可からざるを觀じ及び水火風空識界の常無常性も亦た得可からさるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。地界の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び水火風空

得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の空不空性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の相無相性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の願無願性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の常無常性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の我無我性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の空不空性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の相無相性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の願無願性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼觸の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意觸の寂靜不寂靜性も亦た得

可らざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の常無常性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の樂無樂性も亦た得からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の我無我性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の空不空性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の相無相性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の願無願性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色界の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の常無常性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の我無我性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意識界の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼識界の淨不淨性都て

も一切智智を棄捨せず。色處の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の我無我性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の空不空性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の相無相性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の願無願性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せす。色處の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の常無常性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の我無我性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の空不空性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼界の相無相性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の願無願性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意界の願無願性も亦た得

性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の相無相性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の願無願性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の常無常性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の我無我性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の空不空性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の空不空性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の相無相性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の相無相性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の願無願性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の願無願性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の遠離不遠離性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の遠離不遠離性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。眼處の寂靜不寂靜性都て得可からざるを觀じ及び耳鼻舌身意處の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色處の常無常性都て得可からざるを觀じ及び聲香味觸法處の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而か

の寂靜安樂を捨てて還て下劣の欲界の身を受くるを許したまふやと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、諸佛は法爾として菩薩摩訶薩衆の長壽天に生ずるを許さず。何を以ての故に、舍利子、菩薩摩訶薩衆は長壽天に生ずと謂ふこと勿れ修する所の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の菩提分の法を遠離せば斯れに由りて遲く所求の無上正等菩提を證すればなり。是の故に如來應正等覺は諸の菩薩摩訶薩衆に勝定地の寂靜安樂を捨てて還て下劣の欲界の身を受くるを許し、菩薩摩訶薩衆の長壽天に生ずるを許さず。本の所願を失へばなりと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す、謂ゆる勝定の寂靜安樂を捨てて還て下劣の雜穢地の身を取る。譬へば人有り未だ欲染を離れざるに遇ま女寶の空林の中に在りて形貌端嚴にして甚だ愛樂す可きを見、具さに種種の身支を觀見すと雖も而かも能く心を制して放逸を行ぜず、復餘處に於て遇ま女人の形貌麁醜鄙穢下賤なるを見て返て貪愛を生じて遂に放逸を行ずるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は數ば微妙寂靜の四種の靜慮及び四無色に安住すと雖も而かも能く棄捨し還て欲界の種種雜穢下劣の身を受く。故に甚だ希有にして能く難事を爲すなりと。[二五] 爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如く菩薩摩訶薩衆は勝地を棄捨して欲界の身を受く。當に知るべし、是れを方便善巧と爲すと。何を以ての故に、舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を勤求し勝地の身を捨てて還て欲界に生じ勝作意を起し方便善巧して色蘊の常無常性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の常無常性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の樂無樂性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の樂無樂性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の我無我性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の我無我性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の淨不淨性都て得可からざるを觀じ及び受想行識蘊の淨不淨性も亦た得可からざるを觀ずと雖も而かも一切智智を棄捨せず。色蘊の空不空

【二五】菩薩の勝地を棄捨して欲界の身を受くるは方便善巧にして、諸法不可得を觀ずと雖も常に一切智智を棄捨せざることを明す。

空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空觀を修學し、精勤して諸法の眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界觀を修學し、精勤して無明に緣る、行、行に緣る識、識に緣る名色、名色に緣る六處、六處に緣る觸、觸に緣る受、受に緣る愛、愛に緣る取、取に緣る有、有に緣る生、生に緣る老死の觀を修學し、精勤して無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六處滅し、六處滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死滅する觀を修學し、精勤して若しは苦若しは無常若しは空若しは無我の苦聖諦觀を修學し、精勤して若しは因若しは集若しは生若しは緣の集聖諦觀を修學し、精勤して若しは滅若しは靜若しは妙若しは離の滅聖諦觀を修學し、精勤して若しは道若しは如若しは行若しは出の道聖諦觀を修學し、精勤して慈悲喜捨の四無量觀を修學し、精勤して四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學し、精勤して八解脫八勝處九次第定十遍處を修學し、精勤して空無相無願解脫門を修學し、精勤して淨觀地種姓地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地智を修學し、精勤して極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修學し、精勤して陀羅尼門三摩地門を修學し、精勤して淸淨の五眼六勝神通を修學し、精勤して如來の十力四無所畏四無礙解を修學し、精勤して大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修學し、精勤して三十二大士相八十隨好を修學し、精勤して無忘失法恒住捨性を修學し、精勤して一切智道相智一切相智を修學し、精勤して預流一來不還阿羅漢果獨覺菩提を分別する諸の善巧智を修學し、精勤して一切の菩薩摩訶薩行を修學し、精勤して諸佛の無上正等菩提を修學し、亦た有情に諸の善法を修するを勸む。是の如き等の事は甚だ爲れ希有なりと。

二四 爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、何に緣りて如來應正等覺は諸の菩薩摩訶薩衆に勝定地

【二四】菩薩の能く勝地を棄捨して下劣の欲界の身を受くる所以を明す。

想定に入ると雖も而かも[二一]現に入らざるやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、諸の菩薩摩訶薩は聲聞及び獨覺地に墮するを怖るゝが故に現に滅受想定に入らず、此の定の寂滅安樂に著して便ち阿羅漢果或は獨覺果に證入し般涅槃に入らんことを欣(ねが)ふこと勿きなり。諸の菩薩摩訶薩は是の如き義を觀じて能く現に滅受想定に入ると雖も而かも現に入らざるなりと。[二二]時に舍利子便ち佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す、謂ゆる現に是の如き諸定に入ると雖も而かも諸定に於て味著を生ぜず、又た現に是の如き諸定に入りて能く勝用を起すと雖も而かも染を離れずと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。諸の菩薩摩訶薩は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲す。又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩は最も極めて希有なり。謂ゆる現に四種の靜慮四無色定の寂靜安樂に入ると雖も而かも味著せず亦た染を離れざるなり。我れ今汝が爲に略して譬喩を說き此の義に於て圓滿に解することを得せしめん。此の贍部洲に生ぜし人有り、欲界に於て未だ染を離るゝことを得ずと雖も而かも或は[二三]北俱盧洲に往くことを得、因て彼の洲の女の繫屬無く形容端正にして遊戲することを自在なるを見、又た彼の洲の衣服嚴具鮮淨殊妙にして皆樹に依りて生ずるを見、又た彼の洲に香ばしき粳米有り其の味甘美にして種ゑざるに自ら生ずるを見、又た彼の洲の觸處皆種種の珍寶の甚だ愛翫す可き有るを見、彼の洲の人是の如きの類に於て意に隨て受用し定めて繫屬無く、正しく受用する時極めて耽染するに非ず、既に受用し已つて捨てゝ而かも戀ふ無きを見る。贍部洲の人未だ染を離れずして具さに彼の種種の勝事を觀見すと雖も而かも貪著せずして捨棄し還歸せば當に知るべし是の人は甚だ爲れ希有なるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は復た現に四種の靜慮四無色定の寂靜安樂に入りて其の中に起る所の種種微妙の寂靜殊勝の功德を歷觀すと雖も而かも味著せずして還て欲界に入り方便善巧して欲界身に依り精勤して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學し、精勤して內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性

じき一類に相續すること。

【一六】四靜慮に安住する菩薩の勝方便を爲して引く諸功德を明す。

【一七】空無邊處想。無色界第一の空無邊處定に趣入すべき無邊の虛空想なり。

【一八】無色第二へ。

【一九】無色第三へ。

【二〇】無色第四へ。

【二一】滅盡定に入るもその定果に安住せず。

【二二】菩薩は甚だ爲れ希有にして能く難事を爲すことを喩說す。

【二三】北俱盧洲。鬱怛羅拘樓(Uttarakuru)。鬱怛羅は北、俱盧は勝處勝生と譯す。須彌四州の一。須彌山の北に在り、形方座の如く地盤他の三州に高出す。人身長三十二肘、壽一千歲、中天なく、快樂無極、四州中にて有情、處、財、物共は最勝なりといふ。

る所と爲る。謂ゆる諸の菩薩摩訶薩衆は將に無上正等覺を得んとする時皆漸次に此の四靜慮に入る。旣に是の如き四靜慮に入り已て第四靜慮に依りて[10]五神通を引發し魔軍を降伏して無上覺を成ずるなり。此の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし。往昔の菩薩摩訶薩衆は皆靜慮波羅蜜多を修せり、我れも亦た應に修すべし。往昔の菩薩摩訶薩衆は皆靜慮波羅蜜多を學せり、我れも亦た應に學すべし。往昔の菩薩摩訶薩衆は皆靜慮波羅蜜多に依り意の樂ふ所に隨ひて般若波羅蜜多を引發せり、我れも亦た應に是の如き靜慮波羅蜜多に依りて意の樂ふ所に隨ひて般若波羅蜜多を引發すべしと。又た舍利子、一切の菩薩摩訶薩衆は皆第四靜慮に依りて方便して[11]正性離生に趣入し眞如を證會して[12]異生性を捨てざる無し。一切の菩薩摩訶薩衆は皆第四靜慮に依りて方便して[13]金剛喩定を引發し永く諸漏を盡くして[14]如來智を證せざる無し。是の故に當に知るべし、第四靜慮は諸の菩薩摩訶薩衆に於て大恩德有りて能く菩薩摩訶薩衆をして最初に正性離生に趣入し眞如を證會して異生性を捨て、最後に所求の無上正等菩提を證得せしむと。此れに由りて菩薩摩訶薩衆は應に數ば現に第四靜慮に入るべし。是の如き菩薩摩訶薩衆は能く現に此の四靜慮に入ると雖も而かも四靜慮の樂及び此の[15]等流の勝妙の生處に味著せざるなり。[16]又た舍利子、一切の菩薩摩訶薩衆は是の如き四靜慮に安住し勝方便を爲して諸の功德を引かん。是の如き菩薩摩訶薩衆は第四靜慮に依り[17]空無邊處想を起して空無邊處定を引かん。是の如き菩薩摩訶薩衆は空無邊處定に依り[18]識無邊處想を起して識無邊處定を引かん。是の如き菩薩摩訶薩衆は識無邊處定に依り[19]無所有處想を起して無所有處定を引かん。是の如き菩薩摩訶薩衆は無所有處定に依り[20]非有想非無想處想を起し非想非非想處定を引かん。是の如き菩薩摩訶薩衆は能く現に四無色定に入ると雖も而かも四無色定及び此の得る所の勝妙の生處に味著せざるなりと。

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は何の義を觀ずるが故に能く現に滅受

して得る所五支を具す、捨支念支慧支樂支一心支なり。

【八】第四靜慮。色界四禪定の第四、捨念法事定。二禪の喜、三禪の樂を捨て心に憎愛なく一念平等清淨なる定。四支を具す不苦不樂支捨支念支、一心支なり。

【九】四靜慮に入り已りし菩薩の思惟を明す。

【一〇】五神通。神變不思議自在を神通と云ふ。五種あり。一に天眼通、色界の四大にて造れる清淨の眼根を以て欲色兩界の遠近麁細を照見す。二に天耳通、色界の四大にて造れる清淨の耳根にて一切の聲を聞く。三に他心通、一切の他の心を知る。四に宿命通、能く自心の宿世のことを知る。五に如意通、神境通又は神足通と云ふ飛行變化自在なるを得るものとす。

【一一】正性離生。見道位のこと。正性とは涅槃又は聖道の義、生は煩惱のこと、即ち煩惱を離れたる聖道に名づく。

【一二】異生性。不相應行の一。凡夫たらしむる本性をいふ。

【一三】金剛喩定。大乘にて、金剛無間道にて起す定。

【一四】如來智。如如實相に相應して無上に進みて息まざる明智なり。

【一五】等流。一類のものが同

第十五靜慮波羅蜜多分之一[一]

[二]是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵、王舍城の鷲峯山中に住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。[三]爾の時具壽舍利子、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば云何が方便して靜慮波羅蜜多に安住せんと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に先に初靜慮に入るべし。既に是の如き[四]初靜慮に入り已て應に是の念を作すべし。我れ無際の生死より以來(このかた)數數曾て是の如き靜慮に入りて作すべき所を作し身心寂靜なり。故に此の靜慮は我れに於て[五]恩有り。今復た應に入りて作すべき所を作し、此れを一切功德の所依と爲すべしと。次に復た第二靜慮に入るべし既に是の如き[六]第二靜慮に入り已て應に是の念を作すべし。我れ無際の生死より已來數數曾て是の如き靜慮に入りて作すべき所を作し身心寂靜なり。故に此の靜慮は我れに於て恩有り。今復た應に入りて作すべき所を作し、此れを一切功德の所依と爲すべしと。次に復た應に第三靜慮に入るべし。既に是の如き[七]第三靜慮に入り已て應に是の念を作すべし。我れ無際の生死より已來數數曾て是の如き靜慮に入りて作すべき所を作し身心寂靜なり。故に此の靜慮は我れに於て恩有り。今復た應に入りて作すべき所を作し此れを一切功德の所依と爲すべしと。次に復た應に[八]第四靜慮に入るべし。既に是の如き第四靜慮に入り已て應に是の念を作すべし。我れ無際の生死より已來數數曾て是の如き靜慮に入りて作すべき所を作し身心寂靜なり。故に此の靜慮は我れに於て恩有り。今復た應に入りて作すべき所を作し此れを一切功德の所依と爲すべしと。[九]此の菩薩摩訶薩は既に是の如き四靜慮に入り已て復た應に思惟すべし。此の四靜慮は諸の菩薩摩訶薩衆に於て大恩德有りて諸の菩薩摩訶薩衆の與に依止す

【一】大般若第十五會、當次二卷、六度分第五禪波羅蜜を說く。

【二】如是我聞。證信序。等同前、會處、前は祇園なるも當會は靈鷲山なり。

【三】無上菩提を證得せんとする菩薩の靜慮波羅蜜多に安住することを明す。

【四】初靜慮。色界四禪定の第一、その入位は有尋有伺定なり、定中伺覺觀あり、麁の尋細の伺ともに存するをいふ。進みて無尋有伺をなる、外の粗覺なし、純理となる。後は無尋無伺なり。粗細分別思察倶に息む。之を神話的に報得定果の天としては梵衆、梵輔、梵天とす。今は息心する修禪なり。初禪五支としては尋、伺、喜、樂、定(一心)支とす。

【五】禪を行じて得るは思惟統一漸く行はれたるによる。數數修の果なり、故に恩處とす。

【六】第二靜慮。色界四禪の第二、喜捨の二受ありて意識とのみ。四支としては內淨支、喜支輕安樂支、一心支とす。

【七】第三靜慮。色界四禪定の第三、第二禪の喜受を呵棄

と。爾の時佛、滿慈子を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如しと。[二五]爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に諸の菩薩衆の精進の甲を被て修する所の精進波羅蜜多を受持し忘失せしむること勿るべしと。阿難陀曰はく、唯然世尊、我れ已に諸の菩薩衆の精進の甲を被て修する所の精進波羅蜜多を受持せり、必ず忘失せずと。[二六]時に薄伽梵是の經を說き已つて具壽滿慈子、具壽舍利子、具壽阿難陀及び餘の聲聞、諸の菩薩衆并びに餘の一切の天龍藥叉阿素洛等佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

【二五】佛、阿難陀に付囑す。

【二六】來會諸衆の歡喜を明す。第十四會精進波羅蜜多分終り。

め晝夜精勤して方便を思惟し常に是の念を作さん、我れ何れの時に於てか多く珍財を獲て本の所願を遂げんと、斯れに由りて諸の飲食を求むるに暇無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆六種波羅蜜多に心清淨なることを得せしめんと欲し、精勤して一切智智相應の作意を修習せば、發心の頃の如きに已に晝夜半月一月時年雙等を度り常に是の念を作さん、何れの時にか當に一切智の寶を得て有情を饒益すべきと。

[二三] 時に滿慈子便ち佛に白して言さく、諸の菩薩衆は能く是の如き大精進の甲を被、勤めて無上の佛の功德寶を求めて有情を饒益す。實に世尊の常に宣說したまふ所の如く、一切の菩薩は能く難事を爲すなりと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、我れ世間の天人等の衆を觀ずるに希有の功德を成就すること諸の菩薩摩訶薩衆の如き有ること無し。唯だ如來應正等覺を除くのみと。[二四] 時に滿慈子便ち座より起ち偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して是の如き言を作さく、東南西北四維上下無邊世界の菩薩乘に住せる諸の有情類の未だ無上菩提の心を發さゞる者は願はくは速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は願くは永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は願くは速に一智智を圓滿せしめんと。爾の時佛、滿慈子に告げて言はく、汝何の義を觀じて諸の菩薩の速に當に一切智智を圓滿すべきことを願ふやと。滿慈子言はく、菩薩無くんば則ち諸佛の世間に出現する無く、若し諸佛の世間に出現する無くんば則ち菩薩及び聲聞衆無し。要らず菩薩の菩薩行を修する有りて乃ち諸佛の世間に出現する有り、諸佛の世間に出現すること有るを以て便ち菩薩及び聲聞衆有り。譬へば大樹の根莖有るに由りて便ち枝葉有り、枝葉有るに由りて便ち花果有り、花果有るに由りて復た大樹の生ずるが如く、是の如く世間に菩薩有るに由りて便ち諸佛の世間に出現する有り、諸佛の世間に出現すること有るに由りて便ち菩薩及び聲聞衆有り、菩薩の菩薩行を修すること有るに由りて復た如來應正等覺の世間に出現して大饒益を作すこと有るなり

[二三] 滿慈子。佛說の如く一切の菩薩の精進を難事となす所以を領解す。
[二四] 滿慈子。諸の菩薩の速に一切智智を圓滿すべきことを願ひ、この願の所以を明す。

善く菩薩摩訶薩衆の精進の甚だ難きを說きたまへり。當に知るべし菩薩摩訶薩衆は能く難事と爲し、諸法は都て所有無しと知ると雖も無上正等菩提を求め、無邊の諸の有情類の爲に能く永く無智を斷ずる正法を說かんと欲す。然かも諸の無智は實に所有無く亦た實法の能く無智をして之を取りて我と爲し及び我所と爲さしむる無く、亦た有情の能く是の念を作す無し。此れは是れ眞實の我及び我所なりと。是の如き無智は緣合するが故に生ずるも而かも實には生ずる無く、緣離るゝが故に滅するも而かも實には滅する無しと。若し菩薩摩訶薩是の如く知ると雖も而かも心退する無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、諸法は皆空なり、我れ今何すれぞ精進波羅蜜多を發起することを爲さんと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、一切法は畢竟空なるを以ての故に我れ無上正等菩提を求め諸法空を覺りて有情の爲に五趣生死の衆苦より脫せしむるを說かんと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、生死は無際なり、我れ豈に能く皆滅度を得せしめんやと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、生死は無始なるも而かも有終を容る、我れ寧ろ皆滅度せしむること能はざらんや、假使ひ精進して大菩提を求むること無始より來た經たる所の劫數の如くにして然して後乃ち證せんも我れ尙ほ應に求むべし、況んや當に爾所の劫數を經ざるべきをやと。復た是の念を作さん、若し諸の菩薩一切智智相應の作意を愛樂し修習せば、〔三〇〕發心の頃の如きに已に〔三一〕晝夜半月一月時年雙等を度りて覺らず知らざらん。若し諸の菩薩布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を愛樂し修習し心をして淸淨ならしめて都て作意せずんば〔三二〕爾所の時を覺るに已に晝夜半月一月時年雙等を度る。是の故に菩提は求めて甚だ得易し。應に精進の長時なるを怖畏すべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。譬へば長者の多くの珍財を求

〔三〇〕一發心刹那の如くに歲月を經るを云ふ。
〔三一〕一晝一夜半月一月三時一年二年百歲等。
〔三二〕爾所の時等。若干と思ふ中に幾倍の時日を過ぎ去る。

種種に求索せんに便ち是の念を作さん、此れ未だ多しと爲さず、假使ひ殑伽沙數の世界の諸の有情類一日の中に於て倶に我が所に至りて種種に求索せんも我れ當に方便して珍財を求覓し普ねく之を施與して皆滿足せしめん、況んや今爾許りにして而かも施すこと能はざらんをやと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。所以は何ん、諸の菩薩摩訶薩無量の佛法、一切智法を引顯せんと欲するが爲には有量の精進布施を以ては能く無量の佛法、一切智法を引顯す可きに非ず、要らず無量の精進布施の廣大の甲冑を被て乃ち能く無量の佛法、一切智法を引顯すればなり。譬へば人有りて大海を度らんと欲するに要らず先に多[一八]踰繕那、多百踰繕那、多千踰繕那、多百千踰繕那の種種の資粮を備辦して然る後能く度るが如し、是の如く菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲するには要らず無量百千倶胝那庾多劫を經て資粮を修集し然して後乃ち證するなり。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、我れ當に有量有邊の大劫に無上正等菩提を求證すべしと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、我れ當に無量無邊の大劫に無上正等菩提を求證すべしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。

[一九]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩の是の如き精進は豈に名づけて難しと爲んやと。世尊名づけて言はく、汝は菩薩摩訶薩衆の是の如き精進は難しと爲すに非ずと謂ふ耶と。滿慈子言はく、諸の菩薩摩訶薩の是の如き精進は我れ難きに非ずと謂へり。所以は何ん、佛は諸法は皆幻事の如しと說きたまへり。樂受苦受及び助受の法は既に幻事の如し。菩薩は已に能く是の如き諸法の實性に通達せり。精進何ぞ難からんと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、當に知るべし、菩薩摩訶薩衆は諸法皆幻事の如しと知ると雖も、而かも能く身心の精進を發起して精進波羅蜜多に安住し大菩提を求めて常に萎歇すること無し。此れに由りて菩薩摩訶薩衆の是の如き精進は最も極めて難しと爲すと。時に滿慈子便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、

【一八】踰繕那(Yojana)。印度の里數の名。八倶盧舍を一踰繕那とす。四十里に相當す。

【一九】菩薩の上述の精進の難易に就て、滿慈子、佛と問答す。滿慈子は法空の故に難からずと思ふに佛は難事となす。

を說くを聞く時歡喜踊躍して心に怯懼無くんば當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き精進相を說くを聞く時其の心退沒して深く恐怖を生ぜば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲し疾く一切智智を得ること能はずと。若し菩薩摩訶薩精進波羅蜜多を說くを聞きて是の思惟を作さん、何れの時にか是の如き證し難き殊勝の功德を成就せんと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩精進波羅蜜多を說くを聞きて是の思惟を作さん、是の如き功德を我れ皆具有して我れ定めて應に修して彼岸に至らしむべしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩來りて手或は足或は頭を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ若し彼れに施さば便ち爲れ手無く足無く頭無しと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩來りて手或は足或は頭を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ捨てゝ彼れに與へなば當に天人阿素洛等の無上微妙の手足及び頭を得べしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩眼耳を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ之を施與せば便ち眼耳無しと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩眼耳を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ彼れに施與せば當に天人阿素洛等の無上の眼耳を得ること猶ほ勝智の如くなるべしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲し、二乘を遠離して一切智に近づかんと。若し菩薩摩訶薩身分の種種の支節を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ若し彼れに施さば便ち身分の種種の支節を闕かんと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩身分の種種の支節を乞ふもの有らんに便ち是の念を作さん、我れ若し彼れに施さば當に天人阿素洛等の無上の佛法、一切智法の身分の支節を得べしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩諸の乞者の來りて種種に求索せんと便ち是の念を作さん、乞者甚だ多し、如何が皆意願をして滿足せしめんと。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩諸の乞者の來りて

無忘失法恒住捨性を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて一切智道相智一切相智を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經て最極勇猛に常に勤めて一切智道相智一切相智を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて一切の菩薩摩訶薩行を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて一切の菩薩摩訶薩行を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと、當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。[一七]又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩勸請して、汝當に我が爲に一日に妙高山王を析破すべしと言ふ有らんに、若し反て問うて言はん、山王は何の量にして汝我れを遣して析ちて幾分と爲さしめんとする耶と。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し是の念を作さん、妙高山王は量の大小に隨ひて我れ能く一日に汝が爲に析破して量芥子に同じく或は極微の如くせんと。多時を經て乃ち能く析破すと雖も而かも彼の意には彈指の頃の如しと謂はん。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、假使ひ殑伽沙數の大劫を一晝夜と爲し、此の晝夜を積みて復た大劫を成ぜんに設ひ是の如き無量の大劫を經るも菩薩行を修して乃ち無上正等菩提を證するに我れ此の中に於て心尙ほ退する無し。況んや是の事無くして而かも勤求せさらんをやと。當に知るべし名づけて精進の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如き精進相

【一七】更に續いて精進及懈怠の菩薩の義を明す。

も亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて諸の菩摩地及び諸の地智を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に清淨の五眼六勝神通を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極精進して常に勤めて清淨の五眼六勝神通を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて如來の十力四無所畏四無礙解を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて如來の十力四無所畏四無礙解を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべしと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて無忘失法恒住捨性を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經て最極勇猛に常に勤めて

疾く能く一切智智を證得すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて四念住乃至八聖道支を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて三解脱門を修學すと雖も而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて三解脱門を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證得し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて八解脱八勝處九次第定十遍處を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて八解脱乃至十遍處を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて陀羅尼門三摩地門を修學すと雖も而かも亦名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて陀羅尼門三摩地門を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて諸の菩薩地及び諸の地智を修學すと雖も、而か

づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六處滅し、六處滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死滅する智を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて無明滅するが故に行滅し乃至生滅するが故に老死滅する智を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて若しは苦若しは無常若しは空若しは無我の苦聖諦智、若しは因若しは集若しは生若しは緣の集聖諦智、若しは滅若しは靜若しは妙若しは離の滅聖諦智、若しは道若しは如若しは行若しは出の道聖諦智を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて若しは苦若しは無常若しは空若しは無我の苦聖諦智乃至若しは道若しは如若しは行若しは出の道聖諦智を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて四靜慮四無量四無色定を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて四靜慮四無量四無色定を修學して乃ち圓滿することを得、方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して

かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學して乃ち圓滿することを得方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空智を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて內空乃至無性自性空智を修學し乃ち圓滿することを得て方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて諸法の眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界智を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲す。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて諸法の眞如乃至不思議界智を修學し乃ち圓滿することを得て方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住して疾く能く一切智智を證得すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて無明に縁る行、行に縁る識、識に縁る名色、名色に縁る六處、六處に縁る觸、觸に縁る受、受に縁る愛、愛に縁る取、取に縁る有、有に縁る生、生に縁る老死の智を修學すと雖も、而かも亦た名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも最極勇猛に常に勤めて無明に縁る行乃至生に縁る老死の智を修學し乃ち圓滿することを得て方に無上正等菩提を證し、我れ定めて心に退屈を生ずべからずと。當に知るべし名

進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩半年を經て作せし所の事業を觀じて長久の想を生ぜば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩半年を經て作せし所の事業を觀じて一日の所作の事業の如く謂はば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩一年を經て作せし所の事業を觀じて長久の想を生ぜば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩一年を經て作せし所の事業を觀じて一日の所作の事業の如く謂はば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩半劫を經て作せし所の事業を觀じて長久の想を生ぜば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩半劫を經て作せし所の事業を觀じて一日の所作の事業の如しと謂はば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩一劫を經て作せし所の事業を觀じて長久の想を生ぜば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩一切を經て作せし所の事業を觀じて一日の所作の事業の如しと謂はば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。

〔一六〕又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は菩提行を修するに劫數の多少を思惟すべからず。謂ゆる我れ爾所の劫數を經て當に無上正等菩提を證すべしと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば精勤して勇猛に菩提行を修し無上正等菩提を求證するも當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩是の思惟を作さん、設ひ無量無邊の大劫を經るも精進して勇猛に菩提行を修して方に無上正等菩提を證せん。我れ定めて心に退屈を生じて無上正等菩提を勸求すべからずと。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜に安住し、精進波羅蜜多を修行して速に圓滿せしめ、生死を遠離して疾く能く一切智智を證得して諸の有情の與に大饒益を作すと爲すと。若し菩薩摩訶薩劫數を思惟して分限を作さば極めて勇猛に常に勤めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學すと雖も而

【一六】菩薩、菩提行を修するに、劫數を思惟して分限を作す可からざることを明す。

多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩假使ひ晝夜の量大劫に同じからんに此の晝夜を積みて復た大劫を成じ、設ひ是の如き殑伽沙數の大劫の時分を經て大地獄に處して諸の劇苦を受けんも斯の苦を受くるに由りて一有情のみにても地獄より出づることを得て善趣に生ぜしめば菩薩爾の時[一二]歡喜して受くることを爲さば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩是の事を説くを聞き踊躍歡喜して誓て能く心に退屈無きを受くることを爲さば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩是の如きの事を聞きて其の心怯弱し、歡喜を生じて行心を受くるを欲せずんば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩諸の善事を聞き心心相續し愛樂して受行せば當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩諸の善事を聞きて繋念相續して受行すること能はずんば當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。

[一三]又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩假使ひ此の贍部洲の地に於いて一處より掃いて漸く餘方に至り、周匝して掃き已り還て本處に至らんに若し是の念を生ず、我れ久しく此を離ると。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩此の事を爲し已て是の念言を作す、我れ極めて速に疾く還り來りて此に至ると。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩[一四]窣堵波に於て營構修理するに一日を經已て是の念言を作す、云何が此の日時の極めて長久なると。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩此の事を爲し已て是の念言を作す、云何が此の日の彈指の頃(あひだ)の如くなると。當に知るべし名づけて精進の菩薩精進波羅蜜多に安住せりと爲すと。若し菩薩摩訶薩[一五]僧伽藍に於て營構修理するに一日を經已て是の念言を作す、云何が此の日時の極めて長久なると。當に知るべし名づけて懈怠の菩薩と爲すと。若し菩薩摩訶薩此の事を爲し已て是の念言を作す、云何が此の日彈指の頃の如くなると。當に知るべし名づけて精

【一二】欣然之に當る。

【一三】精進及び懈怠の菩薩を對比して説く。

【一四】窣堵波(Stūpa)。塔なり。方墳、廟、大聚、高顯などと譯す。

【一五】僧伽藍。僧伽藍摩(Saṃghārāma)の略。衆園と譯す。僧衆の住する園林の意より寺院の通稱に用ふ。

ば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨及び十八佛不共法等の無邊の佛法を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。

[一〇]又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩佛土をして最極嚴淨ならしめんが爲に久しく生死に處し諸の功德を修めて心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩多く諸の有情類を成熟せんが爲に久しく生死に處し諸の功德を修めて心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩初めて無上正等覺の心を發し、假使ひ三千大千世界の諸の有情類皆菩薩と成り或は[一一]一生所繫或は二生所繫或は三生所繫或は四生所繫にして當に成佛することを得べきに是の如き言を作さん、汝應に精勤して菩薩行を修し、先に無上正等菩提を證すべし、然して復我れ當に無上覺を證すべしと。爾の時菩薩彼の所言に隨ひ精勤勇猛にして心に怯懼無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩或は一生所繫或は二生所繫或は三生所繫或は四生所繫にして當に成佛することを得べけんに、假使ひ三千大千世界の諸の有情類の初めて無上正等覺の心を發せるもの是の如き言を作さん。汝當に我が先に無上正等菩提を證するを待つべし、然して後乃ち應に無上覺を證すべしと。爾の時菩薩彼の所言に隨ひて久しく生死に住して心に退屈無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩乞者の來りて求索する所有るを見、面に頻蹙せず眼に瞋相無くして但だ是の念のみを作さん、是の如き有情は我が所求の一切智智に順ずるなり、速に方便を作し勤求して施與せんと。是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩、一有情の安樂を得んが爲の故に或は一劫或は一劫の餘を經て大地獄の中にて諸の劇苦を受けんに身動轉無く心退屈せずんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜

【一〇】菩薩の精進波羅蜜多安住を續說す。

【一一】一生所繫。所繫は補處なり。一生を過ぐれば佛處を補ふべき等覺の位をいふ。二生、三生など此意に準ず。

大饒益を作さんが爲に常に勤めて［七］若しは苦若しは無常若しは空若しは無我の苦聖諦觀、若しは因若しは集若しは生若しは緣の集聖諦觀、若しは滅若しは靜若しは妙若しは離の滅聖諦觀、若しは道若しは如若しは行若しは出の道聖諦觀を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて四靜慮四無量四無色定を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて空無相無願解脫門を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し、諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて八解脫八勝處九次第定十遍處を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて一切陀羅尼門一切三摩地門を修學せば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて［八］淨觀地種姓地第八地具見地薄地離欲地已辨地獨覺地菩薩地如來地智を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて若しは［九］勝解行地若しは極喜地若しは離垢地若しは發光地若しは焰慧地若しは極難勝地若しは現前地若しは遠行地若しは不動地若しは善慧地若しは法雲地若しは等覺地を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて清淨の五眼六勝神通を修學して心に退轉無くん

【七】四諦十六行相觀
苦聖諦觀—苦、無常、空、無我。
集聖諦觀—因、集、生、緣。
滅聖諦觀—滅、靜、妙、離。
道聖諦觀—道、如、行、出。

【八】通の十地なり。

【九】菩薩不共の十地を說くに前に勝解行地と後に等覺地とを加ふ。內凡の解行地增勝を勝解行地とし第十地滿位に於て正覺に等似し、元品無明を斷ずる極位を等覺地とす。

摩訶薩衆は報恩の想を作し、彼れの爲に種種の事業を成辦す。是の如き菩薩摩訶薩衆は精進波羅蜜多を成ぜんが爲に他心を將護し他の意に隨ひて轉じ爲に種種の利益安樂を作す。是の如き菩薩摩訶薩衆は精進波羅蜜多を攝受して諸の有情に利益安樂を作すこと已れの事業の如くにして常に厭倦無し。是れを菩薩摩訶薩衆の精進波羅蜜多に安住すと爲す。又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空觀を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて諸法の眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界觀を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて無明に緣る行、行に緣る識、識に緣る名色、名色に緣る六處、六處に緣る觸、觸に緣る受、受に緣る愛、愛に緣る取、取に緣る有、有に緣る生、生に緣る老死愁歎苦憂惱の觀を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんが爲に常に勤めて無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六處滅し、六處滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死愁歎苦憂惱滅する觀を修學して心に退轉無くんば是の菩薩摩訶薩は精進波羅蜜多に安住せるなり。若し菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得し諸の有情の與に

第十四精進波羅蜜多分[1]

[2]是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵室羅筏に在して誓多林の給孤獨園に住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。[3]爾の時具壽滿慈子、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば云何が方便して精進波羅蜜多に安住すべきと。爾の時世尊、滿慈子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば初發心の時應に是の念を作すべし、我が諸の所有若しは身若しは心、先づ應に他の爲に饒益の事を作すべし、當に一切の所願をして滿足せしむべし。譬へば[4]僮僕の應に是の念を作すべきが如し、行住坐臥皆當に主に任せて自在に而かも所作有るべからず、其の舍より市鄽等に往かんと欲せば先に主に諮問し然して後方に出で、須ふる所の飲食許さるれば乃ち受用し、諸の爲す所有るは皆主の欲するに隨はんと。是の如く菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば最初に發心して應に是の念を作すべし、我れの所有若しは身若しは心は皆自在に而かも轉ぜしむべからず、他に隨て所有るものは事業を饒益し一切皆當に具さに成辦することを爲すべしと。是の如き菩薩摩訶薩衆は精進波羅蜜多に依止して精進波羅蜜多を離れず誓て有情の爲に作すべき所を作すなり。諸の菩薩摩訶薩は皆精進波羅蜜多に於て應に是の如く住すべし。譬へば[5]馬寶に若し人乘御せんに便ち是の念を作すが如し、我れ今乘御する人の身支をして搖動疲倦勞苦せしめ或は嚴具を損ぜしむべからず、盤廻去住、遲速は人に任せて其の人を將護し我に緣りて瞋忿等の種種の過失を起らしめざらんと。是の如く菩薩摩訶薩衆精進波羅蜜多を行ぜんと欲せば己心に隨ひて所作有らず、他の意樂に隨ひて爲に饒益を作し仍て彼れを將護し我が身に於て一切の煩惱惡業を起さざらしめんと。[6]彼れは菩薩摩訶薩衆に於て先に恩無しと雖も、而かも諸の菩薩

【一】大般若第十四會。六度分の第四精進波羅蜜分なり、巻五百九十の一巻を以て成る。
【二】證信序等前會に同じ。
【三】菩薩の精進波羅蜜多安住に就て說く。
【四】僮僕等。六方禮に僕奴主人に事ふる五事の如し。
【五】馬寶。七寶の一、駿馬なり。
【六】菩薩その人に恩を受けざるも、菩薩は報恩心で感謝その事を行ふなり。

行し一切智智を憶念すること能はず一切智智に廻向すること能はずんば是の菩薩摩訶薩は虛しく時日を費し時日の果を損せるなり。若し菩薩摩訶薩此の六種波羅蜜多に於て一に隨ひて現行し或は[四四]第二日或は第三日乃ち能く一切智智を憶念し及び能く一切智智に廻向せば是の菩薩摩訶薩は犯す所有りと雖も、而かも名づけて時日の果有りと爲すことを得と。

[四五]爾の時舍利子、滿慈子に問うて言はく、菩薩の安忍と阿羅漢の所有る安忍と何の差別が有ると。滿慈子言はく、今尊者に問はん、妙高山王と小芥子との大小高下輕重は何の別なると。舍利子言はく、無量の差別なりと。滿慈子言はく、[四六]菩薩の安忍と阿羅漢の所有る安忍とも亦復た是の如し、問ひを爲すべからず。又た舍利子、意に於て云何、大海の中の水と一毛の端の水と何れが多しと爲すと。舍利子言はく、大海の中の水と一毛の端の水とは百分千分乃至鄔波尼殺曇分も亦た未だ其の量の多少を比ぶること能はずと。滿慈子言はく、菩薩の安忍と阿羅漢の所有る安忍とも亦復た是の如し、百分千分鄔波尼殺曇分も亦た未だ其の量の多少を比ぶること能はず。是の故に是の如き問ひを作すべからずと。[四七]爾の時佛、滿慈子を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し。汝佛力を承けて善く安忍波羅蜜多を說けり。若し菩薩摩訶薩の忍を取りて其の量の大小を聲聞獨覺の忍に校量せば則ち爲れ如來の忍を取りて其の量の大小を聲聞獨覺等の忍に校量せんと欲するなり。所以は何ん、諸の菩薩衆の成就する所の忍は其の量無邊にして聲聞等の忍に校量すべからざればなりと。

[四八]爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に滿慈子の所說の如く菩薩摩訶薩衆の修むる所の安忍波羅蜜多を受持して忘失せしむること勿るべしと。阿難陀曰はく、唯然世尊、我れ已に滿慈子の所說の如く菩薩摩訶薩衆の修むる所の安忍波羅蜜多を受持し必ず忘失せずと。[四九]時に薄伽梵是の經を說き已て具壽滿慈子、具壽舍利子、具壽阿難陀及び餘の聲聞諸の菩薩衆幷びに一切の天龍藥叉阿素洛等佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

【四四】翌日翌々日にも一切智智を憶念し廻向すれば正行たりとし、時日を虛しくせずとす。

【四五】菩薩及阿羅漢の安忍の差別を明す。

【四六】菩薩の一分と羅漢の全分とを比するも須彌と芥子と程違ふ。

【四七】佛、滿慈子の所說を讃じ、印可す。

【四八】佛、阿難陀に付囑す。

【四九】來會諸衆の歡喜を明す。第十三會安忍波羅蜜多分終り。

舍利子、菩薩摩訶薩應に是の如く學すべし、我れ心に六種波羅蜜多を遠離すべからず、若し心に是の如き六種波羅蜜多を離れずんば一切の惡魔便りを得ること能はず、便りを得ざるが故に所行自在なりと。[四〇]時に舍利子復た具壽滿慈子に問うて言はく、云何が菩薩摩訶薩は諸の魔事に於て應に如實に知るべきやと。滿慈子言はく、若し菩薩摩訶薩樂うて波羅蜜多相應の[四一]法教を聽聞せずんば當に知るべし是れを諸の惡魔の事と爲すと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩樂うて波羅蜜多相應の法教を受持せずんば當に知るべし是れを諸の惡魔の事と爲すと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩樂うて波羅蜜多相應の法教を讀誦せずんば當に知るべし是れを諸の惡魔の事と爲すと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩樂うて波羅蜜多相應の法教を思惟せずんば當に知るべし是れを諸の惡魔の事と爲すと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩樂うて波羅蜜多相應の法行を修行せずんば當に知るべし是れを諸の惡魔の事と爲すと。諸の菩薩摩訶薩は此の事を覺り已て是の思惟を作す。定めて是れ惡魔の方便して我が心に求むる所の一切智智を障礙するならん。我れ今彼れの欲する所に隨ふべからず、應に勤めて波羅蜜多を修學すべしと。是の菩薩摩訶薩は彼の惡魔に於て忿恚すべからず亦た堪忍せざる心を起すべからず。若し是の如く行ぜば卽ち爲れ安忍波羅蜜多なり。此の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、我れ無上正等覺を證せん時當に有情の爲に能く永く貪瞋癡を斷ずる法を說くべし、是の故に今彼の惡魔に於て忿恚すべからずと。若し時に菩薩摩訶薩是の如き念を得ば爾の時菩薩摩訶薩は諸の惡魔に勝りて自在に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修行せん。若し時に菩薩摩訶薩一切智智相應の作意現在前せずんば是の時菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、我れ今に於て非處を行じ、我れをして一切智智を憶はざらしむること勿れと。是の如き菩薩は應に自ら心を責むべし、我れ今に於て虛しく時日を費せりと。[四二]時に舍利子便ち具壽滿慈子に問うて言はく、何を齊りて名けて虛しく時日を費せりと爲すや。滿慈子言はく、若し菩薩摩訶薩此の六種波羅蜜多に於て[四三]一に隨ひて現

【四〇】菩薩の魔事を說き、菩薩此事を覺り已りて作す思惟を明す。
【四一】法教を聞持讀誦思惟し法行を修行す。
【四二】六度に於ける時日の果を明す。
【四三】唯一つの場合に任せて。

し、聲香味觸法界は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色界は若しは我若しは無我なりと樂觀し、聲香味觸法界は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、聲香味觸法界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩眼識界は若しは常若しは無常なりと樂觀し、耳鼻舌身意識界は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼識界は若しは樂若しは苦なりと樂觀し、耳鼻舌身意識界は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼識界は若しは我若しは無我なりと樂觀し、耳鼻舌身意識界は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼識界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、耳鼻舌身意識界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなりと。

[三七]時に舍利子復た具壽滿慈子に問うて言はく、云何が菩薩摩訶薩は自行處を行ずるやと。滿慈子言はく、若し菩薩摩訶薩六種波羅蜜多を修行し一切智智に相應する作意は是れ菩薩摩訶薩自行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩六種波羅蜜多を修行せば一切の惡魔便りを得ること能はず。譬へば[三八]野干の諸の龜鼈に於て便りを得ること能はず、便りを得ざるが故に[三九]所行自在なるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆六種波羅蜜多を修行せば一切の惡魔便りを得ること能はず、便りを得ざるが故に所行自在なり。又た舍利子、假使ひ惡魔普ねく三千大千世界の諸の有情類を化して皆惡魔と爲し、一一の惡魔各爾所の魔軍の眷屬前後に圍遶する有りて菩薩摩訶薩の所に來至せんに、是の菩薩摩訶薩六種波羅蜜多を修行せば彼の諸の惡魔便りを得ること能はず。便りを得ざるが故に所行自在なり。譬へば野干の諸の龜鼈に於て便りを得ること能はず、便りを得ざるが故に所行自在なるが如し。是の故に

【三七】菩薩の自行處の行に就て明す。即ち菩薩地を示す。
【三八】たぬき。
【三九】龜は自行處に於て所行自在なり。

し菩薩摩訶薩眼處は若しは樂若しは苦なりと樂觀し、耳鼻舌身意處は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼處は若しは我若しは無我なりと樂觀し、耳鼻舌身意處は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼處は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、耳鼻舌身意處は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩羅摩訶薩色處は若しは常若しは無常なりと樂觀し、聲香味觸法處は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色處は若しは樂若しは苦なりと樂觀し、聲香味觸法處は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色處は若しは我若しは無我なりと樂觀し、聲香味觸法處は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色處は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、聲香味觸法處は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩眼界は若しは常若しは無常なりと樂觀し、耳鼻舌身意界は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼界は若しは樂若しは苦なりと樂觀し、耳鼻舌身意界は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼界は若しは我若しは無我なりと樂觀し、耳鼻舌身意界は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩眼界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、耳鼻舌身意界は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩色界は若しは常若しは無常なりと樂觀し、聲香味觸法界は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色界は若しは樂若しは苦なりと樂觀

安忍を生ず。是の如く菩薩摩訶薩衆安忍波羅蜜多を修行し諸の有情に於て饒益を作さんと欲せば定めて當に眞金色の身を獲得すべく、相好莊嚴して見る者歡喜せん。是の故に舍利子、菩薩摩訶薩は皆應に精勤して安忍力を修め一切の加害等の苦を忍受すべし。若し菩薩摩訶薩安忍力を修めて衆苦を忍受せば安忍波羅蜜多を攝受せん。是の菩薩摩訶薩は生死を遠離して一切智に近づき能く有情の與に大饒益を作さん。[三三]若し菩薩摩訶薩、聲聞或は獨覺地を愛樂せば是の菩薩摩訶薩は當に知るべし菩薩の安忍波羅蜜多を退失すと。所以は何ん、諸の菩薩摩訶薩は寧ろ自身を以て具さに生死の無邊の大苦を受くるも而かも聲聞獨覺の自利の衆善に愛著せず。何を以ての故に、舍利子、若し菩薩摩訶薩聲聞或は獨覺地に愛著せば是の菩薩摩訶薩は當に知るべし自らの所行の處を退失して他行處を行ずればなりと。[三四]時に舍利子、具壽滿慈子に問うて言はく、云何が菩薩摩訶薩は他行處を行ずるやと。滿慈子言はく、若し菩薩摩訶薩、[三五]聲聞地或は獨覺地に住せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩、聲聞の作意或は獨覺の作意を起さば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩、聲聞相應の法敎に樂著し或は獨覺相應の言論を樂はゞ是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩[三六]色蘊は若しは常若しは無常なりと樂觀し、受想行識蘊は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色蘊は若しは樂若しは苦なりと樂觀し、受想行識蘊は若しは樂若しは苦なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩色蘊は若しは我若しは無我なりと樂觀し、受想行識蘊は若しは我若しは無我なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若しは菩薩摩訶薩色蘊は若しは淨若しは不淨なりと樂觀し、受想行識蘊は若しは淨若しは不淨なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩眼處は若しは常若しは無常なりと樂觀し、耳鼻舌身意處は若しは常若しは無常なりと樂觀せば是の菩薩摩訶薩は他行處を行ずるなり。若

【三三】菩薩若し聲聞或は獨覺地を愛樂せば菩薩の安忍波羅蜜多を退失する所以を明す。

【三四】菩薩の他行處の行に就て明す。

【三五】聲聞には聲聞の分野あり、これその自行處なり聲聞地なり、獨覺にも菩薩にも各その地あり、然るに他の分野に寄心すこれ他行處を行するなり。

【三六】色蘊常を云ふは外道の如く、無常を觀るは小乘の類なり、若常若無常いづれも菩薩の地にあらず。

是れ安忍波羅蜜多なり。是の如き菩薩摩訶薩衆は般若波羅蜜多を修行し苦觸を重ぬる時便ち[三〇]是の念を作す、我れ無始の生死より巳來た身心に猛利の衆苦を受くと雖も、而かも此の苦に由りて尙ほ若しは預流果若しは一來果若しは不還果若しは阿羅漢果若しは獨覺菩提すら得ること能はず、況んや此の苦に由りて能く無上正等菩提を證するをや。今我が身心に受くる所の衆苦は旣に諸の有情を利益せんが爲の故なり。定めて無上正等菩提を證せん。是の故に我れ今應に歡喜して受くべしと。是の如き菩薩摩訶薩衆は此の義を觀ずるが故に衆苦を受くと雖も、而かも能く增上猛利の歡喜を發生して忍受す。又た舍利子、譬へば人有りて有味の食を食はんに身心適悅して勝歡喜を生ずるが如く、是の如く菩薩は乞者の來りて或は資財を求め或は身分を求むるを見れば或は捨施に因りて種種の苦を受くるも歡喜して忍受し身心適悅す。前の適悅に過ぐること多百千倍なり。又た舍利子、阿羅漢の若し如來應正等覺を見たてまつれば漏巳に盡きたりと雖も、而かも殊勝の信敬喜心を生ずるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は來り求むる者の或は資財を乞ひ或は身分を乞ふを見れば心に殊勝の信敬歡喜を生じて能く深く彼の加害する所の訶罵毀謗種種の重苦を忍受す。安忍の心を發起せらるる時に隨ひて廻向して一切智智を趣求す。是の如き菩薩摩訶薩衆は安忍の心を發起する時に隨ひて廻向して一切智智を趣求するに由りて常に修むる所の安忍波羅蜜多を遠離せず、諸の有情の與に大饒益を作して恒に間斷無し。[三一]又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば諸の有情に於て應に安忍を修め、打に打を報いず、罵に罵を報いず、謗に謗を報いず、瞋に瞋を報いず、訶に訶を報いず、忿に忿を報いず、恐に恐を報いず、害に害を報いず、諸の惡事に於て皆能く忍受すべし。何を以ての故に、舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩衆は恒に一切智の心を捨離せず諸の有情に於て饒益せんと欲するが故なり。若し諸の菩薩摩訶薩衆恒に一切智の心を捨離せず諸の有情に於て饒益を作さんと欲せば假使ひ身に百千の鉾[三二]矟を受くるも而かも一念報害の心無く彼れに於て常に淨信

【三〇】信仰の力はかく考へ、殉敎的熱誠となる。

【三一】無上菩提を證得せんとする菩薩の能く安忍力を修め、一切の加害等の苦を忍受する所以を明す。

【三二】鉾矟。ほこ、さすまた。

かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる緣に遇ふと雖も、而かも下感憂恚を生ずべからず。安忍淨信常に現在前すること猶ほ大風の平等にして而かも轉ずるが如し。故に說く、菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大風の如く分別する所無からしむべしと。

二八 舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて虛空の如く分別する所無からしむべきやと。滿慈子言はく、譬へば虛空の愛す可き色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て高欣喜愛を生ぜず、非愛の色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も而かも都て下感愛恚を生ぜざるが如く是の如く菩薩摩訶薩衆は種種の愛す可き所緣に遇ふと雖も、而かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる緣に遇ふと雖も、而かも下感憂恚を生ずべからず。安忍淨信常に現在前すること猶ほ虛空の平等にして而かも轉ずるが如し。故に說く、菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて虛空の如く分別する所無からしむべしと。

二九 時に舍利子、便ち具壽滿慈子に問うて言はく、虛空無爲なれば諸の菩薩摩訶薩衆も豈に無爲の攝ならんかと。滿慈子言はく、菩薩衆は是れ無爲の攝に非ず、然かも諸の菩薩は般若波羅蜜多を修行し方便善巧して身心と虛空と等しと觀察し、境界に於て分別する所無からしめ安忍波羅蜜多を修むるに堪ふ。謂ゆる諸の菩薩摩訶薩衆は方便善巧して身心の無性無礙なると虛空と等しと觀察し種種の刀杖等の觸を受くるに堪ふ。是の如き菩薩摩訶薩衆は方便善巧して般若波羅蜜多に依止して身心と虛空と等しと觀察し安忍波羅蜜多を攝受す。假使ひ恒時に地獄の猛火地獄の刀杖及び餘の苦具、其の身に逼迫するも亦た能く忍受し其の心平等にして動ずる無く變ずる無し。是の如き菩薩摩訶薩衆は般若波羅蜜多を修行して般若波羅蜜多を攝受し、身心と虛空と等しと觀察し衆苦を受くるに堪へ動ずる無く變ずる無し。是の如く菩薩摩訶薩衆苦を受くるに堪へ動ずる無く變ずる無くんば卽ち

【二八】 空喩。

【二九】 菩薩の般若を修行して安忍波羅蜜多を修するを說き、苦觸を重ぬる時の作念を明す。

説く、菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大地の如く分別する所無からしむべしと。[二五]舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大水の如く分別する所無からしむべきやと。滿慈子言はく、譬へば大水の、愛す可き色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て高欣喜愛を生ぜず、愛するに非ざる色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て下感憂恚を生ぜざるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は種種の愛す可き所縁に遇ふと雖も、而かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる縁に遇ふと雖も而かも下感憂恚を生ずべからず。安忍淨信常に現在前すること猶ほ大水の平等にして而かも轉ずるが如し。故に説く、菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大水の如く分別する所無からしむべしと。[二六]舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大火の如く分別する所無からしむべきやと。滿慈子言はく、譬へば大火の愛す可き色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て高欣喜愛を生ぜず、非愛の色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て下感憂恚を生ぜざるが如く是の如く、菩薩摩訶薩衆は種種愛す可き所縁に遇ふと雖も、而かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる縁に遇ふと雖も而かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる縁に遇ふと雖も、而かも下感憂恚を生ずべからず。安忍淨信常に現在前すること大火の平等にして而かも轉ずるが如し、故に説く、菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大火の如く分別する所無からしむべしと。[二七]舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大風の如く分別する所無からしむべきやと。滿慈子言はく、譬へば大風の愛す可き色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て高欣喜愛を生ぜず、非愛の色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て下感憂恚を生ぜざるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は種種の愛す可き所縁に遇ふと雖も、而

【二五】大水に譬ふ。

【二六】火喩。

【二七】風喩。

の人の來りて捶打訶罵するも百分千分乃至鄔波尼殺曇分の未だ其の一をも得ず。如何が此れを緣じて應に忿恚を生ずべけんと。是の菩薩摩訶薩は是の如き義を觀じて人有り來りて捶打訶罵すと雖も而かも能く忍受して都て瞋忿怨恨の心無し。是の諸の菩薩摩訶薩衆は發起する所の安忍の心に隨て廻向して一切智智を趣求し安忍波羅蜜多を攝受す。是の如き菩薩摩訶薩衆は應に知るべし、安忍波羅蜜多を能く一切時に常に捨離せずと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲するに若し怨賊の來りて財寶を劫奪せば是の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、是の如き財寶は本性皆空にして繫屬する所無し。如何が此れを緣じて應に忿恚を生ずべけんと。是の菩薩摩訶薩は是の如き義を觀じて怨賊の財寶を劫奪するに遭ふと雖も、而かも心都て瞋忿怨恨無し。是の諸の菩薩摩訶薩衆は發起する所の安忍の心に隨て廻向して一切智智を趣求し安忍波羅蜜多を攝受す。是の如き菩薩摩訶薩衆は應に知るべし安忍波羅蜜多を能く一切時に常に捨離せずと。

[三三] 又た舍利子、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて地水火風空と等しからしむべしと。舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修して地水火風空と等しからしむべきやと。滿慈子言はく、若し諸の菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大地大水大火大風虛空の如く分別する所無からしむべしと。舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩衆は無上正等菩提を證せんと欲せば應に其の心を修めて大地の如く分別する所無からしむべきやと。滿慈子言はく、譬へば大地の愛す可き色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て高欣喜愛を生ぜず、非愛の色香味觸を以て其の中に擲げ置くと雖も、而かも都て下感憂悲を生ぜざるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆は種種の愛す可き所緣に遇ふと雖も、而かも高欣喜愛を生ずべからず、種種の愛す可からざる緣に遇ふと雖も、而かも下感憂喜を生ずべからず。[二四] 安忍淨信常に現在前すること猶ほ大地の平等にしても、而かも轉ずるが如し。故に

【三三】 菩薩無上菩提を證せんと欲せば、その心を修めて五大の如く分別する所無からしむべきことを諭說す。

【二四】 安忍淨信等。平然たり堅固たること大地の如し磐石の如くにして而かも絕えず淨化し進轉するものたるを要す。淨信なき安忍は退嬰姑息となる。

緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く増無く滅無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙清淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ地界乃至識界の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無きを觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た地界乃至識界都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く増無く滅無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙清淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ無明乃至老死の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無きを觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た無明乃至老死も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く増無く滅無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙清淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。

[二〇]又た舍利子、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲するに若し怨賊の來りて身の支節を解かば是の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、殑伽河の沙は數量を知る可けんも身の數量は知るを得可きこと難し、若しは解く所の身若しは能く解く者倶に[二一]色攝なるが故に分數知り難きも解く所の身支の分數は極めて少し。如何が此れを緣じて應に忿恚を生ずべけんと。是の菩薩摩訶薩は是の如き義を觀じて怨賊の支節を解くに遭ふと雖も、而かも能く忍受して都て瞋忿怨恨の心無し。是の諸の菩薩摩訶薩衆は發起する所の安忍の心に隨て廻向して一切智智を趣求し安忍波羅蜜多を攝受す。是の如き菩薩摩訶薩衆は應に知るべし安忍波羅蜜多を能く一切時に常に捨離せずと。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲するに若し人有り來りて捶打訶罵せば是の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、殑伽河の沙は數量を知る可けんも我が身の過患は知り得可きこと難し、謂ゆる無始より來た發起せし種種の煩惱の惡業、[二二]理事に違害し諸佛賢聖の共に訶毀する所にして今此

【二〇】無上菩提を證得せんとする菩薩の怨賊來襲せし時の作念を說き、安忍波羅蜜多に就て明す。

【二一】色攝等極微量知り難きも身支の千切らるるは大抵數へ得る分類なり。三分五分百千分等なり。

【二二】理に違ひ事に害なり、責甚だ大なるものあるを云ふ。

觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た色處乃至法處も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ眼界乃至意界の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無しと觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た眼界乃至意界も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ色界乃至法界の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無しと觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た色界乃至法界も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ眼識界乃至意識界の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無きを觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た眼識界乃至意識界も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ眼觸乃至意觸の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無きを觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た眼觸乃至意觸も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるる無きを觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た眼觸に

爲に是の如き法を說き其れをして永く一切の鬪諍を滅せしめ其の心平等なること猶ほ虛空の若くにして種種の瑕隙を相伺求せさらしめんと。斯れに由りて大士夫相の莊嚴する所の身を感得し、一切有情の見る者歡喜して互に相饒益し乃至淸淨の涅槃を證得するまで諸の[14]戲論を離れて畢竟安樂ならん。

[15]爾の時舍利子、滿慈子に問うて言はく、菩薩と聲聞との二種の安忍は應に何れか廣大微妙淸淨殊勝なりと知るべきと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に謂て言はく、今現事を以て尊者に詰問せん、意に隨て爲に答へよと。舍利子言はく、意に隨て詰問せよ我れ當に爲に答ふべしと。滿慈子言はく、世間の鉡鐵と贍部金との二種の光彩は應に何れか廣大微妙淸淨殊勝なりと知るべきと。舍利子言はく、世間の鉡鐵の所有る光彩は方は[16]贍部眞金に比す可きこと難し、謂ゆる贍部金の所有る光彩は廣大微妙にして淸淨殊勝なりと。滿慈子言はく、聲聞の安忍は世の鉡鐵の所有る光彩の如く、菩薩の安忍は贍部金の所有る光彩の如し、應に知るべし二種の安忍の勝劣の差別の相なることを。何を以ての故に、舍利子、聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ色蘊乃至識蘊の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるゝ無しと觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た色蘊乃至識蘊も都て[17]自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ眼處乃至意處の我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者に引發せらるゝ無しと觀ずるのみなるも菩薩乘の人の所有る安忍は亦た眼處乃至意處も都て自性無くして生無く滅無く染無く淨無く增無く減無き本來寂靜の引發する所と觀ず。是の故に菩薩の所有る安忍は廣大微妙淸淨殊勝にして諸の聲聞の所有る安忍に過ぐ。聲聞乘の人の所有る安忍は唯だ色處乃至法處の我有情命者生者養者士夫[18]補特伽羅[19]意生儒童作者受者知者見者に引發せらるゝ無しと

【一四】戲論。謬れる見解による論理的遊戲なり、愛論見論をいふ。

【一五】菩薩及聲聞の安忍の勝劣差別を明す。

【一六】贍部眞金。贍部捺陀金(Jambu-nada-suvarṇa)のこと。舊に閻部檀金といふ。贍部は樹名、捺陀は江又は海の義で、贍部樹下の水中より出づる金に名く。

【一七】聲聞は能生者なしとするも菩薩は自性なく空にして總合進動すべきを觀る。

【一八】補特伽羅(Pudgala)。數取趣又は人などと譯す。有情又は有情の我をいふ。

【一九】意生。精血等の緣を假らず、唯意によつて生るゝこと。

するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る耳鼻舌身意觸も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸取も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る地界は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る水火風空識界も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る因緣は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣及び諸緣より生ずる所の諸法も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る無明は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る行識名色六處觸受愛取有生老死も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る欲界は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る色界若しは無色界若しは無漏界も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめんと。是の如く菩薩は是の思惟を作す、我れ無上正等覺を證せん時諸の有情の

欲するも我れ無上正等覺を證せん時當に爲に甚深の空法を宣揚して永く一切の鬪諍を息滅せしむべし。謂ゆる所有る色蘊皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に畢竟空の中には諍競する所無ければ、彼れをして聞き已て鬪諍心を息ましめ、亦た爲に所有る受想行識蘊も皆幻化の如く畢竟性空なるを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息ましめん。或は所有る眼處は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息ましめ、亦た所有る耳鼻舌身意處も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣說するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息ましめん。或は所有る色處は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息ましめ、亦た所有る聲香味觸法處も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る眼界は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る耳鼻舌身意界も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る色界は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る聲香味觸法界も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る眼識界は皆幻化の如く畢竟性空なることる宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめ、亦た所有る耳鼻舌身意識界も皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚するが爲に、畢竟空の中には諍競する所無ければ彼れをして聞き已て鬪諍心を息めしめん。或は所有る眼觸は皆幻化の如く畢竟性空なることを宣揚

責する所と爲るも心に忿恨無きが如く、是の如く若し或は旃荼羅或は補羯娑或は餘の下賤の諸の有情類に訶罵謗毀せらるゝも亦た忿恚嫌恨が報の心を起して刹那の頃をも經べからず。是の如き菩薩は安忍波羅蜜多を攝受して疾く圓滿することを得久しからずして一切智智を證得せん。是の如き菩薩は安忍波羅蜜多を修學して漸次に究竟し疾く無上正等菩提を證せん。若し菩薩摩訶薩是の如く安住して安忍波羅蜜多を攝受せば他人の訶罵謗毀を受くるに堪え其の心動ぜざること妙高山の如く、功德善根増長して壞し難く速に無上正等菩提を證して普ねく世間の爲に大饒益を作さんと。

[九]時に舍利子復た具壽滿慈子に問うて言はく、若し菩薩摩訶薩の安忍を修むる時二人有りて菩薩の所に來至し、一は善心の故に[一〇]旃檀を以て塗り、一は惡心の故に火を以て身を燒かんに菩薩は彼れに於て應に何の心をか起すべきと。滿慈子言はく、是の菩薩摩訶薩、無上正等菩提を證せんと欲せば第一の人に於て愛を起すべからず、第二の人に於ても恚を起すべからず。應に彼の二りに於て平等心を起して倶に畢竟利益安樂せんと欲すべし。是の如き菩薩摩訶薩衆は能く安忍波羅蜜多を行じ、能く安忍波羅蜜多に住するなり。若し菩薩摩訶薩能く安忍波羅蜜多を行じ能く安忍波羅蜜多に住せば是の菩薩摩訶薩は能く無倒に菩薩の[一一]行處を行じ、能く無倒に菩薩の淨土に住せん。是の如き菩薩摩訶薩衆は有情類に於て[一二]忿恚の心を發起すべからず、嫌恨の心を發起すべからず、報怨の心を發起すべからず。是の如き菩薩摩訶薩衆は有情類に於て安忍圓滿し、稱讃圓滿し、柔和圓滿し、意樂圓滿し、忿無く恨無く一切處に於て皆慈心を起さん。是の如き菩薩摩訶薩衆は他の諸の有情其の所に來至して怨害の心を起して打たんと欲し縛し毀辱し訶責せんと欲するも皆能く安忍して心に加報すること無けん。是の如き菩薩摩訶薩衆は他の諸の有情の、其の所に來至して鬪諍を興して不饒益を作さんと欲するも菩薩は彼れに於て和好の心を起し軟言もて愧謝し毒心をして息ましめん。

[一三]爾の時菩薩は是の思惟を作さん、是の如き有情は我が所に來至し鬪諍を興して不饒益を作さんと

【九】菩薩の安忍波羅蜜多に安住する所以を明す。

【一〇】旃檀香を以て塗り淨め供養するなり。

【一一】行處は所行處にて、その行ふべき無上菩提への進みなり。

【一二】忿恚は不平の心、嫌恨は反對、忌避する心、報怨は復讐の心なり。

【一三】諸の有情來至して鬪諍を興して不饒益を作さんとする時の菩薩の思惟を明す。菩薩能く甚深の空法を宣揚して一切の鬪諍を息滅せしむ。

第十三安忍波羅蜜多分[一]

[二]是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵、[三]室羅筏に在して[四]誓多林の給孤獨園に住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。[五]爾の時世尊、具壽滿慈子に告げたまはく、汝今應に無上正等菩提を證せんと欲する諸の菩薩摩訶薩の爲に安忍波羅蜜多を宣說すべしと。時に滿慈子、佛の敎勅を蒙り佛の神力を承け便ち佛に白して言さく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば他の有情の種種の訶罵毀謗の言說に於て應に深く忍受すべし。忿恚恨の心を發起すべからず。[六]應に慈悲を起して彼の恩德に報ゆべし。是の如き菩薩は應に安忍波羅蜜多に於て深心に信樂し、發起する所の安忍の心に隨て廻向して一切智智を趣求すべし。是の菩薩摩訶薩は能く安忍波羅蜜多に住するなりと。

[七]時に舍利子、具壽滿慈子に問うて言はく、諸の菩薩の修する所の安忍と聲聞衆の修むる所の安忍と何の差別か有ると。滿慈子言はく、諸の聲聞衆の修する所の安忍は名づけて少分行相と爲し、所緣極めて圓滿せるに非ず。諸の菩薩衆の修する所の安忍は名づけて具分行相と爲し、所緣最も極めて圓滿せり。謂ゆる諸の菩薩の[八]安忍は無量にして無量の有情を利樂せんと欲するが爲に安忍の鎧を被て是の誓言を作す、我れ當に無量の有情を度脫して皆苦を離れて涅槃の樂を證せしむべしと。是の故に菩薩の安忍は無量なり。聲聞の安忍は唯だ自身の煩惱を棄捨せんが爲のみにして有情の爲に非ず。是の故に名づけて少分安忍と爲す。菩薩摩訶薩衆の安忍の如く無量なるに非ず。諸の菩薩は安忍波羅蜜多を離れざるを以て是の故に名づけに具分安忍と爲す。若し菩薩不淸淨を起し損害の心を含忍すること能はざるに於ては、當に知るべし彼の人無量の罪を獲ん、聲聞獨覺乘に於けると等しきに非ず。是の故に菩薩の安忍は最勝なり。又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩は如來應正等覺の訶

【一】大般若第十三會、六度の第三安忍を說く安忍波羅蜜多分なり。第五百八十九巻の一巻を以て成る。
【二】如是我聞。證信序。持經者正しく般若を信ずるを示す。例の如し。
【三】室羅筏(Śrāvastī)。舍衞のこと、拘薩羅國の都城。迦毘羅城の西北、ラプチ河畔に在り。
【四】誓多林。祇洹(Jetavana)のこと。勝林と譯す。祇陀太子所有の樹林たりしも須達此地を買ひ共に佛に獻ず、即ち祇樹給孤獨園の名ある所以なり。
【五】佛、滿慈子をして安忍波羅蜜多を宣說せしむ。
【六】瞋恚は情の訓練なきによる。慈悲觀によりて治せらる、事みな如來の相とし、それによる明るき導きを見れば恩德をも感ぜらる。
【七】菩薩及び聲聞所修の安忍の差別を明す。即ち前者を具分行相とし、後者を少分行相となして前者を最勝となすことを說く。
【八】具分圓滿の忍耐は能所共に無量なり。

こと能はずして諸趣に沈淪するのみ。諸佛世尊は是の如き義を觀じて偏へに菩薩に於て敎誡敎授す。諸の菩薩は諸の如來應正等覺の般涅槃の後に於て菩薩行を修し漸次に圓滿して無上正等菩提を證得するを以て諸の世間の與に法の明照と作ること譬へば大樹の蔭影する所多くして無量の有情を利益安樂するが如しと。

[二五] 時に舍利子復た佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば聲聞乘の人を敎誡敎授すること若しは百若しは千乃至無數にして皆阿羅漢果に安住せしむるも、一菩薩乘の人の爲に方便善巧して深法要の所謂六種波羅蜜多相應の法を說き彼れをして聞き已て一念一切智と相應するの心を發起せしむるには如かず。是の如き法要は前の敎法よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。發す所の心は聲聞等の所有る功德よりも最も勝るを以ての故にと。爾の時佛、舍利子を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し。汝は能く佛の爲に眞の弟子と作り聰叡明了、調善無畏にして菩薩乘の人を敎誡敎授し勸めて諸の菩薩行を修行して疾く無上正等菩提を證せしめ諸の有情の與に大饒益を作すと。

[二六] 爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に舍利子の說く所の如く菩薩摩訶薩衆の修する所の淨戒波羅蜜多を受持して忘失せしむること勿るべしと。阿難陀曰はく、唯然世尊、我れ已に舍利子の說く所の如く菩薩摩訶薩衆の修する所の淨戒波羅蜜多を受持し必ず忘失せずして諸の菩薩の未だ無上菩提の心を發さゞる者をして速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんと。[二七] 時に薄伽梵是の經を說き已て具壽舍利子、具壽阿難陀、及び餘の聲聞諸の菩薩衆並びに餘の一切の天龍藥叉人非人等、佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

【二五】佛、舍利子の領解を聞き、これを讃ず。

【二六】佛、阿難陀に付囑して淨戒波羅蜜多を受持して忘失せざることを說く。

【二七】在會大衆の歡喜を明す。第十二會淨戒波羅蜜多分終り。

說し、方便して所有る色界の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る聲香味觸法界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色界の遠離不遠離性皆得可からず所有る聲香味觸法界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る眼識界の常無常性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼識界の樂無樂性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼識界の我無我性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼識界の淨不淨性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の淨不淨も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼識界の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼識界の遠離不遠離性皆得可からず所有る耳鼻舌身意識界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る苦聖諦の常無常性皆得可からず所有る集滅道聖諦の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る苦聖諦の樂無樂性皆得可からず所有る集滅道聖諦の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る苦聖諦の我無我性皆得可からず所有る集滅道聖諦の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る苦聖諦の淨不淨性皆得可からず所有る集滅道聖諦の淨不淨性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る苦聖諦の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る集滅道聖諦の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る苦聖諦の遠離不遠離性皆得可からず所有る集滅道聖諦の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して是の如き等の類の無量の法門を宣說し、勸め精進し方便善巧して無倒に觀察して諸の戲論を離れ、方便して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を修行し究竟して一切智智を證得せしむ。諸の有情類の覺慧有る者は是の如き法を聞きて精進して修行し其の應ずる所に隨て甘露[二四]味を得或は暫く或は永く利益安樂す。唯だ愚癡の諸の外道等有りて聽受する

【二四】甘露。阿密哩多(Amṛta)の譯。天酒、美露の名ありて天人の所食なり。此處にては甚深の妙法(般若)を喩へて云ふ。

して所有る眼處の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼處の遠離不遠離性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る色處の常無常性皆得可からず所有る聲香味觸法處の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色處の樂無樂性皆得可からず所有る聲香味觸法處の樂無樂も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色處の我無我性皆得可からず所有る聲香味觸法處の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色處の淨不淨性皆得可からず所有る聲香味觸法處の淨不淨性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色處の寂靜不寂靜皆得可からず所有る聲香味觸法處の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色處の遠離不遠離性皆得可からず所有る聲香味觸法處の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る眼界の常無常性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼界の樂無樂性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼界の我無我性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼界の淨不淨性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の淨不淨性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼界の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の寂靜不寂靜も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼界の遠離不遠離性皆得可からず所有る耳鼻舌身意界の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る色界の常無常性皆得可からず所有る聲香味觸法界の常無常性も亦た得可からさるを宣說し、方便して所有る色界の樂無樂性皆得可からず所有る聲香味觸法界の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色界の我無我性皆得可からず所有る聲香味觸法界の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色界の淨不淨性皆得可からず所有る聲香味觸法界の淨不淨性も亦た得可からざるを宣

を受用するが如し。諸の智有らん人はみな咸共に稱讃す、是の如き大樹の果葉蔭影の有情を利樂すること昔に異らずと。唯だ諸の愚者のみ依趣するを解せざるなり。是の如く菩薩は佛世尊般涅槃の後漸次に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無邊の諸佛の妙法を修學して漸次に圓滿し各三千大千世界に於て無上正等菩提を證得して先の如來正等覺に紹ぎ如實に無量の有情を利樂して種種の佛事を斷絕せざらしむ。謂ゆる無邊の諸の有情類の爲に方便して十善業道、施戒修[三]等の種種の法門を宣說し、勸めて修學し、惡趣の苦を脫し天人の中に生じて諸の快樂を受けしめ、或は無邊の諸の有情類の爲に方便して蘊處界等に我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者無きを宣說し、勸め精進し、無倒に苦集滅道の四種聖諦を觀察し、四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支三解脫門及び餘の善法を修し、諸の煩惱を斷じて般涅槃を得せしめ、或は無邊の諸の有情類の爲に方便して所有る色蘊の常無常性皆得可からず所有る受想行識蘊の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色蘊の樂無樂性皆得可からず所有る受想行識蘊の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色蘊の我無我性皆得可からず所有る受想行識蘊の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色蘊の淨不淨性皆得可からず所有る受想行識蘊の淨不淨性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色蘊の寂靜不寂靜性皆得可からず所有る受想行識蘊の寂靜不寂靜性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る色蘊の遠離不遠離性皆得可からず受想行識蘊の遠離不遠離性も亦た得可からざるを宣說す。方便して所有る眼處の常無常性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の常無常性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼處の樂無樂性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の樂無樂性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼處の我無我性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の我無我性も亦た得可からざるを宣說し、方便して所有る眼處の淨不淨性皆得可からず所有る耳鼻舌身意處の淨不淨性も亦た得可からざるを宣說し、方便

【三】施戒修。施福業、戒福業、修道福業なり。

處九次第定十遍處を修學して漸次に圓滿す。精勤して淨觀地種姓地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地を修學して無顚倒智漸次に圓滿し、精勤して極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修學して漸次に圓滿す。精勤して一切陀羅尼門一切三摩地門を修學して漸次に圓滿し、精勤して五眼六神通を修學して漸次に圓滿す。精勤して如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修學して漸次に圓滿し、精勤して三十二大士相八十隨好を修學して漸次に圓滿し、精勤して無忘失法恒住捨性を修學して漸次に圓滿し、精勤して一切智道相智一切相智を修學して漸次に圓滿す。精勤して預流向預流果一來向一來果不還向不還果阿羅漢向阿羅漢果獨覺因道獨覺菩提を修學して無顚倒智漸次に圓滿し、精勤して一切の菩薩摩訶薩行を修學して漸次に圓滿し、精勤して諸佛の無上正等菩提を修學して漸次に圓滿す。精勤して斷生命を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虛誑語を離れ、麁惡語を離れ、離間語を離れ、雜穢語を離れ、貪欲を離れ、瞋恚を離れ、邪見業道を離るゝを修學して漸次に圓滿し、精勤して種種の法門の妙智を施設するを修學して漸次に圓滿するを以て諸の世間の與に法の明照と作り無量無邊の有情を度脫して生死の苦を離れて涅槃の樂を證せしむ。諸佛世尊は是の如き義を觀じて是の如き菩薩を教誡教授す。此の因緣に由りて最も諸の菩薩衆を棄捨せざるなり。諸の菩薩は諸の如來應正等覺般涅槃して後も無上正等菩提を證得し諸の世間の與に法の明照と作り正行を修して大饒益を獲せしむるを以ての故に菩薩に於て最も棄捨せざるなりと。

〔三〕時に舍利子佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝、誠に聖教の如し。諸の如來の般涅槃の後に於て十方世界に菩薩摩訶薩の無上正等菩提を證得せる有りて諸の世間の與に法の明照と作る。譬へば大樹諸の果葉多きに枯滅の後も小樹續生して莖幹枝條漸く高く漸く廣く周匝せる蔭影一踰繕那にして、無量の衆生下に止息して風雨寒熱等の難を免るゝことを得、果葉を採摘して之

【三】諸菩薩は能く諸の如來應正等覺般涅槃後に於て菩薩行を修し、漸次圓滿して無上正等菩提を證得し、以て世間の與に法の明照と作ることを明す。

して樂を與へ苦を拔くが如く諸の成就十惡業道に於ても亦復た是の如し。成就十惡業道に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く旃荼羅補羯娑等に於ても亦復た是の如し。此れに由りて如來應正等覺は心差別無く欲に隨て行ぜざるが故に如來應正等覺と名づく。是の故に諸佛は大悲慧を具し一切法平等性の中に住して諸の有情に於て皆棄捨せざるなり。又た舍利子、我れ都て諸佛世尊所緣の境に於ても及び少事に於ても愛恚を起す者を見ず。若し諸の如來應正等覺、所緣の事に於て愛恚等を起すとせば是の處有ること無けん。何を以ての故に、舍利子、諸佛世尊は愛恚等の一切の煩惱に於て皆永く斷ずるが故なり。[三〇]又た舍利子、然かも諸の如來應正等覺は諸の菩薩に於て最も棄捨せざるなり。何を以ての故に、舍利子、諸の如來應正等覺般涅槃して後、諸の菩薩有りて精進して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修行して漸次に圓滿す。精勤して內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空を修學して[三一]無顚倒智漸次に圓滿し、精勤して諸法の眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界を修學して無顚倒智漸次に圓滿す。精勤して無明に緣る行、行に緣る識、識に緣る名色、名色に緣る六處、六處に緣る觸、觸に緣る受、受に緣る愛、愛に緣る取、取に緣る有、有に緣る生、生に緣る老死を修學して無顚倒智漸次に圓滿し、精勤して無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六處滅し、六處滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死滅するを修學して無顚倒智漸次に圓滿す。精勤して苦集滅道聖諦を修學して無顚倒智漸次に圓滿し、精勤して四靜慮四無量四無色定を修學して漸次に圓滿し、精勤して四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學して漸次に圓滿す。精勤して空無相無願解脫門を修學して漸次に圓滿し、精勤して八解脫八勝

【三〇】諸の如來は最き諸の菩薩衆を棄捨せざる因緣を明す。

【三一】無顚倒智。迷ひを離れし眞智。

は其の心平等にして佛所に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へて苦を拔くが如く、是の如く一切有情を愍念して平等に苦を離れて樂を得せしめんと欲すと。[一三]又た舍利子、若し諸の如來應正等覺、諸の佛所に於て別異心に住し、諸の菩薩に於て別異心に住し、諸の獨覺に於て別異心に住し、阿羅漢に於て別異心に住し、不還者に於て別異心に住し、一來者に於て別異心に住し、預流者に於て別異心に住し、[一四]隨法行に於て別異心に住し、[一五]隨信行に於て別異心に住し、[一六]外五通に於て別異心に住し、諸の[一七]成就別解脫戒に於て別異心に住し、諸の成就十善業道に於て別異心に住し、諸の成就十惡業道に於て別異心に住し、[一八]旃茶羅[一九]補羯娑等に於て別異心に住せば則ち諸の如來應正等覺は心差別有り欲に隨て行ず、應に如來應正等覺に非ざるべし。又た舍利子、然るに諸の如來應正等覺は佛所に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く菩薩の所に於ても亦復た是の如し。菩薩に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く獨覺の所に於ても亦復た是の如し。獨覺に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く阿羅漢に於ても亦復た是の如し。阿羅漢に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く不還者に於ても亦復た是の如し。不還者に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く一來者に於ても亦復た是の如し。一來者に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く預流者に於ても亦復た是の如し。預流者に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く隨法行に於ても亦復た是の如し。隨法行に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く隨信行に於ても亦復た是の如し。隨信行に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く外五通に於ても亦復た是の如し。外五通に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く諸の成就別解脫戒に於ても亦復た是の如し。成就別解脫戒に於て純淨心を起し慈悲に安住して樂を與へ苦を拔くが如く諸の成就十善業道に於ても亦復た是の如し。成就十善業道に於て純淨心を起し慈悲に安住

【一三】如來は心差別無く一切有情に平等なり。

【一四】隨法行。廿七賢聖の一、入道に他に依らず佛說の法義に隨順して趣入する自覺人なり。

【一五】隨信行。廿七賢聖の一、隨法行に反して他の知識により聞信入道する隨他覺なり。

【一六】外五通。增上心により凡位に於て五通成就せるなり。

【一七】成就別解脫戒。增上戒に於て波羅提木叉(戒本)所定の戒行を具足せるなり。

【一八】栴荼羅(Caṇḍāla)。屠者、殺者など譯す。印度種姓の名にて最下卑の種族にして四性の下に位す。漁獵、牢獄、屠殺等を業とす。

【一九】補羯娑(Pukkasa)。或は卜羯娑。賤種族の名。糞穢を除く賤人をいふ。

と。若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法教を說くを聞き二晝夜を經て深心に歡喜し相續して住せば是の諸の菩薩は當に知るべし、復た久しく大乘を發趣せるなりと。若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法教を說くを聞き三晝夜を經展轉して乃至七晝夜を經て深心に歡喜し相續して住せば是の諸の菩薩は當に知るべし、更らに久しく乃至甚だ久しく大乘を發趣せるなりと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば、是の諸の菩薩は大乘を發趣して已に百劫或は二百劫或は三百劫展轉して乃至或は七百劫を經たり。是の諸の菩薩は大乘を修行し七百劫を經て當に出離することを得べし。是の諸の菩薩は此の因緣に由りて功德善根漸次に增長す。是の諸の菩薩は方便善巧して是の如き波羅蜜多相應の法教を說くを聞かば深く歡喜すと雖も、而かも染著無けん。是の諸の菩薩は本性清淨にして大乘を說くを聞きて深心に歡喜せんと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、汝は佛力を承けて能く是の如き波羅蜜多相應の法教を說く。若し諸の菩薩摩訶薩衆前に說けるが如き諸の行狀相を具せば當に知るべし已に久しく大乘を發趣せるなりと。是の如き菩薩摩訶薩衆は已に菩提心に於て退轉せざるなり。若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法教を說くを聞きて歡喜を生ぜずんば是の諸の菩薩は大乘を發趣して當に知るべし未だ久しからずと。我れ是の如き新に大乘に趣く諸の菩薩衆に於ても亦た爲に波羅蜜多相應の法教を宣說し勸めて修學せしめて漸く當に一切智智を證得せしむと。[二三] 爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、甚だ奇なり如來應正等覺は諸の菩薩に於て皆棄捨せずと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、如來應正等覺は唯だ諸の菩薩のみを棄捨せずと謂ふ耶。汝今是の如き見を作すべからず。何を以ての故に、舍利子、一切の如來應正等覺は皆一切有情を棄捨せざればなり。一切の如來應正等覺は皆深く一切有情を愍念し諸の有情に於て常に是の念を作す、何の方便を以て彼の有情をして生死の苦より速に解脫することを得せしめんと。又た舍利子、汝等當に知るべし、諸佛世尊

【二三】如來は諸菩薩及び一切有情を棄捨せざることを明す。

者をして皆能く布施せしめん。願くは我が此の修する所の淨戒波羅蜜多を廻して諸の有情に施し犯戒者をして皆淨戒を得せしめん。願くは我が此の修する所の安忍波羅蜜多を廻して諸の有情に施し瞋忿者をして皆安忍を得せしめん。願くは我が此の修する所の精進波羅蜜多を廻して諸の有情に施し懈怠者をして皆精進を得せしめん。願くは我が此の修する所の靜慮波羅蜜多を廻して諸の有情に施し亂心者をして皆靜慮を得せしめん。願くは我が修する所の般若波羅蜜多を廻して諸の有情に施し惡慧者をして皆妙慧を得せしめんと。[九]時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き菩薩は已れの善根を廻して有情類に施すに幾劫數を經て大乘を修行せば當に出離することを得べきやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如き菩薩は已れの善根を廻して有情類に施し、五百大劫大乘を修行せば當に出離することを得べし。又た舍利子、是の如き菩薩或は方便善巧を成就して疾く一切智智を證得せんと欲する有らば彼れ卽ち此の[一〇]賢劫の中に於て如來の應に證すべき等覺を成ぜんことを願ひ千佛の數に隨して無上正等菩提を證得せん。慈氏佛の諸の惡趣を空ずる初會の說法に百千[一一]倶胝の諸の聲聞衆、阿羅漢を成ぜしが如く、是の如く菩薩、我が已に二千劫の中に於て菩提行を修して無上正等菩提を證せんことを求めて有情の爲に大饒益を作さんと欲せしを說かば、諸餘の菩薩の若し前の如き諸の行狀相を具せるは、當に知るべし彼れ五百大劫を經て大乘を修學して當に出離することを得べしと。是の如き菩薩は當に知るべし已に不退轉の位に住せるなりと。時に舍利子復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法敎を說くを聞かば應に歡喜を生ずべし。所以は何ん、若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法敎を說くを聞きて歡喜を生ぜば定めて諸佛世尊を捨離せず、諸佛世尊も亦た彼れを捨てざればなりと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、若し諸の菩薩是の如き波羅蜜多相應の法敎を說くを聞き一晝夜を經て深心に歡喜し相續して住せば是の諸の菩薩は當に知るべし已に久しく大乘を發趣せるなり

【九】菩薩の能く大乘を修學して出離を得ることを明す。

【一〇】賢劫。現在の劫の名。賢劫の間には千佛の多數の賢人出世するの故に此名あり。

【一一】倶胝(Koṭi)。數の名。度洛叉の十倍にて千萬或は百億をいふ。

を證せんと欲せば能く大乘の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を以て敎誡敎授し其れをして一切智智を攝受せしめ亦た一切智智を任持せしめよ。既に一切智智を攝受せしめ亦た一切智智を任持せしめば卽ち無量無邊の有情に阿羅漢等の殊勝の功德を施すなり。是の如く菩薩無上正等菩提を證せんと欲し、能く大乘の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を以て敎誡敎授せば卽ち爲れ無量無邊の有情を敎誡敎授して種種の安樂妙行を行ぜしむるなり。是の如く菩薩淨戒波羅蜜多に安住して是の思惟を作さん、我が住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多に由りて願くは諸の有情皆淨戒を具して毀犯を遠離せんことを。願くは是の如く廻施する善根を以て一切の有情皆正念を得正念に由るが故に皆喜樂を生ぜんことをと。彼の諸の有情は此の語を聞き已らば心毀犯を離れて淨戒を受持せん。復た菩薩有りて淨戒波羅蜜多に安住し、能く一心を起して住する所の戒を以て一りの菩薩に施さば前の功德よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲す。是の如く菩薩若時若時に有情の爲の故に住する所の戒を以て菩薩に廻施せば爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多漸次に增長して疾く能く一切智智を證得せん。是の如く菩薩の淨戒波羅蜜多に安住し有情に廻施して獲る所の福聚は種種に差別せりと。

八 爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、是の如き菩薩は云何してか應に知るべき、是の如き菩薩は幾劫數を經て當に出離することを得べく、是の如き菩薩は大乘を發趣して已に久如（ひさしき）を經たりと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、應に知るべし、是の如き菩薩は能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を以て諸の有情類を敎誡敎授して無上正等覺の心を發さしめ、無倒に諸の菩薩行を修行して疾く無上正等菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作すと。應に知るべし、是の如き菩薩に能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を以て諸の有情の爲に廻向して一切智智を得んことを願ひ、謂ゆる是の念を作す、願くは我が此の修する所の布施波羅蜜多を廻して諸の有情に施して慳貪なる

【八】佛、舍利子との問答に依つて波羅蜜多相應の法數を明す。

た能く無量の淨戒波羅蜜多を攝受して漸く增廣せしめ、亦た能く無量無數微妙の佛法を攝受して漸く圓滿せしめん。[七]又た舍利子、若し菩薩摩訶薩淨戒波羅蜜多に安住し自ら住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多を以て一菩薩に施して獲る所の福聚は殑伽沙數の世界の戒を犯せる有情に施して皆圓滿せしめて淨戒を受持するに勝らん。若し菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多に安住し、自ら住せる所の菩薩の淨戒波羅蜜多を以て十方の諸の有情類に廻施して、淨戒に住し毀犯を遠離せしめて獲る所の福聚は無量無邊ならん。菩薩摩訶薩有りて淨戒波羅蜜多に安住し、自ら住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多を以て一菩薩に施さんに獲る所の福聚は前の菩薩の聚る所の福聚よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲ん。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は自ら住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多を以て一菩薩に施し其れをして一切智智を攝受せしめ亦た一切智智を任持せしむればなり。此の一菩薩既に能く一切智智を攝受し復た能く一切智智を任持せば則ち能く無量無邊世界の無量の有情を攝受任持して皆所有る淨戒に安住して諸の毀犯を離れしめん、是の如く展轉して饒益する所多からん。譬へば大舍一柱十間なるに無量の衆生中に於て止住し共に相嬉戲し歡娛して樂を受くるに暴惡人有りて其の柱を伐らんと欲するが如し。時に善士有りて惡人に告げて言はく、今此の舍中には多くの諸の族類共に相嬉戲し歡娛して樂を受く。若し此の柱を伐らば其の舍崩摧して此の中の無量の生命を損害せんと。是の如く善士は其の中の止住せる無量の有情を利樂せんと欲するが爲に彼の惡人を遮りて柱を伐らしめず。時に男子有り、善士を讃めて言はく、善哉善哉、汝今已に無量の生類に壽命の安樂を施せりと。是の如く菩薩、無上正等菩提を證せんと欲せば應に大乘の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を以て敎誡敎授して無上正等菩提を證せしめて諸の有情の與に大饒益を作すべし。若し獨覺及び聲聞乘の功德善根を以て敎誡敎授せば便ち無量無邊の有情を阿羅漢等の殊勝の功德より障へん。若し菩薩有りて無上正等菩提

【七】菩薩の淨戒波羅蜜多に安住し、有情に廻施して獲る所の福聚の種々の差別を明す。

助け引發せば菩薩衆に於て大恩德有り。是の諸の菩薩は應に知るべし、已に一切事の方便善巧を證せるなりと。是の如き菩薩は應に知るべし菩薩の淨戒波羅蜜多に安住せりと。應に知るべし是の如き諸の菩薩衆は菩薩の戒に於て毀犯する所無く、亦た菩薩の淨戒に取著せずと。[六]爾の時佛、舍利子を讃めて言はく、善哉善哉、是の如し是の如し、汝能善く諸の菩薩衆の有らゆる淨戒に於て取著する所有り毀犯する所有り、有ゆる淨戒に於て取著する所無く毀犯する所無きを說けり。汝は如來是れ實語者是れ法語者是れ善記說法隨法者なるを顯せり。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多に安住して是の思惟を作さん、十方無量無邊世界の無量の有情、我が住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多に由りて威力を增上し、淨戒無き者は皆淨戒を得、惡戒有る者は皆遠離するを得、我が學する所の淨戒波羅蜜多に由りて威力を增上し、是の如き諸の有情類を攝受して皆殊勝の利益安樂を得せしめんと。是の菩薩摩訶薩は當に知るべし、方便善巧を成就して若時若時に自らの淨戒波羅蜜多を以て無量無邊世界の無量の有情に廻施せば、爾の時爾の時住する所の淨戒波羅蜜多漸次に增長し、若時若時に住する所の淨戒波羅蜜多漸次に增長せば爾の時爾の時復た能く無量の淨戒波羅蜜多を攝受し、若時若時に復た能く無量の淨戒波羅蜜多を攝受せば爾の時爾の時復た能く無量無數の微妙の佛法を攝受し、斯れに由りて疾く一切智智を得ん。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多に安住して是の思惟を作さん、十方無量無邊世界の無量の有情、我が住する所の菩薩の淨戒波羅蜜多に由りて威力を增上して未だ無上菩提の心を發さざる者は皆能く發心し、已に無上菩提の心を發せる者は皆永く退せず、若し無上正等覺の心に於て已に不退なる者は速に能く一切智智を圓滿せんと。是の菩薩摩訶薩は方便善巧して諸の菩薩を緣じて淨戒波羅蜜多に廻施し、若時若時に淨戒波羅蜜多に廻施せば爾の時爾の時能く一切智の心を遠離せざらん、若時若時に能く一切智の心を遠離せずんば爾の時爾の時漸次に一切智智に鄰近せん。是の菩薩摩訶薩は此の善根に由りて威力を增上し、復

【六】佛、如上の舍利子の所說を讃し、更に淨戒波羅蜜多に安住せる菩薩の思惟に就て說く。

菩薩は淨戒に取著して毀犯する所有り、是の如き菩薩は戒に取著せず毀犯する所無しと知れりと。

[二]時に舍利子便ち佛に白して言さく、我れは如來應正等覺の說きたまふ所の妙法を信じて是の如き智を起せり、我れ自ら能く是の如き說を作すに非ず。我れ佛の所說の義を解する如くんば、[三]諸の菩薩衆若し暫くも心を起して聲聞或は獨覺地を欣讚せば、應に知るべし菩薩の淨戒を毀犯すと。諸の菩薩衆若し暫くも心を起して聲聞或は獨覺地を厭毀せば應に知るべし菩薩の淨戒を毀犯すと。所以は何ん、若し諸の菩薩、聲聞或は獨覺地を欣讚せば便ち彼の地に於て心に愛著を生じ一切智智を趣求すること能はずして菩薩戒に於て毀犯する所有らん。若し諸の菩薩、聲聞或は獨覺地を厭毀せば便ち彼の地に於て心に輕蔑を生じ卽ち所求の一切智智を障へ、菩薩の戒に於て毀犯する所有らん。是の故に菩薩は二乘地に於て欣讚すべからず亦た厭毀せざれ。若し諸の菩薩、二乘地に於て心に恭敬せず或は愛著を生ぜば常に知るべし皆是れ非處を行ずるなりと。若し諸の菩薩非處を行ぜば應に知るべし名づけて犯戒の菩薩と爲し亦た淨戒相に取著せる者と名づけ一切智智を證得すること能はずと。是の故に菩薩は二乘地に於て但だ應に[四]遠離すべく讚毀すべからず。若し諸の菩薩二乘地に於て遠離せずんば定めて所求の無上正等菩提を得ること得はず。[五]復た次に世尊、若し諸の菩薩五欲の境を緣じて味著の心を起さば復た名づけて非理の作意と爲すと雖も、而かも甚だしくは無上菩提を礙へず。所以は何ん、非理の作意は煩惱の數に墮せばなり。彼の煩惱は諸の菩薩をして彼れ彼れの生を受けしむるに由り、若時若時に諸の菩薩衆、彼れ彼れの趣に於て彼れ彼れの身を受けなば爾の時爾の時布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を漸く學して圓滿し、若時若時に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を漸く學して圓滿せば、爾の時爾の時是の諸の菩薩は漸く一切智智と鄰近することを得ん。是の故に世尊、我れ煩惱は諸の菩薩に於て大恩德有りと謂ひ、能く一切智智に隨順すと謂ふ。若し諸の菩薩能く煩惱を觀じ能く一切智智を

【二】舍利子、更に菩薩戒に於ける毀犯を說き、菩薩の能く淨戒波羅蜜多に安住するを明す。

【三】菩薩は二乘を讚するも毀るも俱に犯戒なり。

【四】遠離して讚毀せず。

【五】煩惱も能く一切智智に隨順し、菩薩に於て大恩德有ることを明す。

住捨性に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く無忘失法恒住捨性に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き無忘失法恒住捨性に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三四]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は一切智道相智一切相智に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く一切智道相智一切相智に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き一切智道相智一切相智に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三五]又た滿慈子、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば是の如き[三六]分別を現行すべからず。我れは是の如き菩薩の淨戒に由りて[三七]諸相及び諸の隨好を攝受せりと。若し諸の菩薩の是の如き分別心を現行する者は應に知るべし名づけて菩薩の戒を犯すと爲すと。是の故に菩薩は諸相隨好を貪求し無上正等菩提に趣くことを求むべからず。若し諸の菩薩相好に取著して淨戒を受持せば應に知るべし名づけて淨戒に取著して毀犯する所有りと爲すと。若し諸の菩薩淨戒に取著して毀犯する所有らば定めて所求の無上正等菩提を證すること能はずと。

卷の第五百八十八

第十二淨戒波羅蜜多分の五

[一]爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、汝は能く是の如く妙智に安住せり。謂ゆる如實に是の如き

【三四】一切智道相智一切相智。

【三五】菩薩の犯戒の廣說を結ぶ。

【三六】分別。種々に取相し憍慢し味著するを云ふ。

【三七】相好圓滿を我が靜戒の力なりと分別す。

【一】佛、舍利子の所說を聞き、能くその妙智に安住するを讚ず。

菩薩は五眼六神通に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く五眼六神通に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き五眼六神通に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三〇]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は如來の十力四無所畏四無礙解に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く如來の十力四無所畏四無礙解に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き如來の十力四無所畏四無礙解に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三一]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は大慈大悲大喜大捨に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く大慈大悲大喜大捨に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き大慈大悲大喜大捨に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三二]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は十八佛不共法に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く十八佛不共法に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すべからず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き十八佛不共法に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[三三]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は無忘失法恒

【三〇】如來の十力四無所畏四無礙解。

【三一】大慈大悲大喜大捨。

【三二】十八佛不共法。

【三三】無忘失法恒住捨性。

子、彼の諸の菩薩は陀羅尼門三摩地門に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く陀羅尼門三摩地門に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き陀羅尼門三摩地門に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如くすと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二六]又た滿慈子彼の諸の菩薩は靜慮無量等至解脫に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く靜慮無量等至解脫に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず、亦復た佛土を嚴淨し斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き靜慮無量等至解脫に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時としして間斷無きこゝ頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二七]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は勝處遍處九次第定に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く勝處遍處九次第定に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず、亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き勝處遍處九次第定に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二八]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は諸の地智を修するに味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く諸の地智を修するに味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず、亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き諸の地智を修するに於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二九]又た滿慈子、彼の諸の

【二六】靜慮無量等至解脫。

【二七】勝處遍處九次第定。

【二八】諸の地智。

【二九】五眼六神通。

愛あり、愛に緣りて取あり、取に緣りて有あり、有に緣りて生あり、生に緣りて老死あり、無明滅するが故に行滅し乃至生滅するが故に老死滅する觀に味著せば、心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き諸の緣起觀に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二二]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は諸の聖諦觀に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く苦集滅道の四聖諦觀に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き諸の聖諦觀に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二三]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は助菩提分に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き助菩提分に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二四]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は三解脫門に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く空無相無願解脫門に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き三解脫門に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[二五]又た滿慈

【二二】諸の聖諦觀。

【二三】助菩提分。

【二四】三解脫門。

【二五】陀羅尼門三摩地門。

[16]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩不退位に住せば何等の行に於て味著すべからざるやと。[17]舍利子言はく、彼れは六種波羅蜜多に於て味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ六種波羅蜜多に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと[18]頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[19]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は種種の空觀に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空觀に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き種種の空觀に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[20]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は眞如等の觀に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く諸法の眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界の觀に味著せば心便ち雜染して如實に有情を利樂すること能はず亦復た佛土を嚴淨し、斯れに由りて久しきを經るも乃ち能く所求の無上正等菩提を證得すること能はざるが故に。彼の菩薩は應に是の念を作すべし、我れ是の如き眞如等の觀に於て應に精勤して勇猛に修習すべく時として間斷無きこと頭然を救ふが如しと雖も而かも其の中に於て味著すべからずと。[21]又た滿慈子、彼の諸の菩薩は諸の緣起觀に味著すべからず。何を以ての故に、滿慈子、若し深く無明に緣りて行あり、行に緣りて識あり、識に緣りて名色あり、名色に緣りて六處あり、六處に緣りて觸あり、觸に緣りて受あり、受に緣りて

【一六】以下不退位に住せる諸菩薩の味著すべからざる行に就て明す。
【一七】六種波羅蜜多。
【一八】頭然。然は燃なり。頭上火燃ゆるにて、危急に譬ふるなり。
【一九】種々の空觀。
【二〇】眞如等の觀。
【二一】諸の緣起觀。

するに略ぼ二種有り。一は菩薩有りて方便善巧無きが故に世間の種種の善法を聞きて心に貪染せずと雖も而かも二乘の所有る功徳を聞きて心に便ち味を愛し、味を愛するに由るが故に精勤して攝受し、所求の一切智智を遠離して無上正等覺の心を退失すること、彼の初めの人の少價の寶を見ては貪著せずと雖も而かも多價なるを見ては貪著し持ち還りて無價の寶を失へるが如し。二に菩薩有りて方便善巧有るが故に初めに世間の種種の善法を聞きて心に貪著せず、次に二乘の所有る功徳を聞くも亦た味を愛せず、味を愛せざるに由りて便ち思惟せず、思惟せざるに由りて便ち修習せず。既に修習せずして方便し厭捨す。所以は何ん、此の諸の菩薩は、世の善法の諸の過患多くして自利利他を究竟すること能はず、所求の一切智智を障礙し、聲聞獨覺の功徳善根は世間を出づると雖も而かも但だ自利のみにして普ねく一切有情を利すること能はず亦た所求の一切智智を障ふるを知るが故に、味を愛せず亦た思惟せず、彼の善根に於て修習するを樂はず。斯れに由りて彼の二乘地を超越し無上正等菩提を勤求して漸次に一切智智を證得すること彼の後の人の少價の寶及び多價の寶を見るも倶に貪著せずして漸次に深く入り極めて勝處に至りて無價の寶を獲、意に恣に持ち還りて諸の有情の與に大饒益を作せるが如し。是の如く菩薩は方便善巧して世間の善法に貪染せず、二乘の法に於ても亦た味を愛せず。斯れに由りて漸次に大菩提に趣きて多百千の難行苦行を修し無量の如來を供養恭敬し、有情を成熟して佛土を嚴淨し極めて圓滿するに至りて一切智を得、無量の有情を利益し安樂すること無價の寶の饒益する所多きが如し。是の如く菩薩は方便善巧して二乘の種種の功徳を聞くと雖も而かも能く皆究竟に非ずと了達し、能く證を取ると雖も而かも深く厭捨し、深く厭捨すと雖も而かも能く巧説し、方便して彼の類の有情を饒益して善く修行して涅槃の樂を證せしむ。是の如く菩薩は方便善巧して能く二乘の功徳を攝受せず、精進して諸の菩薩行を修行し無上正等菩提を趣證して諸の有情に利益安樂を作すと。

は是れ何の法業にして而かも堪能すと說くや、即ち是の精進を如何が修學して是の如く堪能するやと。舍利子言はく、堪能は卽ち是れ方便善巧の所作業なり。菩薩は要らず方便善巧に依りて一切法は皆幻事の如しと知る。菩薩は方便善巧に安住して法空を怖れず實際に墮せざるなり。譬へば人有りて高山の頂に住り兩手もて輕固なる傘蓋を堅執し山峯の仭(たかき)に臨み足を翹げ頸を引き巖下の險絕深坑を俯觀するに傘蓋の風を承くる力に持御せられ險岸に臨むと雖も而かも墮落せざるが如く是の如く菩薩の方便善巧は大悲般若力に任持せられ如實に諸法は幻の如く虛妄なりと觀じて本性空寂を顯現すと雖も而かも心都て下劣の怖畏無く、法の實際に於ても亦た證入せず。何を以ての故に、滿慈子、是の諸の菩薩の方便善巧は大悲般若力に任持せられて法空を怖れず實際を證せざればなり。傘蓋を持ちて峻峯の巖に俯して險しき絕坑を觀るも怖れ無く墮つる無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆、堅固なる甲胄を被戴して方便善巧を攝受し、第一圓滿淨戒波羅蜜多を成就せる所依止と爲し無上正等菩提を求むと雖も而かも法の已正當に證するを見ずんば、應に知るべし是の如き菩薩の淨戒波羅蜜多は一切皆方便善巧に攝受せらるゝに由るが故に能く無上正等菩提に至る。是の如き菩薩は方便善巧に攝受せらるゝが故に常に所學の六種波羅蜜多を遠離せず。是の諸の菩薩は所學の六種波羅蜜多を遠離せざるに由りて漸次に一切智智に隣近し一切の聲聞獨覺に超勝す。何を以ての故に、滿慈子、是の諸の菩薩は意を專らにして無價寶の如き一切智を趣求するが故なり。

一五 又た滿慈子、二人有りて大方便を作し深山の窟に入りて無價の寶を求むるに彼れ入りて未だ久しからずして便ち兩邊に諸の少價の金銀等の寶有るを見るも俱に見て取らずして漸次に前行す。復た兩邊に多價の寶有るを見、一は見て貪著し荷負して還へり、一は見るも取らずして更らに復た前進し、極めて勝處に至り無價の寶を獲、意に恣(ほしいまま)に持ち還るに饒益する所多きが如く、是の如く菩薩大方便を作し無上の正覺菩提を證せんことを求め、有情の爲に大饒益を作さんと欲して佛法に趣入

【一五】更に上述の義を譬喩を以て說く。

雖も而かも其の中に於て敗壞想無し、一切種皆幻の如しと達するが故に。是の如き菩薩は方便善巧して無上正等菩提を求證し有情の爲に寂靜法を說かんと欲す。謂ゆる種種の名句文身もて方便して一切の法性を宣說すと雖も而かも法の本性は皆說く可からざるなり。

【二】又た滿慈子、一切の法性は顯示す可からず宣說す可からず。菩薩は大菩提を證得する時有情の爲に諸の法性を說くと雖も而かも是の念を作す、我れ菩提に於て都て得る所無く亦た常に【三】法に於ても有情の爲に宣說する所有らず。我れ無上菩提を證得すと雖も而かも此の菩提は實に證す可からず。我れ一切の法性を宣說すと雖も而かも諸の法性は實に說く可からず。能說所說倶に自性無く、能證所證も亦た得可からずと。是の故に菩薩摩訶薩衆、無上正等菩提を證せんと欲せば諸法の中に於て執著すべからず。執著無しと雖も而かも退轉せず。退轉無きに由りて心沈沒せず。沈沒せざるに由りて精進を攝受す。是れを精進波羅蜜多と爲す。復た精進波羅蜜多を以て廻向して一切智智を趣求して淨戒波羅蜜多を圓滿す。復た淨戒波羅蜜多を以て廻向して一切智智を趣求し此の淨戒波羅蜜多をして轉た勝り轉た增し轉た明かに轉た淨くならしむ。是の如く菩薩淨戒波羅蜜多を修學して速に勝增明淨を圓滿することを得るは皆菩薩廻向して一切智智を趣求するに由ると。時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、若し一切法皆幻事の如く都て實有に非ずんば云何が菩薩は廻向して一切智智を趣求し而かも成立することを得るやと。舍利子言はく、若し一切法少分も實有にして幻事の如きに非ずんば則ち諸の菩薩は畢竟廻向して一切智智を趣求すること能はず。一切法は少しくも實有にして幻事の如きに非ざる無きを以ての故に諸の菩薩は廻向して一切智智を趣求す。是の如く菩薩の廻向して一切智智を趣求し精勤して倦むこと無きに堪能する所有るは皆諸法の非實にして幻の如く化の如しと了達して堪能する所有るに由る。當に知るべし卽ち是れ菩薩の精進波羅蜜多なりと。

【四】滿慈子言はく、是の如く菩薩堪能する所有りて廻向して一切智智を趣求し精勤して倦むこと無き

【二】菩薩の精進波羅蜜多を明して淨戒波羅蜜を示す。

【三】法の說くべきなきを云ふ。

【四】菩薩の能く精進を修學して無倦に堪能する所以を明す。

〔一〇〕時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、云何が菩薩は是の如き念を作す。我れ當に一切有情を恭敬すべし、我れ無上正等覺を證し已て一切有情を教誡教授して皆最第一性を證得して一切皆法王位に居することを得せしめんと。工みなる幻師或は彼の弟子四衢道に於て大王及び四種の軍の勇健にして敵し難きを化作するが如し。此の中の幻の王は是の念を作さず。我れ今四種の勇軍有りて勢力敵し難きを具すと。四種の幻の軍も是の念を作さず、我れ等は一切皆大王に屬し王の意に隨て轉ずと。何を以ての故に、舍利子、此の中の一切若しは王若しは軍は皆實有に非ず都て自性無し。實有自性皆攝せざる所なればなり。世尊の諸法は幻の如しと說きたまふが如く一切の有情も亦復た是の如し。既に皆幻の如し。誰れか誰れを恭敬し、誰れか復た誰れをして第一性を得て法王位に居して何等の法を說かしむるやと。〔一一〕舍利子言はく、是の如し是の如し、有情及び法は一切幻の如し。當に知るべし此の中幻の如き菩薩、一切の幻の如き有情を恭敬し方便善巧して教誡教授して第一の幻の如き佛性を得、法王位に居して幻の如き法を說かしむと。然るに諸の菩薩は是の念を作すと雖も而かも其の中に於て都て執する所無し。若し諸の菩薩諸法の中に於て少しにても見る所有らば是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若し時に菩薩諸法の中に於て都て見る所無くんば是の時菩薩は般若波羅蜜多を離れざるなり。是の如き菩薩は方便善巧して精進波羅蜜多を行じ有情を教化して成佛することを得せしむと雖も而かも諸法に於て都て見る所無し。謂ゆる少分も法性の實に能く他をして第一性を得せしむる有るを見ず、少分も法性の實に能く他をして法王位に居せしむる有るを見ず、見る所無しと雖も而かも退轉せざるなり。當に知るべし菩薩は能く廣大の精進の甲冑を著て都て執する所無しと。謂ゆる諸の菩薩は法王位を知り皆幻の如く都て實有に非ずと雖も而かも能く精勤して不退を求趣す。勤め精進して佛果を求趣すと雖も而かも諸法に於て都て見る所無し。見る所無しと雖も而かも退轉せざるなり。是の如き菩薩は天人阿素洛等皆悉く敗壞すと知ると

【一〇】上述の菩薩の作念に就いて滿慈子舍利子と問答す。

【一一】菩薩は一切諸法幻の如しと知りて諸法に執せず、有情を饒益することを明す。

りて方便善巧を圓滿し修すること能はず。具壽當に知るべし、若し諸の菩薩方便善巧して諸の功德を修するも若し是の如き種種の思惟を起さば應に知るべし、彼れは方便善巧に非ずと。何を以ての故に、滿慈子、[六]菩薩は菩薩に勝るべからず、菩薩は菩薩を輕慢すべからず、菩薩は菩薩を降伏すべからざればなり。菩薩は餘の諸の菩薩の所に於て供養恭敬すること應に如來に供養恭敬するが如くすべしと。

[七]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、菩薩は但だ應に菩薩のみを恭敬すべしと爲すや亦た應に諸の餘の有情をも恭敬すべしと爲すやと。舍利子言はく、諸の菩薩衆は應に普ねく一切の有情を恭敬すべし。謂ゆる諸の菩薩は如來を敬ふが如く是の如く亦た應に餘の菩薩を敬ふべし。菩薩を敬ふが如く是の如く亦た應に餘の有情を敬ひて心に差別無かるべし。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩衆は諸の有情に於て心應に謙下すべく、應に深く恭敬すべく、應に自在を與ふべく、應に憍慢を離るべし。是の如き菩薩は諸の有情に於て深心に恭敬すること佛菩薩の如くならん。是の如き菩薩は應に是の念を作すべし、我れ無上正等覺を證せん時當に有情の爲に深法要を説いて煩惱を斷じて般涅槃を得、或は菩提を得て究竟安樂ならしめ、或は諸の惡趣の苦より解脫せしむべしと。又た滿慈子、是の如き菩薩は有情類に於て應に慈心を起すべし。諸の有情に於て心憍慢を離れて是の如き念を作せ、我れ當に方便善巧を修學して諸の有情をして一切皆最第一性を得せしむべしと。所以は何ん、第一性とは所謂佛性なればなり。我れ當に方便して諸の有情をして皆成佛することを得せしむべしと。是の如き菩薩は有情類に於て皆慈心を起し有情をして一切皆法王位に居することを得せしめんと欲す。此の法王位は最勝最尊にして法に於て有情俱に自在を得ん。是の故に菩薩摩訶薩衆は應に普ねく一切有情を恭敬すべし。慈心遍滿して[八]揀別(かんべつ)無きが故に如來法身は[九]一切に遍ずるが故にと。

【六】菩薩は平等なり恭敬すべし。

【七】菩薩は普ねく一切有情を恭敬することを說き、是の如き菩薩の作念を明す。

【八】揀別。簡別に同じ。

【九】一切は如來法身なり、愚惡の衆生も亦法身なり、何ぞ恭敬せざらん。

諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて一切の菩薩摩訶薩行を圓滿し修することを能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く諸佛の無上正等菩提を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて諸佛の無上正等菩提を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く佛土を嚴淨するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて佛土を嚴淨するを圓滿すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く有情を成熟するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて有情を成熟するを圓滿すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く他の諸の功德を隨喜するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて他の諸の功德を隨喜するを圓滿すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く一切智智に廻向するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に或は毀缺有りて一切智智に廻向するを圓滿すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我が能く一食の施を以て獲る所の功德は餘の菩薩の住すること殑伽沙數の大劫を經て轉輪王の上妙の飮食を捨てゝ一切に布施して獲る所の功德に勝ると。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて布施を圓滿し修行すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我が能く一心もて集むる諸の功德は餘の菩薩の住すること殑伽沙數の大劫を經て集むる諸の功德に勝ると。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて諸の功德を集むるを圓滿すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く[五]方便善巧を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有

【五】上來布施より方便善巧に至る思惟は憍慢して菩薩に分別するが故に淨戒滿足せず、戒は佛道に進む一切行處に圓滿すべく、戒缺くれば一切缺減す。

り。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて六神通を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く如來の十力を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて如來の十力を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて四無所畏乃至十八佛不共法を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く三十二相を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて三十二相を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く八十隨好を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて八十隨好を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く無忘失法を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて無忘失法を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く恒住捨性を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて恒住捨性を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く一切智を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて一切智を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く道相智一切相智を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて道相智一切相智を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く一切の菩薩摩訶薩行を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の

菩薩是の思惟を作さん、我れは能く八勝處九次第定十遍處を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて八勝處九次第定十遍處を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く淨觀地智を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて淨觀地智を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く種性地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地智を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて種性地智乃至如來地智を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く極喜地を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて極喜地を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて離垢地乃至法雲地を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く一切陀羅尼門を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて一切陀羅尼門を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く一切三摩地門を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて一切三摩地門を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く五眼を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて五眼を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く六神通を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるな

の思惟を作さん、我れは能く苦聖諦を觀ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して苦聖諦を觀ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く集滅道聖諦を觀ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して集滅道聖諦を觀ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く四靜慮を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩には非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて四靜慮を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く四無量四無色定を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて四無量四無色定を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く四念住を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて四念住を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて四正斷乃至八聖道支を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く空解脫門を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて空解脫門を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く無相無願解脫門を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて無相無願解脫門を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く八解脫を修行するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて八解脫を圓滿し修すること能はず。又た滿慈子、若し諸の

滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く戒を護るも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて淨戒波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く忍を修するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて安忍波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く精進するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて精進波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く定を修するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて靜慮波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く慧を修するも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて般若波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く內空を行ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して內空を行ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思推を作さん、我れは能く外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空を行ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して外空乃至無性自性空を行ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く無明を觀ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して無明を觀ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、我れは能く行識名色六處觸受愛取有生老死を觀ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて究竟して行乃至老死を觀ずること能はず。又た滿慈子、若し諸の菩薩是

巻の第五百八十七

第十二淨戒波羅蜜多分の四

[一]又た滿慈子、二菩薩有りて俱に無上正等菩提を證するに一は菩薩有りて方便善巧有るが故に疾く無上正等菩提を證し、二は菩薩有りて方便善巧無きが故に遲く無上正等菩提を證す。具壽當に知るべし、寧ろ菩薩は遲く無上正等菩提を證するも聲聞或は獨覺地に墮せざることを爲さんと。若し諸の菩薩速に無上正等菩提を求むれば應に知るべし、此の中二事有るを容ると。一には若し方便善巧無くんば便ち實際を證して二乘地に墮し、二には若し方便善巧有らば疾く無上正等菩提を證するなり。火宅の中に衆の寶聚有り、人有り寶を求めて此の宅の中に入らんに其の人爾の時二事有るを容る。一には若し方便善巧無くんば火宅に死し、二には若し方便善巧有らば寶を持ちて出づるが如く、是の如く菩薩速に無上正等菩提を求むれば應に知るべし此の中二事有るを容る。一には若し方便善巧無くんば便ち實際を證して二乘地に墮すること火宅に死するが如く、二には若し方便善巧有らば疾く無上正等菩提を證すること寶を持ちて出づるが如し。是の故に當に知るべし寧ろ菩薩は遲く無上正等菩提を證することを爲さんも、速に求めて二乘地に墮することを爲さずと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、速に實際を證するは豈に菩薩の方便善巧に非ざるやと。舍利子言はく、速に實際を證するは菩薩の方便善巧たるに非ず。所以は何ん、二乘地に墮するは方便善巧の等流たるに非ざればなり。乃ち是れ方便善巧無き[二]等流の果なり、所求の大菩提を退失するが故に。夫れ菩薩は大菩提を求めて有情を饒益するを爲すも實際を求めず。故に實際を證するは巧便の果に非ず。[三]又た滿慈子、若し諸の菩薩是の思惟を作さん、[四]我れは能く施を行ずるも餘の菩薩には非ずと。是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。非處を行ずるが故に戒に毀缺有りて布施波羅蜜多と名づけず。又た

【一】菩薩は大菩提を求めて有情饒益を爲すも、實際を求めざることを明す。

【二】等流。因果本末相類似し、一類のものが同じき一類に相續すること。巧方便の等流は廣度衆生なり、逃れて實際を證するに非ず、實際を證するは自利心の等流なり。

【三】以下諸菩薩の種々の思惟を擧げ、若し斯の如き思惟を起さば、方便善巧して諸功德を修するも彼れは方便善巧に非ざることを明す。

【四】この布施。我には行へ他の菩薩には行へずと驕慢して非處となる。

下に投げ、投げ已て復た誠諦の言を發し、言已て山王虛空に住まるものは、我が說の定めて虛妄ならざるを證するが爲なりと。時に彼の如來の聲聞の弟子、菩薩の戒に依りて誠諦の言を發し、彼の山王をして還りて本處に住まらしむ。時に舍利子見已て讃めて言はく、甚だ奇なり世尊、言ふ所誠諦にして諸の菩薩戒の威力は思ひ難く一切世間に能く及ぶ者無しと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、若して菩薩戒に勝らんと欲する者有らば當に知るべし、彼れは如來の戒に勝らんと欲するなりと。所以は何ん、如來の戒を除きて定めて能く菩薩戒に勝る者無ければなり。若し菩薩の淨戒を修して圓滿せば卽ち如來應正等覺と名づく。是の故に菩薩戒に勝る可からずと。[二六]時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、菩薩の所有る淨戒を退する有らば豈に勝ること難からん耶と。舍利子言はく、定めて菩薩の菩薩心に住して退轉有る者無し。若し退轉有らば便ち菩薩に非ず。善く射る師、箭的に中らずんば應に知るべし彼の類は善く射る師に非ざるが如く菩薩も亦た爾なり。若し一切智智相應の心を發すこと能はず復た布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を勤修すと雖も而かも一切智智に廻向せずんば、當に知るべし彼れは戒を具せる菩薩に非ずと。又た滿慈子、[二七]若し菩薩有りて諸の功德を修するも云何が菩薩一切智智に廻向するかを解せず而かも聲聞或は獨覺地の所有る功德を緣じて、是れを所求の一切智智なりと謂はゞ當に知るべし、彼の類は猶ほ名づけて戒を具せる菩薩と爲すことを得と。何を以ての故に、滿慈子、彼れは菩薩の方便善巧無く一切智智を廻求するを解せずして二乘地の所有る功德を緣じ是れを所求の一切智智なりと謂ふは[二八]意樂壞せざるが故に亦た名づけて戒を具せる菩薩と爲す。菩薩戒を持ち一切智に廻向する心有るに由るが故に名づけて菩薩戒を持ち淨戒波羅蜜多を攝受すと爲すことを得。彼れは後時に於て若し善友に遇はゞ能く眞實の一切智智を緣じ無上正等菩提に廻向して定めて當に一切智智を證得すべし。

[二六] 戒を具せる菩薩の義を明す。

[二七] 愚痴にして一切智智を解せず誤りて二乘の德を把むも、素朴にしてこれ求むべき大乘一切智智なりとせば、これも具戒菩薩とすと、愚凡を攝するなり。

[二八] 意樂壞せず。一切智智の無上菩提を求むる意樂相續するを云ふ。

ること、舍利子と滿慈子と共に演說する所の如くすべし。是の如き演說は定めて虛妄ならず。假使ひ妙高山王を取りて梵世に上昇し之を下に投ぐる有らんに、彼れ適ま投げ已て誠諦の言を發さん、若し菩薩戒普ねく異生聲聞獨覺の諸の淨戒に勝るとせば此の山王をして虛空の中に住せしめんと。言ひ已らば便ち住して必ず墮落せず。何を以ての故に、阿難陀、諸の菩薩戒は如來の戒を除き餘の淨戒の若しは有漏若しは無漏なるよりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲ればなりと。時に舍利子、佛の神力の故に、便ち東方に一佛土有り此の佛土を去ること百千界を過ぎて其の中にて如來現に無量の人天等の衆の爲に正法を宣說するを見る。[二五]爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方に百千界を過ぎて一佛土有り現に如來有して無量の衆の爲に正法を說きたまふを見るや不やと。舍利子言はく、唯然、已に見たてまつるも未だ彼の界、彼の佛、何の名なるかを知らずと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、彼の佛の世界を名づけて明燈と曰ひ、其の中の如來應正等覺の現に說法したまへる者を號づけて月光と爲す。彼の佛に一りの聲聞の弟子有り名づけて有頂と爲す。神通第一なり。神通力を以て餘の世界に往き右手もて妙高山王を拔き取り梵世に上昇して之を下に投ぐるに彼れ適ま投げ已て誠諦の言を發せり、若し菩薩戒、如來戒を除き餘の淨戒の若しは有漏若しは無漏なるより最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りとして是の如き所說虛妄ならずんば此の山王をして虛空の中に住せしめよと。言ひ已れるに便ち住して更に復た下らず。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、汝復た彼の妙高山王の虛空の中に住して更らに下らざるを見るや不やと。時に舍利子白して言さく、已に見たり世尊と。復た舍利子に告げて言はく、今彼の山王の虛空に住せるは、菩薩の所有る淨戒は、如來の戒を除き、誠諦の言を發して、普ねく異生聲聞等の戒に勝るといふに由依る。是の故に我が說は決定して虛しからざるなり。彼の佛の衆の中の聲聞の弟子、神通力を以て餘の世界に往き右手もて妙高山王を拔き取り梵世に上昇して之を

【二五】佛、舍利子に神力を以て東方佛土に於ける山王の虛空に住せるを例示し以て菩薩の淨戒の尊勝たる所以を明す。

子言はく、諸の菩薩は無上正等菩提を求證するも異生聲聞獨覺は爾らざるが如く、是の如く菩薩の所有る淨戒と彼の諸戒とは差別有りと說くと。舍利子言はく、此の菩薩の所有る淨戒は諸の異生聲聞獨覺の所有る淨戒に勝る、謂ゆる菩薩の戒は廻向して一切智智を趣求するに由りて、名づけて淨戒波羅蜜多と爲すも餘の戒は爾らず、是れを差別と謂ふ。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の淨戒は普ねく三千大千世界及び餘の無量無邊の有情に勝ればなり。佛世尊の所有る淨戒を除き餘の淨戒に於て最勝なること第一なり。所以は何ん、菩薩の淨戒は能く無量無邊の有情を引いて生死及び諸の惡趣より解脫せしむればなり。此の因緣に由りて菩薩の淨戒は諸の異生聲聞獨覺の所有る淨戒よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。又た滿慈子、雪山王は山王の德を具するも餘の山は具せず、若し德を具する者は山王の名を得ん、若し德を具せずんば王號を立てざるが如く、是の如く菩薩の所有る淨戒は無上正等菩提に廻向して一切智智を趣求するを離れざるが故に淨戒波羅蜜多と名づくるも、獨覺聲聞異生の淨戒は無上菩提に廻向するを欲せず、所求の一切智智を遠離すれば、淨戒波羅蜜多と名づけず。又た滿慈子、諸の菩薩衆の所有る淨戒は普ねく異生聲聞獨覺の所有る淨戒に勝ると。時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、何に緣りて菩薩摩訶薩衆の所有る淨戒は普ねく異生聲聞獨覺の所有る淨戒に勝るやと。舍利子言はく、菩薩の淨戒は普ねく一切有情を利樂せんが爲に廻向して一切智智を趣求するも異生聲聞獨覺は爾らず。是の故に菩薩の所有る淨戒は普ねく異生聲聞獨覺の所有る淨戒に勝ると。時に滿慈子便ち具壽舍利子を讚めて言はく、善哉善哉、是の如し是の如し、誠に所說の如し。是の如く菩薩の淨戒を讚說し菩薩衆をして轉た復た精勤して菩薩の所有る淨戒を受持せしむ。尊者は定めて應に佛の神力を承けて、諸の菩薩の所有る淨戒は普ねく異生聲聞獨覺の所有る淨戒に勝ると、說けるならんと。

〔二四〕爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に諸の菩薩衆の所有る淨戒波羅蜜多相應の法敎を受持す

【二四】佛、阿難陀を說いて、淨戒波羅蜜多相應の法敎を受持すること舍利子及び滿慈子の所說の如くせしむ。

修行し廻向して一切智智を趣求するに普ねく一切の聲聞獨覺の涅槃に廻向する所有る淨戒に勝らん。又た滿慈子、月輪出でゝ大光明を放つに一切の星光皆映奪せらるゝが如く是の如く菩薩、淨戒波羅蜜多を修行し廻向して一切智智を趣求するに普ねく一切の聲聞獨覺の涅槃に廻向する所有る淨戒に勝らん。又た滿慈子、若し[一八]時に菩薩、如來を念ずるに隨て廻向して一切智智を趣求し、殊勝相應の心力を起すに由りて淨戒波羅蜜多を引得せば爾の時名づけて[一九]自行處を行ずと爲し、普ねく一切の聲聞獨覺に勝らんと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、若し時に菩薩現に一切智の心を發起せずんば爾の時菩薩は何等と名づくと爲すやと。舍利子言はく、若し[二〇]時に菩薩現に一切智の心を發起せずんば爾の時菩薩[二一]無記心相續して住すと名づく。是の時菩薩は應に知るべし、猶ほ戒を具せる菩薩と名づく。菩薩戒に於て未だ毀犯すと名づけず。菩薩の淨戒を棄捨すと名づけざるなり。若し時に菩薩現に一切智の心を發起せず、爾の時菩薩、聲聞或は獨覺地に廻向すれば、是の時菩薩は菩薩地を捨てゝ自行處を失へるなり。若し[二二]諸の菩薩爾所の時に隨て聲聞或は獨覺地に廻向せば是の諸の菩薩は卽ち爾所の時無上乘に於て應に知るべし死せりと名づくと。實に死するに非ずと雖も而かも死の名を得るなり。工みなる幻師或は彼の弟子、小兒の手を執り引きて高梯に上り幻に身分を解き分分墮落せしむるに時に彼の眷屬咸く命終せりと謂ひ傷歎悲號して大苦惱を生じ、如何が此の子倏忽に滅亡せる、由りて重ねて見る無しといはんが如く、菩薩も亦た爾なり。大菩提を捨て退きて聲聞或は獨覺地に住し、一切智を失はゞ應に知るべし、死せるが如しと。彼の小兒命を失はずと雖も而かも彼の親屬死想を起すが如し。

[二三]又た滿慈子、意に於て云何、菩薩の淨戒と諸の異生聲聞獨覺の所有る淨戒と何の差別か有ると。滿慈子言はく、是の如き諸戒の眞如法性は實に差別無しと。舍利子言はく、是の如き諸戒の眞如法性は差別無しと雖も而かも亦た差別相有りと說く可し。此の差別相を應に云何が說くべきと。滿慈

【一八】念佛廻向の淨戒を明す。
【一九】自行處。菩薩の進むべき當分の道。
【二〇】無記時も亦具戒なるを說く。
【二一】無記。三性の一。非善非惡の中間性をいふ。
【二二】廻大向小する墮落は菩薩の死なり。
【二三】菩薩の淨戒と他の諸戒との差別を明す。

かも我れ菩薩の淨戒に勝ると言はば是の處有ること無けん。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の淨戒は無邊際なるが故なりと。[一四]時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、何に緣るが故に菩薩の淨戒は邊際無しと說く耶と。舍利子言はく、菩薩の淨戒は普ねく能く無量の有情を犯戒の惡より解脫せしむるが故に、普ねく能く無量の有情を淸淨戒に安立せしむるが故にと。[一五]時に滿慈子復た具壽舍利子に問うて言はく、尊者の所說の犯戒の惡とは是れ何の增語なるやと。舍利子言はく、我我所の執及び餘の煩惱を犯戒の惡と名づく。謂ゆる[一六]任持想、若しは我想若しは有情想若しは命者想若しは生者想若しは養者想若しは士夫想若しは補特伽羅想、若しは有想若しは無想、是の如き諸想及び餘の煩惱は是れ犯戒の惡の增語なり。所顯の菩薩の淨戒は普ねく能く無量の有情を是の如き所說の犯戒の惡より解脫せしむるが故に量邊際無し。又た諸の菩薩の所有る淨戒は普ねく能く無量の有情を安立して淨戒に住せしむ。是の故に菩薩の、大乘に安住して得る所の淨戒の量は邊際無く、聲聞獨覺の及ぶ能はざる所にして普ねく聲聞獨覺の淨戒に勝る。又た滿慈子、諸の菩薩は普ねく一切の聲聞獨覺に勝ると名づく、謂ゆる淨戒波羅蜜多を修し廻向して一切智智を趣求すればなり。

[一七]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、云何が菩薩の有漏の淨戒、能く二乘の無漏の淨戒に勝るやと。舍利子言はく、聲聞獨覺の無漏の淨戒は唯だ自利を求めて涅槃に廻向するのみなるも菩薩の淨戒は普ねく無量の有情を度脫せんが爲に無上正等菩提に廻向す。是の故に菩薩の所有る淨戒は能く二乘の無漏の淨戒に勝る。又は滿慈子、若し諸の菩薩心に分限を作して有情を饒益し淨戒を引發するも是の諸の菩薩の起す所の淨戒は二乘の無漏の淨戒に勝らず、淨戒波羅蜜多と名づけず。然るに諸の菩薩は心に分限無く普ねく無量の有情を度脫せんが爲に大菩提を求めて淨戒を引發す。是の故に菩薩の起す所の淨戒は能く二乘の無漏の淨戒に勝り、名づけて淨戒波羅蜜多と爲す。又た滿慈子、日輪出でゝ大光明を放つに螢火等の光悉く皆隱沒するが如く、是の如く菩薩、淨戒波羅蜜多を

【一四】菩薩の淨戒無邊際なる由緣を明す。
【一五】犯戒の惡の義を明す。
【一六】任持想等、能持を主張する我々所見なり、下皆同じ。
【一七】菩薩所起の淨戒は二乘の無漏の淨戒に勝ることを明す。

に平等性に入れる者の爲ならず。我が先の所說は有情をして大乘を知りて三乘を出過せしめんと欲せしのみにして諸法の平等實性を說かず。我が先の所說は有情をして如實に佛乘大乘の淨戒殊勝なるを覺了せしめんと欲せしが故に是の說を作せり、假使ひ世間の一切有情皆具さに第八者の法を成就せんも彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばずと。〔二〕諸法の平等實性不說は我我所を離るるに何の相違する所ぞ。

〔三〕又た滿慈子、一切の預流一來不還及び阿羅漢獨覺の淨戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。具壽當に知るべし、諸の聲聞獨覺の所有る淨戒をして菩薩戒に勝れしめんと欲する有らば彼れは聲聞獨覺の所有る淨戒をして如來の戒に勝れしめんと欲すと爲すと。當に知るべし彼の類は如來と共に勝劣を諍はんと欲するなりと。譬へば人有りて王子と諍はんに、當に知るべし彼の人は王と諍はんと欲するが如く、是の如く若し聲聞獨覺の淨戒をして菩薩戒に勝れしめんと欲する有らば則ち爲れ聲聞獨覺の所有る淨戒をして如來の戒に勝れしめんと欲するなり。當に知るべし、彼の類は如來と共に勝劣を諍はんと欲するなりと。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩法は勝る可からざるが故なり、菩薩は是れ眞の法王子なるが故なり。又た滿慈子、譬へば人有り手無く足無くして而かも是の說を作さん、我れ能く渡りて大海の彼岸に至ると。彼れは虛言のみ有りて而かも實義無く、增上慢に由りて是の如き說を作すが如く、是の如く若し聲聞獨覺有りて是の如き言を作さん、我が所有る戒は菩薩戒に勝ると。當に知るべし、彼の言は都て實義無しと。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の功德は大海の如くなるが故なり。彼の愚人實に手足無くして而かも我れ能く越えて大海を渡ると言はんが如く、是の如く二乘に趣く人有り實に菩薩の殊勝の功德無くして而

【二】今說する諸法の第八を不するもの、卽ち如實智を以て平等性を知り平等性を證すれば所作止み第八も平等智もなし卽ち我我所（我と我所。我は自我、我所は我の所見の諸法）を離るゝに矛盾あるべからず、矛盾相違は差別を取相する妄見に於てのみ見る所なるを示す。

【三】續いて菩薩戒最勝の義を喩說す。

爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち耳鼻舌身意觸は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、耳鼻舌身意觸を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち地界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、地界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち水火風空識界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、水火風空識界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、若し爾れば尊者は何等の法を名づけて第八と爲すと說くや。云何が我をして尊者の所說の義趣を了知して理の如く受持せしむるやと。舍利子言はく、若し諸法の平等性の中に於て[九]如實智を以て平等性を知り平等性を證せば此の智に由るが故に所作已に息まん。我れ此の中に於て第八を見ず、亦復た平等智を知るをも見ず。此の中我無く我所無きが故に。云何が中に於て相徵詰す可けんと。[一〇]滿慈子言はく、云何が尊者前後の所說互ひに相違せるに非ずや、謂ゆる前には說いて、一切の第八の所有る淨戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばずと言ひ、今復た說いて、我れ此の中に於て都て第八及び智有るを見ずと言へりと。舍利子言はく、我が先の所說は初學者の爲にして已に[一一]平等性に入れる者の爲ならず。我が先の所說は有情をして正法に趣入せしめんと欲せしのみにして已

【九】實相に相應する智によりて空平等を知らば平等すら說くべからず。

【一〇】滿慈子、舍利子の所說に前後相違あるを問へば、舍利子これ初學者及平等性に入れる者の爲めの對機說法なることを答ふ。

【一一】平等性。眞如のこと。眞如は其性平等にして一切諸法に周徧するが故に名づく。

慈子言はく、受想行識蘊を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち眼處は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、眼處を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち耳鼻舌身意處は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、耳鼻舌身意處を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち色處は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。色處を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち聲香味觸法處は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、聲香味觸法處を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち眼界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、眼界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち耳鼻舌身意界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、耳鼻舌身意界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち色界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、色界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち聲香味觸法界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、聲香味觸法界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち眼識界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、眼識界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち耳鼻舌身意識界は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、耳鼻舌身意識界を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、卽ち眼觸は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、眼觸を離れて第八有りと

神通を成就せんに彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに(ヘ)慈悲喜捨に安住せんに、彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに(ニ)空に隨順する忍を成就せんに、彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに無相に隨順する忍を成就せんに、彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに無願に隨順する忍を成就せんに、彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに(ホ)第八の法を成就せんに、彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばずと。

[八] 爾の時滿慈子、舍利子に白して言さく、我れ今尊者に第八の所有る義趣を問はんと欲す。願し開許せらるれば我が爲に此の義趣を解釋せん耶と。舍利子言はく、意に隨て問ひを發せ、我れ既に聞き已らば當に爲に解釋すべしと。滿慈子言はく、即ち色蘊は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、色蘊を離れて第八有りと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿慈子言はく、即ち受想行識蘊は是れ第八なりと爲す耶と。舍利子言はく、不なり具壽と。滿

ヘ、慈悲喜捨。

ニ、空無相無願。

ホ、第八の法。

【八】舍利子、滿慈子の問に對して第八の法の義趣を明す。

しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。

[五]是の如く菩薩は諸蘊等に於て應に善巧を修すべし。善巧に由るが故に諸の有情の爲に應ずるが如く法を說いて永く有情想等を斷滅せしめよ。菩薩是の如き殊勝の心を起し、自他を利せんが爲に諸の妙慧を修し、一切皆大悲を用て首めと爲して常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば、應に知るべし、是れを戒を具せる菩薩と名づくと。當に知るべし、無上の淨戒を具足せりと。若し諸の菩薩無上正等菩提を求めんと欲せば應に勤めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修習し廻向して一切智智を趣求すべし。若し諸の菩薩此の六種波羅蜜多を以て廻向して一切智智を趣求せば是の諸の菩薩は此の淨戒に由りて普ねく一切の聲聞獨覺に勝らん。

[六]又た滿慈子、初めて無上正等覺の心を發せる一菩薩の戒と一切有情の皆成就する所の十善業道と此の戒は彼れよりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至[七]鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲す。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに(イ)十善業道を成就せんに彼の所有る戒は無上正等覺の心を發せる諸の菩薩衆の初めて發心せし時の一菩薩の戒に於て百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。又た滿慈子、假使ひ世間の一切有情皆具さに(ロ)前五

【五】以上を以て菩薩具戒の意を說き、無上菩提を求めんと欲せば此の六度を以て廻向して一切智智を求趣すべきを明す。

【六】無上正等覺心を發せる菩薩の戒は他のあらゆる戒に比して最勝たる所以を喩說す。

【七】鄔波尼殺曇(Upanisad)。梵語の算法にて數の極を云ふ。イ、十善業道。ロ、前五神通。

て緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。

云何が名づけて是處非處善巧と爲す。謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る是處の種種の自相を了知し、如實に所有る非處の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の種種の共相を了知し、如實に所有る非處の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る非處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて是處非處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る是處の若

【四】六に是處非處善巧の義を明す。

種種の共相を了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけ

皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の種種の自相を了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る無明の種種の共相を了知し、如實に所有る行識名色六處觸受愛取有生老死の

【三】次に無明乃至生老死の十二緣起に就て明す。

實に所有る苦聖諦の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。

卷の第五百八十六

第十二淨戒波羅蜜多分の三

[一]云何が名づけて緣起善巧と爲す。[二]謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る因緣の種種の自相を了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の種種の共相を了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて緣起善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る因緣の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法の若しは我若しは無我

【一】五に緣起善巧の義を明す。
【二】先づ因緣等無間緣所緣緣增上緣及び諸緣より生ずる所の諸法に就て明す。

皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の種種の共相を了知し、如實に所有る集滅道聖諦の種種の共相皆得可からずを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所謂る集滅道聖諦の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如

す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。

[三]云何が名づけて諦善巧と爲す。謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の種種の自相を了知し、如實に所有る集滅道聖諦の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて諦善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る苦聖諦の種種の自相皆得可からさるを了知し、如實に所有る集滅道聖諦の種種の自相

【三】四に諦善巧の義を明す。

不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。[一三]又た諸の菩薩は所有る色處の種種の自相を了知し、如實に所有る聲香味觸法處の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の種種の共相を了知し、如實に所有る聲香味觸法處の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲

【一三】次に色聲味觸法處に就て明す。

若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る地水火風空識界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。[一]云何が名づけて處善巧と爲す。謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る眼處の種種の自相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の種種の共相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意處の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて處善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼處の若しは淨若しは

【一】三に處善巧の義を明す。初めに眼耳鼻舌身意處に就て明す。

眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは遠離若しは不遠離皆可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。〔一〇〕又た諸の菩薩は如實に所有る地界の種種の自相を了知し、如實に所有る水火風空識界の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の種種の共相を了知し、如實に所有る水火風空識界の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る地界の若しは有相若しは無相皆得可からさるを了知し、如實に所有る水火風空識界の若しは有相

【一〇】次に地水火風空識界に就て明す。

若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る

了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。[九]又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の自相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜれて生ずる所の諸受の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の共相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の

【九】次に眼耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受に就て明す。

如實に所有る眼識界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。[八]又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の種種の自相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の種種の共相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは我若しは無我皆得可からさるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼觸の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意觸の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを

【八】眼耳鼻舌身意觸に就て明す。

聲香味觸法界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。[七] 又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の種種の自相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の種種の共相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼識界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意識界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は

【七】次に眼耳鼻舌身意識界に就て明す。

有る色界の種種の共相を了知し、如實に所有る聲香味觸法界の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香觸法界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る

是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。[六]又た諸の菩薩は如實に所有る色界の種種の自相を了知し、如實に所有る聲香味觸法界の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色界の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る聲香味觸法界の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所

【六】次に色聲香味觸法界に就て明す。

淨若しは不淨皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは淨若しは不淨皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは空若しは不空皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは有相若しは無相皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若し有相若しは無相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは有願若しは無願皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは寂靜若しは不寂靜皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは遠離若しは不遠離皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。[五]云何が名づけて界善巧と爲す。謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る眼界の種種の自相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の種種の共相を了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて界善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る眼界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る耳鼻舌身意界の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。

【五】二に界善巧の義を明す。初めに眼耳鼻舌身意界に就て明す。

に由りて殊勝の神通を發起して諸の有情の心行差別を知り法薬を説授して惡趣の生死の衆苦を脱せしめ、又爲に自身の煩惱を調伏し有情類の與に淨福田と作り一切智智を引發するに堪任せんと。是の如く思惟して靜慮を修するに隨て一切皆大悲を用て首めと爲し常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば應に知るべし、是れを戒を具せる菩薩と名づくと。(へ)又た滿慈子、若し諸の菩薩、修行する所の甚深の妙慧に隨て皆法に於て顚倒を遠離して諸の善巧を得ることを爲さん、謂ゆる蘊善巧、若しは界善巧、若しは處善巧、若しは諦善巧、若しは緣起善巧、若しは是處非處善巧なり。

〔三〕云何が名づけて蘊善巧と爲す。謂ゆる諸の菩薩は如實に所有る色蘊の種種の自相を了知し、如實に所有る受想行識蘊の種種の自相を了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の種種の自相皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の種種の自相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の種種の〔四〕共相を了知し、如實に所有る受想行識蘊の種種の共相を了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の種種の共相皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の種種の共相皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想識蘊の若しは常若しは無常皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善功と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知し、如實に所有る受想行識蘊の若しは樂若しは苦皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけ蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知し、如實に所有受想行識の若しは我若しは無我皆得可からざるを了知す。是の如きを名づけて蘊善巧と爲す。又た諸の菩薩は如實に所有る色蘊の若しは

(へ)慧

【三】一に蘊善巧の義を明す。

【四】共相。諸法通有の相狀、即ち共通性のこと。

犯戒の菩薩と爲すと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に白つて言はく、若し諸の菩薩、少法も名づけて作者と爲すを見ずんば是の諸の菩薩は淨戒波羅蜜多を受持して違犯する所無し。何の法か此の菩薩の淨戒波羅蜜多に於て益すると爲し損すると爲すと。舍利子言はく、法の此の菩薩の淨戒波羅蜜多に於て益すると爲し損すると爲すこと無し。若し少法も此の淨戒波羅蜜多に於て益すると爲し損すると爲すを見ば當に知るべし、菩薩、淨戒に執取せるなりと。若し諸の菩薩、少法も此の淨戒波羅蜜多に於て益すると爲し損すると爲す有るを見ば是の諸の菩薩は菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず。若し諸の菩薩、少法も名づけて作者と爲すを見ずんば是の諸の菩薩は能く正しく菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受せるなり。若し諸の菩薩、淨戒を受持し廻向して一切智智を趣求せば乃ち淨戒波羅蜜多と名づく。若し諸の菩薩淨戒を受持して一切智智を趣求すること能はずんば應に知るべし此の戒は戒の名を得と雖も、而かも淨戒波羅蜜多に非ずと。或は二乘世間の果を求むるが故に。

[二]又た滿慈子、(イ)若し諸の菩薩行ずる所の施に隨て皆大悲を用て首めと爲さざる無く常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば應に知るべし、是れを戒を具せる菩薩と名づくと。(ロ)又は滿慈子、若し諸の菩薩護る所の戒に隨て皆大悲を用て首めと爲さざる無く常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば應に知るべし名づて戒を具せる菩薩と爲すと。(ハ)又た滿慈子、若し諸の菩薩、諸の有情の若しは打ち若しは罵り誹謗し凌辱し輕弄する等の事に於て修する所の忍に隨て皆大悲を用て首めと爲さざる無く常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば應に知るべし是れを戒を具せる菩薩と名づくと。(ニ)又た滿慈子、若し諸の菩薩、一切有情を惡趣の生死の種種の苦惱より拔濟せんと欲するが爲に精進を行ずるに隨て皆大悲を用て首めと爲さざる無く常に能く一切智智相應の心に隨順し廻向するを發起せば應に知るべし、是れを戒を具せる菩薩と名づくと。(ホ)又た滿慈子、若し諸の菩薩、靜慮を起すに隨て是の思惟を作さん、我れ應に殊勝の靜慮を引發し斯れ

【二】以下六度に於ける菩薩具戒の意を明す。
(イ)施
(ロ)戒
(ハ)忍
(ニ)精進
(ホ)靜慮

戒波羅蜜多漸次明盛ならん。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多漸次明盛ならば爾の時爾の時彼の無量の聲聞乘の人を教誡教授する所有る功德に勝らん。彼の功德は涅槃に廻向して一切智智を趣求すること能はざるに由る。又た滿慈子、譬へば人有り鑛を銷かして金を出し、出し已て轉じて賣るに得る所の價直は彼の人を賣るよりも貴きこと多く百千倍なるが如く、是の如く菩薩を若時若時に無量の聲聞教誡教授して勤めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ廻向して一切智智を趣求せしめば爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多、彼の聲聞の所有る功德に勝ること多百千倍ならん。彼の功德は涅槃に廻向して一切智智を趣求すること能はざるに由る。菩薩の淨戒波羅蜜多は決定して一切智智を趣求し有情類の與に大饒益を作すと。爾の時滿慈子、舍利子に白して言さく、菩薩は廣大の妙法を成就す、謂ゆる諸の菩薩は聲聞乘に趣く補特伽羅を教誡教授し勤めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學し廻向して一切智智を趣求せしむ。是の諸の菩薩は聲聞乘の補特伽羅に勝る。若し聲聞の人、菩薩乘に趣く補特伽羅を教誡教授し勤めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學し廻向して一切智智を趣求せしむるも是の聲聞の人は菩薩の補特伽羅に勝らず。乃ち爲れ菩薩は轉た彼れに勝ればなりと。時に舍利子便ち具壽滿慈子に印して言はく、是の如し是の如し、菩薩は廣大の妙法を成就して普ねく獨覺及び諸の聲聞に勝れりと。

卷の第五百八十五

第十二淨戒波羅蜜多分の二

[一]時に舍利子復た具壽滿慈子に告げて言はく、若し諸の菩薩淨戒波羅蜜多を修行して少法も名づけて作者と爲す有るを見ば當に知るべし、菩薩法の中に住すと雖も而かも諸の菩薩法を棄捨すと名づくと。是れを菩薩の非理の作意と爲す。若し是の如き非理の作意を起さば應に知るべし名づけて

【一】菩薩は淨戒波羅蜜多に於て非理の作意を起し或は損益の見を爲す可からざることを明す。

る功德に勝らん。彼の功德は涅槃に廻向して一切智智に趣求すること能はざるに由る。又た滿慈子、巧なる畫師、衆の彩色を以て畫いて人像を作るに如如に先に一色を以て横を作り後後の時に於て衆彩を塡布す。若時若時に衆の彩色を以て漸次に塡布せば爾の時爾の時容貌形色展轉して殊妙にして彼の畫師に勝ること百千萬倍なるが如く、是の如く菩薩を若時若時に諸の聲聞衆教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學し廻向して一切智智を趣求せしめば爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ん。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ば爾の時爾の時轉た一切の聲聞乘の人の所有る功德に勝らん。彼の功德は涅槃に廻向して一切智智を趣求すること能はざるに由る。而かるに此の菩薩は諸の聲聞の教誡教授するに由りて修する所の種種の功德善根晝夜に增長す。又た滿慈子、人の樹を種ゑ時に隨ひて漑灌し守護し修理するに若時若時に此の樹に漑灌し守護し修理せば爾の時爾の時其の樹增長して量漸く廣大なるが如く、是の如く菩薩を無量の聲聞教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學し廻向して一切智智を趣求せしむるに、而かも此の菩薩を若時若時に無量の聲聞教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ廻向して一切智智を趣求せしめば爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多漸次に增長せん。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多漸次に增長せば爾の時爾の時普ねく一切の聲聞獨覺に勝り菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明に轉た盛にして漸次に本願求する所の一切智智に隣近し、斯れに由りて普ねく聲聞獨覺に勝らん。又た滿慈子、譬へば人有り小火を持ちて乾ける草木を熷燒するに若時若時に火草木に依らば爾の時爾の時火漸く增長せん。若時若時に火漸く增長せば爾の時爾の時火焰轉た大にして展轉して能く多踰繕那、多百多千乃至無量を照らすが如く、是の如く菩薩を無量の聲聞教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ廻向して一切智智を趣求せしむるに而かも此の菩薩を若時若時に無量の聲聞教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ廻向して一切智智を趣求せしめば爾の時爾の時菩薩の淨

趣く補特伽羅を教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ廻向して一切智智に趣求するに廻向せしめば、是の聲聞の人は菩薩の補特伽羅に勝らず。乃ち菩薩は轉た彼れよりも勝れりと爲す。男子有りて眞金人を負ひて遠く他國に適かんに此の眞金人の光彩顏貌、彼の男子に勝るが如く、是の如く設ひ殑伽沙數の聲聞乘の人有りて菩薩乘に趣く補特伽羅を教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ一切智智に趣求するに廻向せしむるも此の一りの菩薩は彼の一切の聲聞乘の人に勝らん。又た男子の[二六]頗胝迦人を負ひて遠く他國に適かんに此の頗胝迦人の光彩顏貌、彼の男子に勝るが如く、是の如く三千大千世界の殑伽沙數の聲聞乘の人、菩薩乘に趣く補特伽羅を教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ一切智智に趣求するに廻向せしむるも此の一りの菩薩は彼の一切の聲聞乘の人に勝らん。何を以ての故に、滿慈子、諸の聲聞の人若時若時に此の一りの菩薩を教誡教授せば爾の時爾の時轉た一切の聲聞乘の人に勝り。設ひ殑伽沙數の劫を經て任せる諸の聲聞の人、此の一りの菩薩を教誡教授し、勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ一切智智を趣求するに廻向せしむるも此の一りの菩薩の功德善根は晝夜に增長すればなり。又た滿慈子、譬へば眞金は數數燒鍊するに光色轉た盛なるが如く、菩薩も亦た爾なり。若時若時に諸の聲聞衆教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せしめ、一切智智に趣求するに廻向せしむるに爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ん。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ば爾の時爾の時轉た一切の聲聞乘の人の所有る功德に勝る。彼の功德は涅槃に廻向して一切智智を趣求すること能はざる に由る。又た滿慈子、吠琉璃を若時若時に匠者の瑩拭するに爾の時爾の時光色轉た淨まるが如く、是の如く菩薩を若時若時に諸の聲聞衆教誡教授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學し廻向して一切智智を趣 求せしめば爾の時爾の時 菩薩の 淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ん。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多轉た明淨なることを得ば爾の時爾の時一切の聲聞乘の人の所有

【二六】頗胝迦（Sphaṭika）。玻璃とも云ひ、水精の如きもの。

緣ずる心間雜すること能はず。間雜無きに由りて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多の熏習圓滿し諸の惡魔の軍其の便りを伺はんと欲するも終に得ること能はず。何を以ての故に、滿慈子、若し此の境に於て魔其の便りを伺はば是の諸の菩薩卽ち此の境に於て一切智相應の心を起し、此れに由りて惡魔便りを得ること能はざればなり。是の如く菩薩若時若時に久しく生死に處して布施乃至般若波羅蜜多を修行せば爾の時爾の時漸く多佛及び諸の弟子に事へん。若時若時に漸く多佛及び諸の弟子に事へば爾の時爾の時布施乃至般若波羅蜜多を說くを聞かん。若時若時に布施乃至般若波羅蜜多を說くを聞かば爾の時爾の時能く勤め精進して理の如く所說の布施乃至般若波羅蜜多を思惟せん。若時若時に能く勤め精進して理の如く所說の布施乃至般若波羅蜜多を思惟せば爾の時爾の時能く勤め精進して無倒に所說の布施乃至般若波羅蜜多を修習せん。若時若時に能く勤め精進して無倒に所說の布施乃至般若波羅蜜多を修習せば爾の時爾の時心に於て相續して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多漸く圓滿することを得ん。若時若時に心に於て相續して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多漸く圓滿することを得ば爾の時爾の時漸く一切智智に隣近することを得ん。斯れに由りて速に無上菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作す。

[二三]又た滿慈子、若し諸の菩薩他に淨戒を受持せんことを勸導せんと欲せば是の諸の菩薩は先に應に自ら淨戒相應の[二四]心心所法を起し然して後他に淨戒を受持せんことを勸むべし。旣に他に戒を受持せんことを勸導し已らば復た一切智智に廻向せしめよ。是の如く菩薩自ら善根を修して所求の一切智智に廻向し、復た能く他の諸の有情に淸淨の心を起して淨戒を受持せんことを勸導し、戒を受持し已て復た一切智智に廻向せしめば乃ち名づけて善男子善女人等に於て能善く化導すと爲す可し。若し諸の菩薩、聲聞乘に趣く[二五]補特伽羅を敎誡敎授し勸めて菩薩の淨戒波羅蜜多を修學せし一切智智に趣求するに廻向せしめば、是の諸の菩薩は聲聞乘の補特伽羅に勝らん。若し聲聞の人、菩薩乘に

【二三】 菩薩は能く廣大の妙法を成就し、普ねく諸の聲聞、獨覺に勝れるを種々の譬喩を以て說く。

【二四】 心心所法。心及心所の法。心は身識等の心王、心所は心王の有する貪瞋等數多の別作用をいふ。

【二五】 補特伽羅(Pudgala)。數取趣又は人と譯す。有情又は有情の我をいふ。

切智智を證得するに堪へん。新瓦器に淸水を盛り滿てて日中を置くに如何に多時水に滋潤せられて是の如く是の如く器轉た堅牢なるが如く、是の如く菩薩若時若時に久しく生死に處して菩薩行を修するに爾の時爾の時修する所の布施乃至般若波羅蜜多漸く善く成熟して能く一切智智を證得するに堪へん。又た滿慈子、新瓦瓶に蘇油を盛り滿てて如如に久しきを經るに是の如く是の如く津昵して漸く潤ひ斯れに由りて堅密にして堪能する所有るが如く、是の如く菩薩若時若時に久しく生死に處して菩薩行を修せば爾の時爾の時漸く多佛及び佛弟子に遇ひて信敬し供養せん。若時若時に漸く多佛及び佛弟子に遇ひて信敬し供養せば爾の時爾の時漸く多佛及び佛弟子の敎誡敎授を蒙らん。若時若時に漸く多佛及び佛弟子の敎誡敎授を蒙らば爾の時爾の時布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を說くを聞くことを得ん。若時若時に漸く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を說くを聞くことを得ば爾の時爾の時漸く能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修習せん。若時若時に善能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修習せば爾の時爾の時漸く復た布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を圓滿せん。若時若時に漸く復た布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を圓滿せば爾の時爾の時漸く一切智智に隣近することを得ん。若時若時に漸く一切智智に隣近することを得ば爾の時爾の時漸く諸障を斷じて無上正等菩提を證得せん。

三　又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩若時若時に一切智相應の心を起さば爾の時爾の時餘境を緣ずる心を間起するを容るる無けん。若時若時に餘境を緣ずる心を間起するを容るる無くんば爾の時爾の時布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多、心に熏じ相續して漸く圓滿することを得ん。心相續して漸く圓滿するに由るが故に能く一切智の心を引發すと名づく。此の心相續して間無く斷無くんば乃ち一切智智を證得するに至る。蘇を貯ふ瓶如如に久しきを經れば、是の如く是の如く蘇氣熏ずること遍ねく、餘氣の熏著する所を受けざるが如く、是の如く菩薩摩訶薩衆、一切智相應の心を起さば餘境を

【三】菩薩一切智智を證得せんと欲せば一切智相應の心を起し、此心相續して間斷なかるべきことを明す。

若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て梵行を修行するも而かも二乘地に廻向する心を起さば應に知るべし淨戒を持つ者と名づけずと。何を以ての故に、滿慈子、彼れは淨戒波羅蜜多を捨てて聲聞獨覺乘の戒に安住すればなり。若し諸の菩薩、聲聞、獨覺乘の戒に安住せば菩薩と名づけざるなり。所以は何ん、是の諸の菩薩は淨戒波羅蜜多を遠離して心に一切智智を趣求すること無く定めて無上正等菩提を證すること能はざればなり。又た滿慈子、若し諸の菩薩是の如き心を起さん、我れ當に精勤して爾所の劫を經て生死に流轉し定めて當に一切智智を引起すべしと。是の諸の菩薩は〔二〇〕此の心を起すに由りて一切智智を證得すること能はずと。〔二一〕時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩心に分限して我れ當に精勤して爾所の劫を經て定めて當に一切智智を證得すべしと作し、是の如く心に期するに何の過失有りて而かも一切智智を得ること能はさるやと。舍利子言はく、是の諸の菩薩は生死を厭怖して速に菩提を求む。心速なるに由るが故に便ち分限を作す。分限を作すに由りて殊勝善根を成熟すること能はず。生死を怖れ或は聲聞獨覺乘の果を求むるに由りて分限を作して而かも能く無量の有情を饒益するに非ず、分限を作して而かも能く無量の布施波羅蜜多を圓滿するに非ず、無量の布施波羅蜜多を圓滿せずして而かも能く一切智智を證得するに非ず。若し諸の菩薩、心に分限を作さば設ひ殑伽沙數の大劫を經て布施波羅蜜多を修行するも而かも亦た布施波羅蜜多を圓滿すること能はず。菩薩の布施波羅蜜多は邊際無きが故に一切智智も亦た邊際無し。若し菩薩の布施波羅蜜多を圓滿せずして而かも能く一切智智を證得すとせば是の處有ること無けん。是の故に菩薩、無上正等菩提を求めんと欲せば心に定めて分限を作して速に一切智智を證得せんと求むるを起すべからず。又た滿慈子、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんと求めば是の諸の菩薩は決定して心に分限を作して布施乃至般若波羅蜜多を修行すべからず。若時若時に久しく生死に處して菩薩行を修せば爾の時爾の時修する所の布施乃至般若波羅蜜多漸く善く成熟して能く一

〔二〇〕此の心。分限の心を云ふ。

〔二一〕菩薩。心に分限を作さば一切智智を證得すること能はざることを明す。

と。又た滿慈子、眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、菩薩の學する所の四靜慮四無量四無色定相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、菩薩の學する所の四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、菩薩の學する所の空無相無願解脫門相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、菩薩の學する所の八解脫八勝處九次第定十遍處相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、一切陀羅尼門一切三摩地門相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、菩薩の學する所の五眼六神通相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法乃至一切智智相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。[一七]若し諸の菩薩諦の故に住の故に此の行處を行ぜば應に知るべし、是れを菩薩持戒すと爲すと。[一八]又た滿慈子、若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て居家に安處して妙五欲を受くと雖も而かも聲聞獨覺地に趣向する心を發起せずんば是の諸の菩薩は應に知るべし、菩薩戒を犯すと名づけずと。何を以ての故に、滿慈子、是の諸の菩薩の[一九]增上意樂は退壞無きが故なり。何等をか名づけて增上意樂と爲す。謂ゆる定めて一切智智を趣求するなり。譬へば人有り他の財物に於て實に劫盜せざるに囹圄に枉禁せられ多時を經と雖も而かも勝意樂常に退壞無く、他の財物に於て劫盜の心無ければ、惡人と囹圄に同禁せらると雖も而かも賊と名づけざるが如く、是の如く、菩薩に居家に處し殑伽沙數の大劫を經て妙五欲を受くると雖も而かも勝意樂常に退壞せず、謂ゆる常に一切智智を趣求して曾て二乘の心を發起せず。是の故に菩薩戒を犯すと名づけず。

[一七] 如上の行處に相應せる作意を以て之を眞理とし所依として化他するを菩薩戒を持つとす。

[一八] 常に一切智智を求趣して二乘の心を發起せざる菩薩は犯戒せざることを明す。

[一九] 增上意樂。增上はすべて勢力の强きをいふ。意樂は阿世耶(Āśaya)の譯で何事かを爲さんとする思念をいふ。

を修行し淨戒を受持せば是の諸の菩薩は乃ち能く菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受し、亦た能く菩薩の淨戒波羅蜜多を圓滿す。是の諸の菩薩は此の因緣に由りて名づけて菩薩の淨戒を成就すと爲すと。

[一五] 爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、云何が名づけて菩薩持戒すと爲すと。舍利子言はく、若し諸の菩薩行ずる所の施に隨て一切、無上菩提に廻向して諸の有情の與に大饒益を作し未來際を窮むるまで間無く斷無くんば應に知るべし、是れを菩薩持戒すと爲すと。若し諸の菩薩護る所の戒に隨て一切、無上菩提に廻向して諸の有情の與に大饒益を作し未來際を窮むるまで間無く斷無くんば應に知るべし、是れを菩薩持戒すと爲すと。若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て淨戒を修行して圓滿することを得せしめ而かも無上菩提に廻向せずんば諸の有情の與に大饒益を作し未來際を窮むるまで間無く斷無からんも是の諸の菩薩は菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず、菩薩の淨戒波羅蜜多を圓滿すること能はず。若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て淨戒を修行して圓滿することを得せしむと雖も而かも心、聲聞獨覺に廻向せば是の諸の菩薩は菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず、菩薩の淨戒波羅蜜多を圓滿すること能はず。若し諸の菩薩二乘の淨戒を受持せずと雖も而かも名づけて淨戒を犯す者と爲さず。若し諸の菩薩、聲聞或は獨覺地に廻向せば多く二乘の淨戒を受持すと雖も而かも名づけて淨戒を犯す者と爲す可し。何を以ての故に、滿慈子、若し諸の菩薩、聲聞或は獨覺地に廻向せば應に知るべし、名づけて非處を行ずと爲すと。非處とは卽ち二乘地を言ふ。諸の菩薩の所行の處に非ざるが故に。

[一六] 爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、云何が名づけて菩薩の行處と爲すと。舍利子言はく、布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲すと。又た滿慈子、內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空相應の作意は應に知るべし、是れを菩薩の行處と爲す

【一五】菩薩持戒の義を明す。

【一六】菩薩の行處を明す。

や不やと。舍利子言はく、若し彼の菩薩、聲聞獨覺地に廻向し已て未だ聖諦を見ず未だ實際を證せずんば[二]或は因緣有りて還て淨まる可きこと易からん。若し聖諦を見て實際を證し已らば異見深重にして還て淨まる可きこと難しと。時に滿慈子復た具壽舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんことを求むるに彼れをして實際を證せしむべからざる耶と。舍利子言はく、是の如し是の如し、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんことを求めば彼れをして實際を證せしむべからずと。滿慈子言はく、何の因緣の故に若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんことを求めなば彼れをして實際を證せしむべからざるやと。舍利子言はく、諸の菩薩の無上正等菩提を證せんことを求むる有らんに若し速に彼れをして實際を證せしめば是の諸の菩薩は或は因緣に遇はば聲聞或は獨覺地に住して一切智の心を起さしむ可きこと難し。若し如來の正法隱沒するに遇はば一切智智を證得するを求めずして爾の時便ち獨覺菩提を證して[三]無餘依般涅槃界に入り畢竟無上菩提を證せざらん。此の因緣に由りて若し諸の菩薩無上正等菩提に趣くを求めなば彼れをして速に實際を證せしむべからず乃至未だ妙菩提の座に坐せずんば彼れをして實際を證せしむべからず。若し時に已に妙菩提の座に坐して將に無上正等菩提を證せんとせば乃ち其れをして實際を證せしめ一切の障を斷じて大菩提を證せしむべし。

[四]又た滿慈子、若し諸の菩薩淨戒波羅蜜多を修行せんには二乘の淨戒を受持すべからず。彼の淨戒は一切智智を攝受すること能はず、一切智智を引發すること能はざるに由りて菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず、菩薩の淨戒波羅蜜多を圓滿すること能はざるなり。又た滿慈子、若し諸の菩薩心に分限を作して有情を饒益し布施を修行し淨戒を受持せば是の諸の菩薩は菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず、菩薩の淨戒波羅蜜多を圓滿すること能はざるなり。何を以ての故に、滿慈子、菩薩の淨戒波羅蜜多は分限無きが故なり。若し諸の菩薩心に分限無くして有情を饒益し布施

【二】未證以前廻心することあるも已證以後廻心し難し。

【三】無餘依般涅槃。四涅槃の一。煩惱障を斷じて得たる涅槃。即ち灰身滅智したる處に顯はるゝ涅槃をいふ。個在肉身全滅せるなり。

【四】菩薩の淨戒成就には二乘の淨戒を受持し、或は心に分限を作すこと有る可からざることを說く。

ず、道相智一切相智に非ず道相智一切相智を離れず。一切智智は預流果に非ず預流果を離れず、一來果不還果阿羅漢果獨覺菩提に非ず一來果不還果阿羅漢果獨覺菩提を離れず。一切智智は諸の菩薩摩訶薩行に非ず諸の菩薩摩訶薩行を離れず、諸佛の無上正等菩提に非ず諸佛の無上正等菩提を離れず。一切智智は有色法に非ず有色法を離れず、無色法に非ず無色法を離れず。一切智智は有見法に非ず有見法を離れず、無見法に非ず無見法を離れず。一切智智は有對法に非ず有對法を離れず、無對法に非ず無對法を離れず。一切智智は有漏法に非ず有漏法を離れず、無漏法に非ず無漏法を離れず。一切智智は有爲法に非ず有爲法を離れず、無爲法に非ず無爲法を離れず。一切智智は有量法に非ず有量法を離れず、無量法に非ず無量法を離れず。一切智智は過去法に非ず過去法を離れず、未來現在法に非ず未來現在法を離れず。一切智智は善法に非ず善法を離れず、不善無記法に非ず不善無記法を離れず。一切智智は[一〇]欲界繋法に非ず欲界繋法を離れず、色無色界繋法に非ず色無色界繋法を離れず。一切智智は見所斷法に非ず見所斷法を離れず、修所斷無斷法に非ず修所斷無斷法を離れず。一切智智は學法に非ず學法を離れず、無學非學非無學法に非ず無學非學非無學法を離れず。一切智智は是の如き諸の法相を遠離するが故に執取す可からず。一切智智は衆相を遠離して法の得可き無く得る所無きが故に執取す可からず。一切智智は既に有法に非ず亦た無法にも非ず。此の因緣に由りて執取す可からず。是の故に菩薩の布施を修行し淨戒を受持して無上正等菩提に廻向するは求めて一切智智を證得すと雖も而かも名づけて戒禁取の攝と爲さず。若し諸の菩薩布施を修行し淨戒を受持するも聲聞或は獨覺地に廻向して淨戒を執取せば是の諸の菩薩は菩薩戒を失へるなり、應に知るべし名づけて犯戒の菩薩と爲すと。

[二] 爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩布施を修行し淨戒を受持し、聲聞或は獨覺地に廻向して菩薩の受くる所の戒に違犯し已らば是の諸の菩薩は因緣有りて還て淨まる可しと爲す

【一〇】欲界繋法等。諸法を三界に分け、欲界、色界、無色界、繋屬する法をそれぞれ欲界繋法、色界繋法、無色界繋法とす。

【二】菩薩無上菩提を證得せんとせば實際を證す可からざることを説く。

多に非ず淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を離れず。一切智智は內空に非ず內空を離れず、外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空に非ず外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空を離れず。一切智智は眞如に非ず眞如を離れず、法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界に非ず法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議を離れず。一切智智は苦聖諦に非ず苦聖諦を離れず、集滅道聖諦に非ず集滅道聖諦を離れず。一切智智は四靜慮に非ず四靜慮を離れず、四無量四無色定に非ず四無量四無色定を離れず。一切智智は四念住に非ず四念住を離れず、四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支に非ず四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を離れず。一切智智は空解脫門に非ず空解脫門を離れず、無相無願解脫門に非ず無相無願解脫門を離れず。一切智智は八解脫に非ず八解脫を離れず、八勝處九次第定十遍處に非ず八勝處九次第定十遍處を離れず。一切智智は陀羅尼門に非ず陀羅尼門を離れず、三摩地門に非ず三摩地門を離れず。一切智智は淨觀地に非ず淨觀地を離れず、種性地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地に非ず種性地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地を離れず。一切智智は極喜地に非ず極喜地を離れず、離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地に非ず、離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を離れず。一切智智は五眼に非ず五眼を離れず、六神通に非ず六神通を離れず。一切智智は佛の十力に非ず佛の十力を離れず、四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法に非ず四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を離れず。一切智智は三十二大士相に非ず三十二大士相を離れず、八十隨好に非ず八十隨好を離れず。一切智智は無忘失法に非ず無忘失法を離れず、恒住捨性に非ず恒住捨性を離れず。一切智智は一切智に非ず一切智を離れ

[七]又た滿慈子、若し諸の菩薩、諸相に執著して布施を行ぜば是の諸の菩薩は非處を行ずるなり。若し諸の菩薩非處を行ぜば是の諸の菩薩は應に知るべし名づけて菩薩戒を犯すと爲すと。菩薩は諸相に執著して布施を行ずべからず。亦復た無上正等菩提にも執著して布施を行ずべからず。何を以ての故に、滿慈子、諸佛の無上正等菩提は衆相を遠離すればなり。所以は何ん、如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨及び十八佛不共法等の無量無邊の諸佛の妙法は皆衆相を離るればなり。是の如く菩薩は行ずる所の施に於て執著すべからず。若し諸の菩薩行ずる所の施に於て能く執著無くんば是の諸の菩薩は則ち能く菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受して疾く能く一切智智を證得すと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩一切智智を求めて、而かも布施を修行せば是の諸の菩薩は豈に一切智智に執著せざるや。若し諸の菩薩心、一切智智に執著するを起さば[八]戒禁取を成ず、云何が名づけて菩薩戒を持つと爲さんと。[九]舍利子言はく、一切智智は衆相を遠離し方處も攝するに非ず。一切智智は色蘊に非ず色蘊を離れず、受想行識蘊に非ず受想行識蘊を離れず。一切智智は眼處に非ず眼處を離れず、耳鼻舌身意處に非ず耳鼻舌身意處を離れず。一切智智は色處に非ず色處を離れず、聲香味觸法處に非ず聲香味觸法處を離れず。一切智智は眼界に非ず眼界を離れず、耳鼻舌身意界に非ず耳鼻舌身意界を離れず。一切智智は眼識界に非ず眼識界を離れず、耳鼻舌身意識界に非ず耳鼻舌身意識界を離れず。一切智智は眼觸に非ず眼觸を離れず、耳鼻舌身意觸に非ず耳鼻舌身意觸を離れず。一切智智は眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受に非ず眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を離れず、耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受に非ず耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を離れず。一切智智は地界に非ず地界を離れず、水火風空識界に非ず水火風空識界を離れず。一切智智は無明に非ず無明を離れず、行識名色六處觸受愛取有生老死に非ず行識名色六處觸受愛取有生老死を離れず。一切智智は布施波羅蜜多に非ず布施波羅蜜多を離れず、淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜

【七】諸相に執著せる布施行は非處の行にして菩薩犯戒なることを明す。

【八】戒禁取を成ず。非理の戒禁を迷取すること。

【九】一切智智は諸法相を遠離し、不可得、無所得の法なれば執著すべからざるを明す。

醫、書、印、算數、聲、因、論等及び餘の種種工巧事業なり。若し諸の王子能く勤めて是の如き等の類を習學せば王法を順益す、五欲を受けて種種に嬉戲すと雖も而かも王の訶責する所と爲らず。是の如く菩薩勤めて無上正等菩提を求めば居家に處して妙[五]五欲を受け種種に嬉戲すと雖も而かも一切智智に違逆せず。若し諸の菩薩、布施を行ずる時聲聞或は獨覺地に廻向せば是の諸の菩薩は非處を行じ、一切智に於て便ち非田と爲る。若時若時に一切智に於て已に非田を成ぜば爾の時爾の時菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず。若時若時に菩薩の淨戒波羅蜜多を攝受すること能はずんば爾の時爾の時所求の一切智智を遠離す。若時若時に所求の一切智智を遠離せば爾の時爾の時非處を行ず。若時若時に非處を行ぜば爾の時爾の時菩薩戒を犯すなり。又た滿慈子、若し諸の菩薩復た出家して淨戒を受持すと雖も而かも無上菩提に廻向せずんば是の諸の菩薩は定めて菩薩の淨戒を成就せず。若し諸の菩薩定めて菩薩の淨戒を成就せずんば是の諸の菩薩は但だ虛名のみかも[六]三歸有りて都て實義無し。應に知るべし、彼の類は菩薩と名づけずと。若し諸の菩薩居家に處すと雖も而を受けて深く三寶を信じ無上正等菩提に廻向せば是の諸の菩薩は復た五欲の樂具を受用すと雖も而かも菩薩の所に於て淨戒波羅蜜多を行じて常に遠離せず、亦た眞實に淨戒を持つ者と名づけ、亦た菩薩の淨戒に安住すと名づく。若し諸の菩薩、菩薩戒に住せば是の諸の菩薩は常に菩薩の淨戒波羅蜜多を遠離せざるなり。若し諸の菩薩常に菩薩の淨戒波羅蜜多を遠離せずんば是の諸の菩薩は常に一切智智を遠離せず。若し諸の菩薩多く五欲相應の非理の作意を發起すと雖も而かも一念無上菩提相應の心を起さば卽ち能く摧滅す。多く迦遮末尼を積集するも一吠琉璃能く總て映奪し、吠琉璃寶の光彩の價直、一切の迦遮末尼を映奪するが如く、是の如く菩薩は多く五欲相應の非理の作意を發起すと雖も若し一念無上菩提相應の心を起さば普ねく能く摧滅すること迦遮聚を一吠琉璃の普ねく能く映奪して光彩を失はしむるが如し。

【五】五欲。財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲の稱。

【六】三歸。三歸とは歸依佛、歸依法、歸依僧の稱。これに翻邪の三歸と受戒の三歸等あり。受戒の三歸に五戒の三歸、八戒の三歸、十戒の三歸、菩薩戒の三歸などあり。

卷の第五百八十四

第十二淨戒波羅蜜多分之一[一]

是の如く我れ聞きぬ。[二]一時薄伽梵、室羅筏に在して誓多林の給孤獨園に住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。[三]爾の時世尊、具壽舍利子に告げたまはく、汝今應に無上正等菩提を證せんと欲する諸の菩薩摩訶薩の爲に淨戒波羅蜜多を宣說すべしと。時に舍利子、佛の敎勅を蒙り佛の神力を承けて先きに淨戒波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を敎誡敎授す。時に滿慈子、具壽舍利子に問うて言はく、云何が應に菩薩の持戒せるを知るべく、云何が應に菩薩の犯戒せるを知るべく、云何が菩薩の應に行ずべき所の處、云何が菩薩の行ずる所に非ざる處なると。[四]時に舍利子、具壽滿慈子に答へて言はく、若し諸の菩薩、聲聞、獨覺の作意に安住せば是れを菩薩の行ずる所に非ざる處と名づく。若し諸の菩薩、此の處に安住せば應に知るべし是れを菩薩犯戒すと爲すと。若し諸の菩薩非處を行ぜば是の諸の菩薩は決定して淨戒波羅蜜多を攝受すること能はず、若し諸の菩薩決定して淨戒波羅蜜多を攝受すること能はずんば是の諸の菩薩は本誓願を捨つるなり。若し諸の菩薩本誓願を捨てなば應に知るべし是れを菩薩犯戒すと爲すと。又た滿慈子、若し諸の菩薩布施を修行して聲聞或は獨覺地に廻向せば是れを菩薩非處を行ずと名づくと。若し諸の菩薩非處を行ぜば應に知るべし是れを菩薩犯戒すと爲すと。若し諸の菩薩居家に安住して妙五欲を受くるも應に知るべし菩薩犯戒すと爲すに非ずと。若し諸の菩薩布施を行ずる時聲聞或は獨覺地に廻向して無上正等菩提を求めずんば應に知るべし是れを菩薩犯戒すと爲すと。譬へば王子は應に父王の所有る敎令を受くべく、應に王子の學ぶべき所の法を學すべきが如し、謂ゆる諸の王子は皆應に善く諸の工巧處及び事業處を學すべし、爲す所は乘象乘馬乘車及び善く弓、弩、排、穳、刀、矟、鉤、輪を持御し奔走、跳

【一】大般若の第十二會、六度の第二、戒度分。
【二】如是我聞。證信序、持經者この般若を正しく信ずるを示す。通常他に同じ。
【三】佛舍利子をして無上菩提を求趣する菩薩の爲に淨戒波羅蜜多を宣說せしむ。
【四】舍利子、滿慈子の問に對して菩薩の持戒、犯戒、所行處、非所行處を明す。

增上緣の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。無明の常無常等の得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。我の常無常等の得可からざるを宣說し有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。欲界の常無常等の得可からざるを宣說し色無色界の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。是の如く種種の法門を宣說して諸の有情の與に大饒益を作す。般涅槃して後、[三〇]正法像法及び設利羅は諸の有情の與に大饒益を作すも聲聞觸覺は是の如きの事無し。是の故に菩薩摩訶薩衆は菩薩行を修して常に有情の與に大饒益を作す。斯れに由るが故に諸の菩薩衆は彼の二乘よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと說くと。

爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝應に舍利子等の所說を受持すべし。菩薩摩訶薩衆は大願の鎧を被て大菩提に趣むき勝善巧を具して增上の意樂もて布施波羅蜜多を修行し法を捨て財を捨て染無く著無しと。時に薄伽梵是の經を說き已て具壽舍利子、具壽滿慈子、具壽阿難陀及び餘の聲聞諸の菩薩衆並びに餘の世間の天龍藥叉[三一]健達縛阿素洛[三二]揭路茶[三三]緊捺洛[三四]莫呼洛伽人非人等の一切の大衆、佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し信受して奉行しき。

【三〇】正法像法。正像末三時の第一第二。正法は佛滅後五百年（或は一千年）間、正しく教行證の三法具はりて成佛するものある時期をいふ。像法の像は似の義。正法以後一千年間、正法時に似て修行する者ありと雖も、證る者なし、卽ち三法中、教、行ありて證なき時をいふ。

【三一】健達縛（Gandharva）。尋香、食香など〻譯す。帝釋の俗樂神。須彌山の南、金剛窟中に居す。

【三二】揭路茶。蘇鉢剌尼（Suparni）。金翅鳥、妙翅鳥と譯す。龍を取りて食すといふ鳥類の王。

【三三】緊捺洛（Kinnara）。疑人、人非人、疑神と譯す。馬頭人身、人頭鳥身などの形像を有する歌樂神。

【三四】莫呼洛伽（Mahoraga）。大蟒神、大腹行と譯す。大蟒のこと。

益す。般涅槃して後も亦た無量無邊の有情に於て大饒益を作す、謂ゆる佛の[二八]設利羅を供養するが故に、或は如來の無上の正法に於て受持し讀誦し說の如く修行して皆無邊廣大の饒益、謂ゆる人王の樂或は般涅槃或は大菩提の究竟安樂を得るなりと。

[二九]爾の時滿慈子、舍利子に謂て言はく、是の如し是の如し、誠に所說の如し。仁者の所說は義の如くならざる無し。是の故に如來應正等覺は常に仁者は聲聞衆の中にて智慧辯才最も第一たりと說きたまへり。又た舍利子、譬へば眞金の常に有情の與に大饒益を作すが如し、謂ゆる未だ鑛より出でず若しは鑛より出でし時、若しは轉變して諸の莊嚴具を成じ、若しは復た出だして賣り轉じて買ふに餘物皆無量無邊の有情の與に其の應ずる所に隨て大饒益を作さん。是の如く菩薩の菩薩行を修するに未だ無上正等覺を證せざる時も諸の有情の與に大饒益を作さん、謂ゆる財法を以て其の應ずる所に隨て方便善巧して攝受饒益す。若し無上正等覺を證する時も妙法輪を轉じて大饒益を作さん、謂ゆる色蘊の常無常等の得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。眼處の常無常等の得可からざるを宣說し耳鼻舌身意處の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。色處の常無常等の得可からざるを宣說し聲香味觸法處の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。眼界の常無常等の得可からざるを宣說し耳鼻舌身意界の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。色界の常無常等の得可からざるを宣說し聲香味觸法界の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の常無常等の得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の常無常等の得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の常無常等の得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の常無常等の亦た得可からざるを宣說す。地界の常無常等の得可からざるを宣說し水火風空識界の常無常等も亦た得可からざるを宣說す。因緣の常無常等の得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣

【二八】設利羅（Sarira）。身骨、體、骨分など譯す。佛又は聖者の遺骨をいふ。

【二九】滿慈子舍利子の所說を讚し、これを重說す。

薩無上正等菩提を求證するに多百千の難行苦行を修し、先に財施を以て有情を攝受して世間の諸の貧窮の苦を離れしめ、後に無上正等覺を證せん時無染法を以て諸の有情類を教誡教授し、其れをして生死の衆苦より解脫せしむ。又た滿慈子、多百千の諸の有情類、王子に奉事して晝夜に精勤するに、王子爾の時、分に隨ひて衣服飮食臥具等の事を資給す、後王位に登れば昔の勤勞に隨ひて量の堪ふる所に任せて重く爵祿を賜ひ或は事業を主らせ、或は川原を主らせ、或は大城を主らせ、或は闘防を主らせ、或は村邑を主らせ、或は軍伇を主らすが如く、是の如く菩薩一切智を求むるに未だ無上正等覺を證せざる時は先に資財を以て有情類を攝し、後に無上正等覺を證せん時は諸の有情の覺慧の差別に隨て無上法を以て教誡教授し其れをして阿羅漢果或は不還果或は一來果或は預流果或は十善業道或は菩薩の勝位に安住せしむ。又た滿慈子、是の諸の菩薩大菩提を求むるに菩薩行を以て未だ無上正等覺を證せざる時も諸の有情に於て大饒益を作し、若し無上正等覺を證する時も亦た有情に於て大饒益を作し、般涅槃して後も亦た無量無邊の有情に於て大饒益を作す。譬へば王子の未だ王位を紹がざるも諸の有情の與に大饒益を作し、若し王位を紹ぐも亦た有情の與に大饒益を作し、若し命終して後も亦た有情の與に大饒益を作すが如し。又滿慈子、人の王に事ふるに如如に精勤して時を經ること漸く久しければ是の如く是の如く爵祿漸く增すが如く、是の如く菩薩一切智を求むるに如如に精勤して時を經ること漸く久しければ是の如く是の如く功德漸く增すなり。又滿慈子、是の諸の菩薩は未だ無上正等覺を證せざる時は諸の有情に於て財を以て攝受す、謂ゆる種種の衣服飮食臥具醫藥及び餘の資財を以て方便善巧して攝受饒益す。若し無上正等覺を證する時は諸の有情に於て法を以て攝受す、謂ゆる種種の布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を以て攝受饒益し、或は種種の念住・正斷・神足・根・力・覺支・道支及び餘の無量無邊の佛法を以て攝受饒益し、或は種種の〔二七〕施福業事・戒福業事・修福業事及び餘の無量の世間の善法を以て攝受饒

【二七】施福等。倶舍論には施福、戒福、修福を三福とす。施福は布施行にて大富の福果を感ず、戒福は性遮の二戒を持し生天の福果を感ず、修福は禪定を修し解脫の福果を感ず。

し已て復た上妙の黄金色の衣を施し、日の中分に於ても亦た種種上妙の飲食を以て殑伽沙數の有情に供養し、既に供養し已て復た上妙の黄金色の衣を施し、日の後分に於ても亦た種種上妙の飲食を以て殑伽沙數の有情に供養し、既に供養し已て復た上妙の黄金色の衣を施し、夜の三分に於ても亦復た是の如くならん。是の如く布施して殑伽沙數の大劫を經て常に間斷無からんも、是の諸の菩薩是の如く施し已て若し一切智智を廻求せずんば布施と名づくと雖も而かも布施波羅蜜多に非ず。若し能く一切智智を廻求せば乃ち布施波羅蜜多と名づく。謂ゆる布施する時分限を作さず、多きに隨ひ少きに隨ひて廣大の心を發し、普ねく有情を緣じて總べて一切に施す。是の如き菩薩は布施を行ずる時多くを捨てずと雖も一切をを布施して而かも布施波羅蜜多を成ず。所以は何ん、無量の佛法を證得せんと欲するが爲に而かも布施波羅蜜多を行ずればなり。若し布施を行ずる時心に限量有らば定めて無量の佛法を證すること能はず。若し諸の菩薩心に限量有りて布施を行ぜば是の諸の菩薩は定めて一切智智を證すること能はず、定めて布施波羅蜜多に於て圓滿すること能はず。是の故に菩薩無量の一切智智を證せんと欲せば應當に限量無き心を發起して布施を行ずべし。若し諸の菩薩限量有る心もて而かも布施を行ぜば是の諸の菩薩は慳悋を攝受して永く捨つること能はず、一切智智を攝受すること能はず、此れと相違せば乃ち能く一切智智を證得して布施波羅蜜多を圓滿す。

[二五]又た滿慈子、諸の菩薩衆布施を行ぜんと欲せば應に是の心を起すべし。我れ當に限量無き施を修行し乃至未だ無上菩提を證せずんば諸の有情に於て且く財施を行ずべし。若し無上正等菩提を證せば諸の有情に於て當に法施を行ずべしと。謂ゆる若し未だ無上菩提を證せずんば且く有情に於て財を以て攝受して貧苦を離れて世間の樂を得せしめ、若し無上正等菩提を證せば當に有情に於て法を以て攝受して煩惱を離れて出世の樂を得せしむべしと。[二六]人の王に事ふるに先に衣食を得て妻子を養活し後に王の意を得て多く珍財を獲ば自身妻子倶に富貴を受けて安隱快樂なるが如く、是の如く菩

【二五】菩薩はその菩薩行に於て常に有情を饒益することを明す。

【二六】以下譬喩を以て說く。

しむるか如しと。舍利子言はく、是の如し是の如し、當に知るべし彼の類は無知、心を蔽ひて自ら菩薩なりと稱するも實に未だ眞の菩薩の數に入ることを得ずと。但だ虚名有るのみ。譬へば丈夫の男根成就するに根缺者有りて自ら丈夫なりと稱するも彼れ虚言有るのみにして而かも實義無きが如し。菩薩も亦た爾なり。菩提心を退せば但だ虚名有るのみにして眞の菩薩に非ず。根を缺ける者を[二二]半擇迦と名づくるが如く菩提心を退せるを僞菩薩と名づく。是の故に菩薩は初中後位に決定して大菩提心を退せざるなり。若し此の心を退せば便ち菩薩に非ずと。

[二三]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、若し諸の菩薩、無上正等菩提を證せんと欲せば當に何等の相應の作意を起すべきやと。舍利子言はく、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に正しく一切智智相應の作意を發起すべし。一切の菩薩法は應に是の如き作意に安住すべきなり。若し諸の菩薩此の作意に住して布施を修行せば是の諸の菩薩は卽ち能く一切智智に廻向す。若し諸の菩薩是の如く一切智智に廻向せば是の諸の菩薩は布施波羅蜜多を攝受す。若し諸の菩薩一切智智に廻向すること能はずんば是の諸の菩薩の行ずる所の布施は布施波羅蜜多と名づけざるなり。又た滿慈子、若し諸の菩薩、布施を行ずる時是の思惟を作さん、我れ少分を捨て少分を捨てず、我れ此の物を施し此の物を捨てず、我れ彼の類に施し彼の類に施さずと。是の諸の菩薩は此の思惟に由りて一切智を障へ、久しきを經て乃ち能く一切智を得、多時に布施波羅蜜多乃ち圓滿することを得ん。是の故に菩薩一切智智を障礙せざらんと欲し、疾く一切智智を證得せんと欲し、布施波羅蜜多をして疾く圓滿することを得せしめんと欲せば應に是の如き分別思惟を離るべく、應に一切分を捨つべく、應に一切物を施すべく、一切類に於て應に平等に施すべし。[二四]又た滿慈子、若し諸の菩薩、無上正等菩提を證せんと欲せば應に布施波羅蜜多に住すべし。應に布施波羅蜜多に於て是の如くにして住すべし、若し諸の菩薩日の初分に於て能く種種上妙の飲食を以て殑伽沙數の有情に供養し、既に供養

【二二】半擇迦（Paṇḍaka）。般荼迦、般吒ともいふ。黄門と譯す。男根不具のものゝ稱にて之に五類あり。

【二三】菩薩無上菩提を證得せんと欲せば應に一切智智相應の作意を發起すべきを明す。

【二四】無上菩提證得を欲する菩薩の布施波羅蜜多に住すべき法を明す。

境定に於て已に善く修治して自在を得るが故なり。是の如く菩薩、菩薩心に住せば二乘惡魔は勝伏すること能はず。所以は何ん、是の諸の菩薩は菩薩心に於て常に離れざるが故なりと。

[19]爾の時舍利子、滿慈子に問うて言はく、一切の菩薩の若しは初發心なる、若しは已に不退を得たる、若しは菩提座に坐せるは皆勝伏す可からざる耶と。滿慈子言はく、一切の菩薩の若しは初發心なる、若しは已に不退を得たる、若しは菩提座に坐せるは當に知るべし、一切勝伏す可からずと。何を以ての故に舍利子、是の諸の菩薩は、一切の惡緣も、本誓願を捨てしむること能はざるが故なり。謂ゆる諸の菩薩、菩提心を發すに諸の有情に於て常に饒益せんと欲す。是の如き二事の誓願堅牢にして一切の惡緣も傾動すること能はず。若し諸の菩薩此の心に安住せば二乘惡魔も勝伏することと能はず。又た舍利子、諸の如來の若しは初めて成佛せる、若しは已に成佛して住せること百千歲なる、俱に一切智の心を捨離せずして一切時に於て一切智を成ずるが如く、是の如く菩薩の若しは初發心なる、若しは已に不退を得たる、若しは菩提座に坐せる、一切時に於て一切智を緣じて求めて作意を證し未だ嘗て暫くも捨てずと。[20]舍利子言はく、若し是の如くんば菩薩の諸の位は何の差別が有ると。滿慈子言はく、菩薩の諸の位は心には差別無し。但だ成佛に遲速不同有るのみ。謂ゆる菩薩の心は初中後位に皆無上菩提を引發せんことを求め、此の心に安住して常に退轉無し。又た舍利子、阿羅漢の終に阿羅漢の心を退失せざるが如し、謂ゆる無漏心は必らず退轉無し。菩薩も亦た爾なり、終に大菩提心を退失せず。又た舍利子、意に於て云何、若し阿羅漢の心退失有らば彼れは是れ眞實の阿羅漢なるや不やと。舍利子言はく、不なり具壽、若し阿羅漢の心退失すること有らば當に知るべし、彼れは[21]增上慢の者と爲し、決定して未だ阿羅漢果を得ずと。滿慈子言はく、菩薩も亦た爾なり、若し菩薩有りて菩提心を退せば當に知るべし彼れ先に自ら菩薩なりと稱するも眞の菩薩に非ずと。是れ增上慢にして菩薩衆を汚すこと穢螺蝸の澄淸なる水を汚して飲用するに堪へさら

【一九】重ねる菩薩の誓願堅牢にして一切の惡緣も傾動し得ざることを明す。

【二〇】菩薩の諸位は差別有るもその心には差別無きことを明す。

【二一】增上慢。四慢、七慢の一。殊勝の法及び證を得ずして、得たりと思ひたかぶること。

〔一六〕時に滿慈子、具壽舍利子に白つて言はく、若し諸の菩薩、二乘相應の作意を發起して便ち二乘の勝伏する所と爲らば當に知るべし、諸の菩薩の數に入らずと。何を以ての故に、舍利子、夫れ菩薩は唯だ無上正等菩提のみを求むと爲せばなり。若し二乘相應の作意を起さば本欲する所に違ふ。一切智を證得すること能はざるが故に。〔一七〕預流者の煩惱現行せば便ち求むる所の若しは智若しは斷に違ふが如し。智斷を勤求するが故に預流と名づくればなり。煩惱行は勤求の義有るに非ず。何を以ての故に、舍利子、夫れ預流者は二遍知を求むればなり。一には智遍知、二には斷遍知なり。煩惱現行せば二求倶に壞するが故に、預流者は常に應に精勤して智遍知を求めて諸の煩惱を滅すべし。是の如く菩薩若し二乘相應の作意を起さば便ち菩薩の本希求せし所の一切智智に違ふ。若し諸の菩薩、一切智智を希求する心及び心所を遠離せば則ち名づけて眞實の菩薩と爲さず。何を以ての故に、舍利子、夫れ菩薩は要らず常に一切智智を希求する心間斷無ければなり。若し諸の菩薩、菩薩心に住せば二乘惡魔勝伏すること能はず、而して能く二乘惡魔を勝伏す。善く射る夫所習の處に住するに一切の怨敵の伏する所と爲らずして能く怨敵を伏し諸の怖畏を離るゝが如く、是の如く菩薩、菩薩心に住せば一切の惡緣の壞する能はざる所、能く一切衆魔の事業を壞す。若し二乘の法教を宣說するを聞かば便ち是の念を作さん、我れ無上菩提を證得するに當つて諸の有情の爲に當に是の如き法教を宣說すること今の世尊能寂如來應正等覺の諸の獨覺聲聞種性の〔一八〕補特伽羅の爲に二乘相應の法教を宣說したまふが如くすべし。我れ未來世に作佛することを得ん時も亦た是の如き諸の有情類の爲に是の如き教を說いて利樂を獲せしめんと。是の如き菩薩は方便善巧して菩薩心に住し、二乘相應の法教を聞くと雖も而かも損する所無し。謂ゆる彼の相應の法教を聞くと雖も而かも二乘に於て貪著する所無し。是の如く菩薩、菩薩心に住せば二乘惡魔に勝伏せられずして而かも能く二乘惡魔を勝伏す。瑜伽師の境及び定に於て倶に善巧を得るに勝伏す可からざるが如し。所以は何ん、心、

【一六】菩薩能く菩薩心に住せば二乘の惡魔に勝伏されず、名けて眞實の菩薩となすことを明す。

【一七】預流者(Srotāpanna)。三界の見惑を斷じ盡し初めて聖者の流類に預り入りし位の者をいふ。

【一八】補特伽羅 (Pudgala)。數取趣、又は人と譯す。有情又は有情の我を云ふ。

滿慈子、譬へば人有りて善く解して事を斷ずるが如し。曾て無量の長者居士商賈衆の中に於て數數事を斷ぜしも、匱乏有るが故に頻りに長者居士等の所に於て財物を借便し、他の來り索むるも力の酬還する無きを恐れ、遂に王に依附して拘繫を免れんことを冀ふ。時に諸の債主、王を怖畏するが故に敢へて彼の人を牽掣挫辱せず。所以は何ん、彼の依附する所の王の力甚だ大にして敵として當る可きこと難ければなり。是の如く菩薩若しは初發心若しは不退轉のとき皆一切智智に依附するに由りて大神力有りて一切の獨覺及び阿羅漢皆心をして變動有らしむること能はず。又た滿慈子、大の王に依るに極めて貧賤なりと雖も而かも辱かしめられざるが如く是の如く菩薩一切智智に依るに二乘惡魔も傾動すること能はず而かも能く一切の惡魔を降伏し、彼の二乘よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。是の故に菩薩退轉せざらんと欲せば常に應に一切智智に依止して菩薩行を修して餘乘を樂ふこと勿かるべしと。[一三]滿慈子言はく、何等の菩薩、諸の獨覺聲聞の勝る所と爲るかと。舍利子言はく、若し諸の菩薩、獨覺聲聞の勝事を說くを聞きて心に欣慕を生じて是の念言を作さん。我れ當に云何が是の如き法を得べきと。亦た深く樂著して二乘の教を讚ぜば是の諸の菩薩は斯の如き非理の作意を起すに由りて便ち一切の獨覺聲聞の勝伏する所と爲ると。時に滿慈子、具壽舍利子に問うて言はく、何に緣りて此の菩薩の作意を說いて非理と名づくる耶と。舍利子言はく、此れは能く一切智智を障礙して能く一切智を引發せし心をして漸微漸遠せしむるが故に菩薩の非理の作意と名づく。[一四]瑜伽師の實際を證せんと欲して欣樂して[一五]正性離生に趣入するに若し貪瞋癡、緣に遇ひて現起せば能く阿羅漢を引發する心をして障有り礙有り漸微漸遠せしむるが如し。是の故に說いて非理の作意と爲す、是の如く菩薩の大菩提を求むるに若し二乘相應の作意を起さば一切智を障へ菩提心を損ふ。是の故に名づけて非理の作意と爲す。若し諸の菩薩、此の作意有らば便ち二乘の勝伏する所と爲らんと。

【一三】菩薩非理の作意有らば便ち二乘の勝伏する所と爲ることを明す。一切智を障へ菩提心を損へばなり。

【一四】瑜伽師（Yogācārya）。瑜伽とは相應の義。相應に五義あり。境と、行と、理と、果と、機と相應す。其の中多く第二の行瑜伽の義、觀行即ち禪定相應する人を取て瑜伽師と名づく。

【一五】正性離生。見道位のこと。正性とは涅槃又は聖道の義、生とは煩惱のこと、即ち煩惱を離れたる聖道を正性離生といふ。

惡魔を化作し、一一の惡魔各復た前に說く所の如き無量勇健の象馬軍等を化作せんも亦た不退の菩薩の心をして轉變有らしむること能はず。又た舍利子、意に於て云何、爾所の有情、阿羅漢を成じて一一爾所の惡魔を化作し、一一の惡魔大神力を具せんに是の如き神力と不退轉の一菩薩の心に有する所の神力と何れか勝ると爲すと。舍利子言はく、不退の菩薩摩訶薩の心に有する所の神力は彼れよりも勝ると爲す。所以は何ん、不退の菩薩摩訶薩の心に有する所の神力は無量無數にして思議す可からず宣說す可からざればなりと。世尊復た舍利子に告げて言はく、意に於て云何、不退の菩薩摩訶薩の心の有する所の神力は前に說く所の無量無邊の大神通を具せる諸の阿羅漢の有する所の神力よりも誰れか能く、彼れ最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと說くと。舍利子言はく、我れ佛の所說の義を解する如くんば唯だ佛世尊のみ乃ち能く彼の不退の菩薩摩訶薩の心の有する所の神力は前に說く所の無量無邊の大神通を具せる諸の阿羅漢の有する所の神力よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと說きたまふ。所以は何ん、不退の菩薩摩訶薩の心の有する所の神力は一切智相應の心の有する所の神力を除いて能く及ぶ者無ければなり。此の因緣に由りて不退の菩薩摩訶薩の心の有する所の神力は唯だ佛のみ能く知らしめし、唯だ佛のみ能く餘の神力よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと說きたまふと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。何を以ての故に、舍利子、不退の菩薩摩訶薩の心は餘の有情の能く轉變せしむる無く、亦た如實に知る者說く者無ければなり。唯だ如來應正等覺のみ有りて彼の菩薩の不退轉の心を知りて諸の有情の爲に如實に宣說すと。[二]爾の時滿慈子、舍利子に問うて言はく、何の因緣の故に不退の菩薩摩訶薩の心は轉變す可からざるやと。舍利子言はく、諸の菩薩は布施を行ずる時皆一切智智を緣ぜざる無く其の心堅固にして傾動す可からざるが如く、是の如く不退轉を證得する時は心隨緣して轉變すること有らず。又た

【二】不退の菩薩の心の轉變すべからざる因緣を明す。一切智智に依ればなり。

の菩薩の心をして轉變有らしむること能はず。此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、不退の菩薩摩訶薩の心は諸の聲聞及び諸の獨覺の永く煩惱を離れし無漏の心よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、不退の菩薩摩訶薩の心は是の如き大威神力を具足して聲聞獨覺轉變すること能はずと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、何を以ての故に、舍利子、諸佛世尊は其の言二無ければなり。佛の所說の義は皆實にして虛しからず。汝應に受持して廣く他の爲に說くべし、〔一〇〕。

又た舍利子、十方世界の諸の有情類無量無邊ならんに假使ひ十方無量無數殑伽沙等の諸の世界の中の諸の殑伽沙一一皆變じて復た爾所の諸の有情類と爲らん、假使ひ十方無量無數無邊世界の地水火風碎けて極微と爲り一一皆變じて復た爾所の諸の有情類と爲らんに是の諸の有情は寧ろ多しと爲すや不やと。舍利子曰はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、是の如き一切の有情假使ひ一時に阿羅漢に成じ永く諸漏を盡くして六神通八解脫等の種種の功德を具し廣大の自在神通を成就して一切皆〔一一〕大採菽氏(だいさいしゅくし)の如くならんに是の如き一一の大阿羅漢皆能く爾所の惡魔を化作し、一一の惡魔復た能く爾所の勇健の象軍馬軍車軍步軍を化作せんに、是の如き諸軍は數を知る可きや不やと。舍利子曰く、不なり世尊、不なり善逝と。佛言はく、假使ひ善男子或は善女人の量三千大千世界に等しき有りて能く其の數を知り神通力を以て諸の魔軍を破して皆退散せしめんに、意に於て云何、此の善男子或は善女人の神通威力は廣大なりと爲すや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、此の善男子或は善女人の神通威力は敵として當る可からず思議す可からずと。佛言はく、假使ひ是の如き所說の男子女人、前に說く所の諸の有情の數の如くにして、是の如き一一の男子女人各十方無量無數無邊世界の殑伽沙等の如き大劫而かも念念に住して前に說く所の如き無量の

【一〇】更に不退の菩薩の心は餘の有情の轉變し得ざることを說き、その神力を如實に知り或は說くものは佛を措いて他に無きことを明す。

【一一】大採菽氏（Mahā Maudgalyāyana）。佛弟子摩訶目乾連の譯名なり。神通第一人者なり。

能く吠瑠璃を映奪するや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝、一つの吠瑠璃の光彩の價直は普ねく能く大迦遮聚を映奪す。所以は何ん、吠瑠璃寶は內外明淨なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は光彩潤澤なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は本色紺靑なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は族類殊勝なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は威德廣大なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は價直無量なるも迦遮末尼は則ち是の如くならず。吠瑠璃寶は尊貴にして有情の業增上力もて大海渚に生ずるも迦遮末尼は若しは貴若しは賤同じく受用する所にして、工業の所造なるが故なり。吠瑠璃の光彩の價直は一切の迦遮末尼を映奪すと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、不退の菩薩摩訶薩の心も亦復た是の如し。普ねく能く一切の獨覺聲聞の心を映奪すること吠瑠璃の迦遮衆を映奪するが如し。我れ此の義を觀じて是の如き說を作す、不退の菩薩摩訶薩の心は諸の聲聞及び諸の獨覺の永く煩惱を離れし無漏の心よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと。不退の菩薩の慈悲倶心は能く有情をして樂を得て苦を離れしむるも聲聞獨覺の慈悲倶心は但だ假想のみ有りて實の用無し。又た舍利子、阿羅漢の永く諸漏を盡くして六神通八解脫等の種種の功德を具せる有りて能く神力を以て此の世界を擲げて餘方に置かんも而かも不退の菩薩の心をして轉變有らしむること能はず。又た舍利子、阿羅漢の永く諸漏を盡くして六神通八解脫等の種種の功德を具せる有りて能く神力を以て大海の水を涸らさんも而かも不退の菩薩の心をして轉變有らしむること能はず。又た舍利子、阿羅漢の永く諸漏を盡くして六神通八解脫等の種種の功德を具せる有りて能く神力を以て吹いて殑伽沙數の世界の其の中の一切の妙高山王を皆灰粉の如く壞せんも而かも不退の菩薩の心をして轉變有らしむること能はず。又た舍利子、阿羅漢の永く諸漏を盡くして六神通八解脫等の種種の功德を具せる有りて神通力を以て能く殑伽沙數の世界の大劫火聚の猛焰熾然なるを吹いて皆頓滅せしめんも而かも不退

德を具して一一百億の魔軍を化作せんに此の諸の魔軍は寧ろ多しと爲すや不やと。舍利子曰はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、諸の阿羅漢の其の數すら倘ほ多し、況んや彼の一一復た能く百億の魔軍を化作せんをや。是の諸の魔軍も寧ろ量を知る可けんやと。世尊復た舍利子に告げて言はく、是の如き無邊の諸の阿羅漢の化する所の無量無數の魔軍頗る力有らんに能く暫時に一りの不退の菩薩の心をして轉變せしむるや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝、是の如き無量無數の魔軍も一りの不退の菩薩の心をして轉變有らしむること能はずと。世尊復た舍利子に告げて言はく、意に於て云何、是の如き一切の永く諸漏を盡くせる阿羅漢の心と一りの不退の菩薩の心の威神勢力とは何れか勝ると爲すと。舍利子言はく、我れ佛の所說の義を解する如くんば不退の菩薩の心力を勝ると爲す、無數量の阿羅漢の心に非ずと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。汝今應に是の如く觀ずべし、無量の永く貪欲瞋恚愚癡及び憍慢等を離れし諸の阿羅漢の無漏の心、一一復た能く百億勇健の魔軍を化作せんに、此の諸の魔軍其の神力を盡すも一りの貪瞋癡慢等の煩惱有る菩薩の心をして變ぜしむること能はずと。此れに由りて應に知るべし、菩薩の心力は諸の漏盡の阿羅漢の心に勝ると。又た舍利子、意に於て云何、誰れか是の如き貪瞋癡慢等の煩惱を離れし阿羅漢の心よりも最と爲し勝と爲し尊と爲し高と爲し妙と爲し微妙と爲し上と爲し無上と爲すと。舍利子言はく、諸の不退轉の菩薩の心は貪欲瞋恚愚癡慢等の煩惱有りと雖も而かも無漏の阿羅漢の心よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。所以は何ん、是の如き無漏の無量無邊の阿羅漢の心及び所化の者其の神力を盡くすも一りの貪瞋癡慢等の煩惱を具せる不退の菩薩の心をして轉變せしむること能はざるが故なりと。

[七]爾の時佛、舍利子に告げて言はく、我れ今汝に問はん、汝が意に隨て答へよ。意に於て云何、若し迦遮末尼を積聚して其の中に一つの[八]吠瑠璃寶を置くこと有らんに[九]迦遮末尼の光彩の價直頗る

【七】佛、不退の菩薩の心はあらゆる聲聞獨覺の轉變し得ざることを喩說す。
【八】吠瑠璃（Vaiḍūrya）。青玉、青色寶と譯す。
【九】迦遮末尼（Kācamaṇi）。玉の名、水精の類。

有り及び慢等の隨煩惱有りと謂へるや不やと。舍利子言はく、是の如し世尊、是の如し善逝、我れ菩薩の心すら尙ほ貪有り瞋有り癡有り及び慢等の諸の隨煩惱有りと謂へりと。世尊復た舍利子に告げて言はく、汝獨覺及び阿羅漢の心は已に貪を離れ瞋を離れ癡を離れ及び慢等の諸の隨煩惱を離ると謂へるや不やと。舍利子言はく、是の如し世尊、是の如し善逝、我れ獨覺及び阿羅漢の心は已に貪を離れ瞋を離れ癡を離れ及び慢等の諸の隨煩惱を離ると謂へりと。世尊復た舍利子に告げて言はく、汝獨覺及び阿羅漢は諸漏永く盡き時有りて能く慈悲無量に入り普ねく無量無邊の有情を緣じて樂を得及び衆苦を離れしめんと欲せば彼れ頗る能く諸の有情類をして眞實に樂を得及び苦を離れしむと謂ふや不やと。舍利子言はく、爾らず世尊、爾らず善逝、彼の諸の獨覺及び阿羅漢は其の心都て方便善巧無し。云何が能く慈悲無量に入りて普ねく無量無邊の有情を緣じ實に有情をして樂を得、苦を離れしめん。唯だ暫らく假想して是の如き觀を作すのみ。諸の菩薩衆の菩提心を發せるは決定して一切智智を趣求し、一切有情を利樂せんと欲するが爲に未來際を窮むるまで常に間斷無し。是の故に菩薩は慈悲定に入り、無量無邊の有情をして皆安樂を得及び衆苦を離れしめんと欲せば重障無き者は卽ち此の刹那に實に皆樂を得及び衆苦を離る。況んや無上正等覺を得ん時而かも諸の有情類をして實に皆樂を得及び衆苦を離れしむること能はざらんやと。此の因緣に由りて若し菩薩は實に能く一切の有情を利樂して常に間斷無しと言はゞ斯れ是の處(ことわり)有り。若し獨覺及び阿羅漢の贍部洲に滿てる、八解脫を具し、同時に現に慈無量定に入り、無量無邊の有情をして皆安樂を得せしめんと欲するに中に於て一りたりとも有りて實に樂を得と言はゞ是の處有ること無けんと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、此の緣に由るが故に諸の菩薩の心は諸の獨覺及び阿羅漢の無漏の心よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。

[六]又た舍利子、假使ひ十方の一切有情皆諸漏を盡くして阿羅漢を成じ、六神通八解脫等の種種の功

【六】一りの不退の菩薩の心の能く無漏の無量無邊の阿羅漢の心に勝ることを明す。

聞は能く他に記を授くるに非ず、設ひ能く記すること有らんも皆佛に從て聞くのみ。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。又た舍利子、菩薩既に大菩提心を發して盡未來まで一切を饒益せんと欲せば爾の時大地諸山大海六返に變動し魔王は驚怖するも諸天龍神皆大いに歡喜して咸く菩薩に、當に無上正等菩提を證して我れ等が生死の大苦を拔濟し安樂を得せしむべしと言はん。聲聞獨覺は最後[三]無漏心に安住する時も是の如きの事無けん。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。又た舍利子、假使ひ一切の有情を教化して皆獨覺阿羅漢果に住せしむるも波羅蜜多及び一切智を攝受すること能はず。若し菩薩を教授教誡して無上正等覺の心を發さしむれば卽ち能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び一切智を攝受せん。所以は何ん、聲聞獨覺は無上菩提を成辦すること能はざればなり。發す所の心極めて羸劣なるを以ての故に。要らず諸の菩薩は乃ち能く無上菩提を成辦す。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。是の故に無上菩提を證せんと欲せば皆應に發心して一切智を求むべしと。

[四]時に舍利子復た佛に白して言さく、云何が應に諸の菩薩相を知り、何等の行を修して菩薩の名を得べきと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、若し能く大菩提心を發し精進して布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修行する有りて心に厭倦無く、種種の惡友の退緣に遇ふと雖も而かも退屈せずんば是れ菩薩相にして、是の相を具する者を名づけて菩薩と爲す。又た舍利子、若し諸の有情諸の善法を修して心に厭倦無く淨戒を受持して終に毀犯せず、常に樂うて一切の有情を利樂し、苦緣に遇ふと雖も而かも怯弱無く修學する所に隨て有情と同じく菩提を證し畢竟安樂ならんことを願はゞ是れを菩薩摩訶薩の相と爲し、此の相を具する者を名づけて菩薩と爲すと。

[五]時に舍利子復た佛に白して言さく、云何が佛の所說の深義を解せん、謂ゆる菩薩の心は諸の獨覺及び阿羅漢の無漏の心に勝ると。惟だ願はくは世尊爲めに斯の義を解して我れ等をして解して無倒に受持せしめたまへと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、汝菩薩の心すら尙ほ貪有り瞋有り癡

【三】無漏心。漏は缺漏の義にて煩惱の異名。煩惱を增上せしめざる心をいふ。最後心の漏斷ずるを最後無漏心といふ。

【四】菩薩相を說き菩薩と名くる所以を明す。

【五】菩薩の心の獨覺及び阿羅漢の心に勝る所以を明す。菩薩能く有情をして樂を得て衆苦を離れしむればなり。

てしむること能はず、菩薩の初めて大菩提心を發せるは自身に於て煩惱未だ斷ぜずと雖も而かも能く普ねく無量の有情を化して皆發心して諸の煩惱を捨てしめ展轉して無量の有情を饒益す。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。又た舍利子、菩薩の發す所の大菩提心は若しは習若しは修若しは多くの所作、能く具さに布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を引發して疾く能く一切智智を證得し、斯れに由りて無量の有情を化度して聲聞獨覺乘の果を得、或は無上正等菩提を證し、或は人天殊勝の善業を修して人天の樂を得て惡趣の苦を捨てしむ。聲聞獨覺は諸の漏心無く自身をして涅槃の樂を證せしむと雖も而かも布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を引くこと能はず。亦た一切智智を得ること能はず。無量の有情を化度して聲聞獨覺乘の果を得、或は無上正等菩提を證し、或は人天殊勝の善業を修し人天の樂を得て惡趣の苦を捨てしること能はず。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。又た舍利子、菩薩の發す所の大菩提心は威力殊勝にして若し善く修習せば疾く無上正等菩提を證し能く有情に〔二〕無顚倒の記を授く、謂ゆる是の如き是の如き有情は當來世に於て爾所の劫を經て生死に流轉し菩薩行を修して當に無上正等菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作すべしと記し、或は是の如き是の如き有情は當來世に於て爾所の劫を經て生死に流轉し獨覺行を修し人天の中に於て緣に遇ひて獨覺菩提を證得し、六神通を具して自在安樂ならんと記し、或は是の如き是の如き有情は當來世に於て爾所の劫を經て生死に流轉し聲聞行を修し人天の中に於て聲聞果を得んと記し、或は是の如き是の如き有情は當來世に於て善惡業を作し爾所の時を經て人天趣に生じ或は惡趣に墮して生死流轉せんと記す。諸の獨覺は能く有情に無顚倒の記を授くるに非ず。謂ゆる諸の菩薩に記して言ふこと能はず、汝未來に於て爾所の劫を經て當に作佛することを得て某の名等と號づくべしと。亦た記すること能はず、是の如き有情は當來世に於て爾所の劫を經て決定して當に獨覺菩提或は聲聞果或は善惡趣を得て諸の苦樂を受くべしと。亦た聲

【二】無顚倒の記を授く。凡夫の通見たる事理を顚倒することなき佛の豫言なり。

の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。[三四]時に舍利子便ち佛に白して言さく、若し人趣增上することを得て動轉無からんと欲する有らば應に彼の殊勝の善業を修感すること[三五]轉輪王の如くすべし。若し天趣增上することを得て動轉無からんと欲する有らば應に彼の殊勝の善根を修感すること[三六]天帝釋の如くすべし。若し壽量長遠なるを攝して動轉無からんと欲する有らば應に彼の殊勝の定を修し能く感ずること[三七]非想非非想處に生ずるが如くすべし。是の如き菩薩摩訶薩衆、若し世間第一眞淨の福田と作り及び三千大千世界最大の法師と作り亦た如來應正等覺と作りて動轉無からんと欲する有らば應に定めて發心し一切智を求むべしと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、若し定めて發心して一切智を求めなば彼れは必ず當に世間第一眞淨の[三八]福田と作り及び三千大千世界最大の法師と作り亦た如來應正等覺と作りて一切有情を利益し安樂ならしむべしと。

卷の第五百八十三

第十一布施波羅蜜多分の五

[一]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、頗し初心の後心に勝ること有りや不やと。世尊告げて曰はく、善哉善哉、能く如來に是の如き深義を問へり。汝應に諦かに聽くべし。當に汝が爲に說くべし、亦た初心の後心に勝る義有り、謂ゆる阿羅漢の諸の漏心無きは自身一切の煩惱を離ると雖も而かも無量の有情を化して皆發心して諸の煩惱を捨てしむること能はず、菩薩の初めて大菩提心を發せるは自身に於て煩惱未だ斷ぜずと雖も、而かも能く普ねく無量の有情を化して皆發心して諸の煩惱を捨てしめ、展轉して無量の有情を饒益す。是れを初心の後心に勝る義と謂ふ。復た獨覺有りて諸の漏心無く自身一切の煩惱を離ると雖も、而かも無量の有情を化して皆發心して諸の煩惱を捨

【三四】一切有情饒益を欲する菩薩は應に定めて發心し一切智を求むべきを說く。
【三五】轉輪王（Cakravarti-rāja）。須彌四洲を統領する王。王位に卽く時に感得する輪寶の種別に依り金、銀、銅、鐵の四輪王の別あり。輪寶を轉じて一切を威服するが故に此名あり。
【三六】天帝釋。世尊竹林說法に七種受によりて三十三天に生ずることを說く、父母供養、家長供養、恭遜語、麁言を離れ、兩舌を離れ、慳悋を調伏し、眞實語を語るとす。その他雜阿四十等に作善生天を縷說す。
【三七】非想非非想處。無色界の第四天にて識處の有想を離れ又無所有處の無想をも離れたる地なるが故に名づく。その處唯不變の存續なり、故に長壽にして動轉すとす。
【三八】福田。如來又は比丘のこと。佛又は僧に供養すれば福德を生ずること田地の物を生ずるが如くなればなり。
【一】佛舍利子の問に答へて初心の後心に勝る義有ることを詳說す。

來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして下方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿して疾く能く一切智智を證得せしむと。[三三] 時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た上方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、廣說——乃至、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た上方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說——乃至無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして上方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大

【三三】次に上方世界の菩薩及無上正等覺に就て明す。

所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふ。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。[三一]時に舍利子及び諸の大衆佛の神力の故に復た東北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、廣說――乃至、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た東北方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至、無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして東北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。[三二]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た下方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩、菩提座に坐し、廣說――乃至、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た下方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至、無數の如

【三一】次に東北方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

【三二】次に下方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

復た西南方無量殑伽沙の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常想も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至、無數の如來神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如き事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして西南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資糧圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。〔三〇〕時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た西北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、廣說――乃至、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に、復た西北方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至、無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして西北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、

【三〇】次に西北方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿して疾く能く一切智智を證得せしむと。

二八 時に舍利子及び諸の大衆佛の神力の故に復た東南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、廣說――乃至、無數の菩薩、無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た東南方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至、無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に住き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして東南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿して疾く能く一切智智を證得せしむと。時に舍利子及び諸の大衆佛の神力の故に 二九 復た西南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩、菩提座に坐し、廣說――乃至、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に

【二八】次に東南方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

【二九】次に西南方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏して退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た西方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして西方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資糧圓滿して疾く能く一切智智を證得せしむと。[二七]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩、菩提座に坐し、廣說――乃至無數の菩薩無量の一大魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た北方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說――乃至無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして北方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希

【二七】次に北方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

し能く我れ等をして東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就して能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就して能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。[二五]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、廣說し乃至無數の菩薩、無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。佛の神力の故に復た南方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。廣說——乃至無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就し能く我れ等をして南方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩摩訶薩衆の行ずる菩薩行の種種の差別、無數の如來應正等覺の種種に方便して有情を饒益するを見ることを得せしめたまふ。甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめたまふと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸佛は廣大の妙法を成就し能く菩薩をして發心して諸佛の成ずる所の廣大の妙法、所謂無上正等菩提を趣求せしめ、此れに由りて能く修して資粮圓滿し疾く能く一切智智を證得せしむと。[二六]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に復た西方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩、菩提座に坐し、廣說——乃至無

【二五】次に南方世界の無數の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

【二六】次に西方世界の菩薩及如來應正等覺に就て明す。

取有生老死の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。無明の樂無樂相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。無明の我無我相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。無明の淨不淨相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。無明の遠離不遠離相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。無明の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛取有生老死の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の大衆の爲に種種の有無有等の差別の法門を宣說するを見る。佛の神力の故に復た東方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩を饒益せんと欲するが爲の故に多く俱胝劫[二四]般涅槃せずして未だ無上菩提の心を發さざる者は其れをして發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は其れをして一切智智を圓滿せしむ。無數の如來應正等覺、諸の聲聞を饒益せんと欲するが爲の故に多劫を經て住し方便して成熟し未だ發心せざる者は化して發心せしめ、已に發心せる者は勤めて修行せしめ、已に修行せる者は其れをして阿羅漢果を證得せしめ、無數の如來應正等覺、諸の獨覺を饒益せんと欲するが爲の故に多劫を經て住し方便して成熟し未だ發心せざる者は化して發心せしめ、已に發心せる者は勤めて修行せしめ、已に修行せる者は其れをして獨覺菩提を證得せしむ。無數の如來應正等覺、諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に多劫を經て住し方便して成熟し或は無量殑伽沙等の諸の有情類をして其の種姓に隨て般涅槃を得せしめ、或は無量殑伽沙等の諸の有情類をして惡趣の苦を脫して人天の樂を得せしむ。無數の如來應正等覺神通力を以て餘の無量無邊世界に往き方便善巧して無量の有情を利益し安樂するを見る。時に舍利子、是の如きの事を見て歡喜踊躍し便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き大威神力を成就

【二四】俱胝劫。俱胝(Koti)數名にて千萬或は百億をいふ。劫(Kalpa)長時と譯す、非常に長き時間のこと。

舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の淨不淨相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の遠離不遠離相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に地界の常無常相得可からざるを宣說し水火風空識界の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。地界の樂無樂相得可からざるを宣說し水火風空識界の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。地界の我無我相得可からざるを宣說し水火風空識界の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。地界の淨不淨相得可からざるを宣說し水火風空識界の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。地界の遠離不遠離相得可からざるを宣說し水火風空識界の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。地界の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し水火風空識界の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に因緣の常無常相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。因緣の樂無樂相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。因緣の我無我相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。因緣の淨不淨相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。因緣の遠離不遠離相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。因緣の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し等無間緣所緣緣增上緣の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に無明の常無常相得可からざるを宣說し行識名色六處觸受愛

宣說し聲香味觸法界の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。色界の遠離不遠離相得可からざるを宣說し聲香味觸法界の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。色界の寂靜不寂靜相得可からさるを宣說し聲香味觸法界の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に眼識界の常無常相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の樂無樂相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の我無我相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の淨不淨相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の遠離不遠離相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。眼識界の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意識界の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に眼觸の常無常相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の樂無樂相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の我無我相得可からさるを宣說し耳鼻舌身意觸の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の淨不淨相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の遠離不遠離相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸の寂靜不寂靜相得可からさるを宣說し耳鼻舌身意觸の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の常無常相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の樂無樂相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の我無我相得可からざるを宣說し耳鼻

説し耳鼻舌身意處の我無我相も亦た得可からざるを宣説す。眼處の淨不淨相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意處の淨不淨相も亦た得可からざるを宣説す。眼處の遠離不遠離相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意處の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣説す。眼處の寂靜不寂靜相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意處の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣説す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色處の常無常相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の常無常相も亦た得可からざるを宣説す色處の樂無樂相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の樂無樂相も亦た得可からざるを宣説す。色處の我無我相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の我無我相も亦た得可からざるを宣説す。色處の淨不淨相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の淨不淨相も亦た得可からざるを宣説す。色處の遠離不遠離相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の遠離不遠離相も亦得可からざるを宣説す。色處の寂靜不寂靜相得可からざるを宣説し聲香味觸法處の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣説す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に眼界の常無常相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の常無常相も亦た得可からざるを宣説す。眼界の樂無樂相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の樂無樂相も亦た得可からざるを宣説す。眼界の我無我相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の我無我相も亦た得可からざるを宣説す。眼界の淨不淨相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の淨不淨相も亦た得可からざるを宣説す。眼界の遠離不遠離相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣説す。眼界の寂靜不寂靜相得可からざるを宣説し耳鼻舌身意界の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣説す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色界の常無常相得可からざるを宣説し聲香味觸法界の常無常相も亦た得可からざるを宣説す。色界の樂無樂相得可からざるを宣説し聲香味觸法界の樂無樂相も亦た得可からざるを宣説す。色界の我無我相得可からざるを宣説し聲香味觸法界の我無我相も亦た得可からざるを宣説す。色界の淨不淨相得可からざるを

所に至るに隨ひて種種に方便して示現敎導讚勵慶喜し勸て或は如來の十力或は四無所畏或は四無礙解或は大慈大悲大喜大捨或は十八佛不共法或は三十二大士相或は八十隨好或は無忘失法或は恒住捨性或は餘の無量無邊の佛法を修學せしむるを見る。佛の神力の故に復た[二]東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩は外道の法の中にて出家修行し波羅蜜多相應の法を聞かず見ざるが故に多く百千劫生死に流轉して一切智智を證得すること能はず。無數の菩薩は佛法の中に於て出家修行し波羅蜜多相應の法を數聞き數見るが故に受持し讀誦し理の如く思惟し他の爲に演說して疾く能く一切智智を證得す。無數の菩薩は勤め精進して無間に波羅蜜多相應の法を訪求すと雖も方便無きが故に而かも得ること能はず。無數の菩薩は精進して波羅蜜多相應の法を訪求するに方便有るが故に少しく功を用ふと雖も、而かも便ち獲得す。無數の菩薩は種種の難行苦行を修行し、無數の菩薩は苦行を棄捨して中道を修學す。無數の菩薩は菩提樹に詣り、無數の菩薩は金剛座に坐し、無數の菩薩無量の天魔怨敵を降伏し退散せしめ已て無上正等菩提を證得するを見る。[三]佛の神力の故に復た東方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に色蘊の常無常相得可からざるを宣說し受想行識蘊の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。色蘊の樂無樂相得可からざるを宣說し受想行識蘊の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。色蘊の我無我相得可からざるを宣說し受想行識蘊の我無我相も亦た得可からざるを宣說す。色蘊の淨不淨相得可からざるを宣說し受想行識蘊の淨不淨相も亦た得可からざるを宣說す。色蘊の遠離不遠離相得可からざるを宣說し受想行識蘊の遠離不遠離相も亦た得可からざるを宣說す。色蘊の寂靜不寂靜相得可からざるを宣說し受想行識蘊の寂靜不寂靜相も亦た得可からざるを宣說す。無數の如來應正等覺、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に眼處の常無常相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意處の常無常相も亦た得可からざるを宣說す。眼處の樂無樂相得可からざるを宣說し耳鼻舌身意處の樂無樂相も亦た得可からざるを宣說す。眼處の我無我相得可からざるを宣

【二】菩薩の宿善力による諸相を明す。

【三】以下佛威神力を以て東方無量殑伽沙等の世界の無數の如來應正等覺の種々に方便して有情を饒益するを見せしむ。

情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて[一五]眞如法界法性不虚妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虚空界不思議界を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて空無相無願解脱門を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて、種種の方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて或は[一六]八解脱[一七]八勝處或は[一八]九次第定或は[一九]十遍處を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて[二〇]淨觀地種性地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて[二一]極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて、種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて或は五眼或は六神通を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて或は陀羅尼門或は三摩地門を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の

【一五】眞如等。眞如乃至不思議界は法性十二異名。實相、空そのものを示す。

【一六】八解脱。八背捨ともいふ。八種の解脱觀。この觀によりて無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じ羅漢果をさとるが故に解脱といふ。

【一七】八勝處。八解脱を修して後、觀心純熟して、轉變自在に淨不淨の境を觀ずるものの八種。

【一八】九次第定。三界九定次第して進趣する定なり。

【一九】十遍處。觀法の對境をすべて地水火風等を觀じ、一切處に遍滿して餘す所無からしむる十種の觀法。

【二〇】淨觀地等。淨觀地乃至如來地を三乘共十地とす、三乘を共通して立てし十地なり。

【二一】極喜地等。極喜地乃至法雲地を大乘菩薩不共の十地とす。華嚴仁王等の諸大乘經の所說で大乘菩薩の十地。

便して慇懃に少分の有情を勸誨し彼れをして發心して聲聞果に趣かしめ、精勤して聲聞乘の行を修學せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百、或は復た乃至千踰繕那若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨し彼れをして發心して獨覺果に趣かしめ、精勤して獨覺乘の行を修學せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百、或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨し彼れをして發心して無上果に趣かしめ、精勤して無上乘の行を修學せしむるを見る。佛の神力の故に、[三]復た東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵隨喜し勸めて或は四靜慮或は四無量或は四無色定を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて或は四念住或は四正斷或は四神足或は五根或は五力或は七等覺支或は八聖道支を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有情を化度せんと欲するが爲に神通力を以て一世界に往き、或は十或は百或は千或は萬、乃至或は無量世界に往き、其の所に至るに隨ひて種種に方便して示現教導讃勵慶喜し勸めて[四]内空外空内外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空を修學せしむ。無數の菩薩、少分の有

【三】續いて東方世界の無數の菩薩の少分の有情化度の法を詳說す。

【四】内空―勝義空は二十空中の基なり、内空は主觀の根識心の實在を斥く、外空は六外處の客觀、色、物を空ず、内外空は唯心唯物のみならず、内外空にて主客物心二元論をも否定す、空空は空智空にて空なりと否定する智をも空ず、大空は四大六大等の元素を實有ならずとす。勝義空は此等の現象世俗に對する本體第一義的實在を空ずるなり。

の無數の菩薩轉輪王と作りて菩薩道を行じ、無數の菩薩天帝釋と作りて菩薩道を行じ、無數の菩薩覩史多天に生じ諸の天衆と爲りて種種の妙法を說き、無數の菩薩彼の天より沒し母胎に來入して有情類を化し、無數の菩薩初めて生れて卽ち能く諸の有情の爲に微妙の法を說き、無數の菩薩諸の有情を拔濟せんと欲するが爲の故に種種の苦を受くるを見る。[七]佛の神力の故に復た東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百[八]踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して少分の有情を慶懃勸誨して漸く[九]十善業道を受持せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨し彼れをして[一〇]佛法僧寶に歸依せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百或は復た乃至千踰繕那若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨して漸く[一一]八近住戒を受持せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百、或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨して漸く[一二]五近事戒を受持せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百、或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方便して慇懃に少分の有情を勸誨し彼れをして諸の出家戒を受持せしむ。無數の菩薩少分の有情を化度せんと欲するが爲に足を以て地を履むこと百踰繕那、或は足もて地を履むこと二百三百四百五百、或は復た乃至千踰繕那、若しは復た此れに過ぐるも隨て其の所に至り種種に方

【七】更に東方世界の菩薩の少分の有情化度を明す。

【八】踰繕那(Yojana)。由旬に同じ、印度の里數の名。八俱盧舍(Krośa)を一踰繕那となす。四十里又は三十里に當るといふ。

【九】不殺等の十善を行はしむ。

【一〇】三歸を行はしむ。

【一一】布薩日に一日夜の八齋戒を行ふの類なり。

【一二】優婆塞、優婆夷の保つ五戒。

爲に說きたまへと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、若し諸の菩薩最初に發心すれば阿羅漢を超え一切世間の天人阿素洛等の妙供養を受くるに應ずるが故なり。若し諸の菩薩第二に發心すれば獨覺地を超え普ねく一切の我空法空所顯の平等の[四]眞法界を覺るが故なり。若し諸の菩薩不退地に住すれば未受記不定の菩薩を超えて定んで當に大菩提を證得すべきが故なり。煩惱の爲に心を間雜せざるが故なり。若し諸の菩薩菩提座に坐すれば起たずして定んで一切智智を得ん。諸の菩薩菩提座に坐して若し未だ一切智智を證得せずば處無くして、斯の座より起つを容るすこと無きを以ての故なり。又た舍利子、過去未來現在の菩薩は菩提座に坐し定んで未だ一切智智を得ずんば其の中間に於て茲の座より起つ者無し。又た舍利子、汝等應に知るべし、若し時に菩薩菩提座に坐せば卽ち是れ如來菩提座に坐せるなりと。所以は何ん、是の如き菩薩は定めて無上正等菩提を證し、號づけて如來應正等覺と爲し、如實に諸の有情を利樂するが故なり。

[五]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力の故に卽ち東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩菩提座に坐し、無數の菩薩大菩提を證し、無數の菩薩正信心を以て出でゝ非家に趣きて菩薩行を修し、無數の菩薩無染心を以て現に居家に處して菩薩行を修するを見る。佛の神力の故に復た東方無量殑伽沙等の世界の無數の菩薩能く種種の捨て難き珍寶を捨てゝ諸の有情に施し、無數の菩薩自身の首を斬りで諸の有情に施し、無數の菩薩鼻を劓り耳を割きて諸の有情に施し、無數の菩薩足を削り手を截ちて諸の有情に施し、無數の菩薩身を刺し血を出して諸の有情に施し、無數の菩薩骨を析き髓を出して諸の有情に施し、無數の菩薩支節を分辯して諸の有情に施し、無數の菩薩愛せる妻子を捨てゝ諸の有情に施し、無數の菩薩上田宅を捨てゝ諸の有情に施し、無數の菩薩象馬等の種種の禽獸を捨てて諸の有情に施し、無數の菩薩諸の奴婢僮僕作使を捨てゝ諸の有情に施し、無數の菩薩妙なる飮食衣服臥具種種の財物を捨てゝ諸の有情に施すを見る。佛の神力の故に[六]復た東方無量殑伽沙等の世界

【四】眞法界。人法二空所顯の大空界たり、眞に障礙なく生くる自由の境地なり。

【五】舍利子等佛の神力に依り東方世界の菩薩の菩薩道を行じて有情化度を爲し大施を爲すを見ることを明す。又これ本生說話と交涉すること×す。

【六】菩薩の上天下天を述ぶ。

を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝上方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩、大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の上方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩疾く一切智智を證得して未來際を窮むるまで有情を利樂せんと欲せば應に法空を觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して貧匱の苦を受くべし。應に布施波羅蜜多を行じ、此の善根を持て普ねく一切に施して惡趣生死の衆苦より脫せしめ是の願を作して言ふべし、我が善根功德の威力に由りて未だ無上菩提の心を發さざる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智を圓滿せしめんと。

卷の第五百八十二

第十一布施波羅蜜多分の四

[一] 爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩は [二] 最初に發心し、云何が菩薩は [三] 第二に發心し、云何が菩薩は不退地に住し、云何が菩薩は菩提座に坐するや。唯だ願くは世尊、哀愍して

【一】菩薩の發心、不退、成佛を說く。
【二】最初發心　趣大乘心の第一に聲聞羅漢を超越す。
【三】第二發心　第二には獨覺自度を超越す。

殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩、各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飮食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の知く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝下方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の下方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

〔四〕時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た上方百千世界を見、是の如く乃至復た上方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飮食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施

【四】十に上方世界菩薩の施を明す。

り善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の西北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

[一二]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東北方百千世界を見、是の如く乃至復た東北方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飮食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し。汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の東北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

[一三]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た下方百千世界を見、是の如く乃至復た下方無數

【一二】八に東北方世界菩薩の施を明す。

【一三】九に下方世界菩薩の施を明す。

の如く施を行ずるに染著する所無くして晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝西南方百千世界是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩、心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩、大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所説の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の西南方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

○時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た西北方百千世界を見、是の如く乃至復た西北方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝西北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩、心に染著する所無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩、大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大な

【二】七に西北方世界菩薩の施を明す。

無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東南方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩、心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩、大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば彼の東南方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た西南方百千世界を見、是の如く乃至復た西南方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無くして晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是

【一〇】六に西南方世界の施を明す。

布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所説の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の西方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

八 時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た北方百千世界を見、是の如く乃至復た北方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨つて皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩、心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と、佛言はく、菩薩、大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所説の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の北方百千世界、是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

九 時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東南方百千世界を見、是の如く乃至復た東南方

【八】四に北方世界菩薩の施を明す。

【九】五に東南方世界菩薩の施を明す。

施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝南方百千世界是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の南方百千世界是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

[七] 時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た西方百千世界を見、是の如く乃至復た西方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを、施の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝西方百千世界是の如く乃至無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の

【七】三に西方世界菩薩の施を明す。

時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所等し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し、爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば彼の東方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し。千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

[六] 時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た南方百千世界を見、是の如く乃至復た南方無數殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを、諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類は自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く

【六】二に南方世界菩薩の施を明す。

見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の東方千殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東方百千殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを、諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方百千殑伽沙數の世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば彼の東方百千殑伽沙數の世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方百殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し、若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し有情を愍念して隨て施す所有らば彼の東方百殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆佛の神力を承けて復た東方千殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを、諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方千殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩、心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、

世尊、廣大なり善逝、彼の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の東方殑伽沙等の諸佛世界の一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東方十殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飮食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すも心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方十殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば彼の東方十殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東方百殑伽沙數の如き世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てて一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の

物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すも心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるに染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方百千世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、彼の諸の菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。若し菩薩有りて法空なりと觀じ一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して隨て施す所有らば、彼の東方百千世界の一一の世界の無量菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

時に舍利子及び諸の大衆佛の神力を承けて復た東方殑伽沙等の諸佛世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施するを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すも心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く、晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方殑伽沙等の諸佛世界に一一の世界の無量の菩薩心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、彼の諸の菩薩の施は廣大なりや不やと。舍利子曰はく、廣大なり

るを、諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積聚せる衣服臥具飲食等の物の量各山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く、晝夜に精勤して常に厭倦無し。時に舍利子及び諸の大衆一切復た無礙菩薩の七寶もて百千の金車を莊飾せるを見る。是の一一の車に一女寶の形貌端正にして種種に莊嚴せるを載せ、一一の女寶に百女侍從せり。各一車の衆寶もて嚴飾せるに乘れり。一一の車上に百千金を置き及び諸の資緣具足せざる無きを市肆に置き高聲に唱へて言はく、誰れか須ふる者有らば意に隨て將ひ去れよと。是の如く施を行ずるも染著する所無く、晝夜に精勤して常に厭倦無し。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝東方に無礙菩薩の心に染著無くして施を行ずるを見るや不やと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、見已んぬ世尊、見已んぬ善逝と。佛言はく、菩薩の大菩提を求むるには皆應に是の如く布施を修行すべし。又た舍利子、意に於て云何、無礙菩薩の施は廣大なるや不やと。舍利子曰はく、廣大なり世尊、廣大なり善逝、無礙菩薩の布施の善根は量邊際無しと。佛言はく、是の如し。汝が所說の如し。若し菩薩有りて能く法空なりと觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念し隨て施す所有らば彼の東方無礙菩薩の獲る所の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

[五] 時に舍利子、及び諸の大衆、佛の神力を承けて復た東方百千世界に一一の世界の無量の菩薩各所有を捨てゝ一切に布施せるを見る。珍寶聚を積むこと其の量山の如くなるを諸の有情の須つ所に隨て皆施し、有情類に自ら受用せんことを勸め已て復た轉じて他に施すに心に礙ふる所無し。是の如く施を行ずるも染著する所無く晝夜に精勤して常に厭倦無し。是の如く積集せる衣服臥具飲食等の

【五】以下更に舍利子等佛の神力を承けて東方世界無量の菩薩の施を見ることを重說す。

薩摩訶薩は菩薩の數に入り、一切を捨つと雖も而かも捨つる所無く、一切を得と雖も而かも得る所無し。若し諸の菩薩是の如く如實に了知すること能はずんば眞の菩薩に非ず、諸の財法に於て捨施すること能はず、大菩提に於て證得すること能はずと。

[三]爾の時舍利子、滿慈子に問ふて言はく、諸の菩薩摩訶薩は何等の心を以て應に布施を行ずべきと。滿慈子言はく、唯舍利子、先に我れ等が爲に是の義を解說せしも我れ此の義に於て亦た當に少しく說くべしと。時に舍利子、具壽滿慈子に謂て言はく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば是の菩薩摩訶薩は先に應に一切の法性畢竟空寂なりと思惟すべし。次に應に一切智智は勝功德を具すと思惟すべし。後に應に一切の有情貧にして珍財に乏しく諸の苦惱を受くるを愍念すべし。是の念を作し已て便ち一切を捨てて若しは受に執する有り若しは受に執する無き若しは內若しは外所有る珍財を諸の有情に施して心著する所無く亦た正法を以て諸の有情に施し、亦た無邊上妙の供具を以て佛法僧寶に恭敬供養せよ。是の如き菩薩摩訶薩衆は布施を行ずる時一切智を緣じ心著する所無くして應に布施を行ずべし。是の如き布施は菩提に隨順して疾く能く一切智智を證得し諸の有情の與に大饒益を作さんと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。諸の菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に法空を觀じ、一切智を緣じて勝功德を具し、有情を愍念して布施を行じて心著する所無かるべし。若し能く是の如く布施を修行せば疾く無上正等菩提を證して諸の有情の與に大饒益を作さん。又た舍利子、汝今十方世界の菩薩の施を見んと欲するや不やと。舍利子言はく、唯然、見んと欲すと。[四]時に舍利子及び諸の大衆、佛の神力を承けて便ち東方百世界を過ぎて大蘊如來應正等覺の聲聞菩薩の大衆に圍遶せられて布施波羅蜜多を宣說し勝功德を具して能く大果を獲せしむるを見る。彼れに菩薩有り、名づけて無礙と曰ふ。居家に處すと雖も、而かも著する所無く、諸の所有を捨て一切に布施し、珍寶聚を積むこと其の量山の如くな

【三】無上菩提を證得せんと欲する菩薩の布施行を明す。

【四】舍利子等佛の神力を承けて東方世界無礙菩薩の施を見る。

して實に死生無し。誰れか復た誰れに於て憂喜を生ず可けんと。佛言はく、是の如し。汝が所說の如し。諸の菩薩衆も亦復た是の如し。布施を行ずる時捨つる無く損する無く、當に無上正等覺を證すべき時得る無く益する無し。是の故に菩薩は布施を行ずる時捨づる所有りと雖も而かも憂を生ぜず、當に無上正等覺を證すべき時も所得有りと雖も而かも亦た喜び無し。捨得する所は幻化の如しと知るが故に。

又た滿慈子、意に於て云何、汝、如來は諸の善法に於て大欲有りと謂ふや不やと。滿慈子言はく不なり世尊、不なり善逝、何を以ての故に、如來の所證の諸法は皆空、如來の能證の諸法も亦た空にして空の中には都て欲所欲無きが故なりと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。如來は一切法空なりと觀見するが故に、善法の中にても亦た大欲無し、我れ今一切法に於て都て欲心無きが如く皆菩薩たりし時布施を行ぜしと雖も而かも諸法に於て都て捨つる所無かりき。諸法畢竟空なりと了達せしが故に。諸佛世尊は一切法に於て愛無く恚無し。所以は何ん、諸法は皆實有に非ずして本性空寂なりと通達し愛恚斷ずるが故なり。

〔二〕時に滿慈子、便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸の菩薩摩訶薩如如に法に於て能く捨つる所有らば是の如く是の如く皆空にして虛妄不實、性堅固ならず、自在の用無しと了達して執著する所無し。我れ佛の所說の義を解する如くんば諸の菩薩摩訶薩は殑伽沙數の世界に盛り滿てる珍寶を以て諸の有情に施すと雖も而かも其の中に於て是の念を作さず、我れ能く爾所の珍寶を捨施すと。其の中に於て執著する所無しと雖も而かも布施波羅蜜多をして疾く圓滿することを得せしむ。是の如き菩薩は能く布施の集むる所の善根を以て有情と共に無上正等菩提に廻向す。是の事を作し已て是の如き念を起す、菩薩の法は應に一切皆捨つべし。我れ今捨つべき所の物を捨つと雖も而かも捨つる所の物無きこと皆幻化の如しと。若し菩薩摩訶薩能く是の如く知らば是の菩

【二】菩薩の法を說いて眞の菩薩を明す。

時一切法に於て都て損する所無きが如く是の如く菩薩當に無上正等覺を證すべき時も一切法に於て亦た益する所無し。損益二門相待立するが故に。又た滿慈子、諸の菩薩布施を行ずる時一切法は皆幻化の如く實に捨つ可き無しと知るが如く、是の如く菩薩當に無上正等覺を證すべき時も一切法亦た幻化の如く實に得可き無しと知る。若し諸の菩薩布施を行ずる時一切法に於て實に捨つる所有らば是の諸の菩薩當に無上正等覺を證すべき時も亦た應に法に於て實に得る所有るべし。然るに諸の菩薩は布施を行ずる時一切法に於て實に捨つる所無し。是の故に菩薩當に無上正等覺を證すべき時一切法に於て實に得る所無し。

又た滿慈子、二幻師の戲れに文易を爲すに一は價直を幻じ一は美團を化するも此の中の二事は倶に實有に非ざるが如く、是の如く菩薩の布施を行ずる時は幻化の如き實有に非ざる物を捨てて常に無上正等覺を證すべき時幻化の如き實有に非ざる法を得。是の諸の菩薩は布施する時實に損する所無きが如く、當に無上正等覺を證すべき時も亦た實益無し。是の諸の菩薩は布施を行ずる時損すること有るに似たりと雖も而かも實に損する無く、當に無上正等覺を證すべき時益すること有るに似たりと雖も而かも實に益する無し。彼の幻師の幻の價直を捨つるは損すること有るに似たりと雖も而かも實に損すること無きが如く、是の如く菩薩布施を行ずる時實に非ざる物を捨つるは損すること有るに似たりと雖も而かも實に損する無し。彼の幻師の化の美團を得るは益すること有るに似たりと雖も而かも實に益する無きが如く、是の如く菩薩當に無上正等覺を證すべき時益すること有るに似たりと雖も而かも實に益する無し。是の如き法は因果相稱ふに喩ふ。諸の智有らん者は應に正しく了知すべし。又た滿慈子、巧なる幻師或は彼の弟子四衢道に在りて女人を化作して忽ち懷孕を現じ尋いで子を生むを見はす。其の子俄爾として便ち復た命終せんに、意に於て云何、彼の女は子の生ずる時に於て喜び有り死するに憂ひ有る耶と。滿慈子言はく、彼の女及び子は倶に是れ幻有に

幻化は我及び我所に非ざるが故に、一切事に於て皆能く棄捨す。所以は何ん、我我所の事は旣に得可からず執著すべからざればなり。執著無きが故に皆能く棄捨す。能く棄捨するに由りて佛世尊の所說の正法に於て深く愛樂を生じて謂ゆる是の念を作さん、希有なり世尊、善く諸法は皆幻化の如しと說きたまふ。我れ佛の敎に依りて一切能く捨つ。謂ゆる能く幻化の如き法を棄捨し我れをして當に幻の如き無相の無上菩提を得せしめたまふと。是の諸の菩薩は是の如き念を作す、諸佛世尊は能く作し難きを作したまふ。謂ゆる菩薩をして、如實に、諸法は非有にして皆幻化の如しと了知せしめたまふ。了知するに由るが故に執著を生ぜず。少しく功力を用ひて能く一切を捨てて疾く無上正等菩提を證すと。是の故に菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に是の如く諸法は非有にして皆幻化の如しと知りて衆相を捨離し、無相の心を以て頂の如き一切智智を勤求すべし。汝滿慈子、我れ是の如き法要を說くは是れ自らの辯才なりと謂ふこと勿れ。此れ皆如來威神の力なりと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、今舍利子の諸の所說有るは皆佛の神力なり。汝應に受持すべし。我が涅槃の後も當に廣く流布すべしと。

卷の第五百八十一

第十一　布施波羅蜜多分の三

[一]爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、若し一切法皆實有に非ずんば諸の菩薩衆の布施を行ずる時何をか捨つる所と爲すと。佛言はく、菩薩は布施を行ずる時都て捨つる所無しと。時に滿慈子、復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩布施を行ずる時都て捨つる所無くんば是の諸の菩薩當に無上正等覺を證すべき時何をか得る所と爲すと。佛言はく、菩薩は布施の時一切法に於て都て捨つる所無きが如く當に無上正等覺を證すべき時も一切法に於て亦た得る所無し。菩薩衆の布施を行ずる

【一】一切法實有に非ずして幻化の如くなれば菩薩は布施を行ずるに無捨、無損、無上菩提を證する時無得、無益なることを明す。

す。欲界に於て遠離不遠離の相を取らず、色無色界に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。欲界に於て寂靜不寂靜の相を取らず、色無色界に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。若し諸の菩薩能く是の如き方便善巧を作して法相を取らずして布施波羅蜜多を修行せば是の諸の菩薩は頂に居る諸の菩薩の數に入ることを得、能く頂の如き一切智智を得るなり。

〔三〕又た滿慈子、若し諸の菩薩一切法は皆實有に非ずと知り衆相を遠離して布施波羅蜜多を行ぜば、是の諸の菩薩は頂に居る諸の菩薩の數に入ることを得、能く頂の如き一切智智を得、亦た能く一切の有情を教化し是の如き一切智智に依りて發願趣求し亦た能く證得せしむ。又た滿慈子、若し諸の有情無相の法に於て勝解を起さずんば則ち一切智の心を發すこと能はず。若し一切智の心を發すこと能はずんば則ち諸の菩薩行を修すること能はず。若し諸の菩薩行を修すること能はずんば則ち一切智智を得ること能はず。若し諸の有情無相の法に於て能く勝解を起さば則ち能く一切智の心を發起せん。若し能く一切智の心を發起せば則ち能く諸の菩薩行を修行せん。若し能く諸の菩薩行を修行せば則ち能く一切智智を證得せん。又た滿慈子、若し諸の菩薩發心して一切智を趣求し已らば捨つる所の事に隨て皆能く空無所有なりと了知して布施波羅蜜多を行ぜん。謂ゆる如實に諸の捨つる所の事は皆幻化の如く我等の如きに非ずと知りて、無始の時より來た取れる所の諸相を能く知るに由るが故に、諸の所有に於て皆能く棄捨して諸相を取らざらん。諸の有情類は如實に諸法は非有にして皆幻化の如しと知らざるが故に諸事に於て堅き執著を起す。堅く執著するに由りて棄捨すること能はず。棄捨せざるに由りて慳悋を攝受す。慳悋に由るが故に身壞命終して諸の惡趣に墮して貧窮の苦を受け、所得有るに隨て棄捨すること能はず。復た其の中に於て慳悋を增長す。斯れに由りて復た諸の惡趣の中に墮して種種の苦を受く。是の如く苦を受くるは皆相を取るに由る。若し諸の菩薩方便善巧して法は非有にして皆幻化の如しと知らんに、既に幻化の如くんば皆應に棄捨すべし。

〔三〕無上菩提を證得せんと欲せば諸法の非有如幻なるを知りて衆相を捨離し、無相の心を以て頂の如き一切智化を勸求すべきを說く。

て樂無樂の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た樂無常の相を取らず。地界に於て我無我の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た我無我の相を取らず。地界に於て淨不淨の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た淨不淨の相を取らず。地界に於て遠離不遠離の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。地界に於て寂靜不寂靜の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は因緣に於て常無常の相を取らず、等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た常無常の相を取らず。因緣に於て樂無樂の相を取らず、等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た樂無樂の相を取らず、因緣に於て我無我の相を取らず、等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た我無我の相を取らず。因緣に於て淨不淨の相を取らず、等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た淨不淨の相を取らず。因緣に於て遠離不遠離の相を取らず。等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。因緣に於て寂靜不寂靜の相を取らず、等無間緣所緣緣增上緣に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は無明に於て常無常の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た常無常の相を取らず。無明に於て樂無樂の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た樂無樂の相を取らず。無明に於て我無我の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た我無我の相を取らず。無明に於て淨不淨の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た淨不淨の相を取らず。無明に於て遠離不遠離の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。無明に於て寂靜不寂靜の相を取らず、行識名色六處觸受愛取有生老死に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は欲界に於て常無常の相を取らず、色無色界に於ても亦た常無常の相を取らず。欲界に於て樂無樂の相を取らず、色無色界に於ても亦た樂無樂の相を取らず。欲界に於て我無我の相を取らず、色無色界に於ても亦た我無我の相を取らず。欲界に於て淨不淨の相を取らず、色無色界に於ても亦た淨不淨の相を取ら

眼識界に於て樂無樂の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た樂無樂の相を取らず。眼識界に於て我無我の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た我無我の相を取らず。眼識界に於て淨不淨の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た淨不淨の相を取らず。眼識界に於て遠離不遠離の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。眼識界に於て寂靜不寂靜の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は眼觸に於て常無常の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た常無常の相を取らず。眼觸に於て樂無樂の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た樂無樂の相を取らず。眼觸に於て我無我の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た我無我の相を取らず。眼觸に於て淨不淨の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た淨不淨の相を取らず。眼觸に於て遠離不遠離の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。眼觸に於て寂靜不寂靜の相を取らず、耳鼻舌身意觸に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て常無常の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た常無常の相を取らず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て樂無樂の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た樂無樂の相を取らず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て我無我の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た我無我の相を取らず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て淨不淨の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た淨不淨の相を取らず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て遠離不遠離の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。眼觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於て寂靜不寂靜の相を取らず、耳鼻舌身意觸に縁ぜられて生ずる所の諸受に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は地界に於て常無常の相を取らず、水火風空識界に於ても亦た常無常の相を取らず。地界に於

を取らず。眼處に於て淨不淨の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た淨不淨の相を取らず。眼處に於て遠離不遠離の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。眼處に於て寂靜不寂靜の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は色處に於て常無常の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た常無常の相を取らず。色處に於て樂無樂の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た樂無樂の相を取らず。色處に於て我無我の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た我無我の相を取らず。色處に於て淨不淨の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た淨不淨の相を取らず。色處に於て遠離不遠離の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。色處に於て寂靜不寂靜の相を取らず、聲香味觸法處に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は眼界に於て常無常の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た常無常の相を取らず。眼界に於て樂無樂の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た樂無樂の相を取らず。眼界に於て我無我の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た我無我の相を取らず。眼界に於て淨不淨の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た淨不淨の相を取らず。眼界に於て遠離不遠離の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。眼界に於て寂靜不寂靜の相を取らず、耳鼻舌身意界に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は色界に於て常無常の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た常無常の相を取らず。色界に於て樂無樂の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た樂無樂の相を取らず。色界に於て我無我の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た我無我の相を取らず。色界に於て淨不淨の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た淨不淨の相を取らず。色界に於て遠離不遠離の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。色界に於て寂靜不寂靜の相を取らず、聲香味觸法界に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は眼識界に於て常無常の相を取らず、耳鼻舌身意識界に於ても亦た常無常の相を取らず。

らず、無邊上妙の飲食衣服臥具病に縁る醫藥房舍資財花香等の物を想ひて奉施し供養すと雖も而かも相を取らず、能く無上菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲すと雖も而かも相を取らずんば、此れに由りて一切智智を證得し未來際を窮むるまで有情を饒益せん。當に知るべし名づけて無上利を得と爲すと。一切の利に於て最も爲れ第一なり。若し諸の菩薩能く是の如き方便善巧を作して布施を修行せば乃ち名づけて頂に居る菩薩と爲すことを得。決定して當に一切智智を得べし。所以は何ん、一切智智は甚だ得可きこと難きも、是の如き菩薩は能く内外一切種の相を捨てて心に著する所無くして是の如き一切智智を證せんことを求め、諸の菩薩に於て最も上首と爲りて當に頂の如き無上菩提を得べければなり。過去未來現在の菩薩の[二]已當現に一切智智を得るは皆是の如くして起す所の方便善巧に由りて能く證得せざる無しと。

時に滿慈子、便ち具壽舍利子に問ふて言はく、云何が菩薩は[三]頂に居る諸の菩薩の數に入ることを得るやと。舍利子言はく、若し諸の菩薩方便善巧して法相を取らずんば是の諸の菩薩は頂に居る諸の菩薩の數に入ることを得と。滿慈子言はく、是の諸の菩薩は何等の法に於て何の相を取らざるやと。舍利子言はく、是の諸の菩薩は色蘊に於て常無常の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た常無常の相を取らず。色蘊に於て樂無樂の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た樂無樂の相を取らず。色蘊に於て我無我の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た我無我の相を取らず。色蘊に於て淨不淨の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た淨不淨の相を取らず。色蘊に於て遠離不遠離の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た遠離不遠離の相を取らず。色蘊に於て寂靜不寂靜の相を取らず、受想行識蘊に於ても亦た寂靜不寂靜の相を取らず。是の諸の菩薩は眼處に於て常無常の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た常無常の相を取らず。眼處に於て樂無樂の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た樂無樂の相を取らず、眼處に於て我無我の相を取らず、耳鼻舌身意處に於ても亦た我無我の相

【二】已當現。過去・未來・現在。

【三】頂に居る菩薩の取らざる法相を廣く說明す。

金銀等の寶を捨つれば乃ち名づけて能く大利を得と爲す可し。若し諸の菩薩能く衆相を捨てて無上正等菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば乃ち能く無上の善利を得と名づく。若し諸の菩薩轉輪王と作りて四洲界を統し大自在を得ば利を得と名づくと雖も而かも未だ名づけて能く大利を得と爲さず。若し諸の菩薩四洲界の轉輪王の位を捨てなば乃ち名づけて能く大利を得と爲す可し。若し諸の菩薩能く衆相を捨てて無上正等菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば乃ち能く無上の善利を得と名づく。若し諸の菩薩欲界の王と作りて欲界を統攝し大自在を得ば利を得と名づくと雖も而かも未だ名づけて能く大利を得と爲さず。若し諸の菩薩能く欲界の自在の王位を捨てなば乃ち名づけて能く大利を得と爲す可し。若し諸の菩薩能く衆相を捨てて無上正等菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば乃ち能く無上の善利を得と名づく。若し諸の有情衆相を棄捨して預流果或は一來果或は不還果或は阿羅漢果或は獨覺菩提を得ば利を得と名づくと雖も而かも未だ名づけて能く大利を得と爲さず。若し諸の有情衆相を棄捨し無上正等菩提に廻向して有情の爲に大饒益を爲さんと欲せば乃ち能く無上の善利を得と名づく。若し無上正等菩提を得ば諸利の中に於て最上最勝にして能く及ぶ者無し。所以は何ん、諸の菩薩衆の求むる所の無上正等菩提は能く有情の爲に大饒益を作すも聲聞獨覺及び諸の異生は此の事無きが故なり。若し諸の菩薩普ねく十方一切の如來應正等覺及び弟子衆の想を緣じ種種上妙の飲食衣服臥具病に緣る醫藥房舍資財花香等の物を作りて奉施し供養せんに利を得と名づくと雖も而かも未だ名づけて無上利を得と爲さず。若し諸の菩薩能く衆相を捨てて無上正等菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば乃ち能く無上の善利を得と名づく。所以は何ん、飲食等の物は皆衆相有り、諸の有相の法は皆數量有り、數量有る法は分限有るが故に、彼れに緣りて分限無き一切智智を證すること能はず。若し諸の菩薩方便善巧して、十方界の一切の如來應正等覺及び弟子衆の無量種希有の功德を具せるを緣ずるも而かも相を取

ること無し。諸の阿羅漢の若しは智若しは心も菩薩乘に於て亦た恩德有り、謂ゆる若し彼れ無くんば則ち遮る所無し、云何が諸の菩薩衆は阿羅漢の心を發起すべからず亦た阿羅漢の智を修すべからずと言ふ可けん。彼れを遮るに由るが故に菩薩は菩提の資糧を引發して速に圓滿することを得て疾く能く一切智智を證得す。故に阿羅漢の若しは智若しは心も菩薩乘に於て亦た恩德有り、謂ゆる菩薩をして一切智を得て未來際を窮むるまで有情を利樂せしむ。一切の獨覺の若しは智若しは心も菩薩乘に於て亦た恩德有り、謂ゆる若し彼れ無くんば則ち遮る所無し。云何が諸の菩薩衆は獨覺乘の心を發起すべからず亦た獨覺乘の智を修すべからずと言ふ可けん。彼れを遮るに由るが故に菩薩は菩提の資糧を引發して速に圓滿することを得て疾く能く一切智智を證得す。故に諸の獨覺の若しは智若しは心も菩薩乘に於て亦た恩德有り、謂ゆる菩薩をして一切智を得て未來際を窮むるまで有情を利樂せしむ。又た二乘の心智下劣なりと觀ずる菩薩は增上の心智を修學し、若し二乘の下劣の心智無き菩薩は增上を修すべからざる者なり。說の如き菩薩の若しは心若しは智の有漏無漏は、唯だ如來應正等覺の若しは心若しは智を除きて、餘の一切に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上無等無等等爲り。是の故に一切の聲聞獨覺の若しは智若しは心も一切智に於て亦た少分隨順の勢力有り。是の如く菩薩は方便善巧して諸の有情及び一切法を觀ずるに一切智及び此の資糧に於て皆隨順の勢力有らざること無し。故に一切に於て心厭捨無し。

〔一〇〕

又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩布施波羅蜜多を修行するに珍財等の事を棄捨すること有りと雖も而かも彼の事に於て取相の想無し、謂ゆる若し一切の法相を棄捨して無上正等菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば便ち能く一切智智を證得せん。若し相を捨てずして菩提に廻向し有情の爲に大饒益を作さんと欲せば終に一切智智を得ること能はさらん。若し諸の菩薩能く種種金銀等の寶を獲ば利を得と名づくと雖も而かも未だ名づけて能く大利を得と爲さず。若し諸の菩薩能く種種

【一〇】菩薩の能く大利を得る所以を明す。

た能く菩薩を教授教誡して勤めて淨觀地種性地第八地具見地薄地離欲地已辨地獨覺地菩薩地如來地を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて陀羅尼門三摩地門を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて五眼六神通を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて三十二大士相八十隨好を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて無忘失法恒住捨性を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて一切智道相智一切相智を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて一切の菩薩摩訶薩行を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授教誡して勤めて諸佛の無上正等菩提を修學せしむ。是の故に聲聞も一切智及び此の資糧に於て亦た助くる力有り。若し諸の獨覺能く福田と爲りて菩薩の施を受けん。謂ゆる諸の菩薩は彼の福田を緣じて資身の具を施して無上正等菩提に廻向せん。是の故に獨覺も一切智及び此の資糧に於て亦た助くる力有り。然れども諸の聲聞獨覺の作意は一切智及び此の資糧に於て倶に助くる力無し。所以は何ん、聲聞獨覺相應の作意は二乘地に於ては勝助力有るも諸の菩薩の求むる所の無上正等菩提及び此の資糧に於ては極めて隨順せざるなり。謂ゆる生死を厭ひ般涅槃を欣びて大菩提及び有情類を捨つるが故なり。菩薩に定めて獨覺聲聞相應の作意を起すべからずと制するは、彼の作意は諸の菩薩の求むる所の佛果、益する所の有情に於て倶に隨順せざるに由る。

[九] 又た滿慈子、諸の聲聞乘は諸の菩薩摩訶薩衆の求むる所の無上正等菩提に於て大恩德有り、謂ゆる菩薩摩訶薩衆の爲に一切の波羅蜜多及び餘の勝行相應の敎法を宣說し教授教誡して勤め修學して速に圓滿することを得せしむ。亦た菩薩の與に淨福田と作り菩薩の施を受けて諸の菩薩をして疾く菩提の資糧を圓滿することを得せしむ。此れに由りて聲聞は諸の菩薩に於て大恩德有り。是の故に菩薩は方便善巧して諸の有情及び一切法を觀ずるに一切智及び此の資糧に於て皆隨順の恩德有らざ

【九】聲聞獨覺の智心も亦一切智に於て少分隨順の勢力有ることを明す。

菩提に於て障礙と爲ると雖も而かも能く菩提の資糧を引くに於て能く助くる力有り。是の故に菩薩は乃至未だ妙菩提の座に坐せざるまでは永く滅除せず、若し菩提を得れば一切頓斷す。若し有情類、菩薩の所に至りて先には極めて訶毀せるも後財法を乞はば菩薩爾の時歡喜して施與し是の如き念を作さん、今此の有情は我が所に來至して大恩德を施し我れをして布施安忍を成就せしめ、斯れに由りて一切智智を證得せしむ。我れ彼れに緣るが故に增上心を發して大菩提に趣き餘の境界に勝ると。是れに由りて菩薩は諸の作意の中唯だ二乘相應の作意のみを除き諸の餘の作意は皆厭捨せず。一切智智を證得するに於て皆助伴の力有らざる無きを以てなり。

[八] 時に滿慈子、便ち具壽舍利子に問ふて言はく、豈に二乘も一切智に於て亦た助くる力有らざらんや。謂ゆる諸の聲聞も亦た能く菩薩を教授敎誡し勸めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を修學せしめん。若し諸の獨覺も亦た福田と爲り諸の菩薩衆彼れに衣食を施さば疾く能く一切智智を證得せん。云何が聲聞獨覺相應の作意は一切智及び此の資糧に於て能く助くる力無しと言ふ可けんと。時に舍利子卽ち具壽滿慈子に報へて言はく、是の如し是の如し、聲聞獨覺は一切智及び此の資糧に於て倶に助くる力有り。謂ゆる諸の聲聞も亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて內空外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて四靜慮四無量四無色定を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて八解脫八勝處九次第定十遍處を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて空無相無願解脫門を修學せしめ、亦た能く菩薩を教授敎誡して勸めて極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地を修學せしめ、亦

【八】聲聞及び獨覺は共に一切智及び此の資糧に於て助くる力あるも、聲聞獨覺相應の作意はこれ無きことを明す。

は後有身に順ひ諸の菩薩を助けて無上正等菩提を引發す。未だ菩提を證せずんば斷ずるを求むべからず、乃至未だ妙菩提の座に坐せずんば此の作意に於て永く滅すべからず。

是の故に菩薩摩訶薩衆若し煩惱を起して現在前する時は中に於て極めて厭惡を生ずべからず。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩衆は諸の煩惱に於て有恩の想を起して是の思惟を作せばなり。我れ彼れに由るが故に種種菩提の資糧を引發して速に圓滿せしむ。故に彼れは我れに於て大恩德有り。所以は何ん、餘の善法我れに於て益有らば應に之を愛重すべきが如く煩惱も亦た然なり、厭惡すべからずと。是の如く菩薩は方便善巧して諸の煩惱及び彼の境界に於て亦た深く愛敬すること佛世尊の如くす。所以は何ん、是の諸の菩薩は方便善巧して是の思惟を作せばなり。諸の[六]有結未だ永く斷ぜざるに由るが故に我れ能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を修行して皆圓滿することを得、斯れに因りて一切智智を引發すと。若時若時に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法の修漸く圓滿せば爾の時爾の時諸の有結をして展轉して微薄乃至都盡して便ち無上正等菩提を證せしむ。譬へば商人の車を以て種種の財寶を重載して遠く大城に趣くに、若時若時に其の車運轉して漸漸に前進せば爾の時爾の時轂輞軸等漸漸に[七]鈋鋭し是の如く展轉して大城に入るを得て車遂に一時に衆分散壞するも爲す所既に辦ぜば主顧惜する無きが如く、是の如く菩薩方便善巧して結を以て所依の有身を攝受するに、若時若時に結に由りて有身を攝受して相續せば爾の時爾の時布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法漸次に圓滿し、若時若時に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法漸次に圓滿せば爾の時爾の時諸の有結をして漸次に衰減せしめ、若時若時に諸の有結をして漸次に衰減せしめば爾の時爾の時漸く一切智智に隣近することを得、若し時に菩薩大菩提を證せば爾の時所依の身結俱に盡き、所作已に辦じて身結を須たざること已に城に入れる車の復た用ふる無きが如くならん。是の如く煩惱は大

【六】有結。二十五有の結果を生ずる原因たる煩惱をいふ。

【七】鈋鋭　車軸や輪がすり減るを云ふ。

菩薩彼れに於て應に之を遠避して是の思惟を作すべし。二乘の作意は一切智に違ひ般涅槃に順ふ。我が心彼れに間雜せらるべからずと。是の故に菩薩は應に是の念を作すべし、貪瞋癡等相應の心は大菩提に於て障礙と爲ると雖も而かも能く菩提に隨順する資糧にして菩薩の心に於ては極めて間雜すること獨覺聲聞地を求むる心の如きに非ず。所以は何ん、貪瞋癡等は能く生死諸有をして相續せしめ、諸の菩薩を助けて一切智を引けばなり。謂ゆる菩薩衆は方便善巧して諸の煩惱を起して後有身を受け諸の有情の與に大饒益を作し、之に依りて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて四靜慮四無量四無色定を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて空無相無願解脫門を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて陀羅尼門三摩地門を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて諸の菩薩地五眼六神通を修學して圓滿することを得せしめ、之に依りて如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨及び十八佛不共法等の無量無邊の諸佛の功德を修學して圓滿することを得せしむればなり。是の如く煩惱は能く菩薩を助けて無上正等菩提を證せしむ。諸の聲聞獨覺の作意に非ず。彼の作意は大菩提を障へ亦た資糧を礙ふるに由りて圓滿せざらしむ。是の故に菩薩摩訶薩衆彼の作意を起して心に間雜する時は無上菩提は則ち更らに遠しと爲す。是の故に諸の菩薩の心に間雜するは聲聞獨覺の作意に如く無し。諸の菩薩衆大菩提を求めんには應に之を遠避して暫くも起らしむること無かるべし。煩惱の作意は諸の有身に順ひ菩薩の心に於て極めて間雜するに非ず。何を以ての故に、滿慈子、諸の菩薩衆は大菩提を求め有情を度せんが爲に精進の鎧を被、生死に久住して大饒益を作し速に煩惱の作意を斷ずべからざればなり。此の作意現在前する時は諸の有身をして長時相續せしむるに由り、之に依りて布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を引攝して皆圓滿することを得。是の如く煩惱相應の作意

最後[三]金剛喩定の將に現在前するまで中間にて曾て異心間雜する無く、唯だ一切智智を引發するを求むるのみ。彼の金師自命を惜むが故に乃至嚴具未だ總べて成ずるを得ざるまでは其の中間に於て曾て異想の間雜すること無く莊嚴具を營造する心のみなるが如く、菩薩も亦た然なり、菩提を重んずるが故に乃至未だ無上菩提を證せざるまでは心常に一切智智を思惟して餘の作意中間に於て起ること無し。此れを齊りて名づけて心間雜無しと爲す。

若し諸の菩薩一切智を求めて能く是の如き間雜無き心に住し精進修行して菩提行に趣かば能く速に菩提の資糧を圓滿せん。餘の菩薩衆は無數劫を經て間雜有る心もて菩薩行を修して乃ち無上正等菩提の資糧圓滿することを得るも、此の菩薩衆は百劫を經ずして卽ち能く圓滿す。何を以ての故に、滿慈子、是の諸の菩薩は一切智を求むるに諸餘の作意暫くも起りて中に於て大菩提の心に間雜するを容るゝ無ければなり。故に雜心無くして菩薩行を修するに百劫を經ずして卽ち能く圓滿して無上菩提の資糧を證得す、間雜有る心は多時相續するも菩提の資糧を成辦すること能はず、間雜無き心は少時相續するも卽ち能く菩提の資糧を成辦す。刹那刹那に常に增進するが故なり。是の如く菩薩無上正等菩提を求めて能く資糧を引きて速に圓滿せんと欲せば、應に勤め方便して[四]無倒に間雜無き心を引發すべし。若し此の心を得ば則ち一切智智を證得するに易からんと。

[五]爾の時滿慈子、舍利子に問ふて言はく、間雜無き心は何を以て性と爲し、何等の作意能く心に間雜し、彼此の心間雜有りと名づくるに由り諸の菩薩衆は云何が之を避くるやと。舍利子言はく、若し諸の菩薩方便善巧して一切智を求め、餘の作意中に於て間雜する無くんば、無間雜心、此れを以て性と爲す。若しは聲聞乘相應の作意、若しは獨覺乘相應の作意は皆能く大菩提の心に間雜す。倶に菩薩の非理の作意と名づく。所以は何ん、二乘の作意は無上正等菩提を違害すればなり。若し彼の心を起して現在前する者は菩提の資糧を圓滿すること能はず。涅槃を欣樂して生死に厭背するは

【三】金剛喩定、根本煩惱の根をも拔除する大決定心を云ふ、その强きを金剛に喩ふるなり。

【四】無倒。事理を顚倒するは凡夫の通見なり、この顚倒を離れたる正見を無倒といふ。

【五】二乘の作意は無上菩提を違害するも煩惱の作意は能く菩薩をして無上菩提を證得せしむる助伴となることを詳說す。

樂安隱の國土に至ることを得べきかと。諸の菩薩衆も亦復た是の如し。若し常に一切智智のみを思惟せば諸の餘の作意起ることを得ることを容るゝ無し。是の諸の菩薩身意淸淨にして餘心の間雜する所と爲らず。

又た滿慈子、譬へば人有り曾て劫盜を行ひ王に訪括せらるれば、其の人惶恐し竊に市鄽に入り雜鬧の處に於て自ら藏隱せんと欲するに正しく其の中にて鈴を搖がし鼓を聲らし王の敎令を宣べて相掩捉せんと欲するに値はゞ、彼の人爾の時更らに餘想無く唯だ是の念のみを作すが如し、我れ今時に他に識知せられて檢縶せらるゝ勿れと。諸の菩薩衆も亦復た是の如し、無上正等菩提を證せんと欲して若し常に一切智智を思惟せば諸の餘の作意間起するを容るゝ無し。是の諸の菩薩は修行時に於て餘心の間雜する所と爲らず。

又た滿慈子、譬へば金師百金を持ち來りて其の手に授け語りて言ふ有らん、此の物は王遣はして汝に付して種種の妙莊嚴具を造らしむるなり。宜しく急ぎ用意して一月にして成ぜしむべし。期の如く成ぜず或は復た麁惡ならば當に汝の首を斬り定めて相赦さゞるべしと。金師聞き已て身心戰怖し晝夜精勤し思を竭して營造し未だ曾て暫くも諸餘の作意を起さず唯だ是の念のみを作す、我れ當に云何してか王の期する所の如き嚴具成辦すべきと。其の人は乃至嚴具未だ成ぜざるまでは中間にて飮食等の事有りと雖も而かも都て飮食等の想を作さず、但だ金所に於て心心相續し思惟變易して莊嚴具のみを作らん。何を以ての故に、滿慈子、彼れは極めて自らの身命を愛重するが故なり。是に於て金師期の如く妙莊嚴具を成辦し持ちて王の所に至り而かも王に白して言さく、王の遣はしたまひし所の妙莊嚴具を作り今已に總べて成れりと。王見て歡喜し彼れを慰喩して言はく、汝大いに勤勞して能く我が勅に隨ひ、十二月にして營構して乃ち成すべきを汝一月の中にて卽ち能く總べて辦ぜりと。遂に多物を以て賞して之れに賜はんが如し。諸の菩薩衆も亦復た是の如し、初發心より乃至

初中後心皆能く一切智を引きて無上正等菩提を證得せざる無し。要らず諸心展轉相續するに由りて障法を伏斷して方に成辦するが故に。又た滿慈子、若し諸の菩薩疾く無上菩提を證得せんと欲せば心をして間雜する所有らしむべからずと。[二]時に滿慈子、具壽舍利子に問ふて言はく、齊しく何をか名づけて諸の菩薩衆の心間雜無しと爲すやと。舍利子言はく、若し諸の菩薩非理の作意現在前する時は能く正しく此れは能く一切智智に隨順し違逆を爲すに非ずと觀察す。此の諸の菩薩は、能く如實に、我が今起す所の非理の作意は一切智に於て能く助伴と爲ると知らん、謂ゆる我が今起す所の非理の作意は能く有身を引き生死に於て相續久住せしめて有情を饒益す、我れ若し身に非理の作意の資け引きて住せしむる無くんば、卽便ち斷滅して尙ほ自行をして圓滿せしむるすら能はず、豈に能く他の諸の有情を饒益せんや。此れを齊りて名づけて諸の菩薩衆の心間雜無しと爲す。又た滿慈子、若し諸の菩薩能く諸法の若しは順若しは違を觀ぜば皆能く一切智智を助引せん。此の諸の菩薩は方便善巧して一切を觀ずるに皆能く所求の無上正等菩提に隨順し、順違の心の間雜する所と爲らず。能く違境に於ても心に瞋を生ぜず、順境の中に於ても心に愛を起こさず、若しは違若しは順皆能く正しく知り、資助の緣と爲して一切智を引かん。是の如き菩薩は一切時一切境の中に於て心に間雜無し。

又た滿慈子、譬へば人有り他の囚と爲り執へられて將に殺處に詣らんとするに、其の人惶怖して更らに餘想無く唯だ是の念のみを作すが如し、我れ今久しからずして定めて當に他の殺害する所と爲るべしと。諸の菩薩衆も亦復た是の如し、若し常に一切智智のみを思惟せば餘の作意中間に於て起る無し。是の諸の菩薩は一切時に於て餘心の間雜する所と爲らず。

又た滿慈子、譬へば人有り多く珍財を齎して曠野に入るに、其の中多く凶暴劫賊あり、彼の人爾の時更に餘想無く唯是の念のみを作すが如し。我れ何の時に於て當に斯の如き險難の處を出で、豐

【二】菩薩無上菩提を證得せんには無間に間雜無き心を引發すべきを喩說す。

一切智智相應の作意を遠離せずして布施波羅蜜多を修行せば、是の菩薩摩訶薩は便ち能く無量の福蘊を攝受して疾く無上正等菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作さん。何を以ての故に、滿慈子、若し諸の菩薩常に一切智智相應の作意を遠離せずして布施波羅蜜多を修行せば是の諸の菩薩は刹那刹那に功德善根漸漸に增長し、斯れに由りて疾く無上菩提を證し能く盡未來まで一切を利樂すればなり。是の故に菩薩、有情の與に常に利益安樂の事を作さんと欲せば一切行の中にて常に勤めて方便善巧を修習し無上正等菩提に廻向して有情の與に大饒益を作さんと願ふべし。

卷の第五百八十

第十一　布施波羅蜜多分の二

【一】復た次に滿慈子、菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば一切行の中にて最初に應に無染布施波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、滿慈子、若し布施波羅蜜多を學せば無始の世より來た習ひし所の慳垢卽便ち遠離し、身心相續して漸く能く一切智智に親近すればなり。是の故に菩薩若時若時に一切智智相應の作意相續して現前せば、爾の時爾の時漸次に能く一切智智に近づかん。若時若時に漸次に能く一切智智に近づかば、爾の時爾の時漸く聲聞及び獨覺地に遠ざからん。若時若時に漸く聲聞及び獨覺地に遠ざからば、爾の時爾の時漸く復た一切智智に鄰近せん。又た滿慈子、天より雨ふる時瓮を迥處に置きて水を承くるに漸く滿つ、是の如く滿つる時は諸の雨渧の長時連注するに由り、唯だ初後のみに匪ざるが如く、是の如く菩薩の一切智を求むるは初心起りて卽ち能く證得するに非ず亦た後時菩提座に坐し最後心起りて獨り能く證得するに非ず、然かも初心より相續して乃至菩提座に坐し最後心起るまで展轉して相資くるに由りて一切智を得るなり。一切智を求むるは

【一】無染布施波羅蜜漸熟を明す。

者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめん。此の諸の菩薩若時若時に已れの善根を捨して有情類に施さば、爾の時爾の時善根轉た盛ならば、爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近せん。是の如き菩薩は方便善巧して所求の一切智智に廻向して諸の功德をして漸漸に增長せしめ、疾く無上正等菩提を證して能く盡未來まで一切を饒益せん。

〔四〇〕又た滿慈子、云何が菩薩は多く布施を行じて少福を攝受し、云何が菩薩は少しく布施を行じて多福を攝受し、云何が菩薩は少しく布施を行じて少福を攝受し、云何が菩薩は多く布施を行じて多福を攝受するや。若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て恒に無量無數の珍財を捨して普ねく十方の諸の有情類に施すと雖も、而かも無上菩提に廻向して有情と皆同じく一切智智を證得せんと願はずんば是の如き菩薩は多く布施を行ずるも少福を攝受せんのみ。若し諸の菩薩少時を經て有情類に少分の財物を施すと雖も、而かも能く無上菩提に廻向して有情と皆同じく一切智智を證得せんと願はば、是の如き菩薩は少しく布施を行ずるも多福を攝受せん。若し諸の菩薩少時を經て有情類に少分の財物を施して無上菩提に廻向して有情と皆同じく一切智智を證得せんと願ふこと能はずんば是の如き菩薩は少しく布施を行じて少福を攝受せんのみ。若し諸の菩薩殑伽沙數の大劫を經て恒に無量無數の珍財を捨して普ねく十方の諸の有情類に施し、復た能く無上菩提に廻向し有情と皆同じく一切智智を證得せんと願はば、是の如き菩薩は多く布施を行じて多福を攝受せん。是の故に菩薩摩訶薩衆無上正等菩提を證せんと欲せば應に善根を以て有情と共に無上正等菩提に廻向して有情と皆同じく一切智智を證得せんと願ふべし。

〔四一〕若し菩薩摩訶薩能く無量の福蘊を攝受し諸の有情の與に大饒益を作し疾く能く一切智智を證得せんと欲せば、常に應に一切智智相應を離れずして布施波羅蜜多を修行すべし。若し菩薩摩訶薩常に

【四〇】菩薩の行ずる布施と依つて獲る所の福との多少の關係を明す。

【四一】有情饒益せんとする菩薩の作願に就て明す。

羅蜜多を攝受し既に神通を得て多く財寶を集め、來り求むる者に施して所願を滿たしむるは布施波羅蜜多を攝受す。是の如きを名づけて諸の菩薩衆布施波羅蜜多を修行し廣大の心を發して常に厭惓無しと爲す。斯れに由りて疾く無上菩提を證し能く盡未來まで一切を利樂す。

[三九]又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は應に有情を愍みて布施を行ずべし。應に慈心に住し有情に樂を與へて布施を行ずべし。應に悲心に住し有情の苦を拔きて布施を行ずべし。應に喜心に住し有情の苦を離れ樂を得るを慶びて布施を行ずべし。應に捨心に住し有情類に於て平等に饒益して布施を行ずべし。是の如く施し已て應に是の心を生ずべし、我が所作の福及び所作の善を普ねく十方の諸の有情類に施して永く惡趣生死より解脫せしめ、未だ無上菩提の心を發さざる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を證得せしめんと。是の諸の菩薩若時若時に福善根を捨して有情類に施さば、此の諸の菩薩は爾の時爾の時善根增長せん。是の諸の菩薩若時若時に修する所の善を以て有情と共に無上正等菩提に廻向して同じく一切智智を證得せんと願はば此の諸の菩薩は爾の時爾の時善根增益せん。又た滿慈子、譬へば眞金を若時若時に鎔煉し燒打せば、爾の時爾の時光色轉た盛ならん、若時若時に光色轉た盛ならば、爾の時爾の時展轉して調柔にしに器具と爲すに堪ふるが如く、是の如く菩薩若時若時に所作の善を以て有情と共に無上正等菩提に廻向して同じく一切智智を證得せんことを願はば、爾の時爾の時善根轉た盛ならん、若時若時に善根轉た盛ならば爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近せん。

又た滿慈子、女人有りて鏡面を磨瑩するに若時若時に功を加へて磨瑩せば、爾の時爾の時鏡轉た明淨ならん。若時若時に鏡轉た明淨ならば爾の時爾の時鏡面垢無くして衆像皆現はるるが如く、是の如く菩薩若時若時に所作の福及び所作の善を以て決定して一切智智に廻向せば、爾の時爾の時能く普ねく十方世界一切の有情に施與して永く惡趣生死より解脫せしめ、未だ無上菩提の心を發さざる

【三九】菩薩能く一切を饒益する所以を明す。

の資具を施し、或は自ら師長病者に供侍し、作る所の福業は皆有情と平等に共有して無上正等菩提に廻向し、盡未來まで一切を利樂して惡趣或は生死の苦を脫せしめ、涅槃或は一切智を得せしめんと欲す。若し諸の有情自ら布施を行じて餘の福業を修せんに、菩薩彼れに無上正等菩提に廻向せんことを勸めば、是の如き菩薩の獲る所の福聚は餘の有情の布施の福業よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲す。所以は何ん、菩薩は廻向の心を勸發して能く自身及び有情類をして倶に無上正等菩提を證せしむればなり。

又た滿慈子、諸の菩薩衆布施波羅蜜多を修行せんには先に應に方便善巧を修習し、修習する所の方便善巧に隨て布施を修行し、修行する所の布施福業に隨て無上正等菩提に廻向して諸の有情の皆同じく一切智智を證得せんことを願ふべし。是の如き菩薩の方便善巧は能く自他をして倶に勝利を獲せしむ。若し諸の菩薩布施を修行するに先に方便善巧を修習せずんば設ひ殑伽沙數の劫を經て住して布施を修行するも發心して有情と共に菩提に廻向すること能はず、修する所の布施波羅蜜多を攝受すること能はず、本希求する所の一切智智を證得すること能はざらん。

又た滿慈子、設ひ諸の有情廣大の器の量三千大千世界に等しきを持ちて菩薩の所に至り菩薩に語て言はん、我れ等今此の器物に滿たさんことを須ゆ、願くは疾く施與したまへと。菩薩は彼れに於て異心を起さずして但だ是の心を起すのみ、定めて當に施與すべしと。謂ゆる終に瞋恨の心を起さず。是の如き有情我れを輕觸するも亦復た施與せざる心を起さず、謂ゆる我れ如何して彼れに多物を施さんと。亦復た財寶無き心を起さず、謂ゆる我れ云何してか能く爾許の種種の財寶を辦じて彼の有情の持てる所の量大千界に等しき器に滿さんと。但だ是の念を作すのみ、我れ今彼れの爲に勝神通を修し種種に方便して諸の財寶を集め、必ず求むる者をして所願滿足せしめんと。菩薩爾の時熾然として精進して大加行を作し勝神通を求め珍財を集めて來り求むる者に施さんと欲す。精進波

後に於て若し如來の所有る戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫智見蘊を念ぜば彼の有情類は此の因緣に由りて惡趣に墮せず天人の中に生じて恒に快樂を受け、或は三乘涅槃を證得する有りて能く自他をして畢竟安樂ならしむ。彼の有情類は現身の中に於て人非人等も害を爲すこと能はず、諸の怖畏の事も侵惱する能はず。何を以ての故に、滿慈子、佛の功德を念ずれば能く世間人非人等の怖畏の事を滅するが故なりと。

〔三五〕爾の時佛、舍利子を讚めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し、若し有情類能く如來の所有る戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫智見蘊を念ずれば、彼の有情類は能く世間人非人等の諸の怖畏の事を滅せんと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、如來は是の如き清淨廣大の妙法を成就したまへりと。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、應に知るべし菩薩も亦た是の如き清淨廣大の妙法を成就する有りと。舍利子言はく、何をか菩薩の成ずる所の清淨廣大の妙法と謂ふやと。佛言はく、菩薩の成ずる所の〔三六〕清淨廣大の妙法とは無上正等覺の心を發して復た退轉せざるを謂ふ。何を以ての故に、舍利子、最極清淨廣大の妙法とは如來性、自然覺性、無上正等菩提の性を謂へばなり。若し諸の菩薩已に無上正等覺の心を發して復た退轉せずんば定めて當に是の如き清淨廣大の妙法を成就すべしと。

〔三七〕時に舍利子、復た具壽滿慈子に告げて言はく、諸の菩薩衆は應に是の心を起すべし、若し諸の有情我が所に來至して種種の資生の具を求索せば我れ當に決定施の心を發起すべく、〔三八〕無資具の心を發起すべからず、設ひ我れ現に索むる所の資具無からんも要らず當に方便し求覓して施與すべしと。終に是の如きの心を發起せず、我れ既に現に索むる所の資具無く方便するも彼れの爲に求覓すべからずと。若し餘の有情自ら彼れに施さば我れ當に隨喜すべく、若し施すを欲せずんば我れ當に種種に方便して勸發し、要らず求むる者をして所願滿足せしむべし。是の如き菩薩は或は有情に須つ所

【三五】佛舍利子を讚し菩薩の成ずる所の清淨廣大の妙法を說く。

【三六】廣大の妙法とは不退の無上菩提心なり、又その最極は如來性自然覺性なり。

【三七】舍利子再び滿慈子に對して菩薩の布施の大行を說く。

【三八】無資具の心　資財なしとせず、所有して無しと斷ざるばかりでなく、有せざるも求め覓めて之を與ふべしとする決定施心に伴ふ心情なり。

行じて菩薩位に住するにすら尚ほ能く無量の有情を利樂す、況んや菩提を得たるにも般涅槃して後も、大勢力を具して諸の弟子等をして利益安樂ならしむること能はざらんや。

又た滿慈子、是の如く菩薩は常に能く一切の有情を利樂す、謂ゆる菩薩の位なるも若しは正覺を成ずるも若しは般涅槃するも常に有情に於て大饒益を作して未だ曾て暫くも捨てず。善士有りて善士相を具し能く自ら安樂にして亦た能く諸餘の有情をも安樂ならしめ、善く珍財を攝して善能く分布するが故に善士と名づくるが如く、是の如く菩薩は善く種種の功德珍財を攝し、菩薩位に在るも善能く無量の有情を利樂し、無上正等覺を證得する時も亦た善く無量の有情を利樂し、般涅槃して後も亦た能く無量の有情を利樂す、謂ゆる涅槃後の功德勢力も亦た善く諸の弟子等を利樂するなり。

又た滿慈子、是の如く菩薩は若しは菩薩の位なるも若しは菩提を得るも若しは涅槃して復も常に能く一切の有情を利樂し時として暫くも捨つる無し。彼の善士の善士相を具し能く自他をして倶に安樂なることを得、種種不如意の事を遠離せしむるが如く、諸の菩薩衆も亦復た是の如く、能く自他をして常に安樂なることを得種種の惡業煩惱を遠離し、惡趣生死輪廻に墮せず、般涅槃を得て畢竟安樂に、或は正覺を成じて一切を饒益せしむ。

又た滿慈子、剎帝利灌頂王種の王位を紹ぐに堪ふるが如し、若しは太子と爲るも若しは王と作れる時も一切の沙門梵志及び餘の有情を安樂ならしめ、若しは命終して後も亦た能く國土有情を安樂にし衰惱無からしむ。謂ゆる彼の王の功德の餘勢に由りて國土豐樂にして怨賊等無し。是の如く菩薩は菩提行を行じて菩薩位に住するも已に能く一切の有情を安樂ならしめ、無上正等覺を證得する時も亦た能く一切の有情を安樂ならしめ、般涅槃して後も亦た能く一切の有情を安樂ならしむ。謂ゆる涅槃後も無量の有情、窣堵波有らば供養恭敬尊重讃歎して無量の福を獲、正法を聽聞して受持讀誦し理の如く思惟し他の爲に演説するも亦た無邊の功德勝利を得。諸の有情類は佛世尊の般涅槃

ふ。是の如き菩薩は菩薩位に住し諸の有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す。無上正等覺を證得せん時も亦た有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す。般涅槃して後も亦た有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す。諸の菩薩は常に有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育するを以ての故に世間に於て最尊最勝なり。唯だ諸佛の能く及ぶ者無きのみを除く。

〔三四〕又た滿慈子、若し諸の菩薩、是の如き殊勝の功德を成就せば是の諸の菩薩は常に有情に於て大饒益を作さん。譬へば眞金の常に能く一切の有情を饒益するが如し。謂ゆる未だ燒煉せざると、或は已に燒煉して未だ嚴具と作さゞると已に嚴具と作して、若しは未だ轉易せず或は已に轉易せるとも、常に能く一切の有情を饒益す。是の如く菩薩は菩提行を修して菩薩位に住するにも能く有情に於て大饒益を作し、無上正等覺を證得する時も亦た有情に於て大饒益を作し、般涅槃して後も亦た有情に於て大饒益を作す。

又た滿慈子、日月輪の四洲界を巡りて諸の有情の與に大饒益を作すが如く、謂ゆる四洲界の一切有情は日月輪の光明の照觸するに由りて諸の事業を作し、又た能く若しは晝若しは夜、半月滿月、時年等の異りを了知し、又た諸の華果苗稼草木は日月輪の光明の照らすに因るが故に生長成熟して有情を養ふに資す。是の如く菩薩は菩提行を修して菩薩位に住するにも諸の有情に於て大饒益を作し、無上正等覺を證得する時も亦た有情に於て大饒益を作し、般涅槃して後も亦た有情に於て大饒益を作す。

又た滿慈子、諸の菩薩衆は是の如き廣大の功德を成就して常に有情の與に大饒益を作す。譬へば商主の多く珍財有りて能く百千の商侶眷屬をして皆諸の資生の具を充足することを得せしめ、乃至死後までも諸の有情類彼の珍財に由りて亦た豐樂なることを得るが如く、是の如く菩薩は菩提行を

【三四】舍利子更に上述の意を種々の比喩を以て說く。

知せざる無く能く盡未來まで一切を利樂す。

[29] 又た滿慈子、諸の菩薩衆は應に是の如く清淨の布施波羅蜜多を學すべし。若し諸の菩薩能く是の如く清淨の布施波羅蜜多を學せば乃ち名づけて眞淨の菩薩と爲すことを得、常に一切智の心を遠離せず。若し時として菩薩常に一切智の心を遠離せずんば是の時菩薩は一切の惡魔すら尙ほ便りを得ること能はず、況んや餘の藥叉、[30]畢舍遮等能く其の便りを得んや。若し諸の有情能く是の如き菩薩の便りを得んとは必ず是の處無し。所以は何ん、若し地方所に諸の菩薩有りて布施波羅蜜多を修行し、一切智智を作意し思惟し時として暫くも捨つる無くんば此の地方所の人及び非人は皆便りを得ず。何を以ての故に、滿慈子、若し常に一切智智を思惟せば是の如き作意は思議す可からず廣大甚深にして世間希有なればなり。一切智は思議す可からず廣大甚深にして測量し難きを以ての故に。

[31] 又た滿慈子、若し諸の菩薩能く是の如く大菩提行を學せば諸の有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す、謂ゆる世間の諸の有情類をして諸の災難無く惡を斷じて善を修せしむ。此の因緣に由りて諸の菩薩衆は菩薩位に在りて常に能く一切の[32]異生聲聞獨覺を利樂す。若し諸の菩薩當に無上正等覺を證すべき時も亦た有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す、謂ゆる正法を說いて煩惱を斷ぜしむるなり。斯れに由りて無量無邊の有情皆涅槃を得て畢竟安樂なり。是の故に菩薩の當に無上正等覺を證すべき時は普ねく異生聲聞獨覺に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上無等無等等爲り。般涅槃して後も亦た有情に於て大恩德有りて能善く一切の有情を養育す。謂ゆる如來[33]窣堵波の所に於て供養恭敬尊重讚歎し、種種上妙の華鬘、塗散等の香、衣服瓔珞、寶幢幡蓋、伎樂燈明を奉施せば、此の因緣に由りて彼の有情類は無量殊勝の善根を種植し、或は如來涅槃の法要を聞き精勤修學して般涅槃を證せん。若し如來の窣堵波の所に於て下一香一華を奉獻するに至るまでも世尊は彼れに皆當に欲を離れて多くは畢竟般涅槃を得る有るべしと記したま

【二九】 眞淨の菩薩は一切の惡魔便りを得ざることを明す。

【三〇】 畢舍遮(Piśāca)。鬼の異名、食肉鬼の名なり。

【三一】 大菩提行を學する菩薩の能く常に有情に於て大饒益を作すことを明す。常にとは菩薩位に住する時、無上正等覺證得の時、般涅槃後をいふ。

【三二】 異生。凡夫の異名。凡夫は六道に輪廻して種々別異の果報を受け、又、凡夫は種々に變異して邪見を生じ惡を作る故に異生といふ。

【三三】 窣堵波(Stūpa)。塔婆なり。骨を納めたる廟なり。

又た滿慈子、是の諸の菩薩若時若時に己れの善根に於て我所なりと執せずんば此の諸の菩薩は爾の時爾の時無量無邊の善根を攝受せん。所以は何ん、此の諸の菩薩は無量無邊の有情をして咸く疾く一切智智を證得せしめんと欲すればなり。是の如き菩薩は能く一切を捨し、他の善根に於てすら尙ほ能く迴捨して餘の無量無邊の有情に施す、況んや自らの善根にして而かも捨する能はざらんや。尙ほ能く所有る善根すら惠捨す、況んや餘の珍財にして而かも捨する能はざらんや。是の如き菩薩は能く一切の色非色の物を捨し、能く一切の自他の所有る殊勝の善根を捨し、乃至能く一切智智を捨して諸の有情に施して同じく證得せしむ。是の如き菩薩は大師子吼す、我れ諸法に於て都て見る所無く、我れ一切の有色無色內外の諸物に於ても亦た見る所無し、見る所無しと雖も、而かも皆能く捨するなりと。是の如き菩薩は是の念言を作す、我れ都て若しは法若しは物にして而かも諸の有情に捨施すること能はざるを見ずと。是の如き菩薩は當に無上正等覺を證すべき時證得せし所の一切智智を以て世間を觀察して大師子吼す。我れ諸法に於て都て見る所無し、我れ一切の有色無色內外の諸物に於ても亦た見る所無し。見る所無しと雖も而かも皆能く捨するなり。謂ゆる若しは法若しは物の諸の有情に於て而かも施すこと能はざる有るを見ずと。是の如き菩薩は常に是の念を作す、我れ當に無上覺を證得すべき時一切法に於て都て見る所無し。見る所無しと雖も、而かも諸法に於て現證せざる無く遍知せざる無し。諸の菩薩能く一切を捨するに由りて、是の故に無上覺を證得する時、一切法に於て能く究竟して捨するなり。捨するに由りて究竟して一切法に於て現證せざる無く遍知せざる無し。如如に法に於て捨せざる所無くんば是の如く是の如く都て法を見ず、如如に法に於て都て見る所無くんば是の如く是の如く一切法に於て現證せざる無く遍知せざる無しと。是の如き菩薩は若しは內若しは外皆悉く能く捨す。內外法に於て悉く能く捨するが故に都て見る所無し。諸法に於て見る所無きに由るが故に無上正等覺を證得する時一切法に於て現證せざる無く遍

【二八】如上の菩薩の大師子吼を說く。

又た滿慈子、設ひ十方界の一切有情、殑伽沙數の如き大劫に住し恒に種種上妙の供具を以て諸佛及び苾芻僧に奉施して供養恭敬尊重讃歎して諸の福業を修せんに、一りの菩薩有り一鉢の飯を持つて佛及び僧に施す其の福の彼れに勝ること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍ならん。所以は何ん、此の菩薩は[二六]施者を見ず受者を見ず施物を見ざるを以て諸法の本性皆空なりと觀ずと雖も、而かも施を行ずる時常に迴向發願を遠離せず、謂ゆる施の福を持つて有情と共に無上正等菩提に迴向して同じく一切智智を證得せんことを願ふ。是の故に菩薩の布施を行ずる時は諸の有情の行ずる所の施の福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。斯れに由りて定めて無上菩提を證して諸の有情類を利益安樂す。

[二七]又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩布施を修行せんには應に是の心を起すべし、我が今惠捨する是の如き財物と諸の引發する所の殊勝の善根とを普ねく十方の諸の有情類に施し、地獄に在る者は速に地獄を出でしめ、傍生に住せる者は速に傍生を脱せしめ、鬼界に居る者は速に鬼界を離れしめ、人天趣の中にて憂苦有る者は願くは彼の一切の憂苦永く息み、生死を厭ふ者は速に三界を出でしめ、十方無量無邊の有情の未だ無上菩提の心を發さゞる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんと。是の諸の菩薩若時若時に諸の善根を捨して有情類に施さば此の諸の菩薩は爾の時爾の時布施波羅蜜多を攝受せん。是の諸の菩薩若時若時に布施波羅蜜多を攝受せば此の諸の菩薩は爾の時爾の時一切の波羅蜜多を增長せん。是の諸の菩薩若時若時に一切の波羅蜜多を增長せば此の諸の菩薩は爾の時爾の時無量殊勝の善根を攝受せん。是の諸の菩薩若時若時に無量殊勝の善根を攝受せば此の諸の菩薩は爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近せん。是の如く菩薩の方便善巧は小しく功を用ふと雖も而かも多福を獲。是の故に菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば常に應に方便善巧を勤修すべし。

【二六】施者、受者、施物を見ず。之を三輪清淨と云ふ、三淨にして本性空なれども放任せず、迴向發願無限なり。

【二七】菩薩無上菩提を證得せんには方便善巧を勤修すべきを明す。

に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんと願ふべし。是の諸の菩薩若時若時に諸の善根を捨てゝ有情類に施さば此の諸の菩薩は爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近せん。是の諸の菩薩若時若時に已れの善根に於て我所なりと執せずんば此の諸の菩薩は爾の時爾の時能く善根を以て有情に廻施して皆苦を離れて永く安樂を得んことを願ふ。是の諸の菩薩若時若時に已れの善根を捨てゝ有情類に施さば此の諸の菩薩は爾の時爾の時菩提の資糧を修習せずと雖も而かも能く一切智智に鄰近せん。是の諸の菩薩若時若時に已れの善根に於て我所なりと執せず、十方界の一切有情に施して皆苦を離れて永く安樂を得んことを願はゞ、此の諸の菩薩は爾の時爾の時善根增進し無上正等菩提に鄰近して能く疾く一切智智を證得せん。是の諸の菩薩若時若時に已れの善根に於て我所なりと執せずんば、此の諸の菩薩は爾の時爾の時無量殊勝の善根を攝受せん。何を以ての故に、滿慈子、此の菩薩の心境は分限無く廻向して一切智を證得せんとするが故なり。是の如き菩薩の隨喜俱心方便善巧は、隨喜して引く所の善根を持つて有情に廻施すと雖も、而かも善根及び有情類に於て都て執する所無し。有情の惡趣及び生死の苦より解脫せんことを願ふと雖も、而かも惡趣及び生死の苦に於て都て執する所無し。諸の有情類を攝受して無上正等覺の心を發さしめんと願ふと雖も、而かも發心に於て都て執する所無し。諸の有情類を攝受して無上正等菩提に於て永く退轉せざらしめんと願ふと雖も、而かも此の位に於て都て執する所無し。諸の有情類を攝受して菩薩行をして速に圓滿することを得て疾く能く一切智智を證得せしめんと願ふと雖も、而かも此の位に於て都て執する所無し。自ら一切智智を得と雖も、而かも此の智に於ても亦た執する所無し。[三五] 是の如き菩薩は執する所の見無し。當に知るべし、是れを方便善巧と爲すと。是の如き菩薩の隨喜廻向俱行の心は皆方便善巧有るが故に能く普ねく諸餘の菩薩摩訶薩衆を任持して殊勝の利益安樂を獲せしめ、及び自ら一切智智を攝受して疾く無上正等菩提を證す。

【三五】如是菩薩無所執見を善巧方便となす。

と。是の菩薩摩訶薩の隨喜の心に因りて生ずる所の福聚は十方界の一切有情の佛及び僧に施す所有る功德よりも百倍勝ると爲し千倍勝ると爲し乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。是の如き菩薩の隨喜の心は諸の世間の行ずる所の施の福に超ゆ。四洲界の所有る珠寶火藥等の光能く照曜すと雖も而かも彼の一切は皆月輪の發する所の光明の映奪する所と爲るが如く、是の如く十方の諸の有情類の行ずる所の施の福は無量無邊なりと雖も而かも菩薩の隨喜の心の引く所の善根の映奪する所と爲る。四洲界の所有る光明の皆日光の映奪する所と爲るが如く、是の如く十方の諸の有情類の行ずる所の施の福は皆菩薩の隨喜善根の映奪する所と爲る。

又た滿慈子、多く百千の[二三]迦遮末尼聚りて一處に在らんに種種雜色の光明有りと雖も若し一の[二四]吠琉璃寶を持つて其の聚の上に置く有らば彼の一切の雜色の光明をして悉く皆隱沒せしむるが如く、是の如く十方の諸の有情類、無量殑伽沙劫に住して恒に種種上妙の樂具を以て有情類に施し或は佛僧に施すと雖も而かも一菩薩の彼の福聚に於て隨喜の心を起して獲る所の功德は彼の福聚に勝ること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。又た滿慈子、多百千世間の凡馬集りて一處に在らんに輪王の馬寶若し其の中に入らば彼の一切の威光をして隱沒せしむるが如く、是の如く十方の諸の有情類無量殑伽沙劫に住し布施を修行して諸の善根を集むると雖も而かも一菩薩の彼の善根に於て深心に隨喜して獲る所の功德は彼の善根に勝ること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。是の如く菩薩の隨喜俱心は世間の施の福業事を映奪す。是の故に菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば諸の有情の所作の功德に於て應に深く隨喜すべし。

又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は應に起す所の隨喜心と俱なる諸の福業事を持つて十方界の一切有情に施して、彼の十方の諸の有情類皆永く惡趣、生死より解脫し、未だ無上菩提の心を發さゞる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已

【二三】迦遮末尼(Kācamaṇi)。玉の名。水精の類なり。
【二四】吠琉璃(Vaidūrya)。毘瑠璃、瑠璃に同じ。青色の寶石。

蜜多を修行して速に圓滿することを得亦た一切の波羅蜜多をして究竟し圓滿せしめて疾く無上正等菩提を證し能く盡未來まで一切を利樂せんと。

爾の時滿慈子、舍利子に問ふて言はく、尊者の說く所の是の如き法要は自らの辯才とや爲ん、佛力を承けたりや爲んと。舍利子言はく、我れ佛力を承けて是の法要を說く、自らの辯才に非ずと。

一九 時に舍利子復た具壽滿慈子に告げて言はく、假使ひ十方無量無數無邊世界の一切の有情、阿羅漢果を證得せんと欲するが爲に、殑伽沙數の如き大劫を經て諸の財物を以て或は無量無數の異生に施し、或は無量無數の聲聞に施し、或は無量無數の獨覺に施さんに彼れの獲る所の福は無量無數にして思議す可からず。菩薩摩訶薩有りて彼の布施を緣じて是の念を作さん、彼の諸の有情の獲る所の福聚は我れ皆隨喜すと。是の菩薩摩訶薩復た是の如き二〇隨喜俱行せる諸の福業事の所有る善根を持て普ねく十方の諸の有情類に施して彼の一切皆永く惡趣の生死より解脫し、未だ無上菩提の心を發さざる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんことを願はば是の菩薩摩訶薩は此の隨喜廻向の善根に由りて一切智智速に圓滿することを得ん。是の菩薩摩訶薩の所有る隨喜廻向の善根は前の有情の布施の福聚よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し乃至二一鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。是の如き菩薩の所有る隨喜廻向の心は世間の諸の有情類の行ずる所の施の福に超勝す。是れを菩薩の方便善巧と爲す。少しく巧を用ふと雖も而かも福は無量なり。

二二 又た滿慈子、假使ひ十方無量無數無邊世界の一切の有情殑伽沙數の如き大劫に住し恒に無量無邊の供具を以て諸佛及び苾芻僧に奉施せんに彼れ此の緣に由りて福を獲ること無量なり。菩薩摩訶薩有りて彼の福聚を緣じて深心に隨喜して是の念言を作さん。彼の十方界の諸の有情類は能く是の如き眞淨の福田に於て恭敬供養して身心惓むこと無し。善哉善哉、我れ彼の福に於て深く隨喜を生ず

【一九】菩薩の方便善巧を明す。有情の實行せる小乘心無邊なるも菩薩隨喜善の大福德に及ばず。

【二〇】隨喜は贊同する、俱行は共同實修する。

【二一】鄔波尼殺曇(Upanisad)近分にして梵語の算法。數の極なり。

【二二】舍利子更に方便善巧を喻說す。

の諸の菩薩若時若時に善根を攝受し展轉して增長せば此の諸の菩薩は爾の時爾の時一切の波羅蜜多を攝受す。此の諸の菩薩若時若時に一切の波羅蜜多を攝受せば此の諸の菩薩は爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近す。當に知るべし是の如き諸の菩薩衆は方便善巧して少物を施すと雖も、而かも無量の布施の善根を獲と。何を以ての故に、滿慈子、布施の心境分限無く廻向して一切智を證得せんとするを以ての故なり。

一八　又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は布施を修行して是の如き心を生ず、我れ善根を施すも餘の果を招く勿く、唯だ無上正等菩提のみを證して能く盡未來まで一切を利樂せんと。是の如く無上菩提に廻向して餘の果に非ずとは乃ち布施波羅蜜多の普ねく一切の波羅蜜多をして皆圓滿することを得せしむるに名づく。若し後心の一切智を緣じて無上正等菩提に廻向する無くんば布施を行ずと雖も而かも布施波羅蜜多に非ず、亦た餘の修習する所の波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしむる能はず、亦た一切智智を得ること能はず。又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩少しく布施すと雖も若し能く無上菩提に廻向せば當に知るべし、彼の施は其の量深廣なりと、定めて能く一切智を證得するが故に。諸の菩薩摩訶薩多く布施すと雖も若し無上菩提に廻向せずんば當に知るべし、彼の施は其の量淺狹なりと、一切智を證得すること能はざるが故に。又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩布施を修行するに後心を起して無上正等菩提に廻向せず亦た一切智智を緣ぜずんば是の菩薩摩訶薩は布施を行ずと雖も而かも布施波羅蜜多に非ず。能く生死を招き一切智に非ず。若し菩薩摩訶薩布施を修行するに能く後心を起して無上正等菩提に廻向し、亦復た一切智智を緣ぜば、是の菩薩摩訶薩の行ずる所の布施は名づけて布施波羅蜜多と爲す。生死を招かずして一切智を得るなり。

又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩布施を行ずと雖も而かも執著せず、能く無上菩提に廻向すと雖も亦た執著せず、能く一切智智を緣ずと雖も亦た執著せずんば是の菩薩摩訶薩は方便善巧して布施波羅

【一八】布施波羅蜜多の意を明す。布施の善根、餘果を招くなく唯無上菩提に廻向す。

を修行するは但だ如來の弟子と作らんことを求めんと欲するのみ。菩薩は然らず。是れ謂ゆる差別なりと。時に舍利子便ち具壽滿慈子を讃めて言はく、善能く一施の譬喩を辯說す、甚だ爲れ希有なり。謂ゆる諸の聲聞は巧方便無くして行ずる所の布施は聲聞の果を取る。若し諸の菩薩巧方便有らば行ずる所の布施は普ねく一切の有情を攝受して一切智を得ることを爲す。

[二五] 又た滿慈子、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば一切行の中にて應に先づ施を行じて是の如き念を作すべし、我が今造る所の此の惠施業を十方界の一切有情に施して永く惡趣の生死より解脫せしめ、未だ無上正等菩提の心を發さざる者は發心せしめ、已に無上正等菩提の心に發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんと。是の如き菩薩は外境を思惟して內心を離れず、諸の善根を攝し其れをして漸次に皆增長することを得せしむ。是の諸の菩薩若時若時に善根を攝受し護りて不退ならしむるに此の諸の菩薩は爾の時爾の時展轉して一切智智に鄰近す。是の諸の菩薩若時若時に漸く一切智智に鄰近することを得ば此の諸の菩薩は爾の時爾の時善根圓滿して無上正等菩提に趣向し能く盡未來まで一切を利樂せんと。

[二六] 又た滿慈子、諸の菩薩摩訶薩は布施を修行して是の思惟を作す。若し諸の有情、[二七] 眼の所照の處に、願くは彼の一切皆是の如き我が惠捨する所の飮食等の物を得ん、若し諸の有情我が施す所の飮食等の物を受けなば已れの須の所に隨て少分受用し、餘を持て轉じて他の諸の有情に施さむ、彼の諸の有情も少分受用せば復た持て轉じて諸の餘の有情に施さむ、是の如く展轉して有情界を盡くすまで皆同じく我が施す所の物を受用せん。我れ是の如き布施の因緣に由りて善根の量の邊際無きを攝受し、復た是の如き無量の善根を持て普ねく十方の諸の有情類に施して皆永く惡趣の生死より解脫せしめ、未だ無上菩提の心を發さざる者は速に發心せしめ、已に無上菩提の心を發せる者は永く不退ならしめ、若し無上正等菩提に於て已に不退なる者は速に一切智智を圓滿せしめんことをと。是

【二五】 菩薩の布施行に於ける作念を說く。

【二六】 菩薩の能く方便善巧して行ずる布施は少物と雖も無量の善根を獲ることを明す。

【二七】 眼所照處、眼界及ぶ限り一切の意。

じて勝果を求めんに彼れは施を行ずる時是の如き念を作さん、願くは我れ此れに由りて大國王と作り八方を統領して皆自在を得んと。彼れ此の願に隨て後王と爲りて世間を匡化し自在安樂なることを得。一は臣位を緣じて勝果を求めんに、彼れは施を行ずる時、是の如き念を作さん、願くは我れ此れに由りて大臣と作りて王に愛念委任驅策せられた王の欲する所に隨て皆能く成辦することを得んと。彼れ此の願に由りて終に王と爲らず。此の二人は倶に布施を行ずと雖も而かも所願に隨て果に勝劣有り。菩薩聲聞の施を行ずるも亦た爾なり。謂ゆる諸の菩薩は布施を行ずる時一切智智を緣じ大悲を上首と爲し修行する所を以て有情と共に無上正等菩提に廻向し、此れに由つて能く一切智智を得んとす。若し聲聞衆の布施を行ずる時は聲聞果を緣じて自ら解脫を求めて無上正等菩提を求めず。菩薩と聲聞と倶に施を行ずと雖も、而かも意願に隨て果に勝劣有り、一は施に由るが故に一切智智を得、一は施に由るが故に聲聞果を得。是れ謂ゆる差別なり。又た滿慈子、譬へば人有り布施を修行して長者と作り或は居士と作らんことを求め、復た一人有りて布施を修行して長者居士の僮僕と爲らんことを願ふが如し。當に知るべし菩薩聲聞の施を行ずる勝劣の意願も亦復た是の如しと。

〔四〕爾の時滿慈子、舍利子を讚めて言はく、說く所の譬喩は甚だ爲れ希有なり。善能く二施の差別を開顯せり。我れも亦た當に二施の譬喩を說くべし。謂ゆる人有り百千の寶を持て巨富者のもとに詣りて是の如き言を作さん、今此の物を以て仁者に奉上す。願くは相攝受して親僮僕と作したまへ。所有る事業我れ皆能く辦ぜんと。諸の聲聞衆の施を行ずるも亦た然なり、如來親近の弟子と作らんことを願ふ。菩薩は爾らず。是れ謂ゆる差別なり。又た舍利子、女人有りて王宮の樂を捨て百千の寶を持て竊に長者或は商主の家に詣り、而かも彼れに語て言はんが如し、今此の寶を奉る、願くは相納受して以て妻室と爲したまへ。身を畢るまで承事して終に虧違せざらんと。是の如く聲聞の布施

【四】次に滿慈子舍利子を讚歎し、二施の差別を喩說す。

第十一布施波羅蜜多分之一[一]

[二]是の如く我れ聞きぬ。一時[三]薄伽梵[四]室羅筏に在して[五]誓多林の給孤獨園に住りたまへり。大苾芻衆千三百人と倶なりき。爾の時世尊、舍利子に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩布施波羅蜜多を修行する時は久如しきを經て方に圓滿することを得んと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、[六]無上の正法は佛を根本と爲し、佛を導首と爲し、佛を所依と爲す。唯だ願くは世尊、宣說開示し苾芻衆をして聞き已て受持せしめたまへと。[七]世尊爾の時再三命じて舍利子に勸めて言はく、汝今應に諸の菩薩摩訶薩の爲に布施波羅蜜多を宣說すべしと。爾の時具壽舍利子、佛の再三慇懃なる命勸を蒙り佛の神力を承け先づ布施波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して言はく、若し菩薩摩訶薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に[八]一切智智を緣じ大悲を以て上首と爲して布施波羅蜜多を修行すべし。若し菩薩摩訶薩一切智智を緣じ大悲を上首を爲して布施波羅蜜多を修行せば是の菩薩摩訶薩は則ち能く一切智智を攝受して疾く無上正等菩提を證せん。復た次に諸の菩薩摩訶薩は寧ろ[九]無記の心を以て布施を行じ或は施を行ぜず。[一〇]終に二乘地に廻向する心を以ては布施を行ぜず。何を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は應に聲聞獨覺地を怖るべきが故なりと。

[一一]爾の時滿慈子、舍利子に問ふて言はく、何の因何の緣ありてか諸の菩薩摩訶薩は應に聲聞及び獨覺地を怖るべきやと。舍利子言はく、諸の菩薩摩訶薩衆は一切智と二乘と等しきが故に我れ怖れしむと謂ふこと勿れと。[一二]時に滿慈氏復た具壽舍利子に問ふて言はく、諸の菩薩の施と聲聞の施と何の差別有りや。[一三]舍利子言はく、聲聞は施を行じて涅槃阿羅漢果に廻向し、菩薩は施を行じて菩提一切智智に廻向す。是れ謂ゆる差別なり。又た滿慈子如し二人有りて倶に布施を行ずるに一は王位を緣

【一】廣く布施の無上菩提に向ふ說なるを明す分なり。
【二】如是我聞。證信序、持經者この般若を正しく信ずるを示す。
【三】薄伽梵(Bhagavat)。世尊と譯す。
【四】室羅筏(Śrāvastī)。又は舍衞ともいひ、聞者城、聞物城などゝ譯す。拘薩羅國の都城。迦毘羅城の西北、ラプチ河畔にあり、祇園精舍の在りし處。
【五】誓多林(Jatavana)。もと誓多太子所有の林なれば誓多林といふ。須達長者之を買ひて精舍を建てゝ佛に獻ず。祇園精舍是なり。
【六】佛は法本なり導者なり。
【七】佛舍利子をして布施波羅蜜多を說かしむ。
【八】一切智智大悲　大乘の大智大悲を導きとするを云ふ。
【九】無記。三性の一。善にも惡にも非ざる性質、即ち非善非惡の中間性のこと。
【一〇】大乘心を以てし、二乘心を怖れて二乘心を起さず。
【一一】無上菩提證得の布施行に就て滿慈子舍利子と問答す。
【一二】菩薩の施と聲聞の施との差別を明す。
【一三】先づ舍利子二施の差別を喩說す。

して毎日の旦に於て、至心に是の如き般若波羅蜜多甚深の理趣、最勝の法門を聽誦して間斷無き者は、諸の惡業障皆消滅することを得、諸の勝喜樂常に現在前し、久しからずして當に大樂金剛不空神呪、現身に必ず得、究竟して一切の如來金剛祕密最勝成就を成滿し久しからずして當に大執金剛及び如來性を得べし。若し有情類、未だ多佛の所にて衆の善根を植ゑ久しく大願を發さざれば、此の般若波羅蜜多甚深の理趣、最勝の法門に於て聽聞し書寫し讀誦し供養し恭敬し思惟し修習すること能はざらん。要らず多佛の所にて衆の善根を植ゑ久しく大願を發して、乃ち能く此の甚深の理趣最勝の法門に於て、下一句一字までも聽聞するに至る、況んや能く具足して讀誦し受持せんをや。若し諸の有情八十殑伽沙等の[134]倶胝[135]那庾多の佛を供養恭敬尊重讃歎せば乃ち能く具足して此の般若波羅蜜多甚深の理趣を聞かん。若し[136]地方所に此の經を流行せば一切の天人[137]阿素洛等皆應に供養すること佛の[138]制多の如くすべけん。此の經を置いて身或は手に在くこと有らんに諸の天人等皆應に禮敬すべし。若し有情類此の經を受持せば多倶胝劫、宿住智を得、常に勤めて精進して諸の善法を修するに、惡魔外道も稽留すること能はず、四大天王及び餘の天衆、常に隨て擁護して未だ曾て暫くも捨てず、終に横死し枉げて衰患に遭はず、諸佛菩薩常に共に護持して一切時に善は增し惡は[139]減じ、諸の佛土に於て願に隨て往生して、乃至菩提まで惡趣に墮せざらしめん。諸の有情類此の經を受持せば、定めて無邊の勝利功德を獲ん。我れ今略して是の如き少分を說けるのみと。[140]時に薄伽梵是の經を說き已るに、金剛手等の諸大菩薩及び餘の天衆は佛の所說を聞き皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

德を明す。
【一三一】集經には般若聞持不忘施羅尼と云ふ。
【一三二】集經には、那上謨婆伽婆去帝一波曬上若及若治波羅彌多曳二跢姪他三室哩合二曳四室哩合二曳五室哩合二曳六室哩合二曳細七莎訶八
【一三三】正宗分第十六、結勸。
【一三四】倶胝（Koṭi）十萬或は京とす。
【一三五】那庾多（Nayuta）。一萬倶胝卽ち溝とす。
【一三六】明本等に依らば「他の方處に流行する此經をば」とすべし。
【一三七】阿素洛（Asura）。通途阿修羅に作る非天と譯す。
【一三八】制多又は支提（Caitya）。供養すべき塔祠なり。
【一三九】麗本には「減」の字を「滅」と作る。
【一四〇】結說流通。在會の得益歡喜を明す。

て自然に調伏す。又た蓮華の形色光淨にして一切の穢物の染する所と爲らざるが如く[一二三]是の如く貪等もて世間を饒益し、[一二三]過有過に住するも常に染すること能はず。又た大食等は能く清淨の大樂大財を得て三界に自在にして常に能く堅固に有情を饒益すと。[一二四]爾の時如來は卽ち[一二五]神呪を說きたまはく、

[一二六]納慕薄伽筏帝一 鉢刺壞波囉弭多曳二 薄底筏攃羅曳三 毫跛履弭多嚢拏曳四 薩縛咀他揭多跛履怖視多曳五 薩縛咀他揭多奴壤多奴壤多郍壤多曳六 咀姪他七 鉢刺吟鉢刺吟八 莫訶鉢喇吟九 鉢刺壞婆娑羯囇十 鉢刺壞路迦羯囇十一 案駄迦囉毘談末遅十二 悉遞十三 蘇悉遞十四 悉殿都漫薄迦筏底十五 薩防伽孫達囇十六 薄底筏攃囇十七 鉢刺婆履多喝悉帝十八 參磨濕嚩婆羯囇十九 勃陀勃陀二十 悉陀悉陀二十一 劍波劍波二十二 浙羅浙羅二十三 曷邏嚩曷邏嚩二十四 阿揭車阿揭車二十五 薄伽筏底二十六 麼毘濫婆二十七 莎訶二十八

是の如き神呪は三世の諸佛の皆共に宣說し同じく護念したまふ所なり。能く受持する者は一切の障り滅し、心の欲する所に隨て成辦せざる無く疾く無上正等菩提を證せん。[一二七]爾の時如來復た[一二八]神呪を說きたまはく、

[一二九]納慕薄伽筏帝一 鉢刺壞波囉弭多曳二 咀姪他三 牟尼達讖四 僧揭洛訶達讖五 遏奴揭洛訶達讖六 毘目底達讖七 薩駄奴揭洛訶達讖八 吠室洛末拏達讖九 參漫多奴跛履筏刺咀那達讖十 嚢拏僧揭洛訶達讖十一 薩縛迦羅跛履波刺那達讖十二 莎訶十三

是の如き神呪は是れ諸佛の母なり。能く誦持する者は一切の罪滅して常に諸佛を見たてまつり宿住智を得て、疾く無上正等菩提を證せん。[一三〇]爾の時如來復た[一三一]神呪を說きたまはく

[一三二]納慕薄伽筏帝一 鉢刺壞波囉弭多曳二 咀姪他三 室囇曳四 室囇曳五 室囇曳六 室囇曳細七 莎訶八

是の如き神呪は大威力を具ふ。能く受持する者は業障消除し聞く所の正法は總持して忘れず疾く無上正等菩提を證せん。[一三三]爾の時世尊是の呪を說き已て金剛手菩薩等に告げて言はく、若し諸の有情に

麼泥十六 徒提蘇徒提十七 徒殿覩縵十八 婆伽婆去底十九 薩防去伽孫怛唎二十 婆枳底二合伐䟦哩二合二十一 波囉二合娑哩跢訶上悉羝二合二十二 三摩莎娑羯哩二合二十三 勃地勃地冒駄耶二十四 悉地地野反上悉地同二十五 劒婆劒婆二十六 迦羅迦羅二十七 者羅者羅二十八 頓婆頓婆二十九 阿揭車阿揭車三十 婆伽婆去帝三十一 摩毘藍去婆三十二 莎訶三十三

【一二七】集二の神呪及び受持功德を明す。

【一二八】集經には此呪を般若波羅蜜多聰明施羅尼と云ひ、又小般若波羅蜜多神呪とも、十方一切諸佛母呪とも名く。

【一二九】集經には下の如くせり。那上謨婆伽睇帝一 那上謨摩訶波羅上二合若治及波囉弭多去曳二 哆姪他三 摩彌達迷四 僧伽囉二合上訶上達迷五 阿上弩伽囉訶達迷六 毘目去底二合達迷七 娑上施弩伽囉訶達迷八 裴舍囉上二合麼拏達迷九 娑上曼多拏跛唎晞囉上二合跢那上二合達迷十 瞿上拏上伽囉訶僧伽囉訶達迷十一 薩婆跢囉上拏伽上跢達迷十二 薩婆伽囉上跛利婆囉上二合拏達迷十三 徒弭唎上二合底阿上娑上婆囉上二合慕娑上那上達迷十四 莎訶十五 この第二句の那謨摩訶と第十一句の上の伽囉訶と第十二句と第十四句とは本文の呪に缺けたり。

【一三〇】第三の神呪及び受持功

菩薩等に告げて言はく、若し是の如き遍滿せる般若の理趣、勝藏の法門を聞くことを得て信解し受持し讀誦し修習する有らば、則ち能く勝藏の法性に通達して、疾く無上正等菩提を證せんと。

[一〇八] 爾の時、世尊復た究竟無邊際法如來の相に依り諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多究竟住持、法義平等、金剛の法門を宣說したまふ。謂ゆる甚深般若波羅蜜多無邊なるが故に、一切の如來も亦た無邊なり。甚深般若波羅蜜多無際なるが故に、一切の如來も亦た無際なり。甚深の般若波羅蜜多一味なるが故に一切法も亦た一味なり。甚深の般若波羅蜜多究竟なるが故に、一切法も亦た究竟なりと。佛是の如き無邊無際究竟の理趣金剛の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如きの究竟般若の理趣、金剛の法門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば一切の障法皆悉く消除し、定んで如來の執金剛性を得て、疾く無上正等菩提を證せんと。

[一〇九] 爾の時、世尊復た遍照如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、諸の如來の秘密法性及び一切法の無戲論性、[一一〇]大樂金剛、不空神呪、金剛の[一一一]法性、[一一二]初中後位最勝第一なることを得る甚深の理趣、無上の法門を宣說したまふ。謂ゆる[一一三]大貪等最勝に成就すれば、大菩薩の[一一四]大樂をして最勝に成就せしむ。大樂最勝に成就すれば、大菩薩の一切如來の[一一五]大覺をして最勝に成就せしむ。一切如來の大覺最勝に成就すれば大菩薩の一切の大魔を降伏することをして最勝に成就せしむ。一切の大魔を降伏することを最勝に成就すれば、大菩薩の[一一六]普ねく大三界に自在なるをして最勝に成就せしむ。普ねく大三界に自在なるを最勝に成就すれば、大菩薩の能く遺餘無く有情界を拔きて一切有情を利益し安樂ならしめ、畢竟大樂なるを最勝に成就せしむ。所以は何ん。乃ち生死[一一七]流轉の住處に至り、[一一八]勝智有る者は[一一九]此に齊りて、常に能く[一二〇]無等の法を以て有情を饒益して[一二一]寂滅に入らず。又た般若波羅蜜多方便善巧成立の勝智を以て、善く一切清淨の事業を辦じて、能く諸有をして皆清淨なることを得せしむ。又た貪等を以て世間を調伏して普遍恒時に、乃至諸有までも皆清淨ならし

を學ぶ菩薩なり。

【一一九】此に齊り。生死界のみにあるを云ふ。

【一二〇】無等の法。無相般若なり。

【一二一】寂滅に入らず。自度を求め解脫涅槃に安住せず。

【一二二】住過不染と利樂自在と饒益堅固とを明す。

【一二三】過有過。過法罪惡と、有過の人法となり。元明には遍有過に作る。これ一切の有過の意なり。

【一二四】正宗分第十五神呪章。以下三呪を擧ぐ、陁羅尼集經第三及び法苑珠林第七十五にも出す。今第一の神呪及び受持の功德を明す。

【一二五】集經には此呪を大般若呪と名く。

【一二六】集經。多く異るを以て全文を掲ぐ。那上謨上婆伽法去帝一摩訶波囉上二合若若冶反下同波囉彌多去曳二薄訖底二合伐跢囉二合曳三阿波唎二合彌多瞿拏曳四薩婆怛他揭多五波唎布自多去音曳六薩婆怛他揭多七努若多努若多八毘若多上曳。跢咥他上波囉上二合若波囉上二合若十一摩訶波囉上二合若波囉上二合若婆娑揭唎上十三波囉上二合若嚧迦揭唎上四安馱迦去囉上二合若嚧迦揭唎上四安馱迦去囉十五毘談

即ち遠離なり。一切の法即ち遠離なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た即ち遠離なり。一切の有情即ち寂靜なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た即ち寂靜なり。一切の法即ち寂靜なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た即ち寂靜なり。一切の有情不可得なるが故に甚深の般若波羅蜜多も亦た不可得なり。一切の法不可得なるが故に甚深の般若波羅蜜多も亦た不可得なり。一切の有情無所有なるが故に甚深の般若波羅蜜多も亦た無所有なり。一切の法無所有なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た無所有なり。一切の有情不思議なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た不思議なり。一切の法不思議なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た不思議なり。一切の有情無戲論なるが故に、甚深般若波羅蜜多も亦た無戲論なり。一切の法無戲論なるが故に甚深般若波羅蜜多も亦た無戲論なり。一切の有情無邊際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た無邊際なり。一切の法無邊際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た無邊際なり。一切の有情業用有るが故に當に知るべし甚深般若波羅蜜多も亦た業用有りと。一切の法業用有るが故に當に知るべし甚深般若波羅蜜多も亦た業用有りと。佛是の如き性の平等性、甚深の理趣、最勝の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き平等、般若の理趣、最勝の法門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば、則ち能く平等の法性、甚深の般若波羅蜜多に通達して、[一〇〇]法と有情とに於て心[一〇一]罣礙する無くして、疾く無上正等菩提を證せんと。

[一〇二]爾の時、世尊復た一切住持藏法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の有情の住持遍滿、甚深の理趣、[一〇三]勝藏の法門を宣說したまふ。謂ゆる一切有情は皆[一〇四]如來藏なり。普賢菩薩の自體遍ずるが故に。一切の有情は皆[一〇五]金剛藏なり、金剛藏に灌灑せらるゝを以ての故に。一切の有情は皆正法藏なり、一切皆正語に隨ひて[一〇六]轉ずるが故に。一切の有情は皆妙業藏なり、一切の事業の[一〇七]加行依なるが故にと。佛是の如く有情の住持、甚深の理趣、勝藏の法を說き已つて、金剛手

法章。密に第十六波羅蜜部中大曼荼羅章とす。彼の十三七女天集會品、十四三兄弟集會品、十五四姉妹集會品は本經に無し。

【一〇九】正宗分、第十四如來秘密章。密に第十七五秘密三摩地章とす。前來中間十二章に對する結論なり。

【一一〇】大樂金剛不空は金剛薩埵の別名なり、又これ般若の不壞眞實なるを云ふ。

【一一一】三本には「性」の字を「門」に作る。

【一一二】初中後位。一切圓滿なるを云ふ。

【一一三】大貪等。貪欲等惡として斷捨すべきものなし、小我の小貪を非とするのみ、一切衆生を愛貪するを大貪の最勝成就とす。瞋念も亦然り。

【一一四】大樂の最勝。勝妙の喜樂なり、金剛薩埵の大樂なり。

【一一五】大覺。自證化他圓極するなり。

【一一六】普大三界自在。三界に周遍して主となるを云ふ。

【一一七】流轉の住處。生死の盡くる際を云ふ。即ち苦報滅する自利行なり。

【一一八】勝智有る者。般若無相

伏、般若の理趣智藏の法門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば、能く自ら忿恚等の過を調伏し亦た能く一切の有情を調伏して、常に善趣に生じて諸の妙樂を受け、現世の怨敵は皆慈心を起し、能善く諸の菩薩行を修行して疾く無上正等菩提を證せんと。

[九八] 爾の時、世尊復た一切能善建立性平等法如來の相に依りて諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の法性、甚深の理趣、最勝の法門を宣說したまふ。謂ゆる[九九]一切の有情性平等なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た性平等なり。一切の法性平等なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た性平等なり。一切の有情性調伏なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た性調伏なり。一切の法性調伏なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た性調伏なり。一切の有情實義有るが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た實義有り。一切の法實義有るが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た實義有り。一切の有情卽ち眞如なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち眞如なり。一切の法卽ち眞如なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち眞如なり。一切の有情卽ち法界なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち法界なり。一切法卽ち法界なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち法界なり。一切の有情卽ち法性なるが故に甚深般若波羅蜜多も亦た卽ち法性なり。一切の法卽ち法性なるが故に、甚深般若波羅蜜多も亦た卽ち法性なり。一切の有情卽ち實際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち實際なり。一切の法卽ち實際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち實際なり。一切の有情卽ち本空なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち本空なり。一切の法卽ち本空なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち本空なり。一切の有情卽ち無相なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち無相なり。一切の法卽ち無相なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち無相なり。一切の有情卽ち無願なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち無願なり。一切の法、卽ち無願なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た卽ち無願なり。一切の有情卽ち遠離なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦た

【九八】正宗分第十一性平等建立章。密に降三世敎令輪品と云ふ。
【九九】前章は有情のみに就て云ふ。今は人法に就て平等の義を明し、般若を說明す。
【一〇〇】明本には「法」の字を「諸」に作る。
【一〇一】罣礙。拘束せられ取著するなり。
【一〇二】正宗分第十二住持藏法章。密に外金剛會品と云ふ。
【一〇三】勝藏。如來藏、金剛藏、正法藏、妙業藏を包括して云ふ。卽ち、一切の有情を指す。
【一〇四】如來藏。衆生佛性を有し普賢の妙德を具足す。これ胎藏の法を擧ぐ。
【一〇五】金剛藏。佛智を云ふ。
【一〇六】轉ず。人若し正法藏ならずば佛化に浴するも隨順して迷を去る能はず。
【一〇七】加行依。加力成業の所依處なり。有情ありて業事成るを云ふ。
【一〇八】正宗分、第十三無邊際

若は無願皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は遠離、若は不遠離皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は寂靜若は不寂靜皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。深般若波羅蜜多に於て書寫し聽聞し、受持し讀誦し思惟し修習し廣く有情の爲に宣說流布し、或は自ら供養し、或は轉じて他に施すは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなりと。佛是の如き眞淨の供養、甚深の理趣無上の法を說き已て、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き供養、般若の理趣、無上の法門を聞くことを得て信解して受持し讀誦し修習する有らば速に能く諸の菩薩行を圓滿して、疾く無上正等菩提を證せんと。

[九五]爾の時世尊復た一切能善調伏如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多[九六]智密を攝受し、有情を調伏する甚深の理趣、智藏の法門を宣說したまふ。謂ゆる一切の有情平等の性は即ち[九七]忿平等の性なり。一切の有情調伏の性は即ち忿調伏の性なり。一切の有情眞法性は即ち忿眞法の性なり。一切の有情眞如の性は即ち忿眞如の性なり。一切の有情法界の性は即ち忿法界の性なり。一切の有情離生の性は即ち忿離生の性なり。一切の有情實際の性は即ち忿實際の性なり。一切の有情本空の性は即ち忿本空の性なり。一切の有情無相の性は即ち忿無相の性なり。一切の有情無願の性は即ち忿無願の性なり。一切の有情遠離の性は即ち忿遠離の性なり。一切の有情寂靜の性は即ち忿寂靜の性なり。一切の有情不可得の性は即ち忿不可得の性なり。一切の有情無所有の性は即ち忿無所有の性なり。一切の有情難思議の性は即ち忿難思議の性なり。一切の有情無戲論の性は即ち忿無戲論の性なり。一切の有情の如金剛の性は即ち忿如金剛の性なり。所以は何ん。一切の有情の眞調伏性は即ち是れ無上正等菩提、亦た是れ般若波羅蜜多、亦た是れ諸佛の一切智智なればなりと。佛是の如き能善く調伏する甚深の理趣、智藏の法門を說き已て、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き調

【九五】正宗分第十調伏章。密に摧一切魔菩薩理趣品に作る。
【九六】智密は佛智般若の相應する妙用を云ふ。
【九七】忿平等。忿怒身を以てせば此に一切法を―受し調伏するを云ふ。人空ならば忿も空なり。

等性に入らば、能く一切の獨覺の法性輪に入るが故に。菩薩の法平等性に入らば、能く一切の菩薩の法性輪に入るが故に。如來の法平等性に入らば、能く一切の如來の法性輪に入るが故に。有情の平等性に入らば、能く一切の有情の性輪に入るが故に。一切の平等性に入らば、能く一切の性輪に入るが故にと。佛是の如き廣大輪に入る般若の理趣、平等性の性を說き已つて金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き輪性、甚深の理趣、平等性の門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば能善く諸の平等性に悟入して疾く無上正等菩提を證せんと。

〔九三〕爾の時世尊復た一切廣受供養眞淨器田如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切〔九四〕供養甚深の理趣、無上の法門を宣說したまふ。謂ゆる無上正等覺の心を發すは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。正法を攝護するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の波羅蜜多を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の菩提分法を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の總持等持を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の五眼六神通を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の靜慮解脫を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の慈悲喜捨を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の佛の不共法を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法若は常、若は無常、皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は樂、若は苦、皆得べからずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は我、若は無我、皆得可からずと觀ずるは諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は淨、若は不淨皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は空、若は不空皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法若は有相、若しは無相、皆得可からずと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は有願、

【九三】正宗分第九供養眞淨章。密に虛空庫菩薩理趣品。
【九四】ヽヽヽ供養甚深。衣食の供養よりも發心修行皆大供養たるを云ふ。

施設なるが故に。一切の法は無戲論なり、本性空寂にして言說を離るゝが故に。一切の法は本性淨なり、甚深の般若波羅蜜多の本性淨なるが故にと。佛是の如き諸の戲論を離れし般若の理趣、輪字の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し此の無戲論の般若の理趣、輪字法門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば一切法に於て無礙智を得て、疾く無上正等菩提を證せんと。

[九〇] 爾の時世尊復た一切如來輪攝如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多[九一]、廣大輪に入る甚深の理趣、平等性の門を宣說したまふ。謂ゆる[九二]金剛平等性に入らば能く一切の如來性輪に入るが故に。義平等性に入らば、能く一切の菩薩性輪に入るが故に。法平等性に入らば、能く一切の法性輪に入るが故に。蘊平等性に入らば、能く一切の蘊性輪に入るが故に。處平等性に入らば、能く一切の處性輪に入るが故に。界平等性に入らば、能く一切の界性輪に入るが故に。諦平等性に入らば、能く一切の諦性輪に入るが故に。緣起平等性に入らば、能く一切の緣起性輪に入るが故に。寶平等性に入らば、能く一切の寶性輪に入るが故に。食平等性に入らば、能く一切の食性輪に入るが故に。善法平等性に入らば、能く一切の善法性輪に入るが故に。非善法平等性に入らば、能く一切の非善法性輪に入るが故に。有記の法平等性に入らば、能く一切の有記の法性輪に入るが故に。無記の法平等性に入らば、能く一切の無記の法性輪に入るが故に。有漏の法平等性に入らば、能く一切の有漏の法性輪に入るが故に。無漏の法平等性に入らば能く一切の無漏の法性輪に入るが故に。有爲の法平等性に入らば能く一切の有爲の法性輪に入るが故に。無爲の法平等性に入らば能く一切の無爲の法性輪に入るが故に。世間の法平等性に入らば、能く一切の世間の法性輪に入るが故に。出世間法平等性に入らば能く一切の出世間法性輪に入るが故に。異生法平等性に入らば、能く一切の異生法性輪に入るが故に。聲聞の法平等性に入らば、能く一切の聲聞の法性輪に入るが故に。獨覺の法平

【八三】智藏。甚深般若なり。
【八四】世間等。世、出世小因大果融即を明す。法空無自性なればなり。
【八五】身語心。身口意に同じ。
【八六】正宗分第六智印金剛章、密に金剛奉理趣品と云ふ。
【八七】住持智印。此に云ふ金剛法門にして、正慧により身語心密印を具足するものなり。
【八八】正宗分第七無戲論輪字章。密に文殊師利理趣品。
【八九】輪字の法門。般若法輪の轉ぜらるゝを云ふ。
【九〇】正宗分第八輪攝如來章。密に纔發意菩薩理趣品。
【九一】廣大輪。勝法、大乘と云ふに同じ。
【九二】第二章參照、今は第四の一切法平等性を廣く分別し列擧せるなり。

般若の理趣、智藏法を說き已つて金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如きの灌頂、甚深の理趣、智藏の法門を聞くことを得て信解し受持し讀誦し修習する有らば速に能く諸の菩薩行を滿足して疾く無上正等菩提を證せんと。

八六 爾の時世尊復た一切の如來智印持一切佛秘密法門如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の八七住持智印、甚深の理趣、金剛法門を宣說したまふ。謂ゆる具さに一切の如來の金剛身印を攝受せば當に一切の如來の法身を證すべし。若し具さに一切の如來の金剛語印を攝受せば一切法に於て當に自在を得べし。若し具さに一切の如來の金剛心印を攝受せば、一切定に於て當に自在を得べし。若し具さに一切の如來の金剛智印を攝受せば能く最上妙の身語心を得ること、猶ほ金剛の動ずる無く壞する無きが若くならんと。佛是の如き如來の智印、般若の理趣、金剛の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく若し是の如き智印、甚深の理趣、金剛の法門を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば、一切の事業皆能く成辦せん。常に一切の勝事と和合して、修行せんと欲する所の一切の勝智、諸の勝福業、皆速に圓滿して、當に最勝淨の身語心を獲べきこと、猶ほ金剛の破壞す可からさるが若くにして疾く無上正等菩提を證せんと。

八八 爾の時、世尊復た一切無戲論法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多甚深の理趣、八九輪字法門を宣說したまふ。謂ゆる一切の法は空なり、自性無きが故に。一切の法は無相なり、衆相を離るゝが故に。一切の法は無願なり、所願無きが故に。一切の法は遠離なり、著する所無きが故に。一切の法は寂靜なり、永く寂滅せるが故に。一切の法は無常なり、性常無きが故に。一切の法は無樂なり、樂しむ可きに非さるが故に。一切の法は無我なり、自在ならざるが故に。一切の法は無淨なり、淨相を離るゝが故に。一切の法は不可得なり、其の性を推尋するに不可得なるが故に。一切の法は不思議なり、其性を思議するに所有無きが故に。一切の法は無所有なり、衆緣和合せる假りの

二見とし、我見とす、我見に依る故に憍慢あり。

【七三】諸纒。纒縛結使等皆煩惱なり。

【七四】二に開持功德。

【七五】假使。殺人殺事共に空にして罪報得可らざる義を論ずるのみ、實に殺害を行せず、私を杀じて公に殉ずべし。

【七六】正宗分第四性靜法門章。密に觀自在菩薩理趣會品と云ふ　文二段同前。

【七七】性淨如來。淸淨法身なり、その相は妙觀察智として現はる、これを觀、自在菩薩とするなり。

【七八】底本には「以」てに作る。

【七九】貪欲等。調伏に依て善化するに非ず本性淨明なり。

【八〇】客塵。性淨の貪法をして他が塵埃あらしむるを云ふが如きも、塵煩惱實に存せず、汚すべきものなし、客は無主を表し實を遮するなり。但此前後の二意は後人各各依て宗をなす所の差なり。

【八一】正宗分第五分勝王如來智藏章。密に虛空藏品と云ふ。文段同前。

【八二】和合灌頂。能所和合の灌頂なり。

清淨ならしむ。一切の垢穢の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の惡法をして清淨ならしむ。一切の惡法の本性清淨にして極めて照明なるが故に能く世間の生死をして清淨ならしむ。一切の生死の本性清淨にして極めて照明なるが故に能く世間の諸法をして清淨ならしむ。一切の法の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の有情をして清淨ならしむ。一切の有情の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の一切智をして清淨ならしむ。一切智の本性清淨にして極めて照明なるを以ての故に、能く世間の甚深般若波羅蜜多をして最勝清淨ならしむと。佛是の如き平等智印、般若の理趣、清淨の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き[80]般若波羅蜜多清淨の理趣を聞くことを得て信解し受持し讀誦し修習する有らば一切の貪瞋癡等の客塵煩惱垢穢聚の中に住すと雖も、而かも猶ほ蓮華の猶く一切の客塵垢穢の過失の爲に染せられず、常に能く菩薩の勝行を修習して疾く無上正等菩提を證せんと。

[81]爾の時世尊復た一切三界勝主如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の[82]和合灌頂の甚深の理趣、[83]智藏法門を宣說したまふ。謂ゆる[84]世間灌頂の位を以て施して、當に三界の法王の位の果を得べし。出世間無上の義を以て施して、當に一切の希願滿足することを得べし。出世間無上の法を以て施して、一切法に於て當に自在を得べし。若しは世間の財食等を以て施して、當に一切の[85]身語心の樂を得べし。若しは種種の財法等を以て施して、能く布施波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ、種種清淨の禁戒を受持して、能く淨戒波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ、一切事に於て安忍を修學して、能く安忍波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ、一切時に於て精進を修習して、能く精進波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ、一切境に於て靜慮を修行して、能く靜慮波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ、一切法に於て常に妙慧を修して、能く般若波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしむと。佛是の如き灌頂の法門、

【六三】正宗分第二遍照理趣章。密に毘盧遮那理趣會品と云へり、毘盧遮那身を以て般若の理趣現覺門を說く。二あり、一は現等覺門の體相、二は聞持の功德。

【六四】現等覺門。正等覺を現成する義にして大菩提を明す。金剛、義、法、一切法の四あり。

【六五】金剛は喩にして不壞を表す空不可得なればなり。

【六六】義は差別を要するも今は平等一如を義とす、等しく空不可得なるが故に。

【六七】法は軌持別體を常とするも、今は無自性の性平等にして取著なきを云ふ。

【六八】二に聞持の功德を明す。

【六九】正宗分第三釋迦調伏章密に降三世品と云ふ。釋迦身を以て般若の理趣普勝法門を說く、文二、一に體相二に功德。

【七〇】普勝の法門。一切の惡法を調伏し勝たざるなし。取相計著せざれば貪事なく欲性なし、諸惡皆空なり、力を以て有を空ならしむるにあらず。

【七一】猶預。は疑惑不信なり。

【七二】諸見。無量の邪見、略して六十二、更に攝して斷常

が故に、瞋恚性も亦た戲論無し。瞋恚性戲論無きが故に、愚癡性も亦た戲論無し。愚癡性戲論無きが故に、[七一]猶預の性も亦た戲論無し。猶豫の性戲論無きが故に、[七二]諸見の性も亦た戲論無し。諸見の性戲論無きが故に、憍慢の性も亦た戲論無し。憍慢の性戲論無きが故に、[七三]諸纏の性も亦た戲論無し。諸纏の性戲論無きが故に、煩惱垢の性も亦た戲論無し。煩惱垢の性戲論無きが故に、諸惡業の性も亦た戲論無し。諸惡業の性戲論無きが故に、諸の果報の性も亦た戲論無し。諸の果報の性戲論無きが故に、雜染法の性も亦た戲論無し。雜染法の性戲論無きが故に、清淨法の性も亦た戲論無し。清淨法の性戲論無きが故に、一切法の性も亦た戲論無し。一切法の性戲論無きが故に、當に知るべし般若波羅蜜多も亦た戲論無しと。[七四]佛是の如き衆惡を調伏する般若の理趣、普勝の法を說き已つて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き般若波羅蜜多甚深の理趣を聞くことを得て、信解し受持し讀誦し修習する有らば、[七五]假使ひ三界所攝の一切有情を殺害するとも、而かも斯れに由りて復た地獄傍生鬼界に墮せず、能く一切の煩惱及び隨煩惱惡業等を調伏するを以ての故に、常に善趣に生じて勝妙の樂を受け、諸の菩薩摩訶薩行を修して疾く無上正等菩提を證せんと。

[七六]爾の時世尊復た[七七]性淨如來の相に[七八]依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切法の平等性、觀自在妙智印の甚深の理趣淸淨の法門を宣說したまふ。謂ゆる一切の[七九]貪欲の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の瞋恚をして清淨ならしむ。一切の瞋恚の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の愚癡をして清淨ならしむ。一切の愚癡の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の疑惑をして清淨ならしむ。一切の疑惑の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の見趣をして清淨ならしむ。一切の見趣の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の憍慢をして清淨ならしむ。一切の憍慢の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の纏結をして清淨ならしむ。一切の纏結の本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の垢穢をして

可得を明す。
【五〇】菩薩十地不可得を明す。
【五一】菩薩の通の十地不可得を明す。發趣品參照。
【五二】五眼。天、慧、法、佛眼の空を明す。
【五三】六神通。天眼、天耳、神足、他心、宿命、漏盡の空を明す。
【五四】以下佛力諸法の空を明す。
【五五】異生。迷界の衆生なり。
【五六】預流は須陀洹、一來は斯陀含、不還は阿那含、此の三、阿羅漢と合して聲聞の四果なり。
【五七】上述諸法空寂清淨不可得を以て菩薩の句義とする理由を明す。
【五八】自性遠離。性空なれば定實の自性を離る。
【五九】二に理趣の聞持の功德を明す。
【六〇】妙菩提の座。道場卽ち、成佛なり。
【六一】煩惱障は無明惑なり。業障は有漏業なり。報障は業果としての果報を云ふ。
【六二】十六大菩薩。金剛界の慧十六尊とす。

離なり。遠離に由るが故に自性寂靜、寂靜に由るが故に自性清淨、清淨に由るが故に甚深般若波羅蜜多は最勝清淨なり。是の如き般若波羅蜜多は當に知るべし、卽ち是れ菩薩の句義なり。諸の菩薩衆皆應に修學すべしと。

[五九] 佛、是の如き菩薩の句義、般若の理趣、清淨の法を說き已つて金剛手菩薩等に告げて言はく、若し此の一切法、甚深微妙の般若の理趣、清淨の法門を聞くことを得て深く信受する者有らば乃至當に[六〇]妙菩提の座に坐すべきまで、一切の障蓋皆染すること能はざらん。謂ゆる[六一]煩惱障・業障・報障、多く積集すと雖も而かも染すること能はず。種種極重の惡業を造ると雖も、而かも消滅し易くして惡趣に墮せざるなり。若し能く受持して日日讀誦し、精勤して無間に理の如く思惟せば、彼れ此の生に於て定めて一切法平等性、金剛等持を得、一切法に於て皆自在を得て、恒に一切勝妙の喜樂を受けん。當に[六二]十六大菩薩の生を經て定めて如來執金剛性を得て疾く、無上正等菩提を證すべしと。

[六三] 爾の時世尊は復た遍照如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の寂靜法性、甚深の理趣、[六四]現等覺門を宣說したまふ。謂ゆる[六五]金剛平等性現等覺門とは、大菩提の堅實にして壞し難きこと金剛の如くなるを以ての故に。[六六]義平等性現等覺門とは、大菩提の其の義一なるを以ての故に。[六七]法平等性現等覺門とは大菩提の自性淨なるを以ての故に。一切法平等性現等覺門とは大菩提の一切法に於て分別無きを以ての故なり。[六八]佛是の如き寂靜法性、般若の理趣、現等覺を說き已つて金剛手菩薩等に告げて言はく、若し是の如き四種の般若の理趣現等覺門を聞くことを得て信解し受持し讀誦し修習する有らば、乃至當に妙菩提の座に坐すべきまで、一切極重の惡業を造ると雖も而かも能く一切の惡趣を超越して、疾く無上正等菩提を證せんと。

[六九] 爾の時世尊は復た一切の惡法を調伏する釋迦牟尼如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多の一切法の平等性を攝受せる甚深の理趣、[七〇]普勝の法門を宣說したまふ。謂ゆる貪欲の性戲論無き

外大光明無量なるを云ふ。

【三四】身善等。三業善淨を擧ぐ。

【三五】色蘊等。色受想行識の五蘊空不可得を明す。以下毘崩伽、毘婆沙般若等に出づる法相に從ふ。釋義智度論等に示す如し。

【三六】眼處等。十二處不可得を明す。

【三七】眼界等。十八界不可得を明す。

【三八】眼觸等。六觸不可得を明す。

【三九】六受身。不可得を明す。

【四〇】六界空不可得を明す。

【四一】四聖諦不可得を明す。

【四二】四緣不可得を明す。因緣は親生果の法を云ひ、等無間は前後相續を云ひ、所緣は對境、增上は與力と不障との緣なり。

【四三】十二緣起法不可得を明す。

【四四】六度不可得を明す。

【四五】實法不可得を明す。

【四六】諸禪不可得を明す。

【四七】三十七道品不可得を明す。

【四八】三解脫門不可得を明す。

【四九】八解脫乃至十一切處不

句義なり。法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四六] 四靜慮空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四無量四無色定空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四念住空寂清淨の句義、[四七] 是れ菩薩の句義なり。四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四八] 空解脫門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。無相無願解脫門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四九] 八解脫空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。八勝處九次第定十遍處空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五〇] 極喜地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五一] 淨觀地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。種性地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切陀羅尼門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の三摩地門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五二] 五眼空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五三] 六神通空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五四] 如來の十力空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。三十二相空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。八十隨好空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。無忘失法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。恒住捨性空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切智空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。道相智一切相智空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の菩薩摩訶薩行空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。諸佛の無上正等菩提空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の[五五] 異生法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の[五六] 預流一來不還阿羅漢獨覺菩薩如來法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の善非善の法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の有記無記法、有漏無漏法、有爲無爲法、世間出世間の法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[五七] 所以は何ん、一切法は自性空なるを以ての故に[五八] 自性遠

【二六】純一圓滿は。純一乘を表す。諸經に散見する法句なり。清白の梵行は純善にして衆生の憂を除くを云ふ。

【二七】以下正宗分。大段十四章あり。今第一に理趣法門章菩薩句義を明す。密に大樂不空初集會品と云ふ。二あり、一は理趣の體相を明し、二は理趣開持の功能を歎ず。

【二八】般若の理趣。諸法實相を云ふ。

【二九】菩薩の句義。大品般若第十二句義品は無所有を以て菩薩の要件とせり。今は積極的に句義を示す、文段六十九句義を擧ぐるも意一切法を示すに在り。

【三〇】極妙樂。一切の苦永く無し。清淨は所有なく取着なく不可得なるなり。

【三一】諸見永寂。一切邪見謬論盡く息む。渴愛永息は諸煩惱息みて惑とすべき者なし。

【三二】胎藏。母胎の子を藏むる如く因中果あり、因果不二を云ふ。衆德は果地の德を云ふ。

【三三】意極猗適。內取著なき故に意安適なり。得大光明は

門は卽ち是れ[二九]菩薩の句義なり。云何が名づけて菩薩の句義と爲す。謂ゆる[三〇]極妙樂清淨の句義是れ菩薩の句義なり。[三一]諸見永寂清淨の句義是れ菩薩の句義なり。微妙適悅清淨の句義是れ菩薩の句義なり。渴愛永息清淨の句義是れ菩薩の句義なり。[三二]胎藏超越清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。衆德莊嚴清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三三]意極猗適清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。得大光明清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三四]身善安樂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。語善安樂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。意善安樂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三五]色蘊空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。受想行識空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三六]眼處空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意處空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。色處空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。聲香味觸法處、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三七]眼界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。色界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。聲香味觸法界、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼識界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意識界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三八]眼觸空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意觸空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[三九]眼觸を緣と爲して生ずる所の諸受空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意觸を緣と爲して生ずる所の諸受空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四〇]地界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。水火風空識界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四一]苦聖諦空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。集滅道聖諦清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四二]因緣空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。等無間緣所緣緣增上緣空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四三]無明空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。行識名色六處觸受愛取有生老死、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四四]布施波羅蜜多空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。淨戒安忍精進靜慮般若空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。[四五]眞如空寂清淨の句義、是れ菩薩の

【一三】已に善く等。密家はこれを法界體性智に配す。佛眼圓發して三世自他圓滿なり。

【一四】說敎の處を明して第六天王宮とす。

【一五】無價末尼。最勝の如意寶珠。末尼は常に摩尼に作る。

【一六】寶鐸等。主として外部の裝飾なり。

【一七】綺蓋。きぬがさ。

【一八】繒旛。きぬばた。此等は主として室內の裝飾なり。

【一九】八十億等。在會同聞の大衆を明す。

【二〇】一切等。大菩薩の德を讚す。

【二一】陀羅尼門。種種の總持力なり。

【二二】三摩地門。種種の禪定力なり。

【二三】無礙等。法義詞辯四種の無礙自在辯なり。

【二四】別して八大菩薩を列ぬ。大日の八方侍衞の上首菩薩なり。

【二五】以下所說を讚ず。初中後善は、首尾一味正法なるを云ふ。文義巧妙は文語も善く義理も調ふを云ふ。

卷の第五百七十八

第十般若理趣分

[一]是の如く我れ聞きぬ。[二]一時[三]薄伽梵、[四]妙に善く一切の如來の[五]金剛住持と、[六]平等性智と、種種希有の殊勝の功德とを成就し、已に能善く一切の如來[七]灌頂の寶冠を獲て三界を超過し、已に能善く一切の如來の[八]遍金剛智大觀自在を得、已に一切の如來の諸法を決定したまへる[九]大妙智印を圓滿することを得、已に善く一切の如來の畢竟空寂の[一〇]平等性印を圓證して諸の能作所作の事業に於て皆[一一]善巧に成辦して[一二]餘なきことを得たまへり。一切の有情は種種の希願、其の罪無きに隨ひて皆能く滿足して、[一三]已に善く三世平等にして常に斷盡すること無く廣大に遍照せる身語心性に安住すること猶ほ金剛の若く、諸の如來に等しく動ずる無く壞する無し。[一四]是の薄伽梵は欲界の頂の他化自在天王宮の中の一切の如來の常に遊びたまふ所の處にして咸く共に稱美したまふ大寶藏殿に住まりたまへり。其の殿は[一五]無價の末尼の所成にして種種の珍奇間雜して嚴飾し、衆色交映して大光明を放てり。[一六]寶鐸金鈴處處に懸列し、微風吹き動して和雅の音を出す。[一七]綺蓋[一八]繒幡花幢綵拂寶珠瓔珞半滿月等種種に雜飾して用て莊嚴し賢聖天仙の愛樂する所なり。[一九]八十億の大菩薩と倶なりき。[二〇]一切皆[二一]陀羅尼門[二二]三摩地門[二三]無礙の妙辯、是の如き等の類無量の功德を具せり。設ひ多劫を經て讃ずるとも盡すこと能はさらん。[二四]其の名を金剛手菩薩摩訶薩、觀自在菩薩摩訶薩、虛空藏菩薩摩訶薩、金剛拳菩薩摩訶薩、妙吉祥菩薩摩訶薩、大空藏菩薩摩訶薩、發心卽轉法輪菩薩摩訶薩、摧伏一切魔怨菩薩摩訶薩と曰ふ。是の如きを上首として八百萬の大菩薩衆有りて前後に圍遶せるに正法を宣說したまふ。[二五]初中後善く文義巧妙[二六]純一圓滿にして淸白の梵行なり。

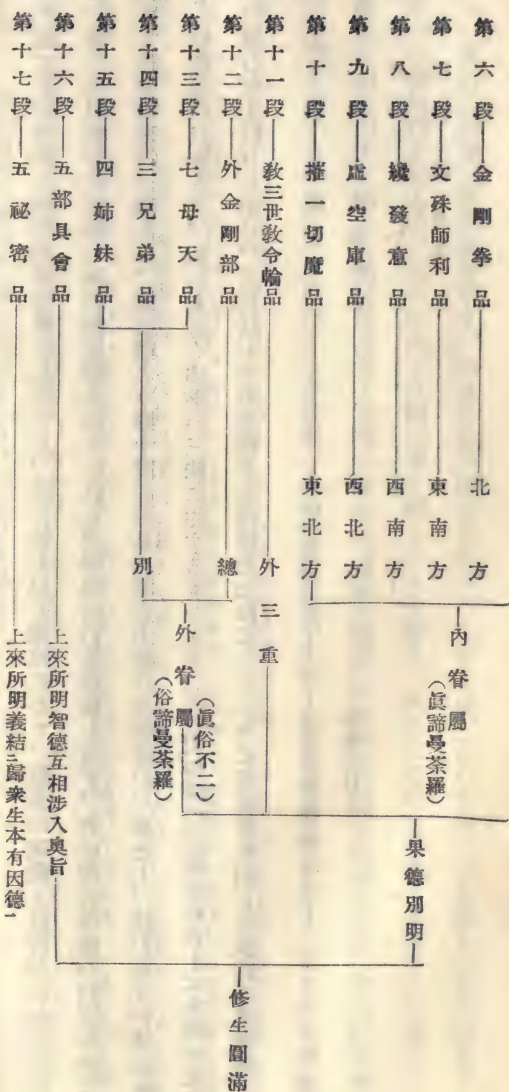
[二七]爾の時世尊は諸の菩薩の爲に一切法甚深微妙の般若の[二八]理趣淸淨の法門を說きたまへり。此の法

【一】この一段序分なり。初句證信序、持經者この理分を正しく傳承するを示す。
【二】以下化序。一時は理趣分說法の時なり。
【三】薄伽梵（Bhagavān）。世尊と譯す、敎主釋尊を云ふ。
【四】妙に善く。以下如來、成就の勝德を讃す。五眼開發して五智圓滿せる五佛を出す。
【五】金剛住持。眞如法界に安住して一切の德を流出して自在なるを云ふ。
【六】平等性智。凡我破れ慧眼開きて平等を知る。
【七】灌頂の寶冠。法王位に登るを表す。
【八】遍金剛智大觀自在。佛智大圓鏡智。
【九】大妙智印。四智印中には妙觀察智なり。
【一〇】平等性印。平等性智を表す。
【一一】善巧。成所作智を表す。
【一二】餘なき。完全無盡なり。

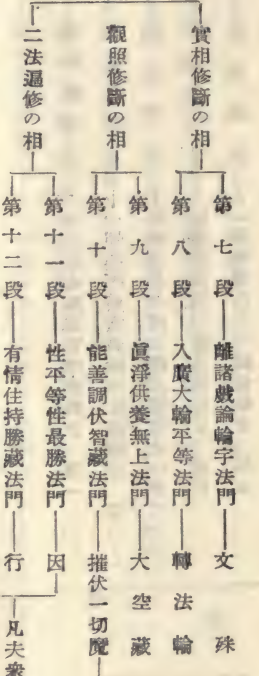
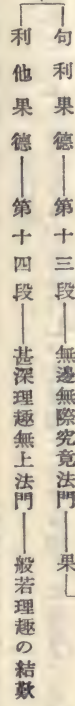
第六段——金剛拳品——一切拳印三昧大儀軌分　第六
第七段——文殊師利品——金剛字輪三昧大儀軌分　第七
第八段——纔發意品——一切曼拏羅金剛輪三昧大儀軌分　第八
第九段——虛空庫品——衆金剛三昧大儀軌分　第九
第十段——摧一切魔品——金剛忿怒三昧大儀軌分　第十
（以上）——卷二

第十一段——降三世敎令輪品——一切樂三昧大儀軌分　第十一
第十二段——外金剛部品——外金剛部儀軌　第十二
第十三段——七母天品——缺
第十四段——三兄弟品——缺
第十五段——四姉妹品——缺
第十六段——五部會品——般若波羅蜜多敎稱讃分　第十三
第十七段——五祕密品——金剛手菩薩最上祕害大曼拏羅儀軌分　第十四
（以上）——卷三

文義は經に就て知るべし。理趣經等の密部には夫々事相傳承の意あり。別の指南に依るべし、終りに普通の理趣分經典の始めは十六善神の圖と神名と陀羅尼とを載す。これ藥師十二神將等より變化し來れるもの、十六會を通じて十六空を示し變じて十六善神と見るものと云ふ、稍附會の觀あるも恐らく然る寓意あるべし。

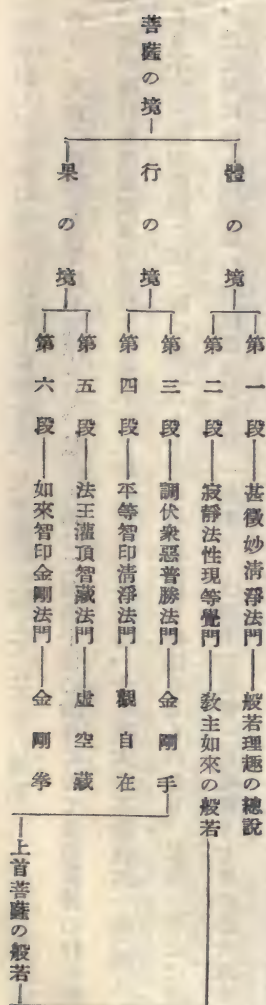
椎尾辨匡記

法賢譯は謂ゆる廣本と云ふに合するものなるべし。玄弉譯に於ける如く七母天・三兄弟・姉妹品の三を缺く。之を表すれば次の如し。

第一段—金剛薩埵品—大三昧金剛眞實理儀軌分　第一
第二段—毘盧遮那品—一切如來眞實金剛三昧儀軌分　第二　—巻一
第三段—降三世品—降伏三界金剛三昧大儀軌分　第三
第四段—觀自在品—清淨諸煩惱三昧大儀軌分　第四
第五段—虚空藏品—一切寶灌頂大三昧儀軌分　第五

- 般若理趣の別明
  - 菩薩の行
    - 實相修斷の相
      - 第七段——離諸戲論輪字法門——文殊
      - 第八段——入廣大輪平等法門——轉法輪
    - 觀照修斷の相
      - 第九段——眞淨供養無上法門——大空藏
      - 第十段——能善調伏智藏法門——摧伏一切魔
    - 二法遍修の相
      - 第十一段——性平等性最勝法門——因
      - 第十二段——有情住持勝藏法門——行
  - 菩薩の果
    - 句利果德——第十三段——無邊無際究竟法門——果
    - （因・行・果）——凡夫衆生の般若
    - 利他果德——第十四段——甚深理趣無上法門——般若理趣の結歎

即ち本經は般若理趣の總說別明結歎の三段とし、第一段を以て總說にあて、般若の理趣とは清淨の句義にして、般若無漏の眞智は一切の妄想執著を遠離し無我無所得大空となれる清淨無垢の眞理趣を指す。次に般若理趣の別明に於て第二段は遍照如來の相にて教主如來の三昧とし、第三段より第十段に至る八章を上首八大菩薩の三昧とし、後の第十一段より第十三段に至る三章を一般衆生の三昧とす。而かも盡く佛果の三昧に住するものとす。此の玄奘譯の理趣分に在りても明かに密教を傳ふるも、最後の三種の咒文のみを擧ぐ。之に反して不空譯の正宗は十七段にして一々に卽眞言を明して般若の眞理趣とす。

- 第一段——金剛薩埵品——衆生本有德——因德總說——本有圓滿
- 第二段——毘盧遮那品——中央——中臺大日
- 第三段——降三世品——東方
- 第四段——觀自在品——西方
- 第五段——虛空藏品——南方

照明なり、後の二段は、果の境を明す。第五に法王灌頂智藏法門と云ふは、二行に由て位と財との果を得ることを顯す。第六に如來智印金剛法門と云ふは、二行に由て自體の果を得ることを顯す。次六段は行を明す、復分て三と爲す、初の二段は實相に依て斷修の相を明す。第七に離諸戲論輪字法門と云ふは、無相を觀ずるに由て分別を斷ずる故に、第八に入廣大輪平等法門と云ふは、平等を觀ずるに由て眞を修證するが故に、次の二段は觀照に依て修斷するの相を明す。第九に眞淨供養無上法門と云ふは、觀照に依て眞の供養を修するに由るが故に、第十に能善調伏智藏法門と云ふは觀照に依て忿等を除くに由るが故に。後の二段は二法に依て遍修するの相を明す。第十一に性平等性最勝法門と云ふは、實相は一切の人法に平等に遍滿すと修觀せしむるが故に、第十二に有情住持勝藏法門と云ふは、觀照は諸の人法に遍して皆善緣することを修觀せしむるが故に、前の六境を觀ずるに由て六の行を起し已る。後の二段は得果を明す、第十三に無邊無際究竟法門と云ふは、一果を得る時に、廣深一味にして、極めて殊勝なるが故に、自利の果德なり、第十四に甚深理趣無上法門と云ふは、二果を得已て、自ら利し他を利して、三界の主と爲て、諸の有情の所願に隨て皆證せしむ、利他の果德なり。

今この述讃の示意に從ひ大體を表示するときは

研究」一卷を出し、密教の傳解と比較し並解せり。又理趣經に關しては不空の理趣品の釋二卷(閏八,4-13)(1003 第十九 607a-617b)あり。天台の智證安然等は不宜作とし、弘法大師は二教論十住心論等に於て金剛薩埵の作と判ず。本經の研究解釋に必要なり。その他般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述一卷(閏八 13)(1004 第十九 617b-618b)あり不空三藏理趣釋に依て經の初段の十七清淨句曼荼羅を略述せるものなり。弘法の著には理趣經開題、眞實經文句一卷あり、此文句に中性院賴瑜の理趣經文句愚草一卷あり。大樂不空眞實三昧耶經十七尊念誦次第法第十七卷は眞寂法親王の作にして十七段別修の法なり。大樂十七段圖は十七段々の曼荼羅圖樣を示す。此の他仁和南岳坊濟暹の理趣經顯義鈔、理明房興然の理趣祕藏鈔、勸修寺道寶の理趣經鈔、東寺杲寶の理趣經略鈔など言家の要點にして接し易きため釋書頗る多し。大正四年權田雷斧氏の理趣經略註に參照すべし。

般若理趣分の內容は同じく序正流通の三段あり、その中肝心たる正宗は十四の章段となる。述讃には云ふ。

總じて十四段の經あり之を合して三と爲す、初の六段は、菩薩の境を明し、次の六段は、菩薩の行を明し、後の二段は、菩薩の果を明す。一切の佛教所詮の義理は、此の三を離れず。境を說くことは、先づ法の染淨因果の善惡に於て此れは欣厭す可し、此れは修斷す可きことを知らしむ。行を說くことは次に境に依て行を起し、修斷するの法を知らしむ。果を說くことは後に行を行して果を得る、殊勝の相を知らしむ。初の六段境を明すを、復分て三と爲す、初の二段は體の境を明す、第一に甚深微妙清淨法門と云ふは、卽ち是れ妄に對して眞實相眞如の境體を顯す。第二に寂靜法性現等覺門と云ふは、卽ち是れ闇を除き觀照正智の境體を顯す。眞如は是れ性、正智は是相、說に前後有り、下皆準じて知れ。次の二段は行の境を明す。第三に調伏衆惡普勝法門と云ふは、實相を觀ずるに由て、能く衆惡を伏す、第四平等智印清淨法門と云ふは、觀照を觀するに由る、智慧

三、金剛頂瑜伽理趣般若經　一卷　唐金剛智　於中天　開、八、14a(241第八778b—)

四、大樂金剛不空眞實三摩耶經般若波羅蜜多理趣品　一卷　唐不空　大興善寺　開、八、1—(243 第八 784a—)

五、佛說最上根本大樂金剛不空三昧大教王經　七卷　宋法賢　成、三、(248 第八 786b—)

六、遍照般若波羅蜜經　一卷　宋施護　九八〇—一〇〇〇　成、三、49a(242 第八 781c)

此五本中「二」は「一」と同本異譯と稱せらるゝも、原本幾分か異れるが如し。「三」は特に梵本に依て中天で翻譯したと稱するも、「一」を參照して「二」を撰したるもの別譯と認め難し。唯密教者の翻案に過ぎず。「四」は「二」「三」の別譯で、「五」は著るしく增廣せられたる儀軌を伴ふを以て直ちに同視し難し「六」は「一」乃至「四」の原本とは餘程差異あるものと思はる。然し此「五」を除ける五本は大都同一にして齊しく金剛手によりて般若を辨ずるもの、その差異は只密教と意に濃淡あるのみ。從つて密教家に在りては、その異點を重視し、眞言宗には不空譯の般若波羅蜜多理趣品を理趣經とし、兩部大經中の金剛頂經の大本十萬頌經に於ける十八會中第六會法門を般若理趣會と稱す。その要旨を詮顯せるものが此理趣經なりとし諸本中最も甚深奧祕の經典として、その宗には日々夜々之を讀誦し亡者の回向にも祖師の御影供にも、本尊の法樂にも供ふるを常とす。この理趣經と大般若理趣分とは譯者は前述の如く判ずるも古來種々に議論す。(一)別會別本說　道範の聽海鈔、果寶の理趣經略鈔、理趣釋祕要鈔、寶冊鈔、高汰の純祕鈔、玄廣の愚辨鈔等を代表とす。(二)同會別本說又は同聽異聞說　安然の教時問答、重譽の教相鈔の如きを主とす。(三)同本異譯說　貞元錄、傳教大師、清水寺の定深法師あり、殊に豐山亮貞の存公記に十箇の理證を擧げて此說を主張するが如き、その派としては異彩なるも辨としては妥當と云ふべし。

本理趣分には慈恩窺基の理趣分述贊三卷(續藏三十八の一)(1695 第三十三 25a)あり、昭和二年伊藤古鑑氏「大般若理趣分の

第十理趣分解說

第十分は般若理趣分にして第五百七十八巻全體なり。大般若の主體は初五會に在るも、その中、大品小品僅かに行はれ漢土の釋家若干ありしが、梁代の集解も逸して傳はらず、存するもの數指を屈するに過ぎず。然るに前分金剛と今分理趣とは弘通最も盛なり。金剛經は國譯の外梵本より直接間接に漢蕃蒙滿英佛獨等の譯あり、禪人多く依用す。これに比すれば今分は原譯稍及ばざるが如きも密部の要點として諷誦講說尊重頗る著るしきものあり。

本經の梵本としては大正六年三月栂尾祥雲・泉芳璟二氏の編纂せる「梵藏漢對照般若理趣經」あり。依る所、梵文の寫本は前半大部分は露都に後半少部分は英國にありしを、獨のロイマン氏「北方アリアの言語及文學」(Zur nordarischen Sprache und Literatur Schrifter der Wissenschaftlichen Gesellschaft in Strassburg) と題せる論文に公にせるもの、これが證定は渡邊海旭氏の力に依る。對照本の西藏譯は大谷大學の藏本を用ひ、支那譯には宋法賢譯の七巻廣經を除き他の現存異譯を總べて添加せり。

今此に譯出する玄奘譯の大般若第十會は又達磨流支(則天武后は菩提流志と改めしむ)等の別譯あり。この諸本の比較に就ては拙著佛教經典概說一六七、一六八、一九三—一九五參照)

今諸本を表示すれば

一、大般若第十會第五百七十八般若理趣分　一巻　玄奘　龍朔三年(六六三)　玉華宮　日、九、77 (220 第七 986)

二、實相般若波羅蜜經　三巻　流支　長壽二年(六九三)　東都大周東寺　成、三、46b—(240 第八 776a)　結、四、81(2154 第五 569b)

應に是の如き觀を作すべし
露泡夢電雲の如しと

と。時に薄伽梵是の經を説き已て尊者善現及び諸の苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦幷びに諸の世間の天人阿素洛健達縛等薄伽梵の所説の經を聞き已て皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

多し善逝。何を以ての故に、世尊、若し極微聚是れ實有なる者ならば佛は說いて極微聚と爲すべからず。所以は何ん、如來は極微聚は卽ち爲れ聚に非ざるが故に極微聚と名づくと說きたまへばなり。[九〇]如來は三千大千世界は卽ち世界に非ざるが故に三千大千世界と名づくと說きたまへり。何を以ての故に、世尊、若し世界是れ實有なる者ならば卽ち爲れ[九一]一合執なり。如來は一合執は卽ち爲れ執に非ざるが故に一合執と名づくと說きたまへりと。佛、善現に告げたまはく、此の一合執は言說す可からず戲論す可からず。然るに彼の一切の愚夫異生は强いて是の法を執せり。[九二]何を以ての故に、善現、若し是の言を作さん、如來は我見有情見命者見士夫見補特伽羅見意生見摩納婆見作者見受者見を宣說するなりと。汝が意に於て云何、是の如き所說は正語と爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、不なり善逝、是の如き所說は爲れ正語に非ず。所以は何ん、[九三]如來の說きたまふ所の我見有情見命者見士夫見補特伽羅見意生見摩納婆見作者見受者見は卽ち爲れ見に非ざるが故に我見乃至受者見と名づくればなりと。[九四]佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩乘に發趣すること有る者は一切法に於て應に是の如く知るべく、應に是の如く見るべく、應に是の如く信解すべく、是の如く法想に住せざれ。何を以ての故に、善現、法想を法想とする者は如來は說いて想に非ずと爲したまへばなり。是の故に如來は說いて法想を法想と名づけたまへり。

[九五]復た次に善現、若し菩薩摩訶薩ありて無量無數の世界に盛り滿てる七寶を以て如來應正等覺に奉施せんに、若し善男子或は善女人此の般若波羅蜜多經の中の乃至四句の伽他に於ても受持讀誦し究竟通利し理の如く作意し及び廣く他の爲に宣說開示せば此の因緣に因りて生ずる所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數ならん。云何が他の爲に宣說開示する。他の爲に宣說開示せざるが如くなるが故に他の爲に宣說開示すと名づくと。爾の時世尊而かも頌を說いて曰はく、

[九六]諸の和合して爲る所は　星翳燈幻

により て量る、卽ち最大を最小にて量るが故に無限量なり。

【九〇】三千大千世界を明す。

【九一】一合執。Piṇḍagrāha 秦魏には一合相と譯し魏宋本と陳とは聚一執と譯し隋には搏取、義淨は聚執と譯す。渾一とする執なり。而も實に執すべきなきを云ふ。

【九二】第三十一、知見不生分。

【九三】如來は實執せざるが故に、我見等と說くを云ふ。

【九四】法想を說く。

【九五】第三十二、應化非眞分。說と說けりとせず、能詮所詮倶に空なり。

【九六】玄奘譯は諸和合所爲、如星翳燈幻、露泡霧電雲、應作如是觀と云ひ秦羅什譯は一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀と云ひ魏菩提流支は一切有爲法、如星翳燈幻、露泡夢電雲應作如是觀と云ひ、陳眞諦は應觀有爲法、如暗翳燈幻、露泡夢電雲と云ひ、隋笈多は星翳燈幻、露泡夢電雲、見如是、此有爲者と云へり。

[八二]應に佛の法性は　即ち導師の法身なりと觀ずべし
法性は識る所に非ず　故に彼れ了すること能はず

と。[八三]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來應正等覺は諸相具足せるを以て無上正等覺を現證する耶。善現、汝今當に是の如き觀を作すこと勿れ。何を以ての故に、善現、如來應正等覺は諸相具足せるを以て無上正等菩提を觀證せざればなり。

[八四]復た次に善現、是の如き菩薩乘を發趣する者は頗し小法も若しは壞若しは斷ずるを施設する耶。善現、汝今當に是の如き觀を作すこと勿れ。諸の菩薩乘を發趣する者は終に少法も若しは壞し若しは斷ずるを施設せざるなり。

[八五]復た次に善現、若し善男子或は善女人殑伽河の沙に等しき世界に盛り滿てる七寶を以て如來應正等覺に奉施せんに、若し菩薩有りて諸の無我無生法の中に於て堪忍を獲得せば是の因緣に由りて生ずる所の福聚は甚だ彼れよりも多し。

[八六]復た次に善現、菩薩は福聚を攝受すべからずと。具壽善現即ち佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩は福聚を攝受すべからざるかと。佛言はく、善現、攝受すべき所は攝受すべからず、是の故に說いて攝受すべき所と名づくるなり。

[八七]復た次に善現、若し說いて如來は若しは去り若しは來り若しは住し若しは坐し若しは臥すと言ふもの有らば是の人は我が所說の義を解せざるなり。何を以ての故に、善現、如來とは即ち是れ眞實眞如の增語を言へばなり。都て去る所無く從て來る所無きが故に如來應正等覺と名づくるなり。

[八八]復た次に善現、若し善男子或は善女人、乃至三千大千世界の大地の極微塵の量に等しき世界あり、即ち是の如き無數世界の[八九]色像を以て量を爲すこと極微聚の如くならんに、善現、汝が意に於て云何、是の極微聚は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、是の極微聚は甚だ多し世尊、甚だ

如來は總合進動の上に進出し給ふ。何の相も有も之を完うせざると倶に無も空も之を完うせず。能く實相の進み、法性の如如に於て完了せらるゝのみ。

【八二】增一阿含には蓮華色比丘尼轉輪聖王と化して佛を見る、然るに須菩提は四大六處に何ぞ佛を見るを須ゐんかとて座に復してその所應作に盡す、佛之を第一に佛を見るものと讃する因緣あり。今は色聲に佛を求むるものを斥け、彼は邪見を生じ邪見に住するとす。

【八三】佛は法性、般若、妙導に求むべし、六識分別の了境ならざれば六處などに觀るべきにあらず。

【八三】第二十七、無斷無滅分。諸相具足を以て成佛せざるを說く。

【八四】菩薩は一法も壞斷せず。

【八五】第二十八、不受不貪分。無我無生を忍受する入多德を明す。

【八六】福聚を攝受せざるを明す。

【八七】第二十九、威儀寂靜分。如來に去來等の取相すべからざるを明す。

【八八】第三十、一合離相分。極微聚を明す。

【八九】多世界の大形像を極微

[七五] 復た次に善現、若し善男子或は善女人、七寶を集むること聚量三千大千世界の其の中の所有る妙高山王に等しからんを持ち用て布施せんに、若し善男子或は善女人、此の般若波羅蜜多經の中の乃至四句の伽他に於ても受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せば、善現前に說きし福聚は此の福聚に於て百分計りも及ぶ能はざる所、是の如く千分若しは百千分若しは俱胝百千分若しは俱胝那庾多百千分若しは數分若しは計分若しは等分若しは喩分若しは鄔波尼殺曇分に亦た及ぶこと能はずと。

[七六] 佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來頗し是の念を作さん、我れ當に諸の有情を度脫すべき耶と。善現、汝今當に是の如き觀を作すこと勿れ。何を以ての故に、善現、少有情も如來の度する者無ければなり。善現、若し有情を如來の度する者有らば如來は卽ち應に其の我執有り有情執有り命者執有り士夫執有り補特伽羅等の執有るべし。[七七] 善現、我等の執とは如來は說いて執に非ずと爲すが故に我等の執と名づくるなり。而かも諸の愚夫異生は强いて此の執有りとす。善現、愚夫異生とは如來は說いて生に非ずと爲すが故に愚夫異生と名づくるなりと。

[七八] 佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつる可きや不やと。善現答へて言はく、我れ佛の所說の義を解する如くんば諸相具足せるを以て如來を觀たてまるべからずと。佛言はく、善現、善哉善哉、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつるべからず。善現、若し諸相具足せるを以て如來を觀たてまつらば [七九] 轉輪聖王は應に是れ如來なるべし。是の故に諸相具足せるを以て如來を觀たてまつるべからず。是の如し應に [八〇] 諸の相非相を以て如來を觀たてまつるべしと。爾の時世尊頌を說いて曰はく、

[八一] 諸の色を以て我れを觀　音聲を以て我を尋ぬる
彼は邪斷を履せん　當に我れを見るべきこと能はず

【七五】第二十四、福智無比分。重ねて般若の大功德を說く。

【七六】第二十五、化無所化分。如來は度して度せざるを明す。

【七七】若し實に執あらば執とせず、執ならざるを執するが故に執なり。

【七八】第二十六、法身非相分。三たび相好を以て如來を觀るべからざるを明す。これ相好觀佛、木彫鑄金塑像の興隆に對抗せるなり。

【七九】轉輪聖王も三十二相具せりとせらる。蓋し相好を以て佛を見るは鬱多羅等ノ婆羅門と王者の莊嚴と希臘藝術と民衆の色相的觀察とに基づけるなり。

【八〇】相非相。佛法には取相し分別し實在とすべからず、

やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつる可からず。何を以ての故に、世尊、諸相具足を諸相具足とする者は如來は說いて相具足せるに非ずと爲したまへばなり。是の故に如來は說いて諸相具足を諸相具足と名づけたまへりと。

[七〇]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來頗し是の念を作さん、我れ當に法を說く所有るべき耶と。善現、汝今當に是の如き觀を作すこと勿れ。何を以ての故に、善現、若し如來法を說きたまふ所有りと言はゞ即ち我れを謗れりと爲し、非善取と爲す。何を以ての故に、善現、法を說くと法を說くとする者と法の得可き無きが故に法を說くと名づくればなりと。[七一]爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、當來世の後時後分の後の五百歲の正法將に滅せんとする時分轉の時に於て頗し有情の是の如き色類の法を說くを聞き已て能く深く信ずる有りや不やと。佛言たまはく、善現、彼れは有情に非ず有情ならざるに非ず。何を以ての故に、善現、一切有情とは如來は有情に非ずと說きたまふが故に一切有情と名づくればなりと。

[七二]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、頗し少法も如來應正等覺の無上正等菩提を現證する有り耶と。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、我れ佛の所說の義を解する如くんば少法も如來應正等覺の無上正等菩提を現證すること有ること無しと。佛言はく、善現、是の如し是の如し、中に於て少法も有る無く得る無きが故に無上正等菩提と名づくと。

[七三]復た次に善現、是の法は平等にして其の中間に於て平等ならざる無きが故に無上正等菩提と名づく。我性無く有情性無く命者性無く士夫性無く補特伽羅等の性無く平等なるを以ての故に無上正等菩提と名づく。[七四]一切の善法は現證ならざる無く、一切の善法は妙覺ならざる無し。善現、善法と善法とする者とは如來は一切を說いて非法と爲したまへり。是の故に如來は說いて善法を善法と名づけたまへり。

【七〇】第二十一、非說所說分。眞の說法を明す。

【七一】法滅時の信法を明す。

【七二】第二十二、無法可得分。現證非有を明す。

【七三】第二十三、淨心行善分。無上菩提に者想なきを明す。

【七四】善法を明す。

【六六】佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、乃至殑伽河の中の所有る諸の沙を、如來は是を沙なりと說きたまふや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、是の如し善逝、如來は是を沙なりと說きたまふと。佛言はく、善現、汝が意に於て云何、乃至殑伽河の中の所有る沙の數ほど假使ひ是の如きに等しき殑伽河有り、乃至是の諸の殑伽河の中の所有る沙の數ほど假使ひ是の如きに等しき世界有らしめんに、是の諸の世界は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、是の如し善逝、是の諸の世界は其の數甚だ多しと。佛言たまはく、善現、乃至爾所の諸の世界の中の所有る有情、彼の諸の有情は各種種有りて其の心流注するを我れ悉く能く知れり。何を以ての故に、善現、心の流注を心の流注とする者は如來は流住に非ずと說きたまへばなり。是の故に如來は說いて心の流注を心の流注と名づけたまへり。所以は何ん、善現、過去の心も得可からず、未來の心も得可からず、現在の心も得可からざればなりと。

【六七】佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、若し善男子或は善女人、此の三千大千世界に盛り滿てる七寶を以て如來應正等覺に施し奉らんに是の善男子或は善女人の是の因緣に由りて生ずる所の福聚は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言たまはく、善現、是の如し是の如し、彼の善男子或は善女人の此の因緣に由りて生ずる所の福聚は其の量甚だ多し何を以ての故に、善現、若し福聚有らんも如來は福聚を福聚と說きたまはざればなりと。【六八】佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、色身圓實なるを以て如來を觀たてまつる可きや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、色身圓實なるを以て如來を觀たてまつる可からず。何を以ての故に、世尊、色身の圓實を色身の圓實とする者は如來は圓實に非ずと說きたまへばなり。是の故に如來は說いて色身圓實を色身圓實と名づけたまへりと。

【六九】佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつる可きや不

【六六】心の流注無量を知る佛眼界を明す。そこに作者想なく我想なし。心想なく三世想なし。

【六七】第十九、法界通化分。眞の福聚を明す。

【六八】第二十、離色離相分。眞の色相圓實を明す。

【六九】者想を離れたる眞の諸相具足を明す。

[五六]佛、善現に告げたまはく、譬へば士夫の具せる身の大身なるが如しと。具壽善現即ち佛に白して言さく、世尊、如來の說きたまふ所の、士夫の具せる身の大身は如來は爲れ身に非ずと說きたまへり。是の故に說いて具せる身の大身なりと名づくと。佛言はく、善現、是の如し是の如し、[五七]若し諸の菩薩是の如き言を作さん、我れ當に無量の有情を滅度すべしと。是れ則ち說いて菩薩と名づくべからず。何を以ての故に、善現、頗し少法も菩薩と名づくる有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、少法も名づけて菩薩と爲すもの有ること無しと。佛、善現に告げたまはく、有情を有情とする者は、如來は有情に非ざるが故に有情と名づくと說きたまふ。是の故に如來は一切法に有情有ること無く、命者有ること無く、士夫有ること無く、補特伽羅等有ること無しと說きたまへり。[五八]善現、若し諸の菩薩是の如き言を作し、我れ當に佛土の功德莊嚴を成辦すべしとするも亦た是の如く說かん。何を以ての故に、善現、佛土の功德莊嚴を佛土の功德莊嚴とする者は如來は莊嚴に非ずと說きたまへばなり。是の故に如來は說いて佛土の功德莊嚴を佛土の功德莊嚴と名づけたまへり。[五九]善現、若し諸の菩薩、無我法に於て無我法なりと深く信解する者は如來應正等覺は爲れ菩薩の菩薩なりと說きたまへりと。

[六〇]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來等は現に[六一]肉眼有りや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、如來等は現に肉眼有りと。佛言はく、善現、汝が意に於て云何、如來等は現に[六二]天眼有りや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、如來等は現に天眼有りと。佛言はく、善現、汝が意に於て云何、如來等は現に[六三]慧眼有りや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、如來等は現に慧眼有りと。佛言はく、善現、汝が意に於て云何、如來等は現に[六四]法眼有りや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、如來等は現に法眼有りと。佛言はく、善現、汝が意に於て云何、如來等は現に[六五]佛眼有りや不やと。善現答へて言はく、是の如し世尊、如來等は現に佛眼有りと。

【五六】具身大身を明す。

【五七】人空を明す。

【五八】我れ成辦するとせば作者想に縛せらるゝ誤なるを云ふ。

【五九】無我を正觀するものが眞の菩薩なり。

【六〇】第十八、一體同觀分。如來の具眼、卽ち五眼具足を明す。

【六一】肉眼。五根の一、また一切の色法に對する感官、物界、定量因果の差別世界を見る。

【六二】天眼。修定と報得とによる定見。又一切の心眼、黒散定に通ず、心界、不定量因果の差別世界を見る。肉眼と天眼とを世間眼と云ふ。

【六三】慧眼。般若眼で一相無相平等一如を見る。

【六四】法眼、平等上に差別を見、慈悲眞生を見る。

【六五】佛眼、覺者眼とは平等差別深廣究竟し、一切を我が子として成就して執なく邪なし。宇宙を完成するなり。

何を以ての故に、善現、少法も名づけて菩薩乘に發趣する者と爲すこと有ること無ければなりと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來は昔然燈如來應正等覺の所に於て頗し少法も能く阿耨多羅三藐三菩提を證せしこと有りしや不やと。是の語を作し已れるに、具壽善現、佛に白して言さく、世尊、我れ佛の所說の義を解する如くんば如來は昔然燈如來應正等覺の所に於て少法も能く阿耨多羅三藐三菩提を證したまひしこと有ること無しと。是の語を說き已れるに、佛、具壽善現に告げて言はく、是の如し是の如し。善現、如來は昔然燈如來應正等覺の所に於て少法も能く阿耨多羅三藐三菩提を證せしこと有ること無し。何を以ての故に、善現、如來昔然燈如來應正等覺の所に於て若し少法も能く阿耨多羅三藐三菩提を證せる有らば然燈如來應正等覺は我れに記を授けて言たまふべからず、汝摩納婆は當來世に於て釋迦牟尼如來應正等覺と名づくと。善現、如來は少法も能く阿耨多羅三藐三菩提を證せしこと有ること無きを以て、是の故に然燈如來應正等覺は我れに記を授けて言たまへり。汝摩納婆は當來世に於て釋迦牟尼如來應正等覺と名づくと。所以は何ん、善現、如來とは卽ち是れ眞實眞如の增語を言ひ、如來とは卽ち是れ無生法性の增語を言ひ、如來とは卽ち是れ永く道路を斷ぜる增語を言ひ、如來とは卽ち是れ畢竟不生の增語を言へばなり。何を以ての故に、善現、若し實に生ずる無くんば卽ち最勝義なればなり。善現、若し是の如く、如來應正等覺の能く阿耨多羅三藐三菩提を證するを說く者は當に知るべし、[五五]此の言は眞實ならずと爲すと。所以は何ん、善現、彼れは我れ不實の執を起すと謗るに由るなり。何を以ての故に、善現、少法も如來應正等覺の能く阿耨多羅三藐三菩提を證すること有ること無ければなり。善現、如來の現前に等しく證する所の法、或は說く所の法、或は思ふ所の法は卽ち其の中に於て諦に非ず妄に非ず。是の故に如來は一切法は皆是れ佛法なりと說きたまふ。善現、一切法を一切法とする者は、如來は一切法に非ずと說きたまへり。是の故に如來は說いて一切法を一切法と名づけたまへりと。

【五五】南條譯「須菩提、彼は不如實を言ひ、彼は不實執を以て我を謗る者なり」とす。

の有情は宿生に造りし所の諸の不淨業にて應に悪趣を感ずべきも現法の中にて輕毀に遭ふを以ての故に宿生に造りし所の諸の不淨業皆悉く消盡して當に無上正等菩提を得べければなり。何を以ての故に、善現、我れ過去を憶ふに無數劫に於て復た無數を過ぎ、然燈如來應正等覺の先に於て復た先を過ぎ曾て八十四倶胝那庾多百千の諸佛に値ひて我れ皆承事し、既に承事し已つて皆違犯すること無かりき。善現、我れ是の如き諸佛世尊に於て皆承事することを得たり、既に承事し已て皆違犯すること無かりき。若し諸の有情後時後分の後の五百歳の正法將に滅せんとする時分轉の時に此の經典に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せば、善現、我が先の福聚は此の福聚よりも百分計りも及ぶ能はざる所、是の如く千分若しは百千分若しは倶胝百千分若しは倶胝那庾多百千分若しは[五二]數分若しは計分若しは算分若しは喩分若しは鄔波尼殺曇分にも亦た及ぶこと能はず。善現、我れ若し具さに爾の時に當に是の善男子或は善女人の生ずる所の福聚乃至是の善男子是の善女人の攝する所の福聚を說かんに諸の有情有らば則便ち迷悶し心惑ひて狂亂せん。是の故に善現、如來は是の如き法門は思議す可からず稱量す可らず、應當に思議す可からざる所感の異熟を希冀すべしと宣說したまへるなりと。

[五三]爾の時具壽善現復た佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩乘を發趣する者有らば應に云何が住し、云何が修行し、云何が其の心を攝伏すべきと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩乘を發趣する者有らば應當に是の如きの心を發起すべし。我れ當に皆一切有情をして[五四]無餘依妙涅槃界に於て般涅槃せしむべしと。是の如き一切の有情を度して滅度せしめ已ると雖も而かも有情の滅度を得る者無し。何を以ての故に、善現若し諸の菩薩摩訶薩、有情想轉ぜば說いて菩薩摩訶薩と名づくべからざればなり。所以は何ん、若し諸の菩薩摩訶薩ならば說いて有情想轉ずと言ふべからざればなり、是の如く命者想士夫想補特伽羅想意生想摩納婆想作者想受者想の轉ずるも當に知るべし亦た爾なりと。

【五二】　數分。僧祇、阿僧祇と大數量を示す。

【五三】　第十七、究竟無我分。眞の菩薩發心は一切を得涅槃せしめて、實に滅等あることなきを說き、一切法を明かにす。

【五四】　無餘依等、個在依身を留めざる大悟、大寂滅なり。

の中時分に復た殑伽河の沙に等しき自體を以て布施し、日の後時分に亦た殑伽河の沙に等しき自體を以て布施し、此の異門に由りて倶胝那庾多百千劫を經て自體を以て布施せんに、若し是の如き法門を說くを聞きて誹謗を生ぜざる有らば此の因緣に由りて生ずる所の福聚すら尙ほ前よりも多く無量無數なり、何に況んや能く是の如き法門に於て具足し畢竟じて書寫し受持讀誦し究竟通利し、及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せんをや。

四九 復た次に善現、是の如き法門は思議す可からず、稱量す可からず、應當に五〇思議す可からざる所感の異熟を希冀すべし。善現、如來の是の如き法門を宣說したまふは最上乘に趣く諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故なり、最勝乘に趣く諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故なり。善現、若し此の法門に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意する有らば即ち爲れ如來其の佛智を以て悉く是の人を知りたまはん。卽ち爲れ如來其の佛眼を以て悉く是の人を見たまふなり。則ち爲れ如來悉く是の人を覺したまふなり。是の如き有情は一切無量の福聚を成就して皆當に不可思議不可稱量の無邊の福聚を成就すべし。善現、是の如き一切有情は其の肩に如來の無上正等菩提を荷擔す。何を以ての故に、善現、是の如き法門は諸の下劣の信解の有情の能く聽聞する所に非ざればなり。諸の我見に非ず、諸の有情見に非ず諸の命者見に非ず、諸の士夫見に非ず、諸の補特伽羅見に非ず、諸の意生見に非ず、諸の摩納婆見に非ず、諸の作者見に非ず、諸の受者見の能く聽聞する所に非ず。此れ等若し能く受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意すとせば是の處有ること無し。復た次に善現、若し地方所にて此の經典を開かば此の地方所は當に世間の諸天及び人阿素洛等の供養禮敬し右遶して佛の靈廟の如くする所と爲るべし。

五一 復た次に善現、若し善男子或は善女人、此の經典に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意するも若しは輕毀に遭ひ極めて輕毀に遭はん。所以は何ん、善現、是の諸

【四九】般若不思議無我法門は佛廟の如く重んぜらる。
【五〇】不可思議果報即ち無漏の勝報なり。
【五一】第十六、能淨業障分。受持者無量福あるに輕んぜられ毀らるゝは宿世の重罪これによりて淸算せらるゝなり。

羅想無く意生想無く摩納婆想無く作者想無く受者想無かりき。我れ爾の時に於て都て有想も亦た非無想も無かりき。是の故に善現、菩薩摩訶薩は一切想を遠離して應に阿耨多羅三藐三菩提の心を生ずべし。色に住して其の心を生ずべからず、非色に住して其の心を生ずべからず、聲香味觸法に住して其の心を生ずべからず、非聲香味觸法に住して其の心を生ずべからず。都て住する所無くして應に其の心を生ずべし。何を以ての故に、善現、諸の住する所有らば則ち爲れ住するに非ざればなり。是の故に如來は諸の菩薩に、應に住する所無くして布施を行ずべく、色聲香味觸法に住して布施を行ずべからずと說きたまへるなり。

[四六]復た次に善現、菩薩摩訶薩は諸の有情の爲に義利を作すが故に應當に是の如く棄捨し布施すべし。何を以ての故に、善現、諸の有情想は卽ち是れ想に非ざればなり。一切有情は如來は卽ち說いて有情に非ずと爲したまへり。善現、如來は是れ實語者、諦語者、如語者、不異語者なり。復た次に善現、如來の現前に等しく證したまふ所の法、或は說きたまふ所の法、或は思ふ所の法は卽ち其の中に於て諦に非ず妄に非ず。善現、譬へば士夫の闇室に入るに都て見る所無きが如く、當に知るべし菩薩若し事に墮せん、謂ゆる事に墮して布施を行ずるも亦復た是の如しと。善現、譬へば明眼の士夫夜曉を過ぎ已つて日光出づる時種種の色を見るが如く、當に知るべし菩薩事に墮せざらん、謂ゆる事に墮せずして布施を行ずるも亦復た是の如しと。

[四七]復た次に善現、若し善男子或は善女人の此の法門に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せば則ち爲れ如來其の佛智を以て悉く是の人を知りたまはん。則ち爲れ如來其の佛眼を以て悉く是の人を見たまふなり。則ち爲れ如來悉く是の人を覺したまふなり。是の如き有情は一切當に無量の福聚を生ずべし。

[四八]復た次に善現、假使ひ善男子或は善女人日の初時分に殑伽河の沙に等しき自體を以て布施し、日

【四六】事に墮せざる布施を明す。

【四七】佛智佛眼を以て智見するを云ふ。

【四八】第十五、持經功德分。永劫自體を布施するよりも般若受持功德無量倍するを明す。

とする時分轉の時に於て當に是の如き甚深の法門に於て領悟信解し、受持讀誦し究竟通利し、及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意すべくんば當に知るべし最勝希有を成就すと。何を以ての故に、世尊、彼の諸の有情は我想の轉ずる無く、有情想無く命者想無く士夫想無く補特伽羅想無く意生想無く摩納婆想無く作者想無く受者想の轉ずる無ければなり。所以は何ん、世尊、諸の我想は卽ち是れ想に非ず、諸の有情想命者想士夫想補特伽羅想意生想摩納婆想作者想受者想は卽ち是れ想に非ざればなり。何を以ての故に、諸佛世尊は一切の想を離るればなりと。是の語を作し已んぬ。

[四二]爾の時世尊、具壽善現に告げて言はく、是の如し是の如し、善現、若し諸の有情是の如き甚深の經典を說くを聞いて驚かず懼れず怖畏有ること無くんば當に知るべし最勝希有を成就すと。何を以ての故に、善現、[四三]如來の說きたまへる最勝波羅蜜多は謂ゆる般若波羅蜜多なり。善現、如來の說きたまふ所の最勝波羅蜜多は無量の諸佛世尊の共に宣說したまふ所なるが故に最勝波羅蜜多と名づく。如來は最勝波羅蜜多卽ち波羅蜜多に非ずと說きたまふ。是の故に如來は說いて最勝波羅蜜多と名づけたまへり。

[四四]復た次に善現、如來は忍辱波羅蜜多は卽ち波羅蜜多に非ずと說き、是の故に如來は忍辱波羅蜜多と名づくと說きたまへり。何を以ての故に、善現、我れ昔過去世に曾て[四五]羯利王に支節の肉を斷ぜられしに我れ爾の時に於て都て我想或は有情想或は命者想或は士夫想或は補特伽羅想或は意生想或は摩納婆想或は作者想或は受者想無かりき。我れ爾の時に於て都て有想も亦た非無想も無かりき。何を以ての故に、善現、我れ爾の時に於て若し我想有らば卽ち爾の時に於て應に恚想有るべし、我れ爾の時に於て若し有情想命者想士夫想補特伽羅想意生想摩納婆想作者想受者想有らば卽ち爾の時に於て應に恚想有るべければなり。何を以ての故に、善現、我れ過去五百生の中を憶ふに曾て自らの號を忍辱仙人と爲しき。我れ爾の時に於て都て我想無く有情想無く命者想無く士夫想無く補特伽

【四二】最勝波羅蜜を明す。

【四三】南條講義にはその梵文譯には「如來所說の最勝成滿は亦非成滿なり」と云ふ。

【四四】忍辱波羅蜜を明す。

【四五】羯利王 Kaliṅga rāja 秦魏兩本歌利王とし宋陳には迦陵伽王とし隋は惡王とし、淨は羯陵伽王とせり。歌利國の王なり。Kali は惡世鬪諍の意なり。

三千大千世界の大地微塵は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、此の地の微塵は甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、善現大地微塵は如來は微塵に非ずと說きたまへり。是の故に如來は說いて大地微塵と名づけたまへり。諸の世界は如來は世界に非ずと說きたまへり。是の故に如來は說いて世界と名づけたまへりと。

〔三九〕佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、應に三十二大士夫相を以て如來應正等覺を觀たてまつるべきや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、三十二大士夫相を以て如來應正等覺を觀たてまつるべからず。何を以ての故に、世尊、三十二大士夫相は如來は說いて相に非ずと爲したまへばなり。是の故に如來は說いて三十二大士夫相と名づけたまへりと。〔四〇〕佛復た善現に告げて言はく、假使ひ若し善男子或は善女人有りて日月分に於て殑伽河の沙に等しき自體を捨施し、是の如くして殑伽河の沙に等しき劫數を經て自體を捨施せんに、復た善男子或は善女人有りて此の法門乃至四句の伽他に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せんに、是の因緣に由りて生ずる所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數ならんと。

〔四一〕爾の時具壽善現、法の威力を聞き悲泣して涙を墮し、俛仰して涙を抆でて佛に白して言さく、甚だ奇なり希有なり世尊、最も極めて希有なり善逝、如來の今說きたまふ所の法門は普ねく最上乘を發趣せる者の爲に諸の義利を作せり。普ねく最勝乘を發趣せる者の爲に諸の義利を作せり。世尊、我れ苦智を生じてより以來未だ曾て是の如き法門を聞くことを得ざりき。世尊、若し諸の有情是の如き甚深の經典を說くを聞きて眞實の想を生ぜば當に知るべし最勝希有を成就せんと。何を以ての故に、世尊、諸の眞實想を眞實想とする者を如來は說いて想に非ずと爲したまへばなり。是の故に如來は說いて眞實想を眞實想と名づけたまへり。世尊、我れ今是の如き法門を說くを聞きて領悟し信解するは未だ希有なりと爲さず。若し諸の有情當來世の後時後分の後の五百歲の正法將に滅せん

【三九】三十二相非相を明す。

【四〇】殑沙體の捨身施よりも般若受持の德大なるを說く。

【四一】第十四、離相寂滅分。善現未聞の新聞の法を喜び眞實想を明す。

佛言はく、善現、吾れ今汝に告げて汝を開覺せん。假使ひ若し善男子或は善女人妙七寶を以て爾所の殑伽河の沙に等しき世界に盛り滿てて如來應正等覺に奉施せんに、善現、汝が意に於て云何、是の善男子或は善女人、此の因緣に由りて生ずる所の福聚は寧ろ多きや不やと。善現答へて言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、是の善男子或は善女人の此の因緣に由りて生ずる所の福聚は其の量甚だ多しと。佛復た常現に告げたまはく、若し七寶を以て爾所の沙に等しき世界に盛り滿てゝ如來應正等覺に奉施せんに、若し善男子善女人、此の法門乃至四句の伽他に於ても受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せば、此の因緣に由りて生ずる所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數ならん。

三五 復た次に善現、若し地方所にて此の法門に於て乃至他の爲に四句の伽他を宣說開示せんに、此の地方所すら尙ほ世間の諸天及び人阿素洛等の供養する所と爲ること佛の靈廟の如くならん。何に況んや能く此の法門に於て具足し究竟し書寫し受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣說開示し理の如く作意せんをや。是の如き有情は最勝希有の功德を成就せん。此の地方所は大師の住する所、

三六 或は一一に隨て尊重の處所、若しは諸の有智、同梵行者たらんと。是の語を說き已んぬ。

三七 具壽善現復た佛に白して言さく、世尊、當に何とか此の法門を名づくべく、我れ當に云何が奉持すべきと。是の語を作し已て佛、善現に告げて言はく、具壽、今此の法門は名づけて能斷金剛般若波羅蜜多と爲す。是の如き名字を汝當に奉持すべし。何を以ての故に、善現、是の如き般若波羅蜜多は如來は說いて般若波羅蜜多に非ずと爲したまへばなり。是の故に如來は說いて般若波羅蜜多と名づけたまへりと。

三八 佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、頗し少法も如來の說く可き有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、少法も如來の說く可き有ること無しと。佛、善現に告げたまはく、乃至

【三五】第十二、尊重正敎分。此法受持處の尊重せらるゝを明す。

【三六】次集して賢師の住處として尊重さるゝを云ふ。

【三七】第十三、如法受持分。此法門を能斷金剛般若波羅蜜多となす。

【三八】微塵世界を明す。

して、善現善男子は無諍住を得て最も爲れ第一なりと言ふべからざればなり。都て住する所無きを以て是の故に如來は說いて無諍住を無諍住と名づけたまへりと。

〔三二〕佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、如來は昔然燈如來應正等覺の所に在りて頗し少法に於ても取る所有りしや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、如來は昔然燈如來應正等覺の所に在して都て少法も取りたまふ所有りしこと無しと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩有りて是の如き言を作さん、我れ當に佛土の功德莊嚴を成辦すべしと。是の如き菩薩は眞實の語に非ず、何を以ての故に、善現、佛土の功德莊嚴を佛土の功德莊嚴とする者は如來は莊嚴に非ずと說きたまへばなり。是の故に如來は說いて佛土の功德莊嚴を佛土の功德莊嚴と名づけたまへり。是の故に善現、菩薩は是の如く都て住する所無くして應に其の心を生ずべし。色に住せずして應に其の心を生ずべく、非色に住せずして應に其の心を生ずべく、聲香味觸法に住せずして應に其の心を生ずべく、非聲香味觸法に住せずして應に其の心を生ずべし。都て住する所無くして應に其の心を生ずべしと。

〔三三〕佛、善現に告げたまはく、如し士夫の身を具するに大身にして其の色の自體假使ひ譬へば妙高山王の如き有らば、善現、汝が意に於て云何、彼れの自體は廣大なりと爲すや不やと。善現答へて言はく、彼の自體は廣大なり世尊、廣大なり善逝、何を以ての故に、世尊、彼れの自體は、如來は彼の體に非ざるが故に自體と名づくと說きたまへばなり。彼の體を以ての故に自體と名づくるに非ざるなりと。

〔三四〕佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、乃至殑伽河の中の所有る沙の數、假使ひ是の如き沙に等しき殑伽河有らしめんに是の諸の殑伽河の沙は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、諸の殑伽河すら尙ほ多くして無數なり、何に況んや其の沙をやと。

【三二】第十、莊嚴淨土分。無所住を淨土功德莊嚴に就て明す。

【三三】大身を例として其の大なるは自體彼の體に非ざる故を以てす、即ち普遍法性身を見るなり。無我身、無自體なるが故に自體廣大なり。

【三四】第十一、無爲福勝分。殑沙七寶よりも法句供養の德大なるを明す。

の佛法と名づけたまへりと。

[三〇] 佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸の預流者は頗し是の念、我れ能く預流果を證得せりと作すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸の預流者は是の念を作さず、我れ能く預流の果を證得せりと。何を以ての故に、世尊、諸の預流者は少しくも預る所無きが故に預流と名づけ、色聲香味觸法に預らざるが故に預流と名づくればなり。世尊、若し預流者是の如き念を作さん、我れ能く預流の果を證得すと。卽ち爲れ我有情命者士夫補特伽羅等に執せるなりと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸の一來者は頗し是の念、我れ能く一來果を證得せりと、作すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸の一來者は是の念を作さず、我れ能く一來の果を證得すと。何を以ての故に、世尊、少法も一來性を證する無きを以ての故に一來と名づくればなりと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸の不還者は頗し是の念、我れ能く不還果を證得せりと作すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸の不還者は是の念を作さず、我れ能く不還の果を證得すと。何を以ての故に、世尊、少法も不還性を證する無きを以ての故に不還と名づくればなりと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸の阿羅漢は頗し是の念、我れ能く阿羅漢を證得せりと作すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸の阿羅漢は是の念を作さず、我れ能く阿羅漢性を證得すと。何を以ての故に、世尊、少法も阿羅漢と名づくる無きを以て是の因緣に因りて阿羅漢と名づくればなり。世尊、若し阿羅漢是の如き念を作さん、我れ能く阿羅漢性を證得すと。卽ち爲れ我有情命者士夫補特伽羅等に執せるなり。所以は何ん、[三一] 世尊、如來應正等覺は我れ無諍住を得ること最も爲れ第一なりと說きたまへり。世尊、我れは是れ阿羅漢にして永く貪欲を離ると雖も而かも我れ未だ曾て是の如き念を作さず、我れ阿羅漢を得て永く貪欲を離ると。世尊、我れ若し是の如き念を作さん、我れは阿羅漢を得て永く貪欲を離るる者なりと、如來は我れに記說

【三〇】第九、一相無相分。預流等の四果を明す。

【三一】無諍住を明す。

ず、非法をも取るべからざればなり、是の故に如來は密意にして而かも[23]筏喩の法門を説きたまへり。[24]諸の智有らん者は法すら尚ほ應に斷ずべし、何に況んや非法をやと。

[25]佛復た具壽善現に告げて言はく、善現、汝が意に於て云何ん、頗し少法も如來應正等覺の阿耨多羅三藐三菩提を證得すること有り耶。頗し少法も如來應正等覺の是れ説く所なること有り耶と。善現答へて言はく、世尊、我れ佛の所説の義を解する如くんば少法も如來應正等覺の阿耨多羅三藐三菩提を證得すること有る無く亦た少法も是れ如來應正等覺の説きたまふ所なること有る無し。何を以ての故に、世尊、如來應正等覺の證したまふ所説きたまふ所思惟したまふ所の法は皆取る可からず宣説す可からず法に非ず非法に非ざればなり。何を以ての故に、諸の賢聖補特伽羅は皆是れ無爲の所顯なるが故なりと。

[26]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、若し善男子善女人、此の三千大千世界に盛り滿てる七寶を以て持ち用て布施せんに是の善男子善女人、此の因緣に由りて生ずる所の福聚は寧ろ多しと爲すや不やと。善現答へて言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、是の善男子或は善女人の此の因緣に由りて生ずる所の福聚は其の量甚だ多し。何を以ての故に、世尊、[27]福德聚とする者は如來は説いて非福德聚と爲したまへばなり。是の故に如來は説いて福德聚を福德聚と名づけたまふと。

[28]佛復た善現に告げて言はく、善現、若し善男子善女人、此の三千大千世界に盛り滿てる七寶を以て持ち用て布施せんに、若し善男子或は善女人、此の法門乃至四句の[29]伽陀に於て受持讀誦し究竟通利し及び廣く他の爲に宣説し開示し理の如く作意せば、是の因緣に由りて生ずる所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數ならん。何を以ての故に、一切の如來應正等覺の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經より出で、諸佛世尊は皆此の經より生ずればなり。所以は何ん、善現、諸の佛法、諸の佛法とする者は如來は説いて諸の佛法に非ずと爲したまへばなり。是の故に如來に説いて諸の佛法を諸

【二三】筏喩の法門、佛の一切の教法を筏喩の法門と説く、河を渡り了れば筏、[illegible]つるが如く、涅槃の彼岸に到れば正法も尚ほ捨つるなり。即ち法に執著すべからざるを示す。

【二四】諸有智者、筏喩法門たるを知るものはの意。

【二五】第七、無得無説分。如來も所證、所説、所思惟も取るべからざるを明す。

【二六】第八、依法出生分。福德聚を明す。

【二七】相卽非相なれば福聚卽非福聚なり、故に福と說くも福に執すべからず。

【二八】諸佛法を明す、諸佛法なりとても別執すべからず、佛法卽非佛法なり。

【二九】伽陀 Gāthā 伽陀に通別二種あり、一に通、頌文なると長行なるとを論ぜず凡そ經文の文字を數へて三十二字に至るもの之を首盧伽陀 Sloka と云ふ。二に別、三言なると八言なるとを問はず必ず四句を以て文義具備せるもの之を結句伽陀と云ふ。伽陀に此通別の二種あるを以て通の伽陀を單に「句」と譯し、別の伽陀を「頌」と譯す。今は後者の頌を意味す。

ての故に、[一七]如來の諸相具足と說きたまへるは卽ち諸相具足に非されはなりと。是の語を說き已て佛復た具壽善現に告げて言はく、善現、[一八]乃至[一九]諸相具足も皆是れ虛妄、乃至非相具足も皆虛妄に非ず。是の如き相非相を以て應に如來を觀たてまつるべしと。

[二〇]是の語を說き已て具壽善現復た佛に白して言さく、世尊、頗し有情有りて當來世の後時後分の後の五百歲の正法將に滅せんとする時分轉の時に於て是の如き色の經典の句を說くを聞かば實想を生ずるや不やと。佛、善現に告げたまはく、是の說を作すこと勿れ。頗し有情有りて當來世の後時後分の後の五百歲の正法將に滅せんとする時分轉の時に於て是の如き色の經典の句を說くを聞かば實想を生ずるや不やと。然れども復た善現、菩薩摩訶薩の當來世の後時後分後の五百歲の正法將に滅せんとする時分轉の時に於て[二一]尸羅を具足し德を具し慧を具する有らん。復た次に善現、彼の菩薩摩訶薩は一佛の所に於て承事供養せしにも非ず、一佛の所に於て諸の善根を種ゑしにも非ず、[二二]然かるに復た善現、彼の菩薩摩訶薩は其の一百千に非ざる佛の所に於て承事供養し、其の一百千に非ざる佛の所に於て諸の善根を種ゑて乃ち能く是の如き色の經典の句を說くを聞きて當に一淨信心を得べし。善現、如來は其の佛智を以て悉く已に彼れを知り、如來は其の佛眼を以て悉く已に彼れを見たまへり。善現、如來は悉く已に彼れを覺りたまふ。一切の有情は當に無量無數の福聚を生ずべく、當に無量無數の福聚を攝すべし。何を以ての故に、善現、彼の菩薩摩訶薩は我想の轉ずる無く、有情想無く、命者想無く、士夫想無く、補特伽羅想無く、意生想無く、摩納婆想無く、作者想無く、受者想の轉ずる無ければなり。善現、彼の菩薩摩訶薩は法想の轉ずる無く非法想の轉ずる無く、想の轉ずる無く亦た非想の轉ずる無し。所以は何ん、善現、若し菩薩摩訶薩法想の轉ずる有らば彼れは卽ち應に我執、有情執、命者執、補特伽羅等の執有るべし。若し非法想の轉ずる有らば彼れも亦た應に我執、有情執、命者執、補特伽羅等の執有るべし。何を以ての故に、善現、法を取るべから

【一七】如來說諸相具足卽非諸相具足、如來は分別を離るゝが故に衆生の思ふ諸相具足と異る非相具足の意にて說きたまへる諸相具足なり。

【一八】乃至有らゆると訓じて可なり。

【一九】諸相具足等。相具足の故に實に非ず非相具足の故に虛にも非ず、これ如來の體は有爲に非ず、相非相俱に定執すべからざるを示す。

【二〇】第六正信希有分。

【二一】南條講義にはこの一段の時に於て「此等所說の諸經典の句に於て實の想を生ずべき、德を戒と慧とを具せる諸大覺情あるべきなり」とせり。

【二二】一佛所にも承事せず種善せざるものはことあらんも非一百千佛に承事せるものは一淨信心を得て實想を生ぜず。

心を發趣すべし。所有る諸の有情、[八]有情の攝所攝、[九]若しは卵生若しは胎生、若しは濕生、若しは化生、若しは有色若しは無色、若しは有想若しは無想、若しは非有想若しは非無想、乃至有情の施設所施設、是の如き一切を我れ當に皆無餘依妙涅槃界に於て而かも般涅槃せしむべしと。是の如き無量の有情を度して滅度せしめ已ると雖も而かも有情の滅度を得る者無し。何を以ての故に、善現、若し諸の菩薩摩訶薩にして、有情想轉ぜば說いて菩薩摩訶薩と名づくべからざればなり。所以は何ん、善現、若し諸の菩薩摩訶薩ならば說いて有情想轉ずと言ふべからざればなり、是の如く[一〇]命者想、士夫想、[一一]補特伽羅想、[一二]意生想、[一三]摩納婆想、作者想、受者想の轉ずるも當に知るべし、亦た爾なりと。何を以ての故に、善現、少法も名づけて菩薩乘に發趣する者と爲すこと有ること無ければなり。

[一四]復た次に善現、若し菩薩摩訶薩ならば事に佛して布施を行ずべからず都て住する所無くして應に布施を行ずべし。色に住して布施を行ずべからず、聲香味觸法に住して布施を行ずべからず。善現、是の如き菩薩摩訶薩は[一五]相の想に住せざるが如くして應に布施を行ずべし。何を以ての故に、善現、若し菩薩摩訶薩都て住する所無くして布施を行ぜば其の福德聚は取量す可からざればなりと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、東方の虛空は取量す可きや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。善現、是の如く南西北方四維上下の周遍の十方一切世界の虛空は取量す可きや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛言はく、善現、是の如し是の如し、若し菩薩摩訶薩都て住する所無くして布施を行ぜば其の福德聚の取量す可からざるも亦復た是の如し。善現、菩薩は是の如く相の想に住せざるが如くして應に布施を行ずべしと。

[一六]佛、善現に告げたまはく、汝が意に於て云何、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつる可きや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊、諸相具足せるを以て如來を觀たてまつるべからず。何を以

【八】有情の中に攝せらるゝもの。

【九】卵生等。四生にして有性生殖の卵生、哺乳動物の胎生、分裂生殖の濕生、これ水分中に生ずるものなれば濕生と云ふ、無機より有ぉ化する如きを化生と云ふ。

【一〇】命者想 Jīvasaṁjñā は生命の主ありとするもの、士夫想は富婁沙、人格の主ありとするもの。

【一一】補特伽羅想 Pudgala 衆生の個在を實有とするもの。

【一二】意生想。末那より生ずるとするもの。

【一三】摩納婆 Mānavaka 儒童、年少等と譯す。

【一四】第四、妙行無住分無所住の布施を明す。

【一五】相の想。色心內外に見る分別の相を想ふを云ふ。

【一六】第五、如理實見分。相非相を以て佛を觀るを說く。

第九能斷金剛分

[一]是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵、室羅筏に在して誓多林の給孤獨園に住まりたまへり。大苾芻衆千二百五十人と倶なりき。爾の時世尊、[二]日の初分に於て裳服を整理し衣鉢を執持して室羅筏大城に入りて乞食したまへり。時に薄伽梵其の城中に於て乞食を行じ已て出でて本處に還り、飯食し訖て衣鉢を收め足を洗ひ已て食後の時に於て常の如き[三]座を敷きて結跏趺坐し[四]端身正願にして住し對面して念じたまへり。時に諸の苾芻、佛所に來詣し、到り已て世尊の雙足を頂禮して右遶三匝し退きて一面に坐しぬ。具壽善現も亦た是の如き衆會の中に於て坐せり。

[五]爾の時衆中の具壽善現、座より而かも起ちて[六]偏へに一肩を袒(あらは)にし右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、希有なり世尊乃至如來應供正等覺は能く最勝攝受を以て諸の菩薩摩訶薩乃至如來應正等覺を攝受し、能く最勝付囑を以て諸の菩薩摩訶薩に付囑したまふ。世尊、諸の菩薩乘に發趣する者有らば應に云何が住し、云何が修行し、云何が其の心を攝伏すべきやと。是の語を作し已んぬ。

爾の時世尊、具壽善現に告げて曰はく、善哉善哉、善現、是の如し是の如し、汝が所說の如し。乃至如來應正等覺は能く最勝攝受を以て諸の菩薩摩訶薩乃至如來應正等覺を攝受し、能く最勝付囑を以て諸の菩薩摩訶薩に付囑す。是の故に善現、汝應に諦かに聽き極めて善く作意せよ。吾れ當に汝が爲に分別し解說すべし。諸の菩薩乘に發趣する者有らば應に是の如く住し是の如く修行し是の如く其の心を攝伏すべしと。具壽善現、佛に白して言さく、是の如し是の如し、世尊、願くは樂ふて聞きたてまつらんと欲すと。[七]佛言はく、善現、諸の菩薩乘に發趣する者有らば應當に是の如きの

【一】本經を三十二分に分つ、第一、法會因由分。舍衞祇園會の一。
【二】日の初分、午前なり。
【三】座具(尼師檀)を延べて結跏するなり。
【四】身を正直に背を曲げず呼吸を調へ心靜かに肩の力を拔くなり。靜坐して正面を眺めて默念せるを云ふ。
【五】第二、善現起請分。善現は菩薩乘の發趣、住修、攝心を問ふ。
【六】偏袒するは袈裟を左に掛けて右肩を袒露にする弟子の禮法なり。
【七】第三、大乘正宗分。發趣菩薩乘を說く。

二十六、法身非相分——三たび相好を以て如來を觀るべからざるを明す。
二十七、無斷無滅分——諸相具足を以て成佛せざるを說く。
二十八、不受不貪分——無我無生を忍受するの多德なるを明す。
二十九、威儀寂靜分——如來に去來等の取相すべからざるを明す。」
三十、一合離相分——極微聚。
三十一、知見不生分——我見有情見等非見なりと說く。
三十二、應化非眞分——一切有爲の星翳燈幻露泡夢電雲の如くなるを觀る。
以上を經意とし四衆人非人の一會歡喜の簡單なる得益分を以て結ぶ。

この經は旣に云へる如く僧肇智顗吉藏等により三論天台にも重んぜられ、窺基憬興智儼等により法相華嚴にも尙ばれたるも、特に禪の五祖以來楞嚴に代へて之を重んじ、曹溪六祖が此經の應無所住而生其心（第十莊嚴淨土分）に於て悟入せりと傳へて禪人常に看誦することゝなる。其後德山宣鑑と云へる棒使ひの名人が經律性相に通じ、就中、金剛般若を得意とし、常に一毛呑レ海性無レ虧、纖芥投レ鋒利不レ動、學與ニ無學一唯我知焉と壯語し、南頓禪を擊破せんとて蜀を出て澧陽に向はんとす、途に茶店に憩ふ、婆々德山に問ふ、擔子何の文字ぞ、德山答ふ、これ靑龍の疏鈔と、婆更に問ふ、講ずる所何の經ぞ、德山云ふ、金剛般若。婆云ふ、我に一問あり汝答へ得ば點心を施さん、答へ得ずば別處に去れ、金剛經に曰く、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得（第十八、一體同觀分）と未審上座、那箇の心を點せんと、眞向に一刀を打込まれて行詰れる德山は敎を捨てゝ禪に歸し、訶雨罵風その道四百餘州に轟けりとは有名な逸話たり。かゝる因緣疊重して本經和漢に重んぜられ、俗解も亦甚だ多し。今只經要を揭ぐるのみ。

椎尾辨匡記

七、無得無說分――如來も所證所說所思惟も取るべからず。
八、依法出生分――福德聚を明し、佛法卽非佛法なるを說く。
九、一相無相分――預流等の四果に相無相を說きて無諍住を明す。
十、莊嚴淨土分――淨土功德に就て無所住を明す。
十一、無爲福勝分――殑沙の七寶布施よりも法句供養の德大なるを讚じ無爲を稱ふ。
十二、尊重正教分――此法受持處の大師の如く尊重せらるゝを明す。
十三、如法受持分――この法を能斷金剛般若波羅蜜多となす。
十四、離相寂滅分――善現、離相眞實の勝法を聞くを喜ぶ。經要なり。
十五、持經功德分――永劫捨身よりも持般若の德大なり。
十六、能淨業障分――持般若者輕毀せらるゝも宿世重罪を輕むるなり。
十七、究竟無我分――一切を度して實に滅なく度なし。
十八、一體同觀分――如來の五眼具足を明す。
十九、法界通化分――眞の福聚を明す。
二十、離色離相分――眞の色相圓實を明す。
二十一、非說所說分――眞の說法。
二十二、無法可得分――現證非有。
二十三、淨心行善分――無上菩提に者想なきを明す。
二十四、福智無比分――重ねて般若の大功德に就いて。
二十五、化無所化分――如來度して度せりとするなし。

金剛般若本有八卷、今唯有格量功德一品……

と云ふを擧げて依用しがたきことを論ぜり。今も亦之に同ず。これを大般若の一會別出とするか、一經先存して大般若に合せられたりとすべきかあるのみ、譯者は後見を取る。

經意　本經は明の宗泐等の註觧（呂八の一）には

此經以二喩法一爲レ名、實相爲レ體、無住爲レ宗、斷疑爲レ用、大乘爲二教相一、初釋二喩法名一者、金剛喩也、般若法也、金中精剛至堅至利能碎二萬物一、此經能斷二衆生疑執一取以爲レ喩故大品般若十六分中以二此經一名二能斷分一

と云へるもの粗ぼその要を盡せり、その意金剛を以て此經所説の般若の法の喩とせり、若し然らば秦魏陳の三譯經名に能斷の二字を省けるも、その意金剛の如き般若波羅蜜の經と云ふべく、又隋譯は原語に順ひて金剛能斷となせるも同じく「金剛のごとく能く斷ずる般若波羅蜜の經」を意味すべし。然るに玄弉と義淨とは支那の語法に從ひて能斷金剛とせるのみとすれば、その意「能く斷ずること金剛のごとき般若波羅蜜多の經」たり得るも、或は金剛を所斷とし何ものをも斷する法門の能斷力の强きを表はすことゝなる。

註觧又云ふ、分二三十二分一者、相傳爲二梁昭明太子所一レ立を英國刊行の梵本にも三十二章の段落あるは、此の區分に從ふものとす。

一、法會因由分――序分、一日祇園に比丘來集す。
二、善現起請分――會中の善現、菩薩乘の發趣、住修攝心を問ふ。
三、大乘正宗分――佛、發趣菩薩乘を示す。
四、妙行無住分――無所住の布施を明す。
五、如理實見分――相非相の觀佛を明す。
六、正信希有分――多佛値遇種善せるもの淨信を得、實想を生ぜず。

四）を作る。流支譯の金剛般若と合するは學系を異にするが故に不當なり、而も羅什譯を用ひたるは同譯が殆ど定本となれる爲めならん。斯く什譯塹斷の中に智儼は留支の經に略疏二卷（續卅八の三]281—295)(1704 第三十三 239—351)を作る。これは學系上正當とす、然るに後の華嚴學者之を忘れたるは其書久しく三韓に浪匿せる爲めなるべし（同書後記、續卅八の三]294b參照）。曾鳳儀は宗通續編として金剛經偈釋二卷を作つて、義淨と流支の兩譯を合會したが、此兩譯は同本異譯であるから合會するに差支なし。只八十偈を擧げて天親と無著とに分屬したるは兩譯傳に基くと雖も分別せざる咎とす。義淨は讃述（往、六、47b)(1871 第四拾 783a)に無著が慈氏に八十頌を受けたと稱するも、義淨は論頌一卷無著造（往、六、21b)(1514 第廿五 885a）とするものが七十七頌であるから其論釋（往六37bf）(1513 第廿五 875a) 無著菩薩造頌と云ふものも亦此に限るべく、前二頌と後一頌とは世親の作であることは論に徴して明かなり。流支譯が總てを天親としたことも、義淨譯の論釋が總てを無著としたことも倶に誤れり。此事は金剛仙論にも關係して居る。論十（續二の三 275a)(1512 第廿五 874c)。

彌勒…作金剛般若經義釋、並地持論、賚付無障礙比丘令其流通、然彌勒世尊但作長行釋、論主天親既從無障碍比丘邊學得、復尋此經論之意、更作偈論、廣興疑問、以釋此經凡有八十偈、及作長行論釋、復以此論轉敎金剛仙論師等。

即ち彌勒菩薩が長行の金剛般若義釋を作り、無著に授け、天親は之を無著に受けて八十偈幷に長行論釋を作れりとす。實は前に論ずるが如くなるべし。

眞諦譯の經典に關しては後記（月、九、34a)(238 第八 766c)に「經本一卷、文義十卷、法虔爾日仍願造一百部、流通供養幷講之十徧」と云ひ、内典錄（結、二、77b)(2149 第五五 273c)に「金剛般若疏合十卷」と云ふも、今倶に傳はらず。

笈多譯の經は直譯體で、頗る比較研究に便を與ふるも、文辭が難解の爲めに未だ多く顧みられず。

義淨譯は經論が具備するのみならず、其末後頌讃述は簡要を得て居る。金剛般若の經文研究は粗ゝ上の如くなるも、只一語の付記すべきことはそれが全本なるや否やなり。梵本も存すれば其完全なるは明であるが、嘉祥は其疏（225b)(1699 第三十三 86b)に大悲比丘本願經末記を引き、

八の三、262—280 褚亮序(261b)頴川庾初孫篤信、慧淨博通奧義と、致二 98 には儒出、大(般若)小(毘曇)乘學者となり、註尾(280b)には享保二年加點栞行の後記なり、義空の力による。記者丹陽山人烏有子とせり。)、窺基贊述二卷(續、卅八の四、296—329、1700 第三十三 125—154 文化十開版、深勵の序あり)、慧能解義二卷(續、卅八の四、331—346 或云金剛經註解、又は金剛經口決、又は六祖解義とも云ふ。續 347 に順治康熙重刻の跋あり)、宗密纂要(1701 第三十三 154—170)(宗密述、宋子璿治定、呂、七、45—60 子璿排科、39—45)子璿刊定記(呂七)(1702 第三十三 140)(會編、續、三十九の三。科會三十九の五。演古、四十の一)等を其顯著なるものとす。慧能は「此經讀誦者無數、稱讚者無邊、造疏及註解者凡八百餘家」と云ふ、以て其盛んなること推知せらる。上述の外、明宗泐如玘註一(呂八 1—9)(1708 第三十三 228—238)宋道川註三卷(續、三十八の四 348—)洪蓮編註解四卷(續、三十八の五 425b—)凡て五十三家註本、續藏第三十九套第四十套に涉る七本に明淸釋家の本經釋三十四部あり、曾鳳儀の偈釋以外は皆什譯に就く、その中廿四は直ちに經に依り、九は達意辨釋たり。禪宗に此經を重んずるは五祖以來にして楞嚴に代へて專ら之を奉するに至れり。羅什譯には日照の功德施論、傅大士頌、子璿刊定記に依る明曾鳳儀宗通七卷(續、卅九の一 1—42)あり。其僧俗に通じ諸宗に涉つて、講讀註疏の多きは此經と般若心經と法華經とを最とす。而して羅什譯は初出にして、其僧肇の註は天台、嘉祥の使用する所となれる爲めに、殆ど自餘の譯出を壓倒し去れり。それは慈恩が玄奘の譯を有し乍ら尙羅什の譯を本として纂述したことに徵しても明かなり。但新譯家は竟に新譯人なり、事を斷ずるには玄弉譯に從ふ、羅什譯を標するは初出たると廣く行はるに依るのみ。その中原本比較に對する記事は特に注意すべき點あれば此に附記する。(續、卅八の四 297a)(1700 第三十三 125b)

積代梵本文竝付三藏、藏討諸本、龜資梵文卽羅什譯同、崑崙之本與眞諦翻等、然經文舛異隨文卽知眞謬、……。

此の如く羅什譯に準據するの結果は瑜伽般若をも亦此に合會せんとするに至れり。卽ち宋の善月の金剛經會解二卷(續、卅八の四、377—408)は什譯の經に笈多、流支、義淨及び日照の四譯論を合會して解釋す。之れは中觀般若と瑜伽般若とを混同せるものと云ふべし。又淸の通理は金剛般若經偈會本一卷に什譯の經と留支譯の偈とを合會して其合釋二卷(續、卅九の三、

六、能斷般若波羅蜜多經論頌　一卷　無著造　唐義淨譯　大薦福寺 景雲二年（七一一）　往、六、21—22 1514第二五885a—886c　結、四、80 2154第五五567b

七、能斷般若波羅蜜多經論釋　三卷　無著頌（同上）世親釋　唐義淨譯　同上　往、六、37—47 1513第二五875a—884c　流支と同本異譯

但し以上の論釋多く瑜伽般若である事は第一に注意せねばならぬ點たり。「一」と「七」とは同本異譯にして、倶に「六」の註釋なり。「二」は「一」の註釋にして金剛仙造、流支譯と云はれ、近來の出版まで傳寫せられしも疑ふべきもの、寧ろ流支の作かと許せらる。「三」は早く散逸して明かならざるも、眞諦譯たる處から見て同系の論と認めらる。「四」は論尾に阿僧伽作の語ありて、無著造と譯せらるゝも義淨の讃述に於て世親が無著の彌勒から傳受したと云ふ八十頌を釋するのみでなく、

世親菩薩復爲二般若七門義釋一而那爛陀寺盛傳二其論一但爲二義府幽沖一尋者莫レ測、

と云ふものに似て居る。故にこの論は兄弟孰れかに屬するか、或は同種の二本ありしものと見ざるを得ず。以上は悉く瑜伽般若なるも、獨り「五」の功德施論のみは中觀般若を傳ふるものとす。此二派に關しては讃述が之を論じて要を得て居る。往、六、47、1817 第四拾 783a に

斯等（無著、世親、師子月、月官）莫レ不三意符二三性一不レ同二中觀一矣、更有二別釋一而但順二龍猛一不レ會瑜伽則眞有俗無以三三性一爲レ本、中觀乃眞無俗有、寔二諦爲レ先、般若大宗含二斯兩意一致レ使下東夏則道分二南北一西方乃義隔中有空上

此に云ふ師子月法師の論釋と、東印度多聞俗士月官が諸家を遍檢して僞くつた義釋とは倶に之を傳へず。只瑜伽系の般若論として Haribhadra の Aṣṭasahasrikāyāḥ prajñāpāramitāḥ vyākhyā あり、又現觀莊嚴論 Abhisamayālaṃkara あるも義淨所述に關せざるは明なり。

支那研究　此經は印度論師の論釋も少くない程であるから、其傳來以後も研究甚だ盛なり。殊に第一譯に基いた研究としては僧肇金剛經注一卷（續、卅八の三、208 以下に載す。寶曆十二敬雄序あり云ふ、慈覺大師將來後九百年藏して流布せずと。元徐行善科釋一卷（續藏三十八の五 409—422 大正藏 206 第五拾 441c 以下）は此疏に付せらる、）、天台の經疏一卷（呂、七、28—38）（1798 第三十三 75—84）隋の吉藏義疏四卷（續、卅八の三、219 以下 1699 第三十三 84—124）唐の慧淨の註三卷（續、卅

三、金剛般若波羅蜜經　一卷　陳天竺眞諦譯　陳天嘉三年(五六二)五月　237第八762a—766c月、九30—34　後記云(2149第五五273b結、二、77)宋留支譯(第八、757a—761c月、九、2—10)亦是

四、金剛能斷般若波羅蜜經一卷　金剛斷割般若波羅蜜經　隋達磨笈多譯　隋大業(六〇五—六一六)　238第八766c—771c月、九、34—38　開皇十年(五九〇)來朝與闍那崛多從譯事。2154第五五552b結、四、66b値僞鄭淪擯不暇重修

五、能斷金剛般若波羅蜜多經一卷　玄奘　於玉華宮　唐貞觀廿二年(六四八)十月　月、九41b—46　2154第五五555c結、四、69b内典錄、大正藏缺之與第九會同文故

六、大般若第九會　玄奘　龍朔三年(六六三)　220第七980—986日、九、72—77

七、能斷金剛般若波羅蜜多經一卷　義淨　於西明寺　唐長安三年(七〇三)十月　239第八771c—775b月、九、38b—41a　2154第五五567a結、四、79

以上七本六譯に在りて第一の羅什譯は諸家講讀に常用する所にして、流支、眞諦譯往々對比せらる。隋笈多の譯は純然たる直譯體たり、玄奘譯は今國譯する所、註解者羅什本に從ふと雖も、相宗人は斷するに奘譯に依るは自然のことゝす。本經講讃の盛なる論文印度に成りて傳譯せるものすら甚だ多く各種の教義を學ぶに足る。

論釋

(二) 金剛般若論釋表

一、金剛般若波羅蜜經論三卷　天親造　元魏菩提流支譯　於胡相國第永平二年(五〇九)　往六、22b—37a 1511第二五781b—797b　結、二、74、2149第五五269a結、四、56、2154第五五541a

二、金剛仙論　十卷　金剛仙釋(稱)　元魏菩提流支譯　續藏二ノ三1512第二五798a—874c　前論を釋す

三、金剛般若論　一卷　陳眞諦譯　欠　結、二、77、2149第五五273b結、四、68、2154第五五546a

四、金剛般若論　二卷　無着造　隋達磨笈多譯　大業三年—十二年(六〇七—六一六)　麗本往、六、1—8、1510第二五　宋元明、往、六、8b—21 1510第二五766b—781a　結、二、82、2149第五五280a結、四、66、2154第五五551b

五、金剛般若波羅蜜經破取著壞假名論亦名功德施論　二卷　功德施造　唐地波訶羅譯　於西太原寺歸寧院永淳二年(六八三)九月　往、六、49—57 1515第二五887a—897b　大周錄結、四、77、2154第五五564a

金剛般若經解題

此に譯出する所は、大般若第五百七十七卷に收むる第九會能斷金剛分なり。唐玄奘貞觀廿二年(六四八)十月玉華宮に於て譯出、能斷金剛般若波羅蜜多經一卷とせるもの、後、龍朔三年(六六三)大般若全出に際し編次せるものたるべし。經錄別譯せる如く傳ふるも譯文殆と大同なるが故に。大正大藏には貞觀譯本を載せざるもこれが爲なり。

梵本 此經は梵本にも蕃藏にも倶に現存して Vajracchedikā Prajñāpāramitā と云ふ。梵文我國に禀承して梵學の指南となれること大なり。慈雲律師の梵學津梁第三百二十卷に存し、傳寫廣流す、明治十四年辛己(一八八一)英國牛津大學刊行「牛津異聞」印度部第一冊第一篇として馬博士の校刊せるものなり、これ高貴寺本と支那「梵文經典集」の首にあるものと、露國に傳れる西藏所傳とによれるものなり。馬翁はその英譯再治本を明治二十七年東方聖書第四十九卷に編入せり。南條博士は明治四十年十二月「梵文金剛經講義」として梵漢對比し、殊に文法成語を詳解せり、本譯に於ても屡々これを參照せり。

支那譯 此經の支那譯を表示すれば次の如し。表中、縮刷藏經並に大正大藏經所在を注記す。

(一) 金剛般若譯經表

經名	譯者	處	時	所在	出所備考
一、金剛般若經 一卷 或云金剛般若波羅蜜經 一卷 (跋付眞言)	姚秦鳩摩羅什譯	長安草堂寺	嘉祥疏云弘始四年(四〇二)	235第八748c—752c 月、九 19—22	二秦錄僧祐錄(2145第五五11a 結、一、9) 內典錄(2149第五五253a 結、二、61b) 開元錄(2154第五五512b 結、四、31) 御製永樂序(月、九、19同藏二序欠)
二、金剛般若波羅蜜經 一卷	元魏菩提流支譯	於胡相國第	北魏永平二年(五〇九)	239第八752c—757a 月、九 23—26	法上錄開元(154第五五540c 結、四、56) 僧朗筆受(2149第五五269a 結、二、74) 思溪經本失傳眞諦譯重出標作留支譯元本改之、宋本(思溪)大異

と各飯食し已て倶に佛所に詣り雙足を頂禮し右遶三匝し退きて一面に坐し、上の如き事を以て具さに世尊に白せり。爾の時是の如く其の述ぶる所を聞き卽便ち讚めて曰はく、善哉善哉、汝等乃能く斯の勝事を成ぜり。當に知るべし皆是れ佛の神力なりと。具壽善現も亦た經化せし所の近事女の初果得たる事を以て、以て佛に白せり。爾の時世尊も亦た彼の善巧方便を讚歎したまへり。時に妙吉祥、善現に謂て曰はく、彼の近事女の斷ぜし所の我見は卽ち我見に非ず、是の故に如來は說いて我見と名づけたまへり。是の如く大德、諸の菩薩乘を發趣せる者有らば一切法に於て應に知るべく應に見るべく應に深く信解すべし。云何が信解する。謂ゆる其の法の如く想に住せざるなり。所以は何ん、大德善現、夫れ法想とは卽ち法想に非ざるなり。是の故に如來は說いて法想と名づけたまへり。大德當に知るべし、若し菩薩摩訶薩無數世界に七寶を成滿し持て用て布施せんに、善男子善女人等有り此の般若波羅蜜多に於て乃至一四句頌をも受持して他の爲に開示して開示想無くんば是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多しと。爾の時世尊而かも頌を說いて曰はく、

星翳燈幻露　泡夢電雲の如しと
一切の有爲に於て　應に是の如き觀を作すべし

と。時に薄伽梵現經を說き已て一切の菩薩及び諸の苾芻、世間の天人阿素洛等一切の衆會、佛の所說を聞き皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

爾の時善現及び舍利子倶に定より起ちて妙吉祥及び諸の菩薩聲聞等の衆と互に相慶慰し各各城に入りて意の住する所に隨て巡行し乞食せり。具壽善現は隨て一家の空靜の所に入り默然として住せり。近事女有り見已て問ひて言はく、大德、斯に住して何をか欲する所と爲すと。善現報へて曰はく、姉妹當に知るべし、食を乞はんが爲の故に我れ來りて此に住せりと。近事女言はく、聖者善現、今食想に於て未だ遍ねく知らざる耶と。善現報へて言はく、我れは本際より所有る食想を皆已に遍ねく知れり。所以は何ん、一切の食想の前中後際は皆自然に空なればなりと。近事女言はく、唯然聖者、應に自ら手を伸すべし、我れ當に奉食すべしと。具壽善現便ち其の手を伸ばせり。近事女言はく、聖者善現、阿羅漢の手は今此の是れなる耶と。善現報へて言はく、阿羅漢の手は能く見る所に非ず亦た伸す可からず。譬へば幻士の幻士に問ふて曰ふが如し。何等か名づけて幻士の手と爲す。吾れ今見んと欲す、請ふ爲に之を伸べよと。姉妹當に知るべし、彼の幻士の手は頗し能く見ること有り耶及び伸ばす可き耶と。近事女言はく、不なり、大德と。善現報へて曰はく、是の如し姉妹、佛は一切は幻の如く皆空なりと說きたまふが故に、阿羅漢の手は實に見る可き有り及び伸ばす可き有りと言ふ可からずと。時に彼の女人是の如き說を聞き尋で卽ち善現の手を見ず、遂に[二四]淹久を經るも施食することを得ず。鉢の中に置かんと欲するに、鉢復た現ぜず。彼の近事女、善現の身を遶り循環して手を覓むるに竟に得ること能はず、瞬息の間に身も亦た現ぜず。卽便ち恭敬して善現を讃めて言はく、善哉善哉、聖者聖者、乃ち能く是の如し、身も亦た住せず相も亦た現ぜず、實に爲れ希有なり。是の故に如來は常に、善現は無諍住を得て最も爲れ第一なりと說きたまへりと。時に近事女卽ち是の處に於て永く我見を斷じて預流果を獲たり。具壽善現便ち其の身を現じ讃めて言はく、善哉善哉、姉妹、遂に能く是の如き丈夫業を成ぜりと。爾の時女人踊躍歡喜して持てる所の食を以て善現に奉施せり。善現受け已て出で還て之を食せり。時に妙吉祥は諸の菩薩聲聞等の衆

【二四】淹久。長くなること。

此の中に住しては言有り說有り來る有り往く有り住する有り臥すること有るに非ず。何を以ての故に、大德善現は諸法の自性皆空にして得可からずと信解せるが故なりと。時に舍利子復た問はく、諸法は何を以て性と爲すやと。妙吉祥言はく、諸法は皆無性を以て性と爲すも是の如き無性も亦た得可からずと。善現爾の時便ち定より起てり。妙吉祥曰はく、食時將に至らんとす、宜しく速に城に入りて巡行し乞食すべしと。[三二]善現對へて曰はく、大士當に知るべし、我れ今復た城に入りて乞食せず。所以は何ん、我れ已に一切の城邑村落等の想を遠離し、亦た已に諸の色聲香味觸法の想を遠離すればなりと。妙吉祥曰はく、大德善現、若し已に一切想を遠離せるに云何が現に遊履往來すること有るやと。善現詰て言はく、如來の變化は云何が現に色受想行識等の諸法有るや、云何が現に遊履往來屈伸顧視すること有りやと。妙吉祥曰はく、善哉善哉、大德善現は佛の眞子なり。是の故に如來は常に說きたまへり、善現は無諍住を得て最も爲れ第一なりと。復言はく、大德、且く斯の事を止めよ、我れ城に入りて巡行し乞食せんと欲す。飮食の事訖らば如來の所に詣りて我れ當に奉請し諸の大德をして希有の食を設けて善利を獲せしむべしと。舍利子言はく、大士今我が輩の爲に何等の食を設けんと欲するやと。妙吉祥曰はく、大德我が今設くる所の食とは分段す可からず、呑咽す可からず、香味觸に非ず、三界の攝に非ず、亦た[三三]不繫に非ず。大德當に知るべし、是の如き妙食は是れ如來食にして餘の食に非ざるなりと。舍利子言はく、今我れ等が輩は大士の希有の食の名を說くを聞きて悉く已に飽滿せり、況んや當に食するを得べけんをやと。妙吉祥曰はく、我が此の食とは肉天慧眼皆見ること能はずと。爾の時善現及び舍利子、是の如き語を聞きて滅定に信入せり。時に善思菩薩、妙吉祥に問ひて言はく、今二上人は何等の食を食して何等の定に入れるやと。妙吉祥言はく、此の二尊者は無漏食を食して無所依無雜染定に入れり。諸の此の食を食し此の定に住せる者は畢竟じて復た三界食を食せずと。

【三二】善現も入城行乞せざるを說く、超三界食に飽滿すればなり。

【三三】通常は三界の攝か不攝か繫か不繫かに分つ、今分別を超越す、故に攝に非ず不繫に非ずと云ふ。

【三】爾の時善現、其の所に來到して言はく、二大士、何をか談論する所なると。時に妙吉祥詰て言はく、大德、今何の法を說いて名づけて大士と爲す。我れ等少しくも實法の大士と名づく可く而かも共に談論する有るを見ず、大聖法王も亦た未だ曾て少しくも實法の大士と名づくる者有りと說きたまはず。諸法は響の如く皆眞實に非ず。其の響豈に能く談論する所有なんやと。具壽善現、是の語を聞き已て無所得三摩地門に入り、須臾の間を經て還て定より起ち合掌恭敬して誓多林に向ひて是の如き言を作さく、我れ今佛に歸したてまつる。證したまふ所說きたまふ所甚深微妙寂靜ならさる無く見難く覺り難く、尋思する所に非ず尋思の境を超え永く執取を害し諸の纒縛を斷ぜり。是の如き妙法は思議す可からず。諸の有情をして聞きて利樂を獲せしむ。若し諸の菩薩の已に不退を得たる、曼珠室利而かも爲れ上首たり、乃至或は最初發心して大菩提に趣ける諸の菩薩衆有らば皆共に此の甚深の法の中に於て展轉して相親しみて斯の談論を作すと。妙吉祥曰はく、大德當に知るべし、此の中親しむ無く親しまさる者無し亦た迷謬する迷謬せざる者無く又た展轉して共に談論する事無し。所以は何ん、少法も少法と親怨等を爲すこと有ること無ければなり。何を以ての故に、一切法は無所有なるを以ての故なりと。具壽善現復た言さく、向きに二大士の共に深法を論ずるを見たるに云何してか而かも談論の事無しと言ふやと。妙吉祥曰はく、大德、頗し幻士の夢境響像陽焰光影變化及び尋香城の展轉して共に深法の義を論ずるを聞くや不やと。答へて言はく、不なりと。妙吉祥言はく、諸法は幻夢境響等の如し。云何が共に談論するを見ると言ふ可けん。豈に幻士、化佛の甚深の法義を說くを聞きて信解受持し取相して名身等の事を思惟する有らんやと。爾の時善現是の語を聞き已て此の方所に於て便ち滅定に入れり。時に舍利子、其の處に來至して妙吉祥に問はく、大士頗し善現の今何等の定に入れるかを知るやと。妙吉祥言はく、唯だ舍利子、大德善現は少法も違はざるなり。此れに由りて常に不違法定、無所住定、無依法定、無執藏定、害執藏定に入るなり。

【三】善現加はりて更に實の大士なく證論なく諸法なきを明し、善現眞に佛に歸し法に入る。

界の滅無く、亦た色界の滅及び聲香味觸法界の滅無く、亦た眼識界の滅及び耳鼻舌身意識界の滅無く、亦た眼觸の滅及び耳鼻舌身意觸の滅無く、亦た眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の滅及び耳鼻舌身意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受の滅無く、亦た地界の滅及び水火風空識界の滅無く、是の如く諸佛は般涅槃したまふと雖も、而かも一法も般涅槃する者無し。諸の般涅槃の位に法滅有らしめんと欲する者有らば則ち僞れ太虚空界の彼の位をも亦た滅せしめんと欲するなり。所以は何ん、一切の法性は未來寂滅、自性寂靜最極寂靜にして更らに滅す可からざればなり。諸の愚夫類は如實に知らずして般涅槃の時方に滅想を起せり、謂ゆる我我所今時に乃ち滅すと。彼れは我及び有情——廣說乃至——知者道者を執著するに由り、及び無自性の法有りて般涅槃の時一切永く滅すと執するに由り我れ說く、彼の類は皆生老病死愁歎苦憂惱より解脫すること能はずと。所以は何ん、彼の愚癡類は法の本性に於て知らず覺らざればなり。法の本性を知覺せざるに由るが故に、[二〇]佛世尊及び大弟子不退の菩薩と甚深の法とに於て深信解有り、恒に樂ひて無所得行を受け行じ過去の佛に於て多く善根を種ゑ、大神通有り大勢力を具するも眞淨の商主無上の天仙と常に違諍有り、違諍するを以ての故に彼の諸の愚夫は長夜に不淨の臭穢に沈淪す。一切の賢聖は咸く之を遠避し、智者は共に鄙惡の生死を訶す。城邑に近き村落の糞壤に如如に晝夜に人畜往來して是の如く是の如く不淨惡む可き臭穢便利等の物を增長するが如く、是の如く愚夫は法の本性に於て覺了すること能はずして極惡の生臭爛臭不淨の生死を增長すれば聖賢は訶毀し智者は遠離す。我れ說く、彼の類は生老病等の種種の過患より解脫すること能はずと。時に龍吉祥問ひて言はく、尊者、云何が法に於て如實に知るやと妙吉祥曰はく、諸の能く無分別の心を以て遠離に隨順し遠離に趣向し遠離に臨至する有らば是の如きは法に於て能く如實に知るなりと。龍吉祥言はく、誰れか幻事に於て能く遠離するやと。妙吉祥曰はく、即ち此れは能く幻事に於て遠離すと。

【二〇】佛大弟子等を信ずるも本性空に違へば眞の佛法と違諍す。

爲さん、然かも彼の資持は都て得可からず。如實に法及び有情を觀察するに自性俱に空にして少しくも眞實無し。則ち諸の食に於て資持する所無しと。龍吉祥言はく、我れ今住して飢渴を斷除せんと欲すと。妙吉祥曰はく、飢渴すら尙ほ無し。何すれぞ能く斷ずる有らん。譬へば幻士の足の如き言を作すが如し。我れ今陽焰の中にて水を求めて飢渴を斷除せんと欲すと。汝も今亦た然なり。所以は何ん、一切法は皆陽焰の如く、一切有情は皆幻士の如くなるを以て云何が住して飢渴を斷除せんと欲する。虛妄分別の所作の法の中には能斷所斷俱に得可からず。既に飢渴無きに除斷する者は誰れぞ、諸法は本來自性充足し都て飢渴無きに何をか除斷する所なる。愚夫は此れに於て如實に知らずして我れ飢渴せりと謂て除斷するを求めんと欲するも智有る者は能く如實に飢渴は本より無しと知りて除斷を求めず。既に能く諸法の性は空なりと了達して復た生死の諸趣に輪廻せず、戲論を離れ分別する所無きに達して一切法に於て住するも住する所無く依る無く染む無く入る無く出づる無く畢竟解脫して分別永く無しと。龍吉祥言はく、如如に尊者諸の法要を說くに是の如く是の如く法界出現せりと。妙吉祥曰はく、眞法界は出づる有り沒する有り屈する有り伸ぶること有るに非ず。所以は何ん、眞法界とは相を離れ寂然として出づる無く沒する無く分別す可からず戲論す可からず依る無く住する無く取る無く捨つる無く動ずる無く轉ずる無く染むる無く淨まる無ければなり。虛空界の動ずる無く轉ずる無く取る無く捨つる無く依る無く住する無く戲論す可からず分別す可からず出づる無く沒する無きが如く諸法も亦た爾なり、自相本空にして性も亦た相有るに非ず不可得なり。若し諸法の相の得可き者有らば已に般涅槃せる佛も應に得可きが故なり。一切法は阿賴耶無く尼延底無く色無く見る無く對する無く相無く本來寂滅なり。是の故に諸佛殑伽沙の如く已に般涅槃したまふと雖も、而かも一法も滅する無し。謂ゆる色蘊の滅及び受想行識蘊の滅無く、亦た眼處の滅及び耳鼻舌身意處の滅無く、亦た色處の滅及び聲香味觸法處の滅無く、亦た眼界の滅及び耳鼻舌身意

て解脱法身を益すべし。一切の如來應正等覺は皆此の食に由りて能く無量無數無邊不可思議殑伽沙等の大劫を經て、而かも住したまへり。所以は何ん、是の如き法食は無漏無繫にして能く永く、世間に執著して出離せざる法より解脱し、亦た能く永く一切の憍慢を滅して阿賴耶無く尼延底無く諸の戲論無く本性空寂なればなり。一切の菩薩摩訶薩衆は皆此の食を希へり。汝も亦た當に求むべし。世間の下劣の法食を求むること勿れと。龍吉祥曰はく、我れ今尊の讃むる所を聽きて斯の如き無上の法食已に爲れ充足せり、況んや食するを得ん耶。我れ若し當來に斯の法食を得ば卽ち無食を以て方便と爲して自ら充足し已て復た持て一切有情に充足せんと。妙吉祥言はく、汝能く虛空界に充足するや不やと。答へて曰はく、能はざるなりと、妙吉祥言はく、汝能く響像夢幻陽焰光影諸の變化事尋香城に充足するや不やと。答へて曰はく、能はざるなりと。妙吉祥言はく、汝頗し能く衆流を以て諸の大海に充足するや不やと。答へて曰はく、能はざるなりと。妙吉祥言はく、諸法も亦た爾なり。云何が汝一切に充足せんと欲する。汝一切に皆充足せんと欲せば則ち太虛空界に充足せんと欲するなり。亦た響像夢等に充足せんと欲するなり。亦た一切の大海に充足せんと欲するなり。亦た一切法の空無相無願無造無生無滅に充足せんと欲するなり。亦た遠離寂靜離染涅槃の畢竟解脱に充足せんと欲するなり。亦た色無く見る無く對する無く一相にして虛空と等しく執取す可からざる眞如法界に充足するなりと。龍吉祥言はく、尊の說く所の如く食及び食者皆空ならざる無くんば則ち諸の有情は應に食に資せざるべしと。妙吉祥曰はく、是の如し是の如し。一切有情は皆食に資せず。設ひ佛化して殑伽沙等の諸の有情類食を須たざる無しと爲んに、汝誰れをして爾所の食を造らしむる耶と。龍吉祥言はく、化は食する所無し何すれぞ假りに造ることを爲さんやと。妙吉祥曰はく、法及び有情は皆幻化の如し。是の故に一切、食に資する者無し。若し諸の有情如實に諸法は皆幻化の如しと了達すること能はずんば則ち諸趣に於て生死輪廻し虛妄に執して資持する所有りと

の身心宴寂し安固にして動ぜざること妙高山の如し。所以は何ん、彼れは此の定に由りて身語意をして安住して動ずる無からしむればなり。後定より起ちて諸の香花を雨らし、誓多林に向ひ躬を曲げ合掌し至誠もて恭敬して是の言を作さく、如來應正等覺に歸命したてまつる、證したまふ所說きたまふ所甚深ならざる無し、自性皆空にして深むる無く得る無く、能く聞く者をして斯の勝定を獲せしめたまへりと。善思菩薩便ち彼れに問ひて言はく、仁定の中に在りて地動を覺するや不やと。龍吉祥曰はく、善思當に知るべし、若し諸の身心の動轉すること有る者は大地等も亦た傾搖すること有るを見ん。諸佛世尊、不退の菩薩及び大獨覺、大阿羅漢の身心安靜にして動搖を遠離せるは諸法の中に於て動ずる有り轉ずる有り傾く有り搖るる有るを見ず覺らざるなり。所以は何ん、常に動ずる無く轉ずる無く傾搖無き法の謂ゆる空無相無願寂靜の證相に安住するを以て本空性にして遠離の法なればなり。此の法に住するに由りて身心動ずる無しと。

[一七]時に妙吉祥此れを見聞し已て歡喜して龍吉祥を讚歎して言はく、善哉善哉、能く是の事を成ぜり。今意に隨て城に入りて乞食せよと。龍吉祥曰はく、我れ今已に海喩勝定の無上の法食を證せり。諸の段食[一八]に於て復た希求せず。我れ今唯だ布施淨戒安忍精進靜慮般若方便善巧妙願力智波羅蜜多及び餘の無邊の菩薩の勝行のみを求めて疾く無上正等菩提を證し、妙法輪を轉じて有情類の生死の大苦を拔き究竟清淨の涅槃に住せしめん、我れ今欣求して諸行を棄捨し、資養を欲して身心を雜穢せず。今我れ尊き眞淨の善友の哀愍に由りて我が力もて勝定を證獲せり。我れ今殊妙の吉祥、無邊の吉祥、勇猛の吉祥、廣大の吉祥、妙法の吉祥、勝慧の吉祥、難思の吉祥、大仙の善友、眞淨の善友を頂禮せんと。妙吉祥言はく、善哉仁者、能く是の如き海喩勝定を得て諸法は響の如く像の如く夢の如く幻の如く陽焰の如く光影の如く變化事の如く尋香城の如しと了達せり。汝今應に如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨并びに十八佛不共法等の無量無邊の[一九]無上の法食を求め自らの資を用

【一七】勝定行を說く。

【一八】段食、摶食とも云ふ。分段の食物、つかみくふ平常の食を云ふ。

【一九】無上る法食を說きて下劣の法食と區別す。

を衆緣に依託して空無自性なりと現觀して我我所を離るれば、是れを修學して菩提行に趣くと爲す。若し菩薩衆行ずる所有りと雖も、而かも行想無くんば是れを修學して菩提行に趣くと爲すと。妙吉祥言はく、是の如し是の如し、誠に所說の如し。人の夢中に遊びて種種の方所に止れりと謂ふと雖も、而かも去來行住坐臥無く亦た眞實に遊止せる處所無きが如く、菩薩も亦た爾なり。寤に住せる時修行する所有りと雖も、而かも行想無く、行ずる所の行の本性は皆空なりと觀じ、諸法の中に於て取著する所無く、一切法は狀無く相無く阿賴耶無く尼延底無く虛空と等しく本性空寂なりと達す。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば執取する所無く諸の戲論を離る。是れ天人等の眞淨の福田にして世間の恭敬供養を受くるに堪ふと。

爾の時、龍吉祥菩薩摩訶薩是の語を聞き已て歡喜踊躍して是の言を作せり。唯然世尊、我れ今室羅筏城に往き有情の爲の故に巡行して乞食せんと欲すと。妙吉祥曰はく、汝の意に隨て往け、然かも行く時に於て足を擧ぐるを得ること勿れ、足を下すを得ること勿れ、屈すること勿れ伸すこと勿れ、我心を起すこと勿れ、戲論を興すこと勿れ、路想を生ずること勿れ、城邑聚落の想を生ずること勿れ、小大の男女の想を生ずること勿れ、街巷園林舍宅戶牖の想を生ずること勿れ。所以は何ん、菩提は諸の所有る想を遠離して高き無く下き無く卷く無く舒ぶる無く心動搖を絕し言戲論を亡じ數量有ること無し。是れを菩薩の趣く所の菩提と爲せばなり。仁今若し能く是の如く行ぜば意の往く所に隨て行いて乞食せよと。時に龍吉祥の旣に承けし敎授敎誡の威力は[一六]海喩定に入れり。譬へば大海の其の水廣深にして盈滿し湛然として諸の珍寶豐に、種種の水族の生命を含育するが如く、是の如く此の定の威力は廣深にして神用思ひ難く三業安靜にして功德の寶を具して含識を攝養すと。時に菩薩有り、名づけて善思と曰ふ。彼れをして速に定より出でしめんと欲するが爲の故に大加行を設けて其の身を觸動し、三千大千世界の諸山大地をして六反に變動せしむと雖も、而かも龍吉祥

【一六】海喩定、本文に說明する如し。

と。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは諸法に於て悉く能く覺了すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く諸法の本性を解了すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く諸の菩薩道を修行すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く種種の佛土を嚴淨すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く諸の有情類を成熟すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは菩提に於て決定して當に證すべしと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは定めて能く無上の法輪を轉ずと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん。我れは能く諸の有情類を濟拔すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れ行ずる所有り、我れ證する所有りと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を修行すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く四念住等の三十七種菩提分の法を修行すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く靜慮無量等持等至陀羅尼門を修行すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは能く如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨幷びに十八佛不共法等の無量無邊の諸佛の妙法を趣證すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。[一四]菩薩は有所得を行ぜざるが故に無得法忍と差別有るに非ずと。妙吉祥言はく、若し爾れば菩薩は云何が修行して菩提行に趣くやと。[一五]龍吉祥曰はく、若し菩薩衆諸法の中に於て取著する所無くんば、是れを修學して薩提行に趣くと爲す。若し菩薩衆諸法の中に於て恃怙する所無くんば、是れを、修學して菩提行に趣くと爲す。若し菩薩衆諸法

【一四】妙吉祥の問へる法忍を得る無きものと無上法忍と區別つくまじと云ふに對し無所得の立場には區別を見ざるを云ふ。
【一五】無所得の進趣を說く。

傾動して覺所覺及び菩提座の處を離れしむること能はずと。

龍吉祥言はく、[一〇]覺所覺の處、菩提の處とは何をか謂ふ所なる耶と。時に妙吉祥詰て彼を詰て曰はく、云何が名づけて如來の變化と爲し、云何が如來の變化の處、云何が如來の變化の所依、云何が如來の變化の證法にして此れに由りて說いて如來の變化說法示導すと爲すやと。龍吉祥言はく、我れ尙ほ實に如來有るをすら見ず、況んや當に如來の變化及び變化の處、變化の所依、變化の證法有りと見るべけんや。[一一]此れに由りて如來の變化說法示導すと說く可しと。妙吉祥曰はく、善哉善哉、說く所知る所甚だ爲れ理の如し。汝已に一切法の無所得忍を起證して能く是の說を作す。覺所覺等も應に知るべし亦た然なりと。[一二]龍吉祥言はく、一切法の無所得忍は起る有り壞すること有るに非ず。所以は何ん、一切法は空にして自性無きを以て自相も亦た空なればなり。是の如き諸法は相無く對する無く色無く見る無く虛空と等し。云何が一切法に於て無所得忍を起すことを得ん。若し一切法の無所得忍の起る可き義有らば則ち谷響忍、若しは光影忍、若しは聚沫忍、若しは浮泡忍、若しは陽焔忍若しは芭蕉忍、若しは幻事忍、若しは夢境忍、若しは變化忍、若しは鏡像忍、若しは尋香城忍、若しは虛空界忍應に起義有るべし。所以は何ん、虛空等の忍餘の義有りとせば必ず是の處無ければなり。若し菩薩摩訶薩是の如き法を聞きて驚かず怖れず惑無く疑無く心沈沒せずんば卽ち是れ菩薩の無上法忍なりと。妙吉祥言はく、諸の菩薩衆の法忍を得る無きと豈に差別無からんと。[一三]龍吉祥曰はく、若し菩薩少分の法に於ても執著有ること無しといはば是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れ甚深に於て皆能く解了すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは是れ甚深の忍を成就せる者なりと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは甚深に於て悉く能く信受すと。是れ則ち名づけて有所得を行ずと爲す。若し諸の菩薩是の念言を作さん、我れは諸の義に於て悉く能く解了す

[一〇] 覺所覺の處、菩提の處を問答す。

[一一] 如來あり變化あり所依、證法ありて示導するにあらず、眞の眞とすべきもなきが故に自由に變化說法示導するを明すなり。

[一二] 妙吉祥の言に對して無所得忍なり、之を起證すと云ふべからざるを論ず。

[一三] 聖法に於て有所得なるを明す。

有情類は愚癡にして了せず、有るに非ざるを有りと謂ひ、常無きを常なりと計し、諸法の中に於て種種に分別す。或は色を分別し、或は心を分別し、有爲無爲有漏無漏是の如き等の類を種種に分別す。此の分別に由りて諸法の中に於て如實に皆幻化の如しと知らず。知らざるに由るが故に生死輪廻す。設ひ諸の有情一切法に於て如實に皆幻化の如しと了知するも則ち佛法に於て復た増長せず。[七]所以は何ん、諸の有情類は本來皆諸佛妙法有り、一切已に無退の佛智有るが故に諸の有情は咸く佛の妙法に於て安立す可し。覺慧動ずる無く法性空にして名無く相無く依る無く住する無しと知りて取る無く執する無く礙ぐる無く著する無きこと猶ほ虚空の如く、[八]阿賴耶無く[九]尼延底無く無上寂靜、最極寂靜にして生ずる無く滅する無く染無く淨無く成ずる無く壞する無く有に非ず無に非ず。此れに由りて中に於て甚深の忍を成じて常に諸佛の妙法を遠離せざれ。所以は何ん、諸佛の妙法は性を離れ相を離れて施設す可からず宣說す可からず表示す可からず、有情類に遍せること猶ほ虚空の若くなればなりと。時に龍吉祥甚深の法を聞きて歡喜踊躍して妙吉祥を讃ずらく、善哉善哉、尊者の所說は甚深徵妙にして思議す可からず、諸の有情は常に諸佛の妙法を遠離せずと說けり、誰れか能く信解するやと。妙吉祥曰はく、諸佛の眞子は皆能く信解す。謂ゆる隨信行若しは隨法行若しは第八若しは預流若しは一來若しは不還若しは阿羅漢若しは諸の獨覺若しは諸の菩薩の已に不退を得たるは諸の白法に於て動ずる無く、轉ずる無く、已に善く畢竟空法、無所得法に安住して能く深く信解するなり。所以は何ん、是の諸の菩薩には妙菩提座已に現在前し、能く世間の天魔梵釋沙門梵者阿素洛等人非人の前に對して大師子吼すればなり。我れ此の座に於て結加趺坐して乃至未だ無上菩提を得ずんば終に中間にて暫くも斯の坐を解かずと。何を以ての故に、是の諸の菩薩は已に善く畢竟空法無所得法に安住して動ず可からざるが故なり。譬へば帝杙（たいよく）の極めて善く安固せるに諸の牛王等動搖すること能はざるが如く是の如く菩薩已に善く畢竟空法無所得法に安住すれば一切の有情

【七】生佛不增不減なるを明す、而も法性空の動きのみ本有實在にもあらざるを說く、今特に原文を掲ぐ、所以者何一諸有情類本來皆有諸佛妙法一切已有無退佛智故諸有情咸可安立於佛妙法覺慧無動知法性空無名無相無依無住。

【八】阿賴耶 Ālaya 執藏と譯し愛執なり。

【九】尼延底 Nyanti 深入、執取と譯す貪の異名なり。

を發す有らば聞く者諸法を議詮することを生ずるや不やと。時に無能勝答へて曰はく、不なりと。妙吉祥言はく、是の如く諸法は一切實に非ず、皆谷の響の如く名無く相無く取著する所無し。斯れに於て執する有らば便ち戲論を行ずるなり。若し戲論を行ぜば生死に流轉す。彼れは響の如き一切法の中に於て如實に知らずして諸の乖諍を起す。乖諍起るが故に心則ち動搖す。心動搖する時諸の迷謬多し。迷謬增すが故に諸趣に輪廻す。是の故に世尊は親り晝夜に於て諸の苾芻を教誡教授して言はく、汝等苾芻、戲論を行ずること勿れ、我が說く所の寂滅の法の中に於て常に應に思惟し審諦に觀察して無得法忍を精勤修習すべしと。是の如く能寂の大聖法王は諸法の空にして本性寂靜無染無得依住する所無きを說きたまへり。能く如實に知らば生死より解脫して定めて當に菩提涅槃を證得すべしと。時に龍吉祥是の語を聞き已て因りて卽ち復た妙吉祥に問ひて言はく、尊者は何れの生死より解脫せるやと。妙吉祥曰はく、仁は如來は何れの生死より解脫を得たまへりと謂ふや、十力世尊の常に過去未來現在を說きたまへるは生死の法の爲なりと。龍吉祥言はく、世尊は豈に一切法は皆幻化の如しと說きたまはざるや。旣に爾れば有情は應に本より已に無上菩提を證せるなるべし、寧ろ生死有らんや。所以は何ん、尊者も亦た諸法は實に非ずして皆幻化の如しと說けばなりと。妙吉祥曰はく、我れ昔より來た法の性相に於て曾て未だ宣說せず、亦た分別取著造作せず。所以は何ん、諸法の性相は表示す可からず分別す可からず取著す可からず造作す可からざればなり。一切の有情設し能く如實に諸法は皆幻化の如しと了達せば應に本より已に無上菩提を證せるなるべし、然かも有情は一切法に於て皆幻化の如しと通達すること能はざるに由るが故に諸趣の生死に於て輪廻す。工みなる幻師は何物に隨依するも種種の幻化する所の事を幻作す、所謂世間の天魔梵釋沙門梵者諸の龍藥叉阿素洛等人非人衆なり。諸の愚癡類は迷ひて實有なりと執し、智者は幻師の實性無きが如く但だ種種虛妄の相のみ有りて現ずとするが如く、是の如く諸法は幻化の如しと雖も、而かも

る無く捨つる無く自性倶に空なり。諸佛世尊の説きたまふ一切法は分別す可からず皆幻事の如し。汝今無上菩提を證せんと欲せば豈に便ち幻法を分別するを成ぜざるや。然かも一切法は皆取る可からず亦た捨つ可からず、成ずる無く壞する無し。法は法に於て能く造作有り及び滅壞有るに非ず、法は法に於て能く和合有り及び別離有るに非ず。所以は何ん、一切法は合するに非ず散ずるに非ず自性皆空にして我我所を離れて虚空界に等しきを以て説く無く示す無く讃むる無く毀る無く高き無く下き無く損する無く益する無く想像す可からず戲論す可からず、本性虚寂にして皆畢竟空なればなり。幻の如く夢の如く對する無く比する無し、寧ろ彼れに於て分別心を起す可けんや。龍吉祥言はく、善哉尊者、我れ今此の定に由りて菩提を得たり。何を以ての故に、尊の我が爲に深法を説くに由るが故なりと。妙吉祥曰はく、吾れ今に於て曾て未だ汝が爲に若しは顯若しは密若しは深若しは淺を宣説する所有らず、云何ぞ汝をして能く菩提を得せしめん。所以は何ん、諸法の自性は皆説く可からざればなり。汝の我れ甚深の法を説くと謂ふは戲論を行ずと爲すなり。然かも我れ實に能く法を説く者に非ず、諸法の自性も亦た説く可からず、人有りて我れ能く幻士の識相を辯説すと言はんが如し。諸の幻士の識に是の如き是の如き差別有りと謂はんに彼れは此の説に由りて自らの實言を害せん。所以は何ん、夫れ幻士者は尙ほ識る所に非ず況んや識相有らんや。汝の今我れ甚深の法を説きて汝をして無上菩提を證得せしむと謂はんも亦復た是の如し。一切法は皆幻事の如くなるを以て畢竟性空すら尙ほ知る可からず況んや宣説すること有らんやと。

[六]爾の時、無能勝菩薩摩訶薩其の所に來至し聞き已て讃めて言はく、善哉善哉、正士大士、能く共に甚深の法門を辯説すと。時に妙吉祥、無能勝を詰て言はく、正士大士何の法を説けりと爲んや。夫れ菩薩は是の念を作さずと爲す、我れは是れ菩薩正士大士にして能く有情の爲に甚深の法を説くと。是の念を作す者は便ち戲論を行するなり。又た無能勝、頗し谷の響の自性實有にして能く語言

【六】法の説くべく證すべきなきを明す。

や不やと。妙吉祥曰はく、亦た能く證する有りと。龍吉祥言はく、誰れか證する者と爲すと。妙吉祥曰はく、若し名姓もて語言を施設する無くんば彼れ能く證すと爲すと。龍吉祥言はく、彼れ旣に是の如くんば云何が能く證せんと。妙吉祥曰はく、彼の心は生ずる無く菩提及菩提の座を念ぜず亦た一切の有情を慇念せず、[四]無表心無見心等を以て能く無上正等菩提を證すと。龍吉祥言はく、若し爾れば尊者何の心等を以て當に菩提を得べきやと。妙吉祥曰はく、我れ趣く所無く亦た能く趣くに非ず、都て學する所無し。我れ當に菩提樹に來詣して金剛座に坐し大菩提を證し妙法輪を轉じて生死を拔濟すべきに非ず。所以は何ん、諸法は動ずる無く破壞す可からず攝受す可からず畢竟空寂なればなり。我れ是の如き非趣心等を以て當に菩提を得べしと。龍吉祥言はく、尊者の所說は皆勝義に依りて諸の有情をして是の法を信解して煩惱より解脫せしむ。若し諸の有情の煩惱解脫せば便ち能く畢竟、魔の羂網を破するなりと。妙吉祥曰はく、魔の羂網は破壞す可からず。所以は何ん、魔とは菩提の增語に異らず。何を以ての故に、魔及び魔軍の性は倶に非有にして得可からざればなり。是の故に我れ魔とは菩提の增語に異ならずと說くと。龍吉祥言はく、菩提とは何の謂ひぞやと。妙吉祥曰はく、菩提とは諸の時處の一切法の中に遍ずるを言ふ。譬へば虛空の都て障礙無くして時處法に於て在らざる所無きが如し。菩提も亦た爾なり。障礙無きが故に、一切の時處法の中に遍在す。是の如き菩提は最も爲れ無上なり。[五]仁今何等の菩提を證せんと欲するやと。龍吉祥言はく、無上を證せんと欲すと。妙吉祥曰はく、汝今應に止むべし。無上菩提は證す可き法に非ず。汝の證せんと欲する者は便ち戲論を行ずるなり。何を以ての故に、無上菩提は離相寂滅なり。仁今取らんと欲せば戲論を成ずるが故に。譬へば人有りて是の如き說を作すが如し。我れ幻士をして菩提座に坐して幻の無上正等菩提を證せしめんと。是の如き所言は極めて戲論を成ず。諸の幻士すら尙ほ得可からざるを以て豈に能く幻の大菩提を證せしめんや。幻は幻法に於て合するに非ず散ずるに非ず取

【四】無表心。色等の如く表現せざる心、意思力を云ふも、此には心の適指すべきなきやを云ふ。

【五】無上菩提の證すべきにもあらざるを明す。

第八那伽室利分[一]

是の如く我れ聞きぬ。一時[二]薄伽梵、室羅筏に在し誓多林の給孤獨園に住りて諸の大衆の爲に正法を宣揚したまへり。爾の時、妙吉祥菩薩摩訶薩日の初分に於て衣を著け鉢を持ちて漸次に將に室羅筏城に入らんとせり。時に菩薩有り龍吉祥と名づく、見已て問ひて言はく、尊は何れに往く所なるやと。妙吉祥曰はく、我れ此の室羅筏城に入りて巡行し乞食せんと欲す、多くの衆生を利樂せんと欲するが爲の故に、世間の大衆生を哀愍せんが故に、諸の天人を利益し安樂せんが故にと。龍吉祥言はく、唯然尊者、今[三]食想に於て猶ほ未だ破せざる耶と。妙吉祥曰はく、吾れ食想に於て都て有るを見ず、何すれぞ破する所を知らん。所以は何ん、一切法の本性は空寂なること猶ほ虚空の若くなるを以て壞する無く斷ずる無し。我れ何んぞ能く破せん。諸天魔梵世間の沙門婆羅門等も亦た破すること能はず。所以は何ん、諸法の自性は虚空界に等しく畢竟皆空にして動搖す可からず、能く破する者無し。又た一切法は太虚空の如く天魔梵沙門等の諸の有情類の能く攝受す可き有ること無し。所以は何ん、一切の法性は遠離なるを以ての故に攝受する所に非ずと。龍吉祥言はく、若し所說の如くんば云何か菩薩は魔と戰諍するやと。妙吉祥曰はく、菩薩は未だ嘗て太鼓を撃つ魔軍と戰諍せず、菩薩爾の時亦た法の少しの眞實なる有りて依りて定に入る可きを見ず。所以は何ん、菩薩彼れを見て鼓等を撃つと雖も、而かも怖畏無ければなり。譬へば幻師の怨敵を幻作して擾惱を現ずと雖も、而かも怖れを生ぜざるが如く、是の如く菩薩は法性空なること皆幻等の如しと知りて都て怖畏無し。若し時に菩薩の怖畏する者有らば天人等の供養すべき所に非ず。然るに諸の菩薩は空を解して怖れ無く一切の眞淨の福田爲るに堪ふと。龍吉祥言はく、頗し能く菩提を證する者有り

【一】那伽室利 Nāgaśrī 龍吉祥と云ふ、その名の菩薩が本經の主演者なる故に乞ふ。
【二】佛、舍衞の祇園精舍に住在し給ふ。
【三】食想。食欲、吾れ噉食すると想ふ。

せりと云ふ以外には何等知る所なし。僧裕の失譯と云へるもの亦恐らく此本なるべし。此經は二卷にして大正藏經第八卷（740a—748b 月第九 12—19）に收められ、南條目錄には Pañca satikā prajñāparamitā ? と云ふも原本は未傳未考。

此經の內容は表題に示す如く、濡首の法身清淨分衞諸法如幻化三昧を說けるもの、前には英首、龍首に依て對說し、後には須菩提、舍利弗、長者優婆夷に假て徵逐し、之に交ふるに濡首の久修無著之三昧成就を讃歎せり。此に譯出せる那伽室利分は同本の新譯にして祇園に於て妙吉祥菩薩の朝入城行乞せんとするに對し龍吉祥之を問ひ、食想未だ破せざるかを詰るを基とし、一切空ならば菩薩の努力無用なるべしとするに對し虛空の如く無上菩提にして證すべきにもあらざるを明し、眞の眞とすべきなきが故に自由に變化說法示導するを明す。迷の有所得の付すべきのみならず聖法の有所得も排すべきを詳にし無所得の進趣を說き、海喩定中勝定行を示し無上の法食には下劣の法食、分段食を凌駕するを明す、善現顯はれてその論諍を聞き、無所得般若に通じて眞の佛法に歸依し、最後に入城行乞し、不可得を示現し、佛に報告するや妙吉祥も善現も各々稱讃印可せらるゝを說くに在り。結局新舊同本にして行乞の因緣より眞の般若法味を明すものとす。

（拙著佛敎經典概說一五四—一五七、一九二頁等參照）

椎尾辨匡記

第八那伽室利分解題

那伽室利分は大般若（220 第七 974c—979b）第八會にして第五百七十六卷に收む。舊譯に濡首般若（N 16）あり。三寶記第十（2034 第四十九 93 c 致六 71 b）に

濡首菩薩無上清淨分衞經二卷亦云決了諸法如幻化三昧經

右一經二卷宋世不顯年未詳何帝譯群錄直註云沙門翔公於南海郡出、見道安及始興錄、僧祐三藏記亦載

と云へるが、此の記事には錯誤あり、宋世譯とせば道安錄に出すべからず、現に道安錄を具出せる三藏記にも述べず、只僧祐は三藏記四（2145 第五五 21c 結一 17b）の失譯有本中に此經二卷存すとするのみ、尙三寶記は上出を第二出とせざるも、既に後漢靈帝の時嚴佛調、同經（別名も同じ）二卷或は一卷を譯出せりと云ふ（2034 第四十九 54a 致六 33b）後の錄者此に依るが故に開元錄一（2154 第五五 483a 結四 6a）には

濡首菩薩無上清淨分衞經二卷一名決了諸法如幻化三昧經、初出、與大般若那伽室利分等同本、或一卷見長房錄……本欠

として嚴佛調の譯出とし、敍事中には調が靈帝中平五年（188）戊辰洛陽に於て濡首菩薩等の經五部を譯せりと云ふ。其根據は僧裕錄高僧傳に在りとするも二者には佛調の譯著として法鏡と十慧とあるを云ふのみにして五部もなく年次も示さず。只開元錄には之を初出とするが故に第五卷（2154 第五五 532b 結四 48b）には翔公の譯を掲げて第二出とし始興錄に見るとして

右一部二卷其本見在、沙門釋翔公亦云朔公、在南海郡譯軟首菩薩經一部、群錄直云宋世不顯年名未詳何帝

と云ふも、これ只長房錄を顚置綴拾したるに過ぎず、毫も他に依憑なきは明かなり、故に宋（420—478）に翔公が南海に譯出

を超へて定めて當に無上菩提を證得すべしと。

[一四] 時に天帝釋卽ち無量の三十三天の諸の天子等と各種種天の妙華香、嗢鉢羅花、拘某陀花、鉢特摩花、奔荼利花、微妙の音花、妙靈瑞花、栴檀香末を取りて般若波羅蜜多を供養し、如來曼殊室利一切の菩薩及び聲聞等に奉散し、復た種種天の音樂を奏し妙法を歌讃して而かも供養を爲し、復た願を發して言はく、願くは我れ等の輩常に是の如き甚深般若波羅蜜多無上の法印を聞かんことをと。

[一五] 時に天帝釋復た願を發して言はく、願くは贍部洲の諸の有情類常に般若波羅蜜多を聞き歡喜して受持し佛法を成辦し、我れ等天衆常に之を衞護し受持者をして諸の留難無からしめん。諸の有情類少しく功力を用ひて而かも聽聞し受持讀誦することを得ば當に知るべし皆是れ諸天の威力なりと。爾の時佛、天帝釋を讃めて言はく、天主、汝今能く是の願を發せり、若し此れを聞きて歡喜して受持すること有らば諸の佛法に於て定めて能く成辦し疾く無上正等菩提に趣かんと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、唯だ願くは如來神通力を以て般若波羅蜜多を護持し世間に久住して一切を饒益したまはんことをと。佛時に大神通力を現じ此の三千大千世界の諸山大地をして六反に振動せしめ復た微笑を現じ大光明を放ちて普ねく三千大千世界を照らしたまへり。曼殊室利便ち佛に白して言さく、此れ卽ち如來神通力を現じて般若波羅蜜多を護持し世間に久住して饒益したまふ相なりと。佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。我れ神力を以て般若波羅蜜多無上の法印を護持し世に久住せしめて有情を饒益す。諸佛世尊は勝法を說き已らば法爾として皆大神通力を起し此の法を護持して世間に住せしめ、諸の天魔をして便りを得ること能はざらしむ。諸の惡人の輩も謗毀すること能はず、一切の外道は深心に怖畏せん。若し精勤して此の法を學する者有らば一切の障難殄滅せざる無けんと。

[一六] 時に薄伽梵是の經を說き已て一切の菩薩摩訶薩衆、曼殊室利而かも爲れ上首たる、及び苾芻等の四部の大衆天龍藥叉阿素洛等の一切の衆會、佛の所說を聞きて皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

【一四】般若供養を述ぶ。

【一五】般若受持を願ふ。

【一六】聞經の得益を明す。

も出離無き者有ること無しと達せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情、諸法は但だ假りの施設のみにして眞實なる者無しと達せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情類は無上正等菩提に趣くと雖も而かも有情の菩提に趣く者無く亦た退沒する無しと了知せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、一切法は即ち菩提なりと達するが故なり。若し一切の有情、菩提行を行じて行ぜざる者無く亦た退沒する無しと了達せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。所以は何ん、菩提は即ち是れ諸法の實性にして一切の有情は皆諸法を行じて法を捨つる者無く、諸行皆空なるが故に退沒すること無ければなり。若し一切の法性は即ち是れ菩提、一切の菩提は即ち是れ法界にして此れ即ち實際、實際は即ち空なりと了達して心退沒すること無からんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、甚深般若波羅蜜多は諸佛の難思の作用を顯示して有情を饒益す、亦た是れ如來の遊戲する所の處なり。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は示現す可からず宣說す可からず、是れ墮すること無き法なればなり。唯だ如來のみ有りて如實に覺了し、方便善巧して有情の爲に說く。曼殊室利、若し苾芻苾芻尼等有りて深般若波羅蜜多に於て下一四句頌のみを受持して他の爲に演說するに至るまで定めて菩提に趣きて佛の境界に住せん、況んや能く說の如く而かも修行せん者をや。當に知るべし、是の人は惡趣に墮せずして疾く無上正等菩提を證せんと。曼殊室利、若し諸の有情是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せず歡喜して信受せば當に知るべし此の輩は諸佛の法に於て定めて當に一切の如來の皆印可し開許し領受する所を證得して弟子衆と爲るべしと。曼殊室利、若し善男子善女人等如來の無上の法印の謂ゆる深般若波羅蜜多を信受せば無量の福を獲ん。是の如き法印は一切の如來應正等覺の共に護念する所にして諸の阿羅漢智者及び諸の天神も皆共に守衛す。若し菩薩乘の善男子等此の印に印せらるれば諸の惡趣聲聞獨覺

べし、佛の所說の法は有情をして般涅槃に於て已正當に得しめず。何を以ての故に、諸の有情は畢竟空なるを以ての故なりと。復た次に世尊、善男子等我が所に來至して是の問ひを作して言はん、仁と如來と嘗て談論せし所の甚深般若波羅蜜多を爲に之を說かんことを請ふ。今聽受せんことを希ふと。我れ當に彼れに告ぐべし。汝等聞かんと欲して聽心を起すこと勿れ專ら繫念すること勿れ。當に幻の如く化の如き等の心を起すべし。是の如くせば乃ち能く我が所說を解せん。汝等若し我が法を聽かんと欲せば當に是の心を起すべし、今聞く所の法は空の鳥の跡の如く石女の兒の如しと。是の如きは乃ち能く我が所說を聽くなり。汝等若し我が法を聞かんと欲せば二想を起すこと勿れ、所以は何ん、我が所說の法は二想を遠離すればなり。汝等今應に我想を壞せず諸見を起さず諸佛の法に於て希求する所無く、異生法の中にて遷動するを樂はざれ。何を以ての故に、二法相は空にして取捨無きが故なりと。世尊、諸の我れに甚深般若波羅蜜多を宣說せんことを請ふもの有らば我れ先に是の如く敎誡敎授し無相印印定の諸法を以て聽くを求むる者をして取著心を離れしめ然る後爲に甚深般若波羅蜜多相應の法を說くと。佛、曼殊室利童子を讃めたまはく、善哉善哉、汝能善く我が所說の法を說き及び方便を說く。曼殊室利、若し善男子善女人等、如來を見たてまつらんと欲し佛に親近して供養恭敬せんと欲せば、應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情、諸佛に大師と爲りたまはんことを請はんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情無上正等菩提を證せんと欲し或は證するを欲せずんば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情一切定に於て善巧を得んと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の有情一切定に於て自在に起こさんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。所以は何ん、諸の三摩地は要らず諸法の無生無滅無作無爲なるを知りて方に自在に起ればなり。何を以ての故に、諸法空に達して罣礙無きが故なり。若し諸の有情、諸法は皆出離有りて一法

藥物の種子は一切皆大地に依りて生長するが如く、是の如く菩薩の世出世間一切の善根及び餘の勝事は皆甚深般若波羅蜜多に依りて生長するを得ざる無し。當に知るべし是の如き甚深般若波羅蜜多の攝受する所の法は皆無上正等菩提に於て隨順し證得して乖諍する所無しと。爾の時曼殊室利童子、佛の所說を聞き便ち佛に白して言さく、此の贍部洲の當來の世に、何れの城邑聚落の處に於て演說し開示する所の甚深般若波羅蜜多を人多く信受するやと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、今此の衆の中の善男子等は般若波羅蜜多を說くを聞き信受して修行し歡喜して願を發す。願くは我れ當來に所生の處に隨て常に般若波羅蜜多を聞き、彼の當來の所生の處に隨て宿願力の故に即ち是の如き甚深般若波羅蜜多有りて演說し開示するに人多く信受せんことをと。曼殊室利、善男子等の般若波羅蜜多を說くを聞きて歡喜踊躍して深く信受する者は我れ說く彼の類は久しく善根を殖ゑ宿願力に乘じて乃ち能く是の如しと。曼殊室利、甚深般若波羅蜜多を聽受せんと欲する有らば汝應に告げて言ふべし、善男子等意に隨て聽受し驚怖を生ずること勿れ。疑惑して信ぜずんば反て謗毀を增さん。今此の般若波羅蜜多甚深の經の中には有法を顯さず、謂ゆる若しは異生法若しは聲聞法若しは獨覺法若しは菩薩法若しは如來法の成壞得可き有りと顯さずと。曼殊室利即ち佛に白して言さく、若し苾芻苾芻尼等有りて我が所(もと)に來至し是の問ひを作して言はん、云何が如來は衆の爲に甚深般若波羅蜜多を宣說したまふやと。我れ當に答へて言ふべし、佛の諸法を說きたまふに違諍相無し。所以は何ん、都て法の能く法と諍ふこと有ること無ければなり。亦た有情は佛の所說に於て能く信解を生ずること無し。所以は何ん、諸の有情類は都て得可からざればなりと。復た次に世尊、我れ當に彼れに告ぐべし。如來は常に諸法の實際を說きたまふ。所以は何ん、諸法は平等にして皆是れ實際の攝する所ならざる無ければなり。此の中阿羅漢等能く勝法に逮ぶと說かず。所以は何ん、阿羅漢等の證得する所の法と異生法とは差別相無ければなりと。復た次に世尊、我れ當に彼れに告ぐ

ん時に演ぶる所の法門も亦た同一味なり。謂ゆる遠離味、解脫味、寂滅味にして乖違する所無し。彼の菩薩乘の善男子等若し是の如き三摩地を得ん時は法門を演ぶるに隨て辯說盡くる無く速に能く菩提分の法を成滿せん。是の故に曼殊室利童子、若し菩薩摩訶薩能く正しく一相莊嚴三摩地を修行せば疾く無上正等菩提を證するなり。復た次に曼殊室利童子、若し菩薩摩訶薩法界の種種の差別及び一相をも見ずんば疾く無上正等菩提を證せん。若し菩薩乘の善男子等菩薩法の修行すべからざるを忍び、大菩提の求趣すべからざるを忍ばば一切法の本性空に達するが故に、彼れは此の忍に由りて疾く無上正等菩提を證せん。若し菩薩乘の善男子等一切法は皆是れ佛法なりと信じて一切空を聞くも心驚疑せずんば、此の因に由るが故に疾く無上正等菩提を證せん。若し菩薩乘の善男子等諸法は皆空ならざる無しと說くを聞きて心迷悶せず亦た疑惑無くんば彼れは佛法に於て常に捨離せずして疾く無上正等菩提を證せんと。

[一二] 爾の時曼殊室利童子是の語を聞き已て即ち佛に白して言さく、諸佛の無上正等菩提は定めて因緣に由りて而かも證得するや不やと。佛言はく、爾らずと。曼殊室利復た佛に白して言さく、諸佛の無上正等菩提は因緣に由らずして而かも證得するや不やと。佛言はく、爾らず。所以は何ん、不思議界は因緣に由らず及び因緣に非ずして而かも諸佛の無上正等菩提を證得すべければなり。當に知るべし即ち是れ不思議界なりと。曼殊室利、若し善男子善女人等是の如き說を聞きて心驚怖せずんば我れ彼れは無量の佛所に於て已に大願を發して多く善根を種うと說く。是の故に苾芻苾芻尼等是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて心驚怖せず亦た迷悶せずんば彼れは眞に佛に隨て出家するに資すと爲す。若し[一三]近事男近事女等是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて心驚疑せず亦た迷悶せずんば彼れは眞實に佛法僧に歸せりと爲す。若し菩薩乘の善男子等是の如き甚深般若波羅蜜多を學せずんば彼は名づけて眞實に菩薩乘を修學する者と爲さず。曼殊室利、譬へば世間の卉木叢林

【一二】宿緣によりて般若を信行すべきを說く。

【一三】近事男＝優婆塞＝在家男、近事女＝優婆夷＝在家女。

相莊嚴三摩地を得たる者の多聞智慧念總持力は思議す可からず、普ねく能く無量無數殑伽沙等の諸佛菩薩の無上法輪を受持し、一一の法門は皆能く甚深の義趣を了達し、宣說開示するに辯才盡くる無く、阿難陀に勝ること多百千倍ならんと。曼殊室利即ち佛に白して言さく、彼の菩薩乘の善男子等は云何が此の三摩地を得る時便ち無邊の功德勝利を獲るやと。佛言はく、童子、彼の菩薩乘の善男子等の精勤して一相莊嚴三摩地を修學する者は常に是の念を作す、我れ當に云何が能く普ねく諸佛の法界に通達し一切の無上法輪を受持して諸の有情の與に大饒益を作さんかと。斯れに由りて此の三摩地を得る時便ち無邊の功德勝利を得るなり。曼殊室利、彼の菩薩乘の善男子等先に是の如き一相莊嚴三摩地の德を聞きて發勤精進し繫念思惟して如如に此の定の功德を思惟せば、是の如く是の如く功德相現る。既に此の相を見て、先に聞きし所の如く深く歡喜を生じて轉た勤め修習して漸次に此の三摩地に入ることを得る功德勝利は思議す可からず。若し諸の有情の正法を毀謗し善惡を信ぜず業障重き者は彼れ此の定に於て證得すること能はじ。曼殊室利、譬へば人有りて遇ま寶珠を得て治寶者に示し、我が此の寶は價直無量にして、其の形色を盡くすも未だ[一]其の光鮮やかならず、汝當に我が爲に法の如く磨瑩すべし、但だ鮮淨ならしむるのみにして形色を壞すこと勿れと言はんに、其の治寶者彼の所言に隨て法に依り專心に如如に磨瑩せば、是の如く是の如く光色漸く發し乃至究竟して表裏に映徹し、既に修治し已つて價直無量なるが如く、曼殊室利、彼の菩薩乘の善男子等の漸次に此の三摩地を修學するも亦復た是の如し。乃至此の三摩地を得る時便ち無邊の功德勝利を獲ん。曼殊室利、譬へば日輪の普ねく光明を放ちて大饒益を作すが如く、是の如く若し一相莊嚴三摩地を得ん時は普ねく法界を照らし亦た能く一切の法門を了達して諸の有情の爲に大饒益を作さん、功德勝利は思議す可からず。曼殊室利、我が說く所の種種の法門の如きは皆同一味なり。謂ゆる遠離味、解脫味、寂滅味にして乖違する所無し。彼の菩薩乘の善男子等若し是の如き三摩地を得

【一】其の。文に甚に作る。

菩薩能く是の處を行ぜば諸の境界に於て悉く能く是の如き行處に通達し、一切乘の所行の處に非ず。所以は何ん、是の如き行處は名無く相無く分別する所に非ざればなり。是の故に名づけて所行の處に非ずと爲すと。曼殊室利復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は何の法を修行して疾く無上正等菩提を證するやと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩甚深般若波羅蜜多を行じて心に懈倦無くんば疾く無上正等菩提を證す。復た次に曼殊室利童子、若し菩薩摩訶薩能く正しく[九]一相莊嚴三摩地を修行せば疾く無上正等菩提を證すと。曼殊室利復た佛に白して言さく、云何が名づけて一相莊嚴三摩地と爲し、諸の菩薩は云何して修行するやと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、此の三摩地は法界相を以て而かも莊嚴と爲す。是の故に名づけて一相莊嚴三摩地と爲す。若し菩薩摩訶薩是の如き勝三摩地に入らんと欲せば先に應に甚深般若波羅蜜多を聽聞し請問し修學して然る後能く此の三摩地に入るべし。曼殊室利、若し菩薩摩訶薩法界を動ぜずして眞法界の動搖すべからず思議す可からず戲論す可からざるを知らば是の如く能く一相莊嚴三摩地に入るなり。[一〇]曼殊室利、若し善男子善女人等是の如き三摩地に入らんと欲せば應に空閑に處して諸の諠雜を離れ結跏趺坐して衆相を思はず一切有情を利樂せんと欲するが爲に一如來に於て專心に繫念して審かに名字を取り善く容儀を想ひ、所在の方に隨て身を端(ただし)くして正向し、相續して此の一如來を繫念すべし。卽ち爲れ普ねく三世の諸佛を觀ずるなり。所以は何ん、曼殊室利、一佛の所有る無量無邊の功德辯才は一切の佛に等しければなり。三世の諸佛は一眞如に乘じて大菩提を證し差別無きが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等精勤修學して是の如き一相莊嚴三摩地に入ることを得ば普ねく能く無量無邊殑伽沙等の諸佛の法界無差別相に了達し、亦た能く無量無數殑伽沙等の諸佛菩薩の已に轉じ未だ轉ぜざる無上の法輪を總持す。阿難陀の如きは多聞智慧ありて諸佛の敎に於て念總持を得て聲聞衆の中にて最も爲に勝れたりと雖も而かも持つ所の敎は猶ほ分限有り。若し是の如き一

【九】一相莊嚴三摩地。無相平等に住するを云ふ。

【一〇】勝定に入るには一如來を專念すべきを說く。

すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等如來の力無畏等の無邊の佛法を得んと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべしと。

[六]爾の時曼殊室利童子卽ち佛に白して言さく、我れ是の如き甚深般若波羅蜜多を觀ずるに相無く爲す無く諸の功德無く生無く滅無く力無く能無く去る無く來る無く入る無く出づる無く損する無く益する無く知る無く見る無く體無く用無く造作する者に非ず亦た諸法をして生滅せしむること能はず、諸法をして一と爲り異と爲らしめず、成ずる無く壞する無く慧に非ず境に非ず、異生法に非ず聲聞法に非ず、獨覺法に非ず菩薩法に非ず、如來法に非ず、證不證に非ず得不得に非ず、盡不盡に非ず、生死に入らず、生死より出でず、涅槃に入らず涅槃より出でず。諸の佛法に於て成ぜず壞せず、一切法に於て作不作に非ず思議す可く思議す可からざるに非ず、諸の分別を離れ諸の戲論を絕す。是の如く般若波羅蜜多は都て功德無し、云何が如來は有情類に精勤し修學するを勸むるやと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、是の如く說く所は卽ち是れ般若波羅蜜多の眞實の功德なり。善男子等、若し是の如く知らば此れを卽ち名づけて眞實に甚深般若波羅蜜多を修學すと爲す。復た次に曼殊室利童子、若し菩薩摩訶薩、菩薩の勝三摩地を學せんと欲し、菩薩の勝三摩地を成ぜんと欲し、是の如き三摩地の中に住して一切の佛を見、佛の名字を知り及び是の如き諸佛世界にて諸法の實相を能く證し能く說くに障り無く礙ぐる無きを見んと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學し晝夜に精勤して厭倦を生ずること勿るべしと。[七]曼殊室利卽ち佛に白して言さく、何が故に名づけて甚深般若波羅蜜多と爲すやと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、甚深般若波羅蜜多は相無く名無く邊無く際無く歸依處無く思量の境に非ず、罪に非ず福に非ず闇に非ず明に非ず、淨虛空等の如く眞法界の分齊數量都て得可からず、是の如き等の種種の因緣に由り、是の故に名づけて甚深般若波羅蜜多と爲す。復た次に[八]曼殊室利童子、甚深般若波羅蜜多は是れ諸の菩薩の甚深の行處なり。若し諸の

【六】般若無相にして無功德なるを說く。

【七】甚深般若の何たるかを明す。

【八】行處にして行處にあらざるを明して修行を說く。

たまふ祕密の義趣を知らんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、所覺の諸法及び能覺者は得可からざるが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等、佛の、如來は諸の佛法を證すること能はずと說きたまふ祕密の義趣を知らんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に所證の佛法及び能證者は得可からざるが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等、佛の、如來は無上正等菩提を證得すること能はず相好威儀具足せざる無しと說きたまふ祕密の義趣を知らんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、所證の無上正等菩提相好威儀及び能證者は得可からざるが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等、佛の、如來は一切の功德を成ぜず一切の有情を化導すること能はずと說きたまふ祕密の義趣を知らんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、一切の功德所化の有情及び諸の如來は得可からざるが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等諸法に於て無礙解を得んと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は諸法の少眞實も若しは淨若しは染生滅等有るを見ざるが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等、諸法の去來今及び無爲相に非ざるを知らんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。何を以ての故に、眞法界は去來今及び無爲に非ざるを以ての故に諸法は皆眞法界に入るが故なり。曼殊室利、若し善男子善女人等、能く三轉十二行相の無上法輪及び其の中に於て都て執著無からんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等、慈心もて普ねく一切を覆ひ而かも其の中に於て有情想無きを得んと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等、世間と同じく法性に入りて諸の諍論無く而かも世間及び諸の諍論に於て都て所得無からんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等遍ねく處非處の境に了達して都て罣礙無からんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學

佛言はく、是の如し、汝が所說の如し。我れ已に彼の行狀相を說けりと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、現在當來の善男子等、是の深法の諸の行狀相を聞かば當に知るべし、卽ち諸の行狀相に非ず。所聞の法は微妙寂靜なるを以て諸の行狀相も皆得可からず。云何が如來は是の如き說を作したまふや、我れ已に善く彼の行狀相を說けりと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。現在當來の善男子等、是の深法の諸の行狀相を聞かば彼れは實に皆諸の行狀相に非ず。所聞の法は微妙寂靜なるを以て諸の行狀相は皆得可からざるなり。然かも彼れ甚深の法を說くを聞く時歡喜して受持し信解修學するは必ず過去に於て已に曾て聞くことを得て歡喜して受け行ぜしが故に能く是の如し。此の行狀相は世俗に依りて說くなり。勝義の中には是の如きの事有ること無し。曼殊室利、當に知るべし。甚深般若波羅蜜多を顯了するは卽ち爲れ一切の佛法を顯了して眞實不思議の事に通達するなりと。曼殊室利、我れ本菩薩行を修學せし時集めし所の善根は皆甚深般若波羅蜜多を修學せしに由りて方に成滿することを得たり。菩薩の不退轉地に住せんと欲し、無上正等菩提を證せんと欲せしも亦た甚深般若波羅蜜多を修學せしに由りて乃ち能く成辦することを得たり。[五]曼殊室利、若し善男子善女人等、菩薩の集むる所の善根を集めんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等菩薩の不退轉地に住せんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等無上正等菩提を證せんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等善く一切法界平等の相に通達せんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等善く一切有情の心行平等なるを了知せんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等疾く一切の佛法を證得せんと欲せば當に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべし。曼殊室利、若し善男子善女人等、佛の、如來は諸法を現覺すること能はずと說き

【五】般若修學の功德を說けるに因りて今般若修學を勸む。

布せんと。當に知るべし、彼の類は是の法を聞き歡喜踊躍して信受し修行するに由り久しからずして一切の佛法を開敷せんと。如來の滅後に若し此の經典を受持し演說し流布する者有らば當に知るべし皆是れ佛の威神力の加護する所にして彼の事をして成ぜしむと、飮光當に知るべし、若し是の甚深般若波羅蜜多を聞き歡喜して受持する有らば此れ過去の無量の佛所に於て多く善根を植ゑて已に聽聞することを得たるなり。今に適するに非ざるなりと。穿珠者の忽然として遇ま無價の末尼を得ば大歡喜を生ずるが如し、當に知るべし彼の類は曾て此の珠を見しが故に歡喜を生ずるなり。今創めて見るに非ずと。是の如く當來の諸の苾芻等深心に愛樂して正法を聽聞せるに忽ちに般若波羅蜜多に遇ひて歡喜して聽聞し信受して修學す。當に知るべし彼の類は已に往昔無量の佛所に於て曾て是の經を聞けるなり。今時に於て創めて聞きて能く爾るに非ずと。飮光當に知るべし、若し善男子善女人等、妙吉祥の所說の般若波羅蜜多を聞き歡喜踊躍して樂聞し厭くこと無く數復た慇懃に演說せんことを重請せば是の善男子善女人等は過去に已に曼殊室利に從つて般若波羅蜜多を說けるを聞き歡喜して受持し信解修學せるなり。亦た曾て曼殊室利に親近して供養恭敬せしが故に能く是の如しと。譬へば人有りて遇ま城邑に入りて其の中の一切の園林池沼舍宅人物悉く見ざる無し。後餘處に至りて人の讃めて此の城邑の中の所有る勝事を說くを聞かんに深く歡喜を生じて其れに重ねて說かんことを請ひ、若し更らに聞くことを得ば倍す復た歡喜するが如し。彼れ往昔皆曾て見しに由るが故なり。是の如く當來の諸の善男子善女人等妙吉祥の所說の般若波羅蜜多を聞くに歡喜して樂聞し常て厭足すること無く慇懃に固く深義を重說せんことを請ひ聞き已つて讃歎して倍す歡喜を生じなば當に知るべし此れ等は皆往昔に已に曾て曼殊室利に親近して供養恭敬し斯の法を聽受せしに由るが故に今時に於て能く是の事を成ずと。爾の時具壽大迦葉波便ち佛に白して言さく、如來は善く現在當來の善男子等の深般若波羅蜜多を聞きて信解し修行する諸の行狀相を說きたまへりと。

た爾なり久しく修して成熟せば作す無く證する無く生ずる無く盡くる無く起る無く沒する無く安固にして動ぜずと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、誰れか能く是の如く妙智を信解せんと。曼殊室利白して言さく、世尊、若し能く般涅槃の法を行ぜず、生死の法に於ても亦た能く行ぜず、[三]薩迦耶に於て寂滅行を行じ、般涅槃に於て無動行を行じ、貪欲瞋恚愚癡を斷ぜず亦た斷ぜざるに非ず、所以は何ん、是の如き三毒の自性は遠離にして盡不盡に非ざればなり。生死の法有るも起えず墮ちず、諸の聖道に於て離れず修せずんば、彼れは此の智に於て能く深く信解すと。佛、曼殊室利童子を讃めたまはく、善哉善哉、善く此の事を說くと。

爾の時具壽大迦葉波前んで佛に白して言さく、當來の世に誰れか能く此の法[四]毘奈耶の甚深の義趣に於て信解し修學するやと。佛、具壽大迦葉波に告げたまはく、今此の會中の苾芻等の衆は當來の世に此の所說の法毘奈耶の甚深の義趣に於て能く倶解を生じて聽受修學し亦た能く他の爲に演說し流布せん。大長者の無價の珠を失はんに苦惱心に纏ひ愁憂して樂しまざるも後時還りて得ば踊躍歡喜するが如く、今此の會中の苾芻等の衆も亦復た是の如し。深般若波羅蜜多を聞きて信解し修學せるに後是の如き法門を說くを聞かずんば苦惱心に纏ひ愁憂して樂しまず、咸く是の念を作さん、我れ等何れの時にか當に更に是の如き深法を聞くことを得べきと。後時に若し此の法門を聞くことを得ば踊躍歡喜して復た是の念を作さん、我れ今是の如き經典を聞くことを得たり、卽ち爲れ佛を見たてまつれるなり、親近し供養せんと。圓綵樹の胞初めて出づる時三十三天踊躍歡喜して、此の樹久しからずして花必ず開敷し香氣氛氳たらん、我れ等遊集せんといふが如く苾芻等の衆も亦復た是の如し。深般若波羅蜜多を聞かば信受して修行し應に歡喜を生ずべし、一切の佛法久しからずして開敷せんと。飮光當に知るべし、未來の世に苾芻等の衆若し是の如き甚深般若波羅蜜多を聞きて信解し修行して心沈沒せずんば必ず此の會に於て已に聽聞することを得て歡喜して受持し演說し流

【三】薩迦耶、有身見なり。

【四】毘奈耶、律制なり。

無所有界は當に知るべし卽ち是れ無生滅界なりと。無生滅界は當に知るべし卽ち是れ不思議界なりと。不思議界と如來界我界法界とは二無く別無し。是の故に世尊、若し能く是の如く般若波羅蜜多を修行せば大菩提に於て更らに證を求めず。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は卽ち菩提なるが故なり。世尊、若し實に我界を知る有らば卽ち著する無きを知らん。若し著する無きを知らば卽ち法無きを知らん。若し法無しと知らば佛にして卽ち是れ佛智なり。智は卽ち不思議智なり。當に知るべし佛智は法の知る可き無きをば法を知らずと名づくと。所以は何ん、此の智の自性は都て所有無ければなり。無所有の法云何ぞ能く眞法界に於て此の智の自性を轉ぜん。既に無所有なれば卽ち著する所無し。若し著する所無くんば卽ち體は智に非ず。若し體智に非ざれば卽ち境界無し。若し境界無くんば卽ち依る所無し。若し依る所無くんば卽ち住する所無し。若し住する所無くんば卽ち生滅無し。若し生滅無くんば卽ち得可からず。若し得可からずんば卽ち趣く所無し。既に趣く所無くんば此の智は諸の功德を作すこと能はず亦復た非功德をも作すこと能はず。所以は何ん、此れは我れ功德を作す非功德を作すと思慮すること無ければなり。思慮無き智は思議す可からず。思議す可からざれば卽ち是れ佛智なり。是の故に此の智は一切法に於て取不取無し、亦た前際中際後際に非ず、先に已に生ぜしに非ず先に未だ生ぜざるに非ず、出づる無く沒する無く、常に非ず斷に非ず。更らに餘智の此の智に類する者無し。是れに由りて此の智は思議す可からず。虛空に同じく比類す可からず。此れ無く彼れ無く好に非ず醜に非ず。既に餘智の此れに類して得可き無し。是の故に此の智は等不等無し。此れに由るが故に無等等智と名づく。又た餘智の此れに對して得可き無し。是の故に此の智は對不對無し。此れに由るが故に無對對智と名づくと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、是の如き妙智は動ず可からざる耶と。曼殊室利白して言さく、世尊、是の如き妙智の性は動ず可からず。鍜金師の金璞を燒錬するに既に精熟するを得ば秤量するも動ずること無きが如く、此の智も亦

し。然るに得可からずと。舍利子言はく、曼殊室利、豈に今此の定も亦た得可からざるやと。大德、此の定も實に得可からず。所以は何ん、謂ゆる一切定の思議す可き者は相の得可き有るも、不思議なる者は相の得可き無し。此の定は既に思議す可からずと曰ふ。是の故に定めて應に實に得可からざるべし。又た舍利子、[二]不思議定は一切の有情得ざる者無し。所以は何ん、一切の心性は皆心性を離る。心性を離るゝ者は皆即ち名づけて不思議定と爲すが故に、有情類の得ざる者無しと。佛、曼殊室利童子を讃めたまはく、善哉善哉、曼殊室利、汝過去の無量の佛所に於て多く善根を植ゑて久しく大願を發し、修する所の梵行は皆無得に依り、發言するに皆甚深の義處を說く。曼殊室利、汝豈に深般若波羅蜜多に住するを以て能く一切時に甚深の義を說かざらんやと。曼殊室利即ち佛に白して言さく、若し我れ甚深般若波羅蜜多に住するに由りて能く是の如く說かば便ち我想に住し及び有想に住して能く是の如く說くなり。若し我想に住し及び有想に住して能く是の如く說かば則ち深般若波羅蜜多も亦た住する所有るなり。若し深般若波羅蜜多住する所有らば則ち深般若波羅蜜多も亦た我想を以て及び有想を以て所住の處と爲すなり。然るに深般若波羅蜜多は二想を遠離して無所住に住す。諸佛の微妙寂靜に住するが如く起る無く作す無く動ずる無く轉ずる無く以て住する所と爲す。甚深般若波羅蜜多は有法に住せず無法に住せず。故に此の住する所は思議す可からず。甚深般若波羅蜜多は一切法に於て皆現行せず。甚深般若波羅蜜多は當に知るべし、即ち是れ不思議界なりと。不思議界は即ち是れ法界、法界は即ち是れ不現行界、不現行界は當に知るべし即ち是れ不思議界なりと。不思議界は當に知るべし即ち是れ甚深般若波羅蜜多なりと。甚深般若波羅蜜多我界法界は二無く別無し。二無く別無くんば即ち是れ法界、法界は即ち是れ不現行界、不現行界は當に知るべし即ち是れ甚深般若波羅蜜多なりと。甚深般若波羅蜜多は當に知るべし即ち是れ不思議界なりと。不思議界は當に知るべし即ち是れ不現行界なりと。不現行界は當に知るべし即ち是れ無所有界なりと。

[二] 不思議の故に平等にして一切有情に通ず。

所說の法相は思議す可からざればなりと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝の所說は實に思議し難し。誠に具壽舍利子の說くが如しと。曼殊室利即ち佛に白して言さく、我が所說の法は思議す可しと說く可からず亦た思議す可からずと說く可からず。所以は何ん、思議す可からざると思議す可き性とは俱に無所有にして但だ音聲有るのみ。一切の音聲も亦た思議す可からず思議す可き性なりと說く可からず。一切法の自性離なるを以ての故に。是の說を作す者は乃ち名づけて不可思議を說くと爲すと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝今現に不可思議三摩地に入れるやと。曼殊室利白して言さく、世尊、我れ現には此の三摩地に入らず。所以は何ん、我れ都て此の三摩地の性の我れに異れるを見ず。心の能く我れ及び此の定を思惟する有るを見ざるが故に、三摩地を思議す可からざれば心非心性は俱に入ること能はざればなり。云何が我れ此の定に入ると言ふ可けん。復た次に世尊、我れ昔初めて學し作意して現に此の三摩地に入れるも今時に於ては復た更らに作意して現に此の定に入るに非ず。善く射る夫も初めて射業を學するには心を麁的に注ぎて方に乃ち箭を發つも久習し成就せば能く毛端を射るにも復た心を注がざるに心彼の麁的に在りて射んと欲する所に隨て箭を發つに便ち中るが如く、是の如く我れ先に初めて定位を學するには要らず先に繫念して不思議に在り、然して後乃ち能く現に此の定に入りしも久習し成就せば、此の定の中に於て復た心を繫けざるに任運に能く住す。所以は何ん、我れ諸定に於て已に善巧を得て任運に入出し復た作意せざればなりと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、此の曼殊室利童子を觀るに未だ信を保つ可からず。所以は何ん、此の定の中に於て恒には住せざるに似たり。然かも餘定の微妙寂靜なること此の定に同じき者無しと。曼殊室利便ち具壽舍利子に白つて言はく、大德寧ろ更らに餘定の寂靜なること此れに同じき無しと知るやと。舍利子言く、豈に更に定の寂靜なること此れに同じき有らんやと。曼殊室利報へて言はく、大德、若し、此れ得可くんば餘定の寂靜なること此れに同じと言ふ可

らんを願ふ。然るに諸の福田は實に得可からず。是の故に諸佛は皆福田に非ず非福田に非ず。福非福及び一切法の性平等なるを以ての故に。然るに世間の田の能く盡くる無き者は世共に彼れを說きて無上田と名づく。諸佛世尊は無盡の福を證したまふ。是の故に無上福田と說く可し。又た世間の田の轉變無き者は世共に彼れを說きて無上田と名づく。諸佛世尊は無變の福を證したまへり。是の故に無上福田と說く可し。又た世間の田の難思を用ふる者は世共に彼れを說きて無上田と名づく。諸佛世尊は難思の福を證したまへり。是の故に無上福田と說く可し。諸佛の福田は實に無上なりと雖も而かも福を植うる者減ずる無く增す無しと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝何の義に依つて是の如き說を作すやと。曼殊室利白して言さく、世尊、佛の福田相は思議す可からず、若し中に於て福を植うる者有らば卽便ち能く平等の法性を了す。一切法の無減無增に達するが故に。佛の福田は最も爲れ無上なりと。爾の時大地、佛世尊の神力法力を以て六返に變動す。時に衆會の中に十六億の[三六]大苾芻衆有り諸漏永く盡きて心解脫を得たり。七百の苾芻尼、三千の鄔波索迦、四萬の鄔波斯迦、六十俱胝那庾多數の欲界の天衆は遠塵離垢して淨法眼を生じぬ。時に阿難陀卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに右肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して白して言さく、世尊、何の因何の緣もて今此の大地は六返に變動せるやと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、妙吉祥福田相を說きしに我れ今印許せるに由るが故に斯の瑞を現ずるなり。過去の諸佛も亦た此の處に於て福田相を說きしに大地をして動ぜしめしが故に今時に於ても是の如きの事を現ずるなりと。

卷の第五百七十五

第七曼殊室利分之二

[一]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、曼殊室利は思議す可からず。所以は何ん、曼殊室利の

【三六】大苾芻衆。舊に比丘衆、比丘尼衆、優婆塞、優婆夷と云ふもの出家、在家の男女四衆なり。

【一】同じく思議を超越するを說く。

て法に於て讃むる無く毀る無しと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、是の深法に於て誰れか當に讃毀すべきと。佛言はく、童子、愚夫異生の彼れの是の如き心は實の心性に非ず、佛の心性と同じく思議す可からずと。曼殊室利復た佛に白して言さく、愚夫異生の心非心性は佛の心性と同じく不思議なる耶と。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。何を以ての故に、佛有情の心及び一切法は皆悉く平等にして不思議なるが故なりと。曼殊室利復た佛に白して言さく、佛有情の心及び一切法若し皆平等にして思議す可からずんば今諸の聖賢の涅槃を求むる者の勤行精進するは豈に[三三]唐捐ならざるや。所以は何ん、不思議性と涅槃性とは旣に差別無し何すれぞ更に求むるを用ひん。若し此れは異生法此れは聖者法なりと言ひて差別相有りと說くこと有らば、當に知るべし彼の人は未だ曾て眞淨の善友に親近せず、是の如き說を作して諸の有情をして二法の異りに執して生死に沈淪し涅槃を得ざらしむるなりと。

[三四]佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝は如來の有情類に於て最も爲れ勝たるを願ふや不やと。世尊、若し眞實有情有らば我れ如來の彼れに於て最勝たらんを願ふ。然かも有情類は實に得可からずと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝は佛の不思議法を成就したまふを願ふ耶と。世尊、若し不思議法の實に成就す可き有らば我れ如來の彼の法を成就したまふを願ふ。然かるに是の事無しと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝は如來の法を說いて弟子衆を調伏したまふを願ふや不やと。世尊、若し法を說きて眞如法界を調伏すること有らば我れ如來の法を說きて諸の弟子衆を調伏したまふを願ふ。然かも佛世尊の世に出現したまふは有情類に於て都て恩德無し。所以は何ん、諸の有情類は皆無雜の眞如法界に住すればなり。此の界の中に於ては異生聖者、能說能受、倶に得可からずと。[三五]佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝は如來是れ世の無上の眞福田たらんを願ふや不やと。曼殊室利白して言さく、世尊、若し諸の福田是れ實に有らば我れも亦た佛の彼れに於て無上た

【三三】唐捐。徒事むだなり。

【三四】如來に別相を願はざるを說く。

【三五】無上福田を說く。

如來も亦た爾なり、二不二に非らず。是の故に妙智眞如如來は但だ假名のみ有りて而かも一實無し。故に佛は是れ實に如來なりと謂はずと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝如來に於て疑惑するに非ざる耶と。不なり世尊、不なり善逝。何を以ての故に、我れ如來は實に得可からずと觀じ生ずる無く滅する無きが故に疑ふ所無しと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、如來は豈に世間に出現せざるやと。不なり世尊、不なり善逝、若し眞法界世間に出現せば如來も世に出現すと言ふ可し。眞法界は世間に出現するに非ず、是の故に如來も亦た出現せざるなりと。曼殊室利、汝は殑伽沙數の諸佛涅槃に入ると謂ふや不やと。世尊、豈に諸佛如來は同じく不思議にして一境界相ならざらんやと。曼殊室利、是の如し是の如し、汝が所説の如し。諸佛如來は同じく不思議にして一境界相なりと。曼殊室利復た佛に白して言さく、今佛世尊は現に世に住したまへるや不やと。佛言はく、是の如しと。曼殊室利便ち佛に白して言さく、若し佛世尊現に世に住したまはゞ殑伽沙等の諸佛世尊も亦た應に世に住したまふべし。何を以ての故に、一切の如來は同じく不思議にして一境界相なるが故なり。不思議相は生ずる無く滅する無し。如何が諸佛は入涅槃有らん。是の故に世尊、若し未來の佛の當に世に出でたまふべきこと有らば一切の如來は皆當に世に出でたまふべし。若し過去の佛已に涅槃に入りたまはゞ一切の如來も皆已に滅度したまへるなり。若し現在の佛現に菩提を證したまはゞ一切の如來も皆應に現に證したまふべし。何を以ての故に、不思議の中には未來現在の所有る諸佛差別無きが故なり。然るに諸の世間は種種の戲論に迷謬し執著す。[三一]謂ゆる佛世尊は生ずる有り滅する有り菩提を證する有りと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝の所説の法は唯だ如來不退の菩薩大阿羅漢のみ有りて能く解了する所なり。餘は知ること能はず。何を以ての故に、唯だ如來等のみ是の深法を聞かば如實に了達して讃めず毀らず。心非心の得可からざるを知るが故なり。[三二]所以は何ん、一切の法性は皆悉く平等にして心及び非心倶に得可からざればなり。此れに由り

【三一】如來の生滅證得を云ふは戲論なり迷訟のみ。

【三二】心非心得べからざるが故に證不證なし、一切法平等なればなり。

て行法界に順へば心下劣にして行を超越するに非ずと名づく。我れ此の義に依りて是の如き說を作すと。時に舍利子、曼殊室利を讃めて言はく、善哉善哉、善能く我が爲に密語の義を解せりと。曼殊室利報へて言はく、是の如し是の如し。大德、我れは但だ能く密語の義を解するのみに非ず。[二八]我れも亦た卽ち是れ一切の漏盡きし眞の阿羅漢なり。何を以ての故に、我れ聲聞獨覺に於ける樂欲皆永く起らざるが故に漏盡の眞の阿羅漢なりと名づくと。

[二九]佛、曼殊室利童子に告げたまはく、頗し因緣有らば菩薩の菩提座に坐して無上正等菩提を證せざるを說く可しと。曼殊室利白して言さく、世尊、亦た因緣有れば菩薩の菩提座に坐して無上正等菩提を證せざるを說く可し。謂ゆる菩提の中には少法も無上菩提と名づく可きもの有ること無し、然かも眞の菩提は性差別無し、坐して得可く坐せざれば便ち捨つるに非ず。此の因緣に由りて菩薩は菩提座に坐して菩提を證せずと說く可し。無相の菩提は證す可からざるが故なりと。曼殊室利復た佛に白して言さく、[三〇]無上菩提は卽ち五無間、彼の五無間は卽ち此れ菩提なり。所以は何ん、菩提無間は倶に假りの施設にして眞實菩提の性有るに非ず、證得す可きに非ず、修習す可きに非ず、現見す可きに非ず。彼の五無間も亦復た是の如し。又た一切法の本性は畢竟現見す可からず、中に於て覺る無く覺る者無く、見る無く見る者無く、知る無く知る者無く、分別無く分別する者無く、離相平等なるを名づけて菩提と爲す。五無間の性も亦復た是の如し。此れに由りて菩提は證得す可きに非ず、大菩提を證得修習現見す可しと言ふ者は是れ增上慢なりと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝今我れを是れ如來と謂ふ耶と。不なり世尊、不なり善逝。我れ佛は是れ實に如來なりと謂はず、所以は何ん、夫れ如來とは微妙の智を以て眞如を證會するなり。妙智眞如の二は倶に相を離る。眞如相を離るれば眞如と謂ふに非ず、妙智も亦た然なり。妙智と謂ふに非ず。旣に妙智無く及び眞如無し。是の故に如來も亦た眞實に非ず。何を以ての故に、眞如妙智は但だ假りの施設のみ。

【二八】普通の漏盡羅漢とせず、二乘樂欲起らざるに名づく。

【二九】無相菩提の證すべからざるを明す。

【三〇】無上菩提と五逆との卽一を說く。

つ者も増益すべきに非ず、重きを犯す苾芻も應供ならざるに非ず、淨く戒を持つ者も定めて應供なるに非ず、重きを犯す苾芻も漏を増長するに非ず、淨く戒を持つ者も漏を損減するに非ず、重きを犯す苾芻も淨信無きに非ず、淨く戒を持つ者も淨信有るに非ず、重きを犯す苾芻も清淨の信施を受くべからざるに非ず、淨く戒を持つ者も定めて清淨の信施を受くべきに非ず。何を以ての故に、舍利子、眞法界の中には若しは持若しは犯其の性平等にして差別無きが故なり。[二七] 又た舍利子、諸の異生類は和合者と名づけ、漏盡の苾芻は不和合と名づくと。曼殊室利、汝何の義に依りて是の如き說を作すやと。大德、異生と生因と合すれば和合者と名づくるも、諸の阿羅漢は是の如き義無ければ不和合と名づく、我れ此の義に依りて是の如き說を作す。又た舍利子、諸の異生類は怖れを超ゆる者と名づけ、漏盡の苾芻は怖れを超えずと名づくと。曼殊室利、汝何の義に依りて是の如き說を作すやと。大德、異生は怖る可き法に於て怖畏を生ぜざれば怖れを超ゆる者と名づけ、諸の阿羅漢は怖る可き法を知りて實に所有無く怖れの超ゆ可き無し。我れ此の義に依りて是の如き說を作すと。又た舍利子、諸の異生類は無滅忍を得、諸の菩薩衆は無生忍を得と。曼殊室利、汝何の義に依りて是の如き說を作すやと。大德、異生は寂滅を樂はざれば無滅忍を得と名づけ諸の菩薩衆は法の生ずるを見ざれば無生忍を得と名づく。我れ此の義に依りて是の如き說を作す。又た舍利子、諸の異生類は調伏者と名づけ、漏盡の苾芻は調伏せずと名づくと。曼殊室利、汝何の義に依りて是の如き說を作すやと。大德、異生は未だ調伏せざるが故に應に調伏す可ければ調伏者と名づけ、諸の阿羅漢は漏結已に盡きて復た調ふるを須たざれば調伏せずと名づく。我れ此の義に依りて是の如き說を作す。又た舍利子、諸の異生類は增上心もて行を超越する者と名づけ、漏盡の苾芻は心下劣にして行を超越するに非ずと名づくと。曼殊室利、汝何の義に依りて是の如き說を作すやと。大德、異生は其の心高擧にして行法界に違へば增上心もて行を超越する者と名づけ、諸の阿羅漢は其の心謙下にし

【二七】以下、樹立的に名づくる所常識に反する如きを以て一々その義意を明にす、說明によりて明かなり。

は即ち佛なり。法界還て法界を證す可からず。又た舍利子、一切法空を說いて法界と爲し、即ち此の法界を說いて菩提と爲す。法界菩提は倶に性相を離る。斯れに由るが故に一切法空と說く。一切法空、菩提、法界は皆是れ佛の境にして二無く別無し。二無く別無きが故に了知す可からず。了知すべからざるが故に則ち言說無し。言說無きが故に有爲無爲有非有等を施設す可からず。又た舍利子、一切の法性も亦た二無く別無し。二無く別無きが故に了知す可からず、了知す可からざるが故に則ち言說無し。言說無きが故に施設す可からず。所以は何ん、諸法の本性は都て所有無く此に在り彼れに在り此の物彼の物と施設す可からず。又た舍利子、若し無間を造らば當に知るべし即ち不可思議を造り亦た實際を造るなりと。何を以ての故に、舍利子、不可思議と五無間とは倶に即ち實際性にして差別無ければなり。既に能く實際を造る者有ること無し。是の故に無間は思議す可からず、亦た斯れに由りて理趣を造る可からず。無間を造る者は地獄に墮するに非ず、不思議の者も生天を得るに非ず。無間を造る者も亦た長夜生死に沈淪するに非ず。不思議の者も亦た究竟して能く涅槃を證するに非ず。何を以ての故に、舍利子、不可思議と五無間とは皆實際性に住して差別無く、生ずる無く滅する無く、去る無く來る無く、因に非ず果に非ず、善に非ず惡に非ず、惡趣を招くに非ず人天を感ずるに非ず、涅槃を證するに非ず生死に沒するに非ざればなり。何を以ての故に、眞法界は善に非ず惡に非ず高に非ず下に非ず前後無きを以ての故に。又た舍利子、[二六]重きを犯す苾芻も地獄に墮するに非ず、淨く戒を持つ者も生天を得るに非ず。重きを犯す苾芻も生死に沈むに非ず、淨く戒を持つ者も涅槃を證するに非ず、重きを犯す苾芻も毀訾すべきに非ず、淨く戒を持つ者も讃歎すべきに非ず、重きを犯す苾芻も輕蔑すべきに非ず、淨く戒を持つ者も恭敬すべきに非ず、重きを犯す苾芻も乖諍すべきに非ず、淨く戒を持つ者も和合すべきに非ず、重きを犯す苾芻も遠離すべきに非ず、淨く戒を持つ者も親近すべきに非ず、重きを犯す苾芻も損減すべきに非ず、淨く戒を持

【二六】重きを犯す。四波羅夷(殺盜淫妄)等の大律制戒に背くを云ふ。犯戒と持戒と對立して實相を示す。

言論を興すこと勿れと。曼殊室利、言ふ所の佛とは是れ何の增語ぞやと。今大德に問はん、言ふ所の我とは復た何の增語ぞやと。舍利子言はく、我とは但だ假立の名字有るのみにして是れ空の增語なりと。大德當に知るべし、佛の增語は卽ち我の增語我と佛とは倶に畢竟空、但だ世間に隨て名字を假立せるのみ。菩提の名字も亦た是れ假立なり。此を尋ぬるも實の菩提をば求む可からず。菩提の相は空にして表示す可からず。何を以ての故に、名字菩提の二は倶に空なるが故なり。名字空なるが故に言說も亦た空なり。空を以て空の法を表示す可からず。菩薩空なるが故に佛も亦た是れ空なり。故に言ふ所の佛とは是れ空の增語なり。復た次に大德、言ふ所の佛とは來る無く去る無く、生ずる無く滅する無く、證得する所無く成就する所無く、名無く相無く分別す可からず、言無く說無く表示す可からず。唯だ微妙智もて自ら內に證知するのみ。謂ゆる諸の如來は一切法畢竟空寂なりと覺りて大菩提を證し、世間に隨順して名字を假立するが故に稱へて佛と爲すも實有と爲すに非ず。若しは有若しは無得可からざるが故に。復た次に大德、如來所證の微妙の智慧を說いて菩提と名づけ、菩提を成就するが故に名づけて佛と爲す。菩提空なるが故に佛も亦た是れ空なり。此れに由りて佛は是れ空の增語なりと名づくと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、曼殊室利の所說の深法は初學の者の能く了知する所に非ずと。爾の時曼殊室利童子卽ち具壽舍利子に白して言さく、我が所說は唯だ初學の解了すること能はざるのみに非ず、所作已に辦ぜる阿羅漢等も亦た知ること能はず、我が所說は能く知る者有るに非ず。所以は何ん、菩提の相は識所識に非ず見る無く聞く無く得る無く念ずる無く生ずる無く滅する無く說示す可からず聽受す可からざればなり。是の如き菩提の性相は空寂にして諸の大菩薩すら尙ほ未だ知ること能はず、何に況んや二乘の知り解了する所ならんや。菩提の性相すら尙ほ得可からず、況んや當に菩提を實證する者有らんをやと。舍利子言はく、曼殊室利、佛は法界に於て豈に證せざる耶と。不なり大德、所以は何ん、佛は卽ち法界、法界

は靜慮圓滿して眞靜慮を具し、勝靜慮を具し、靜慮の功德皆已に圓滿して靜慮波羅蜜多を具足す。是の諸の有情は般若圓滿して眞般若を具し、勝般若を具し、般若の功德皆已に圓滿して般若波羅蜜多を具足す。是の諸の有情は眞勝の慈悲喜捨を成就して亦た能く他の爲に甚深般若波羅蜜多を宣說し開示すと。

〔二四〕佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝何の義を觀じて無上正等菩提を證せんと欲するやと。曼殊室利白して言さく、世尊、我れ無上正等菩提に於てすら尙ほ住する心無し。況んや當に證せんと欲すべきをや。我れ菩提に於て求趣する意無し。所以は何ん、菩提は卽ち我、我は卽ち菩提なればなり。如何が求趣せんやと。佛言はく、善哉善哉、童子、汝能く甚深の義處を巧說す。汝は先佛に於て多く善根を植ゑ久しく大願を發し能く無得に依りて種種淸淨の梵行を修行すと。曼殊室利便ち佛に白して言さく、若し諸法に於て所得有らば無得に依りて淨梵行を修す可けんも我れ都て法の可得と及び無所得と有るを見ず、如何が能く無得に依りて淨梵行を修すと言ふ可けんやと。

〔二五〕佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝今我が聲聞の德を見る耶と。世尊、我れ見ると。佛言はく、童子、汝云何が見るやと。世尊、今我れ諸の聲聞は異生に非ず聖者に非ず、有學に非ず無學に非ず、見る可きに非ず見る可からざるに非ず、見る者に非ず見ざる者に非ず、多に非ず少に非ず小に非ず大に非ず、已に調伏せるに非ず未だ調伏せざるに非ずと見る。我れ是の如く見て而かも見想無しと。時に舍利子便ち彼れに問ひて言はく、聲聞乘に於て旣に是の如く見る。復た云何が正等覺乘を見るやと。大德、我れ今菩薩を見ず亦復た諸の菩薩法を見ず、菩提を見ず、亦復た菩提に趣く法を見ず、亦た菩提に趣く行有るを見ず、亦た菩提を證する法有るを見ず、能く菩提を證する者有るを見ず、我れ是の如く正等覺乘を見るも謂ゆる其の中に於て都て見る所無しと。時に舍利子復た彼れに問ひて言はく、汝如來に於て當に云何が見るべきと。大德止みね止みね。如來大龍象王に於て

【二四】深義を問答す。

【二五】聲聞の德等に就て無相觀を明す。

す。爲身も亦た爾なり。是の故に爲身は即ち是れ實際なりと。[三二]時に舍利子便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば是の諸の菩薩は定めて菩提に趣いて復た退轉せずと。慈氏菩薩復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば是の諸の菩薩は已に無上正等菩提に近づけるなり。何を以ての故に、是の諸の菩薩は現に法性を覺り一切の分別を離れて大菩提の如くなるが故なりと。曼殊室利亦た佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば是の諸の菩薩は佛世尊の如く世間の供養恭敬を受くるに堪ふ。何を以ての故に、一切法に於て實性を覺れるが故なりと。[三三]時に女人の無緣慮と名づくる有り。合掌恭敬して白して言さく、若し諸の有情是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば是の諸の有情は異生法若しは聲聞法、若しは獨覺法、若しは菩薩法、若しは如來法に於て緣慮せず。所以は何ん、一切法は都て無所有なりと達し、能所の緣慮倶に得可からざればなりと。爾の時佛、舍利子等に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所説の如し。若し善男子善女人等、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば是の善男子善女人等は當に知るべし、已に不退轉地に住し定めて菩提に趣きて復た退轉せずと。舍利子等、若し諸の有情是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せず歡喜して信樂し聽聞し受持し轉じて他の爲に説き心厭倦無くんば是の諸の有情は能く一切の爲の眞實廣大殊勝の施主にして能く一切に無上の財寶を施して布施波羅蜜多を具足す。是の諸の有情は淨戒圓滿して眞淨戒を具し勝淨戒を具し、淨戒の功德皆已に圓滿して淨戒波羅蜜多を具足す。是の諸の有情は安忍圓滿して眞安忍を具し、勝安忍を具し、安忍の功德皆已に圓滿して安忍波羅蜜多を具足す。是の諸の有情は精進圓滿して眞精進を具し勝精進を具し、精進の功德皆已に圓滿して精進波羅蜜多を具足す。是の諸の有情

【三二】舍利弗、彌勒等曼殊の絕唱を驚歎し、之を聞信するは宿緣深厚なるを説く。

【三三】無緣慮女の問答。

思議なりと觀ず。畢竟空なるが故に。是の諸の有情は已に曾て多く百千の佛に親近し供養恭敬して諸の善根を種ゑて乃ち能く是の如く、般若波羅蜜多を修行するなり。復た次に世尊、若し善男子善女人等、是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば當に知るべし過去に已に曾て多く百千の佛に親近し供養恭敬して諸の善根を種ゑて乃ち能く是の如しと。復た次に世尊、是の如き甚深般若波羅蜜多を觀ずるに應じて若し能く勤修せば則ち諸法に於て雜染を見ず淸淨を見ず、見る所無しと雖も而かも能く甚深般若波羅蜜多を勤修し一切時に於て心厭倦無し。復た次に世尊、若し是の如き甚深般若波羅蜜多を修せば諸の異生聲聞獨覺菩薩佛の法に於て差別想無し。此れ等の法は畢竟空なりと了するが故に。若し能く是の如くせば是れを眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づくと。

佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝已に幾ばくの佛に親近し供養せるやと。曼殊室利白して言さく、世尊、我が已に佛に親近し供養せる數量は幻士の心心所法に同じ。一切法は皆幻の如くなるを以ての故にと。曼殊室利、汝佛法に於て豈に趣求せざるやと。世尊、我れ今法の佛法に非ざる者有るを見ずば何ぞ趣求する所あらんやと。曼殊室利、汝佛法に於て已に成就せる耶と。世尊、我れ今都て法の佛法と名づく可きを見ず、何ぞ成就する所あらんやと。曼殊室利、汝豈に性に著する無きを得ざる耶と。世尊、我れ今卽ち性に著する無し。豈に性に著する無くして復た著する無きを得んやと。曼殊室利、汝當に菩提の座に坐すべからざる耶と。世尊、諸佛の菩提の座に於てすら尙ほ坐義無し、況んや我れ能く坐せんをや。何を以ての故に、一切法は皆實際を用て定量と爲すを以ての故なり。實際の中に於ては坐及び坐者倶に得可からずと。曼殊室利、實際とは是れ何の增語を言ふやと。世尊、實際は當に知るべし卽ち是れ[三]僞身の增語なりと。曼殊室利、云何が僞身を實際と名づく可きやと。世尊、實際は去る無く來る無く眞に非ず僞に非ず身と非身との相倶に得可から

【三】僞身。虛假、和合の相。

て諸の菩薩摩訶薩衆の與に眞法印と作り、亦た聲聞及び獨覺等の増上慢の者の與に大法印と作りて如實に、先に通達せる所は眞の究竟に非ずと知らしむ。曼殊室利、若し善男子善女人等是の深法を聞きて心沈沒せず亦た驚怖せずんば當に知るべし是の人は一佛乃至千佛に於て諸の善根を種えしのみに非ず。定めて無量無邊の佛所に於て諸の善根を種えて乃ち能く是の甚深般若波羅蜜多を聞きて心沈沒せず亦た驚怖せざるなりと。[一七]爾の時曼殊室利童子合掌恭敬して復た佛に白して言さく、我れ更らに甚深般若波羅蜜多を說かんと欲す。唯だ願くは開許したまへと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝說かんと欲せば汝が意に隨て說けと。曼殊室利便ち佛に白して言さく、世尊、若し甚深般若波羅蜜多を修し法に於て是れ住す可き者を得ず亦復た是れ住す可からざるを得ず。當に知るべし是の如き甚深般若波羅蜜多は法の住するを緣ぜずと。何を以ての故に、[一八]一切法は緣ずる所無きを以ての故なり。世尊、若し能く是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。一切法に於て相を取らざるが故に。復た次に世尊、是の如き甚深般若波羅蜜多を觀ずるも[一九]現前に諸法の性相を觀ぜざるべし。謂ゆる佛法に於てすら尙ほ現觀せず、況んや菩薩法をや。菩薩法に於てすら尙ほ現觀せず、況んや獨覺法をや。獨覺法に於てすら尙ほ現觀せず、況んや聲聞法をや。聲聞法に於てすら尙ほ現觀せず、況んや異生法をや。何を以ての故に、一切法の性相は離なるを以ての故なり。

[二〇]復た次に世尊、是の如き甚深般若波羅蜜多を修するに依りて諸法の中に於て分別する所無し。謂ゆる是れは思議す可く、思議す可からざる法性の差別なりと分別せず。當に知るべし、菩薩摩訶薩衆は般若波羅蜜多を修行するに諸法の中に於て都て分別無しと。復た次に世尊、是の如き甚深般若波羅蜜多を修するに依りて一切法の中都て此れは是れ佛法、此れは佛法に非ず、此れは思議す可く、此れは思議す可からざる有りと見ず。一切法は差別性無きを以ての故に。若し諸の有情能く是の如き甚深般若波羅蜜多を修せば一切法は皆是れ佛法なりと觀ず。菩提に順ずるが故に。一切法は皆不

【一七】曼殊進みて深般若を說く。

【一八】無相の故に一切法は緣するなし元より住するなし。

【一九】現觀をも打破す。

【二〇】分別を排す。

し。曼殊室利、佛法は豈に是れ無上ならざる耶と、是の如し世尊、一切の佛法は實に無上なりと雖も而かも其の中に於て法の得可き無し。故に佛法は無上なりと說く可からず。復た次に世尊、善男子等、若し般若波羅蜜多を修せば一切の佛法を住持せんと欲せず異生法等を調伏せんと欲せず。甚深般若波羅蜜多は諸の佛法異生法等に於て增長及び調伏するを欲せざるが故に、一切法に於て分別無きが故に。若し是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、善男子等若し般若波羅蜜多を修せば諸法の思惟す可く分別す可き者有るを見ずと。曼殊室利、汝は佛法に於て豈に思惟せざるやと。不なり世尊、我れ若し眞實の佛法有るを見ば應に思惟す可し。然かも我れ見ざるなり。世尊、般若波羅蜜多は諸法を分別するが故に起ると爲さず。謂ゆる是れ[一六]異生法、是れ聲聞法、是れ獨覺法、是れ菩薩法、是れ如來法なりと分別せざるなり。善男子等は精勤して甚深般若波羅蜜多を修學するも諸法の中に於て都て得る所無く亦た說く所無し。謂ゆる異生の法性有り、と說かず亦た聲聞乃至如來の法性有りと說かざるなり。所以は何ん、此の諸の法性は皆畢竟空にして見る可からざるが故なり。若し是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、善男子等は勤めて般若波羅蜜多を修して是の念を作さず、此れは是れ欲界、此れは是れ色界、此れは是れ無色界、此れは是れ滅界なりと。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は法の是れ滅す可き者有るを見ざればなり。若し是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、若し般若波羅蜜多を修せば一切法に於て恩怨を作さず。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は一切の佛法を住持するを爲さず、異生等の法を棄捨するを爲さゞればなり。所以は何ん、善男子等勤めて般若波羅蜜多を修するは佛法の中に於て證得するを欲せず、異生等の法を壞滅するを欲せざればなり。一切の法性平等に達するが故に。若し是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づくと。爾の時世尊卽便ち讃めて曰はく、曼殊室利、善哉善哉、汝今乃ち能く甚深の法を說き

【一六】異生法。凡夫、衆生の迷界の事相。

波羅蜜多は捨法得法を爲さざるが故に起ればなり。世尊、甚深般若波羅蜜多を修學するに生死を厭離する過失を爲さず、涅槃を欣樂する功徳を爲さず。所以は何ん、此の法を修する者は生死をすら見ず況んや厭離有らんをや。涅槃を見ず況んや欣樂有らんをや。世尊、甚深般若波羅蜜多を修學するに諸法の劣有り勝有り失有り得有り捨つ可く取る可きを見ず。世尊、甚深般若波羅蜜多を修學するに諸法の増す可く減ず可きを得ず。所以は何ん、眞法界は増有り減有るに非ざればなり。世尊、若し能く是の如く修する者は眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、若し般若波羅蜜多を修し一切法に於て増さず減ぜずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。若し般若波羅蜜多を修し一切法に於て生ぜず滅せずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。若し般若波羅蜜多を修し一切法に於て増減を見ずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。若し般若波羅蜜多を修し一切法に於て生滅を見ずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、若し般若波羅蜜多を修し一切法に於て思惟する所無く若しは多くも若しは少くも倶に希願無くして、能所の希願及び希願者に皆取著せずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。若し般若波羅蜜多を修し諸法の好有り醜有り高有り下有るを見ずんば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づく。復た次に世尊、善男子等、若し般若波羅蜜多を修し諸法の中に於て勝劣を得ず謂ゆる都て此れ勝此れ劣なりと見ずんば是れ眞の般若波羅蜜多なり。所以は何ん、眞如法界法性實際は勝無く劣無ければなり。若し是の如く修せば眞に甚深般若波羅蜜多を修學すと名づくと。

[一五]佛、曼殊室利童子に告げたまはく、諸佛の妙法も豈に亦た勝れざるやと。曼殊室利白して言さく、世尊、諸佛の妙法も取る可からざるが故に亦た是れ勝是れ劣と言ふ可からず。如來は豈に諸法空を證したまはざるやと。世尊答へて言はく、是の如し童子と。曼殊室利復た佛に白して言さく、諸法空の中何の勝劣か有らんと。世尊讃めて曰はく、善哉善哉、是の如し是の如し。汝が所説の如

【一五】佛法も勝とせざるを明す。

の故に增減無くんば何に縁りて菩薩は大菩提を求めて有情の爲に常に妙法を說かんと欲するやと。曼殊室利言はく、舍利子、我れ有情は都て得可からずと說く、何すれぞ菩薩大菩提を求めて有情の爲に常に妙法を說かんと欲する有らんや。何を以ての故に、舍利子、諸法は畢竟得可からざるが故なりと。[一三]佛、曼殊室利童子に告げたまはく、若し諸の有情都て得可からずんば云何が諸の有情界を施設するやと。曼殊室利白して言さく、世尊、有情界とは但だ假りの施設のみと。曼殊室利、設ひ汝に問ふ有らん有情界とは幾何有りと爲すやと。汝彼の問ひを得ば當に云何が答ふべきと。世尊、我れ當に是の如き答へを作すべし、佛法の數の如く彼の界も亦た爾なりと。曼殊室利、設ひ復た汝に問はん、有情界は其量云何と。汝彼の問ひを得ば復た云何が答ふるやと。世尊、我れ當に是の如き答へを作すべし。有情界の量は諸佛の境の如しと。曼殊室利、設ひ問ひ有りて言はん、諸の有情界は何に屬する所と爲すと。汝彼の問ひを得ば復た云何が答ふるやと。世尊、我れ當に是の如き答へを作すべし。彼の界の屬する所は佛の如く思ひ難しと。曼殊室利、設ひ問ひ有りて言はん、有情界とは何の住する所と爲すと。汝彼の問ひて得ば復た云何が答ふるやと。世尊、我れ當に是の如き答へを作すへし。若し染際を離れて住すべき所の法は卽ち有情界の應に住すべき所の法なりと。曼殊室利、汝般若波羅蜜多を修して何の住する所と爲すやと。世尊、我れ甚深般若波羅蜜多を修するも都て住する所無しと。曼殊室利、住する所無くんば云何が能く甚深般若波羅蜜多を修するやと。世尊、我れ住する所無きに由るが故に能く般若波羅蜜多を修すと。曼殊室利、汝般若波羅蜜多を修するに善に於て惡に於て何か增し何か減ずるやと。世尊、我れ甚深般若波羅蜜多を修するに善に於ても惡に於ても增す無く減ずる無し。世尊、我れ甚深般若波羅蜜多を修するに一切法に於ても亦た增減無し。世尊、般若波羅蜜多世間に出現するも爲に一切法を增減せざるが故に。世尊、甚深般若波羅蜜多を修學するに爲に[一四]異生等の法を棄捨せず、爲に一切の佛法を攝受せず。所以は何ん、甚深般若

【一三】佛曼殊に問訊して深般若の法義を闡明せしむ。

【一四】迷の捨つべく悟の受くべきものなきを云ふ。

作す無く、[九]分別する所無く異分別に無く、方處に卽するに非ず方處を離るゝに非ず、有に非ず無に非ず常に非ず斷に非ず、三世に卽するに非ず三世を離るゝに非ず、生ずる無く滅する無く去る無く來る無く、染不染無く二不二無く、心言の路絕ゆ。若し此れ等の眞如の相を以て如來を觀ぜば眞に見佛すと名づけ亦た如來を禮敬し親近すと名づけ實に有情に於て能く利樂を爲すなりと。佛、曼殊室利童子に告げたまはく、汝是の觀を作して何をか見る所と爲すと。[一〇]曼殊室利白して言さく、世尊、我れ是の觀を作すも都て見る所無く諸の法相に於ても亦た取る所無しと。佛言はく、善哉善哉、童子、汝能く是の如く如來を觀じ、一切法に於て心取る所無く亦た取らさる無く、集るに非ず散ずるに非ずと。時に舍利子、曼殊室利に謂て言はく、仁能く是の如く親近し禮敬して如來を觀たてまつれり。甚だ爲れ希有なり。常に一切の有情を慈愍すと雖も而かも有情に於て都て所得無く、能く一切の有情を化導して涅槃に趣かしむと雖も而かも執する所無く、諸の有情を利樂せんが爲の故に大甲冑を擐ると雖も而かも其の中に於て積集散壞の方便を起さずと。[一一]時に曼殊室利、舍利子に白して言さく、是の如し是の如し、尊の所說の如し。我れ諸の有情を利樂せんが爲の故に大甲冑を擐て涅槃に趣かしむるなり。實に有情及び涅槃界に於て化する所證する所得る無く執する無し。又た舍利子、我れ實に有情を利樂せんと欲して大甲冑を擐るに非ず。所以は何ん、諸の有情界は增す無く減ずる無ければなり。假使ひ此の一佛土の中に於て殑伽沙數の如き諸佛有りて一一皆爾所の大劫に住し晝夜常に爾所の法門を說き一一の法門各能く爾所の佛土の諸の有情類を度脫して悉く皆無餘涅槃に入らしめ、此の如き佛土に是の如きの事有り、餘の十方面の各殑伽沙等の如き世界も亦復た是の如くにして、爾所の諸佛世尊、爾所の時を經て爾所の法を說き、爾所の諸の有情類を度脫して皆無餘涅槃に證入せしむと雖も而かも有情界は亦た增減無し。何を以ての故に、諸の[一二]有情の自性離なるを以ての故に、無際の故に增減す可からずと。舍利子言はく、曼殊室利、若し諸の有情の自性離の故に無邊際

【九】分別…異分別、能分別所分別の差別相を斥く。

【一〇】この觀佛は無所見なるを述ぶ、實相眞如相應なればなり。

【一一】舍利弗の讚說に答ふ。

【一二】有情一々個性自我あるにあらず、一微虫も一切眞如を完うすればなり。

卷の第五百七十四

第七曼殊室利分之一[一]

是の如く我れ聞きぬ。一時薄伽梵、[二]室羅筏に在して[三]誓多林の給孤獨園に住りたまへり。大苾芻衆百千人と俱なりき。皆阿羅漢なり。唯だ[四]阿難陀の猶ほ學地に居せるを除くのみ。舍利子等而かも爲れ上首たり。復た菩薩摩訶薩衆十千人と俱なりき。皆退轉せず功德の甲冑もて而かも自ら莊嚴す。[五]慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、無礙辯菩薩、不捨善軛菩薩而かも爲れ上首たり。曼殊室利童子菩薩明相現ずる時自らの住處より出で、如來の所に詣り外に在りて而かも立てり。具壽舍利子、大伽多衍那、大迦葉波、大採菽氏、滿慈氏、執大藏、是の如き一切の大聲聞僧も亦た此の時に於て各住處より如來の所に詣り外に在りて而かも立てり。爾の時世尊諸の大衆皆來集し已れるを知ろしめして住處より出で、常の如き座を敷き[六]結跏趺坐して舍利子に告げたまはく、汝今何が故ぞ晨朝の時に於て門外に在りて立てるやと。時に舍利子白して言さく、世尊、曼殊室利童子菩薩は先に來りて此に住せり、我れ等は後に來れりと。

爾の時世尊知りて而かも故らに[七]曼殊室利に問ふて言はく、善男子、汝實に先に此の住處に來至せるは佛を觀禮し親近せんと欲するが爲なる耶と。曼殊室利前んで佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝、何を以ての故に、我れ如來に於て觀禮し親近するも甞て厭足すること無し。諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に實に先より此に來れり。世尊、我れ今此の處に來至し親近し禮敬して如來を觀たてまつるは[八]專ら一切有情を利樂せんが爲にして佛菩提を證得せんが爲の故に非ず、如來身を樂觀せんが爲の故に非ず、眞法界を擾動せんが爲の故に非ず、諸の法性を分別せんが爲の故に非ず、亦た餘の種種の事の爲の故ならず。我れ如來を觀ずるに卽ち眞如相は動ずる無く

【一】曼殊室利夙に佛所に來詣せる因緣に基づくを以て名づく。
【二】室羅筏 Śrāvastī, 巴 Sāvatthi 舊に舍衞と云ふ憍薩羅國の都城なり。
【三】誓多林 Jeta vana 祇陀太子の林樹寄附によりて名ありそこに須達多長者が建てたる精舍が祇園なり。
【四】阿難は常侍なるが爲に無學自由人たるに妨げあり、故に學地に居るとす。
【五】列ぬる菩薩は彌勒文殊辨才等なり。
【六】兩足を前に曲げ組む坐の常法なり。
【七】曼殊禮佛を說く。
【八】眞の觀佛は衆生の轉迷開悟あるのみ、我が菩提を證るにも、佛相を見て喜ぶにもあらず、況や寂靜の法界を動亂し一如の法性を分別する顚倒の爲ならんや。

るなし、舍利弗彌勒等曼殊の絶唱を驚歎し之を聞信するは宿縁深厚なるを述ぶ。又種々の分別を對示して超越を明にし一切の思議すべからざるを明す、而かも不思議の故に平等にして一切有情に通ずべきを示し、般若修學を勸進し、諸天の供養、受持の誓願を略陳し、聞經の功德を以て結ぶ。要は文殊を借りて法身諸法法界の不可得究竟なる深般若觀を縱横に開示せんとせるものなり。」

椎尾辨匡記

兩譯ありとするも、前後譯出の年次確說せられず、諸說を綜合するに曼陀譯は506—511の間に、婆羅譯は512—520間に在るが如し。(拙著佛教經典概說一五七—一五九參照)

N21 一、文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經二卷梁曼陀羅仙譯 232 第八 726 a—732 c 月九(1—6)

N22 二、文殊師利所說般若波羅蜜經一卷　梁僧伽婆羅譯 233 第八 732 c—739 c 月九(6—11)

右同一梵本に依る、此の兩本を比較すれば具略相違あるも、之を初出譯として見れば曼陀羅本の如きも頗る上乘にして、長房以下の錄人が指彈するが如き甚しき缺點なし。大般若譯出に及び玄奘三藏は之を第七分として正譯せるなり。今三本對比するに次の如し。(佛教經典概說一九一頁以下第十一表)

第七會比較

	1. 曼殊室利分	2. 曼陀羅仙譯文殊般若	3. 僧伽婆羅譯文殊般若
量	324L(日九59-67)	208L(月九1-6)	207L(月九6a-11b)
	220 第七 964a-974b	232 第八 726a-732c	233 第八 732c-739a
比 %	100	64.2	63.8
分段	1. 574(日九59b-63b3)	上(月九1a-3b2)	一(月九6a17-9b4)
	220 第七 964a-969a17	232 第八 726a-729b11	233 第八 732c13-736c6
	2. 574(日九　-63b5)	下(　-3b8)	一(　-9b5)
	220 第七 969a17-969a	-729b21	-736c12
	3. 575(日九63b11-67b11)	同(　-6a13)	同(　-11b4)
	220 第七 969b-974b	-732c	-739a

—(2)—

經の內容は舍衞祇園の一會に於て曼殊室利夙に佛所に來詣せる因緣に發して禮佛を說き、眞の觀佛は無所見なるを說き、舍利弗の讚說に答へ、佛の徵逐に隨ひ深般若の勝義を說く、無相の故に一切法は緣するなく住するなし、現觀も分別も一も執す

第七曼殊室利分解題

曼殊室利分は大般若(220 第七 964a—974b)第七會にして七百頌般若(Saptaśatikā prajñāpāramitā)に當る。第五七四卷と第五七五卷との二卷たり。その舊譯本は曼陀と婆羅との兩譯あり、然るに隋の衆經目錄第一(2146 第五五 116b 結一 94b)には大乘經單譯の部に

文殊師利說般若波羅蜜經一卷 梁天監年沙門曼陀羅譯

と錄するのみなるも、三年後(597)に成れる費長房の歷代三寶紀第一一(2034 第四九 98b 致六 76a)には

文殊師利般若波羅蜜經二卷 一云文殊師利說般若波羅蜜經、見李廓錄初出

右…天監年初扶南國沙門曼陀羅梁言弱聲、大賚梵本經來貢獻、雖事飜譯未善梁言、其所出經文多隱質、共僧伽婆那於揚都譯。

と云ひ、次に更に

文殊師利所說般若波羅蜜經一卷 第二譯小勝前曼陀羅所出、二卷者

右…正觀寺扶南沙門僧伽婆羅、梁言僧養…大梁…以天監五年(506)被勅徵召於揚都壽光殿及正觀寺占雲觀三處譯上件經、其本並是曼陀羅從扶南國賚來獻上、陀終說後、羅專事飜。

と云へるもの、衆經目錄よりも詳蜜精確を見る。大唐内典錄第四(2149 第五五 265c 結一 71) 開元錄(2154 第五五 587b 結四 52b)等皆之に同じ。唯後者に於て曼陀羅仙の天監二年(503)來都の事と、所譯般若が僧伽婆羅譯、及び大般若第七會曼殊室利分同本、亦編入寳積、當四十六會、見李廓錄、及續李傳(2060 第五〇 426a 致一 85a)と云ふ起事を加ふるを異とす。かく此經に

目次

（本丁）　（通頁）

般若部　六

椎尾辨匡譯

國譯一切經

大東出版社藏版